

下原遺跡
(3)

下原遺跡(3)

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第61集

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第61集

二〇一九

2019

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



下原遺跡（3）

八ッ場ダム建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第61集

2019

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 A区近世1面水田調査風景(東から)

八ッ場地区の遺跡では珍しい天明三(1783)年の火山灰と泥流に埋没した水田が検出された。傾斜地であり、必ずしも水田に向けた土地とは言えないが、北側に石垣を組み、南側には畔を築いて水平を保っている。さらにその中を南北方向に区画した畔も認められる。手前右手には後で山側から転落したと思われる3mを超えるような大きな岩もあり、その土地の厳しさや過酷さも窺い知ることができる。それにも負けない当時の人々の米作りに対する熱い情熱が伝わってくる。



2 A区近世1面復旧坑全景(南から)

天明の大噴火による火山灰が降下した後にその灰を埋め、畑の土を掘り起こすための細長い坑を地形の傾斜に沿って連続して掘った痕跡が確認された。当時の人々の自然災害に負けない強い気持ちが窺える。残念ながら、その後の泥流により埋没した。

口絵 2



3 B区中世3面高台部分
14号土坑(墓)礫出土状態
(西から)

調査区西側の岩塊の上の高台部分で検出された中世の墓である。規模は長軸1.64m×短軸1.01m×深さ0.64mである。長方形の坑を掘って内側に礫を入れ、中央に遺体を安置し、埋め戻す際にそれよりも一回り大きい礫を置いたものである。中からは人骨とともに中世の宋銭や明銭が出土している。



4 A区縄文時代2面1号竪穴建物調査風景(奥に丸岩)(北東から)

平坦な石を敷き、間に小形礫を詰めた縄文時代後期前半と考えられる敷石住居である。規模は直径3mよりもやや大きいくらいである。手前人物前の住居中央には石囲い炉も見える。吾妻川の対岸奥には長野原地区でランドマークとなっている丸岩が見える。道は変わったかもしれないが、当時の人々が目にしていたであろう山の風景は今も見る事ができる。

序

八ッ場ダムは、治水・利水・発電を行う多目的ダムとして計画され、吾妻郡長野原町を中心に工事が進められてきました。八ッ場ダムの建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は、当事業団が平成6年度から実施し、四半世紀となります。

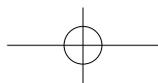
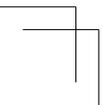
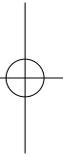
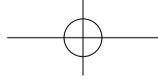
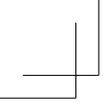
下原遺跡は、平成12年度に発掘調査が開始され、既に16年度以前の調査成果については報告されております。今回は最終年となりました29年度調査成果について報告することとなりました。天明三(1783)年の浅間山大噴火に伴う泥流で被災した畑や水田・道・溝、天明三年の畑の下から古い畑、その下から中世の掘立柱建物・墓、平安時代の竪穴建物、縄文時代の柄鏡形の竪穴建物・土坑、土器・石器類も見つかっております。水田の調査はこの地区では珍しいものです。中世の掘立柱建物は、この地域の他の遺跡でも次第に明らかとなってきた遺構であり、他の遺構と合わせ中世における地域の土地利用のあり方を知ることができるものです。縄文時代の柄鏡形の竪穴建物は平坦な石が床面に敷かれた敷石住居であり、こちらも重要な遺構です。石製の丸鞆は古代の役人がベルトに着ける飾りであり、役職によって付けられる素材や色などが決められているもので、この地区では極めて珍しいものです。

これらの調査成果は、長野原町を中心とした地域ひいては群馬県における縄文時代、中・近世史を考える上でも重要な資料となるものと考えております。

発掘調査から報告書の刊行に至るまで、国土交通省八ッ場ダム工事事務所、群馬県教育委員会および長野原町教育委員会をはじめとする関係機関や地元関係者の皆様には、多大なるご尽力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、衷心より感謝申し上げます。

平成31年2月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男



例 言

- 1 本書は、八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として平成29年に実施された「下原遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の呼称および所在地
下原遺跡(しもばらいせき)は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字下原地内に所在する。
・地番は、甲612、613-1、613-3、乙613、乙619-1、乙619-2、丙619、甲620、乙620、625-1、625-2、633-1、甲644、甲645、甲646、647、648、649、650、甲651、乙651、652-1、652-3、乙652、653、655-1、666-1、667-1である。
- 5 事業主体 国土交通省関東地方整備局
- 6 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月に公益財団法人に組織改定)である。
- 7 発掘調査及び整理事業の期間
(1) 発掘事業
調査期間 平成29年6月1日～平成29年12月31日
発掘調査担当 黒田 晃(主任調査研究員)、佐藤賢一(主任調査研究員)、武井 学(調査研究員)
調査面積 4,921㎡
遺跡掘削工事 1工区 飯塚・高澤・宮下・吾妻地区埋蔵文化財遺跡掘削工事経常共同企業体
(2) 整理事業
整理期間 平成30年4月1日～平成30年9月30日
整理担当 松村和男(上席調査研究員・資料統括)
- 8 本書作成の担当者は以下のとおりである。
編集 松村和男
本文執筆 第1章～第3・5章 松村和男、デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員・資料統括)
第4章第1節 株式会社 古環境研究所、第2節 檜崎修一郎(大妻女子大学博物館)
遺構写真 発掘調査担当者
遺物写真 石坂 茂(専門調査役)、大西雅広(専門調査役)、板垣泰之(専門員)、津島秀章(資料第2課長)
松村和男
遺物観察及び観察表執筆 縄文土器 石坂 茂、土師・須恵・陶磁器 大西雅広、金属製品 板垣泰之、
石器・石製品 津島秀章
保存処理 関 邦一(専門調査役)、板垣泰之
- 9 発掘調査および整理事業での委託
遺構測量 株式会社 測研
植物珪酸体分析 株式会社 古環境研究所
人骨類鑑定分析 檜崎修一郎(大妻女子大学博物館)
縄文土器等実測・トレース 株式会社シン技術コンサル
- 10 石材の同定は、飯島静男(地質学者・群馬地質研究会)に依頼した。
- 11 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、長野原町教育委員会事務局のご指導とご助言を得た。また県立文書館から絵図面等の提供を得た。
- 12 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

凡 例

- 1 本書で使用した座標値および方位は、日本測地系、平面直角座標系第IX系を用い、座標北で示した。
調査区は、概ねX=60400~60500、Y=-103500~-103800の範囲に収まる。
- 2 等高線・遺構断面図等に記した数値は、海拔標高を示す。
- 3 遺構図・遺物図については、各挿図中にスケールを添付したが、原則下記の縮尺で掲載した。また、遺物写真の縮尺は、実測図と同一の縮尺を原則とした。
遺構図：遺構全体図1/400（A区）・1/250（B区） 竪穴建物・掘立柱建物1/60 縄文竪穴建物・焼土・土坑1/40
埋甕・土坑墓1/20 畑・水田・復旧坑1/160 断面1/80・1/40 石垣・道・溝・暗渠 1/100 断面1/50
遺物図：土器・陶磁器1/2・1/3 古銭・金属製品類1/1・1/2 石器・石製品1/1・1/2・1/3・1/4
これ以外の縮尺の場合は、各図下部にスケールを示すか、各個別図に縮尺を記している。
- 4 遺物の掲載は、種別に限らず遺構毎に通し番号とした。
- 5 本書の図版に使用したスクリーンパターン及びマークは、次のことを示す。
遺構平面図 浅間A軽石(As-A)  ヤックラ  炭  暗渠 
焼土  灰  貼床(硬化面) 
遺構断面図 攪乱 
遺物実測図 磨面  黒色  灰釉  黒色物質付着 
- 6 遺構平面図中の遺物記号は、次のことを示す。
● 土器・陶磁器 ▲ 石器・石製品 ■ 鉄・金属製品 □ 古銭
- 7 古銭の拓本は表を左、裏を右に配置した。左右逆に配置したものは、複数枚が癒着している中で、表裏が逆であったものである。
- 8 遺構の計測は、全容が計測できない遺構について残存値()で表記してある。
なお、畑の計測では、畝間から隣の畝間までの間を畝サク間隔として計測した。
- 9 本遺跡で検出された畑の畝間を埋めているAs-Aは、天明三(1783)年の浅間山噴出軽石の略である。また、「天明三年泥流」あるいは「天明泥流」は、天明三年新暦8月5日の浅間山噴火に伴う泥流堆積物の略称である。
- 10 遺物観察表での表現および記載法は、以下の通りである。
 - ・遺物観察表は遺構ごととし、第5章の後ろにまとめて掲載した。
 - ・遺物計測位置の表現は、土器・陶磁器類は口径：口、底径・高台径：底、器高：高と略記し、他の遺物についても長さ：長、幅：厚、高さ：高、外径：径、孔径：孔、重さ：重と略記した。古銭は外形：縦・横と略記し、厚さと重さを計測した。
 - ・計測値の単位はcmとし、重量はgで表記している。
 - ・欠損した遺物の計測値には、()で現存値を記した。
- 11 本書で使用した地形図は下記の通りである。
国土地理院：地形図 1：50,000 「草津」(平成11年発行)
国土地理院：地勢図 1：200,000 「長野」(平成18年発行)

目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真目次	
第1章 調査の方法と経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過・調査方法・調査概要・整理事業の経過	1
第3節 調査区の概要	5
第2章 遺跡の環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	10
第3章 発見された遺構と遺物	18
第1節 近世	18
1 A区1面調査概要 (1)水田 (2)畑 (3)道 (4)石垣 (5)溝 (6)ヤックラ	
A区1.5面調査概要 (1)石垣 (2)暗渠 (3)ヤックラ	
2 B区1面調査概要 (1)畑 (2)道 (3)炭化物集中部	
第2節 中・近世	28
1 B区2面調査概要 (1)礎石建物 (2)畑 (3)土坑 (4)焼土遺構	
2 B区3面調査概要 (1)土坑 (2)ピット	
3 B区4面調査概要 (1)掘立柱建物 (2)土坑 (3)ピット	
第3節 平安時代	35
1 B区4面調査概要 (1)竪穴建物	
第4節 縄文時代	36
1 A区2面調査概要 (1)竪穴建物 (2)土坑 (3)埋甕	
2 A区3面調査概要 (1)土坑	
3 B区調査概要	

第5節	出土遺物	39
1	中・近世 土器類 石製品 金属器	39
2	平安時代 土器類 石器類	40
3	縄文時代 土器類 石器類	41
第4章	自然科学分析	130
第1節	植物珪酸体分析	130
第2節	下原遺跡出土人骨	138
第5章	調査成果のまとめ	139
1	天明泥流下の畑と水田について	139
2	掘立柱建物の時期について	140
3	掘立柱建物の配置について	140
4	中世の屋敷地と土地利用について	141
5	柱穴が方形のライン上に乗らない掘立柱建物について	144
6	石臼について	144
7	古銭について	147
8	その他金属器類について	148
	引用参考文献	149

遺構一覧表 礎石建物 掘立柱建物 土坑・ピット

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

付図

付図1 下原遺跡(1)・(2)・(3) 近世1面全体図 (1:400)

付図2 下原遺跡(1)・(2)・(3) 中・近世2・3面全体図 (1:400)

付図3 下原遺跡(2)・(3) 縄文・弥生・平安時代 2～4面全体図 (1:400)

挿図目次

第1図	下原遺跡調査区全体図	4	第44図	中・近世 B区3面 14号土坑(墓坑)	76
第2図	下原遺跡基本土層	7	第45図	中・近世 B区3面 16号土坑(墓坑)	77
第3図	長野原町の河岸段丘分布図	7	第46図	中・近世 B区3面 17号土坑(墓坑)	78
第4図	下原遺跡周辺の地名 (『長野原町の自然』長野原町1993図1～56を加除筆引用)	8	第47図	中・近世、平安時代 B区4面 全体図	79
第5図	遺跡位置図 (国土地理院1/200,000地勢図「長野」平成18年11月1日発行、 1/50,000地形図「草津」平成11年1月1日発行を使用)	9	第48図	中・近世 B区4面 1～6号掘立柱建物、 土坑・ピット群	80
第6図	吾妻郡林村周辺の道と村 (元禄国絵図「上野国」群馬県立文書館所蔵より修正して作成) (下湯原遺跡(1) 2018より一部修正)	12	第49図	中・近世 B区4面 1号掘立柱建物	81
第7図	中世及び天明泥流下の遺跡分布図 (国土地理院1:50,000地形図「草津」使用)	13	第50図	中・近世 B区4面 2号掘立柱建物	82
第8図	林村絵図 (明治6(1873)年『壬申地引絵図』群馬県立文書館所蔵より 修正して作成)	16	第51図	中・近世 B区4面 1・2号掘立柱建物断面	83
第9図	林村絵図より下原耕地拡大図 (明治6(1873)年『壬申地引絵図』群馬県立文書館所蔵より 修正して作成)	17	第52図	中・近世 B区4面 3号掘立柱建物	84
第10図	近世 A区1・1.5面 全体図	42	第53図	中・近世 B区4面 3号掘立柱建物 エレベーション・断面	85
第11図	近世 A区1面 エレベーション・断面	43	第54図	中・近世 B区4面 4号掘立柱建物	86
第12図	近世 A区1面 1～4号水田、1～7号畦畔 他	44	第55図	中・近世 B区4面 4号掘立柱建物断面、 5号掘立柱建物	87
第13図	近世 A区1面 1～4号水田断面	45	第56図	中・近世 B区4面 6号掘立柱建物	88
第14図	近世 A区1面 1・2・4・6号畦畔断面	46	第57図	中・近世 B区4面 掘立柱建物・土坑・ピット群 他	89
第15図	近世 A区1面 1・3号畑、1号耕作地 他	47	第58図	平安時代 B区4面 1号竪穴建物	90
第16図	近世 A区1面 1・3号畑、1号耕作地断面	48	第59図	平安時代 B区4面 1号竪穴建物掘り方	91
第17図	近世 A区1面 2・4号畑 他	49	第60図	平安時代 B区4面 1号竪穴建物カマド	92
第18図	近世 A区1面 1・3号復旧坑 他	50	第61図	縄文時代 A区2面 全体図	93
第19図	近世 A区1面 2・4号復旧坑 他	51	第62図	縄文時代 A区2面 1号竪穴建物(1)	94
第20図	近世 A区1面 1～4復旧坑断面	52	第63図	縄文時代 A区2面 1号竪穴建物(2)	95
第21図	近世 A区1面 1・2・7号道、1・2号石垣	53	第64図	縄文時代 A区2面 1号竪穴建物(3)	96
第22図	近世 A区1面 3～5号道、3号石垣	54	第65図	縄文時代 A区2面 2号竪穴建物	97
第23図	近世 A区1面 6・8・10号道、1号溝	55	第66図	縄文時代 A区2面 1・2号竪穴建物周辺遺物分布	98
第24図	近世 A区1面 9号道、2号溝	56	第67図	縄文時代 A区2・3面 遺物分布密度	99
第25図	近世 A区1面 4号石垣	57	第68図	縄文時代 A区2面 12～14号トレンチ断面、 1～3号埋葬	100
第26図	近世 A区1面 5・8号石垣	58	第69図	縄文時代 A区3面 全体図	101
第27図	近世 A区1・1.5面 9・10号石垣、3・4号溝	59	第70図	縄文時代 A区2・3面 1～6号土坑	102
第28図	近世 A区1.5面 6・7号石垣、3号暗渠	60	第71図	縄文時代 A区3面 7～12号土坑	103
第29図	近世 A区1.5面 1・2号暗渠	61	第72図	中・近世 A・B区出土遺物	104
第30図	近世 B区1面 全体図	62	第73図	中・近世、平安時代 A・B区出土遺物	105
第31図	近世 B区1面 エレベーション	63	第74図	平安時代 B区出土遺物	106
第32図	近世 B区1面 1・2号畑	64	第75図	縄文時代 A区出土遺物(1)	107
第33図	近世 B区1面 3号畑、3号道	65	第76図	縄文時代 A区出土遺物(2)	108
第34図	近世 B区1面 1・2号道	66	第77図	縄文時代 A区出土遺物(3)	109
第35図	近世 B区1面 1～5号炭化物	67	第78図	縄文時代 A区出土遺物(4)	110
第36図	中・近世 B区2面 全体図	68	第79図	縄文時代 A区出土遺物(5)	111
第37図	中・近世 B区2面 3・4号トレンチ断面、1号畑	69	第80図	縄文時代 A区出土遺物(6)	112
第38図	中・近世 B区2面 1号礎石建物	70	第81図	縄文時代 A区出土遺物(7)	113
第39図	中・近世 B区2面 2～7号焼土	71	第82図	縄文時代 A区出土遺物(8)	114
第40図	中・近世 B区2面 1号焼土、2～7号焼土断面	72	第83図	中・近世 B区出土石製品	115
第41図	中・近世 B区3面 全体図	73	第84図	中・近世 B区出土宝塔・五輪塔	116
第42図	中・近世 B区3・4面 2～9号土坑	74	第85図	中・近世 B区出土五輪塔	117
第43図	中・近世 B区3・4面 10～13・15・18・19・22号土坑	75	第86図	平安・縄文時代 A区・B区出土石器・石製品	118
			第87図	中・近世 B区出土古銭	119
			第88図	中・近世 A・B区出土古銭・切羽・鉄砲玉・刀子・銅鏡	120
			第89図	下原遺跡(1)・(2)・(3) 近世 1面 全体図	127
			第90図	下原遺跡(1)・(2)・(3) 中・近世 2・3面 全体図	128
			第91図	下原遺跡(2)・(3) 縄文・弥生・平安時代 2～4面 全体図	129

表目次

第1表	下原遺跡調査経過	3	第6表	金属器類	121
第2表	林村周辺における元禄16(1703)年の石高一覧	12	第7表	A区土坑一覧	122
第3表	周辺遺跡一覧	14	第8表	B区土坑一覧	122
第4表	B区西2面礎石建物	29	第9表	A区ピット一覧	123
第5表	B区西4面掘立柱建物一覧	33	第10表	B区ピット一覧	123

写真目次

PL. 1	1	A区1面調査区全景(東から)	PL.10	1	A区1面3号畑全景(南から)
	2	A区2面全景(東から)		2	A区1面3号畑全景(南西から)
PL. 2	1	A区1面水田調査風景(南東から)		3	A区1面3号畑全景(南から)
	2	A区1面水田調査風景(東から)		4	A区1面3号畑B-B'断面(南東から)
	3	A区1面水田調査風景転礫岩確認状況(西から)		5	A区1面3号畑C-C'断面(南東から)
	4	A区1面水田調査風景(北西から)	PL.11	1	A区1面4号畑全景(南から)
	5	A区1面2号水田耕作土下断面(西から)		2	A区1面4号畑(南から)
PL. 3	1	A区1面1~3号水田全景(南東から)		3	A区1面4号畑B-B'断面(西から)
	2	A区1面2号水田全景(南東から)		4	A区1面4号畑B-B'断面アップ(西から)
	3	A区1面2号水田、4号石垣、3号畦畔(南東から)		5	A区1面1号耕作地D-D'断面(西から)
	4	A区1面2号水田、4・5号石垣断面(西から)	PL.12	1	A区1面1号耕作地D-D'断面(西から)
	5	A区1面2号水田、4・5号石垣断面(北西から)		2	A区1面1号耕作地D-D'断面As-A'アップ(西から)
PL. 4	1	A区1面3号水田、6号畦畔(南東から)		3	A区1面調査区南西端全景(南から)
	2	A区1面2・3号水田、4号石垣(南東から)		4	A区1面調査区北西端全景(南から)
	3	A区1面3号水田降雨後の状況(南西から)		5	A区1面1号復旧坑全景(南東から)
	4	A区1面2・3号水田降雨後の状況(西から)	PL.13	1	A区1面1号復旧坑B-B'断面(北西から)
	5	A区1面4号水田全景(東から)		2	A区1面1号復旧坑A-A'断面(南から)
	6	A区1面4号水田全景(南東から)		3	A区1面1号復旧坑A-A'・B-B'断面(南から)
	7	A区1面4号水田全景(北から)		4	A区1面2号復旧坑調査風景(北西から)
	8	A区1面2号水田試料採取地点(西から)		5	A区1面2号復旧坑調査風景(北東から)
PL. 5	1	A区1面2号水田試料採取状況(西から)		6	A区1面2号復旧坑B-B'断面(北東から)
	2	A区1面2号水田試料採取状況(西から)		7	A区1面2号復旧坑B-B'断面(西から)
	3	A区1面1号畦畔(南西から)		8	A区1面2号復旧坑B-B'断面(西から)
	4	A区1面1・2号畦畔(南から)	PL.14	1	A区1面2号復旧坑全景(北西から)
	5	A区1面1・2号畦畔(南東から)		2	A区1面2号復旧坑全景(南から)
	6	A区1面1・2号畦畔D-D'断面(南から)	PL.15	1	A区1面1~3号復旧坑全景(南東から)
	7	A区1面1・2号畦畔D-D'断面(南から)		2	A区1面3号復旧坑石検出状況(北から)
	8	A区1面1・2号畦畔D-D'断面部分(南から)		3	A区1面3号復旧坑全景(北から)
PL. 6	1	A区1面3号畦畔(南西から)		4	A区1面3号復旧坑全景(南から)
	2	A区1面4号畦畔(南から)		5	A区1面3号復旧坑全景(北東から)
	3	A区1面4号畦畔水口(南東から)	PL.16	1	A区1面3号復旧坑全景(南西から)
	4	A区1面4号畦畔水口部分(東から)		2	A区1面3号復旧坑全景(北から)
	5	A区1面4号畦畔北半部分(南東から)		3	A区1面3号復旧坑掘り方全景(北から)
	6	A区1面4号畦畔E-E'断面(南から)		4	A区1面3号復旧坑断面部分(南から)
	7	A区1面5号畦畔(南から)		5	A区1面3号復旧坑断面(南から)
	8	A区1面5号畦畔北東部(南から)		6	A区1面4号復旧坑全景(南から)
PL. 7	1	A区1面6号畦畔(南から)		7	A区1面4号復旧坑部分(南から)
	2	A区1面6号畦畔、5号畦畔との交点(南から)		8	A区1面4号復旧坑全景(南東から)
	3	A区1面6号畦畔F-F'断面(南西から)	PL.17	1	A区1面4号復旧坑断面(南から)
	4	A区1面6号畦畔F-F'断面アップ(南西から)		2	A区1面1号道、1号石垣全景(西から)
	5	A区1面7号畦畔(南東から)		3	A区1面1号道、1号石垣全景(西から)
	6	A区1面4号石垣芯材炭化木(南から)		4	A区1面南端1号道(南西から)
	7	A区1面4号石垣芯材炭化木(東から)		5	A区1面2号道B-B'断面(東から)
	8	A区1面4号石垣芯材炭化木(北から)		6	A区1面2号道B-B'断面アップ(東から)
PL. 8	1	A区1面4号石垣芯材炭化木(南西から)		7	A区1面3~5号道A-A'断面(南から)
	2	A区1面4号石垣芯材炭化木部分(南西から)		8	A区1面3~5号道A-A'断面(南から)
	3	A区1面1号畑調査風景(西から)	PL.18	1	A区1面4・5号道全景(南西から)
	4	A区1面1号畑全景(南西から)		2	A区1面6号道(北から)
	5	A区1面1号畑全景(西から)		3	A区1面6号道A-A'断面(南から)
	6	A区1面1号畑A-A'断面(北東から)		4	A区1面9号道(南から)
	7	A区1面1号畑A-A'断面部分(北東から)		5	A区1面9号道部分(南西から)
	8	A区1面1号畑A-A'断面部分(北東から)		6	A区1面1号石垣調査風景(南西から)
PL. 9	1	A区1面2号畑調査風景(西から)		7	A区1面1号石垣(北東から)
	2	A区1面2号畑全景(東から)		8	A区1面1号石垣(南西から)
	3	A区1面2号畑、10号道全景(南西から)	PL.19	1	A区1面1号石垣東部分(南西から)
	4	A区1面2号畑部分(東から)		2	A区1面1号石垣(南東から)
	5	A区1面2号畑(西から)		3	A区1面1号石垣西部分(南西から)

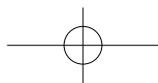
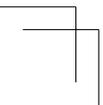
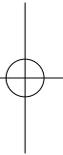
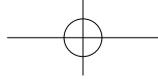
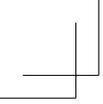
	4	A区1面1号石垣西部分調査風景(南から)		8	A区1.5面1号暗渠C-C'断面(南東から)
	5	A区1面1号石垣全景(南西から)	PL.27	1	A区1.5面2号暗渠全景(北西から)
	6	A区1面1号石垣全景(南西から)		2	A区1.5面3号暗渠全景(北東から)
	7	A区1面1号石垣B-B'断面(南東から)		3	A区1.5面3号暗渠A-A'断面(南から)
	8	A区1面1号石垣B-B'断面(南から)		4	A区1面1号西壁断面(北東から)
PL.20	1	A区1面2号石垣全景(南東から)		5	A区1面1号西壁断面(東から)
	2	A区1面3号石垣全景(南西から)		6	A区1面2号西壁断面(南東から)
	3	A区1面3号石垣調査風景(北東から)		7	A区1面3号東壁断面(西から)
	4	A区1面3号石垣全景(南から)		8	A区1面3号東壁断面(西から)
	5	A区1面4号石垣全景(南東から)	PL.28	1	A区1面3号東壁断面(西から)
	6	A区1面4号石垣部分(南から)		2	A区1面3号東壁断面(南西から)
	7	A区1面4号石垣、3号畦畔(南から)		3	A区2面3号東壁追加断面(西から)
	8	A区1面4号石垣部分(南から)		4	A区2面4号北壁断面(南から)
PL.21	1	A区1面4号石垣、1号水田B-B'断面(東から)		5	A区2面4号北壁断面(南から)
	2	A区1面4号石垣、1号水田A-A'部分断面(西から)		6	A区2面4号北壁断面(南から)
	3	A区1面5号石垣調査風景(南西から)		7	A区2面5号北壁断面(南から)
	4	A区1面5号石垣(南東から)		8	A区2面5号北壁断面(南から)
	5	A区1面5号石垣東部分(南から)	PL.29	1	B区調査前全景(奥に丸岩)(北東から)
	6	A区1面5号石垣断面(西から)		2	B区1面調査区全景(奥に丸岩)(北東から)
	7	A区1面5号石垣断面(西から)		3	B区1面全景(奥に丸岩)(北東から)
	8	A区1面5・6号石垣調査風景(南から)		4	B区1面調査風景(西から)
PL.22	1	A区1.5面6号石垣全景(南から)		5	B区1面調査風景(北東から)
	2	A区1.5面6号石垣C-C'断面(西から)	PL.30	1	B区1面1・2号畑全景(西から)
	3	A区1.5面6号石垣全景(南から)		2	B区1面1号畑全景(北西から)
	4	A区1.5面7号石垣全景(南から)		3	B区1面1・2号畑全景(東から)
	5	A区1.5面7号石垣E-E'断面(南西から)		4	B区1面1・2号畑全景(東から)
	6	A区1.5面7号石垣E-E'断面(西から)		5	B区1面1号畑全景(北東から)
	7	A区1面8号石垣全景(南から)	PL.31	1	B区1面1号畑全景(南東から)
	8	A区1面8号石垣西部分(南から)		2	B区1面1号畑全景(北から)
PL.23	1	A区1面8号石垣中央部分(南から)		3	B区1面1号畑全景(南から)
	2	A区1面8号石垣中央部分アップ(南から)		4	B区1面1号畑全景(北から)
	3	A区1面8号石垣全景(南西から)		5	B区1面1号畑全景(北東から)
	4	A区1面8・9号石垣全景(南から)		6	B区1面1号畑(攪乱)全景(北東から)
	5	A区1面9号石垣西部分(南から)		7	B区1面1号畑北東部(南から)
	6	A区1面1号溝全景(北西から)	PL.32	1	B区1面1号畑北東部A-A'断面(北西から)
	7	A区1面1号溝全景(南東から)		2	B区1面1号畑北東部A-A'断面(南から)
	8	A区1面2号溝西部分(西から)		3	B区1面1号畑北東部A-A'断面部分(南から)
PL.24	1	A区1面2号溝東部分(北東から)		4	B区1面1号畑西部B-B'断面(東から)
	2	A区1面2号畑、2号溝C-C'断面(西から)		5	B区1面2号畑全景(北から)
	3	A区1面2号畑、2号溝A-A'断面(西から)		6	B区1面2号畑全景(南から)
	4	A区1面2号溝、9号道A-A'断面(南西から)		7	B区1面2号畑全景(北東から)
	5	A区1面3号溝西部(南東から)		8	B区1面2号畑全景(北から)
	6	A区1面3号溝北部(北から)	PL.33	1	B区1面2号畑(南東から)
	7	A区1面3号溝北部(南西から)		2	B区1面2号畑C-C'断面(南東から)
	8	A区1面3号溝、9号石垣断面(西から)		3	B区1面3号畑、3号道A-A'断面調査風景(南西から)
PL.25	1	A区1面3・4号溝(東から)		4	B区1面3号畑、3号道全景(南西から)
	2	A区1面4号溝(東から)		5	B区1面3号畑(西から)
	3	A区1面4号溝(南から)		6	B区1面3号畑北西部(南から)
	4	A区1.5面1号暗渠全景(北西から)		7	B区1面3号畑、3号道A-A'断面(西から)
	5	A区1.5面1号暗渠全景(南から)		8	B区1面3号畑、3号道A-A'断面(南から)
	6	A区1.5面1号暗渠全景(南西から)	PL.34	1	B区1面3号畑A-A'断面(西から)
	7	A区1.5面1号暗渠南部分(北東から)		2	B区1面3号畑A-A'断面(南西から)
	8	A区1.5面1号暗渠D-D'断面(南から)		3	B区1面3号畑A-A'断面(西から)
PL.26	1	A区1.5面1号暗渠D-D'断面(南から)		4	B区1面2号道調査風景(奥に丸岩)(北東から)
	2	A区1.5面1・2号暗渠全景(東から)		5	B区1面2・3号道(北東から)
	3	A区1.5面1・2号暗渠全景(南から)		6	B区1面2号道(東から)
	4	A区1.5面1号暗渠C-C'断面(南から)		7	B区1面2・3号道(西から)
	5	A区1.5面1号暗渠B-B'断面(南東から)		8	B区1面2・3号道部分(西から)
	6	A区1.5面1号暗渠B-B'断面(南東から)	PL.35	1	B区1面2号道部分(北から)
	7	A区1.5面4号復旧坑、1号暗渠C-C'断面(南東から)		2	B区1面2号道部分(北から)

	3	B区1面2号道部分(南西から)		8	B区2面1号礎石建物付近礫(北東から)
	4	B区1面3号道調査風景(西から)	PL.44	1	B区2面1号礎石建物S3-1~5(北から)
	5	B区1面3号道、3号畑(南東から)		2	B区2面1号礎石建物S3の西偏平礫(西から)
	6	B区1面3号道調査風景(北東から)		3	B区2面1号礎石建物南東S6(南東から)
	7	B区1面3号道(北東から)		4	B区2面1号礎石建物S10(北東から)
	8	B区1面高台部分石垣(北東から)		5	B区2面1号礎石建物S11-1~9(東から)
PL.36	1	B区1面高台部分石垣(西から)		6	B区2面1号礎石建物S11-1~9(東から)
	2	B区1面高台部分石垣(北から)		7	B区2面1号礎石建物S13(北西から)
	3	B区1面高台部分石垣(奥に丸岩)(北東から)		8	B区2面1号礎石建物S14(東から)
	4	B区1面高台部分石垣(東から)	PL.45	1	B区2面高台部分1号焼土全景(北東から)
	5	B区1面高台部分石垣(北西から)		2	B区2面高台部分1号焼土全景(北から)
	6	B区1面高台部分石垣(北から)		3	B区2面高台部分1号焼土全景(東から)
	7	B区1面高台部分石垣(南東から)		4	B区2面高台部分1号焼土A-A'断面(北から)
	8	B区1面高台部分石垣(南東から)		5	B区2面高台部分東側2号焼土確認状況(北から)
PL.37	1	B区1面高台部分炭化物・焼土(北西から)		6	B区2面高台部分東側2号焼土A-A'断面(南西から)
	2	B区1面高台部分炭化物・焼土(南東から)		7	B区2面高台部分東側3・4号焼土確認状況(北から)
	3	B区1面高台部分1号炭A-A'断面(北から)		8	B区2面高台部分東側3号焼土B-B'断面(北西から)
	4	B区1面高台部分1号炭A-A'断面(北から)	PL.46	1	B区2面高台部分東側4号焼土確認状況(南東から)
	5	B区1面高台部分2号炭B-B'断面(北東から)		2	B区2面高台部分東側3・4号焼土断面(東から)
	6	B区1面高台部分2号炭B-B'断面(北東から)		3	B区2面高台部分東側4号焼土C-C'断面(東から)
	7	B区1面高台部分3号炭C-C'断面(南東から)		4	B区2面高台部分東側5号焼土確認状況(南から)
	8	B区1面高台部分3号炭C-C'断面(東から)		5	B区2面高台部分東側6号焼土確認状況(南から)
PL.38	1	B区1面高台部分4号炭D-D'断面(西から)		6	B区2面高台部分東側5・6号焼土D-D'断面(南から)
	2	B区1面高台部分4号炭D-D'断面(南西から)		7	B区2面高台部分東側7号焼土確認状況(南から)
	3	B区1面高台部分5号炭E-E'断面(西から)		8	B区2面高台部分東側7号焼土E-E'断面(南から)
	4	B区1面高台部分5号炭E-E'断面(西から)	PL.47	1	B区東側2・3面1号土坑周辺(北東から)
	5	B区2面北東部調査風景(北東から)		2	B区東側2・3面1号土坑周辺(北東から)
	6	B区2面北東部焼土検出状況(北東から)		3	B区東側2・3面1号土坑周辺(南から)
	7	B区2・3面北東部全景(南から)		4	B区東側2・3面1号土坑周辺(南から)
	8	B区1面高台部分全景(北東から)		5	B区東側2・3面土坑・ピット(南西から)
PL.39	1	B区1面高台部分全景(奥に丸岩)(北東から)		6	B区東側2・3面土坑・ピット(南西から)
	2	B区2面高台部分1号礎石建物全景(奥に丸岩)(北東から)		7	B区東側3面15号ピット(南西から)
	3	B区2・3面全景(奥に丸岩)(北東から)		8	B区東側3面土坑(南西から)
	4	B区2面高台部分1号礎石建物全景(北東から)	PL.48	1	B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)
	5	B区2・3面全景(北東から)		2	B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)
PL.40	1	B区3面高台部分全景(北東から)		3	B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)
	2	B区3面高台部分全景(西から)		4	B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)
	3	B区2面北東部全景(西から)		5	B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)
	4	B区3面高台部分土坑・ピット全景(南東から)		6	B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)
	5	B区2・3面全景(北東から)		7	B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)
PL.41	1	B区2面高台部分1号礎石建物(北東から)		8	B区東側3面土坑部分(南西から)
	2	B区2面高台部分遺物出土状況(北東から)	PL.49	1	B区東側2面1号土坑周辺(西から)
	3	B区2面高台部分1号礎石建物部分(北東から)		2	B区東側2面1号土坑周辺(西から)
	4	B区2面高台部分遺物出土状況(北東から)		3	B区東側2面1号土坑(北西から)
	5	B区2面高台部分遺物出土状況(北東から)		4	B区東側2面1号土坑(南から)
PL.42	1	B区2面遺物出土状況(北東から)		5	B区東側2面1号土坑(東から)
	2	B区2面遺物出土状況(北西から)		6	B区東側2面1号土坑(北から)
	3	B区2面遺物出土状況(石列)(北西から)		7	B区東側2面1号土坑A-A'断面(西から)
	4	B区2面遺物出土状況部分(北西から)		8	B区東側2面1号土坑内丸軀出土状況(南から)
	5	B区2面遺物出土状況(石列)部分(北西から)	PL.50	1	B区東側3面2号土坑A-A'断面(北から)
	6	B区2面遺物出土状況(石列)部分(北西から)		2	B区東側3面2号土坑(北から)
	7	B区2面1号礎石建物S2-1~3他(北から)		3	B区東側3面3号土坑A-A'断面(北から)
	8	B区2面1号礎石建物S2底部偏平礫(西から)		4	B区東側3面3号土坑(北から)
PL.43	1	B区2面1号礎石建物内偏平礫(北東から)		5	B区東側3面4号土坑A-A'断面(北から)
	2	B区2面1号礎石建物東部偏平礫(北西から)		6	B区東側3面4号土坑(北から)
	3	B区2面1号礎石建物付近石列石手前礫(北東から)		7	B区東側3面5号土坑A-A'断面(南から)
	4	B区2面1号礎石建物付近黒変礫(北東から)		8	B区東側3面5号土坑(北から)
	5	B区2面1号礎石建物南部偏平礫(北西から)	PL.51	1	B区東側4面6号土坑A-A'断面(南から)
	6	B区2面1号礎石建物南部偏平角礫(北から)		2	B区東側4面6号土坑(北から)
	7	B区2面1号礎石建物付近偏平礫(北東から)		3	B区東側4面7号土坑A-A'断面(南から)

- 4 B区東側4面7号土坑永楽通寶出土状況(南から)
- 5 B区東側4面8号土坑A-A'断面(南から)
- 6 B区東側4面8号土坑(北から)
- 7 B区東側4面9号土坑A-A'断面(南から)
- 8 B区東側4面9号土坑(北から)
- PL.52 1 B区東側4面10号土坑A-A'断面(南から)
- 2 B区東側4面11号土坑A-A'断面(南東から)
- 3 B区3面高台部分12号土坑A-A'断面(北西から)
- 4 B区3面高台部分13号土坑遺物出土状況(北から)
- 5 B区3面高台部分14号土坑(墓)礎出土状態(西から)
- PL.53 1 B区3面高台部分14号土坑(墓)遺物出土状態(西から)
- 2 B区3面高台部分14~17号土坑(西から)
- 3 B区3面高台部分14号土坑(墓)中世古銭出土状況(西から)
- 4 B区3面高台部分14号土坑(墓)中世古銭出土状況(西から)
- 5 B区3面高台部分14号土坑(墓)中世古銭出土状況(西から)
- 6 B区3面高台部分14号土坑(墓)人骨出土状況(西から)
- 7 B区3面高台部分14号土坑(墓)頭骨出土状況(西から)
- 8 B区3面高台部分15号土坑A-A'断面(西から)
- PL.54 1 B区3面高台部分15号土坑(北から)
- 2 B区3面高台部分16号土坑(墓)礎出土状況(東から)
- 3 B区3面高台部分16号土坑(墓)礎出土状況(北西から)
- 4 B区3面高台部分16号土坑(墓)人骨出土状況(東から)
- 5 B区3面高台部分16号土坑(墓)人骨出土状況(北から)
- 6 B区3面高台部分16号土坑(墓)(東から)
- 7 B区3面高台部分17号土坑(墓)A-A'断面(西から)
- 8 B区3面高台部分17号土坑(墓)礎出土状況(東から)
- PL.55 1 B区3面高台部分17号土坑(墓)礎出土状況(西から)
- 2 B区3面高台部分17号土坑(墓)(東から)
- 3 B区3面高台部分17号土坑(墓)遺物出土状況(北から)
- 4 B区3面高台部分17号土坑(墓)遺物出土状況(北から)
- 5 B区3面高台部分17号土坑(墓)中世古銭出土状況(北から)
- 6 B区3面高台部分17号土坑(墓)完掘(東から)
- 7 B区東側3面18号土坑A-A'断面(西から)
- 8 B区東側3面18号土坑(北から)
- PL.56 1 B区東側4面19号土坑A-A'断面(西から)
- 2 B区東側4面1号掘立柱建物20号土坑断面(西から)
- 3 B区東側4面東側21号土坑断面(西から)
- 4 B区東側4面東側1号掘立柱建物20号土坑(北から)
- 5 B区東側4面東側21号土坑断面(東から)
- 6 B区東側4面東側21号土坑(北から)
- 7 B区東側4面東側22号土坑断面(南東から)
- 8 B区東側4面東側22号土坑完掘(東から)
- PL.57 1 B区3・4面全景(南東から)
- 2 B区3・4面全景(南東から)
- 3 B区東側3・4面東側土坑・ピット群(南東から)
- 4 B区東側4面東側土坑・ピット群(東から)
- 5 B区東側4面東側土坑・ピット群(南東から)
- PL.58 1 B区3・4面土坑・ピット群、1号竪穴建物(東から)
- 2 B区4面土坑・ピット群、1号竪穴建物調査風景(東から)
- 3 B区3・4面土坑・ピット群、1号竪穴建物調査風景(北東から)
- 4 B区4面土坑・ピット群、1号竪穴建物(北東から)
- 5 B区3・4面土坑・ピット群、1号竪穴建物(北東から)
- PL.59 1 B区東側4面1号掘立柱建物11号ピット断面(西から)
- 2 B区東側4面1号掘立柱建物41号ピット断面(南から)
- 3 B区東側4面1号掘立柱建物62号ピット断面(南から)
- 4 B区東側4面1号掘立柱建物73号ピット断面(南から)
- 5 B区東側4面1号掘立柱建物144号ピット断面(南東から)
- 6 B区東側4面1号掘立柱建物141号ピット断面(南から)
- 7 B区東側4面1号掘立柱建物142号ピット断面(南から)
- 8 B区東側4面1号掘立柱建物165号ピット断面(南東から)
- 9 B区東側4面1号掘立柱建物170号ピット断面(南東から)
- 10 B区東側4面1号掘立柱建物178号ピット断面(南から)
- 11 B区東側4面2号掘立柱建物31号ピット断面(南から)
- 12 B区東側4面2号掘立柱建物34号ピット断面(南から)
- 13 B区東側4面2号掘立柱建物38・39号ピット断面(南から)
- 14 B区東側4面2号掘立柱建物40号ピット断面(南から)
- 15 B区東側4面2号掘立柱建物46号ピット断面(南から)
- PL.60 1 B区東側4面2号掘立柱建物47号ピット断面(東から)
- 2 B区東側4面2号掘立柱建物49号ピット断面(南から)
- 3 B区東側4面2号掘立柱建物58号ピット断面(東から)
- 4 B区東側4面2号掘立柱建物64号ピット断面(南から)
- 5 B区東側4面2号掘立柱建物136号ピット断面(西から)
- 6 B区東側4面2号掘立柱建物166・167号ピット断面(南から)
- 7 B区東側4面2号掘立柱建物169号ピット断面(西から)
- 8 B区東側4面2号掘立柱建物174号ピット断面(南東から)
- 9 B区東側4面2号掘立柱建物177号ピット断面(南から)
- 10 B区東側4面3号掘立柱建物29号ピット内切羽出土状況
- 11 B区東側4面3号掘立柱建物29号ピット断面(南から)
- 12 B区東側4面3号掘立柱建物53・54号ピット断面(南から)
- 13 B区東側4面3号掘立柱建物60号ピット断面(南から)
- 14 B区東側4面3号掘立柱建物65号ピット断面(南から)
- 15 B区東側4面3号掘立柱建物69号ピット断面(南から)
- PL.61 1 B区東側4面3号掘立柱建物98号ピット断面(南東から)
- 2 B区東側4面3号掘立柱建物124号ピット断面(南から)
- 3 B区東側4面3号掘立柱建物128・138号ピット断面(南から)
- 4 B区東側4面3号掘立柱建物133号ピット断面(北西から)
- 5 B区東側4面3号掘立柱建物137号ピット断面(西から)
- 6 B区東側4面3号掘立柱建物138号ピット断面(南から)
- 7 B区東側4面3号掘立柱建物157号ピット断面(南から)
- 8 B区東側4面3号掘立柱建物160号ピット断面(南東から)
- 9 B区東側4面3号掘立柱建物162号ピット断面(南東から)
- 10 B区東側4面3号掘立柱建物168号ピット断面(西から)
- 11 B区東側4面3号掘立柱建物175号ピット断面(南から)
- 12 B区東側4面3号掘立柱建物179号ピット断面(南から)
- 13 B区東側4面4号掘立柱建物48号ピット断面(南から)
- 14 B区東側4面4号掘立柱建物51号ピット断面(南東から)
- 15 B区東側4面4号掘立柱建物55号ピット断面(西から)
- PL.62 1 B区東側4面4号掘立柱建物56号ピット断面(西から)
- 2 B区東側4面4号掘立柱建物57号ピット断面(南から)
- 3 B区東側4面4号掘立柱建物66号ピット断面(南から)
- 4 B区東側4面4号掘立柱建物74号ピット断面(南から)
- 5 B区東側4面4号掘立柱建物74号ピット断面アップ(南から)
- 6 B区東側4面4号掘立柱建物76号ピット断面(南から)
- 7 B区東側4面4号掘立柱建物97号ピット断面(南から)
- 8 B区東側4面4号掘立柱建物122号ピット断面(南東から)
- 9 B区東側4面4号掘立柱建物123号ピット断面(北から)
- 10 B区東側4面4号掘立柱建物126号ピット断面(南東から)
- 11 B区東側4面4号掘立柱建物149号ピット断面(南から)
- 12 B区東側4面4号掘立柱建物156号ピット断面(南から)
- 13 B区東側4面4号掘立柱建物158号ピット断面(南から)
- 14 B区東側4面4号掘立柱建物159号ピット断面(北から)
- 15 B区東側4面4号掘立柱建物166号ピット断面(南から)
- PL.63 1 B区東側3面5号掘立柱建物1号ピット断面(南西から)
- 2 B区東側3面5号掘立柱建物2号ピット断面(南西から)
- 3 B区東側3面5号掘立柱建物3号ピット断面(南西から)
- 4 B区東側3面5号掘立柱建物6号ピット断面(南東から)
- 5 B区東側3面5号掘立柱建物7号ピット断面(南から)
- 6 B区東側3面5号掘立柱建物94号ピット断面(南から)
- 7 B区東側3面5号掘立柱建物139号ピット断面(東から)

	8	B区東側3面5号掘立柱建物153・154号ピット断面(南西から)		4	A区2面1号竪穴建物(北西から)
	9	B区東側4面6号掘立柱建物43号ピット断面(南から)		5	A区2面1号竪穴建物(北西から)
	10	B区東側4面6号掘立柱建物50号ピット断面(北から)		6	A区2面1号竪穴建物(北から)
	11	B区東側4面6号掘立柱建物70号ピット断面(南から)		7	A区2面1号竪穴建物付近(北東から)
	12	B区東側4面6号掘立柱建物71号ピット断面(南から)	PL.72	1	A区2面1号竪穴建物付近(南から)
	13	B区東側4面6号掘立柱建物99号ピット断面(南から)		2	A区2面1号竪穴建物付近(南東から)
	14	B区東側4面6号掘立柱建物125号ピット断面(南東から)		3	A区2面1号竪穴建物付近(北西から)
	15	B区東側4面6号掘立柱建物148号ピット断面(南東から)		4	A区2面1号竪穴建物付近(北東から)
PL.64	1	B区東側4面1号竪穴建物A-A'・B-B'断面(南東から)		5	A区2面1号竪穴建物遺物(南東から)
	2	B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況(南から)		6	A区2面1号竪穴建物E-E'断面遺物(東から)
PL.65	1	B区東側4面1号竪穴建物調査風景(南から)		7	A区2面1号竪穴建物E-E'断面(東から)
	2	B区東側4面1号竪穴建物全景(北東から)		8	A区2面1号竪穴建物E-E'断面(東から)
	3	B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況部分(南西から)	PL.73	1	A区2面1号竪穴建物柱穴確認状況(北から)
	4	B区東側4面1号竪穴建物掘り方A-A'・B-B'断面(南西から)		2	A区2面1号竪穴建物柱穴等完掘状況(南から)
	5	B区東側4面1号竪穴建物掘り方(南から)		3	A区2面1号竪穴建物A-A'断面遺物出土状況(西から)
	6	B区東側4面1号竪穴建物掘り方B-B'断面(南から)		4	A区2面1号竪穴建物焼土確認状況(西から)
	7	B区東側4面1号竪穴建物掘り方カマド手前部分(南西から)		5	A区2面1号竪穴建物焼土E-E'断面(東から)
	8	B区東側4面1号竪穴建物掘り方1・2号炉(南から)		6	A区2面1号竪穴建物2号ピットC-C'断面(東から)
PL.66	1	B区東側4面1号竪穴建物カマド全景(南から)		7	A区2面1号竪穴建物2号ピットC-C'断面(東から)
	2	B区東側4面1号竪穴建物カマド掘り方全景(南から)	PL.74	8	A区2面1号竪穴建物3号ピット確認状況(南から)
	3	B区東側4面1号竪穴建物カマドG-G'断面(南東から)		1	A区2面1号竪穴建物4号ピットI-I'断面(北西から)
	4	B区東側4面1号竪穴建物カマドH-H'断面(南から)		2	A区2面1号竪穴建物4号ピットI-I'断面(北西から)
	5	B区東側4面1号竪穴建物1号炉(南から)		3	A区2面1号竪穴建物29号ピットL-L'断面(南から)
	6	B区東側4面1号竪穴建物2号炉(東から)		4	A区2面1号竪穴建物30号ピットM-M'断面(南から)
	7	B区東側4面1号竪穴建物1号床下土坑O-O'断面(西から)	PL.75	5	A区2面2号竪穴建物遺物出土状況(奥に丸岩)(北東から)
	8	B区東側4面1号竪穴建物1号床下土坑(西から)		1	A区2面2号竪穴建物調査風景(南東から)
PL.67	1	B区東側4面1号竪穴建物カマド掘り方H-H'断面、2号床下土坑P-P'断面(南西から)		2	A区2面2号竪穴建物遺物出土状況(南から)
	2	B区東側4面1号竪穴建物掘り方2号床下土坑(南西から)		3	A区2面2号竪穴建物調査風景(南東から)
	3	B区東側4面1号竪穴建物掘り方2号床下土坑P-P'断面(南から)	PL.76	4	A区2面2号竪穴建物遺物出土状況(西から)
	4	B区東側4面1号竪穴建物掘り方3号床下土坑Q-Q'断面(南から)		5	A区2面2号竪穴建物全景(南東から)
	5	B区東側4面1号竪穴建物1号ピット断面(東から)		1	A区2面2号竪穴建物炉全景(南東から)
	6	B区東側4面1号竪穴建物掘り方3号床下土坑(南から)		2	A区3面1号土坑A-A'断面(南東から)
	7	B区東側4面1号竪穴建物1号ピット(南から)		3	A区3面1号土坑A-A'断面アップ(南東から)
	8	B区東側4面1号竪穴建物2号ピット(南から)		4	A区3面2号土坑A-A'断面(東から)
PL.68	1	B区東側4面1号竪穴建物3号ピットM-M'断面(西から)	PL.77	5	A区2面3号土坑全景(西から)
	2	B区東側4面1号竪穴建物3号ピット(東から)		6	A区2面4・5号土坑全景(西から)
	3	B区東側4面1号竪穴建物4号ピットN-N'断面(東から)		7	A区2面4号土坑A-A'断面(南から)
	4	B区東側4面1号竪穴建物4号ピット(東から)		8	A区2面5号土坑断面(西から)
	5	B区東側4面1号竪穴建物5号ピットR-R'断面(南から)		1	A区3面6号土坑A-A'断面(南から)
	6	B区東側4面1号竪穴建物5号ピット(南東から)		2	A区3面7号土坑A-A'断面(東から)
	7	B区東側4面1号竪穴建物6号ピットS-S'断面(東から)		3	A区3面7号土坑全景(南東から)
	8	B区東側4面1号竪穴建物6号ピット(北東から)		4	A区3面8号土坑全景(南西から)
PL.69	1	B区東側4面1号竪穴建物7号ピットT-T'断面(南から)	PL.78	5	A区3面8号土坑A-A'断面(南西から)
	2	B区東側4面1号竪穴建物7号ピット(西から)		6	A区3面8号土坑A-A'断面アップ(南西から)
	3	B区東側4面1号竪穴建物8号ピットU-U'断面(東から)		7	A区3面9号土坑A-A'断面(東から)
	4	B区東側4面1号竪穴建物8号ピット(東から)		8	A区3面10号土坑A-A'断面(西から)
	5	B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況(南東から)		1	A区3面11号土坑A-A'断面(西から)
	6	B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況(南東から)		2	A区3面12号土坑A-A'断面(南西から)
	7	B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況(北東から)		3	A区3面6号ピット断面(南から)
	8	B区東側4面1号竪穴建物遺物No.2出土状況(北東から)		4	A区3面7号ピット断面(南から)
PL.70	1	A区2面1号竪穴建物調査風景(奥に丸岩)(北東から)	PL.79	5	A区3面8号ピット断面(南東から)
	2	A区2面1号竪穴建物全景(北東から)		6	A区3面12号ピット断面(東から)
PL.71	1	A区2面1号竪穴建物全景(南から)		7	A区3面15号ピット断面(東から)
	2	A区2面1号竪穴建物(南から)		8	A区3面16号ピット断面(南から)
	3	A区2面1号竪穴建物全景(北西から)		1	A区3面18号ピット断面(南東から)
				2	A区3面19号ピット断面(南から)
				3	A区3面24号ピット断面(南から)
				4	A区3面25号ピット断面(南から)
				5	A区2面1号埋甕周辺全景(南から)

- 6 A区2面1号埋甕A-A'断面(南から)
7 A区2面1号埋甕B-B'断面(東から)
8 A区2面1号埋甕アップ(南から)
PL.80 1 A区2面1号埋甕アップ(南から)
2 A区2面1号埋甕下(南から)
3 A区2面2号埋甕全景(東から)
4 A区2面2号埋甕全景(南から)
5 A区2面2号埋甕A-A'断面(東から)
6 A区2面2号埋甕部分(西から)
7 A区2面2号埋甕部分(東から)
8 A区2面2号埋甕部分(南から)
PL.81 1 A区2面2号埋甕部分(東から)
2 A区2面3号埋甕全景(南から)
3 A区2面3号埋甕全景(北から)
4 A区2面縄文土器出土状況(北から)
5 A区2面掘り下げ前全景(南東から)
6 A区2面掘り下げ前全景(南東から)
7 A区2面掘り下げ前状況(南東から)
8 A区2面掘り下げ前状況(南東から)
PL.82 1 A区2面掘り下げ前ベルト設置状況(南東から)
2 A区2面掘り下げ前ベルト設置状況(南東から)
3 A区2面縄文遺物集中部全景(西から)
4 A区2面縄文遺物集中部A~C断面(南西から)
5 A区2面縄文遺物集中部西部分(南東から)
6 A区2面縄文遺物集中部南部分(2回目)(南から)
7 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(南から)
8 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(北西から)
PL.83 1 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(西から)
2 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(南から)
3 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(南から)
4 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(南から)
5 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(南から)
6 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(北から)
7 A区2面縄文遺物集中部(3回目)(西から)
8 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)
PL.84 1 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(西から)
2 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)
3 A区2面縄文遺物集中部2号竪穴建物上断面(南から)
4 A区2面縄文遺物集中部2号竪穴建物上断面(南から)
5 A区2面縄文遺物集中部(3回目)(南から)
6 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)
7 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)
8 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)
PL.85 1 A区2面1号竪穴建物含む北全景(南から)
2 A区2面1号竪穴建物含む北全景(南から)
3 A区2面1号竪穴建物周辺全景(南から)
4 A区2面1号竪穴建物南東部礫集中凹み(南から)
5 A区2面1号竪穴建物南東部礫集中凹み(東から)
6 A区2面縄文遺物北部分アップ
7 A区2面縄文遺物北部分アップ
8 A区2面縄文遺物北部分アップ
PL.86 1 A区2面縄文遺物集中部全景(北西から)
2 A区2面縄文遺物集中部全景(東から)
3 A区2面縄文遺物集中部南部分(南から)
4 A区2面縄文遺物集中部南全景(東から)
5 A区2面縄文遺物集中部南全景(東から)
6 A区2面縄文遺物集中部部分(南東から)
7 A区2面縄文遺物集中部南全景(南西から)
8 A区2面縄文遺物集中部南全景(南東から)
PL.87 1 A区3面縄文土坑・ピット南全景(東から)
2 A区3面縄文土坑・ピット南全景(西から)
3 A区3面縄文土坑・ピット南部分(東から)
4 A区2面確認トレンチ(南から)
5 A区2面確認トレンチ(南西から)
6 A区2面確認トレンチ(南から)
7 A区1面1・2・3号トレンチ調査風景(南から)
8 A区1面1号トレンチ断面(南東から)
PL.88 1 A区2面1号トレンチ(南から)
2 A区1面2号トレンチ断面(南東から)
3 A区1面2号トレンチ断面(南東から)
4 A区2面2号トレンチ(南から)
5 A区1面3号トレンチ(南から)
6 A区2面3号トレンチ(南から)
7 A区1面3号トレンチ断面(南東から)
8 A区1面4号トレンチ断面(東から)
PL.89 1 A区1面5号トレンチ(南から)
2 A区1面5号トレンチ断面(西から)
3 A区1面6号トレンチ断面(南から)
4 A区1面7号トレンチ断面(南東から)
5 A区1面7号トレンチ断面部分(南東から)
6 A区1面8号トレンチ断面(南から)
7 A区1面9号トレンチ断面(南から)
8 A区2面10号トレンチ(南から)
PL.90 1 A区2面10号トレンチ(南から)
2 A区2面10号トレンチ断面(南東から)
3 A区2面縄文遺物集中12~14号トレンチ断面(南西から)
4 A区2面縄文遺物集中12~14号トレンチ断面(南東から)
5 A区2面縄文遺物集中調査風景(西から)
6 A区2面縄文遺物集中調査風景(北西から)
7 A区2面縄文遺物集中調査風景(南から)
8 A区2面縄文遺物集中調査風景(東から)
PL.91 1 A区2面縄文遺物集中12号トレンチ断面(南から)
2 A区2面縄文遺物集中13号トレンチ断面(南から)
3 A区2面縄文遺物集中14号トレンチ断面(南東から)
4 A区2面縄文遺物集中14号トレンチ断面(南東から)
5 A区2面縄文15号トレンチ(南から)
6 A区2面縄文15号トレンチ断面(東から)
7 A区2面縄文16号トレンチ(南から)
8 A区2面縄文16号トレンチ断面(東から)
PL.92 中・近世、平安時代 A・B区出土土器・陶磁器
PL.93 平安時代 B区出土土器・陶器
PL.94 縄文時代 A区出土土器(1)
PL.95 縄文時代 A区出土土器(2)
PL.96 縄文時代 A区出土土器(3)
PL.97 縄文時代 A区出土土器(4)
PL.98 縄文時代 A区出土土器(5)
PL.99 中・近世 B区出土石製品・宝塔・五輪塔
PL.100 平安・縄文時代・中世 A・B区出土石器・古銭
PL.101 中・近世 B区出土古銭・金属器類



第1章 調査の方法と経過

第1節 調査に至る経緯

吾妻川は、その源を群馬・長野県境の鳥居峠に発し、浅間山・草津白根山の間を東流して万座川・熊川・白砂川等の支流を合わせ、途中、「吾妻峡」と称される美観をつくりながら、さらに温川・四万川・名久田川等の支流を合わせ、渋川市付近で利根川と合流する全長76.2kmの一級河川である。

八ッ場ダムは、その吾妻川の中流に建設され、①洪水調節、②流水の正常な機能維持、③水道及び工業用水の新たな確保並びに発電(出力11,700KW)を目的とする多目的ダムで、天端標高586m、堤高116m、堤頂長291m、流域面積711.4km²、湛水面積約3.0km²、総貯水容量1.075億m³の規模を測る重力式コンクリートダムである。ダム位置は、左岸が群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字八ッ場、右岸が大字川原湯字金花山にあり、名勝「吾妻峡」の入口部付近にあたる。

八ッ場ダム建設計画は、「昭和24年利根川改修改定計画」の一環として、昭和27年5月に調査着手後、平成4年7月、「八ッ場ダム建設事業に係る基本協定書」及び「用地補償調査に関する協定書」が締結されることによって本格着工となった。

八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財調査の実施に関しては、平成6年3月18日に建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長との間で「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」が締結され、埋蔵文化財発掘調査事業の実施計画が決定した。これにより、委託者である建設省関東地方建設局長と受託者である群馬県教育委員会教育長とが年度区分ごとに発掘調査受委託契約を締結のうえ、以後発掘調査が実施されることが決定したのである。

この協定を踏まえて、平成6年4月1日に関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長により発掘調査受委託契約を、同日に群馬県教育委員会教育長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長により発掘調査受委託契約を締結し、八ッ場ダム進入路関連遺跡を調査箇所とす

る八ッ場ダム埋蔵文化財発掘調査が開始された。

平成11年4月1日には、建設省関東地方建設局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の間で、「八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定の一部を変更する協定書(第1回変更)」が締結され、発掘調査受委託契約についての変更が行われた。これにより、受託者が群馬県教育委員会教育長から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長へ変更となり、現在の調査体制に至っている。

また、平成17年4月1日、同協定書(第2回変更)の締結により、発掘調査の業務完了期日が、「平成18年3月31日」から「平成23年3月31日」まで延長、平成20年3月31日、同協定書(第3回変更)の締結により、発掘調査の業務完了期日が「平成28年3月31日」まで延長、平成28年3月25日、同協定書(第4回変更)の締結により、発掘調査の業務完了期日が「平成29年3月31日」まで延長、平成29年3月29日、同協定書(第5回変更)の締結により、発掘調査の業務完了期日が「平成32年3月31日」まで延長された。

第2節 調査経過・調査方法・調査概要・整理事業の経過

1 調査経過

下原遺跡は長野原町大字林字下原地内に所在する。平成12年8月から群馬県教育委員会文化財保護課が試掘調査を実施し、江戸時代天明三年浅間山噴火に伴う泥流下の畑と中世の遺構等が確認された。それらの結果を受け、調査は平成12年度、13年度、15年度、16年度に実施され、既に報告済みである。平成29年度調査予定地については平成26年7月に試掘調査を実施した。その結果、天明泥流直下にAs-A軽石に埋没した畑及びその可能性のある遺構が検出され、発掘調査は平成29年6月1日～12月31日に実施した。

平成29年度の発掘対象地は、平成15・16年度調査区を

第1章 調査の方法と経過

間に挟んでその東西に分かれ、西側部分をA区、東側部分をB区とした。

下原遺跡の立地する長野原町大字林は、西側には江戸時代上野国吾妻郡長野原町、東側には河原畑(川原畑)村が位置する。群馬県史編さん委員会編1986『群馬県史』資料編11近世3によると林村は、元禄16(1703)年の石高は195石4斗1升5合であり、西隣の長野原町は、252石4斗7升9合、東隣の河原畑(川原畑)村は、159石9斗1升3合で、長野原町よりも少ないものの河原畑(川原畑)村より石高は多かった。対岸の横壁村の55石2斗7升2合と比べると3倍超え4倍近く多かった。なお、周辺の村の石高の比較等については第2表を参照願いたい。

2 調査方法

下原遺跡は、主に、吾妻川下位河岸段丘面上に立地し、概ね厚さ30~50cm前後の天明泥流に被覆されていた。その下には薄くAs-Aの堆積が見られた。A・B区とも場所によってはほとんど無い部分もあった。

調査は、まず、バックホーを使用することにより、表土及び天明泥流の除去作業から始めた。その後、発掘作業員を導入し、ジョレンや移植ゴテ等による遺構の検出作業、並びにトレンチ掘削や断ち割り作業等により、遺構調査を実施した。

遺物取り上げについては、遺構別地点別取り上げを基本とし、遺構の所属が明らかでない遺物に関しては、遺構外遺物としてグリッド毎、またはNoを付けて取り上げ、整理段階で報告した。遺構平面測量にあたっては、測量業者委託によるデジタル測量を基本として、縮率1/10・1/20・1/40を基準に、縮率を適宜選択して実施した。

遺構断面測量も平面測量に準じて実施した。

遺構写真については、航空写真撮影(ドローン使用)、現場担当者による地上写真、並びに高所作業車使用による高所写真撮影等を行った。現場担当者による撮影には、デジタルカメラ(Canon EOS 6D)を使用した。

3 調査概要

平成29年度の発掘調査は平成29年6月1日~12月31日に実施した。発掘調査期間内の個別遺構調査進行状況については、「第1表 下原遺跡調査経過」の通りである。

当初は、6月にA区の調査から着手し、7月からはB区も同時に開始した。10月までは同時並行で行い、11・12月はA区の調査を実施した。調査内容については、時代毎に記述するため、同じ調査区の面の記述が連続しないこともある。

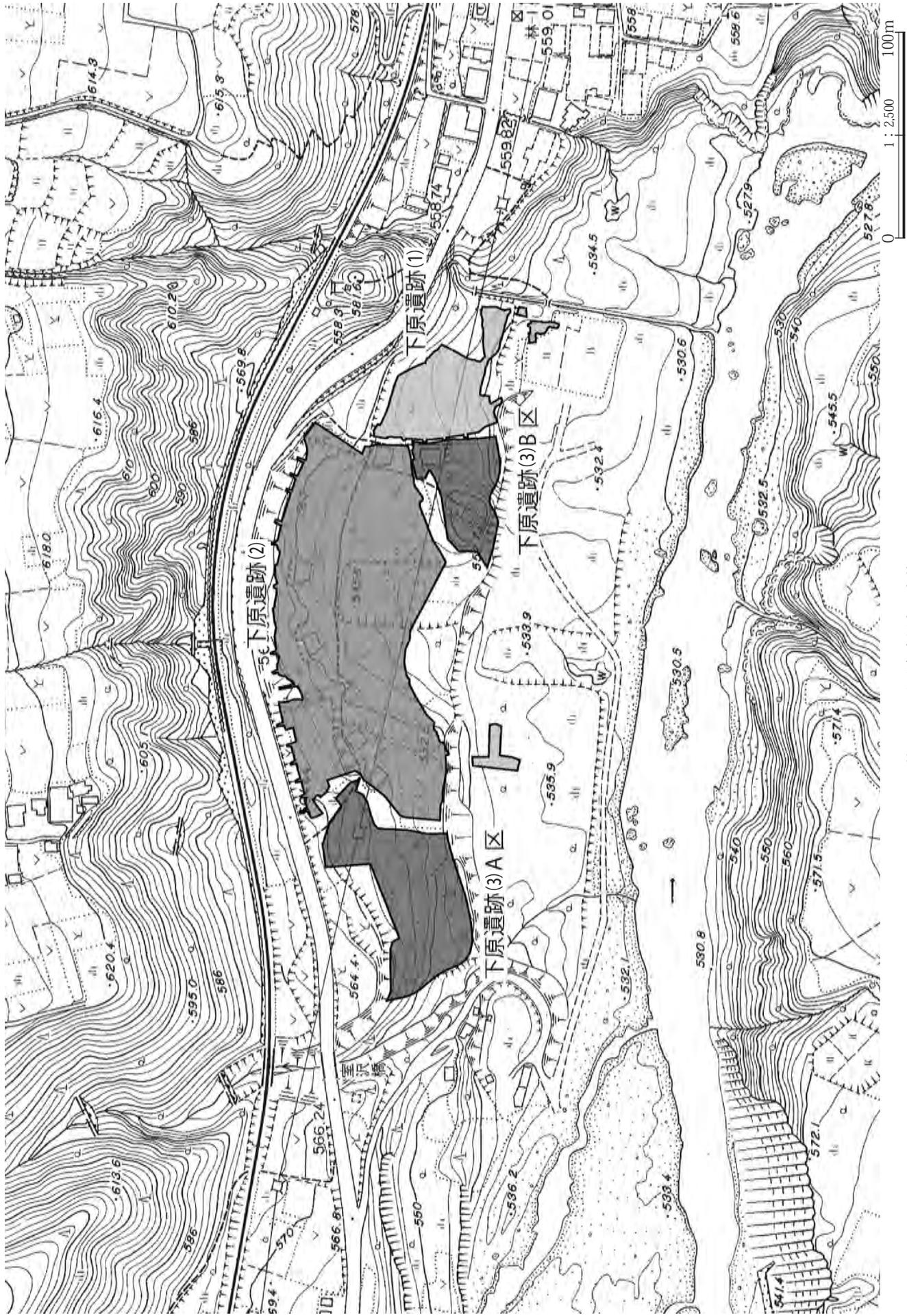
各調査区の調査時期や調査内容については「第1表 下原遺跡調査経過」の通りである。その中で各区の特徴について簡単に説明する。

A区の天明泥流下の畑はB区及び以前に調査されたものとほぼ共通する。As-A降下後の復旧方法として細長い坑(復旧坑)を掘って天地返しをした畑とそのまま火山灰を混ぜ込んだ畑(1号耕作地)が確認された。畑だけではなく、八ッ場地区では珍しい水田も確認された。この区の特徴は、江戸時代の遺構の下に縄文時代の遺構と遺物が出土し、縄文時代の敷石柄鏡形建物や竪穴建物が検出されたことである。他に縄文時代の埋め甕3基を始め、同時代中期末~後期を主体とする土器片が6,000点以上出土した。この区では中世の遺構は明瞭ではないが、江戸時代と縄文時代の遺構は見るべきものがあった。

B区は、下田観音堂が建っていた高さ10m程の岩盤上の西側とその下の平坦な東側に分けることができる。西側の天明泥流下からは、版築された痕跡が残る150㎡程の平坦面とそこに上るための道(2号道)を確認した。遺物は、多数の五輪塔や宝塔の部品や古銭等が出土した。長方形に並ぶ上面が平坦な石や栗石で囲まれた中央に空間が空く場所も確認された。移転前の下田観音堂は寛政四(1792)年に開眼供養した時の奉納札によると天明三(1783)年に浅間泥押し(天明泥流)により、本尊と御堂が流失し、「良山道心」が施主となって再建されたということである(八ッ場ダム地域文化財調査会編2013 平成24年度『長野原町の文化財調査報告書 I 5地区の石造物及び神社・社宇・堂宇の移設等保存移設について』「林地区」長野原町発行)。その建替以前の建物の可能性も考えられる。しかし、礎石全ての上に同時に柱が立っていたとすると通常2間×2間に縁側や廂が付く観音堂の建物としてはあまりにも規模が大きく、その一部に観音堂が建っていたとすると他には何があったのかなど検討の余地があるかもしれない。その下の面の調査で土坑・ピットを確認した。土坑の中に人骨や古銭を伴う明確に墓坑と考えられるものが3基あった。いずれも大きさは長径

第1表 下原遺跡調査経過

		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
A区		環境整備	■				■		
	第1面	表土泥流除去・遺構確認	■					■	
		斜面トレンチ	■						
		天明泥流下の畑・水田		■	■				■
		溝	■	■					■
		石垣・道	■	■					■
	第1.5面	掘削・遺構確認	■	■	■	■			
		暗渠	■	■					■
		石垣		■					
		トレンチ							
	第2面	掘削・遺構確認				■	■		■
		掘立柱建物・墓・土坑・ピット				■	■		
		縄文竪穴建物(住居)・埋甕				■	■		
		包含層				■			■
第3面	掘削・遺構確認					■			
	土坑・ピット					■			
B区		環境整備		■					
	第1面	表土泥流除去・遺構確認		■	■	■			
		天明泥流下の畑・道			■	■			
		空撮			■				
		トレンチ			■				
		石垣		■	■				
	第1.5面	掘削・遺構確認				■			
	第2面	掘削・遺構確認			■				
		畑				■			
		土坑・ピット・焼土				■			
		トレンチ			■				
	第3面	石列				■			
		掘削・遺構確認				■	■		
	第4面	墓					■		
		掘削・遺構確認				■	■		
	第4面	土坑・ピット				■	■		
		古代竪穴建物(住居)					■		



第1図 下原遺跡調査区全体図

1.5m前後×短径1m前後、深さ0.5m前後で、土坑内部の周囲を人頭大の礫で囲んでおり、検出時は中にやや大きめの40～50cm大の石が詰められていた。墓坑内から出土した古銭はいずれも中世の銭だけであり、寛永通寶は1点もないので、中世のものと考えられる。中でも14号土坑が最も残りが良く、この土坑では骨の遺存状況から北枕で顔は西側(西方極楽浄土)を向いていたものと考えられる。

B区東側では江戸時代天明泥流下から畑と道を確認した。この地区の畑は、基本的に東西方向にサクが切られている規模の大きなものが多いが、岩盤下の一部で南北方向にサクが切られている部分もあった。そこではその畑を囲むような区画溝も確認されたので、菜園なのか苗場なのかなど詳細なことは不明であるが、東西方向のものとは利用目的が違うものと思われる。その下の面(B区2面)では中近世の畑(1号畑)・焼土・多くの土坑・ピット及び平安時代の竪穴建物が確認された。畑は極狭い範囲に南北方向にサクが切られていたものであり、土坑・ピット群の北側で、平安時代の竪穴建物の東側で確認された。そのサクの内部には山砂が詰まっていた。畑のすぐ南で馬の臼歯が検出された。土坑・ピットの集中部分の多くは6棟の掘立柱建物の柱穴若しくはこれらの建物に関連するものと考えられる。ここで確認された6カ所の焼土遺構は、土坑・ピット群の上の面で調査された遺構ではあるが、平面的な位置を重ねて見るといずれも掘立柱建物群と重複する位置にあり、これらの建物の畑になる可能性もあるのではないかと考えている。平安時代の竪穴建物は今回の調査範囲では1軒のみであり、出土遺物から10世紀前半頃のものと考えられる。それ以外にB区東側では、内耳鍋や石臼、土師器・須恵器・灰釉陶器等の遺物が出土した。特に掘立柱建物群周辺からは内耳鍋や石臼など中世と考えられる遺物の多くが出土した。特筆されるものとして掘立柱建物群内の焼土遺構に近い土坑(B区1号土坑)から「丸靱」が1点出土したことである。これはやや白く濁った石製のものであるが、硬く強い光沢を持つ。丸靱は古代において帯に付ける飾りであるが、土坑内から他に石臼の大形破片も出土しており、中世になって実用品ではなくなったものを地鎮などの目的のために納めたものと考えられないだろうか。

4 整理事業の経過

平成30年度の整理事業は、4月から遺構平面図類および遺構写真の確認から開始し、出土遺物の分類作業を行った。併せて遺構写真の選定を行った。遺物についても4月から陶磁器類、金属製品、石製品といった種別ごとに、接合・復元、掲載遺物の選定、写真撮影、実測作業、これら遺物図のトレース作業を行い、各遺物の観察表の執筆を行った。7月に出土した人骨等の鑑定分析を依頼した。6月から遺構図の編集、報告書版下のレイアウト作成、全体のデジタル編集作業およびデジタル組版を行い、12月に印刷・製本を業者委託して2月に発掘調査報告書を刊行した。また、整理した遺物や写真等については、管理台帳を作成し、活用しに備えて遺物や資料類の収納作業を行い、すべての整理事業を完了した。

第3節 調査区の概要

1 調査区の設定

平成6年度から始まった八ッ場ダム建設に伴う発掘調査においては、遺跡名称の略号やグリッドの設定などについて、「八ッ場ダム関連埋蔵文化財発掘調査方法」に基づき進められている。以下、本報告書でもそれに準拠し、必要部分について掲載する。

調査における遺跡番号は、八ッ場ダム建設に関わる長野原町の大字5地区(1:川原畑、2:川原湯、3:横壁、4:林、5:長野原)、東吾妻町の大宇3地区(6:三島、7:大柏木、8:松谷)に番号を付し、八ッ場ダムの略号(YD)に続ける。ハイフン以下は各地区内に所在する遺跡に対して調査順に通し番号を付し、遺跡番号とする。下原遺跡は八ッ場ダム林地区8番目の遺跡であり、略号は「YD4-08」である。

基準座標は、国家座標(2002年4月改正以前の日本測地系)に基づく平面直角座標第IX系(日本測地系)を使用し、東吾妻町大柏木付近を原点(座標値X=+58000.0、Y=-97000.0)とした1km方眼を基点として60の区画を設定し、この大グリッドを「地区」と呼ぶ。下原遺跡はこのNo.27に所在する。さらに、1km方眼を南東隅から100m方眼の1～100に区画し、この中グリッド

第1章 調査の方法と経過

を「区」とする。南東隅を1とし、東から西へ連続する10単位を南から北へ配列し、北西隅を100として完結するよう配置する。

「区」の100m方眼は、さらに4m方眼で625区画に分割され、その4m方眼の小グリッドを「グリッド」と呼ぶ。なお、小グリッドの東西にはA～Yまでのアルファベットを、南北には1～25までの算用数字を用いながら、南東隅を基点としグリッドを呼称する。

また、遺構図や本文中の記載において、特に混乱が予想されない場合は「地区」番号を略して用いている。

2 調査前の状況

調査区は、国道145号線が御天狗様の所で北に緩やかにカーブする南側の吾妻川寄りであり、移転前の下田観音堂を含む範囲である。河川敷に近い部分であり、最も低い河岸段丘上である。調査前は雑草や雑木林に覆われていた。

調査段階では、雑木林に囲まれて岩盤の上にあった下田観音堂は解体され、近くの御天狗様とともに国道145号線の2本北側の町道林線脇に移設された。なお、新下田観音堂には元々の建築部材を多く再利用し、旧観音堂境内にあった石造物も御堂脇に移設された。本尊や奉納札なども全て御堂内に移された。旧下田観音堂の柱間は東西122cm+120cm+122cm=364cm、東側にぬれ縁62cmがプラスされ、南北は106cm+152cm+106cm=364cm、北側にぬれ縁62cmがプラスされるものである(ハッ場ダム地域文化財調査会編2013平成24年度『長野原町の文化財調査報告書 I 5地区の石造物及び神社・社宇・堂宇の移設等保存移設について』「林地区」長野原町発行)。建物そのもので考えると柱の間は3間あるが、1間が180cmより少し長いとすると規模的には2間×2間+縁側ということになる。調査で確認した約150㎡の版築範囲や1間4m、あるいは5mを超えるような柱間が飛ぶ建物は御堂としては大き過ぎるのではないか。上記『長野原町の文化財調査報告書 I』によれば「昔は春の彼岸中日に御堂に集まり念仏を唱え、御堂わき下屋で「おこもり」を交代で行った」ということであり、付属する下屋など他の建物の基礎も一緒に見ている可能性も考えられるのではなからうか。

3 基本土層

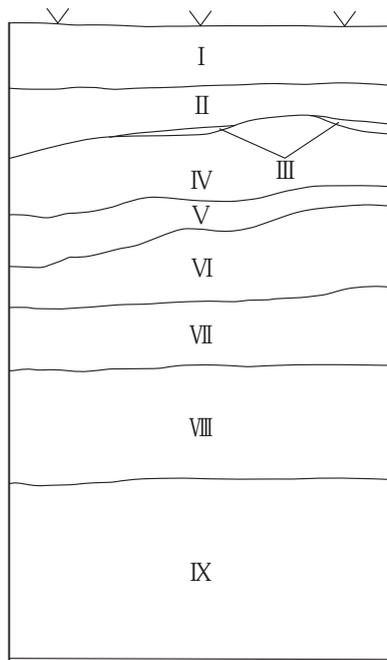
下原遺跡は、吾妻川下位河岸段丘面上に立地する。本遺跡はその多くが天明泥流に被覆されており、その堆積の平均的厚さは30～50cm程度であるが、場所によっては80cm近いところもあったが、ほとんど堆積が確認できなかった部分や表土と混在したような状態で残っていた部分もあった。山側の急斜面では確認できなかった部分が多かった。天明泥流の発生日時は、天明三(1783)年7月8日(新暦8月5日)である。

天明泥流の直下には、浅間A軽石(As-A)が約1cmの厚さで堆積していた。As-A軽石降下日時は、新暦7月27～29日と推測されている(関俊明 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第319集)。本遺跡に堆積するAs-A軽石の降下日時を新暦7月27～29日頃とすると、泥流発生日時との間には1週間ほどの時間差が存在したこととなる。

参考文献

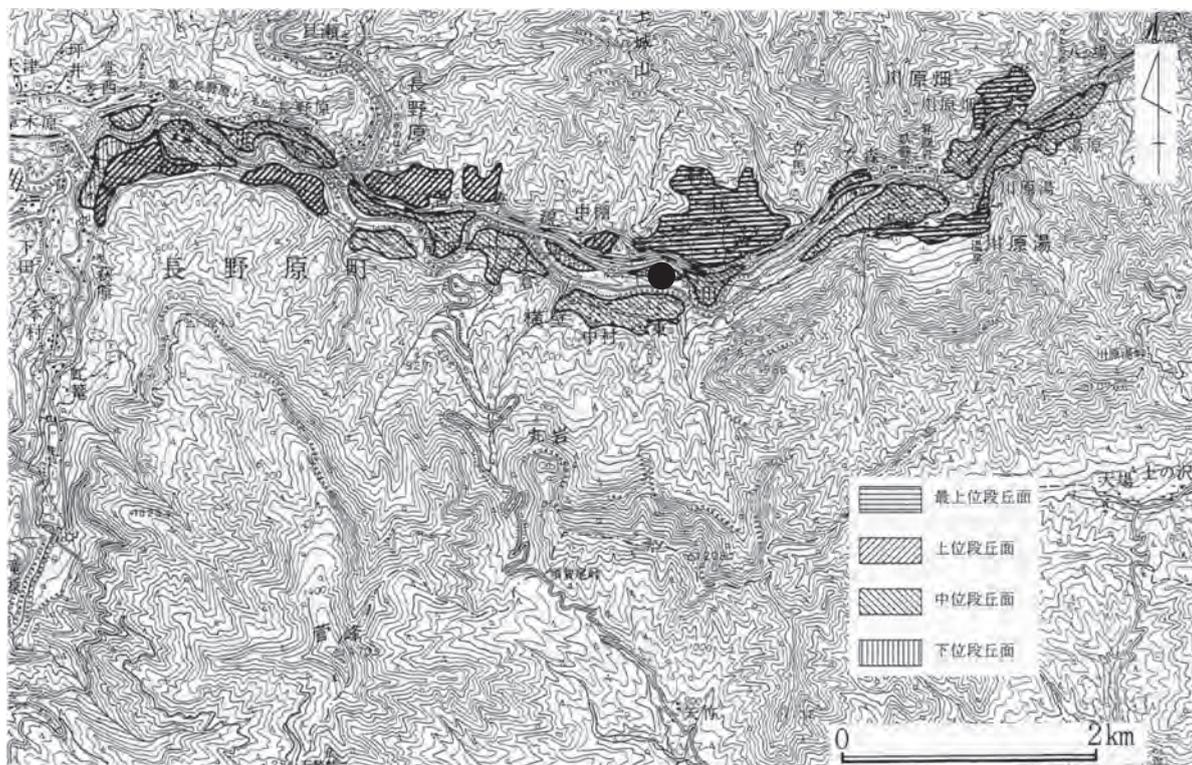
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『長野原一本松遺跡(1)』第287集
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』第303集
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』第319集
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011『東宮遺跡』(1)-遺構・建築部材編- 第514集
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012『東宮遺跡』(2)-遺物編-第536集
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2017『東宮遺跡』(3)第628集
- 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2018『下湯原遺跡』(1)第641集
- ハッ場ダム地域文化財調査会編2013『長野原町の文化財調査報告書 I 5地区の石造物及び神社・社宇・堂宇の移設等保存移設について』「林地区」長野原町発行

以下、下原遺跡における基本土層模式図を掲載しておく。今回の調査区は平成15・16年度調査区を間に挟んだ西側のA区と東側のB区であり、表土から天明泥流下畑の耕作土までのI～IV層まではほぼ共通するが、V層以下は調査区毎により、また調査区の高い部分と川寄りの低い部分により異なる。基盤層は河岸段丘の砂礫層になっていく。あくまでA区を基本にしてB区も考慮しながら遺跡全体に当てはまるように模式的に作成したものである。



- I 表土
- II 暗褐色土：天明泥流堆積物。最大30cm大の垂円礫を大量に含む。
- III As-A: 1～2mm大の白色軽石層。20mm大の白色軽石を少量含む。
- IV 黒褐色土(10YR3/1) 泥流畑作土。やや淡く、灰色味を帯びる。赤色の鉄分凝集が混じる。縮りやや弱く、粘性やや有。
- V 黒褐色土(10YR2/2) やや均質土。小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
- VI 黒色土(10YR2/1) 均質土。小礫・白色粒・やや大きめの黄橙色粒を多量に含む。
- VII 暗褐色土(10YR3/4) 小礫・白色粒・やや大きめの黄橙色粒を多量に含む。
- VIII 黄褐色土(10YR5/8) 粗粒砂質土。小～こぶし大の礫を大量、白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒・炭化物粒を少量含む。
- IX 明黄褐色土(10YR6/8) 細粒砂質土。10～20cm大の垂円礫を少量含む。

第2図 下原遺跡基本土層



第3図 長野原町の河岸段丘分布図(● 下原遺跡)

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

長野原町は群馬県北西部、吾妻郡の南西隅に位置する。町域の北部を吾妻川が東流し、川を挟んで北西には草津白根山、南西には浅間山が位置する。また東部には、吾妻川より北側に高間山(1342m)や王城山(1123m)、南側に丸岩(1124m)や菅峰(1474m)、浅間隠山(1757m)、鼻曲山(1655m)などが南北に連なる。長野原町は、その地形の特徴から、高間及び白根の両山系と菅峰に挟まれた吾妻川流域地帯の北部と浅間高原地帯の南部とに大別される。

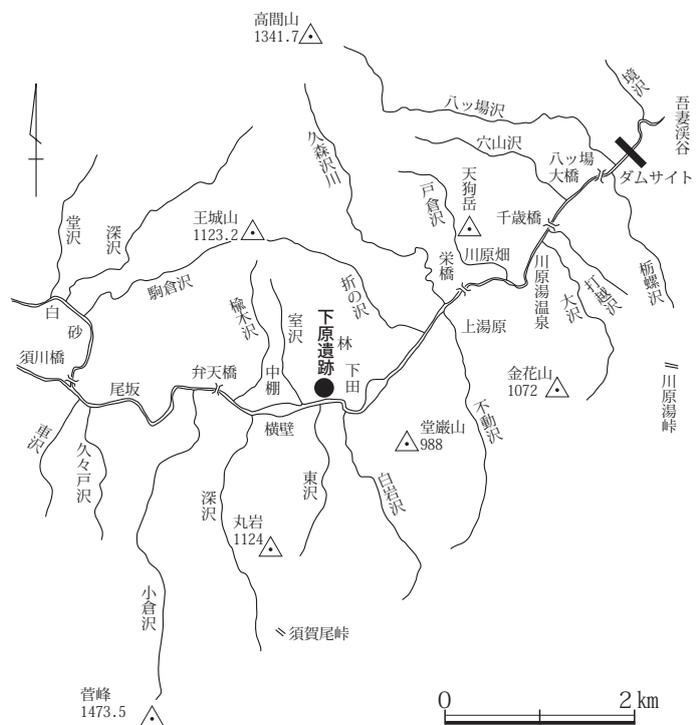
吾妻川は、長野県境の鳥居峠(1362m)付近に水源を発生して東流し、町域のほぼ中央では川幅をやや広くするものの、東端では第三紀層を刻んで吾妻渓谷を形成している。その支流は、兩岸の山地から発する河川や溪流が多く、左岸には草津白根山麓から発する万座川や赤川、遅沢川、上信越国境の白砂山麓から発する白砂川などが南流する。また右岸には、浅間山麓から発する小宿川や、鼻曲山麓から発する熊川などが北流する。流長76.2kmの吾妻川は、渋川市街地付近で、全長322kmの利根川に合流する。

長野原町は、地質構造上では那須火山帯と富士火山帯が接する付近にあるため、周囲の山地は火山活動により形成された火山性山地が多く、浅間山や白根山は現在も活動を続ける。高間山や王城山、菅峰も約100~90万年前頃活動していた火山であるが、現在は浸食が進みほとんど原形を止めていない。菅峰火山から流出した溶岩が断層によって独立したものが「丸岩」である。丸岩は南側を除いた三方が100mにも達する垂直の崖に囲まれ、吾妻川方面から望むと頭の丸い巨大な円柱状に見える特徴的な岩峰である。それは、長野原・横壁・林・川原湯・川原畑のハッ場ダム関連の5地区どこからでも望むことができるランドマークとなっている。

吾妻川兩岸には、吾妻川からの比高差を基準に、最上位・上位・中位・下位の4段階の河岸段丘面が形成されている。現在の吾妻川からの平均的な比高差は、最上位段丘で約80~90m、上位段丘で約60~65m、中位段丘で

約30~50m、下位段丘で約10~15mを測る。

長野原町の地質形成に大きな影響を与えた火山が浅間山である。町域の南西部、長野県境に位置し、古い方から黒斑山・仏岩・前掛山・釜山の4つの火山体で構成される標高2568mの成層火山である。佐藤他2018「木片の14C年代測定による前橋泥流堆積時期の再検討(予察)」群馬県立自然史博物館研究報告(22)によると約2.7万年前(暦年較正年代)の黒斑火山の噴火では、山体崩壊によって「応桑泥流(中之条泥流)」が発生した。この泥流堆積物は、当時の河床を数十mの厚さで埋めており、その後の浸食によって吾妻川兩岸に最上位と上位の河岸段丘面が形成された。この泥流は渋川から利根川に入り、前橋台地を形成する前橋泥流となった。「岩神の飛石」も赤城山や榛名山ではなく、その時のものであることが分かっている。その後も浅間山は多くの火山噴出物を堆積させているが、特に町域では浅間草津黄色軽石(As-YPk: 1.8万年前・暦年較正年代)の堆積が顕著である。また、浅間Bテフラ(As-B: 1108年)や浅間粕川テフラ(As-Kk: 1128年)も平安時代の黒色土中に数cmの厚さで確認でき



第4図 下原遺跡周辺の地名
 (『長野原町の自然』長野原町1993 図1~56を加除筆引用)



第5図 遺跡位置図(国土地理院1/200,000地勢図「長野」平成18年11月1日発行、1/50,000地形図「草津」平成11年1月1日発行を使用)

る。さらに天明三(1783)年の噴火により発生した天明泥流は、下位段丘面や中位段丘面を平均約1mの厚さで覆っている。

下原遺跡は、標高約535～545mの吾妻川が右に蛇行し川幅が狭窄する左岸の下位河岸段丘面上の大字林字下原に所在する。西に位置する中棚Ⅱ遺跡が上位段丘面に、東に位置する下田遺跡が中位段丘面に相当する。

第2節 歴史的環境

下原遺跡では、ほぼ全ての場所で確認されたのは江戸時代天明三(1783)年、泥流下の遺構である。そこで遺跡の所在する長野原町大字林地区を中心に周辺も含めて旧石器時代から近世までの遺構や遺物について概略を説明する。

旧石器時代

長野原町では旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されていない。ただし、遺構外ではあるが、柳沢城遺跡で細石器文化に伴うとされる珪質頁岩の削器が1点出土している。

縄文時代

吾妻川およびその支流沿岸の段丘面、特に中・上・最上流河岸段丘、丘陵部に遺跡が多く分布し、集落が展開する。草創期の遺跡としては表裏縄文土器が出土した石畑岩陰遺跡(6)が有名であるが、横壁勝沼遺跡(10)からも表採ではあるが、槍先形尖頭器が見つまっている。早期は撚糸文土器や押型文土器などが楡木Ⅱ遺跡(15)・立馬Ⅱ遺跡(14)等で出土している。前期の遺構数は少ないが、初頭の花積下層式期の坪井遺跡(31)や上原Ⅰ遺跡(16)などで住居が確認されている。中期になると遺跡数・遺構量とも大幅に増加する。大規模な遺跡として林中原Ⅱ遺跡(文45)、長野原一本松遺跡(22)、上ノ平Ⅰ遺跡(5)、横壁中村遺跡(9)などがある。後期になると集落はやや減少する。代表的な遺跡として長野原一本松遺跡(22)、横壁中村遺跡(9)、林中原Ⅱ遺跡(文45)などがある。東宮遺跡(2)では中期後半から後期前半にかけての大規模な集落が調査されている。晩期になるとさらに遺跡数は減少する。石川原遺跡(36)では後期後半から晩期にかけての集落が調査されている。川原湯勝沼遺跡(7)では、氷Ⅰ式段階併行期の土器による再葬墓と思われる

土坑が検出されている。

弥生時代

長野原町では、この時期の遺跡は非常に少ない。前期では、横壁中村遺跡(9)で甕を埋設した土坑(再送墓?)が、尾坂遺跡(25)では、やはり再葬墓や土坑が、中期では立馬Ⅰ遺跡(14)は住居と甕棺墓が、後期では二社平遺跡で破片が多数出土している。

古墳時代

昭和13(1938)年に編纂された『上毛古墳綜覧』によれば、長野原町には2基の古墳が存在するとされていたが、現在までに発掘調査によって古墳は1基も確認されていない。調査された住居も極めて少ない。上原Ⅰ遺跡(16)では前期と考えられる住居が検出されている。5～6世紀後半の住居は下原遺跡(1)・上原Ⅳ遺跡(16)などで調査されている。

奈良・平安時代

奈良時代の遺物は羽尾遺跡等で若干確認されているものの、明確な集落は調査されていない。平安時代9世紀中頃になると長野原町の多くの地域で集落が造られるようになる。上ノ平Ⅰ遺跡(5)では皇朝十二銭中の「貞観永寶」や多くの灰釉陶器等が出土している。多くの遺跡で県内外との交流を伺うことが出来るようになる。遺跡の時期は9～10世紀を中心としている。大規模な遺跡として横壁中村遺跡(9)、楡木Ⅱ遺跡(15)がある。

中・近世

長野原町では、1500年代後半を中心に真田氏が吾妻地域に進出してくる。その頃の城として、羽根尾城・長野原城・林城・丸岩城・柳沢城等がある。長野原城を中心とした「長野原合戦」(永禄五年・1563)を経て、同じ年に東吾妻町岩櫃城が真田氏の支配下に置かれるようになる。

下原遺跡は、近世の畑や水田を中心とした遺跡であり、同時期の集落は作られていなかった。B区の高台部分では中世古銭を伴う土坑(墓)が調査されている。B区の畑の下から、中世を主体とする多くの土坑・ピットが検出され、少なくとも数棟の掘立柱建物があったものと考えられる。

これまで発掘調査されてきた中・近世の大きな遺跡は、中世林城の堀や石垣の他に中・近世の掘立柱建物が68棟調査されている林中原Ⅰ遺跡(文46)、11棟調査され

ている下田遺跡(19)、13棟調査されている横壁中村遺跡(9)、34棟調査されている上郷岡原遺跡(26)。近世の屋敷を多く調査した石川原遺跡(36)・東宮遺跡(2)・西宮遺跡(3)・尾坂遺跡(25)・町遺跡(35)・下田遺跡(19)、東吾妻町の上郷岡原遺跡(26)等がある。それらの集落には、道・井戸・水路・石垣等が確認されている遺跡も多く、天明三年段階での集落の様子が次第に明らかになってきている。畑を大規模に調査した遺跡は、今回報告する下原遺跡をはじめ、下湯原遺跡・石川原遺跡・尾坂遺跡・東吾妻町の上郷岡原遺跡等数多くの遺跡がある。それに対して、水田を調査した遺跡が少ないのは、山間地であり水田を作るのに適した土地が限られていることに由来するものと考えられる。

()内の数字は第3表の中の遺跡No、(文+数字)は文献番号である。

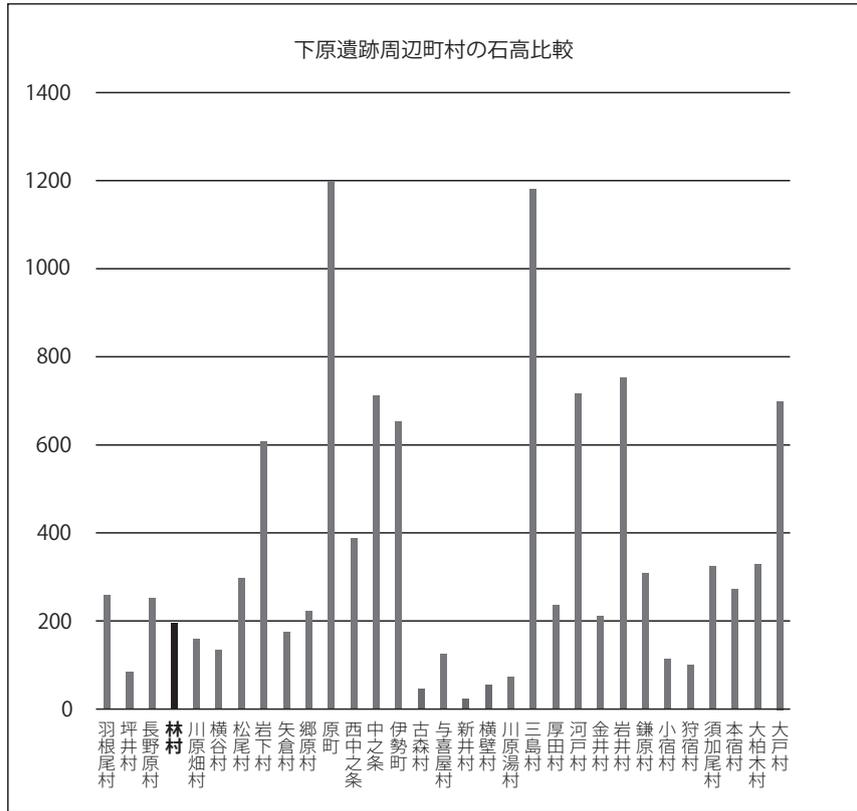
参考文献

- 長野原町『長野原町の古文書』2001
長野原町『長野原町の自然』1993
群馬県史編さん委員会編 1986『群馬県史』資料編7 中世3
群馬県史編さん委員会編 1986『群馬県史』資料編11 近世3
萩原 進 1986『浅間山天明噴火史料集成』II 群馬県文化事業振興会
長野原町誌編纂委員会編 1976『長野原町誌』上巻・下巻
関 俊明 2006『天明泥流はどう流下したか』『ぐんま史料研究』第24号
群馬県立文書館
『群馬県の地名』日本歴史地名大系10巻 1987
群馬県立文書館インターネット古文書講座 176
群馬県文化事業振興会『上野国郡村誌』11 1986
佐藤興平・南雅代・中村俊夫・柴田賢・児島美穂・武者巖2018『木片の14C年代測定による前橋泥流堆積磁器の再検討(予察)』群馬県立自然史博物館研究報告(22)

第2章 遺跡の環境

第2表 林村周辺における元禄16(1703)年の石高一覧

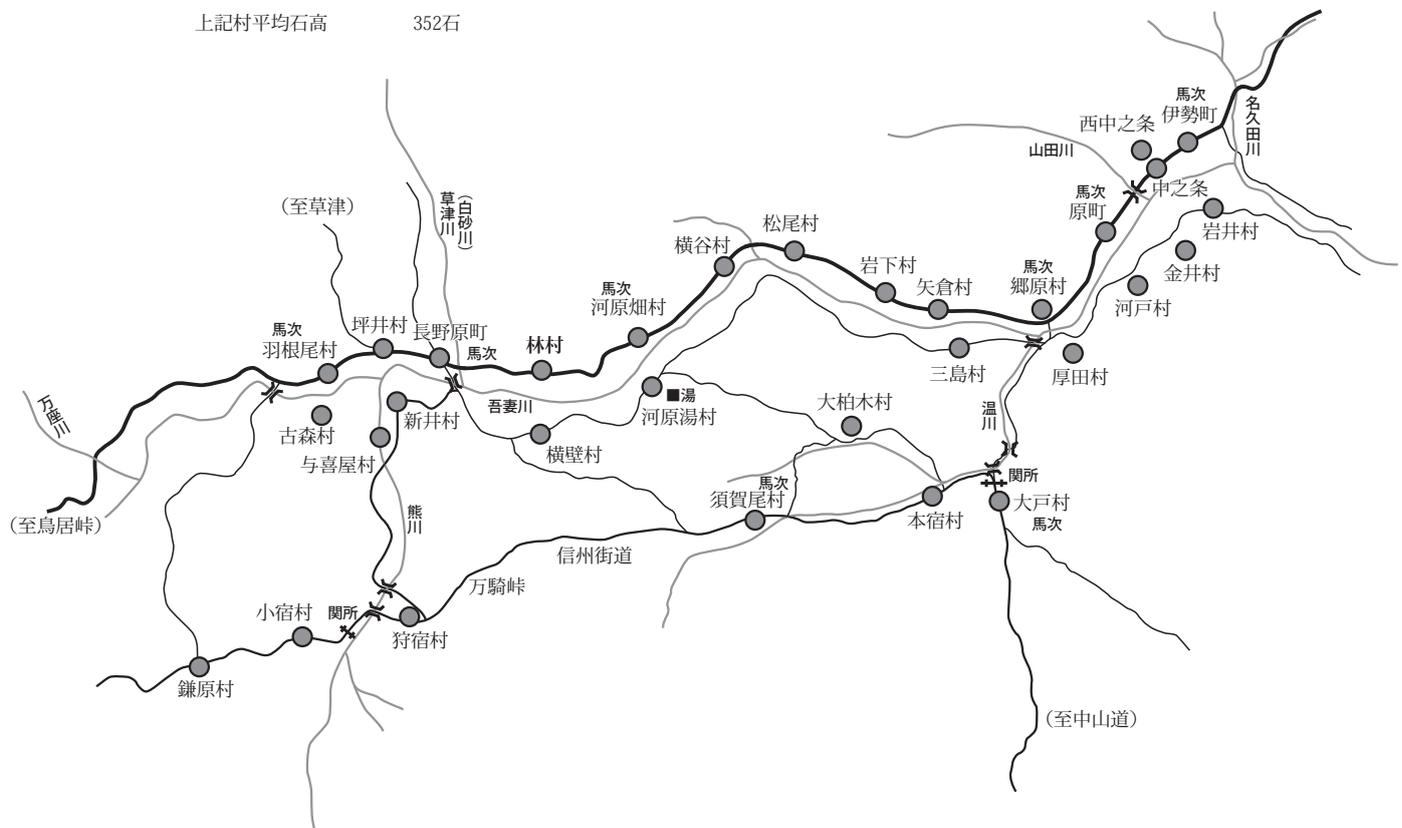
区域	町村名	石高
吾妻川左岸	羽根尾村	258.278
	坪井村	84.315
	長野原町	252.479
	林村	195.415
	川原畑村	159.913
	横谷村	134.357
	松尾村	296.733
	岩下村	607.95
	矢倉村	175.513
	郷原村	223.082
	原町	1198.732
	西中之条	387.862
	中之条	711.508
伊勢町	652.227	
吾妻川右岸	古森村	46.304
	与喜屋村	126.321
	新井村	24.049
	横壁村	55.272
	川原湯村	73.705
	三島村	1181.89
	厚田村	235.466
	河戸村	717.732
	金井村	210.377
	岩井村	752.884
信州街道	鎌原村	309.154
	小宿村	113.294
	狩宿村	99.919
	須加尾村	325.782
	本宿村	271.243
	大柏木村	327.401
	大戸村	699.55



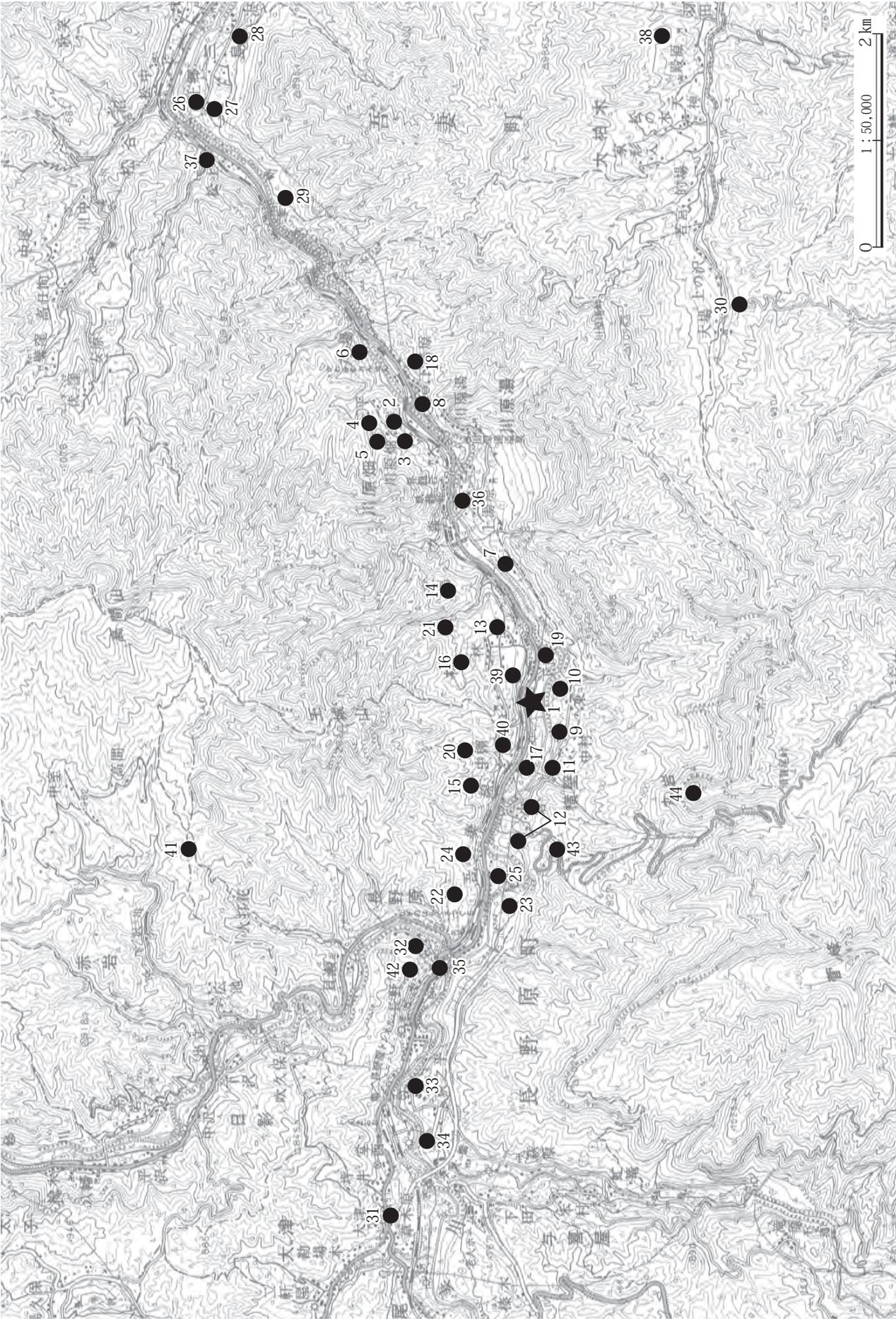
『群馬県史』資料編11付録郷村変遷の元禄16年の資料により作成(下湯原遺跡(1)2018より一部修正)

県内平均石高 404石
 (上野国絵図(元禄十五年)目録部分 群馬県立文書館所蔵文書P8710、No.1より計算)
 (下湯原遺跡(1)2018より一部修正)

上記村平均石高 352石



第6図 吾妻郡林村周辺の道と村(元禄国絵図「上野国」群馬県立文書館所蔵より修正して作成)(下湯原遺跡(1)2018より一部修正)



第7図 中世及び天明泥流下の遺跡分布図(国土地理院1:50000地形図「草津」使用)

第2章 遺跡の環境

第3表 周辺遺跡一覧

遺跡 No.	遺跡名(所在地)	遺構内容	文献 No.
1	下原(林)	竪穴建物(縄文・平安)3、埋甕3、礎石建物1、掘立柱建物9、畑41、平坦面31、溝27、土坑(縄文～中近世)112、石垣32、焼土30、ヤックラ22、石列5、石組5、柵列2、土坑墓5、集石34、水田5、道23、ピット(縄文～中近世)104、暗渠3等	本報告書 3・11
2	東宮(川原畑)	(中世)集石1、土坑(墓坑)2(近世)家15、畑29、平坦面10、石垣19、道5、溝9、溜池1、集石1、井戸1、土坑6、炬燵1、礎石多数、石段1	2・30・31
3	西宮(川原畑)	畑、屋敷3棟、井戸、道、建物内に板間の痕跡がのこる	38
4	三平Ⅰ・Ⅱ(川原畑)	(中近世)掘立柱建物10、土坑63、焼土2、集石3、柱穴列1、礎石2、溝1	12
5	上ノ平Ⅰ(川原畑)	(近世)墓坑17、土坑11	21
6	石畑(川原畑)	畑2	2
7	川原湯勝沼(川原湯)	(中近世)溝3、畑14、平坦面30、ヤックラ19、道5	2・5
8	西ノ上(川原湯)	(近世)畑12、円形平坦面3、道3	4
9	横壁中村(横壁)	(中近世)掘立柱建物13、竪穴遺構1、土坑473、石垣19、列石2、石列4、石組遺構7、配石8、集石3、石囲い遺構3、溝4、焼土42、礎石建物1、鍛冶跡1、ヤックラ4、墓坑(人)23、墓坑(獣)8、畑1等	3・6・9・ 18・20・28
10	横壁勝沼(横壁)	(中近世)土坑墓3	2
11	山根Ⅲ(横壁)	(中近世)土坑墓3 (近世)土坑5等	2
12	西久保Ⅰ・Ⅳ(横壁)	(中近世)土坑3 (近世)畑等	32
13	東原Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(林)	掘立柱建物7、礎石建物1、土坑27、柱穴列1、溝7、焼土2等	29
14	立馬Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(林)	掘立柱建物2、ピット群2、土坑8、溝状遺構15等	10・7・24
15	楡木Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(林)	掘立柱建物20、礎石建物1、石垣3、集石5、石列3、礎石1、テラス3、土坑墓1、土坑206、溝17、焼土20、湧水2、畑1、陥穴42等	2・16・32
16	上原Ⅰ～Ⅳ(林)	住居(縄文・平安)14、土坑(縄文～中近世)48、焼土(縄文・平安)15、ピット4、竪穴遺構3、溝5、旧河道跡2等	15・44・49
17	中棚Ⅱ(林)	畑41、平坦面39、ヤックラ70、道10、石垣23、墓2等	3・4
18	下湯原(川原湯)	(中世)掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑(近世)道、溝、墓地、畑	48
19	下田(林)	(近世)家1、畑2	2
20	二反沢(林)	(中世)造成3、石垣4(近世)溝1、畑2等	8
21	花畑(林)	なし	2
22	長野原一本松(長野原)	土坑65、溝5、暗渠1、道路跡1、集石土坑2、竪穴状遺構6、柵列1、集石5、掘立柱建物2、焼土20、石列1等	1・13・17・ 22・25・33
23	久々戸(長野原)	畑29、平坦面32、ヤックラ32、石垣7、道6、土盛り1、掘立柱建物2等	3・4
24	幸神(長野原)	畑2	15
25	尾坂(長野原)	畑1、溝1、石垣B1	2・47
26	上郷岡原(東吾妻町三島)	家3、掘立柱建物34、竪穴状遺構13、礎石建物3、土坑780、土坑墓19、石組遺構3、集石3、焼土62、井戸2、畑95、平坦面73、水田7、道19、溝43、積石12、石列1、馬屋跡1、便槽13、火葬跡1、土坑墓1等	14・19・26
27	上郷A(東吾妻町三島)	溝1	4・27
28	上郷B(東吾妻町三島)	土坑1、溝2、井戸2	8
29	上郷西(東吾妻町三島)	畑2、道1、溝1	23
30	廣石A(東吾妻町大柏木)	土坑3、墓坑1	8
31	坪井(大津)	配石遺構1、集石遺構2	34
32	嶋木Ⅰ(長野原)	畑1、平坦面2	36
33	小林家住宅(長野原)	吾妻の分限者小林助左衛門屋敷の一部を検出、土蔵跡1棟、礎石建物1棟、屋敷の背後の石垣、石製Ⅰ搗臼、固定臼、石臼、鉄銅製品、陶磁器等出土	35
34	旧新井村跡(与喜屋)	石臼(餅つき用)、米碾用石臼、五輪塔、鉈、秤	39・40
35	町(長野原)	母屋と思われる建物から大量の建築部材や、多くの下駄等の木製品出土、遺跡北側は畑	41
36	石川原(川原湯)	お堂、寺院、道、用水、畑、寺院から出土した密教用具等、寺院は天台宗不動院と考えられる	42

周辺の中世城館跡

遺跡 No.	遺跡名(所在地)	①立地 ②現況 ③遺存状況 ④存続期間(推定伝承) ⑤築・在城者(推定・伝承) ⑥文献 ⑦関連地名 ⑧遺構・遺物等 ⑨備考	文献 No.
37	雁の沢の砦(東吾妻町松谷)	①山・平地 ②山林・畠 ③中等 ④16世紀 ⑤横谷氏 ⑥加沢記、横谷文書 ⑦雁ヶ沢、萱刈場 ⑧堀切、腰郭 ⑨上野志には横谷となっている	37
38	羽田城(大柏木城)(芳の城) (東吾妻町大柏木)	①傾斜地 ②山林・畠 ③良 ④16世紀 ⑤羽田氏、浦野氏 ⑥関東幕注文、下屋文書、浦野文書、長純寺文書、高崎近郷百姓由来書、佐藤文書 ⑦羽田 ⑧堀、堀切、土橋、戸口、竪堀、土居、腰郭、帯郭 ⑨-	37
39	林城(林)	①崖端 ②山林 ③不良 ④不明 ⑤- ⑥- ⑦城 ⑧- ⑨-	37
40	中棚の砦(林中棚)	①段丘上 ②宅地・畠 ③不良 ④不明 ⑤- ⑥- ⑦- ⑧- ⑨-	37
41	長野原館(六合村火打花、赤岩)	①高原 ②山林 ③良 ④不明 ⑤- ⑥- ⑦字新左衛門 ⑧- ⑨長野氏隠棲地と伝える	37
42	長野原城(長野原)	①山 ②山林、墓地、社地 ③良 ④16世紀 ⑤湯本氏、常田氏 ⑥熊谷文書、生島足島起請文、加沢記 ⑦城山、箱岩、字古城址 ⑧堀切、土居、腰郭、竪堀 ⑨畑2枚	37
43	横壁城(柳沢城)(横壁)	①丘と山 ②山林、畠 ③中等 ④16世紀 ⑤横壁玄蕃 ⑥加沢記 ⑦字地蔵台、ジヨウヒラ ⑧郭面、堀、土居 ⑨-	37
44	丸屋城(丸岩城)(横壁)	①山 ②山林 ③良 ④16世紀 ⑤- ⑥歴代古案 ⑦字堂石丸山 ⑧堀切、土居、戸口 ⑨頭状山容を示す	37

第2節 歴史的環境

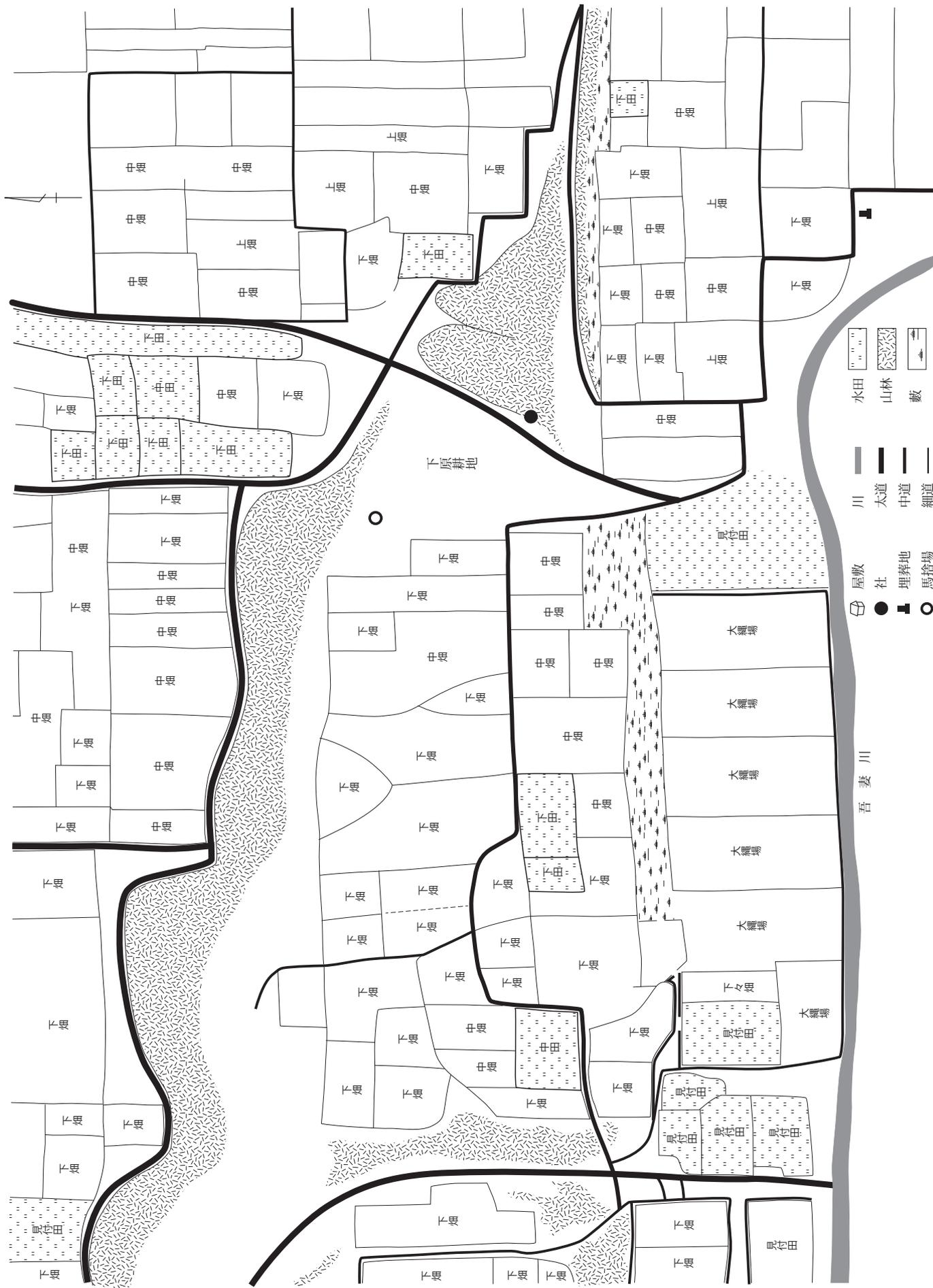
文献

- 1 『長野原一本松遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集2002
- 2 『ハッ場ダム発掘調査集成(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集2002
- 3 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集2003
- 4 『久々戸遺跡・中棚Ⅱ(2)遺跡・西ノ上遺跡・上郷A遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集2005
- 5 『川原湯勝沼遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集2005
- 6 『横壁中村遺跡(3)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集2006
- 7 『立馬Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集2006
- 8 『上郷B遺跡・廣石A遺跡・二反沢遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集2006
- 9 『横壁中村遺跡(4)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集2006
- 10 『立馬Ⅰ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集2006
- 11 『下原遺跡Ⅱ』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集2007
- 12 『三平Ⅰ・Ⅱ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集2007
- 13 『長野原一本松遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集2007
- 14 『上郷岡原遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第16集2007
- 15 『山根Ⅲ遺跡(2)・上原Ⅳ遺跡・幸神遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集2008
- 16 『榎木Ⅱ遺跡(1)(平安時代・中近世編)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集2008
- 17 『長野原一本松遺跡(3)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第19集2008
- 18 『横壁中村遺跡(6)―土坑編―』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第20集2008
- 19 『上郷岡原遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第21集2008
- 20 『横壁中村遺跡(7)―土器埋設遺構・掘立柱建物・環状柱穴列・柱穴列・集石・焼土編―』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第22集2008
- 21 『上ノ平Ⅰ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第23集2008
- 22 『長野原一本松遺跡(4)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集2008
- 23 『上郷西遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第25集2008
- 24 『立馬Ⅲ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集2009
- 25 『長野原一本松遺跡(5)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第28集2009
- 26 『上郷岡原遺跡(3)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第31集2009
- 27 『上郷A遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第32集2009
- 28 『横壁中村遺跡(10)―古代・中世・近世編1―』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第33集2010
- 29 『東原Ⅰ遺跡・東原Ⅱ遺跡・東原Ⅲ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第35集2010
- 30 『東宮遺跡(2)―遺構・建築部材編―』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第36集2011
- 31 『東宮遺跡(2)―遺物編―』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第38集2012
- 32 『榎木Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡・西久保Ⅳ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第39集2012
- 33 『長野原一本松遺跡(6)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第40集2013
- 34 『坪井遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第7集 長野原町教育委員会2000
- 35 『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第12集 長野原町教育委員会2005
- 36 『町内遺跡Ⅴ』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集 長野原町教育委員会2005
- 37 『群馬県の中世城館跡』群馬県教育委員会1988
- 38 『西宮(1)・西宮岩陰遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第54集2017
- 39 『長野原町の遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集 長野原町教育委員会1990
- 40 『緑よみがえった町鎌原』あさを社 1928 上州路文庫⑥
- 41 『町遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第45集2015
- 42 『遺跡は今(24)』(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2016
- 43 『下田遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第52集2017
- 44 『上原Ⅰ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第46集2015
- 45 『林中原Ⅱ遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第47集2016
- 46 『林中原Ⅰ遺跡』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第43集2014
- 47 『尾坂遺跡(2)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第48集2016
- 48 『下湯原遺跡(1)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第59集2018
- 49 『上原Ⅲ遺跡(2)・久々戸遺跡(3)』ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第50集2017

※1～33、38、41～49の発行者は現(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団である。



第8図 林村絵図(明治6(1873)年『壬申地引絵図』群馬県立文書館所蔵より修正して作成)



第9図 林村絵図より下原耕地拡大図(明治6(1873)年『壬申地引絵図』群馬県立文書館所蔵より修正して作成)

第3章 発見された遺構と遺物

第1節 近世

1 A区1面調査概要

水田を中心に北東・南・西が畑となっていた。明治6(1873)年の『壬申地引絵図』『下原耕地』(群馬県立文書館所蔵)を見てもこの部分は水田(中田)として記載されていた。北東側の畑はAs-A降下後溝を掘って天地返しをして復旧を図っているのに対し、西隣接の畑ではその火山灰をすき込むことで畑の復旧を図っている。その他の畑ではサク切り後火山灰が降下したが、特に手を付けられずにそのまま放置されていたことが窺える。まだ復旧している途中で手付かずのまま泥流を被ってしまったとも考えられる。いずれにしてもこの周辺では火山灰降下後の3種類の状態の畑が確認された。畑は基本的に等高線に沿う東西方向にサクが切られていた。等高線に直交する南北のものはA区1面では1カ所も無かった。地山にたくさん入っている礫を石垣に積んで水平面を確保し、水田や畑としていることが分かる。しかし、それだけでは耕作で新たに出た礫は処理し切れずにヤックラとして寄せ集めているものと思われる。水田・畑の崖下に部分的に途切れる部分もあるが、ほぼ連続するヤックラが認められた。2号畑に代表されるように地山の岩盤や礫が露出しているところもあり、露出したままで畑として利用している部分も認められた。道・石垣・溝等は端境を巡るものであり、雨が降れば道も水が流れるし、溝も水が流れていない時には歩くこともあるだろう。主たる目的がどちらかに主眼を置き判断したが、明確な区別が難しい遺構もあった。

(1)水田

調査では1~4号の水田面が確認された。1号水田は細長く水田として成立するか否か些か疑問も残るものである。2号水田は西辺が短く東辺が長い台形、3号水田は南北に長い長方形、4号水田は東側が攪乱で壊されていたが道まで続くものと思われる。また泥流で流された

礫の痕跡が細長い凹地となって検出されたが、3号水田の4号畦畔に近い部分を見ると礫が明らかに東→西に動いているものがあり、流れとは逆に動いている。また東西方向だけでなく、北西から南東の方向を向く凹地もあり、単純に泥流が上流から下流ではなく、渦巻いていたり逆流していたことも考えられる。

1号水田(第12~14図、PL. 2・3)

4号石垣と9号石垣の間で確認されたものであり、東西12.5m×南北1.2mであり、非常に狭い範囲内である。長軸方位はN-77°-Eで、グリッド位置は48区-T~V 5、W 4・5である。北西側の3号溝から水を引き込んでいたと考えられる。水田としては幅が非常に狭く、北側は9号石垣で断ち切られるように終わっている。後に土圧で変形した可能性を考慮に入れても水を水平に保つために必要な水平面が少なく、どこまで水田として機能していたか些か疑問も残る。南側の4号石垣との間に畔は無く、ここにそのまま水を掛けるとほとんどが2号水田に流れ込んでしまう。3号畦畔の軸方位はN-14°-Wで、東側の2.7m×2.6mのほぼ方形の一段高くなっている部分はそれ以外に比べると比較的平坦に整えられており、育苗のための苗床としては機能するかもしれない。

2号水田(第12~14図、PL. 3)

4号石垣と5号石垣の間で2号畦畔と4号畦畔の間で確認されたものであり、東西16.5m×西端5.6m、東端10.5mであり、西が狭く東が広い台形状を呈する。水田の長軸方位はN-85°-Eで、グリッド位置は48区-S 2・3、T~V 2~5、W 3・4である。2号畦畔の軸方位はN-7°-Eで、南側が削平されていた。水田面は比較的水平に整えられていた。水は3号溝から1号水田を経由して引き込んでいるものと思われるが、水口が明確ではなく確定しない。4号畦畔の軸方位はN-16°-Wで、幅1m前後であり、南側1/3程の所に3号水田に水を廻すための水口を有する。畦畔の高さは確認時で

10～15cm前後であり、多少土圧で潰れていることを考慮してもあまり高いものではない。この畦畔は最低限水位を水平に保つために必要なものであり、土地を区画したり、土地所有者の違いを明示するようなものではないと考えられる。

3号水田(第12～14図、PL. 4)

8号石垣南5号畦畔と5号石垣の間で4号畦畔と6号畦畔の間で確認されたものであり、東西北端9.3m、南端8.5m×南北13.0mであり、南北に長い長方形を呈する。水田の長軸方位はN-16°-Wで、グリッド位置は48区-Q3～5、R・S2～6である。水田面は比較的レベルに整えられていた。西側の2号水田から4号畦畔の水口を通して水を掛け、5号畦畔南東コーナーの水口から4号水田に水を廻しているものと考えられる。5・6号畦畔は幅50～70cm程であり、若干ではあるが4号畦畔よりも狭い。5号畦畔の軸方位はN-70°-Eで、6号畦畔の軸方位はN-9°-Wである。いずれも高さは10～15cm前後で4号畦畔とほとんど変わらない。4号畦畔の北寄り部分に岩が乗っているが水田面に泥流で流された痕跡は無く、なおかつ地山部分にかなり多くの部分が隠れている訳でもない。地山に大形の礫や岩が顔を出している場合にはそれがあってもそのまま畔をぶつけて水田や畑として利用していることもよくあるが、この場合には北側から転がり落ちたものと考えられる。南側は北側に比べて水田面に礫が流された際の長い凹地となった傷が付いている。北側は石垣があったので泥流の動きが緩く、南側は反対に動きが激しかったことが窺える。

4号水田(第12・13図、PL. 4)

9号石垣南の1.5面の石垣と1.5面の7号石垣との間で6号畦畔の東側で確認されたものであり、東側2/3は攪乱によって失われていた。現存部分では東西北端(6.8)m、中央(7.8)m、南端(6.5)m×13.0mである。水田の軸方位はN-84°-Eで、グリッド位置は48区-O・P3～6である。水田面はかなり水平に整えられていた。西側の6号畦畔南西コーナーに水口を設け、そこから引水していることは分かる。排水は東側に攪乱が広がっており不明な点も多いが、東から南側に流れる2号溝に排水している可能性が考えられる。そのままだと水口から

取り入れた水が水田の中を廻ることなく流れてしまうので何らかの工夫があったと思われる。元々は北側だけでなく南側にも石垣が組まれ、その間を水田としていたことが分かる。石垣は傾斜地で地面を水平に保つための一つの工夫と言って良いものである。

(2)畑

調査では1～4号の畑面と1号復旧坑と2号復旧坑の部分でも一部確認された。またAs-Aをすき込んだことが分かる1号耕作地も確認された。広い意味では7面と捉えることもできる。1～4号畑は水田の西側から南側にかけて検出されたもので、少なくとも火山灰が降下した時点では畑全ての範囲でサクが切られていた訳では無い。これから耕作しようとしていた可能性も否定できないが、むしろ畑一枚全てが同時に耕作していない可能性があるのではないかと考えられる。また地山の礫や岩が露出している場所も多く、元々畑としては良い場所とは言えない。明治6(1873)年の『壬申地引絵図』「下原耕地」(群馬県立文書館所蔵)を見てもこの水田の周りには下畑が多いことが分かる。ここでは、調査時に畑としたものだけでなく、耕作地・復旧坑としたものも畑に関連が深いものとしてここで扱うこととしたい。

1号畑(第15・16図、PL. 8)

6号道の東側で1号耕作地の西側の間で確認された。6号道は北端で東に曲がり始めたところで確認できなくなっている。そのまま東へ曲がるのだとすれば7号道に連続する可能性もあり、仮にそうだとすれば1号畑は北東で3条確認されたサクのところまでということになる。その部分までで東西7.5m×南北15.0mである。サクの長軸方位はN-79°-Wで、グリッド位置は49区-B3～6、C・D2～4である。サク切りは等高線に沿う形で東西方向となっている。畝間(サクの中心と隣のサクの中心との間)は50cm前後の部分が多いが、狭い所では30cm、広い所では60cmとやや幅がある。南半部分にはサクがずれるヒコザクとなる部分もあり基準となった部分に違いが認められる。一般的に泥流下の畑では確認されることの多い平坦面は検出できなかった。中程と東北端との間にサク切りが確認できなかった部分がある。そこにはトレンチや攪乱部分もあり、明確ではないが、

第3章 発見された遺構と遺物

その割には北東端ではサクが確認されており、本来は続いていた可能性も否定できない。

2号畑(第17図、PL. 9)

2号溝の南側で確認された。サク切りが確認された範囲は東西向16.0m×南北9.7mである。サクの長軸方位はN-85°-Eで、西端の一部は長軸方位はN-58°-Wで、グリッド位置は38区-M~O25、48区-L~P1、M~O2である。サクは等高線に沿う形で東西方向に切られており、礫が露出している所では止まっているがその東側にも続いている。西端の2条は若干サクの方向が変わるので、東側とは違う区画があった可能性もある。畝間は約50cmであり、若干幅広いところはあるもののほぼ一定している。地山の岩盤や礫が露出しており畑としてはあまり状態は良くなかった。比較的平らであるもののサク切りが認められなかった部分があるが、結構広いので耕作しなかった可能性も考えられる。

3号畑(第15・16図、PL. 10)

1号耕作地南の傾斜地下で確認された。サク切りが確認された範囲は東西(8.0)m×南北(6.5)mである。サクの長軸方位はN-68°-Eで、グリッド位置は38区-X・Y25、39区-A25、49区-A1・2である。サクはほぼ等高線に沿う形で東西方向に切られており、東側がやや北を向く傾向がある。畝間はほぼ50cmであり、ほぼ一定している。僅かに北側に内湾する感じなど2号畑に類似している。中央部に南北に走る溝とされた所があるが、浅く不明瞭であった。

4号畑(第17図、PL. 11)

2号畑の西側で巨大な岩盤の露出した南側で確認された。サク切りが確認された範囲は東西(7.5)m×南北(1.8)mである。サクの長軸方位はN-21°-Wで、東側はN-26°-Eで、グリッド位置は38区-P~R25、48区-R1である。サクはほぼ等高線に沿う形で東西方向に切られており、東端がやや北を向く傾向がある。畝間はほぼ50cmであり、ほぼ一定している。僅かに北側に内湾する感じなど2号畑に類似している。

1号耕作地(第15・16図、PL. 11・12)

7号道の南側で2号水田の西側、1号畑の東側で確認された。規模は東西11.5m×南北14.5mである。長軸方位はN-16°-Wで、グリッド位置は48区-X・Y3~7、49区-A3~6である。地形は北から南に向かって緩やかに傾斜している。泥流直下の面では所々に火山灰がブロック状に確認することができた。これは他の畑のようにサクが切られた状態ではなく、As-A降下後それを土にすき込むことで畑として復旧がなされていた。覆った火山灰の量が少ない時に採られるやり方であり、溝を掘って天地返しするのはまた別の復旧の仕方である。

1号復旧坑(第18・20図、PL. 12・13・15)

調査区北東部の1号溝の西側で1号石垣・1号道の北で3号復旧坑の東側で確認された。全体としての範囲は東西14.0m×南北13.5mの範囲である。坑の長軸方位はN-10°-Wで、グリッド位置は48区H11~13、I10~13、J10~14、K11~13である。幅50~80cm×長さ3.5~8.4m×深さ0.30mの平行する坑が2段に配置される。坑と坑の間の掘り残し部分は0.30~0.50mであり、ほぼ同量か掘り返している部分の方がやや多い。その間には東西方向のサク切りの痕跡が残っていた。2号復旧坑では同じ東西方向であるのに対し、ここでは復旧坑と畑のサクとは直交していた。畑の畝間は50cm前後であり、他の畑とほぼ同様であった。西南端では復旧坑も無く、サクは少しだけ南側に曲がっている。

2号復旧坑(第19・20図、PL. 13~15)

調査区北東部の3号石垣の北側で3号復旧坑の西側で4号復旧坑の東側で確認された。坑の長軸方位はN-86°-Wで、全体としての範囲は東西14.0~15.7m×南北22.0mの範囲である。グリッド位置は48区L7~11、M~O7~13である。幅60~100cm×長さ14.0~15.7m×深さ0.30mの平行する坑が1段に配置される。坑と坑の間の掘り残し部分は0.10~0.30mであり、1号復旧坑よりもさらに狭い。1号復旧坑よりもさらに掘り返している部分が多い。3号石垣との間の掘り残し部分と坑の間には東西方向のサク切りの痕跡が残っていた。1号復旧坑では直交する南北方向であるのに対し、ここで

は復旧坑と畑のサクとはほぼ平行していた。畑の畝間は40～50cm前後であり、他の畑とほぼ同様であった。南端では復旧坑も無く、サクは少しだけ曲がっている。

3号復旧坑(第18・20図、PL. 15・16)

1号復旧坑と2号復旧坑の間で確認された。長さ15.3m×幅50～70cmで深さ約30cmである。坑の長軸方位はN-13°-Wで、グリッド位置は48区-K10・11、L11～13である。内部には無数の大小の角礫や円礫などが詰められており、1・2号復旧坑とは違う性格のものと考えることができる。地境に近いところの坑に耕作や復旧で出てしまった邪魔な礫を廃棄したものと捉えることができる。なおかつ1号復旧坑のように途中で切れる部分は無くそれと平行するものであり、その走行性からしてここまでが同じ畑で西側が隣の畑と考えられる。

4号復旧坑(第19・20図、PL. 16・17)

2号復旧坑の西端で確認された。長さ20.0m×幅(70～100)cmで深さ約30cmである。坑の西側は確認できていないが、ほぼ調査区の西端が坑の幅に近いのではないかと思う。坑の長軸方位はN-4°-Wで、グリッド位置は48区-O7～12である。内部には無数の大小の角礫や円礫などが詰められていた。1・2号復旧坑とは違う性格のものと考えることができる。3号復旧坑に類似する性格のものである。地境に近いところの坑に耕作や復旧坑で出てしまった邪魔な礫を廃棄したものと捉えることができる。なおかつそれと直交するものであり、その位置や南北方向の走行性からしてここまでが同じ畑でその西側が攪乱で調査されていないが、攪乱部分に西側の畑があったと考えられる。

(3)道

10本の道が確認された。いずれも水田や畑の地境を歩くためのものであった。石垣の上下を石垣に沿って走るものや畑の周りを巡るものであった。また、溝に沿うものもあった。1・2・4・5・9号の調査区東側の地境の道はその中では道幅も場所によっては1m近くになるなど通常の道幅50cmの倍近くの所もあった。この場所の道はいくつかがまとまってくることもあり、調査区の中では大きい方の道とは考えられる。しかし、地域の幹線

道路(幹道)と言えるような主要な道路ではない。

1号道(第21図、PL. 17)

1号石垣の北側に沿って確認された。西側で南下し、4号道に連続するのではないかと思われる。調査では幅約30～50cm、長さ約15.5mに亘って確認された。長軸方位はN-79°-Eで、西側ではN-12°-Eとなり、4号道とほぼ同じ走行性を示す。グリッド位置は48区-H10・11、I・J10、K9・10である。1号復旧坑(畑)の南側と1号石垣との間を歩く道と考えられる。

2号道(第21図、PL. 17)

1号石垣の南側に沿って確認された。西側で南下し、5号道に連続する可能性もあるのではないかと思われる。調査では幅は南側が確認できていないが、30～50cm前後か、長さ約10.5mに亘って確認された。長軸方位はN-75°-Eで、西側ではN-8°-Eとなり、5号道とほぼ同じ走行性を示す。グリッド位置は48区-H～K10である。1号石垣の下の南側を歩く道と考えられる。

3号道(第22図、PL. 17)

3号石垣の南側に沿って確認されたが、南側は攪乱で幅はほとんど確認できなかった。西側も攪乱で確認できていない。4号道にほぼ直行して連続する。調査では4号道との接続部で幅は約50cmで、長さ約8.0mに亘って確認された。長軸方位はN-87°-Wで、グリッド位置は48区-L6・7、M・N7である。石垣下の土地際を歩く道と考えられる。

4号道(第22図、PL. 18)

2号復旧坑の東側に沿って確認されたが、北側は調査区外で確認できなかった。南側も調査区外で近接する5号道や9号道との関係も明確ではない。1号道に連続する可能性は高いと考えられる。調査では幅は約50cmであるが、南端では1m近くになる。長さ約12.5mに亘って確認された。長軸方位はN-12°-Eで、グリッド位置は48区-K5～8、L6・7である。2号復旧坑東側の地境を歩く道と考えられる。

5号道(第22図、PL. 18)

4号道の東側に沿って確認されたが、北側は調査区外で確認できなかった。2号道に連続する可能性は高いと考えられる。調査では東側が調査区外のため幅は不明である。長さ約5.5mに亘って確認された。長軸方位はN-8°-Eで、グリッド位置は48区-K 6・7である。

6号道(第23図、PL. 18)

1号畑の西側に沿って南北方向に確認された。北端で東に曲がり始めるがその先は確認できていない。7号道に連続する可能性もあるのではないと思われる。調査では幅約30~60cm、途中攪乱を挟み長さ約11.5mに亘って確認された。長軸方位はN-8°-Eで、グリッド位置は49区-D 2~5である。北側の方がやや幅広く、南側は狭くなっている。畑の西側の地境を歩く道と考えられる。

7号道(第21図)

1号耕作地の北側に沿って若干南に曲がりながらも東西方向に確認された。西端で終わりその先の1号畑の北辺では確認できていない。東端も調査区外で確認できなかった。6号道は北端で東に曲がるので連続する可能性もあるのではないと思われる。調査では幅約30cm、長さ約9.0mに亘って確認された。長軸方位はN-71°-Eで、西側の曲がったところは、N-45°-Eである。グリッド位置は48区-Y 6・7、49区-A 6である。道としてはかなり幅狭いものであり、耕作のサク幅とほぼ同じくらいである。1号耕作地の北側の地境を歩く道と考えられる。

8号道(第23図)

3号畑の北側で東西方向に確認された。東端はヤックラで終わりその先は確認できていない。西端も礫部分で確認できなかった。調査では幅約50cm、長さ約7.0mに亘って確認された。長軸方位はN-65°-Eで、グリッド位置は49区-A~C 2である。本来は崖下の3号畑の北側の地境を歩く道であったと考えられるが、ヤックラや礫群でその先は確認できなくなっていた。

9号道(第24図、PL. 18)

2号溝の北側でその溝に沿う方向に確認された。南西端は溝の手前で終わっている。北東端は調査区外で確認できなかった。調査では幅約50cm、長さ約10.0mに亘って確認された。長軸方位はN-33°-Eで、グリッド位置は48区-K 5、L 3・4、M 3である。4号道に連続するものではないかと考えられる。4号水田東側を下に降りる2号溝沿いの地境を歩く道であったと考えられる。

10号道(第23図、PL. 9)

2号畑の南西側で部分的に確認された。南東端は調査区外、北西側はヤックラの少し手前でまででそれより先は確認できなかった。調査では幅約40cm、長さ約3.0mで極めて短いものであった。長軸方位はN-57°-Wで、グリッド位置は38区-O 25である。ヤックラで確認できなくなっていたが、2号畑際の岩盤との間を歩く道であったと考えられる。

(4)石垣

1号~5・8・9号の石垣が確認された。取り敢えず7基に分けたが、その流れからすると他の石垣に連続するものもあった。石の積み方はやや大形の礫を横に並べてその隙間に比較的細かい礫を詰めるものであり、横長の面を見せている部分も多く認められる。基本的に野面積みと考えられる。やや乱れる部分もあるが、面を整えているので野面積みでも布積みと考えられるものが多く、乱積みと考えられる部分は少ない。ただ基本的には邪魔な地山の礫を石垣に利用して土砂の流失を少なくしたものと考えられる。大形礫の間には小形の礫を配置しているが、後の攪乱の為に抜けている部分も多い。通常石垣でよく見られる裏込め部分は土となっており、小礫を人為的に詰めた部分は1号石垣を除き認められなかった。なお、当然の事かもしれないが、比較的小さい礫だけで隙間に上の石を落とし込んでいく落積み(谷積み)は一カ所も確認できなかった。この積み方は一般的に江戸時代でも1800年代以降、天明泥流よりも後、近現代の土木工事現場でも見られるものである。

1号石垣(第21図、PL. 18・19)

1号復旧坑の南側で1号道と2号道に挟まれる間で

確認された。調査では幅約50cm、長さ約14.0mの範囲で確認された。長軸方位はN-75°-Eで、南に曲がる西端はN-31°-Eである。グリッド位置は48区-H~J 10、K 9・10である。畑に造成する際に礫を積み上げて石垣としているものである。高さは東側の低いところで50cm弱、西側の状態の良いところでもせいぜい1m程度であり、あまり高いものではない。土があまり流れ出さない程度の高さと考えられる。石の積み方は大きめの角石や垂角礫を横に並べてその隙間に比較的細かい礫を詰めるものであり、野面積みと考えられる。面が比較的整っている部分もあるので野面積みでも乱積みというよりも布積みと考えて良いのかもしれない。なお、面の後ろ側にはすべてではないが裏込めに相当する部分に小礫が確認できる場所もあった。

2号石垣(第21図、PL. 20)

調査区北西部で7号道よりも約1.5m北の調査区北限で確認された。調査では幅約30cm、長さ約1.5mのごく短い範囲で確認された。長軸方位はN-64°-Eで、グリッド位置は48区-Y 7、49区-A 7である。高さは1mに満たないものであり、左右の地山から顔を出している大形の礫の間を埋めるために積んだもので、上からの崩落を防止するためと考えられる。使用している礫はいずれも円礫で1号石垣よりも小さく平たいものもある。積み方はやや大形の礫を横に並べてその隙間に比較的細かい礫を詰めるものであり、基本的に野面積みと考えられる。やや乱れる部分もあるが、野面積みの布積みなのかもしれない。地山の礫が顔を出していたり、石垣北側からの土の中に多量の礫が混じっていたりと裏込めに相当する部分に礫は多いが人為的に詰めた感じはない。

3号石垣(第22図、PL. 20)

2号復旧溝の南側で東西方向に4号道の手前まで確認された。幅約50cm、長さ約16.0mの長い範囲である。しかし、石垣としては西側の9号石垣に連続するものであり、そこまで入れて考えれば倍以上の長さはある。長軸方位はN-86°-Wで、グリッド位置は48区-L~P 7である。高さは50cm前後の低いものである。所々礫の抜けている部分もあり、あまり状態は良くなかった。積み方は基本的に野面積みと考えられる。やや乱れる部分も

あるが、野面積みの布積みなのかもしれない。なお、大形の礫を並べた後ろ側には裏込めに相当する小礫はない。

4号石垣(第25図、PL. 20・21)

1号水田の南側で2号水田の北側の間で東西方向に確認された。3号畦畔の所で方形を意識したように南側に張り出す。幅約30~40cm、長さ約14.5mの範囲である。間は開くが、東側の8号石垣に連続するものであり、そこまで入れて考えれば倍近くの長さはある。長軸方位はN-77°-Eで、グリッド位置は48区-T・U 5、V・W 4・5である。高さは30~50cm前後で1mを超えるような所はない。9号石垣に比べて角礫が多く、礫はやや小形のものが多い。礫を横に長い面を見せて積んでおり、積み方は基本的に野面積みと考えられる。比較的面としては整っており、野面積みでも布積みなのかもしれない。なお、大形の礫を並べた後ろ側には若干の礫が飛び飛びに見られる部分もあるが、裏込めはなかったが、一部に芯材が使用されていた。

5号石垣(第26図、PL. 21)

2号水田の南側で東西方向に確認された。崖側に石垣を積むことによって土砂の流失を抑えているものと考えられる。幅約50~60cm、長さ約17.5mの範囲である。4号畦畔の少し東側までであったが、元々は1.5面で検出された6・7号石垣に連続していたものと思われる。そこまで入れて考えれば3号石垣に対峙する部分までの間、倍近くの長さになる。長軸方位はN-87°-Wで、グリッド位置は48区-R~W 2である。南側の方が斜面が急なためか、4号畦畔南側のように高さは1mを超える部分もあり、4号石垣に比べるとかなり高い。9号石垣に比べて横に長い面を見せて礫を積んでおり、積み方は基本的に野面積みと考えられる。比較的面としては整っており、野面積みの布積みと思われる。なお、断面調査をした部分で見ると限りでは、大形の礫を並べた後ろ側はあまり間層は無く直ぐに土の層となり裏込めのように人為的に詰めたような多くの小礫はない。

8号石垣(第26図、PL. 22・23)

3号水田の5号畦畔の北側で東西方向に確認された。西側の4号石垣との間には若干の間が開くが、一連のも

第3章 発見された遺構と遺物

のと考えられる。幅約30cm、長さ約10.5mの範囲である。西側の4号石垣を入れて考えれば水田の南北両側に石垣を組んでその間が造成されていたということになる。長軸方位はN-72°-Eで、グリッド位置は48区-Q~T6である。やや隙間が多いところと面がよく揃っている部分はある。東側は礫が抜けている部分もあり、高さは30~50cm前後で、西側の高い所でも1mを超える部分はない。北側の9号石垣に比べ角礫が多く、小形のものが多い。北側に9号石垣があるので高く積む必要は無かったのかもしれない。比較的横に長い面を見せて礫を積んでおり、積み方は基本的に野面積みと考えられる。間に小礫を詰め込んでいない部分が多い。面としては整っている部分とそうでもない部分があるが、野面積みの布積みと考えられる。石垣を積んだ裏側には裏込めに相当する小礫は確認できなかった。

9号石垣(第27図、PL.23)

1号水田北側で東は3号石垣に向かって東西方向に、西は1号水田の所から北に曲がるが、その先は調査区外のため不明である。東側の3号石垣との間には若干の間が開くが、一連のものと考えられる。幅約50cm、長さ約40mの範囲である。東側の3号石垣を入れて考えれば水田の南北両側は石垣を組んでその間が造成されていたということになる。長軸方位はN-77°-Eで、北に向かう部分ではN-16°-Wである。グリッド位置は48区-O~Q7、R6・7、S・T6、U5・6、V5、W5・6、X6・7である。隙間が多く疎らなところと面がよく揃っている部分があるが、疎らなところが多い。高さは東側で30~50cm、西側の高いところでは1m前後あり、かなり大きい円礫を使用している部分もある。北からの土砂の流失を止めるためのものと考えられる。比較的横に長い面を見せて礫を積んでおり、積み方は基本的に野面積みと考えられる。大形礫の間は抜けている部分が多く、間の礫が抜けた可能性もあるが、最初から無かった可能性も否定できない。他の石垣に比べると長さは長い、状態は決して良くはない。石垣を積んだ裏側には裏込めに相当する小礫は確認できなかった。

なお、1.5面で9号石垣の東端の向かって南側の4号水田北側に幅約30~40cmで、長さ3.5mの範囲で10号石垣が確認された。8号石垣に連続するものなのか、造り

替える前の9号石垣の元となったものなのか、あまりに範囲が狭く判然としない。

(5)溝

1~4号溝の4条が確認された。調査区の範囲内は一部であり、そのほとんどは調査区外にあるものと考えられる。1・2号溝は調査区外から流れてきた水を調査区外に排出するものである。3号溝は水田に水を引き込む導水のためのものであり、この地区では少ない水田を耕作するためには重要なものである。いずれも土地の端境を通るものであり、調査区の縁辺で確認された。4号溝は4号水田北辺7号畦畔の北側で部分的に確認されたものであり、詳細については不明であるが、水田内部に水を廻すためのものかもしれない。

1号溝(第23図、PL.23)

調査区北東端、1号復旧坑の北東側で斜めに確認された。幅約1.5m前後、長さ(13.5)mである。長軸方位はN-54°-Wで、グリッド位置は48区-F12、G12・13、H13である。断面は浅いU字状を呈し、底面は比較的硬く、畑との間は10~20cm程度の段差しかない。底面には極薄く砂利が堆積しており、雨水も流れたかもしれないが、むしろ道として利用されていたものではないかと思われる。

2号溝(第24図、PL.23・24)

調査区南東部、3・4号水田の南側崖下で確認された。幅約50~80cm前後で、東側は1.5mと急に幅広くなる。長さ(33.0)mである。長軸方位は北東部でN-42°-E、中間の一番長いところでN-81°-E、南西に曲がった部分でN-26°-Eである。グリッド位置は48区-K4、L3・4、M2・3、N~Q2、R1・2である。断面はV字状を呈し、畑との間は10~20cm程度の段差しかないが、底面は人が歩くにはかなり狭い。

3号溝(第27図、PL.24・25)

調査区中央北部、9号石垣に沿ってその西側~南側で確認された。幅約30~50cm前後で、長さ約(38.5)mである。長軸方位は北東部でN-71°-E、西側の北に曲がったところでN-15°-Wである。グリッド位置は48区

－P・Q7、R6・7、S・T6、U5・6、V・W5、X6・7である。断面はU字状を呈し、周りとの間は20～30cm程度の段差しかない。水田耕作には重要な水路であるが、水の無い時には底面を人が歩くことも可能ではある。

4号溝(第27図、PL.25)

4号溝は4号水田北辺7号畦畔の北側で部分的に確認されたものであり、幅約50～60cm前後で、長さ約(6.9)mである。長軸方位はN-86°-Eである。グリッド位置は48区-O～Q6である。断面は浅いU字状を呈し、周りとの間は10～20cm程度の段差しかない。水田内部に水を廻すための水路かもしれない。

(6)ヤックラ

水田や畑の一段下がった崖下に部分的に途切れる部分もあるが、ほぼ連続するヤックラ群が認められた。東端の部分で幅約5.0m×長さ約8.8m、その一つ西側で幅約1.5m×長さ9.5m、西端の一番大きな部分で幅5.4m×長さ22mであった。全体を一つの大きなヤックラとすれば幅5.4m×長さ30m以上という巨大なものになる。石垣のように整然と組まれた様子は窺えない。この地域は地山そのものが岩盤であり、そこに堆積した土も多くの礫を含むものであり、耕作すれば礫はいくらでも出てくる。石垣に組むだけでは出てきた礫は使い切れずに寄せ集めて捨てたものと考えられる。礫の大きさは大小様々であり、ヤックラの中にも1mを超えるような大形のものも含まれる。なお、幅1.0m×長さ約9.0mに亘って確認された大形の岩は地山の岩盤であり、巨大なものであった。

A区1.5面調査概要

天明泥流直下の面の更に下を掘り下げた時点で検出されたものを1.5面とし、この1面の中で同時に扱うこととした。この段階で確認した遺構は6・7・10号石垣、1～3号暗渠とヤックラである。天明泥流で埋没する以前のものであるが、土層や直下の遺構との比較などからして中世までは遡らない近世前半期頃のものと考えられる。

(1)石垣

6・7・10号石垣の3基が確認された。6・7号石垣は西側の5号石垣に連続するもので、元々は3・4号水田の南側にあり、水田の土の流失を防止するために積まれたものと考えられるが、やがて土砂の流失により見えなくなったものと考えられる。それに加えて9号石垣の東端の向かって南側の4号水田北側に幅約30～40cmで、長さ3.5mの範囲で短い10号石垣が確認された。

6号石垣(第28図、PL.21・22)

3・4号水田の南側を掘り下げた1.5面調査時点で東西方向に確認された。1面調査時には既に埋没しており、平面的には確認できなかったものである。西側には5号石垣があり、元々は東側の7号石垣と共に一連のものであったと考えられる。崖側に石垣を積むことによって土砂の流失を抑えていたが、次第に上からの土砂が被り埋没したと考えられる。幅約30～50cm、途中の切れる部分も含めると長さ約7.5mの範囲である。東西全ての石垣を入れて考えれば3号石垣に対峙する部分までの間、倍近くの長さになる。長軸方位はN-83°-Eで、西側の曲がった部分はN-61°-Eである。グリッド位置は48区-P・Q3、R2・3である。南側の方が斜面が急なためか、西側では高さは1mを超える部分もあり、8号石垣に比べるとかなり高い。比較的横に長い面を見せて礫を積んでおり、積み方は基本的に野面積みと考えられる。比較的面としては整っており、野面積みの布積みと思われる。なお、断面調査をした部分で見える限りでは、大形の礫を並べた後ろ側に裏込めのように人為的に詰めたような多くの小礫はない。

7号石垣(第28図、PL.22)

3・4号水田の南側を掘り下げた1.5面調査時点で東西方向に確認された。1面調査時には既に埋没しており、平面的には確認できなかったものである。西側には6号石垣があり、元々はさらに西側の5号石垣と共に一連のものであったと考えられる。崖側に石垣を積むことによって土砂の流失を抑えていたが、次第に上から流れた土砂が被り埋没したと考えられる。幅約30cm、途中の切れる部分も含めると長さ約11.0mの範囲である。東西全ての石垣を入れて考えれば3号石垣に対峙する部分まで

第3章 発見された遺構と遺物

の間、倍近くの長さになる。長軸方位はN-83°-Eで、グリッド位置は48区-M~P3である。6号石垣に比べると面が揃っている感じはするが、それよりも高さは低く、1mを超える部分はない。比較的横に長い面を見せて礫を積んでおり、積み方は基本的に野面積みと考えられる。比較的面としては整っており、野面積の布積みと思われる。断面を切った場所を見る限りでは、削り込んでその手前に石を積んで地山との間に間層はあるが、その部分に土を詰め込んでいるだけで、裏込めに相当する小礫は確認できなかった。

10号石垣(第27図)

4号水田の北側で3号石垣の間を掘り下げた1.5面調査時点で東西方向に確認された。1面調査時には既に埋没しており、平面的には確認できなかったものである。北側の3号石垣を積み直す前のものであった可能性も考えられる。幅約50cm、長さ約3.7mのごく短い範囲である。長軸方位はN-85°-Wで、グリッド位置は48区-O・P7である。高さは50~60cmとかなり低い。比較的横に長い面を見せて礫を積んでおり、積み方は基本的に野面積みと考えられる。比較的面としては整っており、野面積の布積みと思われる。断面を切った場所を見る限りでは、土を詰め込んでいるだけで、裏込めに相当する小礫は確認できなかった。

(2)暗渠

1~3号暗渠の3基が確認された。1号暗渠は2号復旧坑を掘り下げた際にその西端に近い部分で確認されたもので北端で2号暗渠と分岐する。元々は2号復旧坑のある畑の区画の西端にあり、その畑を区画する部分に近いところにあったものと考えられる。3号暗渠は3号畑の東側で確認されたものでヤックラと共に地山の岩盤に礫を寄せたものと考えられる。

1号暗渠(第29図、PL.25・26)

2号復旧坑の西側の天明泥流直下の下を掘り下げた1.5面調査時に検出されたものであり、4号復旧坑と南半部は重複する。北端は確認できなかったが、現存長(25.0)m×幅(70~100)cmで深さ約30cmである。長軸方位はN-4°-Eであり、4号復旧坑に比べると少し東

側に傾いているが、概ね同じような場所にある。グリッド位置は48区-O7~13であり、多くの部分で重複する。内部には無数の大小の角礫や円礫などが詰められていた。土地の境界近くにある3・4号復旧坑とよく類似しており、4号復旧坑以前の同様な機能を持ったものであったと考えられる。

2号暗渠(第29図、PL.27)

1号暗渠の北端で二股に分かれる西側部分を2号暗渠とした。長さ(1.5)m×幅60cmで深さ約30cmである。長軸方位はN-25°-Wであるが、北端は確認できなかったためその先がどうなるか不明である。軸はもう少し東にぶれて北を向く可能性がある。グリッド位置は48区-O13である。内部には無数の大小の角礫や円礫などが詰められていた。土地の境界近くにある3・4号復旧坑とよく類似しており、4号復旧坑以前の同様な機能を持ったものであったと考えられる。

3号暗渠(第28図、PL.27)

3号畑の東側を掘り下げた際に確認されたものであり、南北約1m×東西1mの範囲に大小の礫がまとまっていた。東隣のヤックラとしたものと共に岩盤の手前に不要な礫を寄せ集めたものと考えられる。3号畑よりも下の面での検出であるが、そこに畑を作る際に出たものを集めたもので、その時期は中世までは遡らないのではないかと考えている。

(3)ヤックラ

3号畑の東側を掘り下げた際に確認されたものであり、南北約0.5m×東西1.5mの範囲に大小の礫がまとまっていた。西隣の3号暗渠としたものと共に岩盤の手前に不要な礫を寄せ集めたものと考えられる。3号畑よりも下の面での検出であるが、そこに畑を作る際に出たものを集めたもので、その時期は中世までは遡らないのではないかと考えている。

2 B区1面調査概要

3枚の畑と3本の道及び御堂跡地の高台の上で炭と石造物等の遺物が確認された。高台は周辺部に岩盤が露出しており、巨大な岩の上に堆積土が乗っている状態と考

えられる。畑は高台の下で東西方向のサクが切られるもので、2号畑だけは南北の方向で極狭い範囲内のものであった。道は北から降りてきたものが、調査区北端で3本に枝分かれするもので、1号道は東側の畑に降りるもの、2号道は高台に登るもの、そして3号道は高台手前を登らずに西に向かうものであった。5カ所の炭化物が集中する部分があった。高台中央の平坦地の周辺の北西部2カ所、北東部1カ所、東部2カ所で認められた。その周辺部ではAs-Aの堆積が認められる部分もあった。五輪塔や宝塔などの石造物の部品は若干地形的に低い北西部に集中していた。

(1) 畑

1～3号の3カ所の畑を確認した。高台の東側の一段低い部分で1・2号畑、高台の北側のやはり一段低い部分で3号畑が確認された。1号畑は比較的大きい面積を調査したが、平坦面は確認できなかった。2号畑は1号畑の中の西側の岩盤寄りでごく狭い範囲で確認されたもので他の畑と違い南北方向のサク切りであった。大きい畑とは別の目的の畑と考えられる。3号畑は高台の北の3号道の北側で狭い範囲で確認したものであるが、東西のサクの間に人が歩ける程度の空白部分があり、東西2枚の畑と考えることもできる。

1号畑(第32図、PL. 30～32)

高台の岩盤の東側で確認された。東側は攪乱で畑1枚全体は確認できていない。東西の幅(18.5)m×南北の長さ(30.3)mの範囲で、グリッド位置は36区-N22～25、O～Q21～25、R・S22～25、46区-O～Q1～4、R2～4である。畝間は50～60cm、サクは東西方向、北端は等高線に平行するが、南端は等高線に対して約60°傾く。北側1/3はやや乱れるが、中程から下は比較的綺麗に畝間は整っている。しかし、南側1/3はほんの僅かではあるが、畝間の方向と幅がずれる部分があり、耕作者が違ったのか、耕作時が違ったのか、差が認められる。中央部からやや南側の西端の岩盤の直ぐ下には2号畑が確認された。

2号畑(第32図、PL. 30・32・33)

高台の岩盤の東側の1号畑の西端部分で確認された。

東西の幅3.0m×南北の長さ4.0mの極限られた範囲で、グリッド位置は36区-R・S24・25である。若干西に傾くものの南北方向にサクが切られており、東西方向の1号畑とは異質なものである。南辺と東辺の直交する部分はその範囲を区切るものと考えられる。1号畑は長く同じようなサク切りがなされており、同じ種類の作物を沢山作る畑に対して、2号畑は範囲はごく僅かであり、サク切りの方向も変えており、別なものとして意識している。もしかしたら当時の家屋からはやや離れているものの、野菜の苗床や自宅で消費するような野菜を栽培するような場所と考えられる。いずれにしても他の区画が大きく長いサク切りをする畑とは違うものである。ただし、畝間は50～60cmで、その点では1号畑と類似する。

3号畑(第33図、PL. 33～35)

高台の北の3号道の北側部分で確認された。東西の幅(16.0)m×南北の長さ(3.5)mの範囲で、グリッド位置は46区-U3、V・W2・3、X1、Y1・2である。東西方向にサクが切られているが、中間にサクの切られない空白の部分が70～80cm程あり、西側7.0m、東側7.5mである。両側とも攪乱で端は確認できていない。間の空白部分を人が通る踏み分け道と考えて、2枚の畑と捉えることもできるかもしれない。畝間は60～70cmあり、1・2号畑よりもやや広い。サク幅自体も若干ではあるが広い感じがする。

(2) 道

調査区北端から3つに分岐する1～3号道が確認された。1号道は東側の1号畑に降りていくためのものであり、ごく短い畑への降り口と考えられる。2号道は高台部分に登って行くためのものであるが、途中から急斜面を避けて東側に回り込みながら登る道である。3号道は高台の下を西側に走るもので崖下の3号畑際を通るものである。

1号道(第34図)

調査区北端から東側の1号畑に降りていくためのものであり、極短い畑への降り口と考えられる。調査では幅約50cm、長さ約4.0mに亘って確認された。長軸方位はN-62°-Wで、グリッド位置は46区-R・S3である。

2号道(第34図、PL. 34・35)

調査区北端から高台部分に直線的に登って行くためのものであるが、途中から傾斜がきつくなるため東側に回り込みながら登る道である。調査では幅約50~60cm、長さ約25.5mに亘って確認された。長軸方位はN-36°-Eで、グリッド位置は46区-S 2・3、T・U 1・2、36区-T 24・25、U 23~25である。

3号道(第33図、PL. 34・35)

調査区の北端から高台の下を西側に走るもので崖下の3号畑際を通るものでほぼ直線的である。調査では幅約50~60cm、長さ約25.5mに亘って確認された。長軸方位はN-69°-Eで、グリッド位置は46区-S・T 3、U 2・3、V 2、W・X 1・2、Y 1である。

(3)炭化物集中部

5カ所の炭化物が集中する部分があったが、高台中央の平坦地の周辺の北西部、北東部、東部で認められた。その周辺部ではAs-Aの堆積が認められる部分があった。埋没土は炭化物を多く含む黒褐色~褐色土である。建物の外側で何かを燃やした際の炭が残ったものと考えられる。建物があったと想定される平坦な部分には炭化物の集中は認められない。堆積はいずれも薄く表面に近い部分に炭が多い。3号炭化物は若干掘り凹めてから燃やしているが、それ以外はほとんど凹めずにその場所で燃やしたものと考えられる。地山の土の影響か、炭に比べて焼土はほとんど残っていなかった。

1号炭化物(第35図、PL. 37)

高台中央の平坦地の東部で確認された。やや不定形な楕円形を呈する。規模は長軸1.9m×短軸1.0m×厚さ0.02mである。長軸方位はN-25°-Eで、グリッド位置は36区-U 22・23である。表面に近い部分だけの浅いものである。

2号炭化物(第35図、PL. 37)

高台中央の平坦地の東部で確認された。やや不定形な楕円形を呈する。規模は長軸3.1m×短軸1.5m×厚さ0.04mである。長軸方位はN-60°-Eで、グリッド位置は36区-U・V 23である。表面に近い部分だけの浅い

ものである。

3号炭化物(第35図、PL. 37)

高台中央の平坦地の北東部で確認された。やや不定形な円形を呈する。規模は長軸1.5m×短軸1.5m×厚さ0.24mである。長軸方位はN-6°-Eで、グリッド位置は36区-V 24・25である。表面に近い部分に炭化物が多いが、他のものよりもやや深さがある。

4号炭化物(第35図、PL. 38)

高台中央の平坦地の北西部で確認された。やや不定形な楕円形を呈する。規模は長軸1.8m×短軸1.3m×厚さ0.02mである。長軸方位はN-56°-Wで、グリッド位置は46区-W・X 24である。表面に近い部分だけの浅いものである。

5号炭化物(第35図、PL. 38)

高台中央の平坦地の北西部で確認された。やや不定形な円形を呈する。規模は長軸1.0m×短軸0.9m×厚さ0.03mである。長軸方位はN-49°-Eで、グリッド位置は36区-X 24である。表面に近い部分だけの浅いものである。

第2節 中・近世

1 B区2面調査概要

礎石建物1棟、畑1カ所、土坑1基、焼土遺構7基が確認された。礎石建物は下田観音堂が移転した跡地の調査区西側の高台の上で、畑は東側北部で、土坑は東側の南半で、焼土遺構は西側の調査区南部で1基、それ以外は東側の1号土坑周辺であった。西側の遺構と東側の遺構は同じ2面目での調査であるが、同じ土層が連続している訳でも無く、必ずしも同時期とは限らない。場合によると下田観音堂建て替え前の建物だとすると礎石建物の方がやや新しい可能性もある。

(1)礎石建物

調査区西側の御堂の跡地で1棟のみ確認された。高台の岩盤の上に乗る礎石建ちの建物である。礎石が抜かれ

栗石しか残っていない所もあった。礎石全体で見ると一般的な観音堂と比べるとかなり規模の大きな建物である。詳細については下記で検討する。

1号礎石建物(第38図、PL. 39~44)

グリッド位置は36区-V~Y22~24で、長軸方位はN-69°-Wである。規模は2間(6.86m)×3間(8.94m)である。一般的な観音堂は2間(3.60m)×2間(3.60m)の方丈の建物であり、それに人が歩ける程度の縁側や廂などが付くことが多い。移転前の下田観音堂も北東辺と南東辺に縁側が付いて1辺4.2~4.3mの規模の建物であった。調査で確認されたこの建物はそれに比べるとかなり大きい。敢えて建物の中から同じ規模の範囲を抜き出せば、S5とS11、S11とS10、S10から垂線を下ろしたS3とS5の交点に囲まれた方形の部分となる。しかし、その間に礎石はなく、2間分を飛ばしていることになる。S2とS11では栗石のみで礎石は確認出来なかった。他のところでは基本的に比較的扁平な自然礫を加工せずに礎石としていた。礎石と礎石の間は広いところでS10とS11の間の394cm、狭いところでもS10とS2の間の176cmであり、1間約180cmとするとおよそ前

者は2間分、後者は1間となり、東側は1間の縁または廂が付く建物と考えることもできる。移転前の下田観音堂は御堂に納められていた開眼供養した時の奉納札によれば、建物は天明三(1783)年に流失し、寛政四(1792)年に再建されたことが分かっており、それ以前の建物の可能性もある。しかし、礎石の在り方からすると建物の規模が大き過ぎること、方形ではなく東西に長い長方形になることなどから単なる御堂としては異質な感じは否めない。他からやや離れた高台の上に1棟のみの礎石立ち建物であり、かなり特殊な建築物であったことが想起される。八ッ場ダム地域文化財調査会編長野原町2013年発行『長野原町の文化財調査報告書I』によれば、移転前の下田観音堂には嘗て南西側の石垣との間に下屋があり、「春彼岸の一週間御堂に集まり念仏を唱え、下屋で「おこもり」を交代で行った」ということである。今回の調査でも丁度南側に大小の礫が並ぶように配置される部分があり、そうした建物の痕跡かもしれない。なお、建物範囲内出土の土器類は建物とは直接関連しない時期のものと考えられる。

礎石建物の時期は天明泥流以前であることは間違いはないが、江戸前期までで中世までは遡らない可能性もある。

第4表 B区西2面礎石建物

	位置グリッド	礎石No	枝番	長さ cm	幅 cm	礎石形状	次との間 cm	礎石間	間隔 cm	
1号礎石建物	36-V~Y22~24	S1		32	26	円形扁平礫	280	S14との間	580	
S2とS11では栗石のみで礎石は確認出来なかった。そのため、距離は空白部分の中心部で測定した。他のところでは基本的に比較的扁平な自然礫を加工せずに礎石として使用していた。建物内のS7~S9とS13は扁平な礫を取り上げたものだが、地山にも礫が入っており、一般的な地山の礫よりも扁平ではあるが、直接建物と関連しない可能性も完全には否定できない。礎石と礎石の間は広いところでS10とS11の間の394cm、狭いところでもS10とS2の間の176cmであり、1間約180cmとするとおよそ前者は2間、後者は1間となり、東側は1間の縁または廂が付く建物と考えることもできる。この場所には調査前には下田観音堂が建っており、その前身的な建物の可能性がある。他からやや離れた高台の上に1棟のみの礎石立ち建物であり、特殊な建築物であったことが容易に想起される。なお、建物範囲内出土の土器類は建物とは直接関連しない時期のものと考えられる。		S2	1	34	32	方形扁平礫	406	S10との間	176	
	長軸方位		2	22	20	円形扁平礫				
	N-69°-W		3	34	22	楕円扁平礫				
	重複		S3	1	30	22	円形礫	110	S5との間	552
	無し		栗石	2	26	24	楕円扁平礫			
	規模			3	24	18	円形礫		S12との間	894
	2間(686)×3間(894)			4	22	18	三角形礫			
	形状			5	34	16	楕円扁平礫			
	東西にやや長い長方形、北西コーナーは地形が急に落ち込むため確認出来なかった。			6	20	18	楕円形礫			
			S4		46	28	楕円扁平礫	526	S3との間	110
			S5		30	28	円形扁平礫	302	S11との間	418
			S6		28	24	楕円扁平礫	200	S12との間	408
			S7		50	32	楕円扁平礫	130	S9との間	280
			S8		40	38	円形扁平礫	210	S11との間	150
			S9		34	22	楕円扁平礫		S5との間	208
		S10		28	22	円形扁平礫	394	S15との間	364	
		S11	1	14	10	円形礫	328	S14との間	232	
		栗石	2	22	18	楕円形礫		S1との間	684	
			3	16	12	円形礫				
			4	20	14	楕円形礫				
			5	10	10	円形礫				
			6	18	10	楕円形礫				
			7	14	8	楕円形礫				
			8	8	8	楕円形礫				
			9	18	10	楕円形礫				
		S12		40	30	方形扁平礫	260	S6との間	408	
		S13		40	40	楕円扁平礫	140	S11との間	170	
		S14		36	30	三角扁平礫		S1との間	580	
		S15		28	28	楕円扁平礫		S1との間	180	

(2) 畑

調査区北東部で1カ所のみ確認された。サクは等高線に直交した南北方向のもので、ごく狭い範囲で部分的な短いものであった。

1号畑(第37図、PL. 39・40)

調査区北東部で確認された。東西の幅(4.5)m×南北の長さ(1.7)mの範囲で、グリッド位置は46区-O・P3である。南北方向にサクが切られている。非常に狭い範囲でサクの長さも短く、これで終わりなのか、もっと続くのか、全体の範囲は不明である。畝間は40~50cm程であり、やや狭めである。確認できた範囲があまりに狭いので何とも言えないが、自家用野菜を栽培するような畑と考えて良いものであろうか。サクは上からの山砂によって埋没しており、時期は天明泥流以前、江戸前期までは遡ることはほぼ間違いないが、下湯原遺跡(中沢・松村他2018)でも畑を始めとする遺構が何度か類似した山砂を被っており、単独の山砂の時期を特定するのは極めて困難であり、中世まで遡るか否かは確定できない。この畑の近くから馬下歯が1点出土している。

(3) 土坑(第50・51図、PL. 47・49)

調査区東側の焼土が集中する部分から1基のみ確認された。この1号土坑内の上層から石臼の破片が、下層の北部から石製丸軋が出土した。2・3号掘立柱建物内に位置することから、違う面で調査したが、焼土と共に掘立柱建物と関連する可能性も否定できない。

(4) 焼土遺構

7基の焼土部分が確認されたが、1号焼土は調査区西側の南の大形礫脇で、2~7号焼土は調査区東側の1号土坑周辺で確認された。1号焼土は下に炭化物で上に焼土が乗るもので、2~7号焼土は下が焼土で上に灰や炭化物が乗るものである。前者は別の場所で焼かれた土や燃え残りを捨てた可能性もあるが、後者はある程度の期間ある程度の強さで火を焚いたことにより穴の底が赤変していると考えられるものである。2~7号焼土は位置的にまとまっており、1号土坑も含め、4面で検出された掘立柱建物群とは重複する位置関係にある。調査では建物群は下の4面調査の際に検出されたものであるが、

これらの建物内の炉跡など何らかの関連性があるものと考えられるのではないかと考えることもできるのではないかと。

1号焼土(第40図、PL. 45)

調査区西側の南の大形礫脇で確認された。規模は長軸0.69m×短軸0.53m×深さ0.07mである。長軸方位はN-89°-Eで、グリッド位置は36区-X22である。円形が二つ付いた双子形を呈する。焼土は表面の部分のみであり、その下は炭化物・焼土ブロックを多量に含む褐色土と白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む黒褐色土であった。上の焼土は良く焼けていた。炭や灰は面としては確認できなかった。

2号焼土(第39・40図、PL. 45)

調査区東側の1号土坑の北東隣で確認された。規模は長軸1.20m×短軸1.02m×深さ0.08mである。長軸方位はN-40°-Eで、グリッド位置は46区-O1である。焼土は底面の部分のみであり、その上に炭層や灰層が堆積していた。最も上の層が焼けていた1号焼土とは対照的である。南西側に焼土が一部飛び出すのが、それを除いて考えれば隅丸方形に見えなくもない。通常の炉跡に比べると規模的には一回り大きい気もするが、周りの灰や炭は後で広がったとすれば、掘立柱建物内部の炉跡のように捉えられなくもない。

3号焼土(第39・40図、PL. 45)

調査区東側の1号土坑の南西部で確認された。規模は長軸1.00m×短軸0.66m×深さ0.13mである。長軸方位はN-43°-Eで、グリッド位置は36区-P25である。不整形の楕円形を呈する。南西側がやや深く底面がよく焼けていた。その上に灰層を挟んで再び焼土が堆積していた。断面を見ると堆積の状況は2号焼土に類似する。隣接する4号焼土と合わせると2号焼土とほぼ同規模になるので、一体のものとして捉える方が良いのかもしれない。

4号焼土(第39・40図、PL. 45・46)

調査区東側の1号土坑の南西部で確認された。規模は長軸0.70m×短軸0.68m×深さ0.08mである。長軸方位はN-30°-Wで、グリッド位置は36区-P25である。南東側が飛び出す不整形であり、特定の形を取らない。

南東側が若干深く、底面がよく焼けていた。その上に炭層が堆積していた。隣接する3号焼土と合わせると2号焼土とほぼ同規模になるので、一体のものとして捉える方が良いのかもしれない。

5号焼土(第39・40図、PL. 46)

調査区東側の1号土坑の西部で確認された。規模は長軸0.72m×短軸0.68m×深さ0.20mである。長軸方位はN-61°-Wで、グリッド位置は46区-P1である。西側が飛び出す不整形であり、特定の形を取らない。底面がよく焼けていた。その上に灰や炭の層が堆積していた。規模は違うが、堆積の状況は6号焼土に類似する。

6号焼土(第39・40図、PL. 46)

調査区東側の1号土坑の西部で確認された。規模は長軸0.66m×短軸0.30m×深さ0.20mである。長軸方位はN-19°-Wで、グリッド位置は46区-P1である。北側が膨らむ不整形な楕円形であり、瓢箪形に近い。底面がよく焼けていた。その上に灰や炭の層が堆積していた。規模は違うが、堆積の状況は5号焼土に類似する。

7号焼土(第39・40図、PL. 46)

調査区東側の1号土坑の西部で確認された。規模は長軸0.96m×短軸(0.36)m×深さ0.20mである。長軸方位はN-74°-Eで、グリッド位置は46区-P1である。南側が切られており不明であるが、楕円形を呈するものと思われる。底面がよく焼けていた。その上に灰や炭の層が堆積していた。

2 B区3面調査概要

東側で土坑3基、ピット4基、西側で土坑6基、ピット13基、合わせて土坑9基、ピット17基が確認された。土坑9基の内西側の3基は中世の古銭や骨が出土しており墓坑と考えられる。

(1)土坑(第42~46図、PL. 50・52~55)

東側で3基、西側で6基の計9基が確認された。東側の3基は比較的小形の楕円形で浅い。西側の6基の内3基からは中世の古銭や骨が出土しており、墓坑と考えられる。12号土坑は1基だけ西側に離れており、形もやや

歪むものであるが、それ以外の5基はいずれも2面の礎石建物と重なる位置に入ってくる。それらは一定の間隔を置いて纏まっており、古銭や骨が出ていないものも含めて墓になる可能性はある。ここでは、調査において墓坑と特定できた下記の3基だけ個別に取り上げることとする。規模は長軸1.5m前後×短軸1m前後で深さ50~60前後とほぼ共通している。外径は隅丸長方形か楕円形であり、礫で囲まれた内部の形はいずれも隅丸長方形である。人を埋葬する内部施設の広さは14号土坑が広く、次いで17号土坑で16号土坑が一番狭い。

14号土坑(第44図、PL. 52・53)

調査区西側で他の墓坑と共に確認された。規模は長軸1.64m×短軸1.01m×深さ0.64mである。礫内側の内部施設の大きさは長軸0.88m×短軸0.60mである。長軸方位はN-5°-Eで、グリッド位置は36区-W24である。形状は隅丸長方形で大量の礫が中に詰められていた。内部に詰められていた礫を取り除くと穴を掘ってから周りに礫を並べていたことが分かった。北側にはやや大きめの礫を用い、南側にはやや小ぶりの礫を配していた。北部から人骨破片と元祐通寶1点、洪武通寶2点、淳化元寶1点の計4点が、さらに南西部から元祐通寶1点の総計5点の中世以前の古銭が出土している。古銭には繊維が付着しているものがあり、袋に入れられ首に掛けられていた可能性もある。骨は薄い破片が多く頭部破片であり、また古銭は胸に近い所に置くことが多いことを考えると頭部を北にする北枕で顔を西(西方極楽浄土)に向けて葬られた可能性が高い。被葬者は30代~40代の女性であると考えられるが、老齢の可能性もある。

16号土坑(第45図、PL. 54)

調査区西側で他の墓坑と共に確認された。規模は長軸1.36m×短軸0.90m×深さ0.40mである。礫内側の内部施設の大きさは長軸0.60m×短軸0.40mである。長軸方位はN-3°-Eで、グリッド位置は36区-V・W24である。形状は楕円形でやや大形の礫が中に詰められていた。内部に詰められていた礫を取り除くと穴を掘ってから周りに礫を並べていたことが分かった。礫は北から西、南までで東側は一部間が開く部分があった。南部から細長い人骨が出土しており、足の骨と考えられる。頭部破

第3章 発見された遺構と遺物

片は出土してないが、南側出土の骨が足であり、動かされてないことを前提で考えれば、頭を北にする北枕であった可能性がある。なお、古銭は出土していない。

17号土坑(第46図、PL. 54・55)

調査区西側で他の墓坑と共に確認された。規模は長軸1.48m×短軸0.98m×深さ0.50mである。礫内側の内部施設の大きさは長軸0.74m×短軸0.52mである。長軸方位はN-19°-Eで、グリッド位置は36区-W23・24である。形状は隅丸方形で大形の礫が中に詰められていた。内部に詰められていた礫を取り除くと穴を掘ってから周りに礫を並べていたことが分かった。北辺には大きめの礫を用い、南側にはやや小ぶりの礫を配し、一部間が開く部分もあった。北部から天禧通寶1点、開元通寶1点、元符通寶1点、元豊通寶1点の計4点の中世以前の古銭が出土している。骨は出土していないが、古銭は胸に近い所に置くことが多いことを考えると頭部を北にする北枕であった可能性が高い。頭の向きは不明である。

(2)ピット(第41図、PL. 47・48)

東側で4基、西側で13基の計17基が確認された。東側の15号ピットのみ西側に離れているが、それ以外は土坑のある位置から東側にあった。いずれも円形もしくは楕円形である。規則的に特に並ぶようなものではない。西側のピットは東側のものよりもやや小形のものが多く、109号ピットだけやや不整形の楕円形で西側にかなり外れた位置にある。土坑群南東部のピット群は北辺と西辺は3基ずつL字には並びそうな配置になるものもあるが、掘立柱建物とするには穴が足りない。いずれにしても何らかの構造物として把握できるものは無かった。

3 B区4面調査概要

B区東側の北部で確認された竪穴建物1軒を除き、土坑・ピット類には伴う遺物が無いものが多く確定は難しいが、調査面や土層から中世に属するものとして扱った。この面の土坑は12基、ピットは163基であるが、その内1～6号までの掘立柱建物の柱穴と考えられるものが、合計77基ある。その内訳は、土坑1基、ピット76基である。柱穴としたものを除くと土坑11基、ピット87基となる。

(1)掘立柱建物(第48図、PL. 57・58)

調査時には分からなかったが、整理時に6棟の掘立柱建物を確認した。1棟は南西側にやや離れた位置にある。平面的な並びだけでなく、深さや穴の傾き・土層、図面や写真などから総合的に検討して掘立柱建物としたが、柱穴そのものは重複しているものは少ないものの、建物5棟が重複する位置にあり、別の捉え方ができるかもしれない。

1号掘立柱建物(第49・51図、PL. 59・60)

東西に長い建物で1～6号掘立柱建物の中で最大のものである。面積は約53.77㎡である。柱穴も他の建物に比べると大きく深いものが多い。2面で確認された3・4号焼土が内部に位置するので、炉跡の可能性も考えられる。なお、21・22号土坑は西部に位置し、確定はできないが、伴っていたとしてもおかしくはない。

2号掘立柱建物(第50・51図、PL. 59・60)

2号掘立柱建物は方形に近いが、やや南北に長い建物で1号掘立柱建物に次ぐ大きさのものである。面積は約51.70㎡である。柱穴は深いものが多いものの、小さいものが多い。北列は柱間が狭く、中間列との間が離れており、柵列と捉えることもできるかもしれない。2面で確認された3・4号焼土が内部に位置するが、柱穴に近く、炉跡としては除外して考えたい。その他の2・5～7号焼土はある程度柱との距離は保たれているので炉跡になる可能性は考えられる。なお、2面で確認された1号土坑は埋没土上層から石臼の大形破片が、下層からは丸軋が1点出ており、丸軋は地鎮的な意味合いで入れたものとして捉えることもできるのではないかと考えている。22号土坑は西辺のラインと重複するので、同時期とは考えにくい。7・18号土坑は北辺に近いが、伴っていたとしてもおかしくはない。

3号掘立柱建物(第52・53図、PL. 60・61)

3号掘立柱建物は東西に長い長方形に近い建物と思われるが、北東隅と南西隅、つまり鬼門と裏鬼門が欠けている。面積は約45.49㎡であるが、その部分まで入れて考えると約54.70㎡となる。元々そこに柱穴が無かったのか、土坑で分からなかったのは確定できないが、平

安時代からその部分をわざと欠く場合もあり、元から無かった可能性も考えられなくはない。2面で確認された焼土の内、2号焼土は柱穴と重複し、5号焼土も柱に接触する位置にあるので炉跡としては除外して考えたい。その他の3・4、6・7号焼土も柱穴に近いので、適切な位置にあると言えるものは無い。なお、2面で確認された1号土坑は位置的には2号掘立柱建物に伴うものと考えるのが妥当かもしれないが、3号掘立柱建物に伴っていたとしてもおかしくはない。

4号掘立柱建物(第54・55図、PL. 61・62)

南北に長い長方形の東側に廂が付く建物と思われるが、廂南東隅の角には柱穴は無く、その代わりに本体との間に1本の柱がある。本体部分で約36.48㎡、廂部分は約7.81㎡で、両者を合わせると約44.29㎡となる。2面で確認された焼土の内、3・4号焼土は建物内部に位置し、柱穴からも一定の距離が保たれており、炉跡になる可能性も考えられる。その他の2・5～7号焼土は柱穴に近過ぎたり、外に外れているので除外して考えたい。なお、21号土坑は西辺のラインと重複し、22号土坑は西辺に近過ぎるので伴うものとは考えにくい。北よりも東

に傾く建物であり、5号掘立柱建物に近い傾きを持つので、2棟で対になるようなものとも考えることもできるかもしれない。

5号掘立柱建物(第55図、PL. 63)

南北に長い長方形の建物と思われるが、1間半弱×2間の6棟の中では最も小形の建物である。面積は約8.02㎡である。位置はこの1棟だけ南西側に離れており、内部に焼土も無く、物置き小屋のような簡単な作りの付属建物と考えられる。傾きの近い4号掘立柱建物と対になるようなものとも考えることもできるかもしれない。

6号掘立柱建物(第56図、PL. 63)

東西に長い長方形の建物と思われるが、1間×2間の小形建物である。面積は約15.51㎡である。東西の棟柱がやや外側に出る。特に西側は柱2本分くらい出る。位置は他の掘立柱建物と重複する。内部に3・4号焼土が入るが、3号焼土はやや柱穴に近い。小形建物であり、焼土が伴わないとしても不思議ではない。物置き小屋のような付属建物と捉えることができるかもしれない。

第5表 B区西4面掘立柱建物一覧

	位置グリッド	土坑・ピット	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	長軸方向	形状	次との間 cm		cm	
1号掘立柱建物 若干西側が狭く、東側が広い。柱穴は東側がやや浅く、西側が深い傾向がある。73Pと144Pがやや外側に外れるが、柱は建物側を向き、桁位置では相欠きし易いものと思われる。2面の3・4号焼土がほぼ中央に位置し、調査時の所見ではその周辺部は硬化しており、地床炉跡の可能性も考えられる。	46区N~Q1、 36区N~Q24・25	20土	58	50	23	N-20° -E	楕円形	520	41Pとの間	1034	
		62P	64	60	31	N-12° -W	楕円形	240	141Pとの間	1034	
		長軸方位	11P	40	40	39	N-50° -W	円形	322	165Pとの間	528
		N-79° -E	73P	36	32	50	N-40° -W	隅丸方形	208	144Pとの間	550
		重複	170P	28	22	45	N-74° -E	隅丸方形	280	178Pとの間	508
		2・3・4・6号掘立柱建物 規模	141P	44	30	44	N-85° -E	楕円形	240	41Pとの間	484
		2間(520)×4間(1034)	142P	32	22	55	N-81° -W	楕円形	244		
		形状	41P	44	38	62	N-78° -E	楕円形	250		
		東西に長い長方形	178P	48	46	50	N-79° -W	楕円形	222		
			144P	52	40	44	N-29° -E	楕円形	340		
		165P	48	42	46	N-43° -W	楕円形	222			
2号掘立柱建物 西列と東列、北列と南列にも距離の差はほとんど無い。角は直角に近い。174Pは外側に、49Pと167Pなどやや内側にずれが、並びは比較的良好。北列は間隔が110~168cmと狭くなっている。2面で丸轆が出土した1号土坑は中央やや東側にあり、その両側の2・5～7号焼土は地床炉または囲炉裏の可能性も考えられる。柱穴は北列の両角は深い。1号掘立柱建物に比べると柱穴の径は一回り小さいものが多い。平行する南2列は一番狭い所でも130cm以上あるので廂と考えたい。	46区O~Q1、 36区O~Q24・25	136P	30	30	46	N-53° -W	円形	575	64Pとの間	745	
		58P	28	26	32	N-13° -E	円形	170	47Pとの間	255	
		長軸方位	64P	38	36	25	N-20° -E	円形	240	169Pとの間	694
		N-1° -E	49P	56	38	28	N-76° -E	楕円形	265	47Pとの間	130
		重複	167P	38	28	42	N-64° -W	楕円形	194	46Pとの間	140
		1・3・4・6号掘立柱建物 規模	169P	26	24	42	N-76° -E	円形	180	31Pとの間	744
		2間(745)×3間(694)	174P	38	28	31	N-22° -W	楕円形	230	31Pとの間	564
		形状	46P	34	34	28	N-33° -E	円形	230	177Pとの間	586
		全体としては南北にやや長い長方形。	47P	40	34	32	N-28° -W	楕円形		39Pとの間	584
			31P	34	30	54	N-15° -E	円形	132	136Pとの間	692
			177P	32	26	8	N-34° -W	楕円形	144	167Pとの間	726
			34P	36	36	26	N-62° -W	円形	168	46Pとの間	600
			39P	26	24	14	N-52° -W	円形	138	49Pとの間	714
		40P	30	26	42	N-46° -W	楕円形	110			

第3章 発見された遺構と遺物

	位置グリッド	土坑・ピット	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	長軸方向	形状	次との間 cm		cm	
3号掘立柱建物 鬼門と裏鬼門の角柱が検出できなかったのは、南西隅には21土坑があり、その底面とほぼ同じ深さで壊された可能性もある。鬼門の角には外側に128P・138Pがあり、位置を外側にずらして立てられていた可能性も否定できない。柱穴は西列が径は小さいが深いものが多い。1号掘立柱建物の柱穴に比べると径は一回り小さいものが多い。2～7号焼土が建物と重複するが、2・5号焼土は柱に近過ぎるので、伴う可能性は低い。さらに残りの3・4・6・7号焼土も柱と柱の中央にあるものはなく、必ずしも適切な位置にあるとは言えない。	46区0～Q1、 36区0～Q24・25	137P	34	24	29	N-10°-W	楕円形	350	160Pとの間	836	
		60P	30	28	37	N-53°-W	楕円形	80	54Pとの間	210	
		長軸方位	65P	38	36	30	N-32°-E	隅丸方形	214	137Pとの間	430
		N-88°-W	69P	42	28	16	N-88°-E	楕円形	400	162Pとの間	640
		重複	168P	28	28	33	N-33°-E	円形	86	175Pとの間	650
		1・2・4・6号掘立柱建物。1号掘立柱に後出する。	98P	30	30	18	N-56°-W	円形	394	168Pとの間	85
		規模	54P	40	32	12	N-29°-E	楕円形	164	69Pとの間	104
		3間(650)×3間(836)	179P	40	34	33	N-80°-E	楕円形	426	69Pとの間	268
		形状	133P	40	34	36	N-85°-W	楕円形	260	168Pとの間	205
		全体としては東西にやや長い長方形。	157P	26	24	32	N-24°-W	円形	208	29Pとの間	408
			160P	28	26	58	N-50°-W	円形	246	29Pとの間	200
			124P	32	30	35	N-1°-E	円形		137Pとの間	590
			29P	24	22	57	N-47°-W	円形	230	169Pとの間	644
			175P	28	26	23	N-30°-W	隅丸方形	414	124Pとの間	230
			162P	48	38	30	N-78°-E	楕円形	240	179Pとの間	380
		138P	23	20	47	N-29°-E	円形	30	65Pとの間	626	
		128P	26	22	31	N-68°-E	楕円形	150			
4号掘立柱建物 東列は廂もしくは目隠し状の扉の柱の可能性もある。南東隅の柱は検出出来なかったが、149Pは74Pと76Pの中間にあり、建物との関連性は完全には否定できない。156P～66P列と159P～51P列の間はおおよそ120cm前後であり、南北の間を繋ぐ空間があった可能性も考えられる。3・4号焼土は建物の北半中央に位置し、この建物に伴う炉跡の可能性も否定できないが、それ以外のものは北列のラインと重複したり、建物の外側であり、この建物に伴う可能性は極めて低い。南西に位置する5号掘立柱建物は、主軸がほぼ近い方向性を示し、柱穴の規模や形状にも類似性が認められるので、同時に存在した可能性がある。	46区P1、36区0～Q24・25	76P	70	58	35	N-39°-W	楕円形	240	57Pとの間	498	
		66P	20	14	9	N-52°-E	楕円形	258	48Pとの間	126	
		長軸方位	57P	32	28	36	N-26°-E	楕円形	112		
		N-65°-W	55P	28	24	15	N-49°-W	楕円形	250	74Pとの間	630
		重複	48P	30	26	27	N-25°-E	楕円形	118	156Pとの間	540
		1・2・4・6号掘立柱建物。1号掘立柱に後出する。	51P	32	22	29	N-16°-W	楕円形	260	166Pとの間	208
		規模	74P	54	40	24	N-74°-E	楕円形	530	76Pとの間	186
		2間(690)×3間(640)	126P	28	22	43	N-75°-E	楕円形	248	139Pとの間	106
			159P	36	28	36	N-12°-W	楕円形	124	156Pとの間	130
		形状	158P	24	22	25	N-68°-W	円形	132		
		全体としては東西にやや長い長方形。	176P	24	18	40	N-57°-W	円形	28	51Pとの間	232
			166P	30	30	44	N-1°-W	隅丸三角形		51Pとの間	208
			156P	22	20	29	N-40°-E	円形	268		
			123P	42	34	23	N-35°-E	楕円形	100	57Pとの間	690
			122P	40	36	3	N-60°-E	楕円形	340	55Pとの間	490
		97P	46	38	36	N-57°-E	円形	150	57Pとの間	262	
		149P	42	32	48	N-60°-E	楕円形	582	76Pとの間	90	
		56P	38	36	20	N-88°-E	円形		57Pとの間	60	
5号掘立柱建物 今回の掘立柱建物群では最も西側に位置し、北西の柱と岩との間はほとんど無い。非常に小形の掘立柱建物であり、簡易な建物であり、建物内に焼土も無い。主たる建物に付属する物置小屋のようなものかもしれない。4号掘立柱建物と約100cmの間を置き、北列がほぼ平行するので、同時期の可能性がある。	36区Q・R24	139P	44	38	46	N-55°-E	楕円形	250	3Pとの間	340	
		6P	28	22	20	N-66°-E	楕円形	86			
		長軸方位	3P	26	22	28	N-20°-W	楕円形	82	94Pとの間	236
		N-37°-E	2P	30	26	9	N-50°-W	楕円形	78		
		重複	1P	24	22	27	N-16°-W	円形	78		
		無し	94P	24	20	20	N-87°-E	楕円形	186	153Pとの間	340
		規模	7P	34	30	31	N-79°-W	楕円形	160		
	1間(236)×2間(340)	153P	28	26	33	N-59°-E	円形	30	139Pとの間	220	
	形状	154P	32	26	43	N-55°-E	楕円形	220			
	全体としては南北に長い長方形。										
6号掘立柱建物 小形の簡易な掘立柱建物と考えられる。125Pは棟持柱と考えたが、北列と南列の6本の柱でも建物としては成立する。1～4号掘立柱建物と重複するので、同時期には存在しない。また、5号掘立柱建物とはかなり建物の軸がぶれるので同時存在とは考えにくい。第1次で報告された中の3号掘立柱建物などとの同時性を検討する必要があるかもしれない。	36区0・P24・25	50P	32	28	9	N-53°-W	楕円形	200	70Pとの間	346	
		53P	38	34	38	N-16°-W	楕円形	136	158Pとの間	426	
		長軸方位	70P	38	32	23	N-12°-W	楕円形	230	99Pとの間	426
		N-86°-E	71P	46	38	39	N-45°-W	楕円形	190	43Pとの間	366
		重複	99P	46	44	12	N-54°-E	楕円形	204	148Pとの間	364
		1・2・3・4号掘立柱建物。	125P	38	26	24	N-55°-W	楕円形	182		
		規模	148P	26	24	42	N-42°-W	円形	226	50Pとの間	426
	2間(426)×2間(364)	43P	36	30	59	N-75°-E	楕円形	200			
	形状										
	東西に長い長方形で西棟持柱が外側に出る。										

(2) 土坑(第42・43図、PL. 51・52・55～58)

4面東側の土坑は12基が確認されたが、その内の20号土坑は1号掘立柱建物の柱穴としてのものであり、それを除けば11基となる。1号竪穴建物の南側から1～6号掘立柱建物の周辺で確認されたものが多い。楕円形や円形と考えられるものが多い。遺物は7号土坑から永楽通寶が1点出土しており、中世後半頃と考えられる。

(3) ピット(第47・48図、PL. 57・58)

ピットは163基確認されたが、掘立柱建物の柱穴と考えられる76基を除くと87基となる。1～6号掘立柱建物を含む南北周辺で多く確認された。その中にはまだ柱穴として拾いきれていないものも含まれている可能性があるかもしれない。

なお、この調査区は関俊明・飯森康広他2003報告の『久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』の「下原遺跡Ⅱ区」に隣接しており、両者を合わせて考えることで掘立柱建物や土坑・ピットとの関係も分かっていくことがあるものと思われる。したがってその事についてはまとめ部分で再度検討したい。

第3節 平安時代

1 B区4面調査概要

明確に平安時代と言えるものはB区東側の北部で確認された竪穴建物1軒であった。周りの土坑・ピットでこの建物と同時期のものは不明であり、平安時代の集落の全体像は不明である。

(1) 竪穴建物

B区東側の北部で確認された住居跡と考えられる竪穴建物1軒のみであった。

1号竪穴建物(第58～60図、PL. 64～69)

位置 グリッド名 46区-P～R 3・4

主軸方位 N-16°-E

重複 無し

規模 長軸4.94m×短軸4.70m×深さ0.35m

形状 隅丸方形、僅かに横長。

埋没土 暗褐色土。上層はやや灰色を帯びるが、下層は鉄分を含み茶色味を帯びる。下層には拳大の亜角礫を多く含む。

掘り方 底面からの深さ0.10m 底面は南東部1/4と北壁南西コーナー寄りを僅かに掘り残し、壁際はほとんど一段下げられている。1号ピット、1号床下土坑、7号ピットにかけては掘り残しがあり、一段高くなっている。カマド手前の2号炉は長径65cm×短径45cm×深さ3cm。

1号床下土坑は長径71cm×短径64cm×深さ26cm。

2号床下土坑は長径55cm×短径48cm×深さ15cm。

3号床下土坑は長径78cm×短径65cm×深さ25cm。

5号ピットは長径51cm×短径45cm×深さ20cm。

6号ピットは長径27cm×短径26cm×深さ18cm。

7号ピットは長径75cm×短径68cm×深さ43cm。

8号ピットは長径18cm×短径14cm×深さ13cm。

9号ピットは長径75cm×短径60cm×深さ14cm。

床面 カマド手前から建物中央にかけて硬化面が確認された。中央やや南寄りでは1号炉が確認されたが、規模は長径65cm×短径45cm×深さ4cmであり、灰の上に焼土が乗っていた。

貯蔵穴 掘り方調査時に確認されたカマド両脇の2・3号土坑がその可能性が高いものである。

柱穴 床面調査時に確認された1～4号ピットが柱穴に相当するものと考えられる。

1号ピットは長径42cm×短径39cm×深さ23cm。

2号ピットは長径50cm×短径45cm×深さ27cm。

3号ピットは長径35cm×短径27cm×深さ26cm。

4号ピットは長径42cm×短径32cm×深さ26cm。

周溝 明確には確認出来なかった。

遺物出土状態 ほぼ全体から出土した。礫は焼けているものが多く、中にはヒビ割れているものもあり、東壁付近にまとまっているものが目立った。

カマド 位置 北壁中央やや南寄り確認された。

規模 全長1.70m・最大幅1.00m・焚き口幅0.55m

袖 有り。両袖に礫使用。左袖は竪穴内に50cm、右袖は30cm入る。

煙道 竪穴壁外に0.7m出る。南側は板状礫使用。

遺存状態 天井は無かったが、比較的良く残存していた。右袖には一部円礫を、他は角礫または亜角礫を使用して

第3章 発見された遺構と遺物

構築されていた。掘り方では燃焼部とその手前に84cm×66cm×10cmの浅い穴が開く。

遺物出土状態 燃焼部手前から須恵器杯の破片等が出土したが、あまり目立ったものはなかった。

備考 所属時期 土師器や須恵器、灰釉陶器などから10世紀前半頃と考えられる。

第4節 縄文時代

1 A区2面調査概要

竪穴建物2軒と土坑3基・ピット13基が確認された。竪穴建物は1軒が所謂敷石住居で、もう1軒が竪穴住居である。時期は前者が中期末～後期前半、後者が後期前半頃と考えられるもので、平面形は前者が多少柄の部分で乱れてはいるが、柄鏡形なると考えられるもので、後者が楕円形を呈するものである。炉は両者とも石囲い炉で方形を呈するもので、礫の内面は被熱を受け薄赤く変色し、ヒビ割れているものもあった。

土坑は、埋没土の状況などから中世以前～縄文時代の間に入るものと思われるが、そのほとんどが縄文時代に属するものと考えられる。遺物は前期～晩期までであるが、その中で主体となるのは中期末加曽利E式～後期前半のものであり、恐らく遺構の時期はその間に限定されるのではないかと考えられる。前期頃から若干人の動きが確認されるようになり、それが中期末頃に竪穴建物を造り始め、後期前半頃までは続いたが、その後は利用されることは減ったことが窺える。

ピットは13基検出されたが、いずれも1・2号竪穴建物の内部もしくはその周辺であり、同建物の柱穴もしくはそれに関連したものとし、建物とは別の機能を有する遺構とは考えていない。

遺物分布図を見ると竪穴建物と重複する位置に遺物は意外と少なく、その近くではあるがややずれる位置に集中部が認められる。埋甕も遺物が集中する場所に含まれており、それが建物内であったのか、建物の近くに遺物を廃棄したのか、それとも別の建物があったのか。あくまでも一つの可能性としてではあるが、遺物が集中しているその場所に何らかの遺構があった可能性も否定できない。現場調査においては確実なものだけ住居(竪穴

建物)として捉えることができた。同時期に1軒だけの集落は考えにくいので、遺物出土状況の写真も含めて検討すると1号建物の南側に2軒、2号建物の東側に2軒、計4軒の建物があったとしても差ほど不思議ではないのではないかと考えられる。ただし、堆積土が薄く掘り込みも浅い。なおかつ遺構外からも多くの遺物が出土するので遺構内の土と遺構外の土との見分けは極めて難しい事は事実であるが。

なお、平成15・16年の調査では多く弥生土器が出土(麻生敏隆他2007『下原遺跡Ⅱ』八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第389集)し、何らかの遺構があった可能性もあるが、今回の調査範囲では弥生時代の遺物は1点しか無く、同時期の遺構は確認されていない。

(1) 竪穴建物

1号竪穴建物(第62～64図、PL. 70～74)

位置 グリッド名 48区-M・N11、N10

主軸方位 N-15°-E

重複 無し

規模 長軸(3.40)m×短軸3.30m×深さ0.12m

形状 円形又は八角形?+張り出し=柄鏡形?

埋没土 白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を大量、φ1～10cmの亜角礫・黒褐色土を少量含む暗褐色土。水分を含むと粘性のある土であり、しまりは良い。

掘り方 底面からの深さ0.10～0.15m 敷石を配するために白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を多量、小礫・暗褐色土を少量含む建物埋没土よりもやや明るくしまりのある黒褐色土により埋められていた。底面は比較的平坦となっていた。27～30号の4基のピットを検出した。北半の1～4号ピットに比べて径が大きく、やや様相が違う感じがするものである。南側を出入口とすると、入口の対ピットになる可能性も否定できない。

27号ピットは長径39cm×短径28cm×深さ9cm、楕円形。

28号ピットは長径34cm×短径30cm×深さ30cm、楕円形。

29号ピットは長径41cm×短径37cm×深さ30cm、楕円形。

30号ピットは長径47cm×短径42cm×深さ20cm、楕円形。

底面 北半を中心に扁平礫が敷かれており、その間と北辺には小円礫が配置され、平坦に整えられていた。北半

では1～4号ピットが検出された。

1号ピットは長径20cm×短径16cm×深さ13cm、楕円形。

2号ピットは長径25cm×短径20cm×深さ18cm、楕円形。

3号ピットは長径30cm×短径29cm×深さ33cm、円形。

4号ピットは長径30cm×短径26cm×深さ17cm、楕円形。

遺物出土状態 住居の割には大形破片等特徴的なものは確認できなかった。

炉 位置 建物のほぼ中央で確認されたが、四方に石を配して組んだ方形の空間を炉として使用していた。南側を入口とすると真正面の位置に当たる。礫内面は火熱を受け薄赤く変色していた。石を外した下の土坑北壁は火熱を受け赤く変色していた。炉は全体としては比較的良く残っていた。

規模 長径0.43m×短径0.37m×深さ0.22m

遺存状態 建物北半は比較的残りは良いが、南半は残りが悪く、扁平礫は本来の位置から動いているものが多いと考えられる。南側に入口が付く柄鏡形になる可能性が高いと思われるが、確認時点で石が露出しているような状況であり、非常に浅く残りは決して良くない。北半で検出されたような柱穴は南半では確認出来なかった。

備考 所属時期 縄文時代後期前半の土器片等が検出されたので、同時期と考えられる。

2号竪穴建物(第65図、PL.74～76)

位置 グリッド名 48区-T・U4

主軸方位 N-63°-E

重複 3面の8・9・12号土坑等に後出する。9号土坑と重複する部分の方形石囲い炉の石が1点動いており、もしかしたら、同土坑の方が新しい可能性も否定できない。8・12号土坑が確認された位置では柱穴が確認されていないのは土坑の方が新しく壊されていた可能性も完全には否定できない。

規模 長軸3.32m×短軸3.10m×深さ0.24m

形状 楕円形

埋没土 白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を多量、明黄褐色砂質土・炭化物粒を少量含む黒褐色土。しまりは良い。

掘り方 底面からの深さ0.07～0.09m 黒褐色土ブロックを多量に含む黄褐色砂質土により埋められていた。掘り凹めた後で床面を整地している可能性も考えられる。

底面 礫は炉の南側に1点、炉の北東側に1点の計2点

が検出された。柱穴になる可能性のあるピットは炉を挟み1.80～2.10mの間隔で、炉の北側に20・21号ピット、東側で13・14号ピット、南西側で9号ピットの計5基が検出された。いずれもφ30cm以下で、深さも15cm未満の浅いものばかりであった。

9号ピットは長径28cm×短径20cm×深さ10cm、楕円形。

13号ピットは長径29cm×短径24cm×深さ14cm、楕円形。

14号ピットは長径23cm×短径16cm×深さ9cm、楕円形。

20号ピットは長径28cm×短径23cm×深さ9cm、楕円形。

21号ピットは長径28cm×短径23cm×深さ6cm、楕円形。

なお、第3面で建物の北～東壁と重複する位置で12・16・22号ピットが、南壁のやや外側で8・10・11号ピットが検出された。調査時点では直接関連は無いものとしたが、建物と重複したり、近接していることから何らかの関連があるものの可能性も完全には否定できない。

遺物出土状態 建物全体から散在的に出土したが、大形破片が纏まるなど特徴的な出方はしなかった。

炉 位置 建物のほぼ中央で確認されたが、三方の石は残っており、当初は石を組んだ方形の石囲い炉であったことが分かる。南側に離れた1点は炉に使用されていたもので、下には第3面で検出された9号土坑があり、その関連で動いた可能性も考えられる。礫内面は火熱を受け薄赤く変色していた。

規模 長径0.43m×短径0.37m×深さ0.22m

遺存状態 石囲い炉があったので、建物として認識し、小ピットの内側でラインを引いたが、居住施設としてはやや規模が小さいかもしれない。建物跡の周りで検出されたピット群を含めた範囲を住居とすると一回り大きくなる可能性も考えられる。

備考 所属時期 縄文時代中期末から後期前半の土器片等が検出されたので、同時期頃と考えられる。

(2)土坑(第69図、PL.76)

土坑は3基が確認されたが、3基とも2号竪穴建物の北から西の近くで見つかった。明確に伴う遺物は無く時期確定は難しいが、埋没土の状況から中世以前～縄文時代のものと考えられる。周辺から中世の遺物はほとんど無く、遺物は縄文土器が多く、縄文時代になる可能性は高いものと思われる。

(3) 埋甕

埋甕は3基が確認されたが、いずれも中期末～後期初め頃のものであった。風化が進み肌面が荒れているものが多く、文様が良く見えないものが多かった。また、現場での調査では周りを掘り下げたりして掘り込みの確認に極力努めたが、水が出たりしてかなり困難であったが、1号埋甕だけでなく、いずれにも掘り込みがあった可能性は考えられる。場合によってもっと大きい掘り方であった可能性もある。

1号埋甕(第68図、PL. 79・80)

位置 グリッド名 48区-S 6

主軸方位 N-6°-W

重複 無し

規模 長径37cm×短径36cm×深さ14cm

残存状況 胴部下半～底部にかけて残存。約10点程にヒビ割れていた。3基の中では比較的状态の良い方であった。土器の下に地山との間に3～4cm程度の間層があり、その層は礫をあまり含まない均質な黒褐色土であった。土器を設置するために土器よりも一回り大きい穴を掘り置いたものと考えられる。

備考 所属時期 土器文様から縄文時代中期末～後期初め頃と考えられる。

2号埋甕(第68図、PL. 80・81)

位置 グリッド名 48区-N・O 8・9

主軸方位 N-5°-W

重複 無し

規模 長径57cm×短径41cm×深さ20cm

残存状況 主体となるのは胴部下半～底部にかけてであるが、南側に胴部上半～口縁部もあり、同一個体と考えられる。肌面はかなり荒れており、胎土に混入した小礫や砂が目立ち、文様は不明瞭であった。土器の下には間層は無く、直接地山となっていた。土器内部には礫をあまり含まない均質な黒褐色土が堆積していた。1号埋甕の下にあった土よりもやや暗いものであった。土器を設置するために土器が収まるように隙間のないように穴を掘ったものと考えられる。

備考 所属時期 土器文様は不明瞭であるが、土器の胎土などから縄文時代中期末～後期初め頃と考えられる。

3号埋甕(第68図、PL. 81)

位置 グリッド名 48区-O 9

主軸方位 N-11°-W

重複 無し

規模 長径22cm×短径17cm×深さ16cm

残存状況 胴部下半～底部にかけて残存。3基の中ではもっとも状態は悪い。土器の下に地山との間の間層は確認出来なかった。図面を製作した段階では土器の内部に土は無かった。土器を設置するために土器とほぼ同じ大きさの穴を掘り設置したのと考えられる。

備考 所属時期 土器文様から縄文時代中期末～後期初め頃と考えられる。

2 A区3面調査概要

土坑9基とピット20基を検出した。1・2号土坑を除くほとんどが2号竪穴建物の周辺からである。ピットは特に同建物の近辺に集中する傾向が認められる。小形のもが多く、柱穴などこの建物と何らかの関連がある可能性が考えられる。これらの遺構に共伴する遺物は必ずしも出土している訳では無いが、土層などから中世以前～縄文時代のもと考えられる。ここでは縄文時代の竪穴建物や包含層を調査している同じ面で確認されたことから縄文時代の中で報告することとした。

(1) 土坑(第69・70図、PL. 77・78)

土坑は9基が確認されたが、若干離れる6・7号の細長いものを除くと5基とも2号竪穴建物と重複するかその近くから見つかった。形態は楕円形のもの一カ所が飛び出るやや不整形のものがある。明確に伴う遺物は無いが、埋没土の状況から中世以前～縄文時代のもと考えられる。周辺から中世の遺物はほとんど無く、遺物は縄文土器が多く、縄文時代になる可能性は高いものと思われる。一般的に竪穴建物の周りでいくつかの土坑が確認されることが多く、これらの土坑も2号竪穴建物と何らかの関連がある可能性が考えられる。

3 B区調査概要

縄文時代後期前半頃の縄文土器片は若干出土したものの、それに属する遺構は無かった。B区では4面に亘る調査をして多くの土坑・ピットが確認されたが、その所

属時期については多くのものが中世で、近世初期や古代以前まで遡るものはほとんど無いのではないかと考えている。

第5節 出土遺物

1 中・近世

陶磁器類と石製品が出土したが、いずれもB区からのものがほとんどである。

土器類(第72・73図、PL. 92)

在地系の内耳鍋と片口鉢、天目茶碗などがあるが、特に目立つものは内耳鍋の破片である。断面樽型に近い在地系の信濃型とされるものであり、長野原八ッ場地区ではよく出土する器形である。反対に同じ群馬県でも南部地域ではほとんど見かけることの無いものである。口縁部の作りや立ち上がり方、底部から胴部の立ち上がり方などからすると概ね中世でも後期の16世紀代と考えられるものが多い。中には、もしかしたら15世紀後半まで遡る可能性のあるものも存在する。同じ16世紀代でも後半よりも前半に入るものの方が多いのではないかと考えられる。

石製品(第83～85図、PL. 99)

石製品は丸軋1点、石臼3点、凹みのある石1点、五輪塔の空風輪7点、火輪2点、水輪5点、地輪3点、宝塔の相輪1点、礫1点、礫片2点で計26点が出土した。目立つのは石臼と五輪塔の部品18点である。石臼は1号土坑から上臼2点、下臼1点が出土した。摺り合わせ面が上臼が丸く凹み、下臼が盛り上がる東国に多い形態のものであった。挽き手は上臼の側面に凹み孔を彫り込むものであった。石臼は上臼も下臼もすべて粗粒輝石安山岩製で、いずれも現存部分では6分画で1分画の中に3～4本の溝を刻むものであった。目のかなり粗い粉挽き臼と言えようか。下臼の直径は復元推定すると29cm前後で、重量は完形品ならば10kg強のものであった。下湯原遺跡での平均的な大きさの30cmよりも僅かに小さめではあるが、ほぼ平均的な大きさのものということができる。1号土坑からは他に丸軋が1点出土したが、非常に丁寧

に滑らかになるように仕上げられている。通常ベルトに装着するための潜り孔は2対で左右と上の3カ所あるものが多いが、こちらには左右の2カ所しかない。石材は白っぽいやや濁った半透明の光沢の出る石であり、見るからに石英質の硬い石である。飯島静男氏により正珪岩?と鑑定された石である。どこの産地の石なのか気になるところである。(正珪岩は約200万年前に堆積した大阪層群の中に入っている礫であり、少し透明感がある白いチャートのような石であり、白っぽい珪岩と言え様な石である。元々は大陸内部の砂漠で生成されたものが日本に移動したものと考えられている。大阪層群は大阪周辺だけでなく、日本各地で見られる地層である。)

173号ピットから出土した石製品は楕円形の礫の真ん中に凹みを作り出したものであり、全体が良く研磨されている。縄文時代からあるものであるが、古墳時代や奈良・平安時代でも見かけることがある。土器など時代が特定できる遺物がないため確定できないが、ここで取り上げた。石材は粗粒輝石安山岩である。

宝塔は相輪部分が1点出土したのみである。笠より下が無い。全体に傷が多く認められ、頂部宝珠の突起が欠失している。石材は粗粒輝石安山岩である。下田観音堂には移転する前に埋没していない宝塔があり、同観音堂と共に移転したということで、元々は宝塔は複数組み存在したものと考えられる。

五輪塔は風輪空輪7点、火輪2点、水輪5点、地輪3点の計17点出土し、その内図化したものは風輪空輪3点、火輪1点、水輪2点、地輪2点の計8点である。石材は水輪1点が溶結凝灰岩であるが、それ以外は全て粗粒輝石安山岩である。空輪風輪部分は横の沈線も太く、頂部の突起部分も擦れて短くなっているものの本来は上に長く飛び出していたものと考えられる。かなり型式化した形態となっており、天明泥流(1783年)よりも古い時期ではあるが、中世ではなく近世に入ってからのもと考えられる。火輪は図化したものの中央部の凹み内部には棒状工具の痕跡が良く残っている。厚みはそれほどでもないが、軒が厚く、僅かに反りも認められる。若干の屋弛みもある。底面に反りはほとんど無く直線的である。水輪は図化したものは2点あるが、溶結凝灰岩製のものはやや小ぶりであり、最大幅が中央よりもやや上に位置する。それに対して粗粒輝石安山岩製のものは平たく潰れ

た感じで側面はソロバン玉状を呈する。断面を見る限りでは上面と下面に差はほとんど無い。側面に「T」字状の刻みがあり、地輪にも同様なマークを有するものがあるので、そのマークの部分で合うように目印として付けているものと思われる。地輪は図化したものは2点あるが、幅19cm弱のものと20cmのものがあるが、前者は11cmと薄く、後者は15cm弱とやや厚い。大きさ以上に厚みに差がある。厚い方の側面には「T」字状の刻みがある。いずれも上面は僅か凸状に出るが、下面は凹状に凹む。いずれも表面に工具痕が良く残る。石材は粗粒輝石安山岩である。

金属器(第87・88図、PL. 100・101)

古銭は唐銭1点(4.5%)・宋銭10点(45.5%)・明銭6点(27.3%)・寛永通寶(新寛永)4点(18.2%)、不明銭1点(4.5%)、計22点の出土があったが、そのうち77.3%が中世以前のもので、18.2%が江戸期の新寛永通寶であった。中世銭はB区の墓坑と考えられる土坑やその周辺から出土しているものが多い。新寛永通寶も同区高台の下田観音堂跡地からの出土品が多い。

中世の古銭で外径が最大のもは元祐通寶の2.52cmである。それ以外の外径は2.50cm未満であるが、2.48cmあるものが5点、2.47cmが1点ある。外径の平均値は2.41～2.42cmである。最小のものは洪武通寶の2.15cmであり、平均値と比べてもかなり小さい。内径は最大のもは2.28cmの天禧通寶であるが、次いで永樂通寶の2.14cmである。内径2.00cm以上のものはそれも合わせて8点(36.4%)である。2.00cm未満のものは8点(36.4%)である。内径の平均値は1.94cmであり、下湯原遺跡で出した平均値と全く同じである。最小のものは洪武通寶の1.61cmであり、この個体は外径も2.23cmと平均値2.42cmと比べても2mm程小さい。しかし、厚さは0.19cmで重さは4.1gと最も重い。厚さの平均値は0.15cmで、最大のもは0.19cmの洪武通寶背一銭である。最も薄いものは0.11cmの天禧通寶である。この個体は比較的外径は大きいが薄い造りとなっているものである。重さの平均値は2.56gであり、欠損品を除くと最も軽いのは洪武通寶の1.6gである。この個体は外径が他の洪武通寶よりも一回り大きい。外縁に一部欠損が認められるものであるが、恐らく完形品でも2g前後のものと思われる。

寛永通寶は新寛永通寶一銭のみであり、四文銭は無い。従って径の小さいもののみである。外径は最大のもでも2.44cmであり、2.50cmを超えるものはない。外径の平均値は2.33cmである。最小のものは2.20cmであり、平均値と比べると1mm以上小さい。内径は最大のもは1.95cmで2点である。内径の平均値は1.87～1.89cmである。内径の最小のものは1.70cmであり、平均値と比べると1mm以上小さい。

不明銭の外径は縦径で2.51cmあり、やや大きめであるが、横径は2.35cmでそれ程でもない。銭文は全く不明であり、見た目では中世の古銭か近世の寛永通寶かの区別さえもできない。レントゲン写真でも銭文は判別できなかった。しかし、古寛永通寶でないとするれば、径が大きいので中世の古銭の可能性が考えられる。

それ以外の金属製品には鉄砲玉・切羽・刀子・銅鏡がある。

鉄砲玉は1点あり、A区1号壁セクショントレンチから出土のもで歪みが認められる。火縄銃から打ち出された可能性が考えられるものである。鉄砲玉には火縄銃を痛めないために一般的に鉄よりも軟らかい鉛が使用されていた。下原遺跡から出土した鉄砲玉にも灰白色の腐食が認められるので、鉛が使用されていたものと考えられる。

切羽1点は銅製であるが、一部に銀メッキが残るものである。刀子は先端と茎子部分に欠けが認められるが、現存長で15cm程ある。刀子というよりも小刀に近い大きさのものである。一部に木質部が付着する。

銅鏡は5cm弱の小破片であり、光沢のある鏡面を残している。非常に薄い造りである。吊り下げるための孔が2カ所に穿たれており、その部分から欠けているようにも見える。江戸時代の銅鏡には南天・千両、紋所、松竹梅・鶴亀の蓬莱図などの吉祥慶賀文様が描かれることが多く、裏面柄には竹が一部認められるので、蓬莱図の一部かと考えられる。

2 平安時代

今回報告する中では平安時代の遺物はB区から出土したもので、A区からは1点も無かった。

B区4面1号竪穴建物からは土師器・須恵器・灰釉陶器などの土器類と石器類が出土した。

土器類(第73・74図、PL. 92・93)

B区4面1号竪穴建物からは土師器・須恵器・灰釉陶器などの土器類が出土したが、それらの遺物から9世紀後半～10世紀前半頃のものと考えられる。土師器はコの字口縁の甕であり、灰釉陶器は光ヶ丘1号窯式期から大原2号窯式期のものだけで、その前後のものは無かった。特に光ヶ丘1号窯式期のものが多く、実測に耐え得るような大形の破片も同窯式期のものだけであった。神谷2007『下原遺跡Ⅱ』で報告した灰釉陶器は大原2号窯式期のものが圧倒的に多く、光ヶ丘1号窯式期のものと虎溪山1号窯式期のものは少なかった。ここに僅かではあるが今回報告のものとの間に時期差があることが分かった。また前回報告のものは遺構内出土のものもたまたま混入したと考えられるものであり、遺構の時期と合わないものが多かった。その中で住居以外での使用方法ということで祭祀との関連性が指摘されている。今回のものは同じ10世紀前後でも大原2号窯式期のものよりも一段階古い光ヶ丘1号窯式期のものが多く、しかもB区4面の1号竪穴建物内もしくはその周辺から出土したものが多く、他にその建物からは土師器や須恵器も出土しているが、それらとも時期的に齟齬がないのでこの遺構に伴うものと考えられる。この建物はカマドを備えた竪穴住居であり、その中で使用されていた生活用品の一部と捉えることができる。

石器類(第86図、PL. 100)

磨石6点、台石1点、火打石2点、その他礫10点の計19点が出土したが、図化したものは磨石3点、台石1点、火打石1点の計5点である。磨石には敲打痕があるものが認められ、ただ磨るだけでなく敲く行為も行われていたことが分かる。また、片面全体に黒色物質が付着するものがあり、黒色物質を磨り潰した時に付着した可能性がある。台石には磨面と共に敲打痕を有し、磨ると共に敲く行為が行われていたことが分かる。敲いて潰した物を更に磨り潰す行為が行われていた。食物の可能性は高いものの、それ以外のものも考えられ、その対象物は不明である。図化した火打石には火打金で敲いた時にできる明瞭な潰れ痕はなく、あまり使用されていない可能性がある。石材はあまり透明感はなく、やや白く濁った流紋岩である。B区2面1号土坑内から丸軋が1点出土し

たが、同土坑からは石臼破片も3点程出土しており、中世の遺構と考えられる。したがって、中近世のところで記述することとする。

3 縄文時代

今回報告する中では縄文時代の遺物はA区から出土したものがほとんどで、B区からはごく僅かだけであった。なお、弥生中期の土器破片がA区から1点出土した。

土器類(第75～82図、PL. 94～98)

A区では前期前半～後期加曾利B2式期に至るまでのものが6,000点以上出土したが、その主体となるのは後期堀之内1式～加曾利B2式期のものであった。中期末～後期初め頃のものには埋甕となっていたものが3基あったが、埋没していた土のためなのか、あるいは胎土のせいなのか、肌面が荒れてザラ付くものが多かった。角も丸くなっており接合も困難なものが多かった。

石器類(第86図、PL. 100)

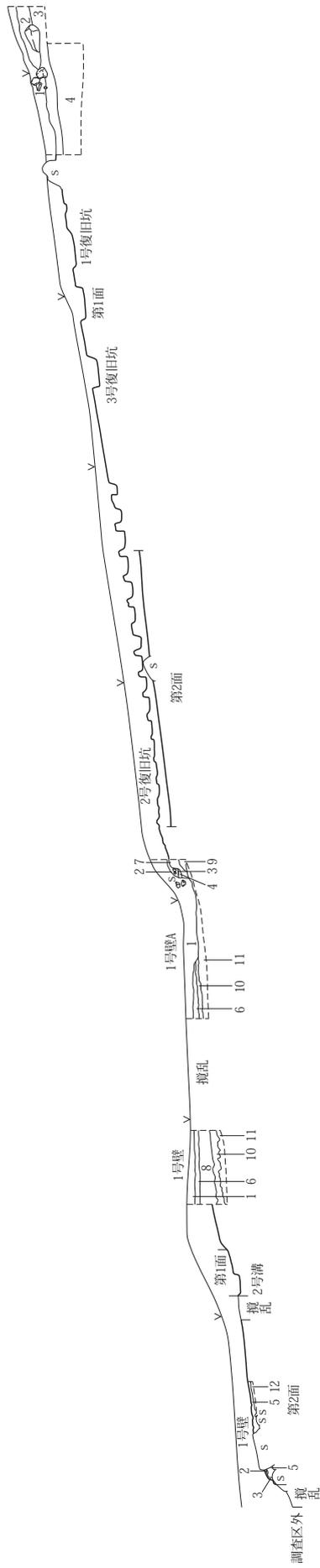
A区から打製石斧1点と石鏃3点(うち未製品1点)、石核2点、二次加工のある剥片8点、剥片1点、礫3点、礫片8点の計26点が出土した。土器片の出土量に比べると石器類の数量はかなり少ない。縄文の竪穴建物からも二次加工のある剥片は出土したが、所謂tool類は1点もない。今回の報告で図化したものは打製石斧1点と石鏃1点の計2点である。打製石斧は水田面の1号畦畔から検出されたもので、原礫面を大きく残し、形態は短冊形で刃先は直線形で薄い。先端部には細かい剥離があるが、使用痕と考えられる。両側縁に敲打痕を残す。石鏃は黒曜石製の凹基無茎石鏃である。1.5cm程の小形品である。石器の石材は、石鏃や剥片類・石核などの小形品には主に黒曜石が、大形剥片などには細流輝石安山岩などが用いられていた。その他に黒色頁岩、チャート、流紋岩などの石材も使用されていた。



第10図 近世 A区1・1.5面 全体図

A. I=563.00m

A'



B. I=560.00m

B'

- 1 号壁
 - 1 基本土層 I
 - 2 基本土層 II
 - 3 基本土層 III
 - 4 黒褐色土(10YR2/3) やや濃い。
 - 5 基本土層 IV
 - 6 赤褐色土(2.5YR4/8) 水田下の鉄分凝集層。
 - 7 基本土層 V
 - 8 暗褐色土(10YR3/3) 白色粒、黄褐色粒、1~5 cm大の珪角礫を多量に含む。
 - 9 基本土層 VI
 - 10 9層にこぶし大の珪角礫を大量に含む。
 - 11 基本土層 IX 大きめの黄褐色粒を大量に含む。
 - 12 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 灰白色シルト質土や明黄褐色砂質土が混じる。グラライ化した岩盤か？
- ※ 6層上面には水田作土は、あつたと考えられるが、現代に削平されているためなくっている。

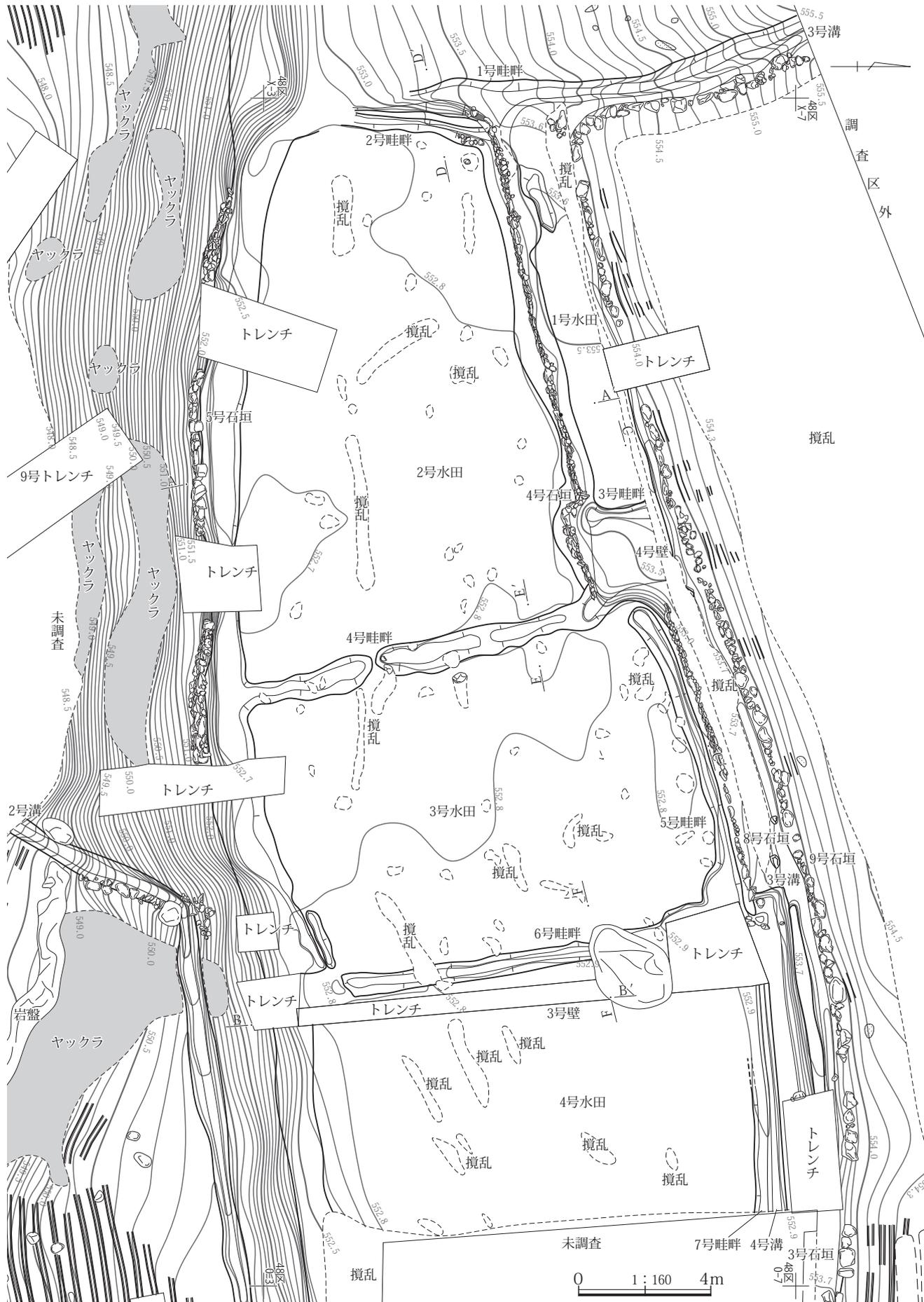
5号トレンチ

- 1 基本土層 I
- 2 基本土層 VII やや暗い。1~30cm大の珪角礫を大量、明黄褐色砂質土を多量に含む。



近世 遺構図

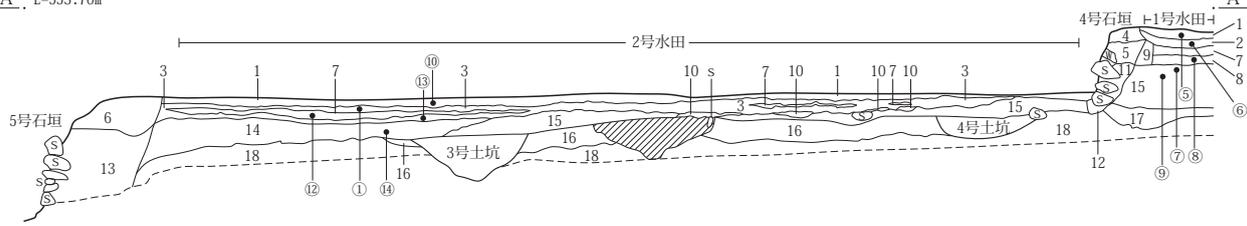
第11図 近世 A区1面 エレベーション・断面



第12図 近世 A区1面 1~4号水田、1~7号畦畔 他

近世 遺構図

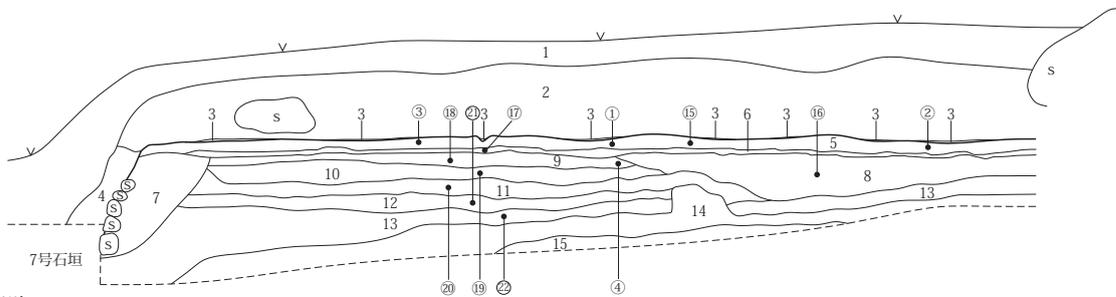
A, L=553.70m



1・2号水田

- | | |
|---|---|
| <p>1 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1~5mm大の礫を若干含む。</p> <p>2 1層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。</p> <p>3 黒褐色土に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。</p> <p>4 暗褐色土(10YR3/4) 畦畔。2cm大の亜角礫を若干含む。</p> <p>5 暗褐色土(10YR3/4) 畦畔基礎。心材は、炭化木材。8cm大の亜円礫を若干含む。</p> <p>6 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい不均質土。鉄分凝集を所々含む。</p> <p>7 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。小礫を少量含む。</p> <p>8 9層に鉄分凝集が混じる層。小礫を多量に含む。</p> <p>9 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。鉄分凝集が混じる。下位に2~3cm大の亜角礫を含む。</p> | <p>10 黒褐色土(10YR2/2) 鉄分凝集が混じる。</p> <p>11 黒色土(10YR2/1) 4号石垣裏込め。やや締り有。黒褐色ブロック土・明黄褐色粘質ブロック土を少量含む。</p> <p>12 黒色土(10YR2/1) 4号石垣掘り方フク土。やわらかい。</p> <p>13 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい不均質土。5号石垣裏込め。</p> <p>14 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。</p> <p>15 黒褐色土(10YR2/2) やわらかい。暗褐色土が混じり、白色粒を多量、黄橙色粒を少量含む。</p> <p>16 基本土層VI</p> <p>17 基本土層VII</p> <p>18 基本土層IX</p> |
|---|---|

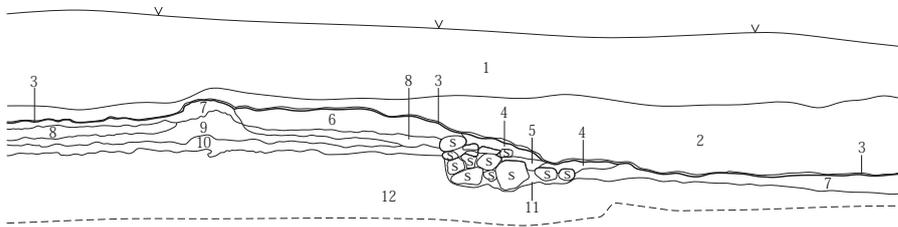
B, L=554.70m



3号壁

- | | |
|---|---|
| <p>1 基本土層I</p> <p>2 1層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。</p> <p>3 基本土層III</p> <p>4 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。均質土。白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を多量、1~10cm大の亜角礫・暗褐色土を少量含む。</p> <p>5 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1~5mm大の礫を若干含む。</p> <p>6 5層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。</p> <p>7 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。石垣裏込め。小礫を多量に含む。</p> <p>8 5層に似ているが、鉄分凝集が広範囲に広がる。やや粘性有。黄橙色粒・赤褐色粒を多量に含む。</p> | <p>9 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色味強い。小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。</p> <p>10 9層に鉄分凝集が混じる層。</p> <p>11 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色味強い。均質土。小礫・白色粒・黄橙色粒を少量含む。</p> <p>12 11層に鉄分凝集が混じる層。</p> <p>13 基本土層VI こぶし大の亜角礫を多量に含む。</p> <p>14 暗褐色土(10YR3/3) 崩れやすい。黄橙色粒や砂粒を多量、白色粒を少量含む。礫は1~15cm大の亜円礫が主で、50cm大のものも若干有。</p> <p>15 基本土層IX 南にはグライ化した岩盤有。</p> |
|---|---|

C, L=555.00m



4号壁

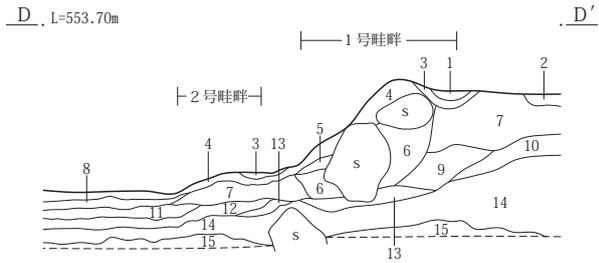
- | | |
|--|--|
| <p>1 基本土層I</p> <p>2 基本土層II</p> <p>3 基本土層III</p> <p>4 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。乾きやすい不均質土。小礫を多量、白色粒・黄橙色粒を若干含む。</p> <p>5 砂礫層。小粒礫を多量に含む。</p> <p>6 7層に類似。1~5cm大の亜角礫を大量に含む。</p> | <p>7 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1~5mm大の礫を若干含む。</p> <p>8 7層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。</p> <p>9 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。小礫を少量含む。</p> <p>10 9層に鉄分凝集が混じる層。小礫を多量に含む。</p> <p>11 黒褐色土(10YR2/2) 石垣フク土。やわらかい。亜円礫や亜角礫が混り、白色粒を少量含む。</p> <p>12 基本土層VIにこぶし大の亜角礫を多量に含む。</p> |
|--|--|

※・プラントオパール採取地点

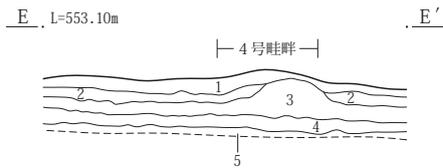
第13図 近世 A区1面 1~4号水田断面

0 1:80 2m

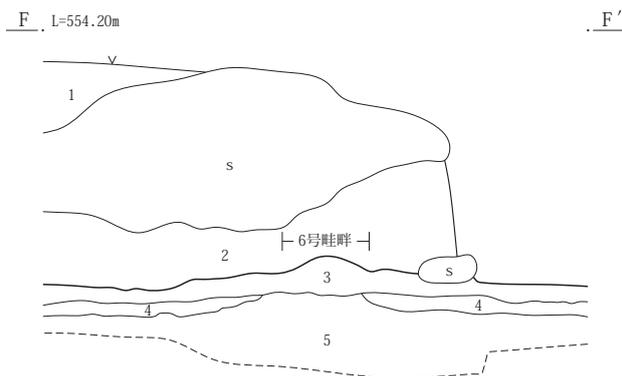
第3章 発見された遺構と遺物



- 1・2号畦畔
- 1 基本土層II
 - 2 基本土層IV
 - 3 極小粒砂層。2～5mm程度の厚さで層状に堆積。
 - 4 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1～5mm大の礫を若干含む。
 - 5 暗褐色土(10YR3/4) 砂質土。
 - 6 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色強い畦畔基礎。やや淡い。白色粒・黄橙色粒を若干含む。
 - 7 基本土層V
 - 8 4層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。
 - 9 8層に5cm大の礫や黒色ブロック土が混じる。
 - 10 黒褐色土(10YR3/1) 7層と14層の混層。
 - 11 4層と似ている。やや粘性有。
 - 12 4層に赤褐色の鉄分・白色粒・黄橙色粒を多く含む。
 - 13 褐色土(10YR4/4) 小～中粒の川砂層を含む。不均質で崩れやすい。
 - 14 基本土層VI 5～10cm大の亜角礫を多量に含む。
 - 15 基本土層IX



- 4号畦畔
- 1 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1～5mm大の礫を若干含む。
 - 2 1層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。
 - 3 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。粘性有。小礫を少量含む。
 - 4 3層に赤褐色の鉄分・白色粒・黄橙色粒を多く含む。
 - 5 黒色土(10YR2/1) 白色粒・黄橙色粒・5～10cm大の亜角礫を多量、黄褐色砂質ブロック土を少量含む。

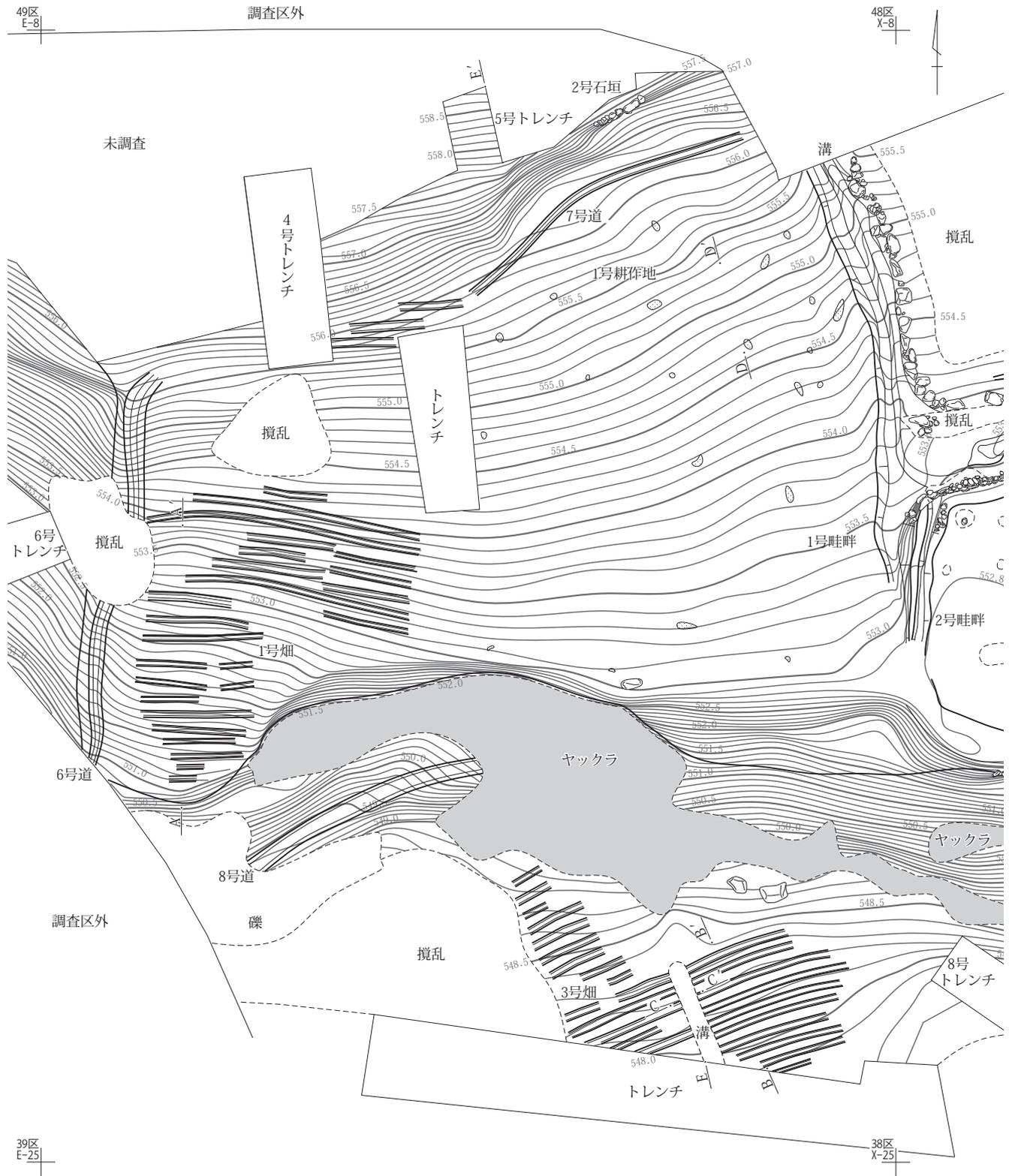


- 6号畦畔
- 1 基本土層I
 - 2 基本土層II
 - 3 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1～5mm大の礫を若干含む。
 - 4 3層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。
 - 5 3層に似ているが、鉄分凝集が広範囲に広がる。やや粘性有。黄橙色粒・赤褐色粒を多量に含む。

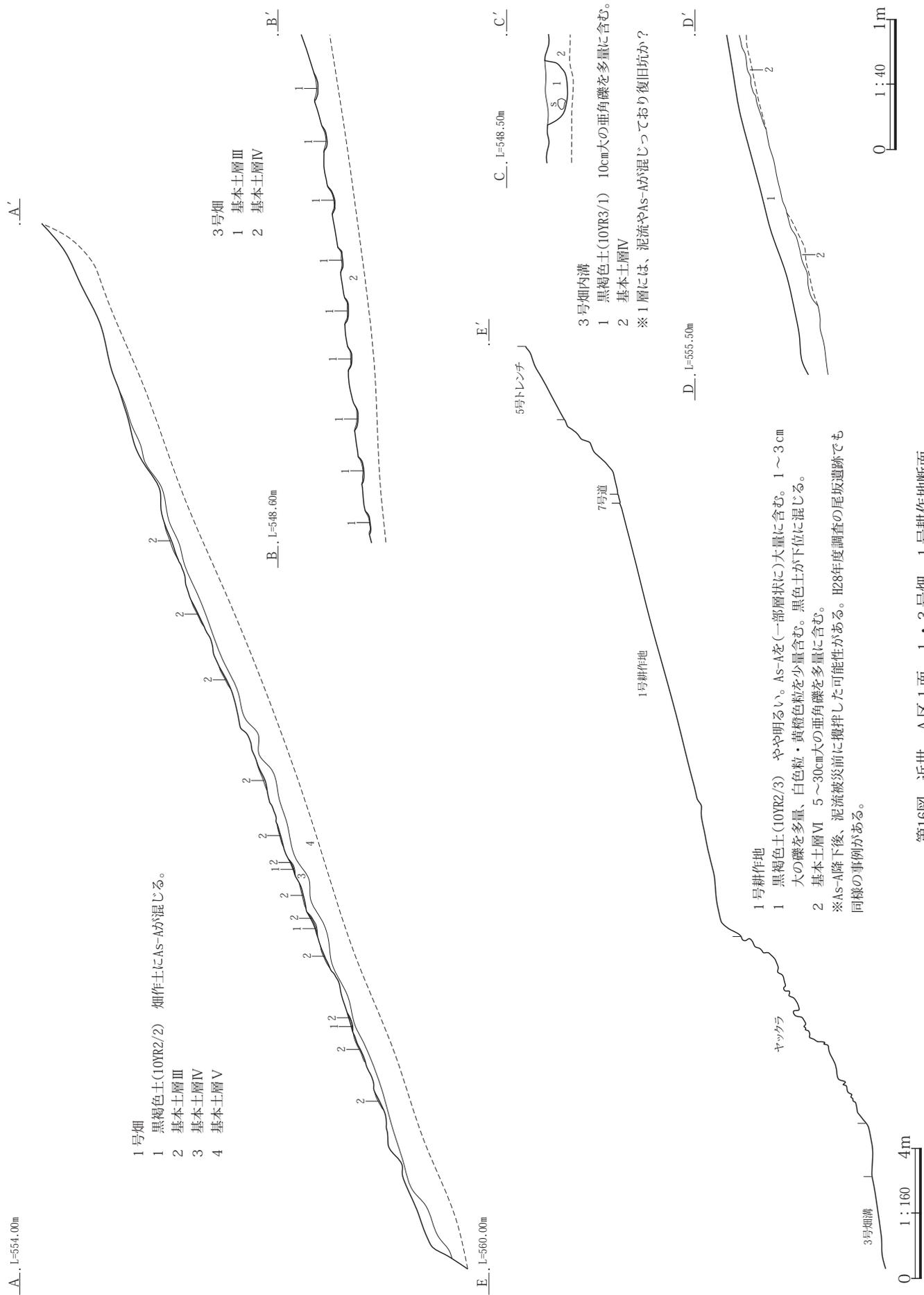
0 1:40 1m

第14図 近世 A区1面 1・2・4・6号畦畔断面

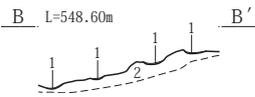
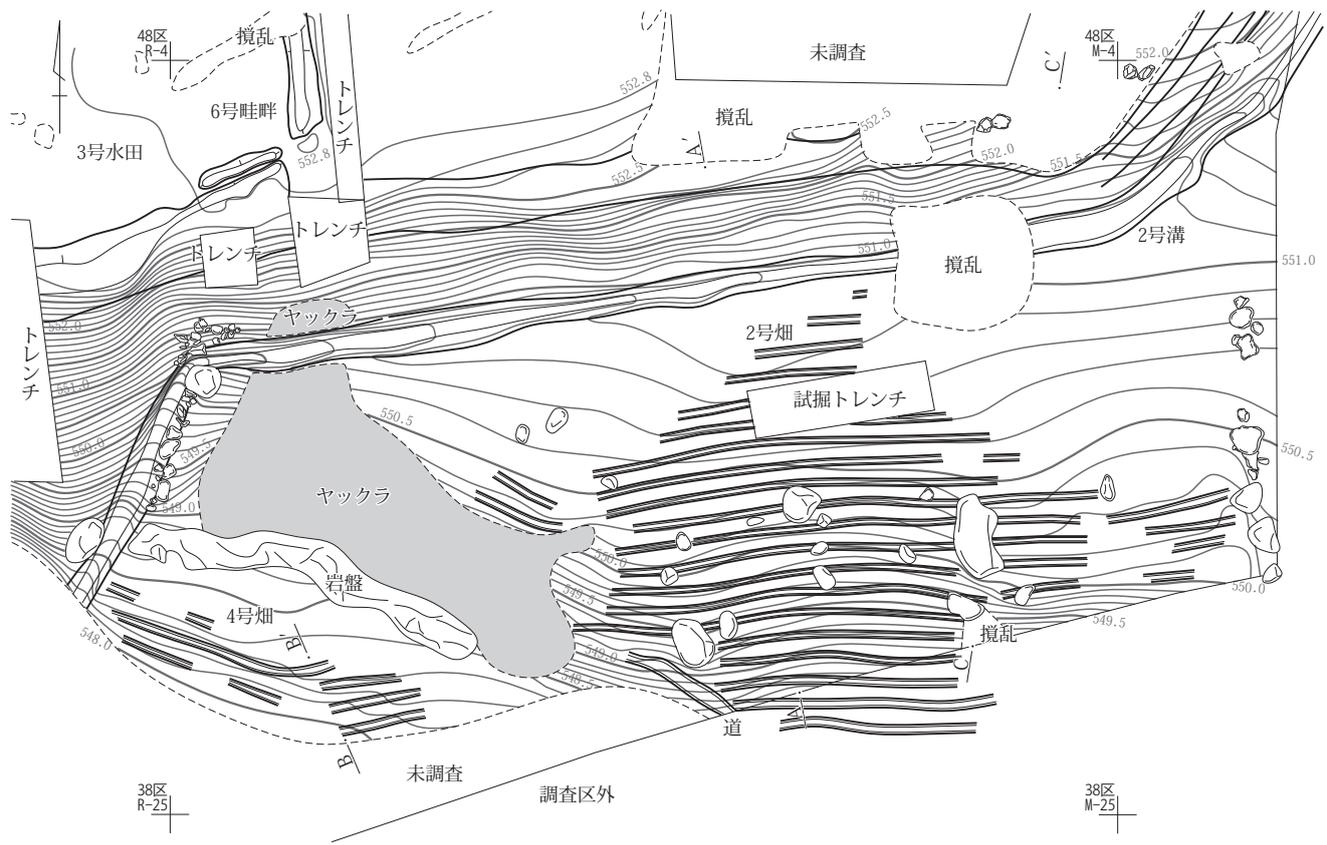
近世 遺構図



第15図 近世 A区1面 1・3号畑、1号耕作地 他

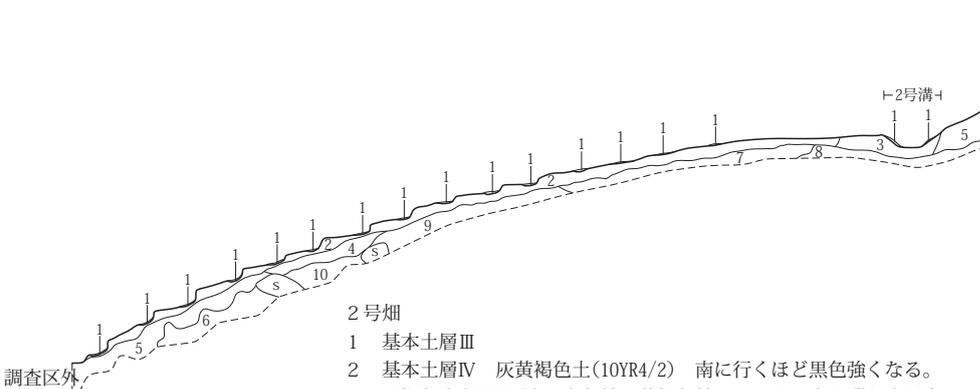


第16図 近世 A区1面 1・3号畑、1号耕作地断面



- 4号畑
- 1 基本土層Ⅲ
 - 2 基本土層Ⅳ 灰黄褐色土(10YR4/2)

A L=552.50m



- 2号畑
- 1 基本土層Ⅲ
 - 2 基本土層Ⅳ 灰黄褐色土(10YR4/2) 南に行くほど黒色強くなる。
 - 3 黒褐色土(10YR2/2) 白色粒・黄橙色粒・1~5cm大の礫を少量含む。明黄褐色砂質ブロック土を含む。
 - 4 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色強い。白色粒・黄橙色粒を若干含む。明黄褐色砂質土混じり。
 - 5 基本土層Ⅵ
 - 6 5層に人頭大の亜円礫を多量に含む。
 - 7 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 灰白色シルト質土や明黄褐色砂質土が混じる。グライ化した岩盤か?
 - 8 基本土層Ⅸ
 - 9 8層に10~50cm大の亜円礫を大量に含む。
 - 10 明黄褐色土(10YR6/8) 砂礫層。1~50cm大の亜円礫を大量に含む。旧河床面か?
- ※ 2・3・7・8層は根の攪乱が多く含まれる。
2層は、地山の上に均一に薄く堆積しており、水田面を削平した際の客土を作土として使用したと考えられる。

0 1:80 2m

0 1:160 4m

第17図 近世 A区1面 2・4号畑 他

第3章 発見された遺構と遺物



3号復旧坑

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 復旧坑埋没土。10～30cm大の多様な礫を大量に含む。
- 2 基本土層Ⅶ やや暗い。
- 3 基本土層Ⅷ

※礫捨て用の復旧坑か。1号復旧坑群と2号復旧坑群の境になっている。

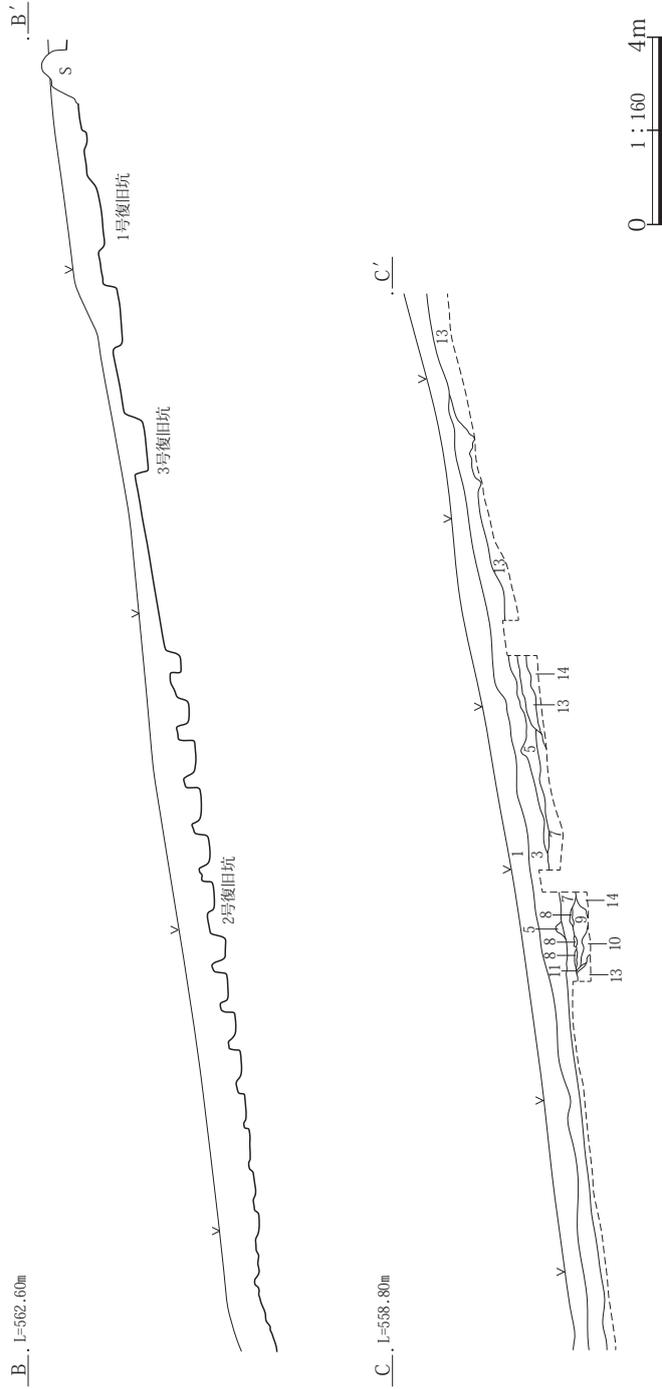
1号復旧坑

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 復旧坑埋没土。暗褐色ブロック土や1～5cm大の亜角礫を大量に含む。

第18図 近世 A区1面 1・3号復旧坑 他



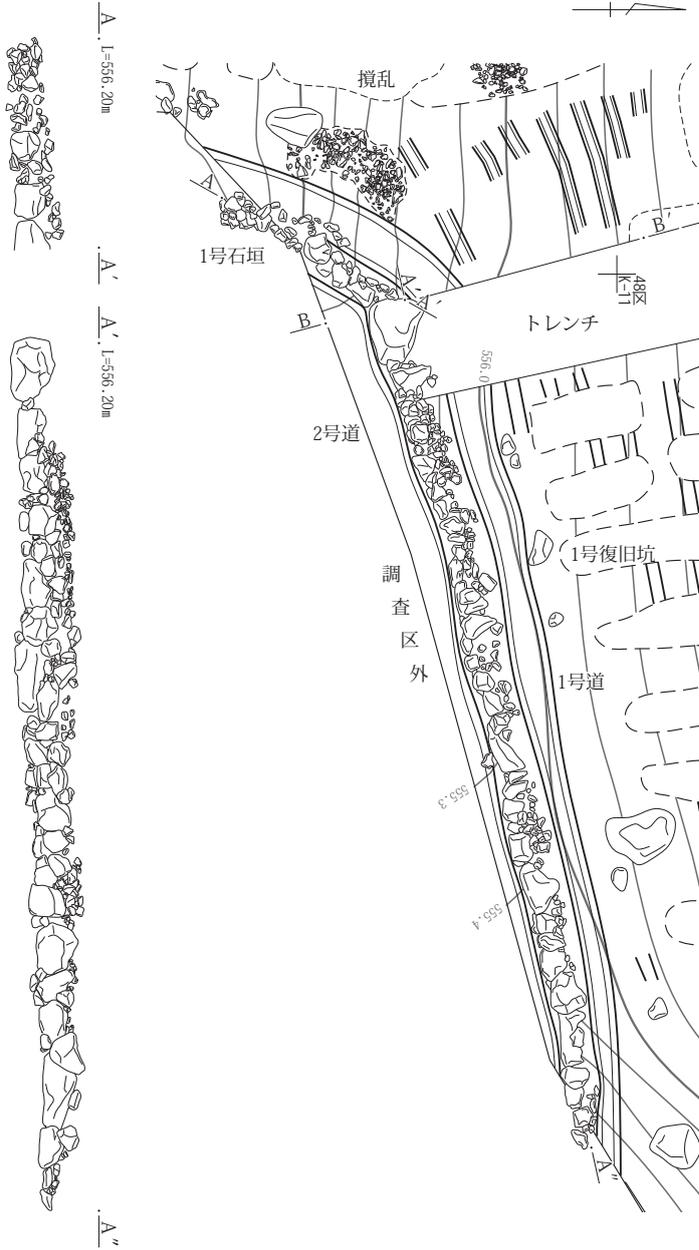
第19図 近世 A区1面 2・4号復旧坑 他



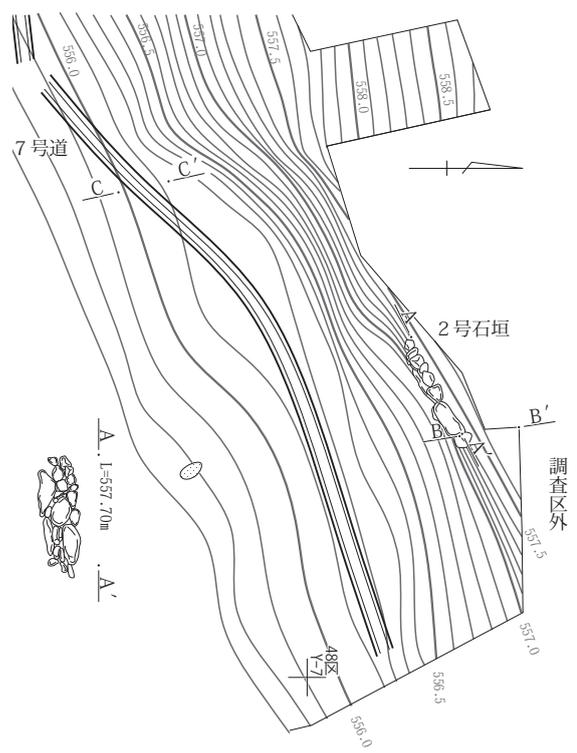
- 2号壁
- 1 基本土層 I
 - 3 暗褐色土(10TR3/3) 復旧坑埋没土。やや淡い不均質土。1~20cm大の礫、黒褐色ブロック土を多量に含む。
 - 5 基本土層IV' やや締り有。
 - 7 5層に似ているが不均質で崩れやすい。3cm大の川石を大量、1~15cm大の亜角礫を多量に含む。流路か？
 - 8 川砂層。1~5mm大の玉石を多く含む。
 - 9 黒褐色土(10TR2/2) 崩れやすい。1~5cm大の亜円礫を大量に含む。
 - 10 9層に似ているがやや均質。
 - 11 9層に似ているが8層が混じる。
 - 13 基本土層V
 - 14 基本土層VI

第20図 近世 A区1面 1~4 復旧坑断面

1・2号道、1号石垣



7号道、2号石垣



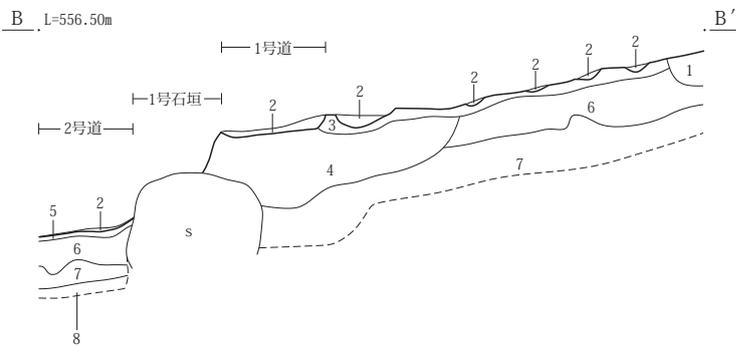
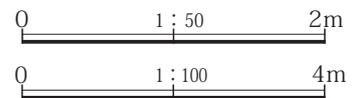
L=556.50m
C C' B L=558.40m B'

2号石垣

- 1 基本土層 I
- 2 基本土層 VII やや暗い。1~30cm大の亜円礫を大量、明黄褐色砂質土を多量に含む。

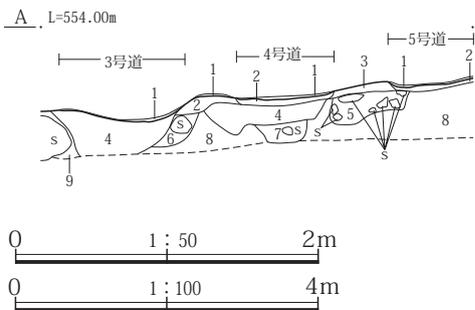
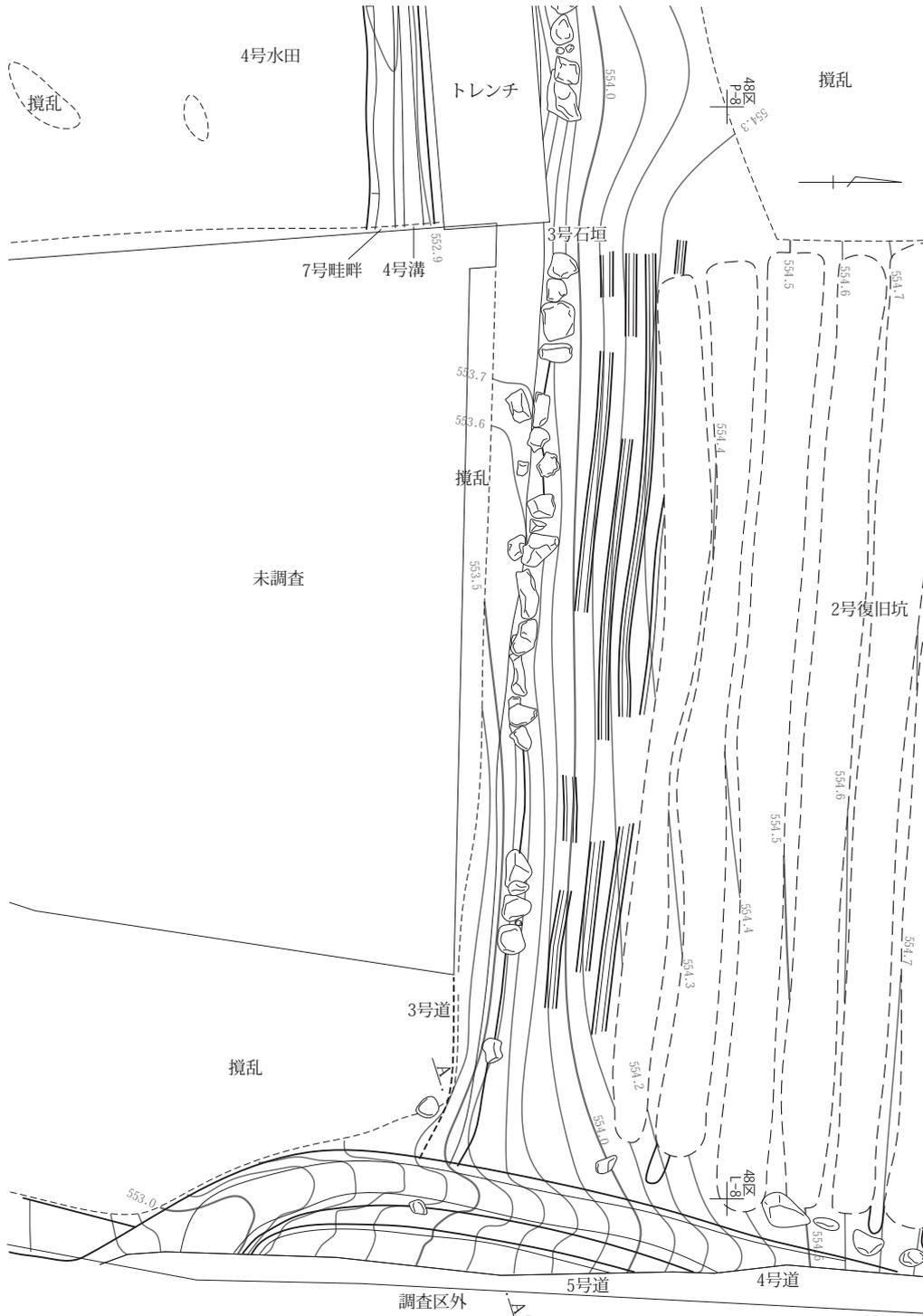
1・2号道、1号石垣

- 1 黒褐色土(10YR3/1) 復旧坑埋没土。暗褐色ブロック土や1~5cm大の亜角礫を大量に含む。
- 2 基本土層 III
- 3 基本土層 IV
- 4 暗褐色土(10YR3/3) 石垣裏込め。10cm大の亜角礫主体。崩れやすい。
- 5 暗褐色土(10YR3/3) 2号道。やや締りあり。白色粒、黄褐色粒を少量含む。
- 6 基本土層 V
- 7 基本土層 VI崩れの層。10cm以上の亜角礫を含む。粒子粗く崩れやすい。川砂が混じる。
- 8 基本土層 VIII 上層と混じり合う。



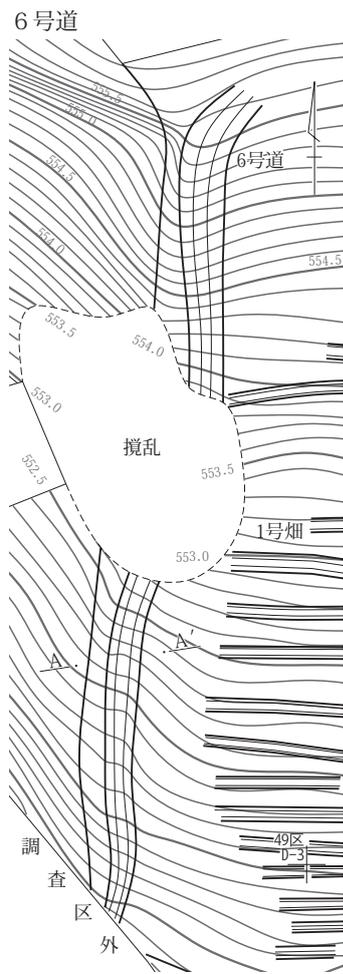
第21図 近世 A区1面 1・2・7号道、1・2号石垣

第3章 発見された遺構と遺物

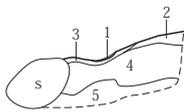


- 1 基本土層Ⅲ
 - 2 暗褐色土(10YR3/3) やや暗い。4・5号道。やや締り有。白色粒・黄橙色粒を若干含む。鉄分沈着有。
 - 3 暗褐色土(10YR3/3) やや暗い。1～5cm大の亜角礫を多量、白色粒・黄橙色粒を若干含む。
 - 4 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。1～10cm大の礫を大量に含む。粒子粗く崩れやすい。
 - 5 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色強い。5～20cm大の亜角礫を多量に含む。
 - 6 黒褐色土(10YR2/2) 5～20cm大の亜円礫を少量、暗褐色ブロック土を若干含む。
 - 7 黒褐色土(10YR2/2) 6層と似ているが、粒子粗く崩れやすい。
 - 8 基本土層Ⅴ やや粘性有。
 - 9 黒褐色土(10YR3/1) やわらかい。上面にAs-Aを確認できない。
- ※ 3号道は、溝の可能性有。2号と4号も溝の可能性有。下記の点から不明。
 ※ 1号道(高)は4号道(低)と、2号道(低)は5号道(高)と繋がっている可能性有。ただし、北と南で高低が逆になる。交差していると思われる点は、電柱が近くに立っているため調査できず。

第22図 近世 A区1面 3～5号道、3号石垣

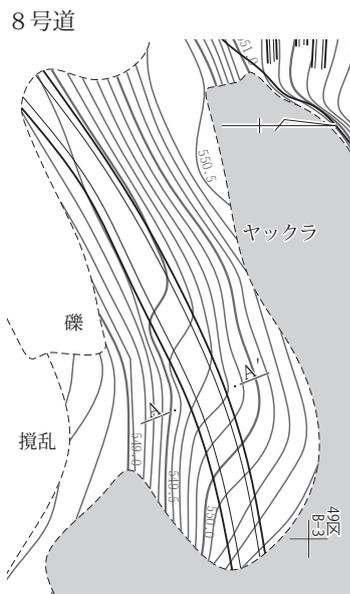


A, L=552.70m A'

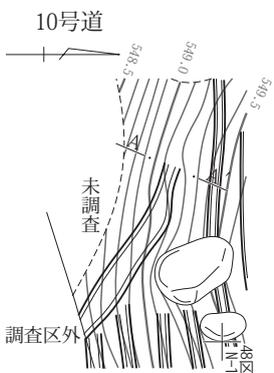


6号道

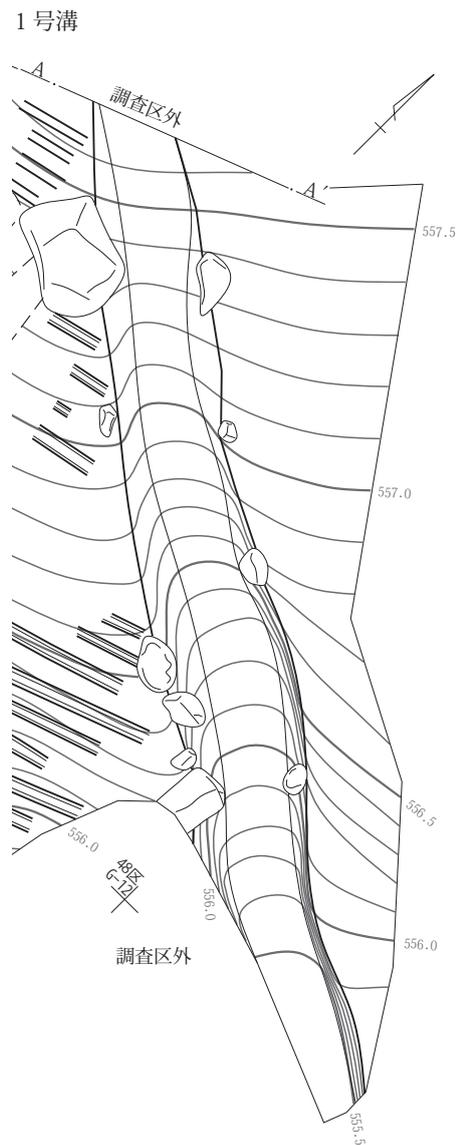
- 1 基本土層Ⅲ
- 2 基本土層Ⅳ
- 3 暗褐色土(10YR3/4) 道。やや締まり有。
- 4 基本土層Ⅴ
- 5 褐色土(10YR4/4) 1~15cm大の礫を大量、明黄褐色土を多量、白色粒・黄褐色粒・炭化物粒を若干含む。



A, L=550.00m A'



L=549.30m A A'



A, L=558.70m A'

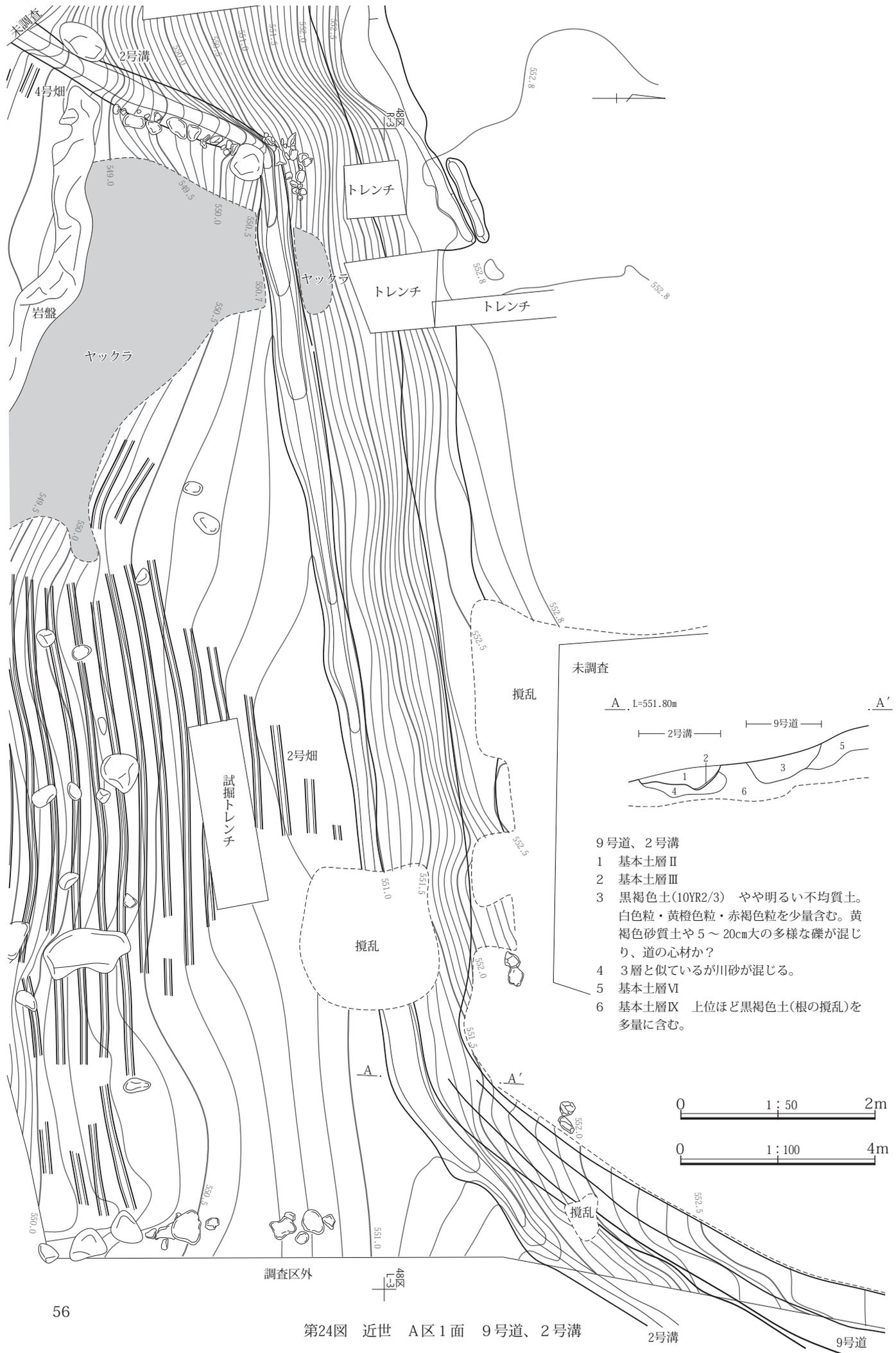
1号溝

- 1 基本土層Ⅰ
- 2 基本土層Ⅱ
- 3 基本土層Ⅲ
- 4 黒褐色土(10YR3/1) 溝埋没土。やや淡い砂質土。5cm大の亜円礫を少量含む。
- 5 基本土層Ⅴ やや明るい砂質土。1~10cm大の亜角礫を大量に含む。鉄分凝集有。
- 6 暗褐色土(10YR3/4) 砂質で下層ほど粒子粗く通水層になっている。5~50cm大の亜角礫を大量に含む。

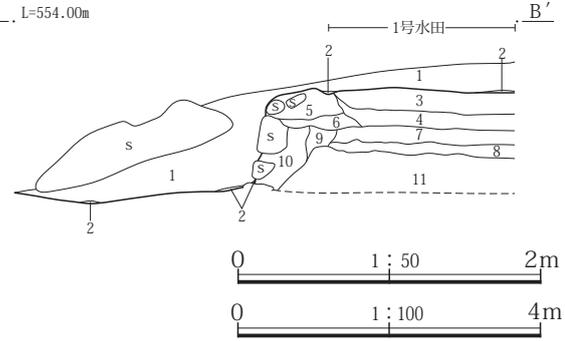
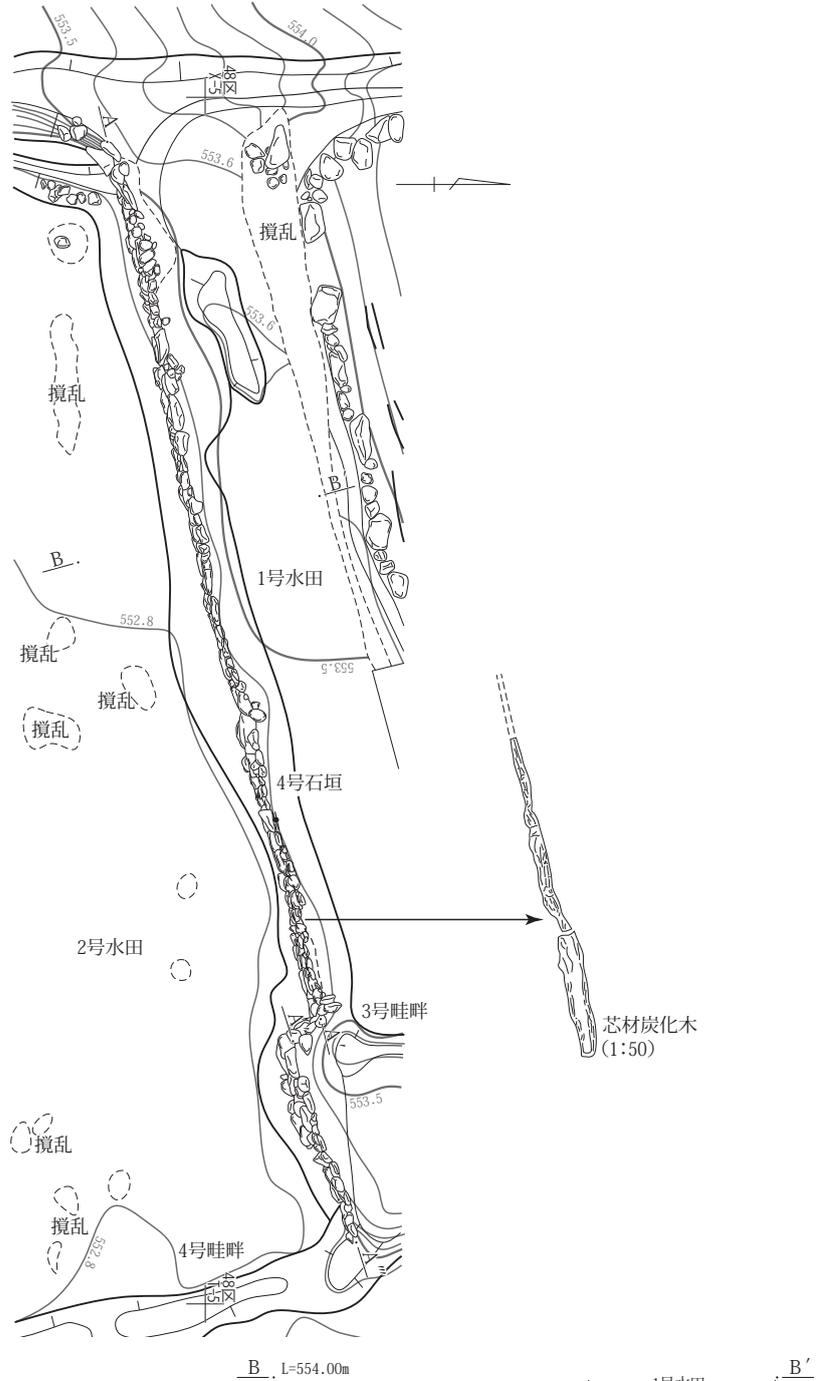
0 1:50 2m

0 1:100 4m

第23図 近世 A区1面 6・8・10号道、1号溝



4号石垣

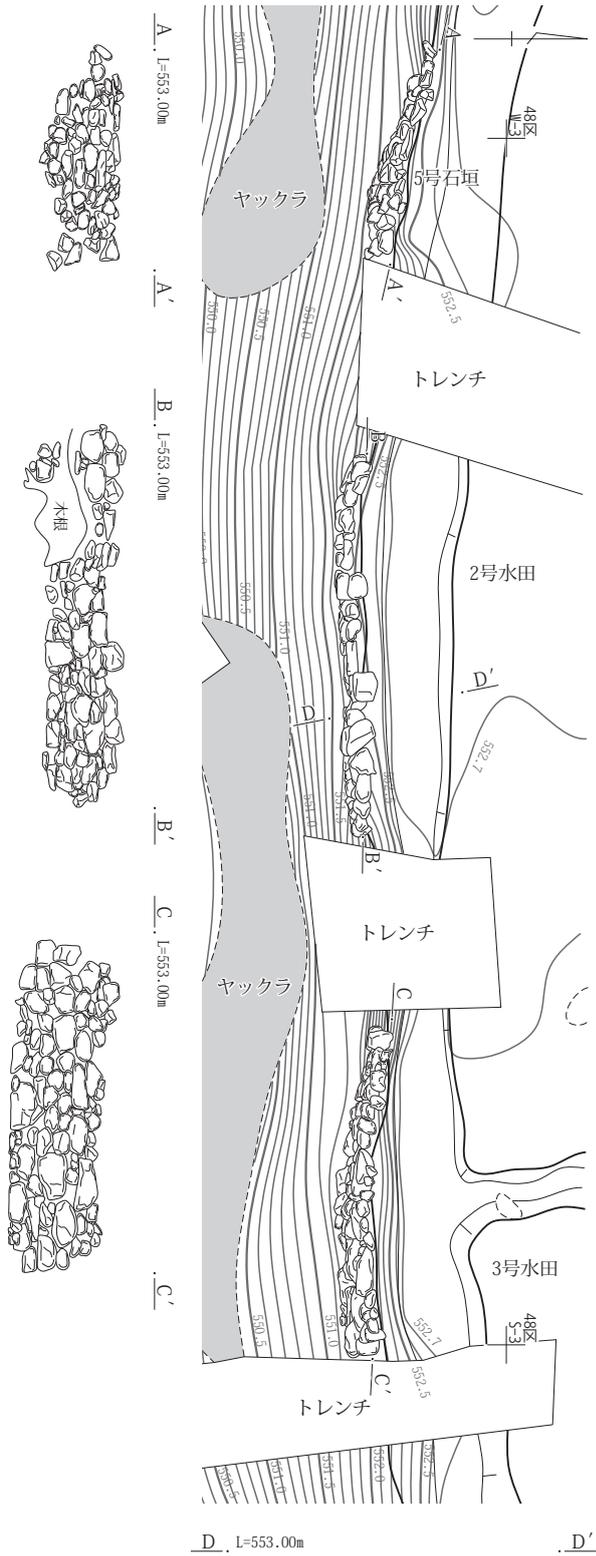


- 1 基本土層II
- 2 基本土層III
- 3 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1~5mm大の礫を若干含む。
- 4 3層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。
- 5 暗褐色土(10YR3/4) 畦畔。不均質土で芯材は10~20cm大の礫。小礫・黄橙色極小~中粒を多量、炭化物粒を少量、白色粒を若干含む。
- 6 暗褐色土(10YR3/3) 畦畔基礎。白色粒・黄橙色粒を少量、小礫・炭化物粒を若干含む。
- 7 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。小礫を少量含む。
- 8 7層に鉄分凝集が混じる層。小礫を多量に含む。
- 9 黒褐色土(10YR2/3) 白色粒・黄橙色粒を多量、1cm大の礫を少量含む。
- 10 黒色土(10YR2/1) 4号石垣裏込め。やや締り有。黒褐色ブロック土・明黄褐色粘質ブロック土を少量含む。
- 11 基本土層VI

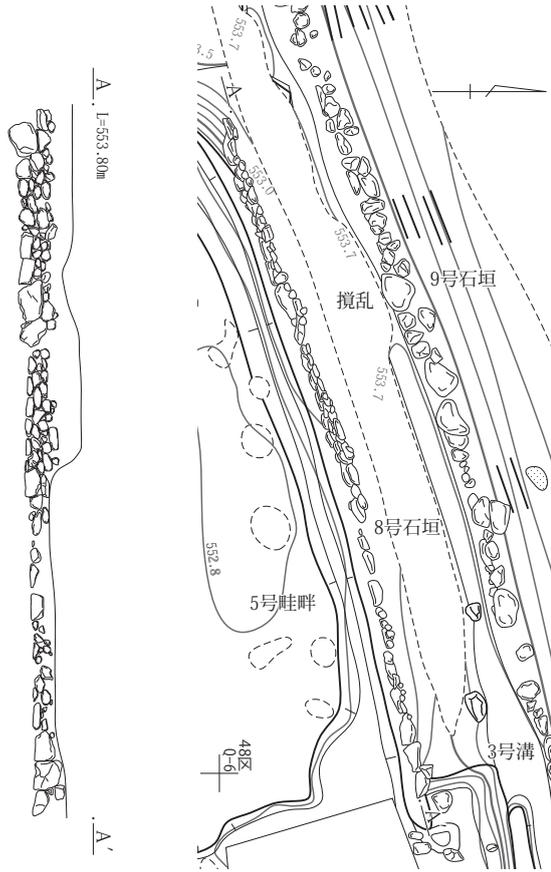
第25図 近世 A区1面 4号石垣

第3章 発見された遺構と遺物

5号石垣

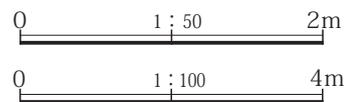


8号石垣

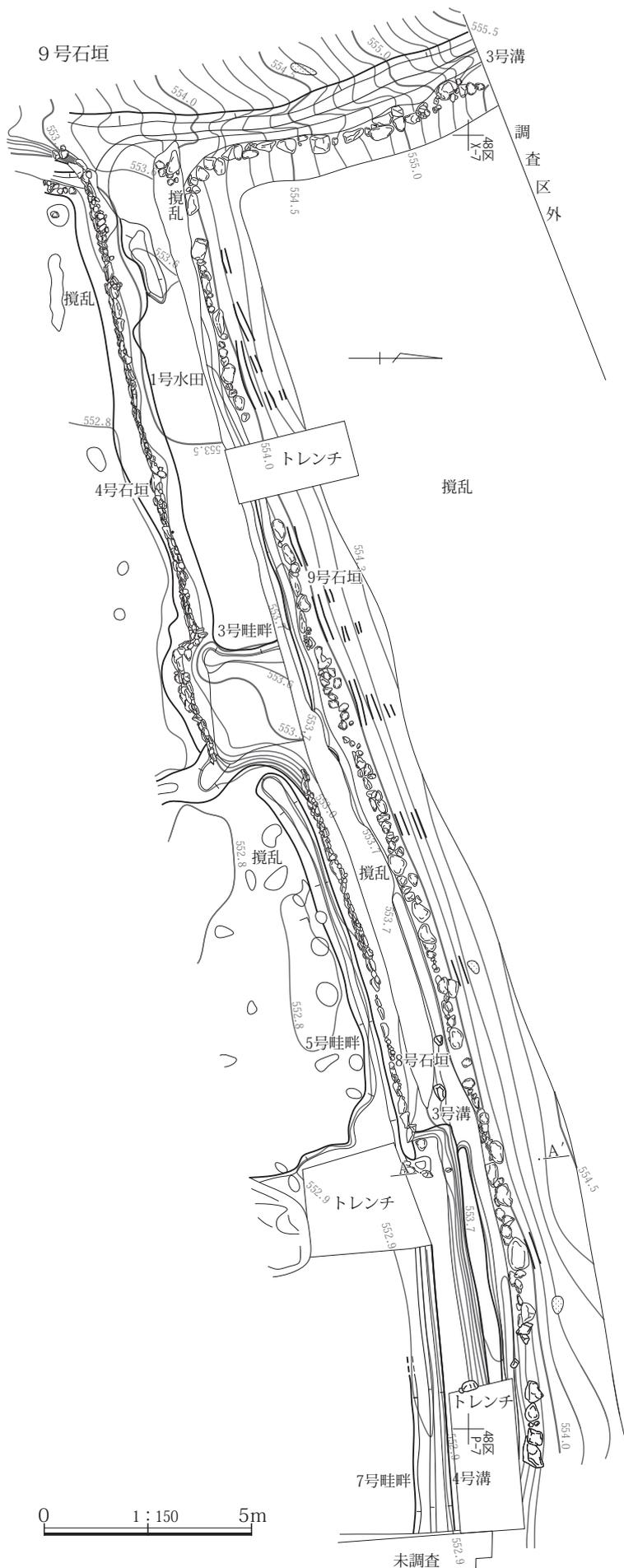


5号石垣

- 1 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1～5mm大の礫を若干含む。
- 3 黒褐色土に赤褐色土の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。
- 6 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい不均質土。鉄分凝集を所々含む。ひげ根が多い。
- 7 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。小礫を少量含む。
- 13 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい不均質土。5号石垣裏込め。ひげ根が多い。
- 14 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
- 18 基本土層IX

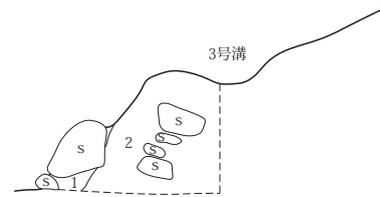
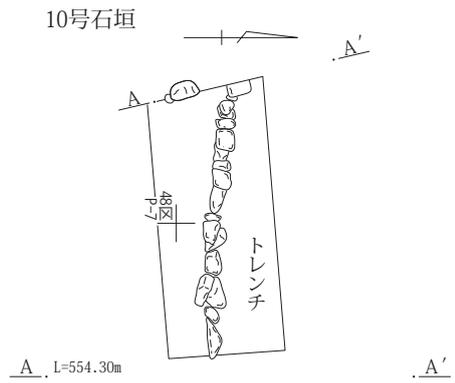


第26図 近世 A区1面 5・8号石垣

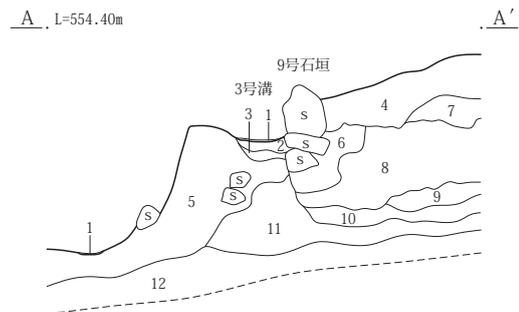


第27図 近世 A区 1・1.5面 9・10号石垣、3・4号溝

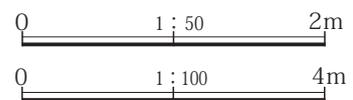
近世 遺構図



- 1 基本土層Ⅱ
- 2 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土と似ている。小礫多く崩れやすい。鉄分凝集有。

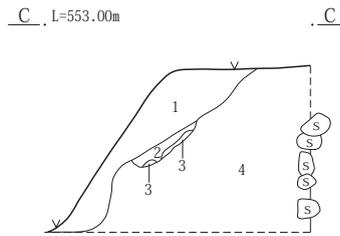
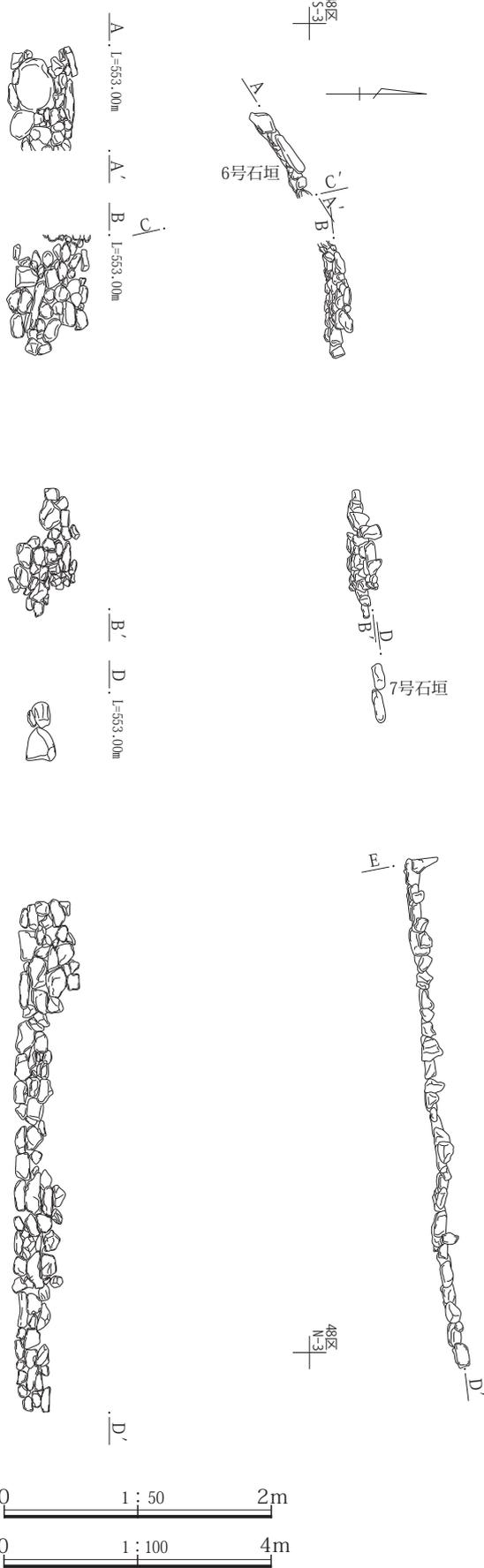


- 1 基本土層Ⅲ
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 砂質泥。鉄分凝集を多量に含む。
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 粗粒砂主体の層。水が流れた痕跡有。
- 4 基本土層Ⅳ
- 5 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土と似ている。小礫多く崩れやすい。鉄分凝集有。
- 6 暗褐色土(10YR3/4) 石垣裏込め。5cm大の礫を多量に含む。
- 7 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。均質土。白色粒・黄橙色粒を少量含む。
- 8 暗褐色土(10YR3/3) やや暗い。白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量、小礫を少量含む。
- 9 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。やや粘性有る均質土。白色粒・黄橙色粒を少量含む。
- 10 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。やや粘性有る均質土。鉄分凝集を多量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。
- 11 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。やや粘性有る均質土。白色粒・黄橙色粒を少量含む。
- 12 基本土層Ⅵ 川砂や円礫が多量に混じる縄文土器包含層。

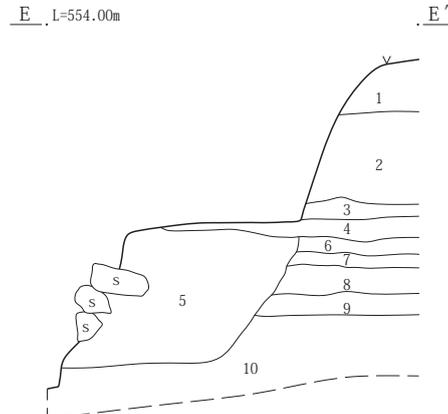


第3章 発見された遺構と遺物

6・7号石垣

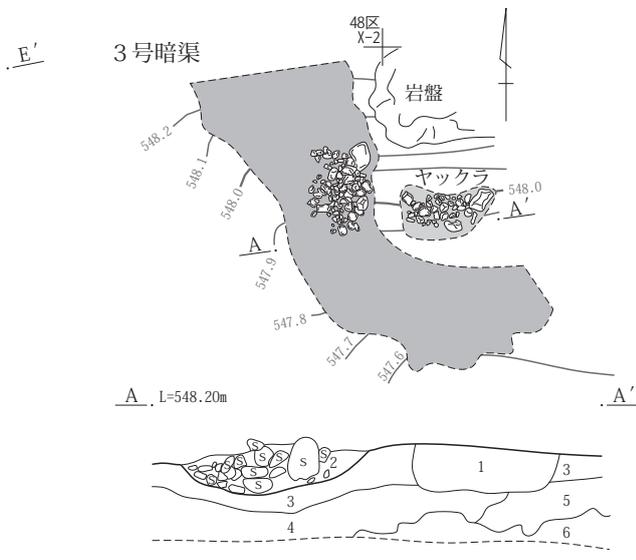


- 6号石垣
- 1 基本土層 I
 - 2 基本土層 II
 - 3 基本土層 III
 - 4 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。均質土。白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を多量、1~10cm大の亜角礫・暗褐色土を少量含む。



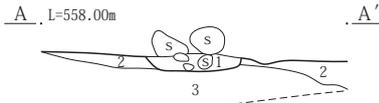
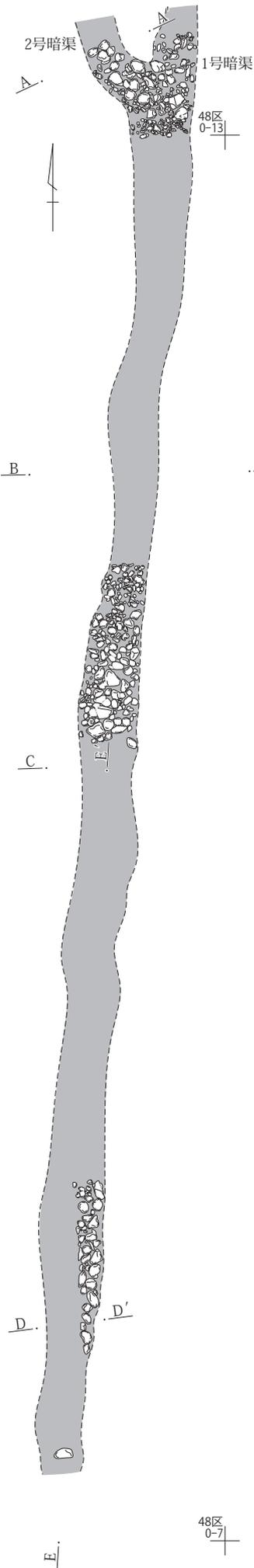
- 7号石垣
- 1 基本土層 I
 - 2 基本土層 II
 - 3 黒褐色土(10YR2/3) 水田作土。粘性やや有。白色粒・黄橙色粒を少量、1~5mm大の礫を若干含む。
 - 4 3層に赤褐色の鉄分が大量に混じる鉄分凝集層。
 - 5 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。石垣裏込め。小礫を多量に含む。
 - 6 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色味強い。小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。

- 7 6層に鉄分凝集が混じる層。
 - 8 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色味強い。均質土。小礫・白色粒・黄橙色粒を少量含む。
 - 9 8層に鉄分凝集が混じる層。
 - 10 基本土層 VI
- ※6・7号石垣は、As-A直下の黒褐色土に埋もれており、天明時は埋没していた可能性有。水田面を構築する際に作られた石垣か？



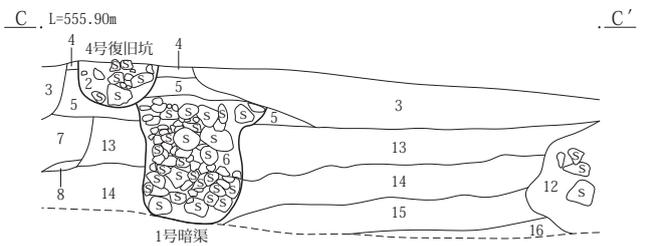
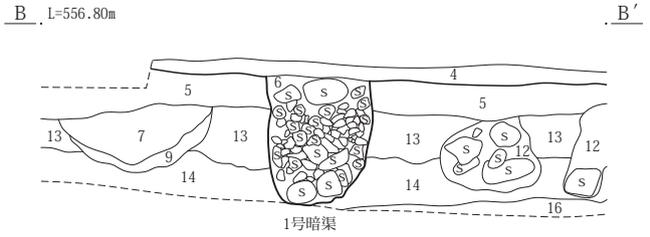
- 3号暗渠
- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。亜円礫主体。白色粒・黄橙色粒若干含む。
 - 2 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色強い。暗渠埋没土。多様な礫主体。白色粒・黄橙色粒を少量含む。下位に川砂を層状に含む。
 - 3 基本土層 V
 - 4 暗褐色土(10YR3/3) やや暗い。均質土。白色粒・黄橙色粒を多量、1~5cm大の亜角礫を含む。
 - 5 4層に黄褐色土混じる。こぶし大の亜角礫多く崩れやすい。
 - 6 基本土層 IX こぶし大の亜円礫を大量、黄橙色粒を少量含む。
- ※水田の排水路か？ As-A直下の畑下から検出。1層は、As-Aが検出されず、ヤックラと考えられる。

第28図 近世 A区1.5面 6・7号石垣、3号暗渠



2号暗渠

- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。礫主体の暗渠埋没土。
- 2 基本土層V
- 3 基本土層VIII



1号暗渠

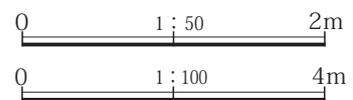
- 1 黒褐色土(10YR3/1) 礫捨て用の復旧坑埋没土。10~30cm大の多様な礫を大量に含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 復旧溝フク土。やや淡い不均質土。1~20cm大の礫、黒褐色ブロック土を多量に含む。
- 3 基本土層IV
- 4 基本土層IV' やや締り有。
- 5 黒褐色土(10YR2/3) 暗渠埋没土。礫主体。中心は比較的小さい(10~15cm)礫中心で隙間有。上下は大きめの礫(15~25cm)。
- 6 5層に似ているが不均質で崩れやすい。3cm大の川石を大量、1~15cm大の亜角礫を多量に含む。流路か?
- 7 川砂層。1~5mm大の玉石を多く含む。
- 8 黒褐色土(10YR2/2) 崩れやすい。1~5cm大の亜円礫を大量に含む。
- 9 黒色土(10YR2/1) 不均質土。10~40cm大の亜角礫を大量に含む。
- 10 基本土層V
- 11 基本土層VI
- 12 14層に似た不均質土。1~10cm大の亜角礫を多量に含む。
- 13 基本土層VIII

D L=554.60m D'

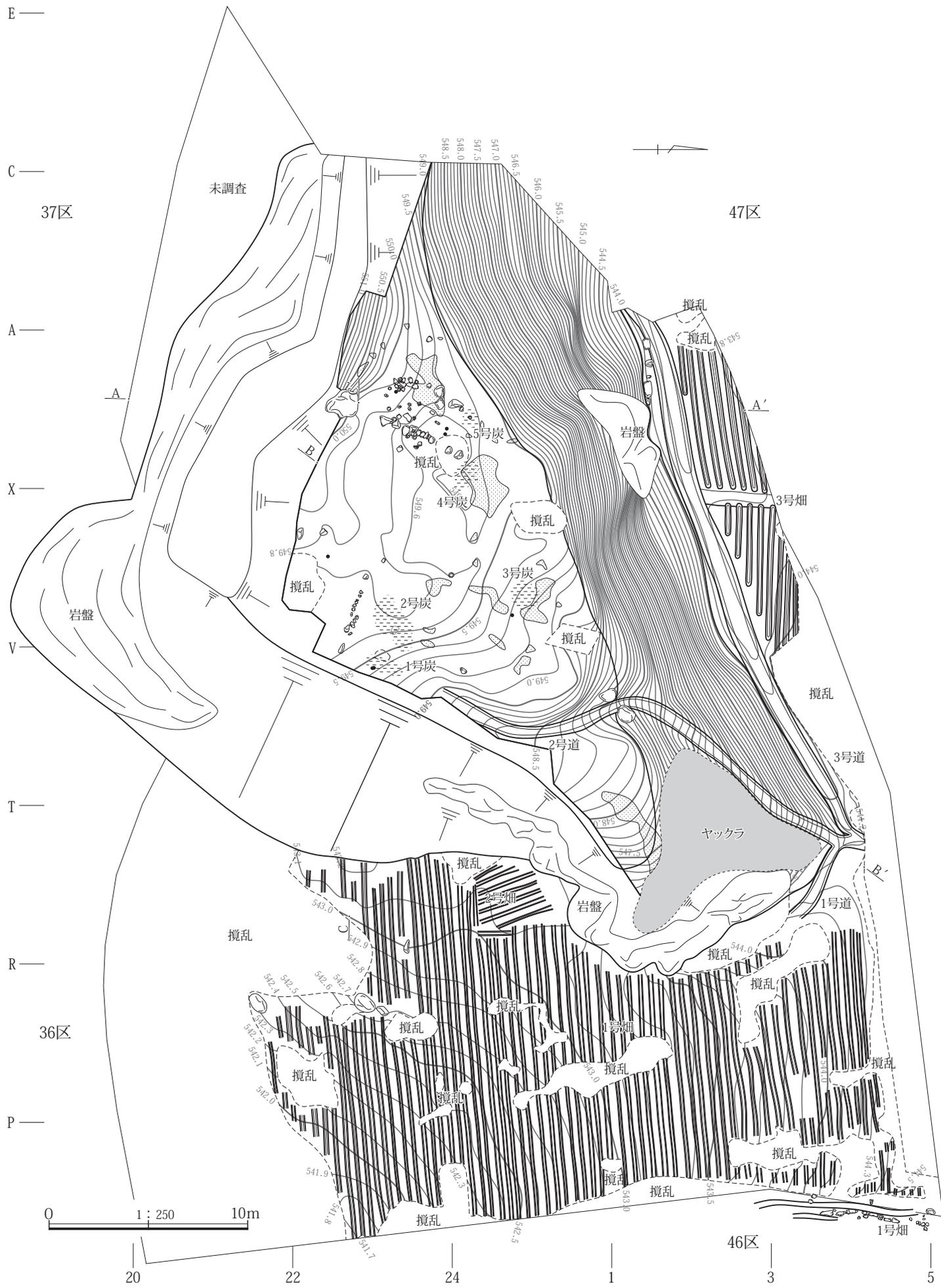


1号暗渠

- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。暗渠埋没土。礫主体で川砂が混じる。
 - 2 黒褐色土(10YR2/2) 大きめの亜角礫を大量に含む。1層と異なり礫間に土が詰まっている。
- ※2層は暗渠の構築土で、1層中を水が流れた可能性有。



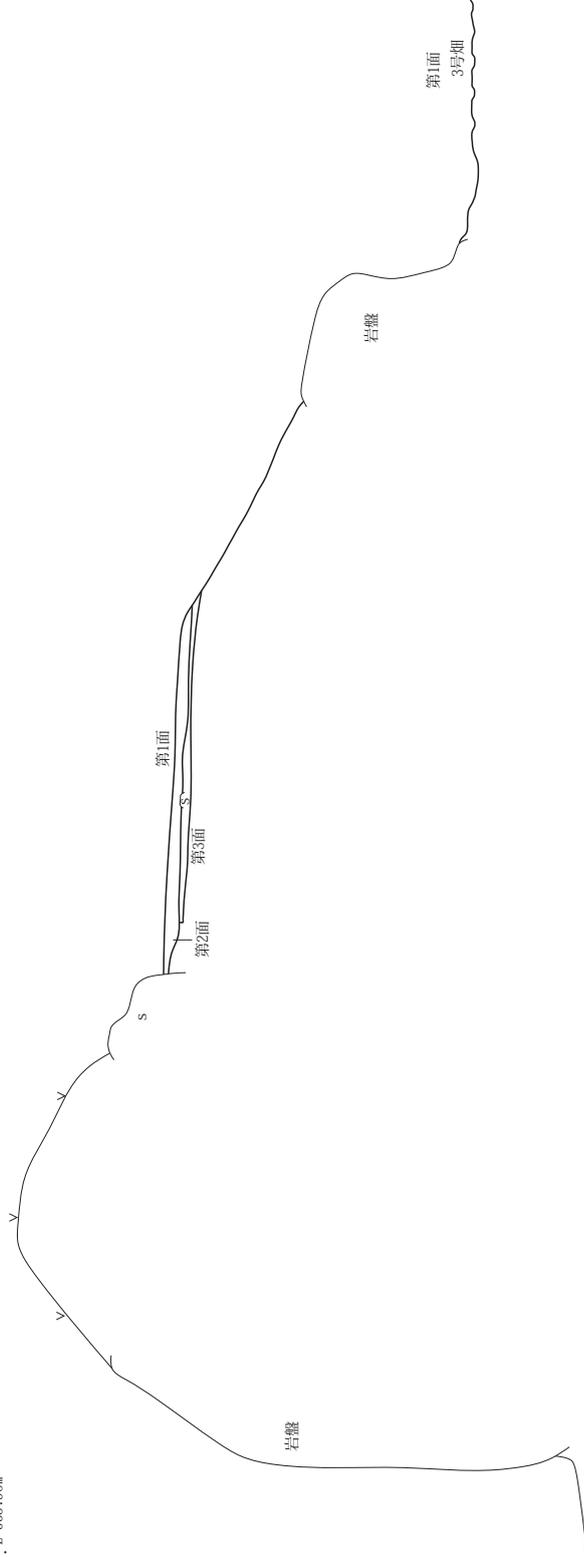
第29図 近世 A区1.5面 1・2号暗渠



第30图 近世 B区1面 全体图

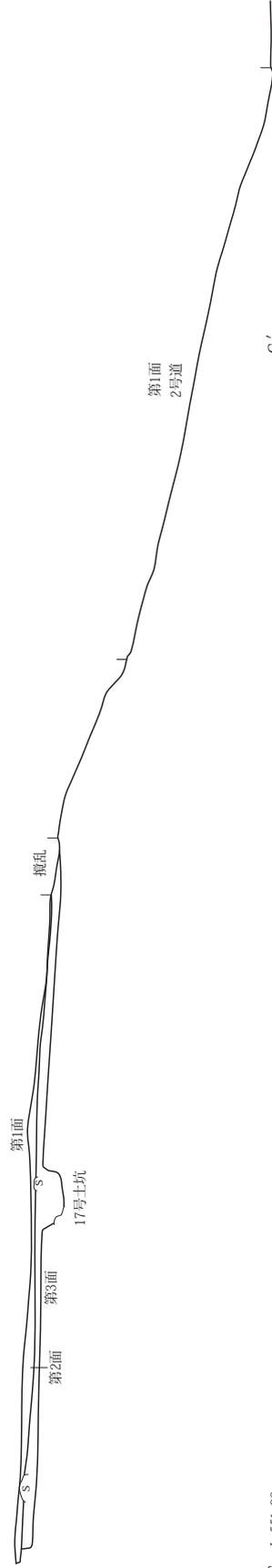
.A'

.A, L=533.90m



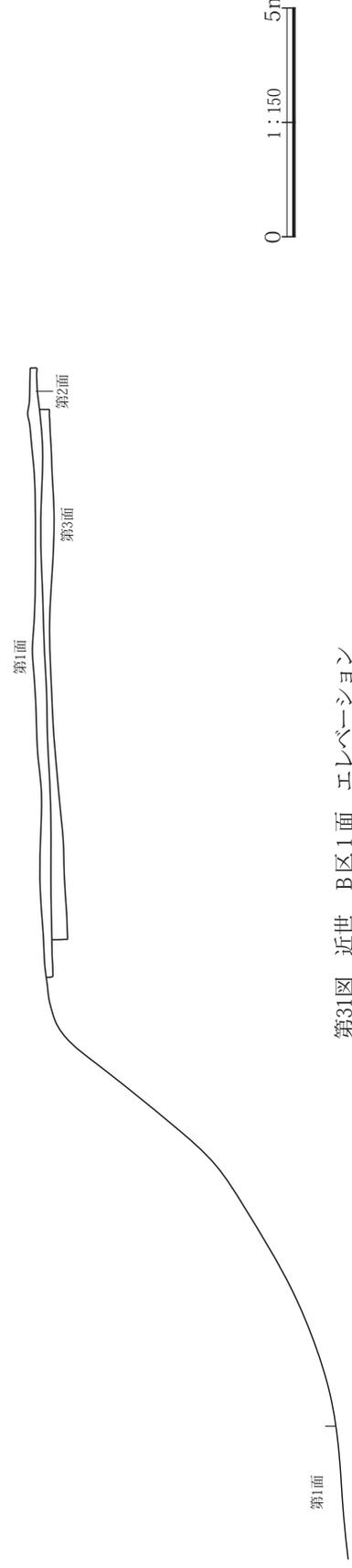
.B'

.B, L=551.90m



.C'

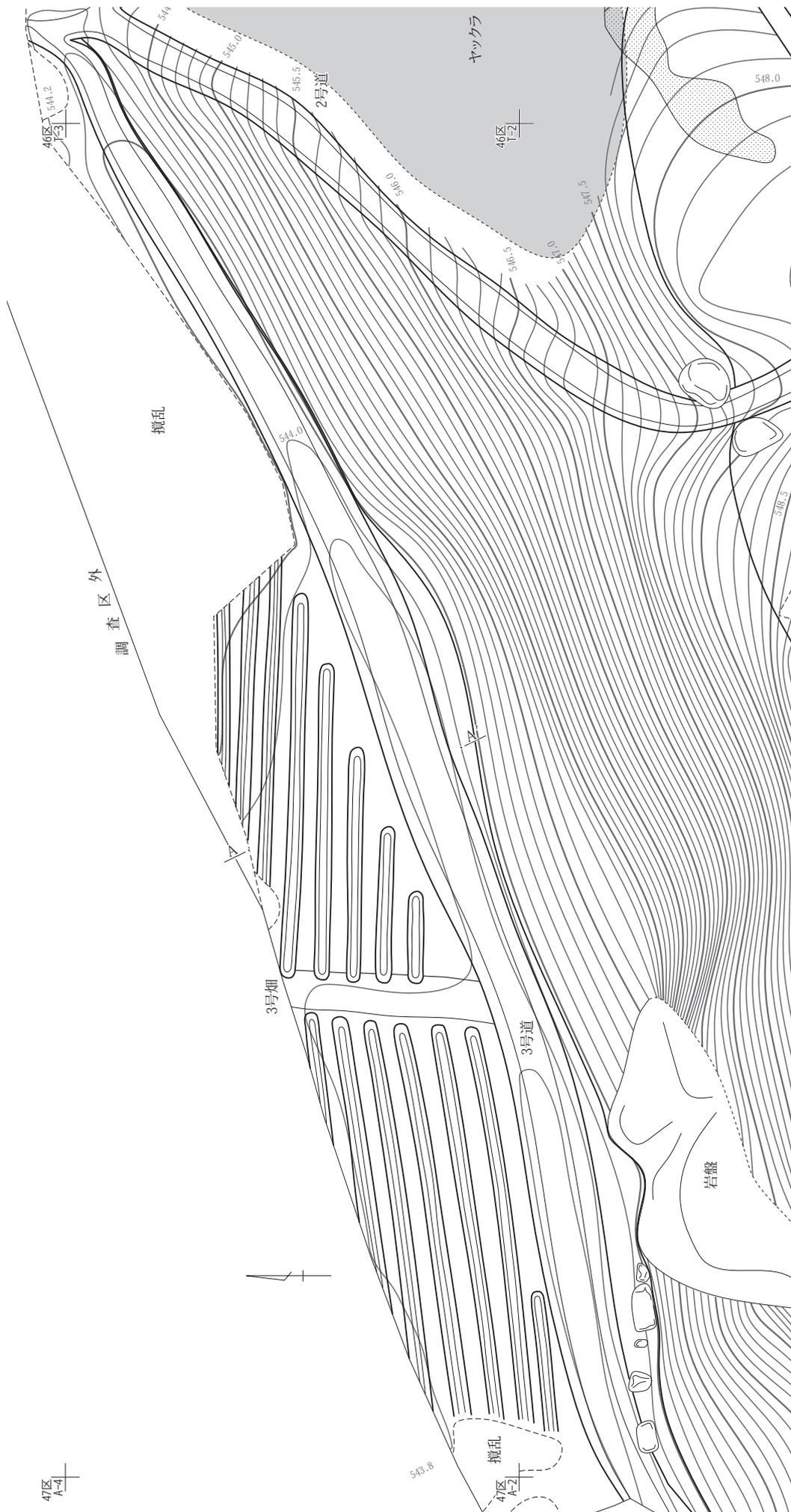
.C, L=551.90m



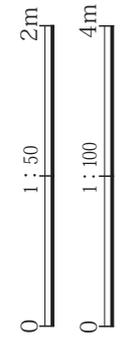
近世 遺構図



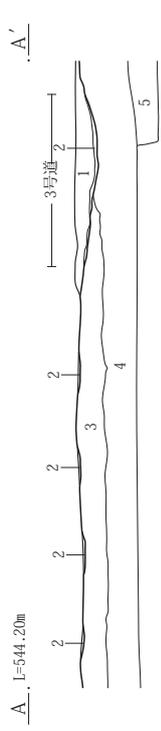
第31図 近世 B区1面 エレベーション



近世 遺構図



- 3号畑
- 1 基本土層II
 - 2 基本土層III
 - 3 基本土層IV
 - 4 基本土層IVに似ているが、小礫が少なく均質土。
 - 5 基本土層IVに似ているが、こぶし大の垂円礫を少量含む。

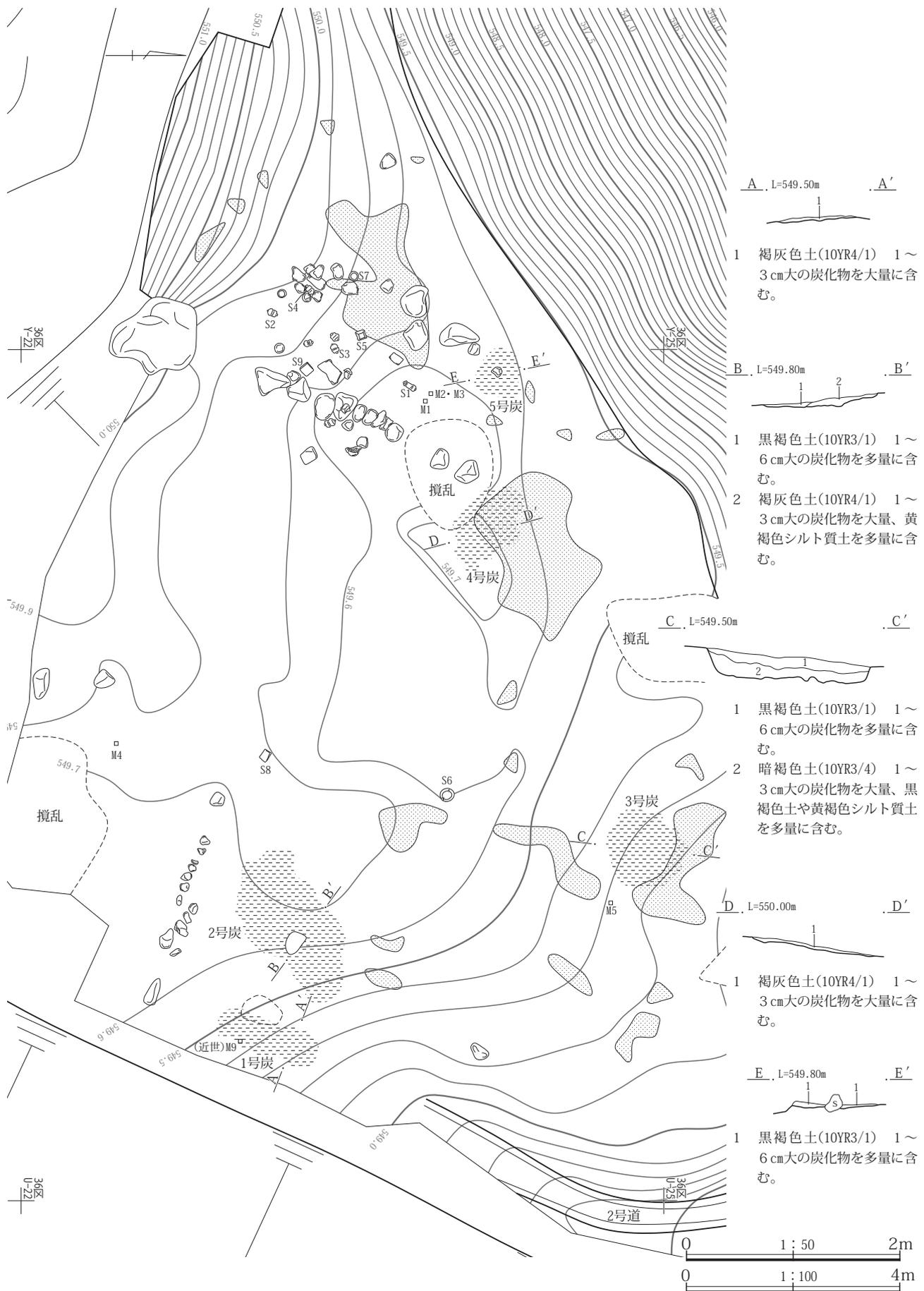


第33図 近世 B区1面 3号畑、3号道

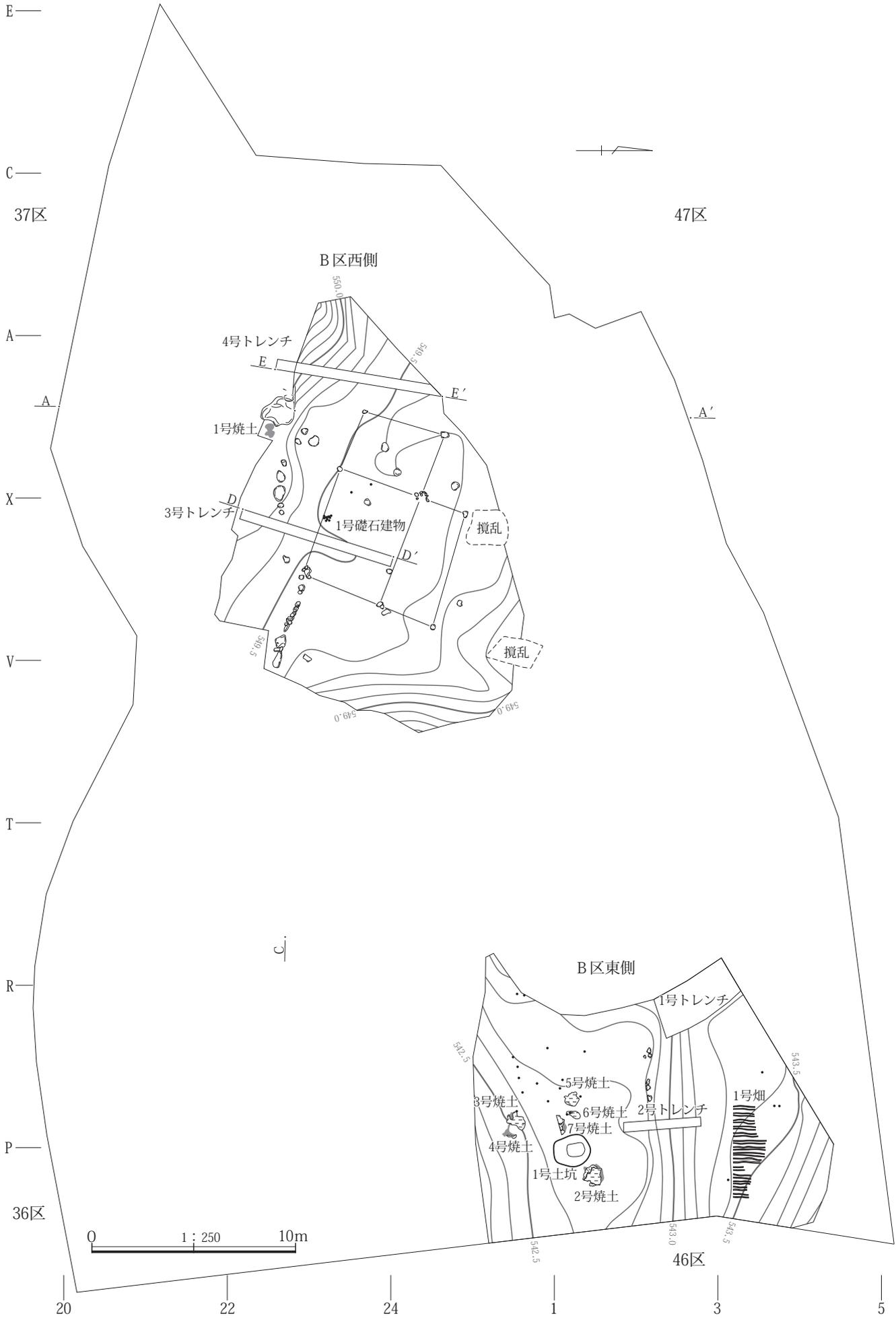


第34図 近世 B区1面 1・2号道

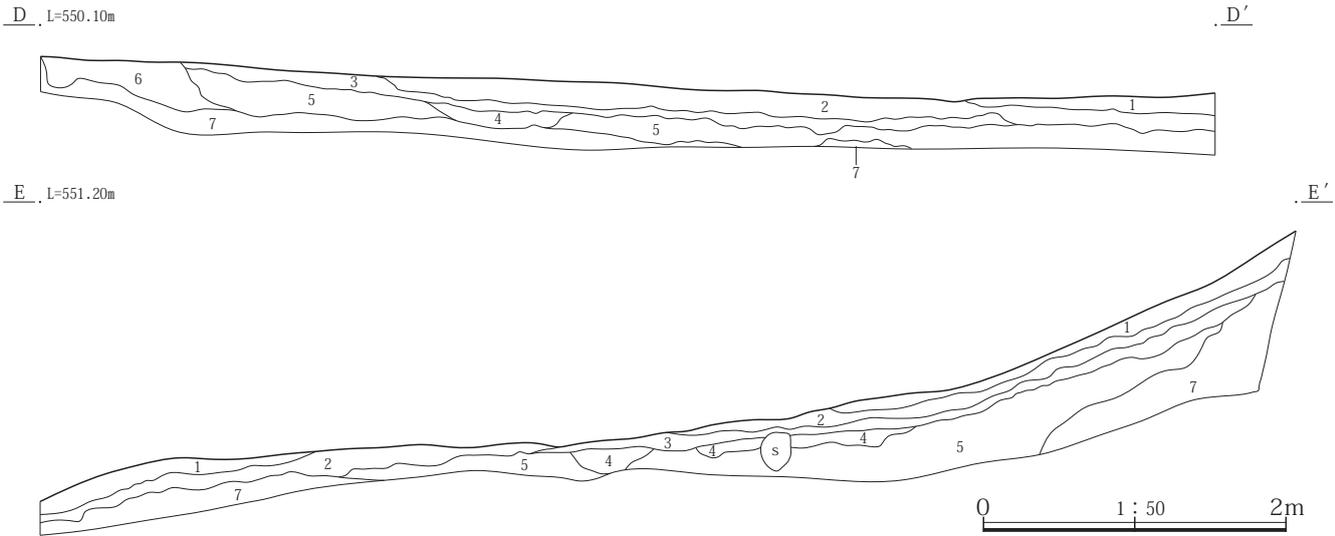
近世 遺構図



第35図 近世 B区1面 1~5号炭化物

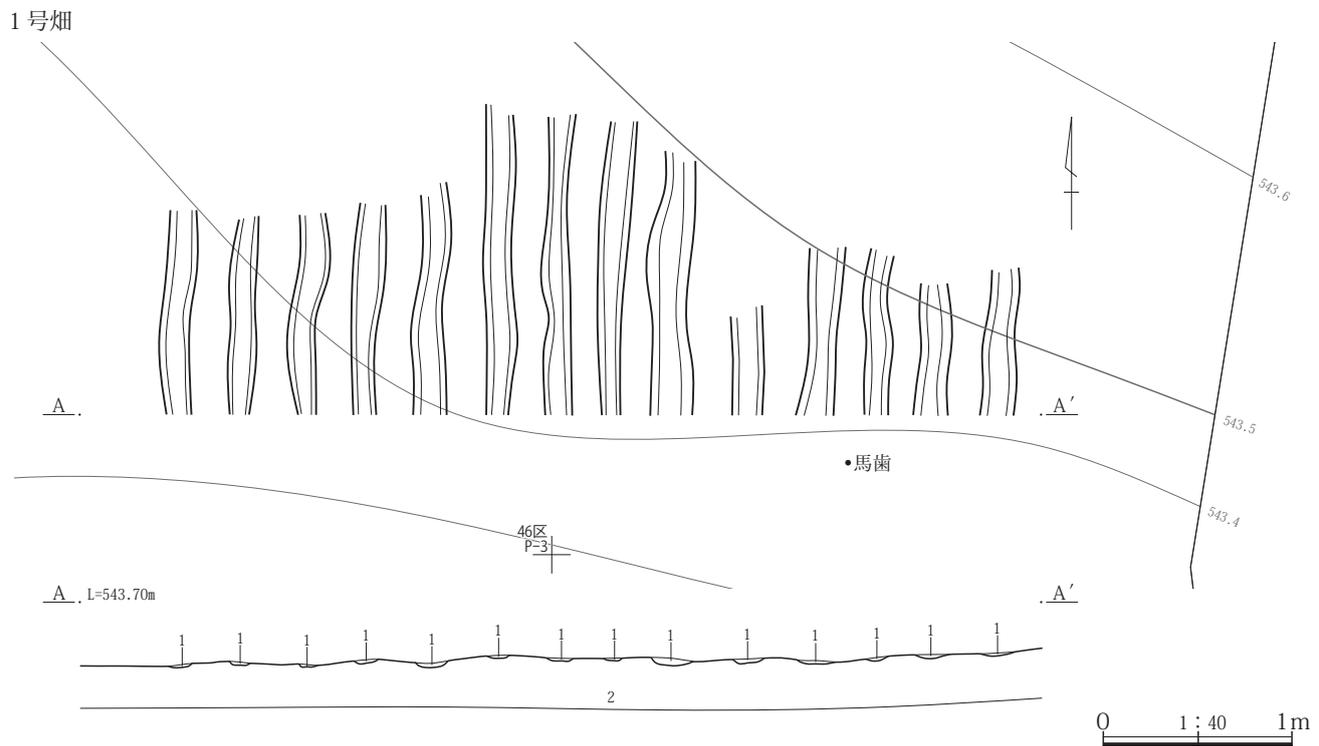


第36図 中・近世 B区2面 全体図



3・4号トレンチ

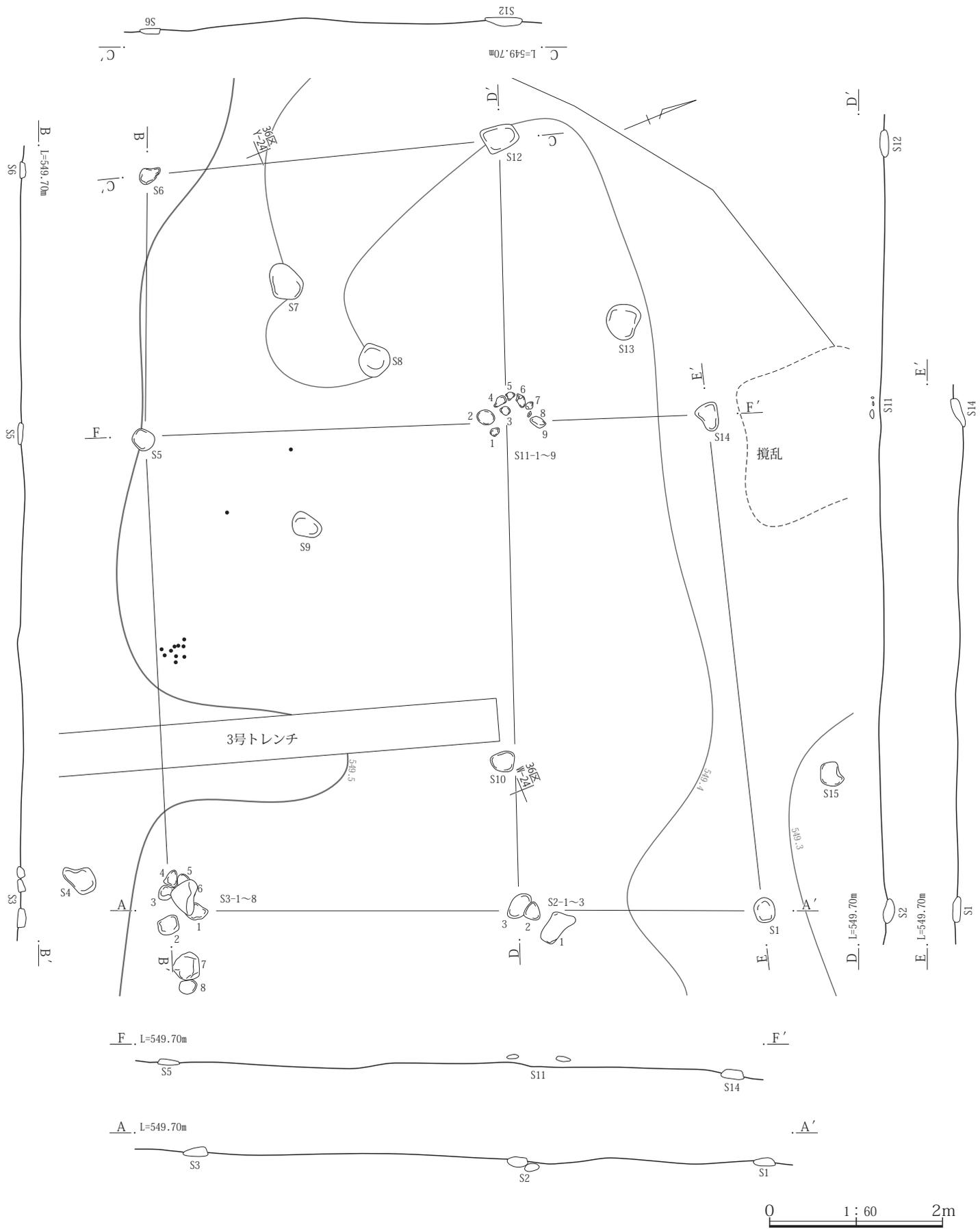
- 1 暗褐色土(10YR3/4) 1面目の土。白色粒・黄橙色粒を若干含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) やや締り有。炭化物粒を多量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。
- 3 明黄褐色土(10YR7/6) やや明るい。黄橙色粘質ブロック土主体。黒褐色ブロック土が混じる。お堂面に広く分布。
- 4 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。
- 5 黒褐色土(10YR2/2) 明黄褐色砂質土を大量、白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。
- 6 暗褐色土(10YR3/3) 黄橙色粘質極小ブロック土を多量、炭化物粒を若干含む。
- 7 基本土層Ⅷ 人頭大の亜円礫を多量に含む。



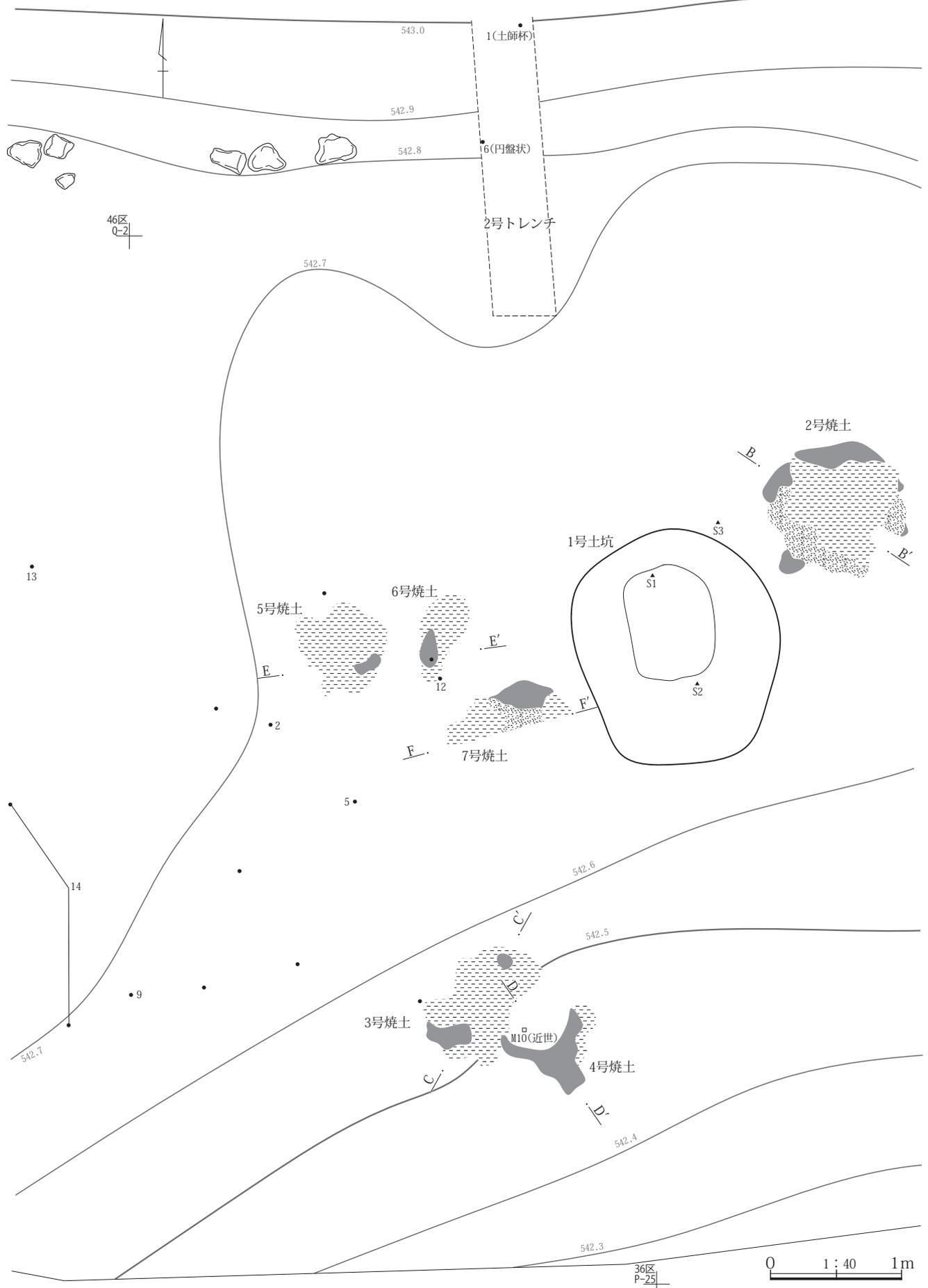
- 1 基本土層Ⅴ
- 2 基本土層Ⅵ

第37図 中・近世 B区2面 3・4号トレンチ断面、1号畑

第3章 発見された遺構と遺物



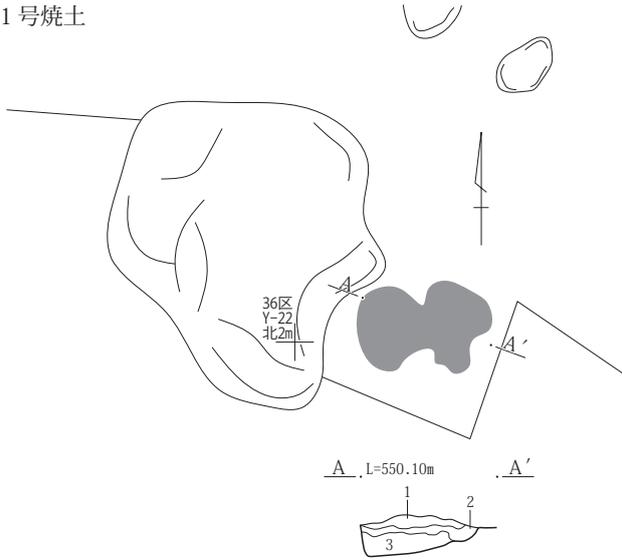
第38図 中・近世 B区2面 1号礎石建物



第39図 中・近世 B区2面 2~7号焼土

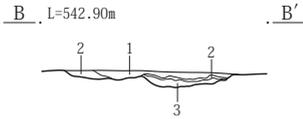
第3章 発見された遺構と遺物

1号焼土



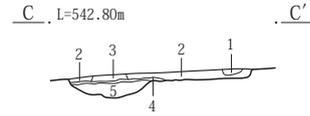
- 1 赤褐色土(5YR4/6) 焼土。炭化物粒を少量含む。
- 2 褐色土(10YR4/4) 炭化物・焼土ブロックを多量、白色粒を少量含む。
- 3 黒褐色土(10YR2/3) 白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。

2号焼土



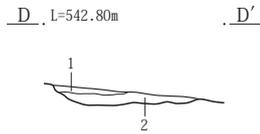
- 1 黒色土(10YR2/1) 炭層。不均質土で灰や黒褐色土が混じる。
- 2 灰白色土(2.5Y8/1) 灰層。均質土。
- 3 黄橙色土(7.5YR8/8) 焼土。砂質粘土。小礫を少量含む。

3号焼土



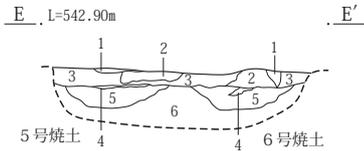
- 1 浅黄橙色土(10YR8/4) やや砂質。焼土や黒色土が混じる。
- 2 黒色土(10YR2/1) やや赤みを帯びる。炭化物粒を多量に含む。
- 3 赤褐色土(5YR4/8) 砂質シルト。小礫・暗褐色土を少量含む。
- 4 灰白色土(2.5Y8/1) 灰層。均質土。
- 5 黄橙色土(7.5YR8/8) 焼土。砂質粘土。小礫を少量含む。

4号焼土



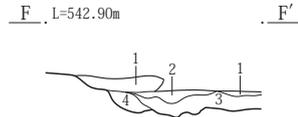
- 1 黒褐色土(10YR2/3) 小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
- 2 赤褐色土(5YR4/8) 砂質シルト。小礫・暗褐色土を少量含む。

5・6号焼土

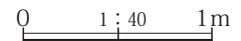


- 1 黒色土(10YR2/1) やや赤みを帯びる。炭化物粒を多量に含む。
- 2 赤褐色土(5YR4/8) 砂質シルト。小礫・暗褐色土を少量含む。
- 3 黒褐色土(10YR2/3) 小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
- 4 灰白色土(2.5Y8/1) 灰層。均質土。
- 5 黄橙色土(7.5YR8/8) 焼土。砂質粘土。小礫を少量含む。
- 6 基本土層VI

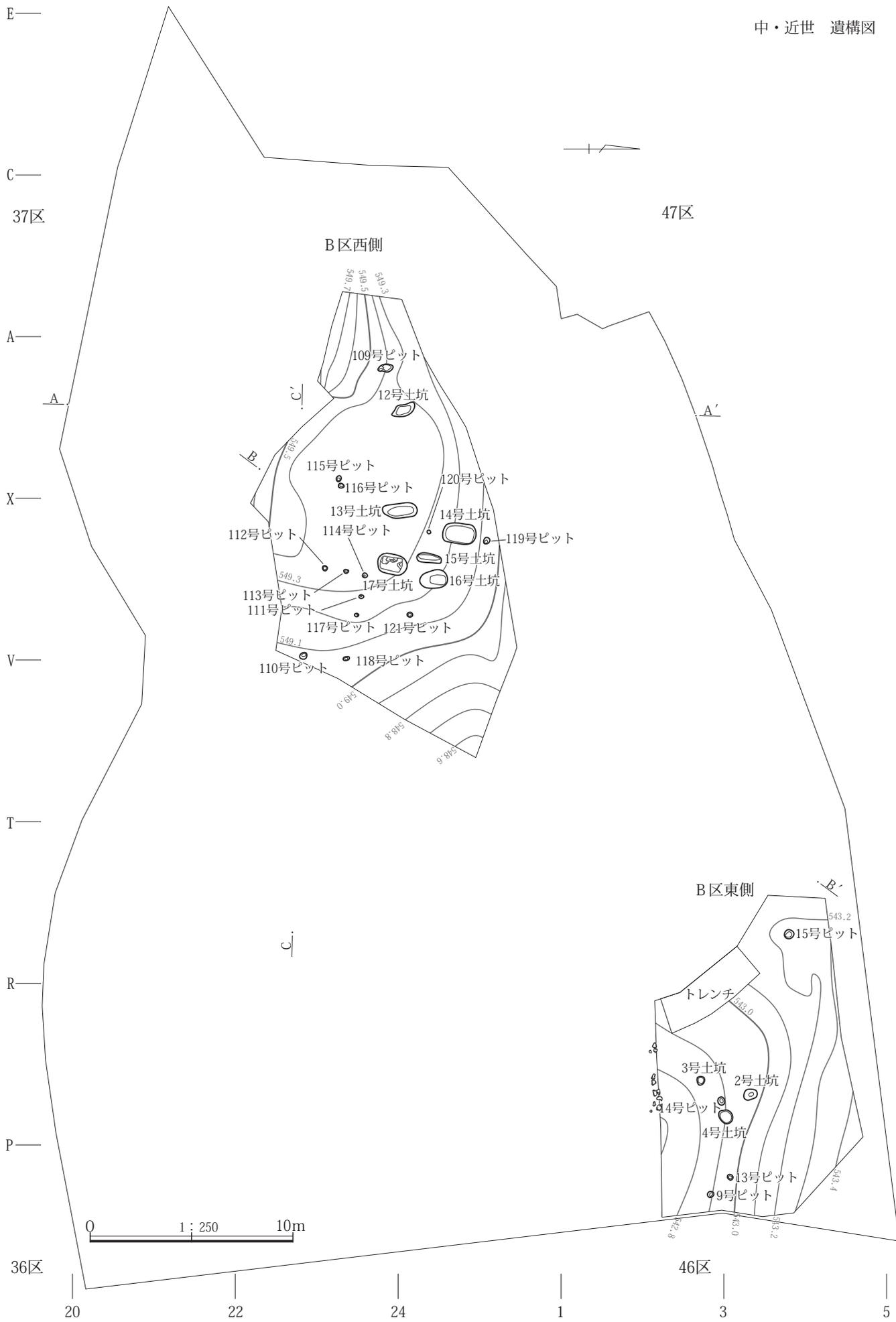
7号焼土



- 1 黒色土(10YR2/1) 炭層。不均質土で灰や黒褐色土が混じる。
- 2 灰白色土(2.5Y8/1) 灰層。均質土。
- 3 黄橙色土(7.5YR8/8) 焼土。砂質粘土。小礫を少量含む。
- 4 黒褐色土(10YR2/2) やや紫を帯びる。



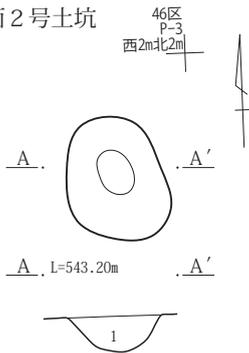
第40図 中・近世 B区2面 1号焼土、2～7号焼土断面



第41図 中・近世 B区3面 全体図

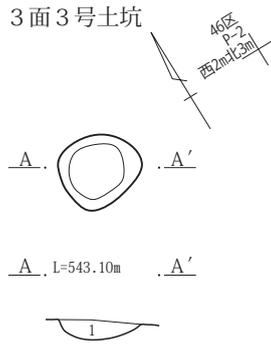
第3章 発見された遺構と遺物

3面2号土坑



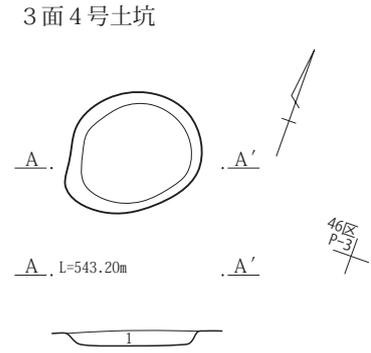
1 褐灰色土(10YR4/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。

3面3号土坑



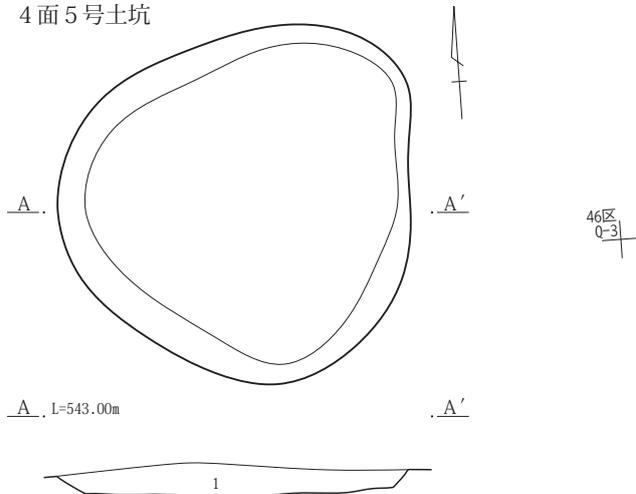
1 褐灰色土(10YR4/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。

3面4号土坑



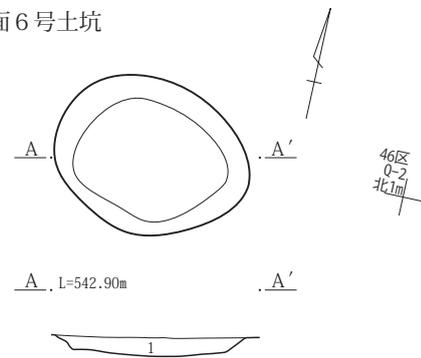
1 褐灰色土(10YR4/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。

4面5号土坑



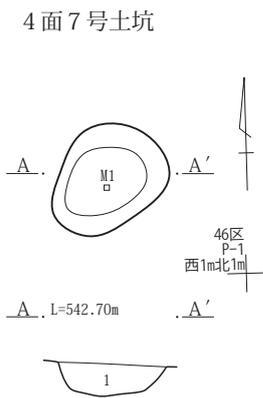
1 褐灰色土(10YR4/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。

4面6号土坑



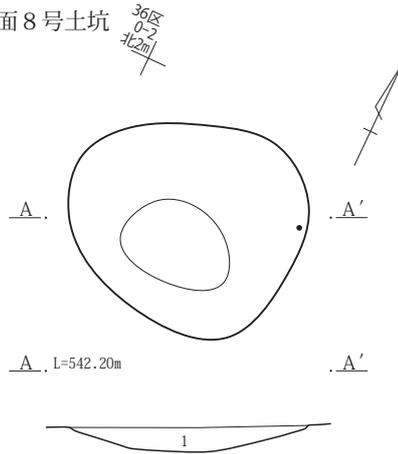
1 黒褐色土(10YR2/2) 黒色強い。炭化物粒を多量に含む。

4面7号土坑



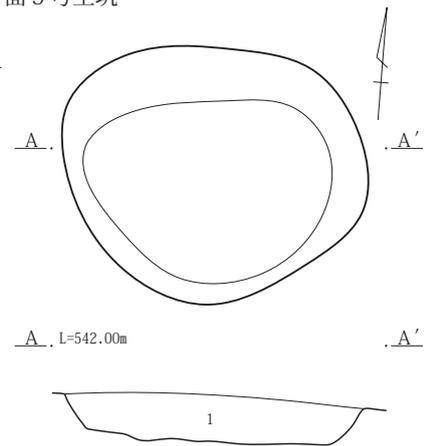
1 褐灰色土(10YR4/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。

4面8号土坑

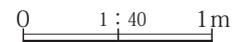


1 褐灰色土(10YR4/1) やや砂質土。小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。

4面9号土坑

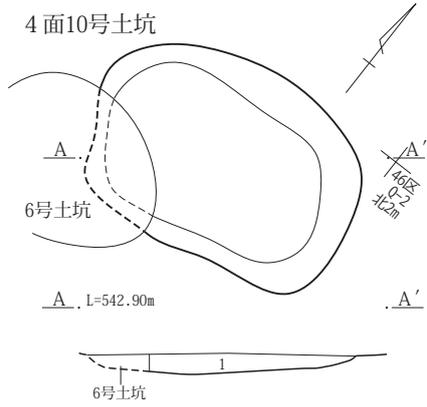


1 褐灰色土(10YR4/1) やや砂質土。小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量、白色粘質ブロック土を少量、1~2cm大の黄軽石を若干含む。

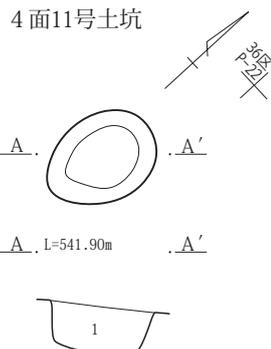


第42図 中・近世 B区3・4面 2~9号土坑

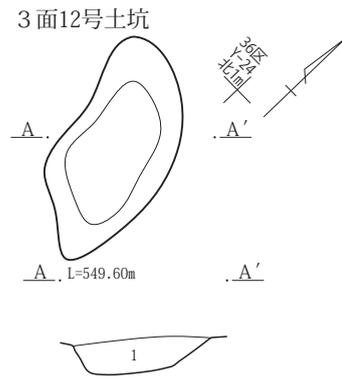
中・近世 遺構図



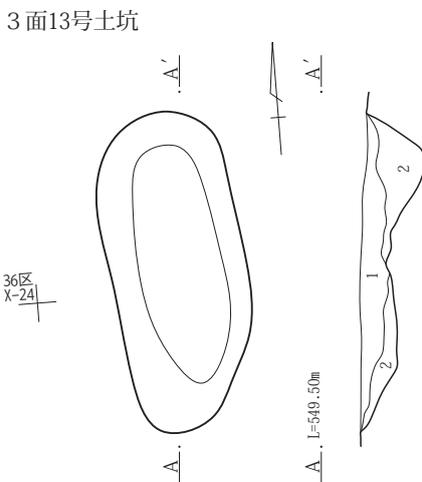
- 1 褐灰色土(10YR4/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。



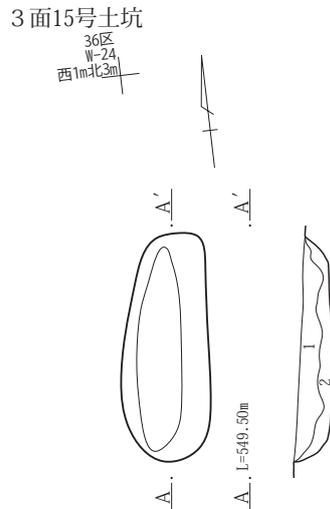
- 1 褐灰色土(10YR4/1) やや砂質土。小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。



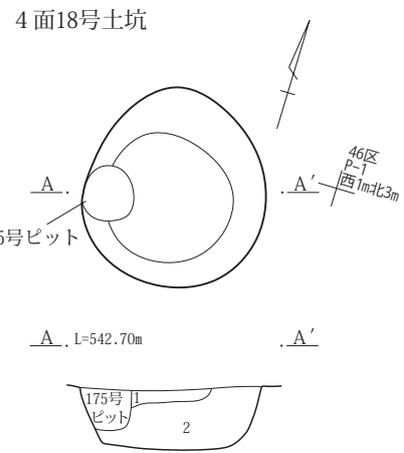
- 1 黒褐色土(10YR2/2) やや明るい均質土。明黄褐色砂質土・炭化物粒を多量、白色粒・黄橙色粒を若干含む。



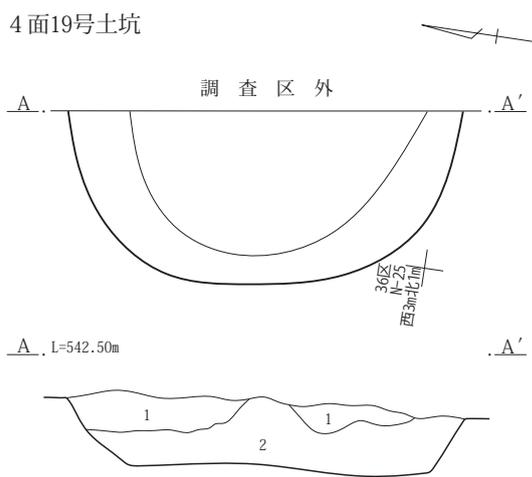
- 1 黒褐色土(10YR2/1) やや淡く灰色帯びる。白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量、黄橙色粘質ブロック土を少量含む。
2 黄褐色土(10YR5/8) シルト質砂。炭化物・灰・5cm以下の亜円礫を少量、黒褐色土を斑状に含む。



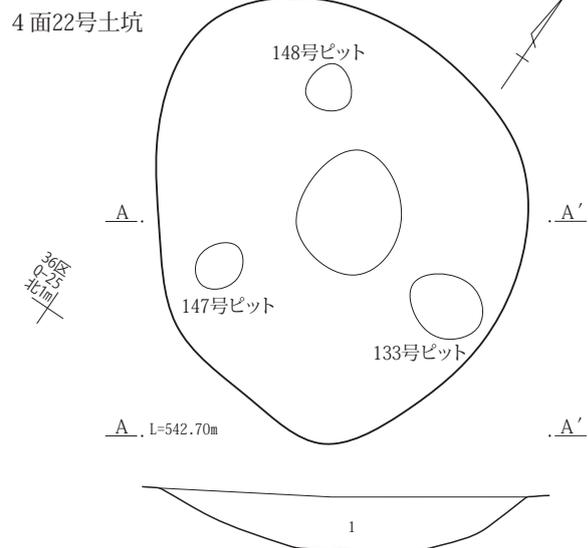
- 1 黒褐色土(10YR2/1) やや淡く灰色帯びる。白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量、黄橙色粘質ブロック土を少量含む。
2 黄褐色土(10YR5/8) シルト質砂。炭化物・灰・5cm以下の亜円礫を少量、黒褐色土を斑状に含む。



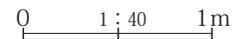
- 1 褐灰色土(10YR4/1) 鉄分沈着有。小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
2 暗褐色土(10YR3/4) 黒褐色ブロック土・白色粒・黄橙色粒を多量、炭化物粒を少量含む。



- 1 褐灰色土(10YR4/1) 鉄分沈着有。小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
2 暗褐色土(10YR3/4) 黒褐色ブロック土・白色粒・黄橙色粒を多量、炭化物粒を少量含む。

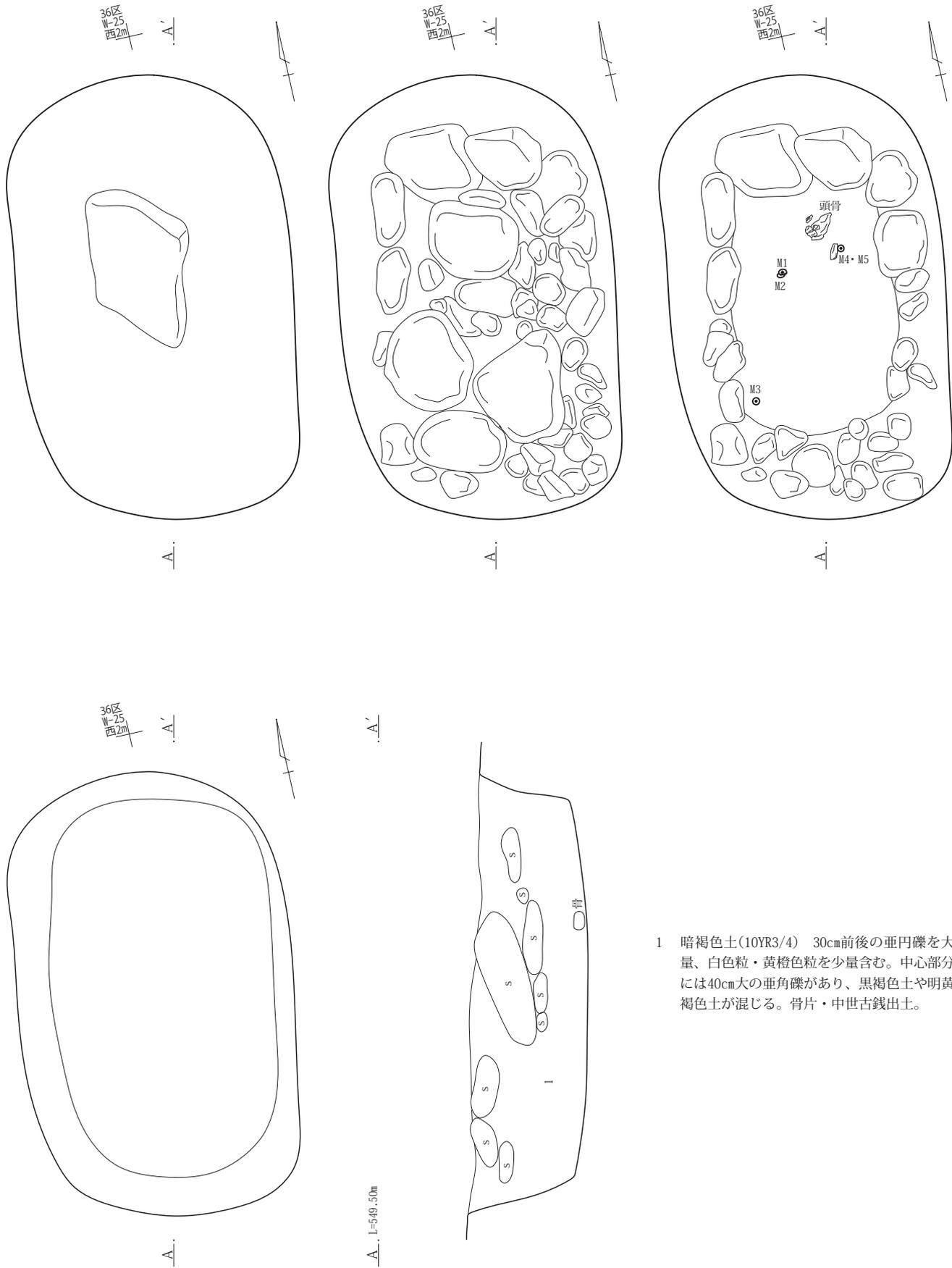


- 1 黒褐色土(10YR3/1) やや明るい。こぶし大の亜円礫を大量、白色粒・黄橙色粒を多量、炭化物を少量含む。



第43図 中・近世 B区3・4面 10~13・15・18・19・22号土坑

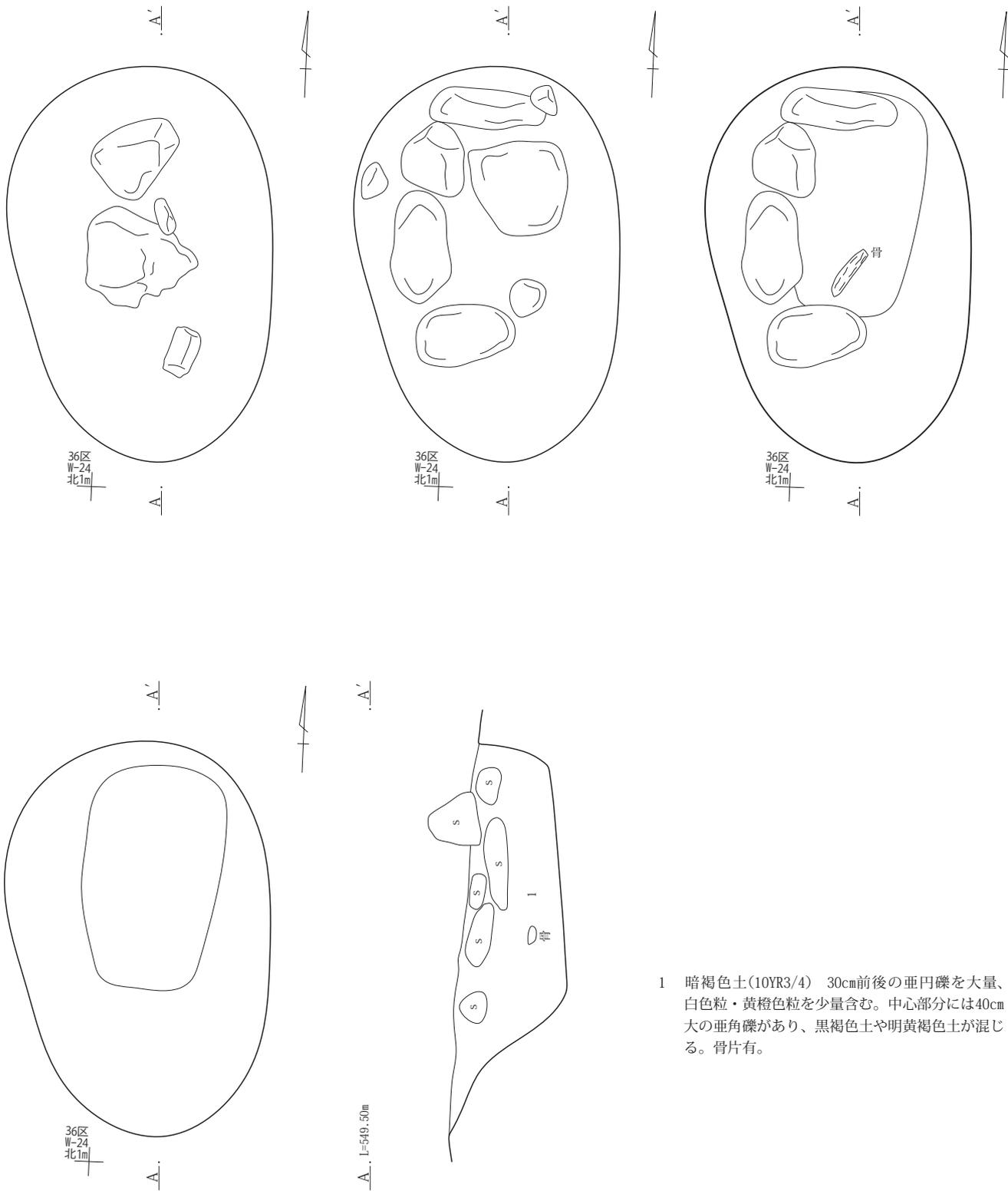
第3章 発見された遺構と遺物



1 暗褐色土(10YR3/4) 30cm前後の亜円礫を大量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。中心部分には40cm大の亜角礫があり、黒褐色土や明黄褐色土が混じる。骨片・中世古銭出土。

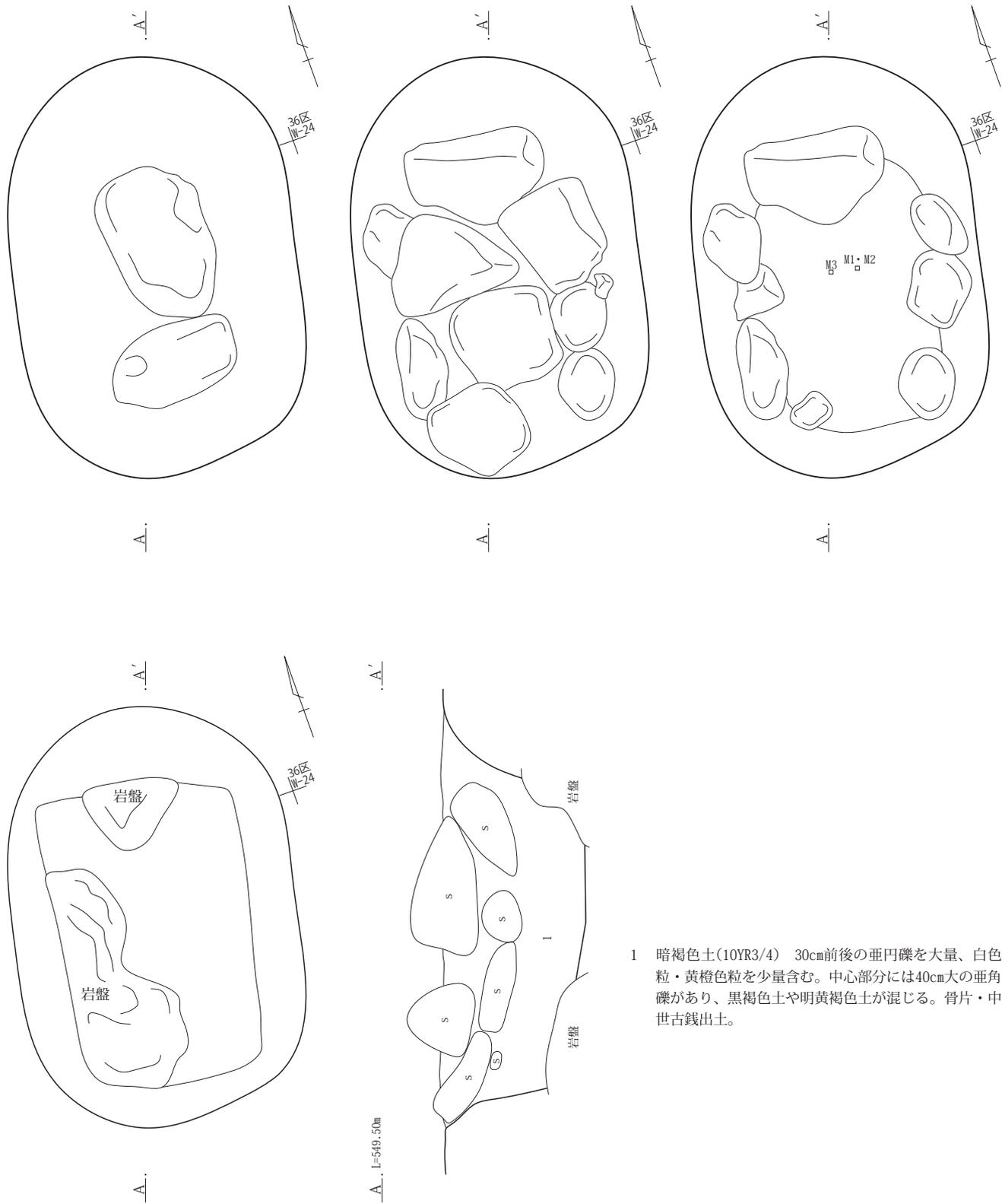
0 1:20 50cm

第44図 中・近世 B区3面 14号土坑(墓坑)



1 暗褐色土(10YR3/4) 30cm前後の亜円礫を大量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。中心部分には40cm大の垂角礫があり、黒褐色土や明黄褐色土が混じる。骨片有。

第45図 中・近世 B区3面 16号土坑(墓坑)



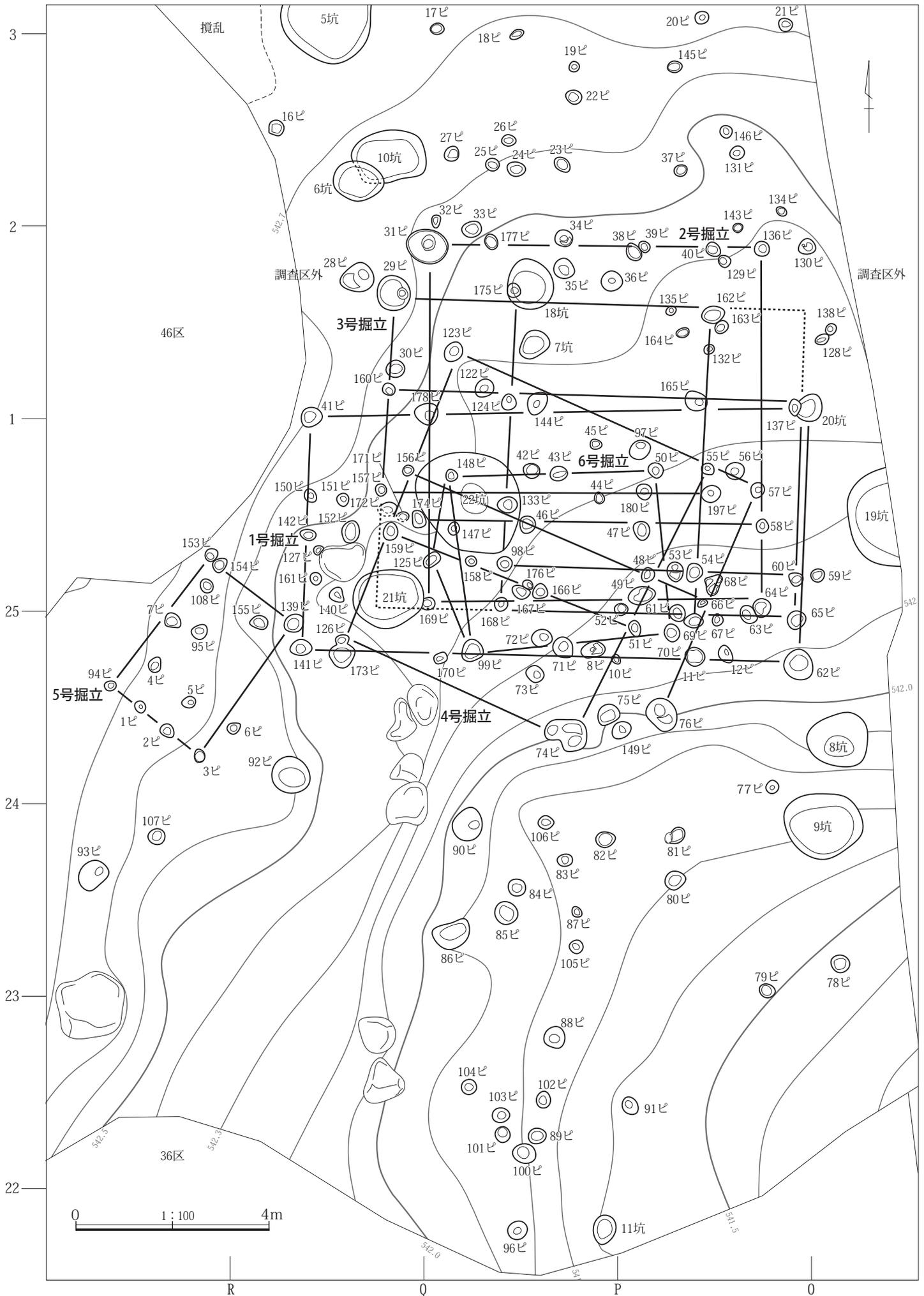
1 暗褐色土(10YR3/4) 30cm前後の垂円礫を大量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。中心部分には40cm大の垂角礫があり、黒褐色土や明黄褐色土が混じる。骨片・中世古銭出土。

0 1:20 50cm

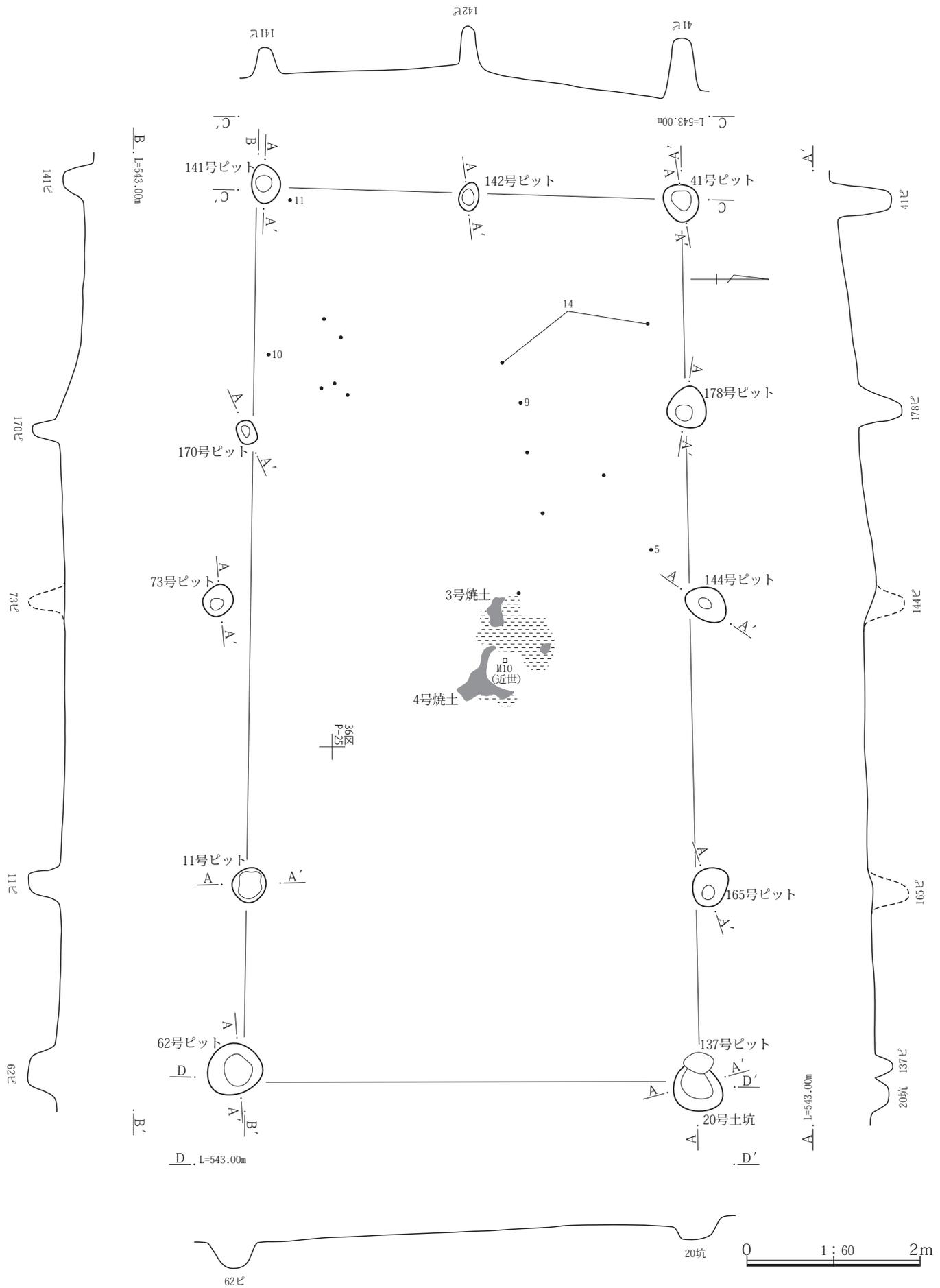
第46図 中・近世 B区3面 17号土坑(墓坑)



第47图 平安・中・近世 B区4面 全体图

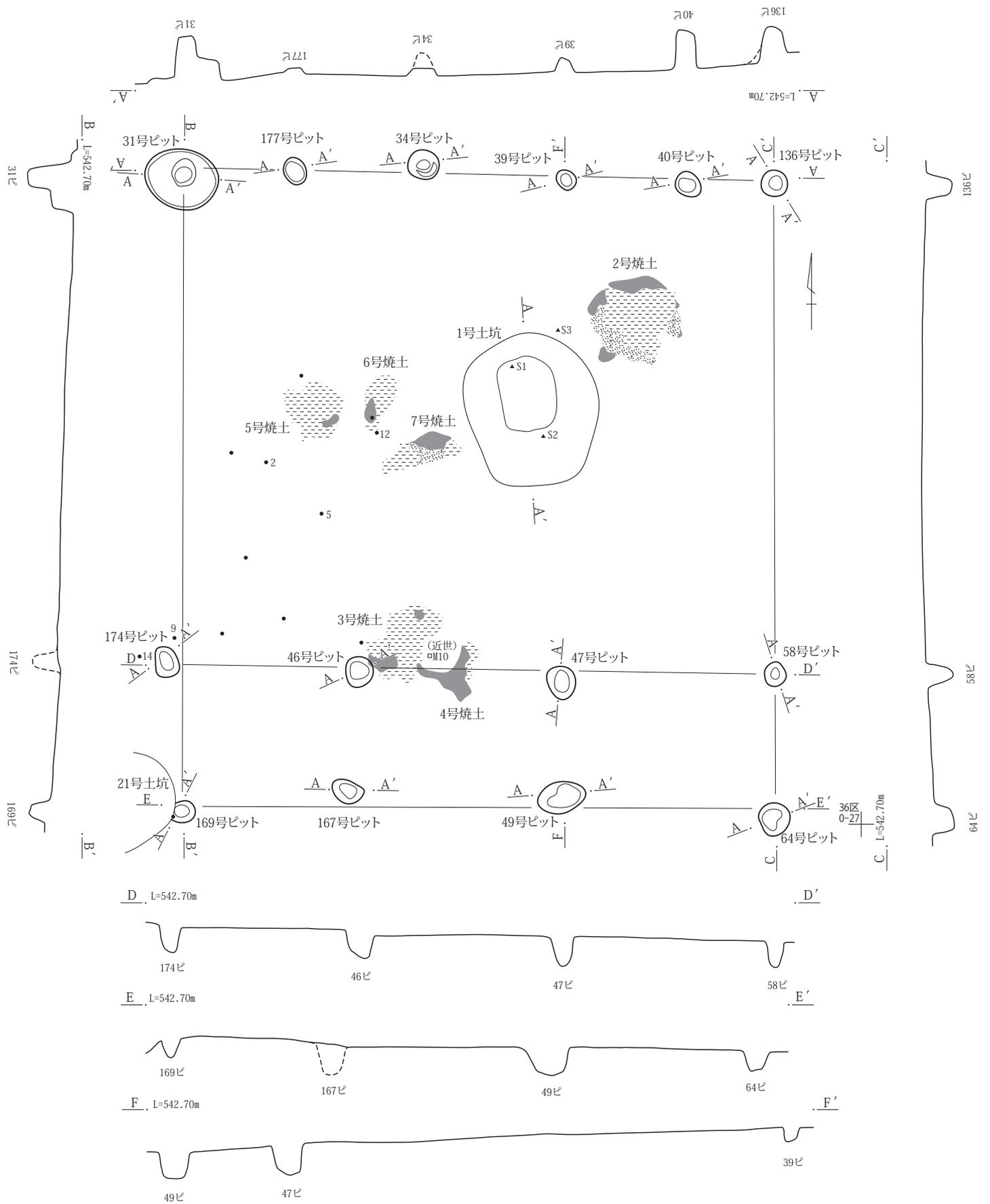


第48図 中・近世 B区4面 1～6号掘立柱建物、土坑・ピット群



第49図 中・近世 B区4面 1号掘立柱建物

第3章 発見された遺構と遺物



第50図 中・近世 B区4面 2号掘立柱建物

1号掘立柱建物

20号土坑
A, L=542.50m, A'



1 褐灰色土(10YR4/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を多量に含む。1~2cm大の黄軽石を若干含む。

11号ピット
A, L=542.40m, A'



41号ピット
L=543.00m
A, A'



62号ピット
A, L=542.40m, A'



73号ピット
L=542.50m
A, A'



141号ピット
L=542.80m
A, A'



142号ピット
L=542.60m
A, A'



144号ピット
A, L=542.50m, A'



165号ピット
L=542.60m
A, A'



170号ピット
L=542.40m
A, A'



178号ピット
L=542.70m
A, A'

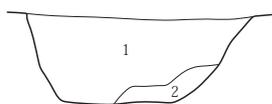


ピット

- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を少量、黄褐色砂質土を多量に含む。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。下位に1~15cm大の礫を多量に含む。

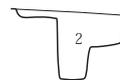
2号掘立柱建物

1号土坑
A, L=542.90m, A'



- 1 黒褐色土(10YR3/1) 1~30cm大の亜角礫や亜円礫・白色粒を多量に含む。石白出土。
- 2 黒褐色土(10YR2/3) やや淡くやわらかい。暗褐色土混じりの土。石製丸軋出土。

31号ピット
A, L=542.90m, A'



34号ピット
L=542.80m
A, A'



39号ピット
L=542.70m
A, A'



40号ピット
L=542.70m
A, A'



46号ピット
L=542.60m
A, A'



47号ピット
L=542.50m
A, A'



49号ピット
A, L=542.40m, A'



58号ピット
L=542.50m
A, A'



64号ピット
L=542.40m
A, A'



136号ピット
L=542.50m
A, A'



167号ピット
L=542.50m
A, A'



169号ピット
L=542.50m
A, A'



174号ピット
L=542.70m
A, A'



177号ピット
L=542.70m
A, A'



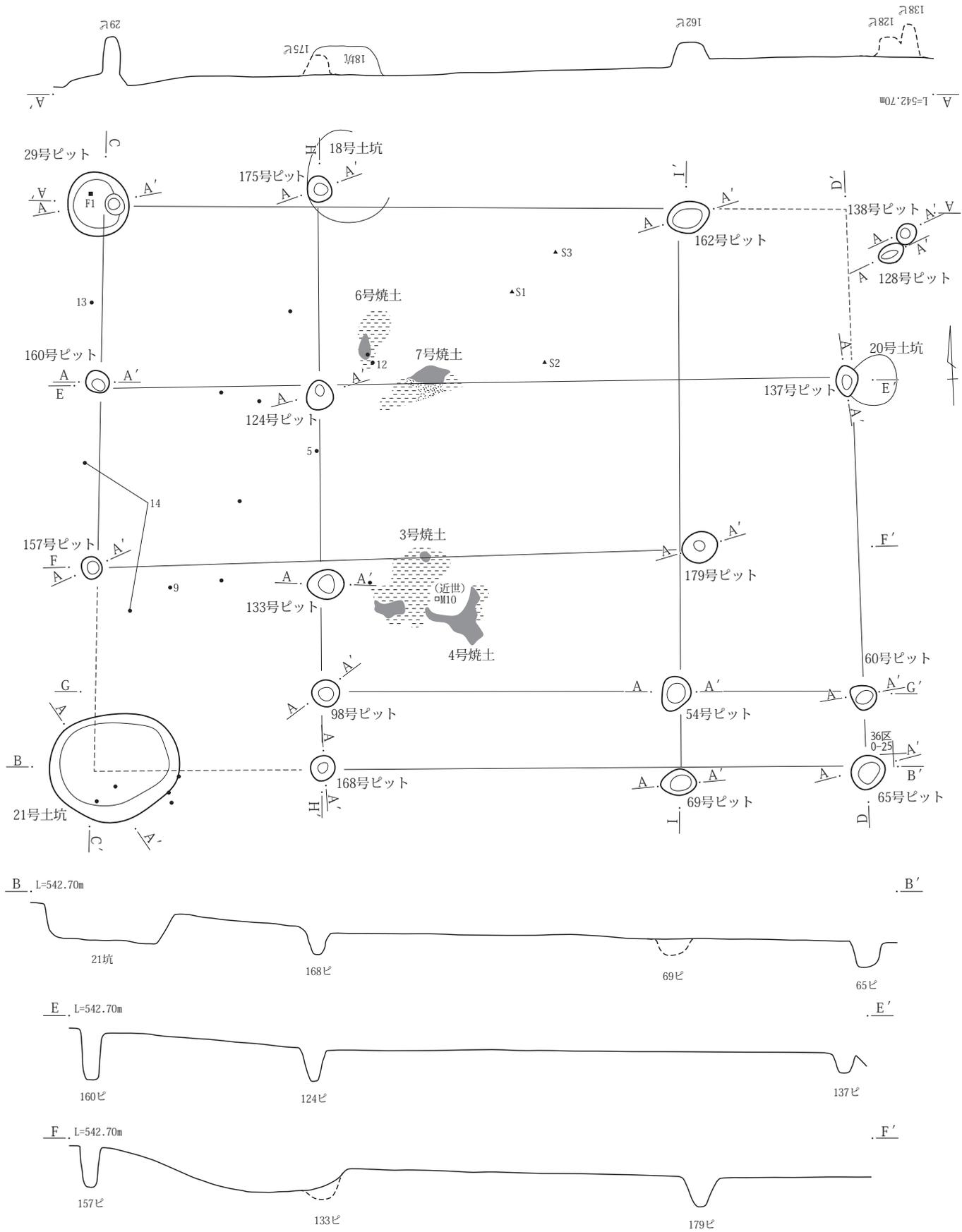
ピット

- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を少量、小礫・黄褐色砂質土を多量に含む。
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 基本土層VI相当。にぶい黄褐色ブロック土を少量含む。
- 3 褐灰色土(10YR4/1) 基本土層VI相当。鉄分沈着を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/1) 基本土層VI相当。白色粘質土・炭化物を若干含む。
- 5 褐灰色土(10YR4/1) 基本土層VI相当。こぶし大の亜角礫・にぶい黄褐色ブロック土を少量含む。

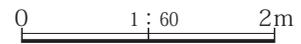
0 1:60 2m

第51図 中・近世 B区4面 1・2号掘立柱建物断面

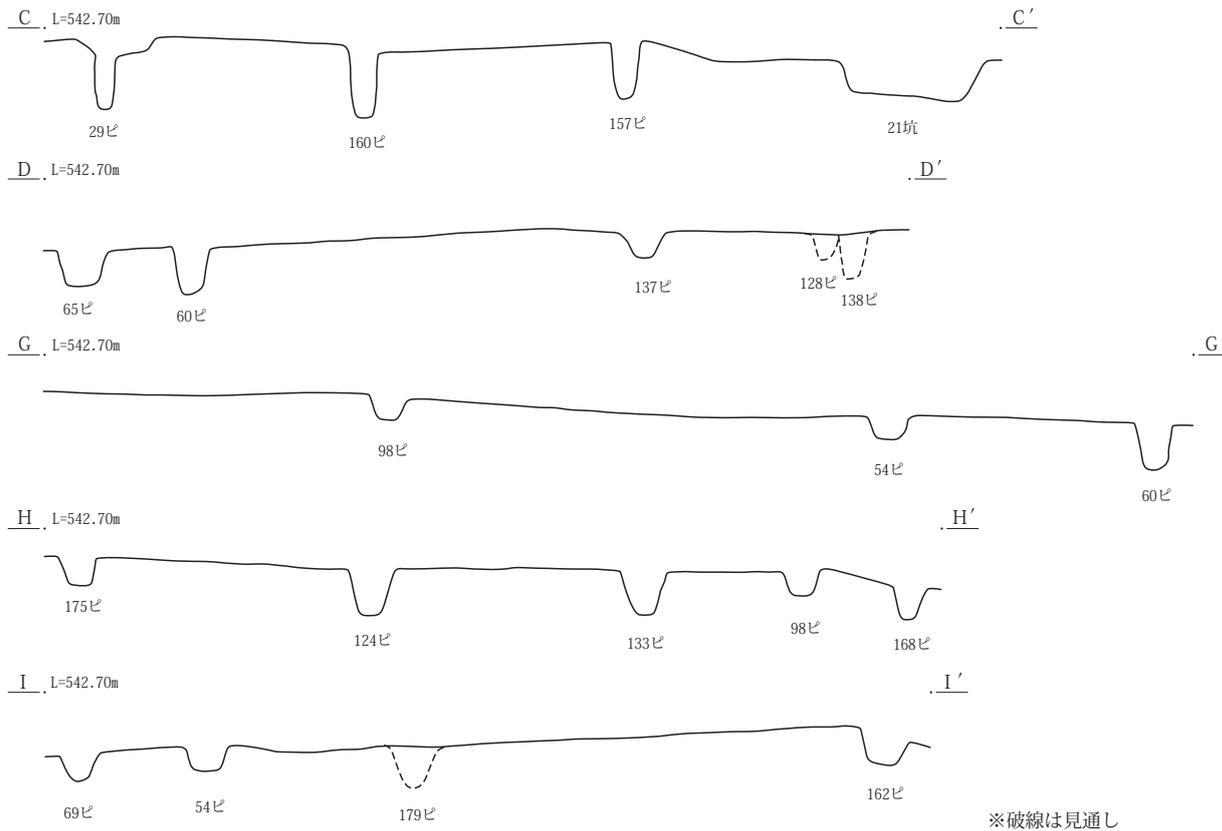
第3章 発見された遺構と遺物



※破線は見通し



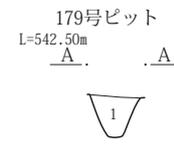
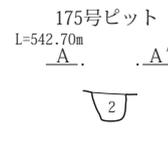
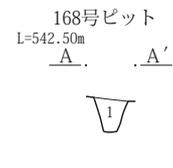
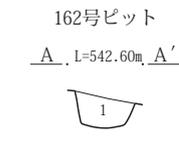
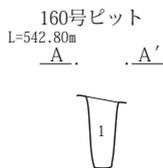
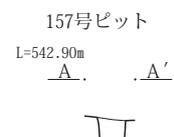
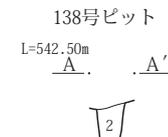
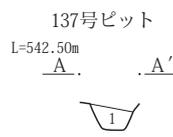
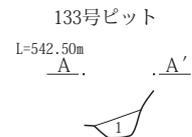
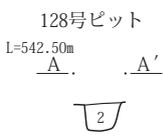
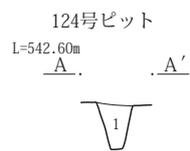
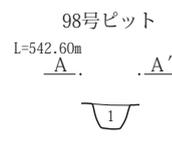
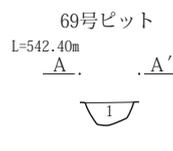
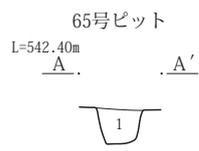
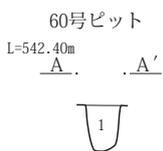
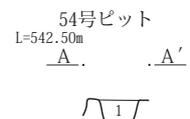
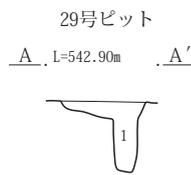
第52図 中・近世 B区4面 3号掘立柱建物



※破線は見通し



- 1 黒褐色土(10YR3/1) やや明るい。小〜こぶし大の礫を大量、白色粒・黄橙色粒を多量、炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 明黄褐色砂質ブロック土を多量に含む。



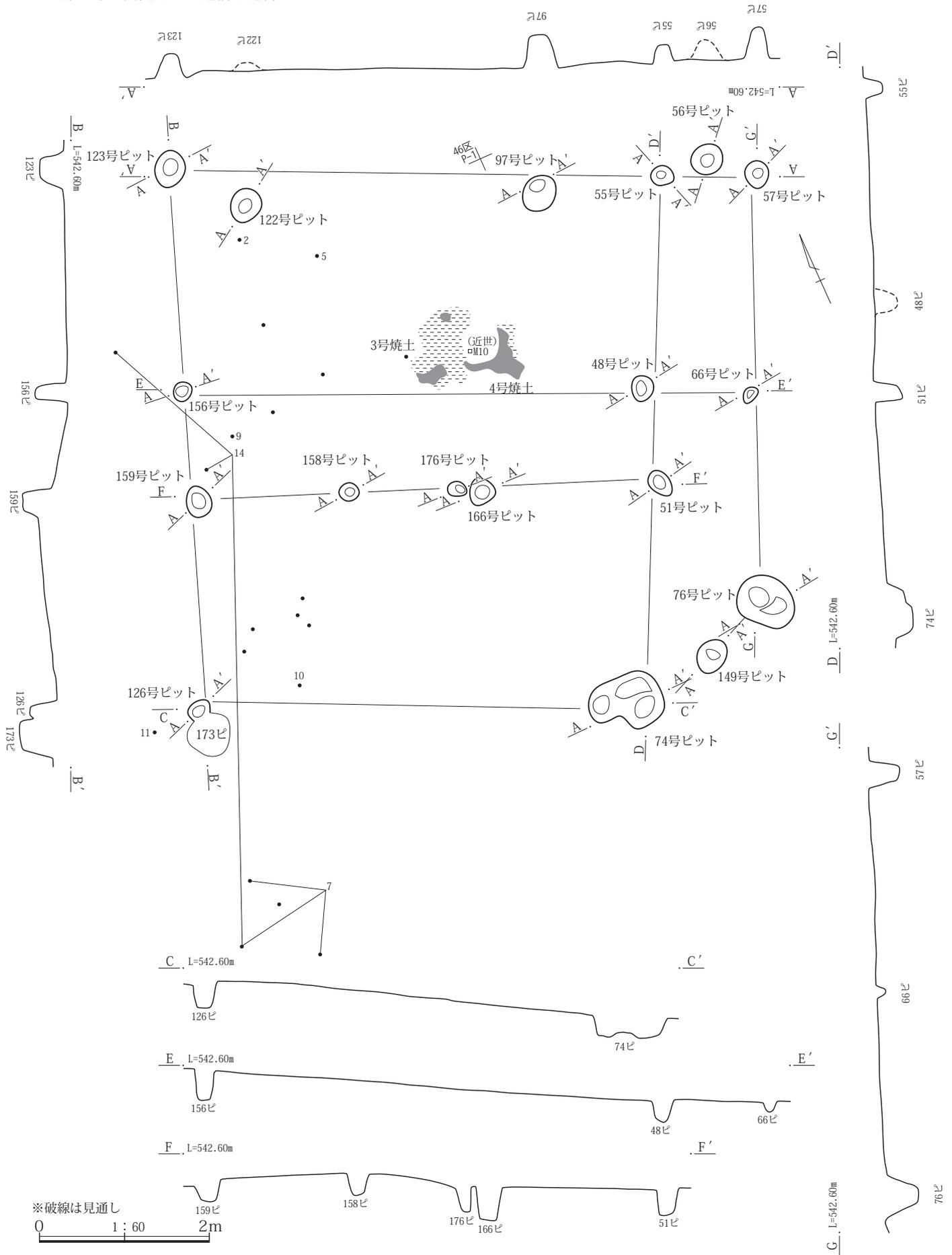
ピット

- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を少量、黄褐色砂質土を多量に含む。
- 2 褐灰色土(10YR4/1) 基本土層VI相当。にぶい黄褐色ブロック土を少量含む。



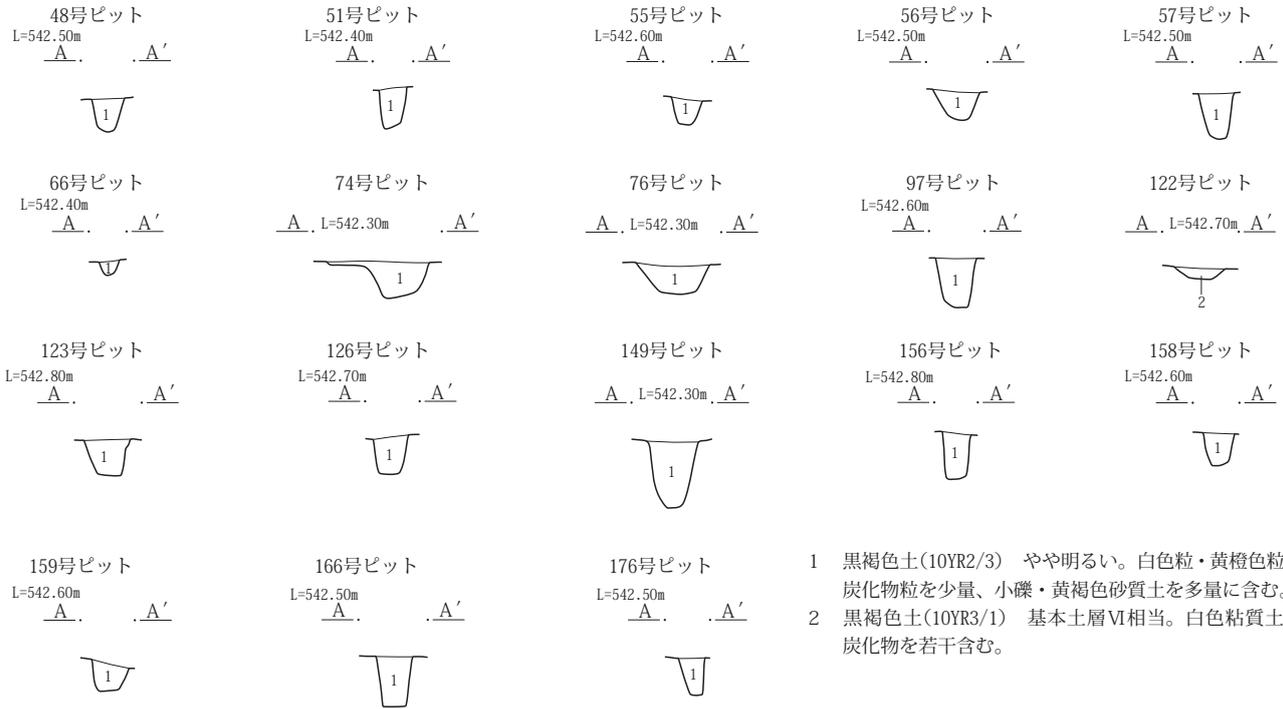
第53図 中・近世 B区4面 3号掘立柱建物エレベーション・断面

第3章 発見された遺構と遺物



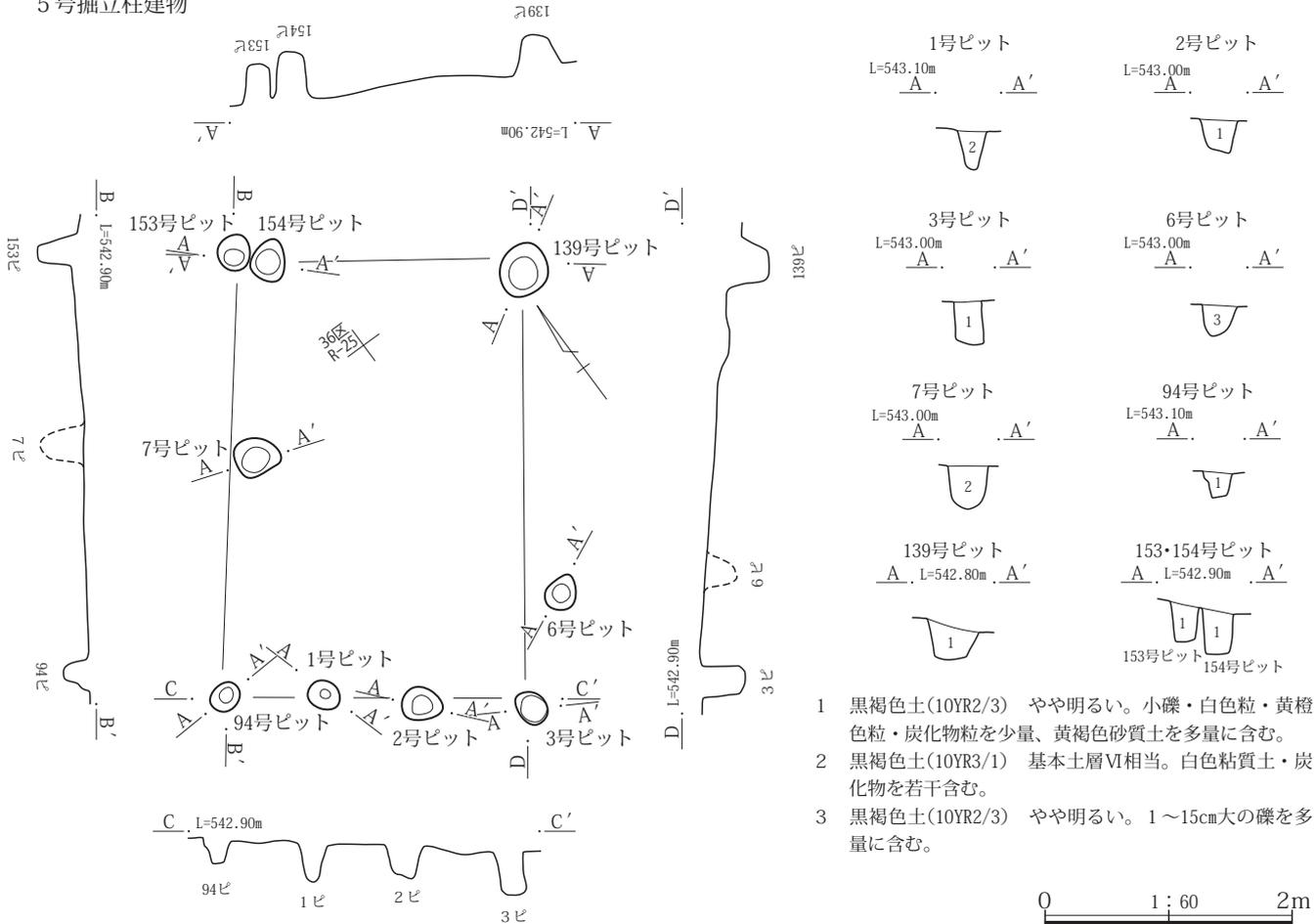
第54図 中・近世 B区4面 4号掘立柱建物

4号掘立柱建物

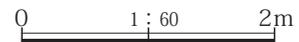


- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を少量、小礫・黄褐色砂質土を多量に含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 基本土層VI相当。白色粘質土・炭化物を若干含む。

5号掘立柱建物

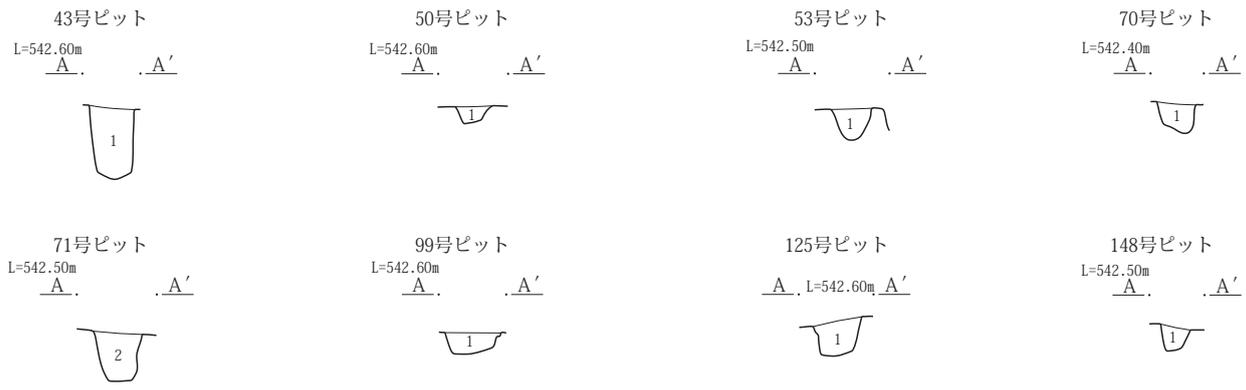
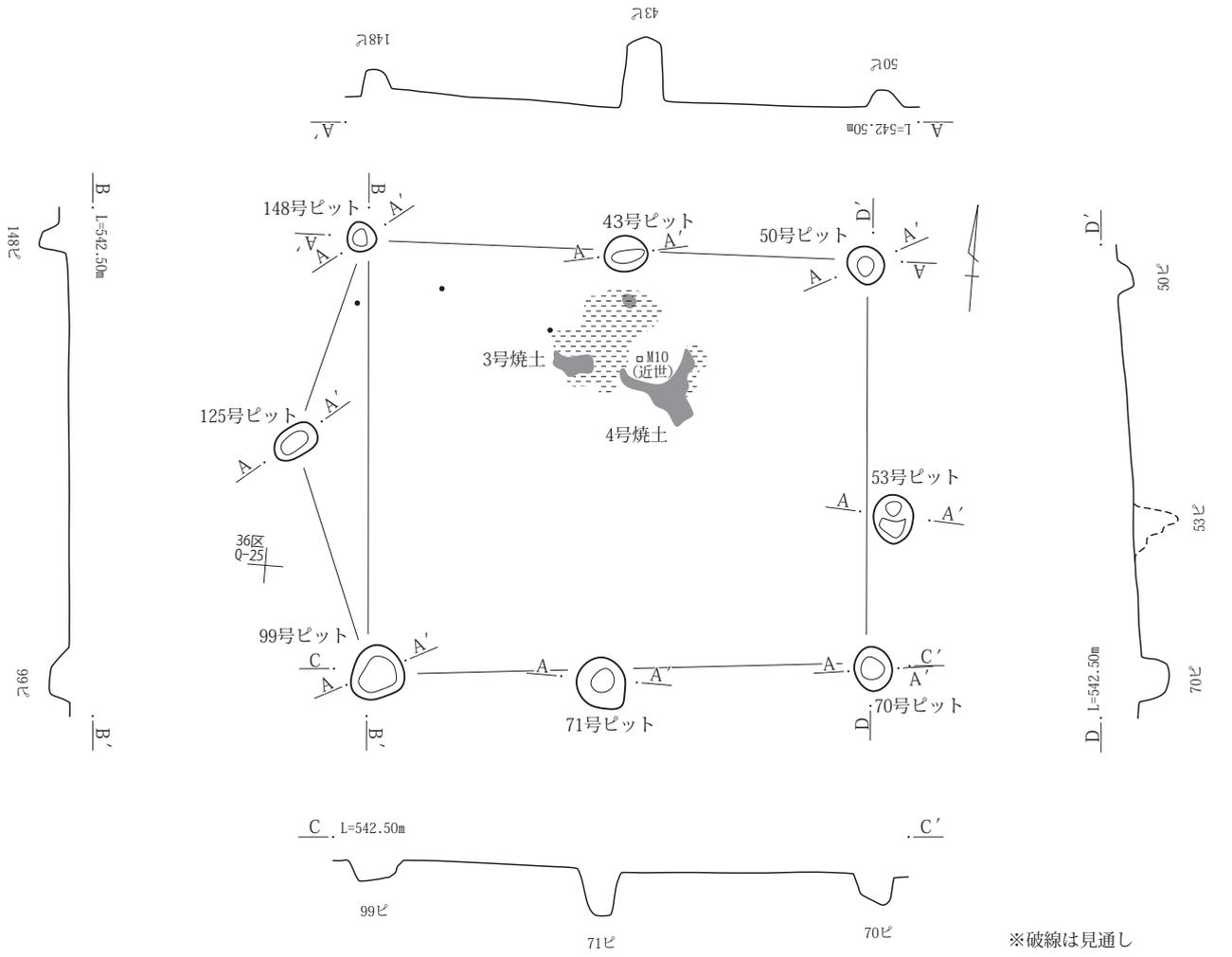


- 1 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を少量、黄褐色砂質土を多量に含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 基本土層VI相当。白色粘質土・炭化物を若干含む。
- 3 黒褐色土(10YR2/3) やや明るい。1~15cm大の礫を多量に含む。

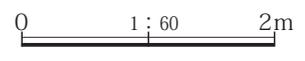


第55図 中・近世 B区4面 4号掘立柱建物断面、5号掘立柱建物

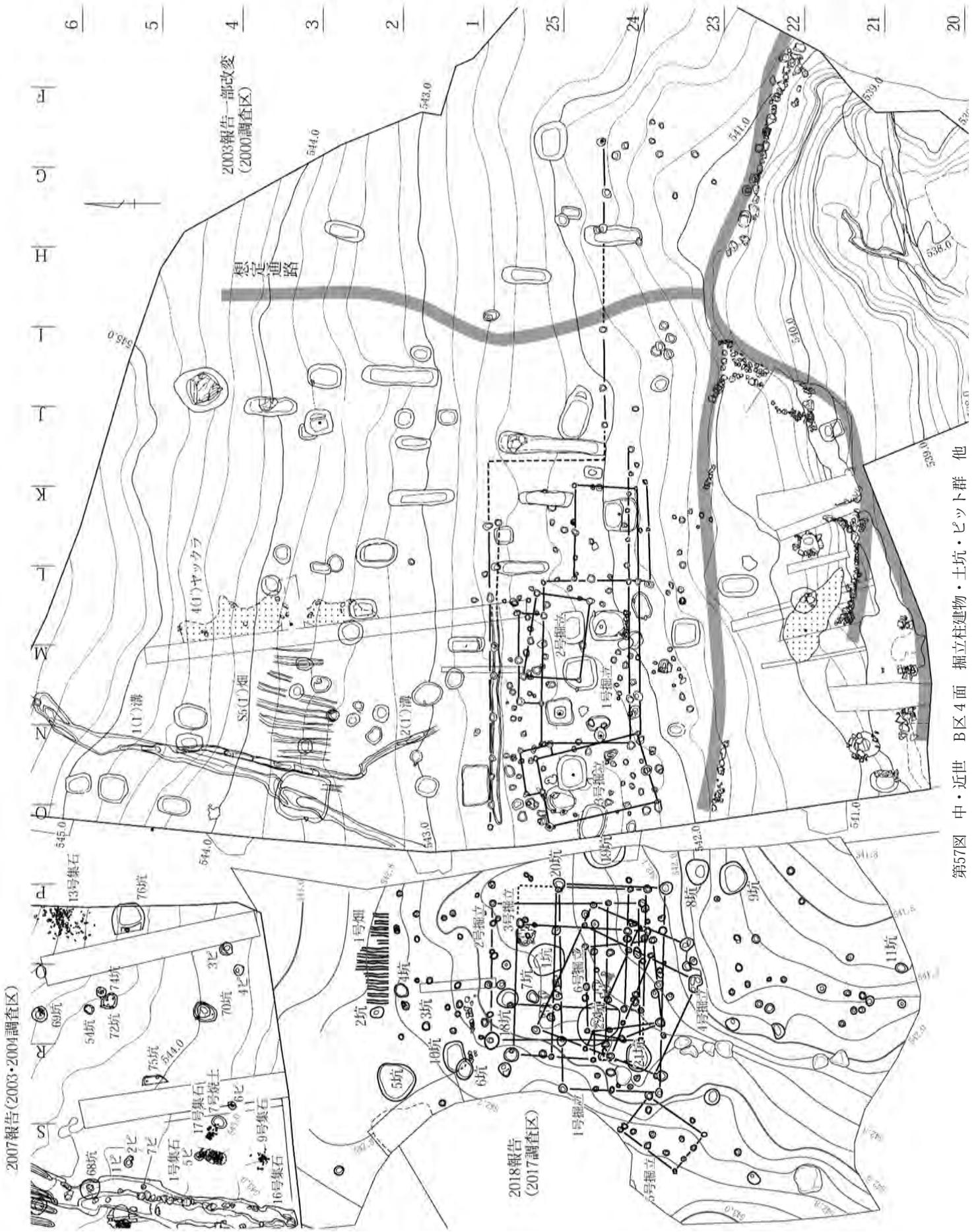
第3章 発見された遺構と遺物



- 1 黒褐色土(10YR2/3) サラサラ。やや明るい。小礫・白色粒・黄橙色粒・炭化物粒を少量、黄褐色砂質土を多量に含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 基本土層VI相当。白色粘質土・炭化物を若干含む。

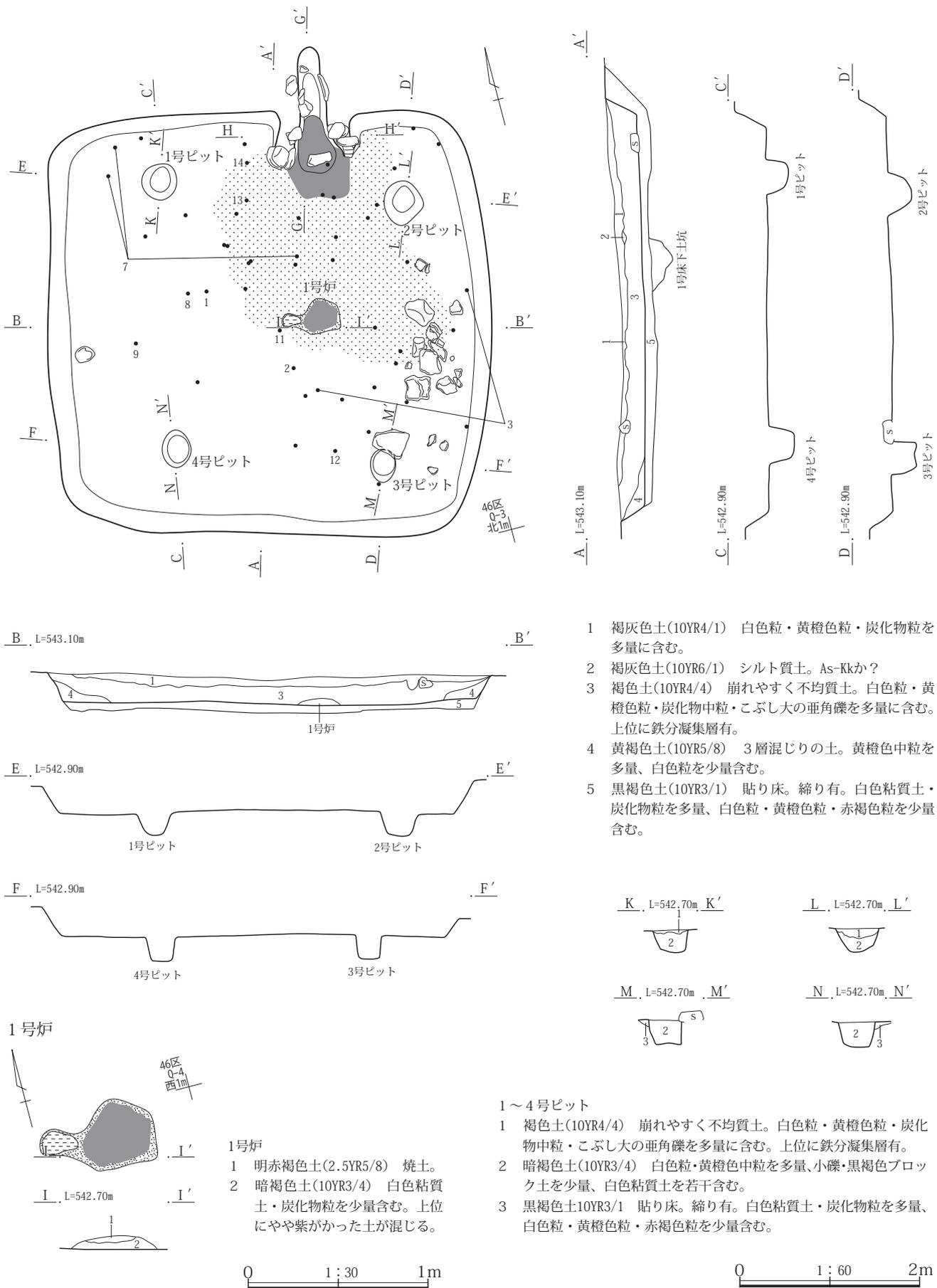


第56図 中・近世 B区4面 6号掘立柱建物



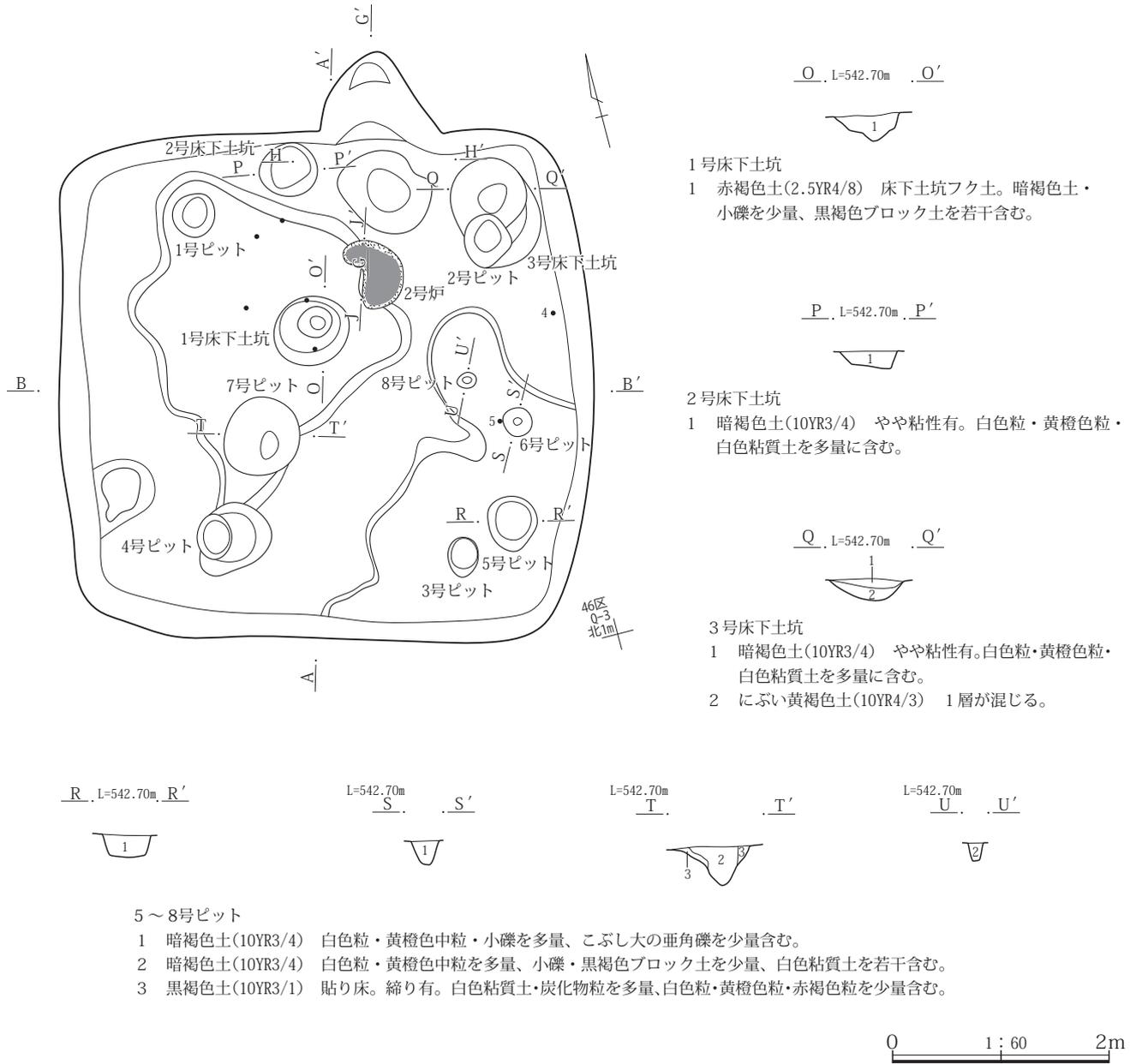
第57図 中・近世 B区4面 掘立柱建物・土坑・ピット群 他

第3章 発見された遺構と遺物

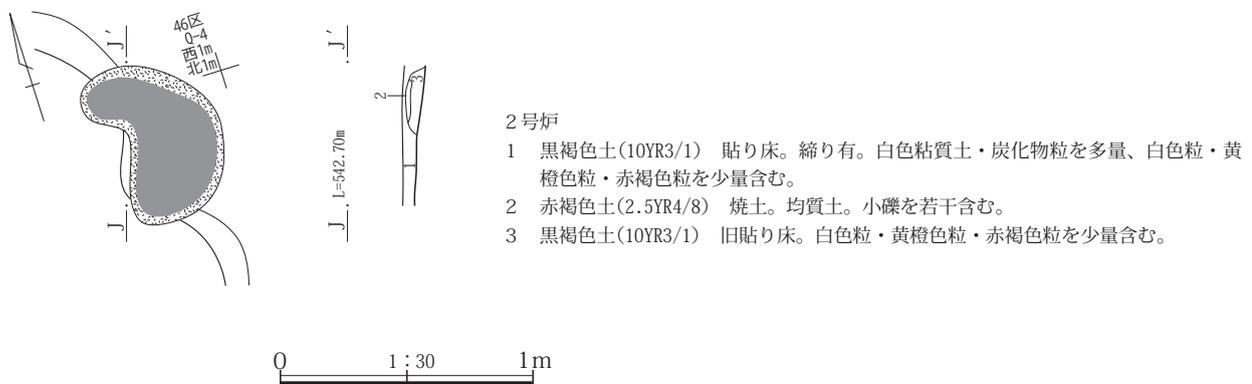


第58図 平安時代 B区4面 1号竪穴建物

掘り方



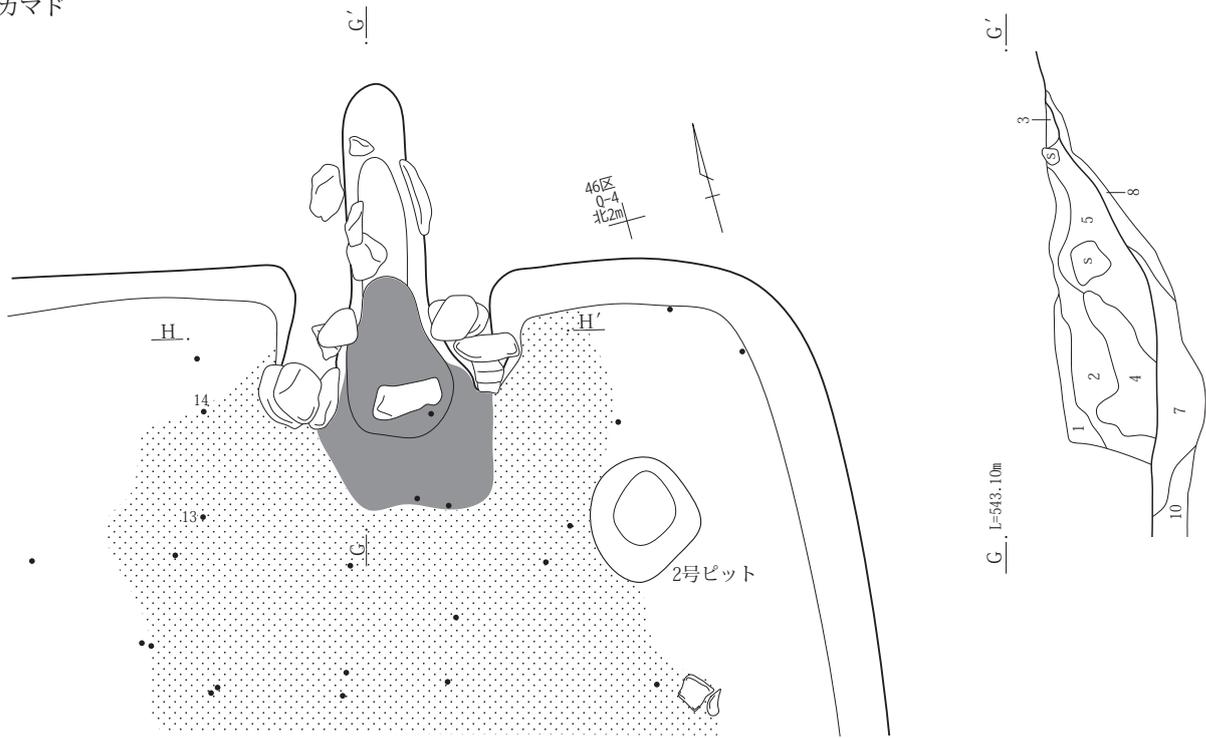
2号炉



第59図 平安時代 B区4面 1号竪穴建物掘り方

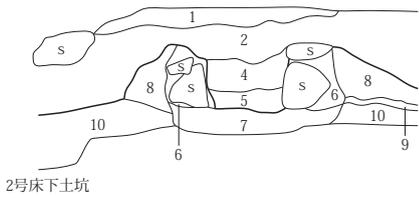
第3章 発見された遺構と遺物

カマド



H. L=543.10m

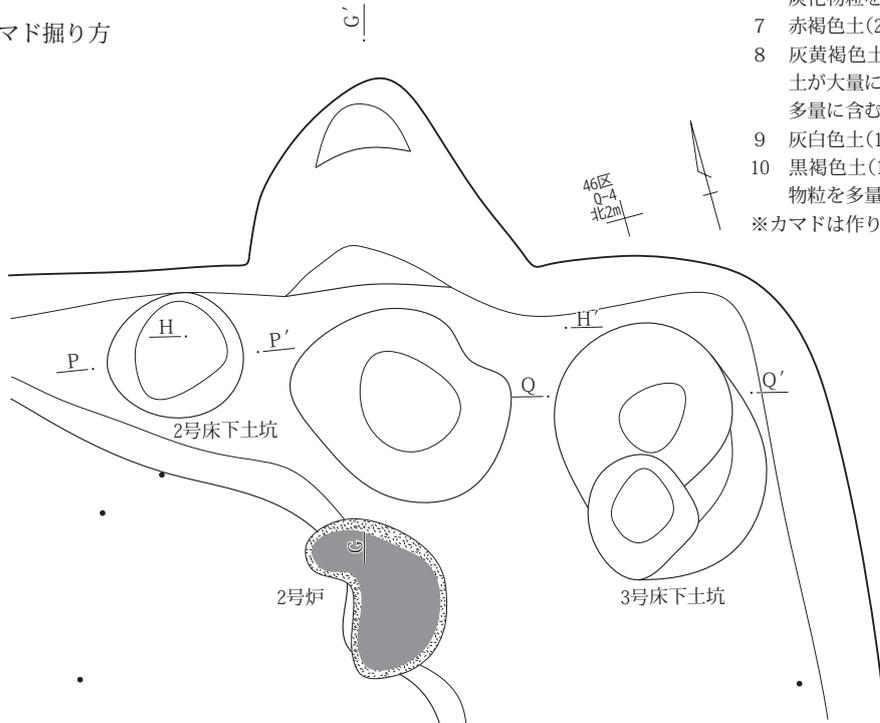
H'



2号床下土坑

- 1 建物埋没土1層。
 - 2 建物埋没土3層。
 - 3 暗褐色土(10YR3/3) やや均質土。炭化物・焼土ブロックを少量、白色粒・黄橙色粒を若干含む。
 - 4 暗褐色土(10YR3/3) 白色粒・黄橙色の中～大粒・小礫・1～5cm大の亜角礫を多量、白色粘質土・炭化物粒・赤褐色焼土ブロックを少量含む。
 - 5 4層と似ている。焼土ブロックを多量、灰や炭化物を少量含む。
 - 6 赤褐色土(2.5YR4/8) カマド新袖。20cm大の亜角礫主体。炭化物粒を多量に含む。
 - 7 赤褐色土(2.5YR4/8) 焼土。均質土。小礫を若干含む。
 - 8 灰黄褐色土(10YR4/2) カマド旧袖。赤褐色土や白色粘質土が大量に混じり紫がかっている箇所もある。炭化物粒を多量に含む。やや粘性有。
 - 9 灰白色土(10YR8/2) 貼り床粘土。
 - 10 黒褐色土(10YR3/1) 貼り床。締り有。白色粘質土・炭化物粒を多量、白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を少量含む。
- ※カマドは作り替えた可能性有。

カマド掘り方



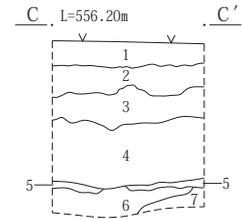
0 1:30 1m

第60図 平安時代 B区4面 1号竪穴建物カマド

縄文時代 遺構図

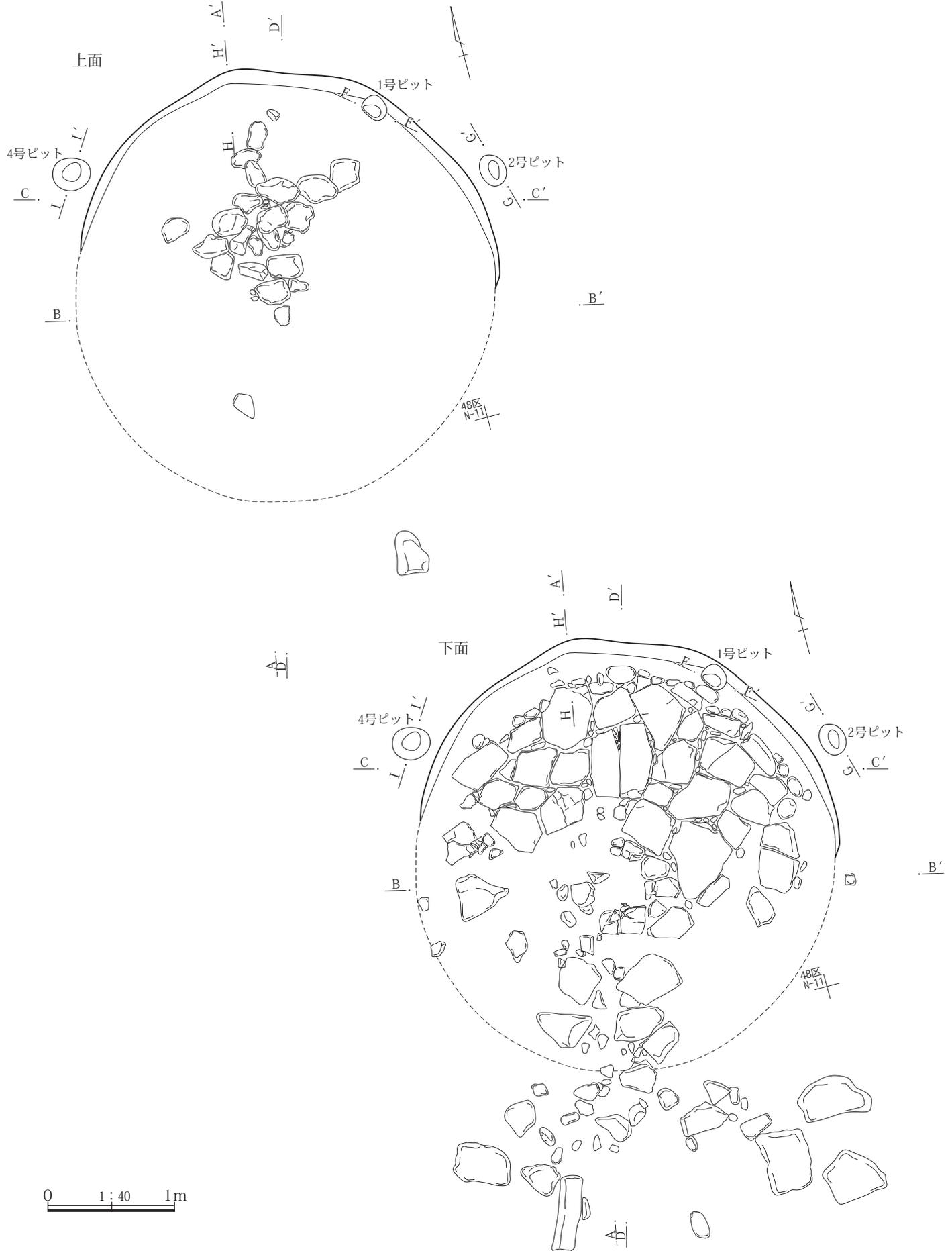


- 1 基本土層 I
- 2 泥流やAs-A、泥流下作土の混層。
- 3 黒褐色土(10YR2/2) 崩れやすい。1～5 cm 大の垂円礫を大量に含む。
- 4 基本土層 V
- 5 黒色土(10YR2/1) 粒子細かく、やや粘性有。小礫・黄橙色粒を若干含む。
- 6 基本土層 VIにこぶし大の垂角礫を多量に含む。
- 7 褐灰色土(10YR4/1) 粗粒砂層。崩れやすい。自然流路か？

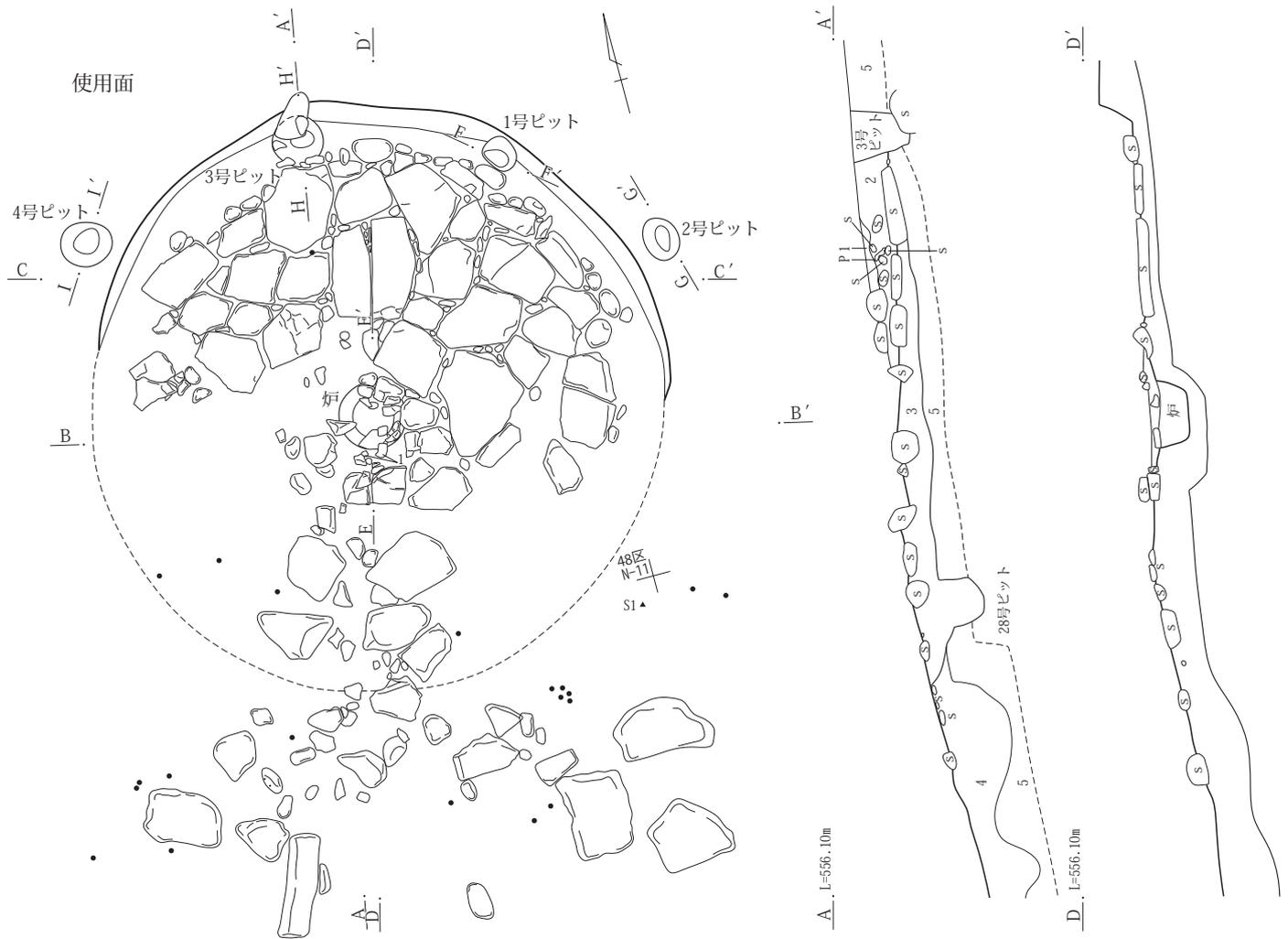


第61図 縄文時代 A区2面 全体図

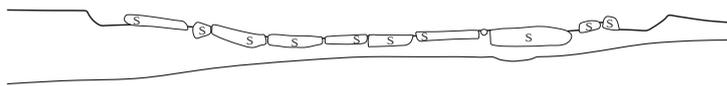
第3章 発見された遺構と遺物



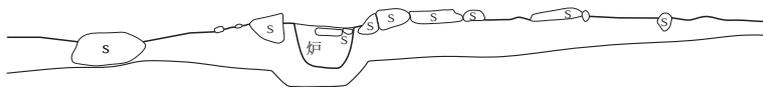
第62図 縄文時代 A区2面 1号竪穴建物(1)



C L=556.10m



B L=556.10m



1号ピット

L=556.10m F F'



1 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒・赤褐色粒・暗褐色土を多量、白色粒を少量含む。

2号ピット

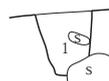
L=556.10m G G'



1 黒褐色土(10YR2/2) 小礫・白色粒・黄橙色粒を少量含む。

3号ピット

L=556.10m H H'



1 黒褐色土(10YR2/2) 黄橙色粒・赤褐色粒・暗褐色土を多量、白色粒を少量含む。

4号ピット

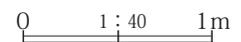
L=556.10m I I'



1 暗褐色土(10YR3/4) 小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含み、こぶし大の垂円礫や黒褐色土が混じる。

1号竪穴建物

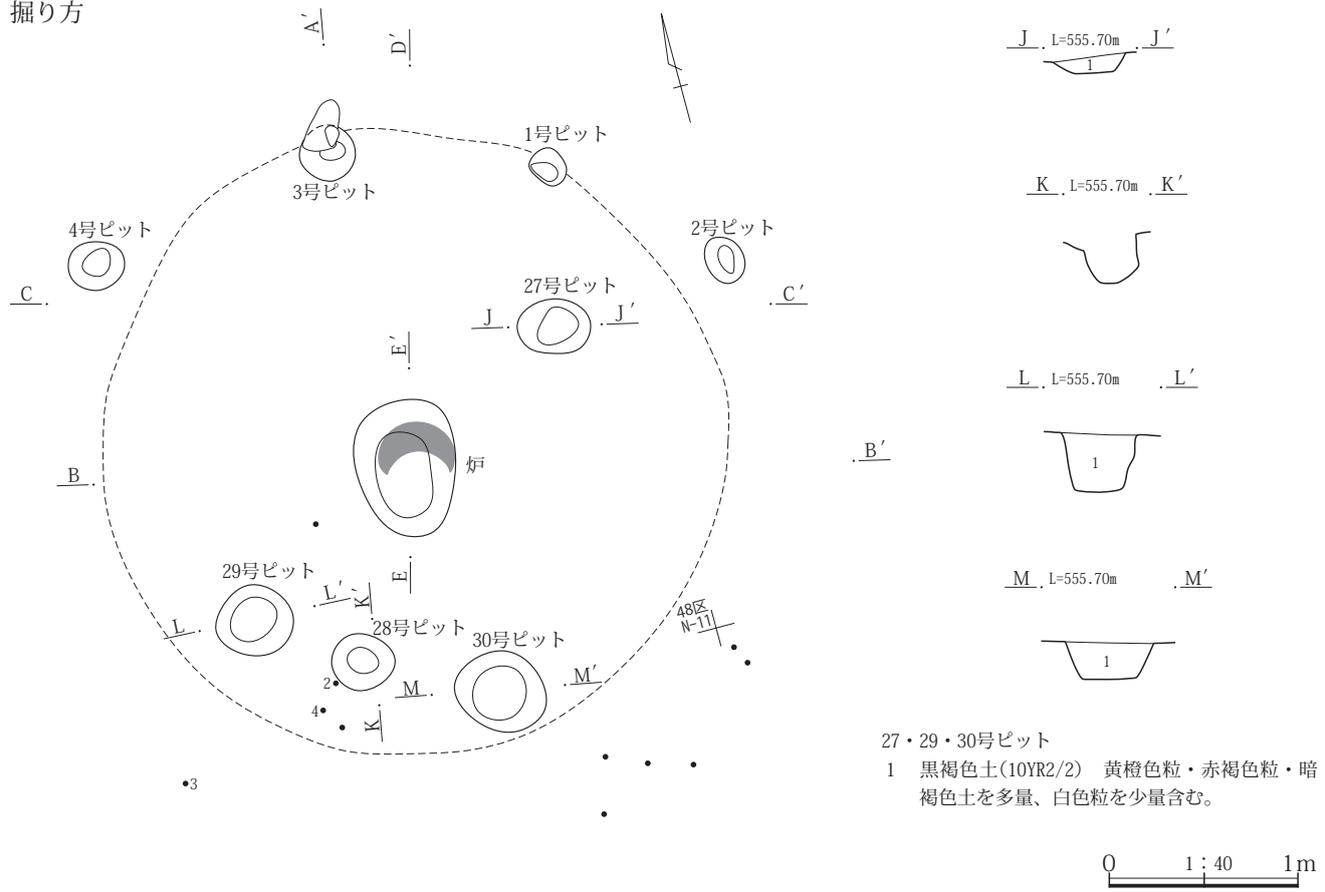
- 1 黒褐色土(10YR2/2) 均質土。白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) やや暗い。白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を大量、1~10cm大の垂円礫・黒褐色土を少量含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。掘り方埋没土。やや締り有。白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を多量、小礫・暗褐色土を少量含む。
- 4 基本土層VI
- 5 基本土層VII



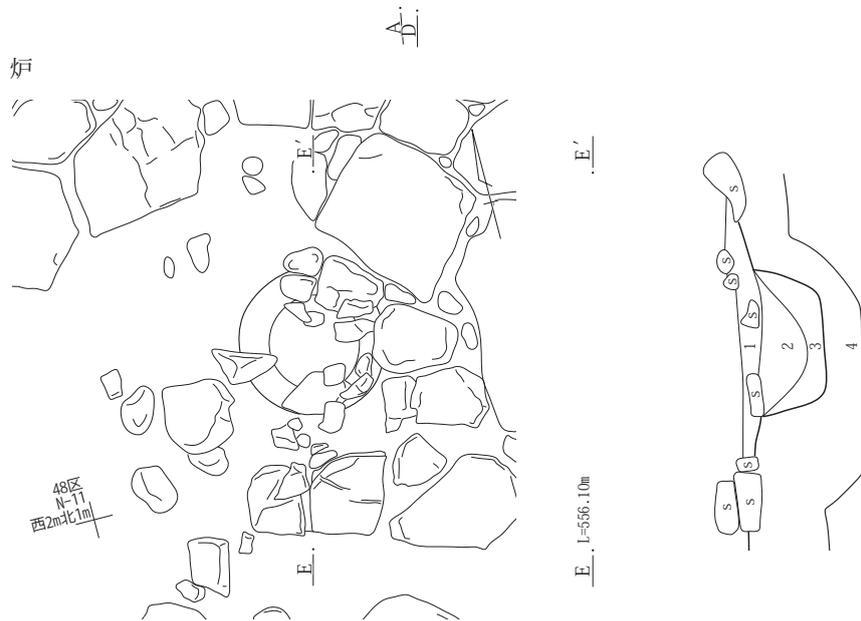
第63図 縄文時代 A区2面 1号竪穴建物(2)

第3章 発見された遺構と遺物

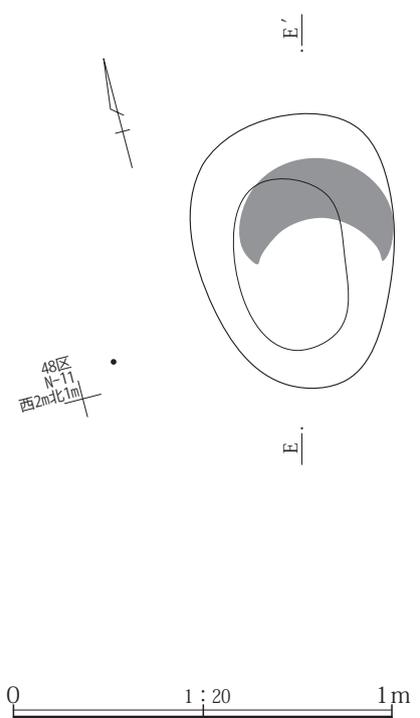
掘り方



炉



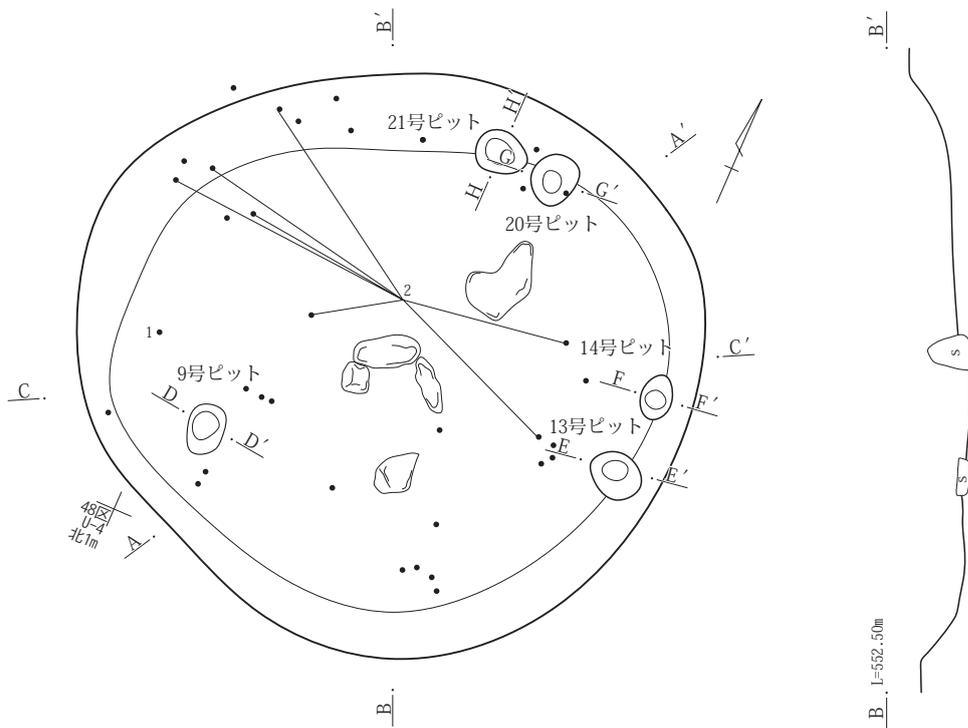
炉 掘り方



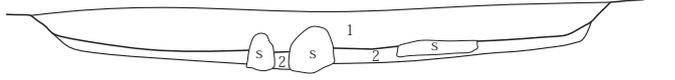
炉

- 1 暗褐色土(10YR3/3) やや暗い。白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を大量、1~10cm大の垂円礫・黒褐色土を少量含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 白色粒・黄橙色粒を多量、小礫・炭化物粒・黄褐色粘質土を少量含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/8) やや粘性有。炭化物を多量・くすんだ焼土粒を若干含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い。掘り方埋没土。やや締り有。白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を多量、小礫・暗褐色土を少量含む。

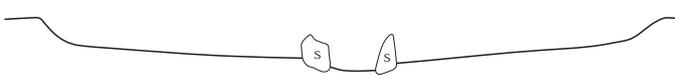
第64図 縄文時代 A区2面 1号竪穴建物(3)



A. L=552.50m



C. L=552.50m



2号竪穴建物

- 1 黒褐色土(10YR3/2) やや褐色。白色粒・黄橙色粒・赤褐色粒を多量、明黄褐色砂質土・炭化物粒を少量含む。
- 2 黄褐色土(10YR5/8) 細粒砂質土。黒褐色ブロック土を多量に含む。

9号ピット

L=552.30m
D. .D'



- 1 暗褐色土(10YR3/4) 黒褐色ブロック土を多量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。

13号ピット

L=552.30m
E. .E'



- 1 暗褐色土(10YR3/4) 黒褐色ブロック土・明黄褐色砂質ブロック土・褐灰色砂質ブロック土を多量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。

14号ピット

L=552.30m
F. .F'



- 1 暗褐色土(10YR3/4) 黒褐色ブロック土・明黄褐色砂質ブロック土・褐灰色砂質ブロック土を多量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。

20号ピット

L=552.30m
G. .G'



- 1 黒色土(10YR2/1) 白色粒・黄橙色粒・暗褐色ブロック土を多量に含む。

21号ピット

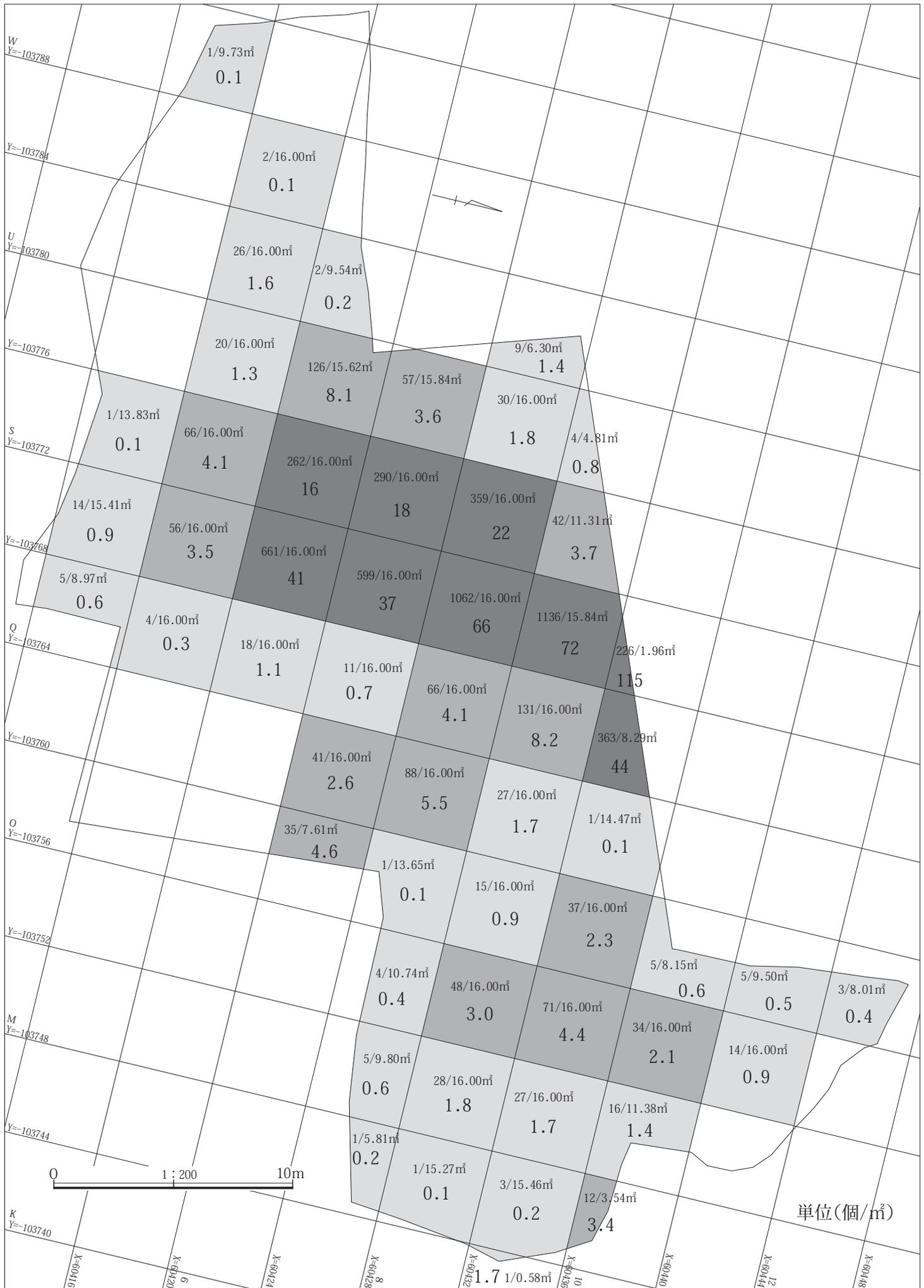
L=552.30m
H. .H'



- 1 黒色土(10YR2/1) 白色粒・黄橙色粒・暗褐色ブロック土を多量に含む。

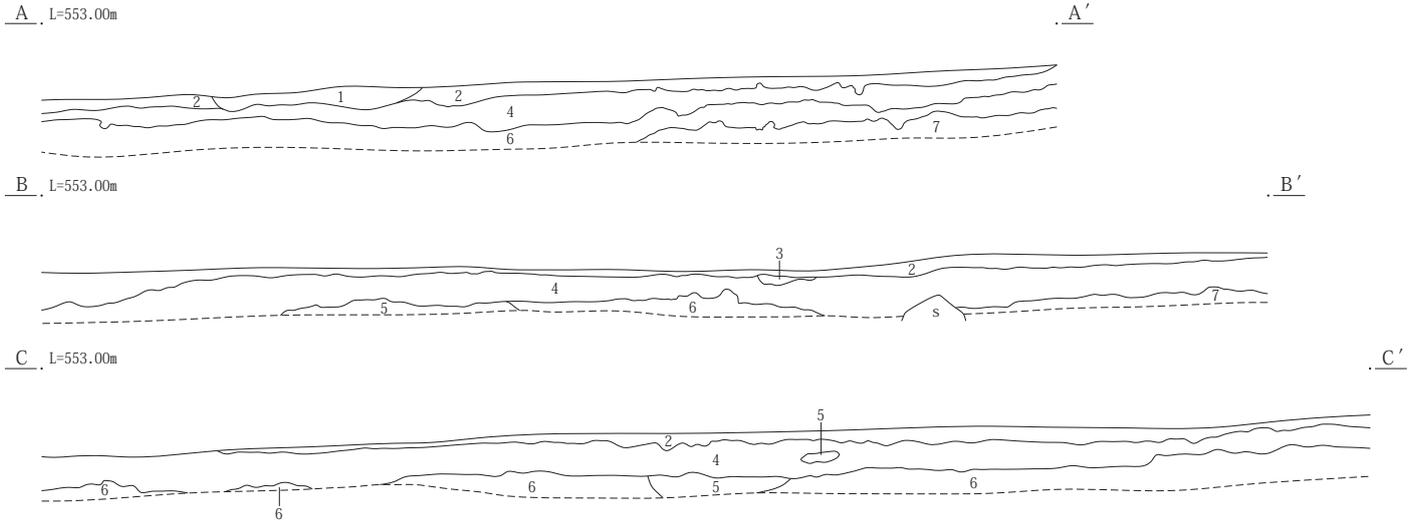


第65図 縄文時代 A区2面 2号竪穴建物



第67図 縄文時代A区2・3面 遺物分布密度

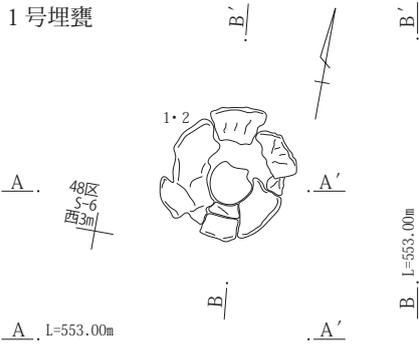
第3章 発見された遺構と遺物



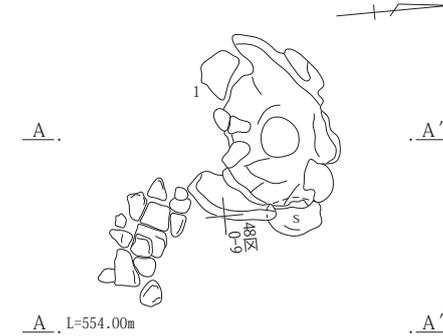
12・13・14号トレンチ

- 1 基本土層Ⅳ 鉄分凝集多く、乾きが早い。こぶし大の礫を多量に含む。
 - 2 基本土層Ⅴ 鉄分凝集やや有。小礫を少量含む。
 - 3 2層に浅黄褐色の砂質ブロック土を多量に含む。
 - 4 基本土層Ⅵ シャリシヤリ。縄文遺物包含層。
 - 5 明黄褐色土(10YR7/6) 砂礫層。ジャリジャリ。
 - 6 黒褐色土(10YR3/1) やや淡い砂質泥層。粘性有。黄褐色砂質シルトが混じる。白色粒を多量、黄褐色粒・少礫を少量含む。縄文遺物を少量含む。水性堆積か？
 - 7 基本土層Ⅸ
- ※全体として根の攪乱多い。

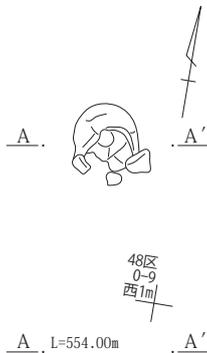
1号埋甕



2号埋甕



3号埋甕



1号埋甕

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 均質土。礫は少ない。
- 2 基本土層Ⅵ やや淡い。

2号埋甕

- 1 黒色土(10YR2/1) 均質土。礫は少ない。
- 2 基本土層Ⅷ 黒色土混じり。

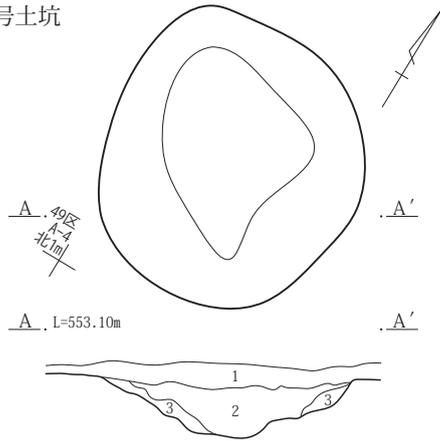
第68図 縄文時代 A区2面 12~14号トレンチ断面、1~3号埋甕



第69図 縄文時代 A区3面 全体図

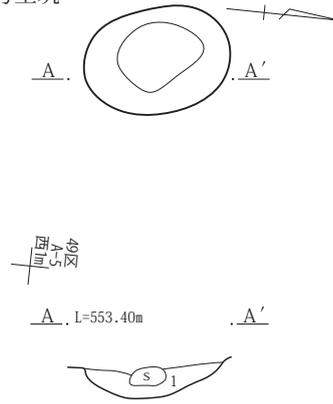
第3章 発見された遺構と遺物

3面1号土坑



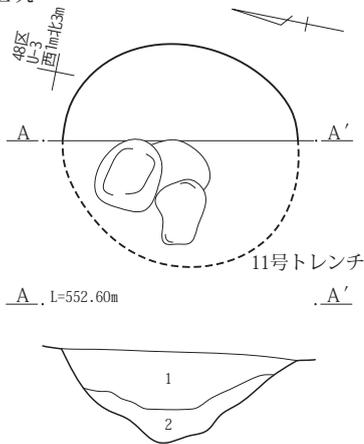
- 1 基本土層VI
- 2 暗褐色土(10YR3/3) やや暗い。小礫・白色粒・大きい黄橙色粒を多量に含む。
- 3 黄褐色土(10YR5/6) こぶし大の礫を大量、小礫・白色粒・大きい黄橙色粒を少量含む。

3面2号土坑



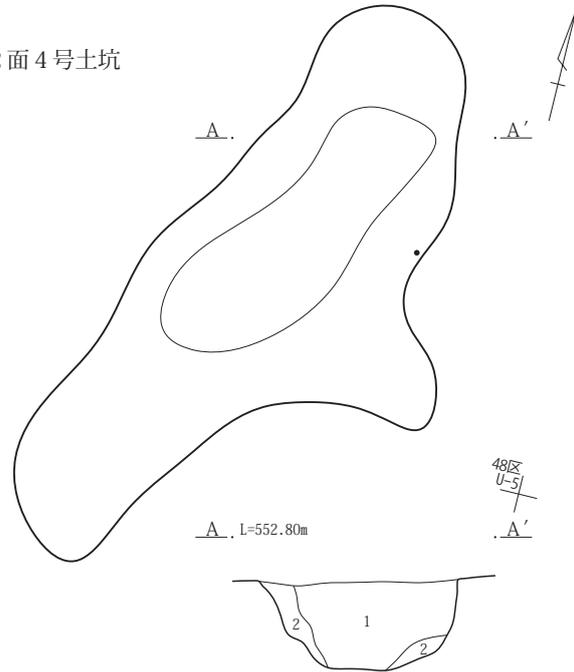
- 1 黒褐色土(10YR2/2) 不均質土。1~15cm大の礫を多量、白色粒・黄橙色粒を若干含む。

2面3号土坑



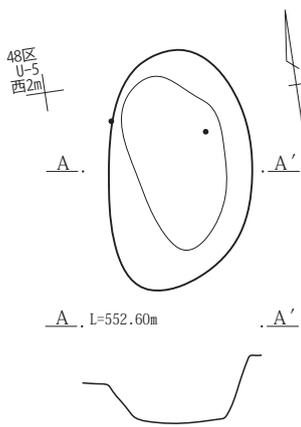
- 1 黒色土(10YR2/1) こぶし大の円礫を若干含む。
- 2 明黄褐色土(10YR6/8) 黒色ブロック土を若干含む。

2面4号土坑



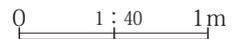
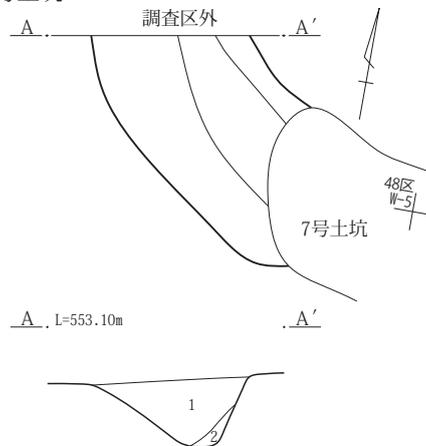
- 1 黒色土(10YR2/1) 均質土。小礫・白色粒・やや大きめの黄橙色粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) こぶし大の亜角礫・明黄褐色砂質土を多量に含む。

2面5号土坑



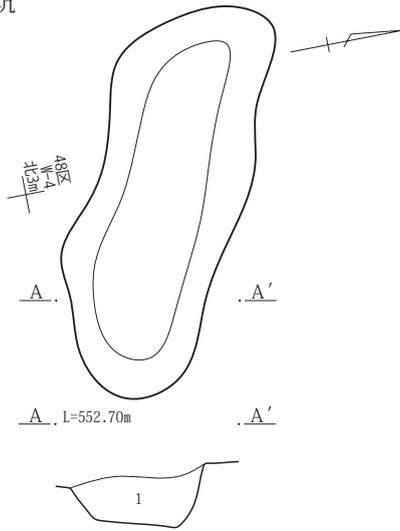
- 1 黒色土(10YR2/1) こぶし大の亜角礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/4) 白色粒・黄橙色粒・黒褐色ブロック土を少量含む。

3面6号土坑



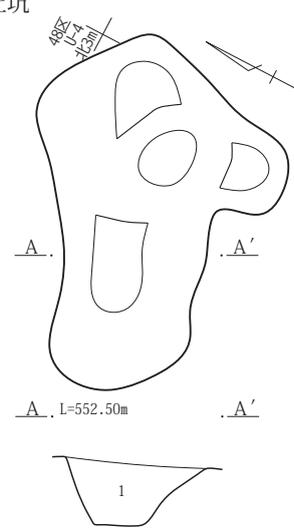
第70図 縄文時代 A区2・3面 1~6号土坑

3面7号土坑



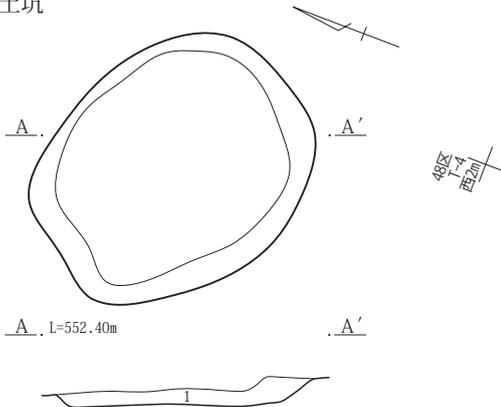
- 1 黒色土(10YR2/1) 白色粒・黄橙色粒・暗褐色ブロック土を多量に含む。

3面8号土坑



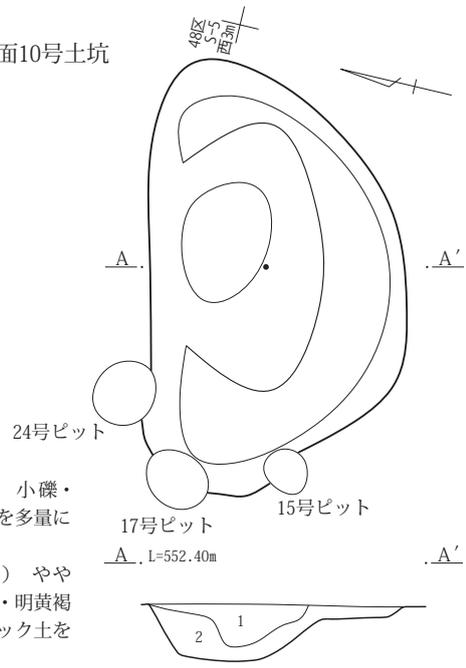
- 1 黒色土(10YR2/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。

3面9号土坑



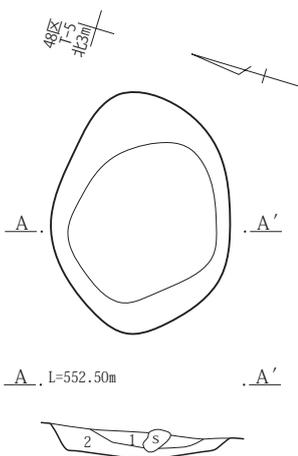
- 1 黒色土(10YR2/1) 白色粒・黄橙色粒を多量、赤褐色粒を少量、小礫を若干含む。

3面10号土坑



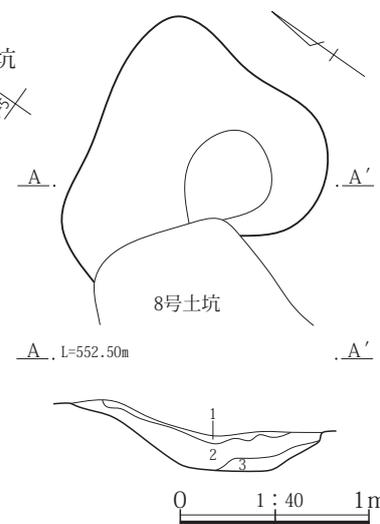
- 1 黒色土(10YR2/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
2 褐灰色土(10YR6/1) やや淡い砂質土。小礫・明黄褐色土・黒褐色ブロック土を少量含む。

3面11号土坑



- 1 黒色土(10YR2/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
2 褐灰色土(10YR6/1) やや淡い砂質土。小礫・明黄褐色土・黒褐色ブロック土を少量含む。

3面12号土坑



- 1 黒色土(10YR2/1) 小礫・白色粒・黄橙色粒を多量に含む。
2 暗褐色土(10YR3/4) 黒褐色土・褐灰色土を多量、白色粒・黄橙色粒を少量含む。
3 明黄褐色土(10YR6/8) 細粒砂質土。こぶし大の亜円礫を多量に含む。

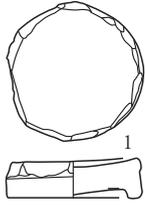
0 1:40 1m

第71図 縄文時代 A区3面 7~12号土坑

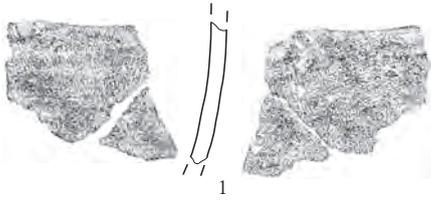
第3章 発見された遺構と遺物

中・近世

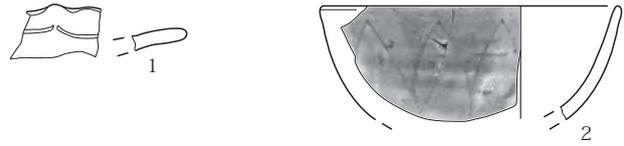
A区遺構外



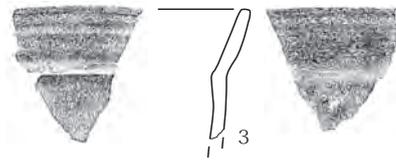
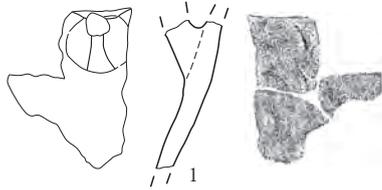
B区21号土坑



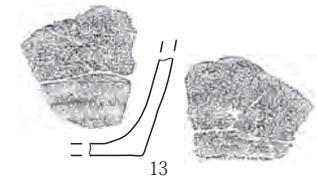
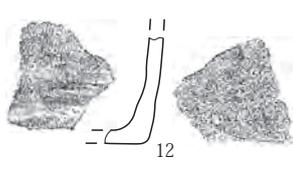
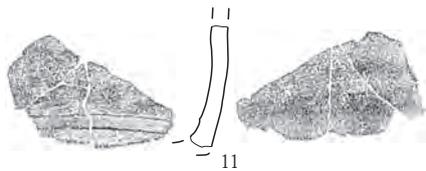
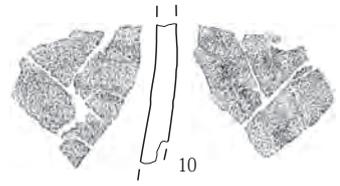
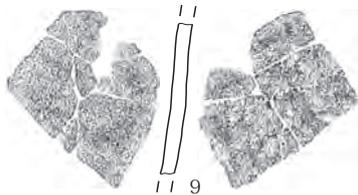
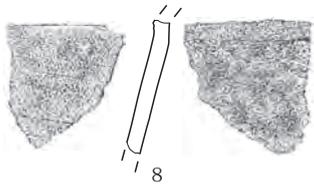
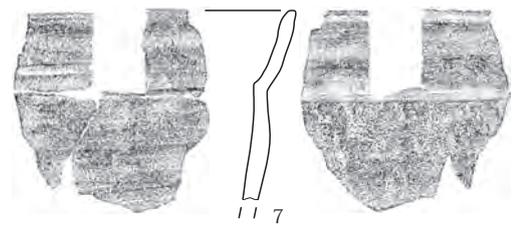
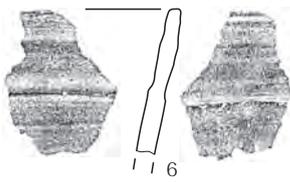
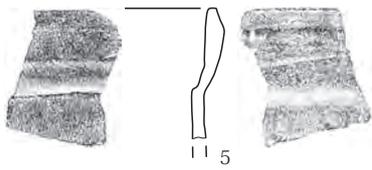
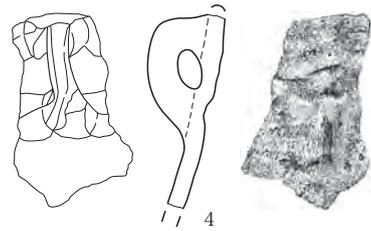
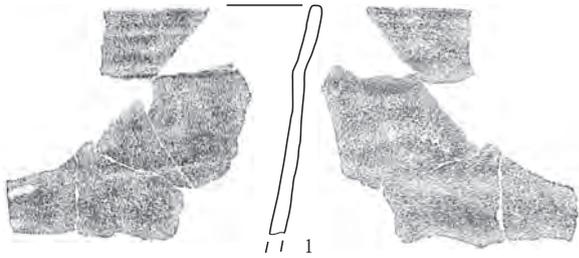
B区遺構外



B区22号土坑

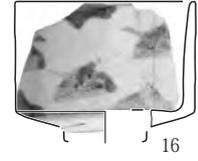
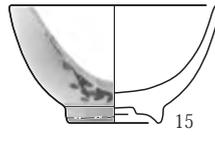


B区173号ピット

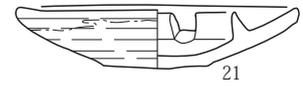
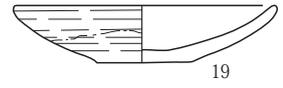
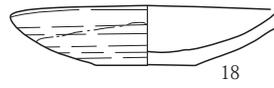
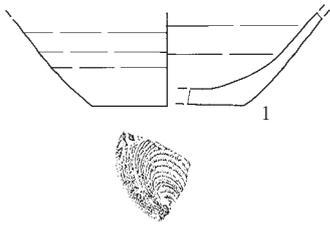


0 1:3 10cm

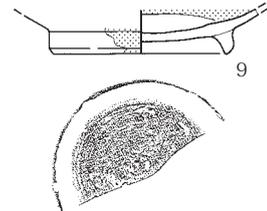
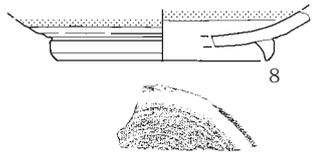
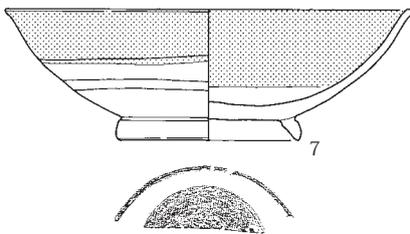
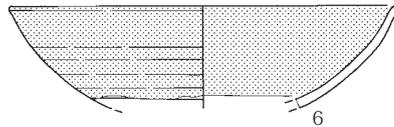
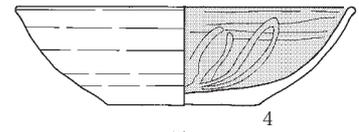
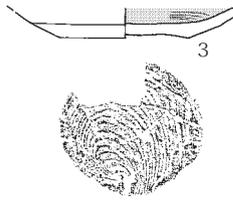
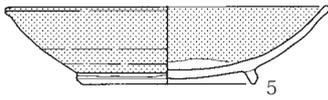
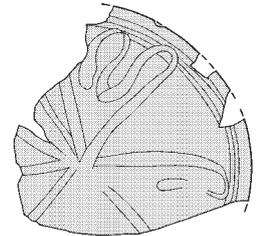
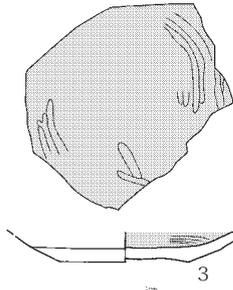
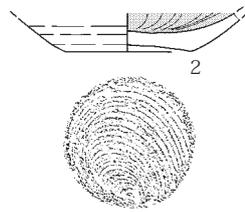
第72図 中・近世 A・B区出土遺物



平安時代
A区遺構外



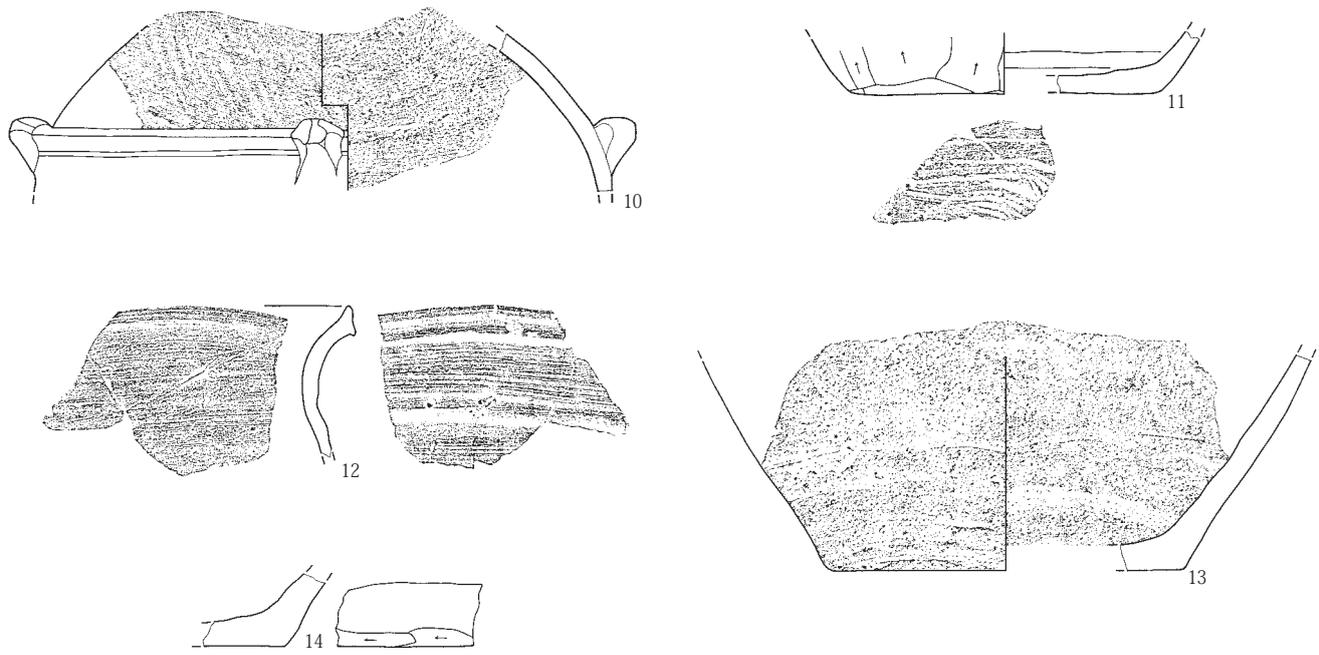
B区1号竖穴建物



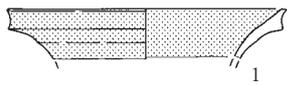
0 1:3 10cm

第73図 中・近世、平安時代 A・B区出土遺物

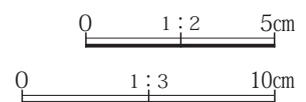
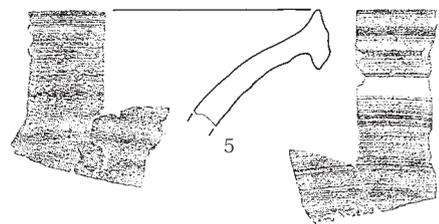
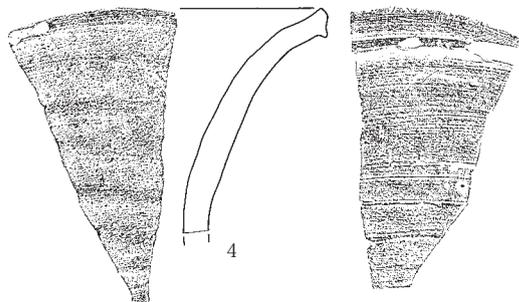
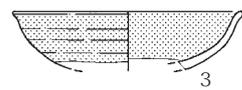
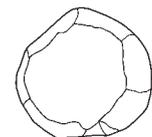
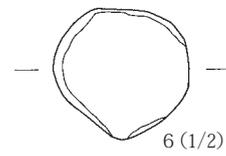
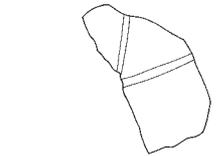
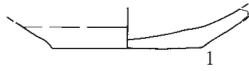
第3章 発見された遺構と遺物



B区5号土坑



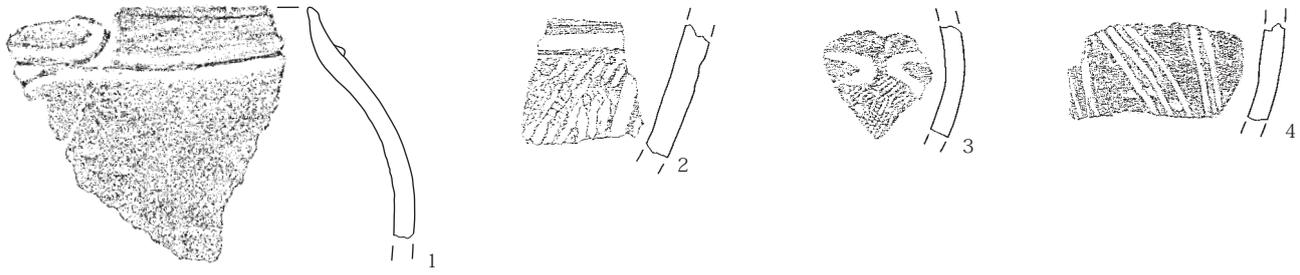
B区遺構外



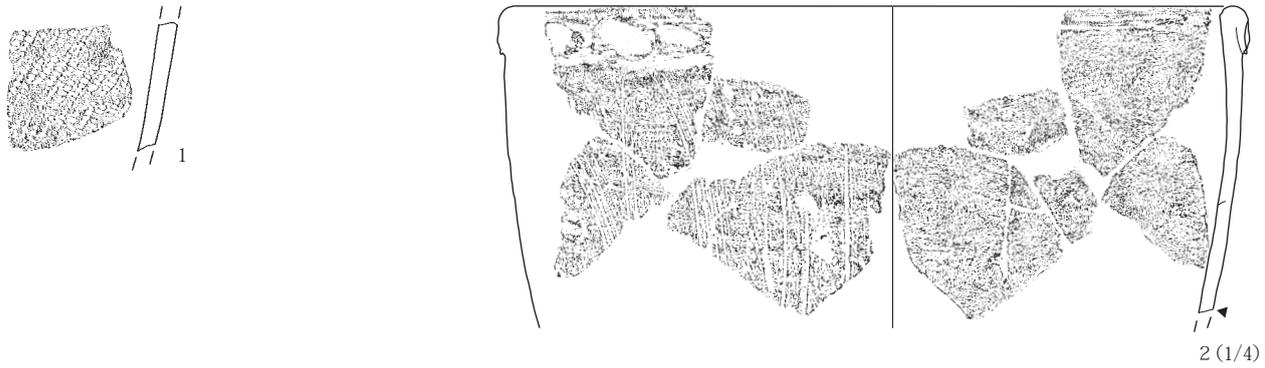
第74図 平安時代 B区出土遺物

縄文時代

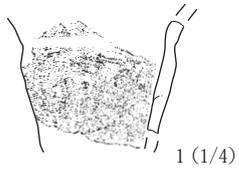
A区1号竪穴建物



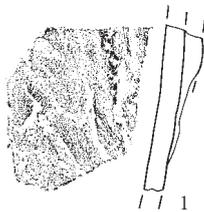
A区2号竪穴建物



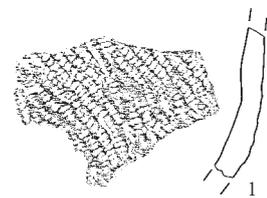
A区9号土坑



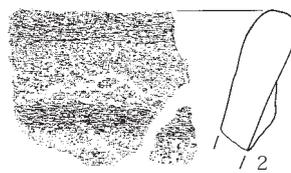
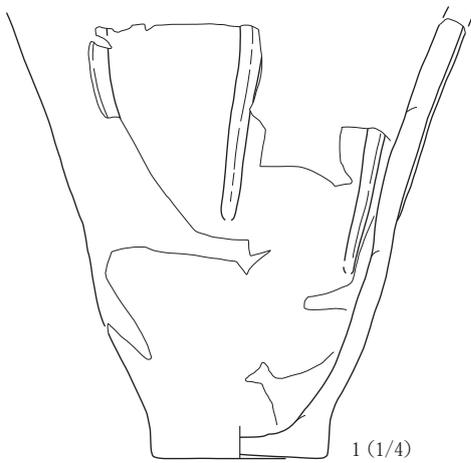
A区10号土坑



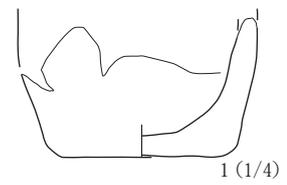
A区11号土坑



A区1号埋甕



A区2号埋甕



0 1:3 10cm

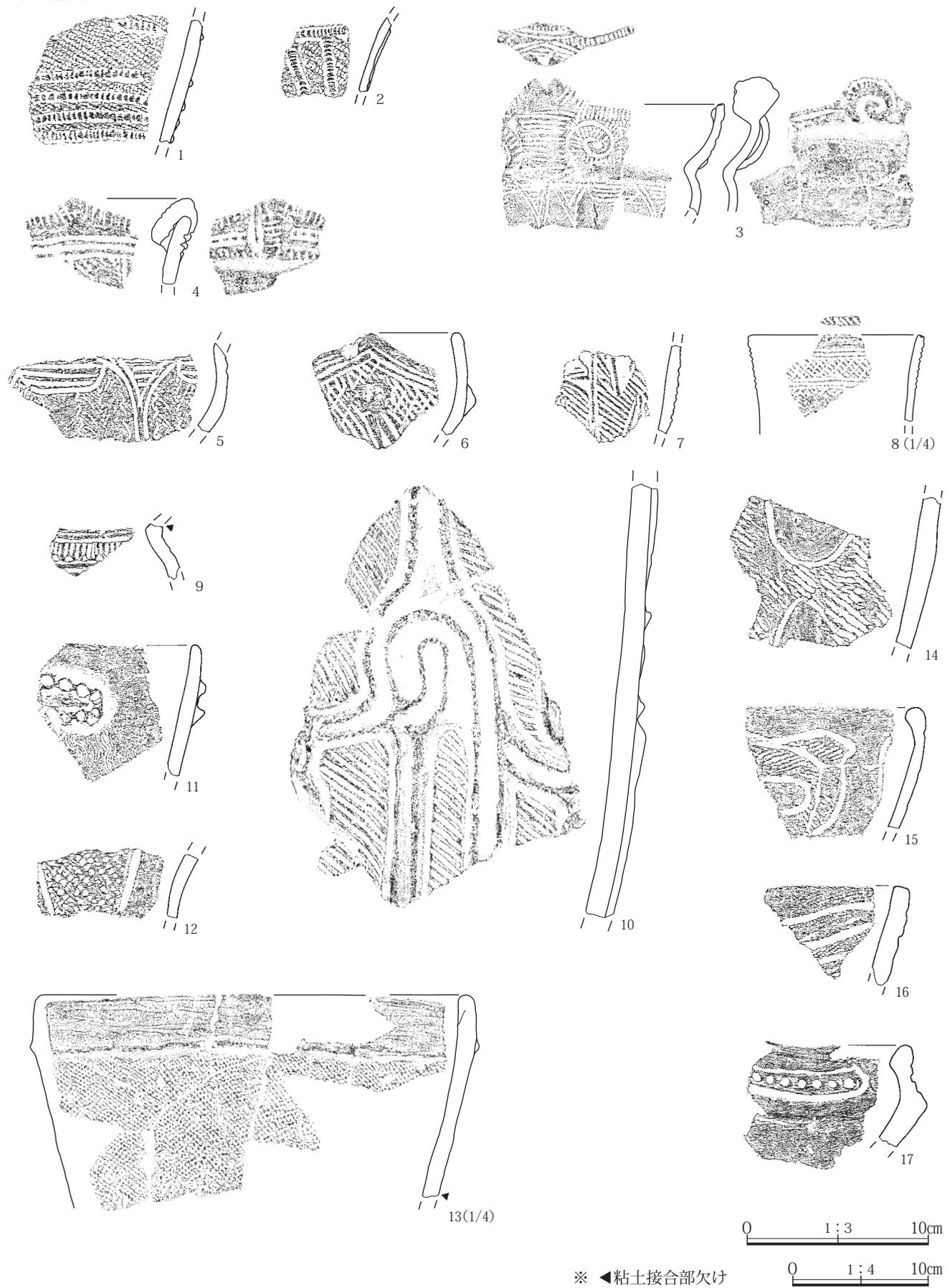
0 1:4 10cm

※ ◀粘土接合部欠け

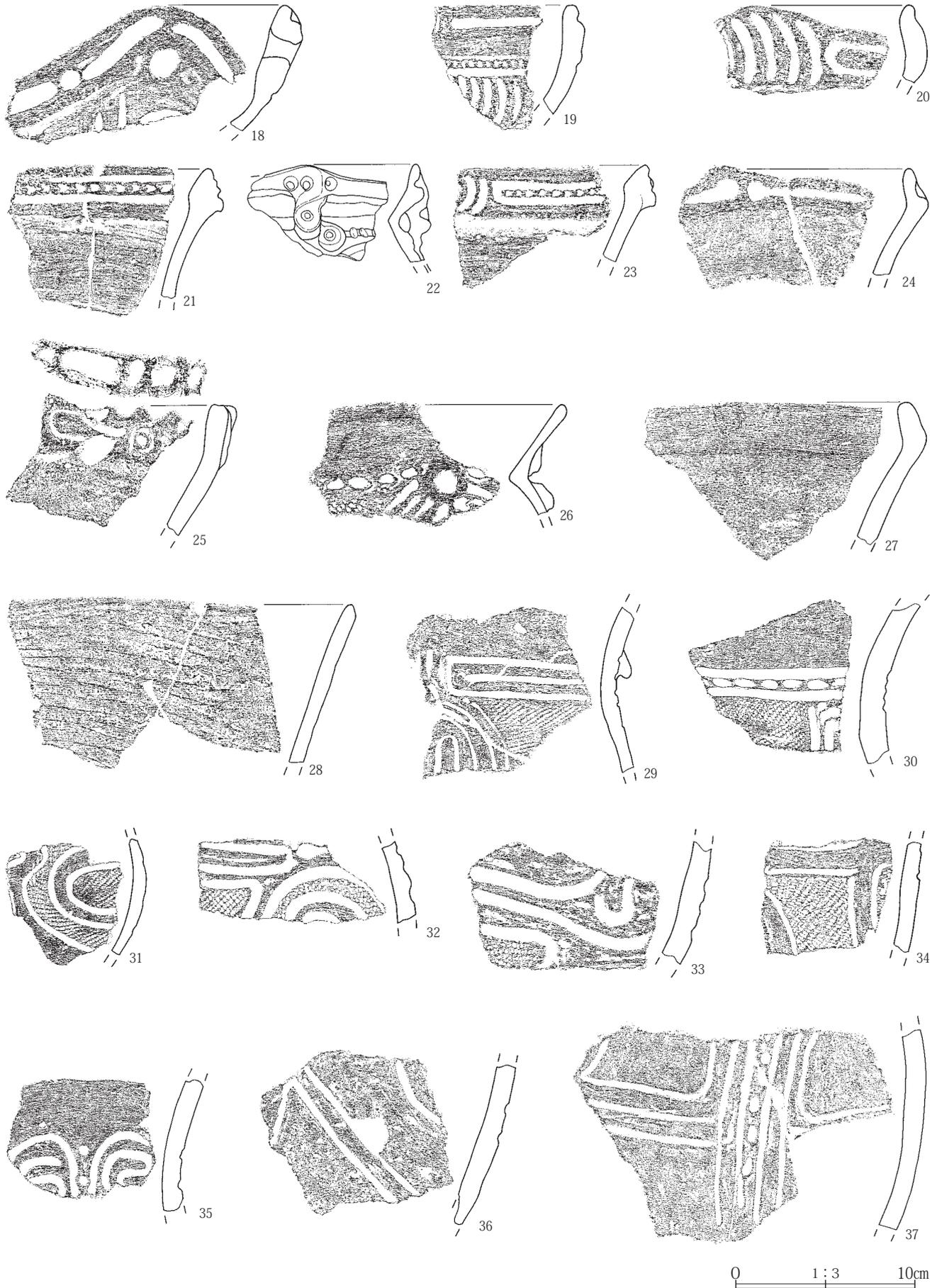
第75図 縄文時代 A区出土遺物(1)

第3章 発見された遺構と遺物

A区遺構外

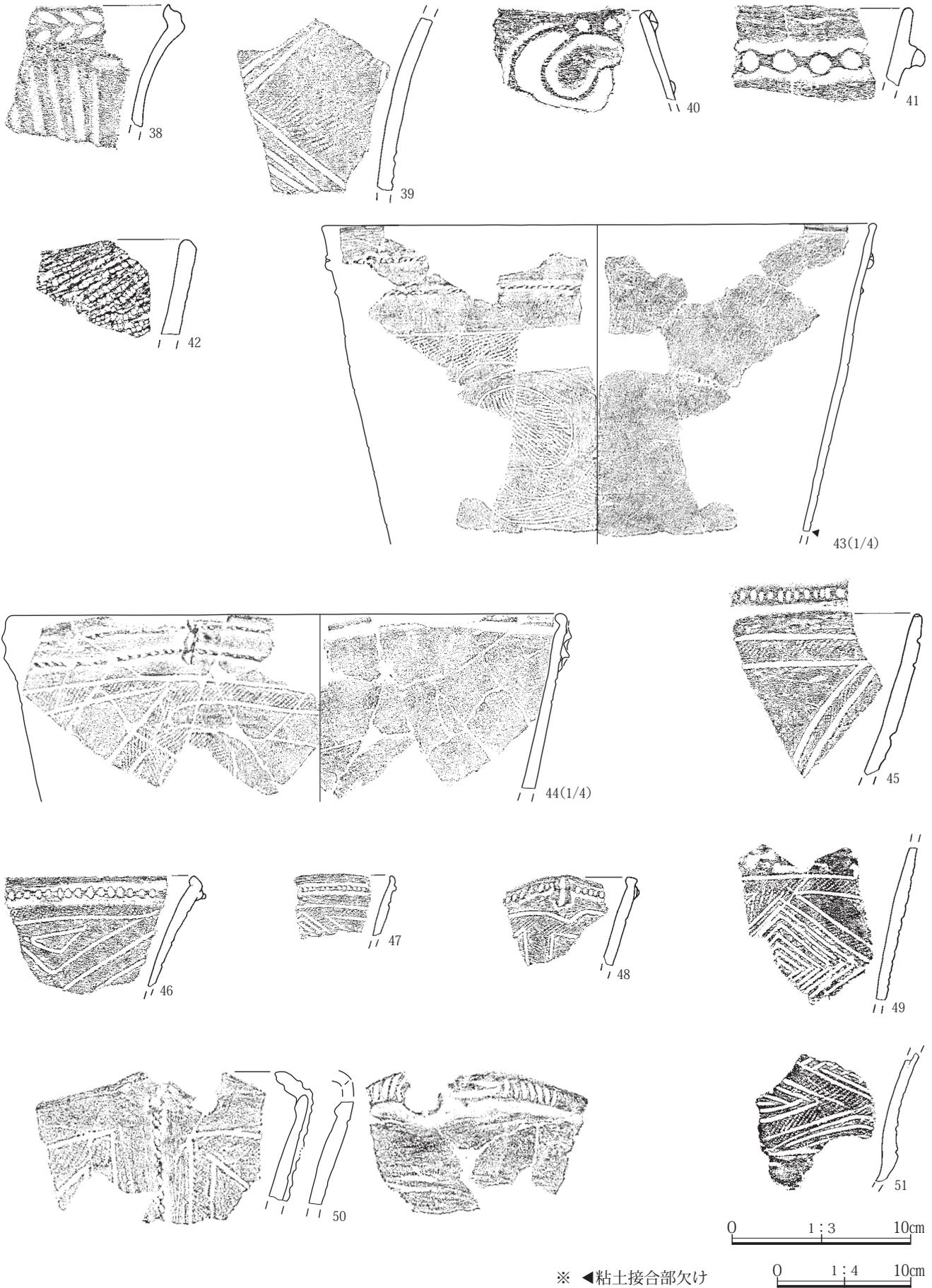


第76図 縄文時代 A区出土遺物(2)



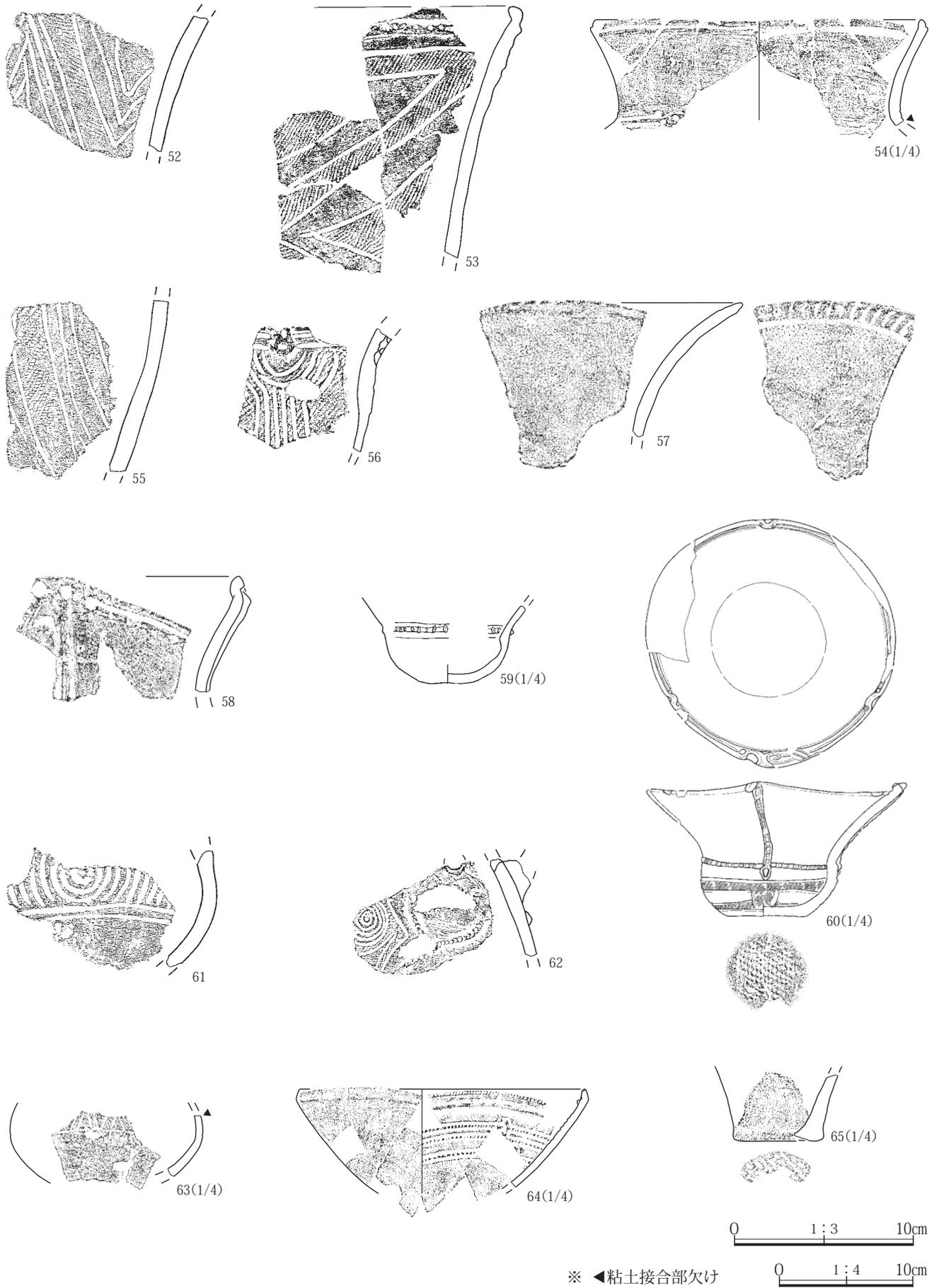
第77図 縄文時代 A区出土遺物(3)

第3章 発見された遺構と遺物



※ ◀粘土接合部欠け

第78図 縄文時代 A区出土遺物(4)



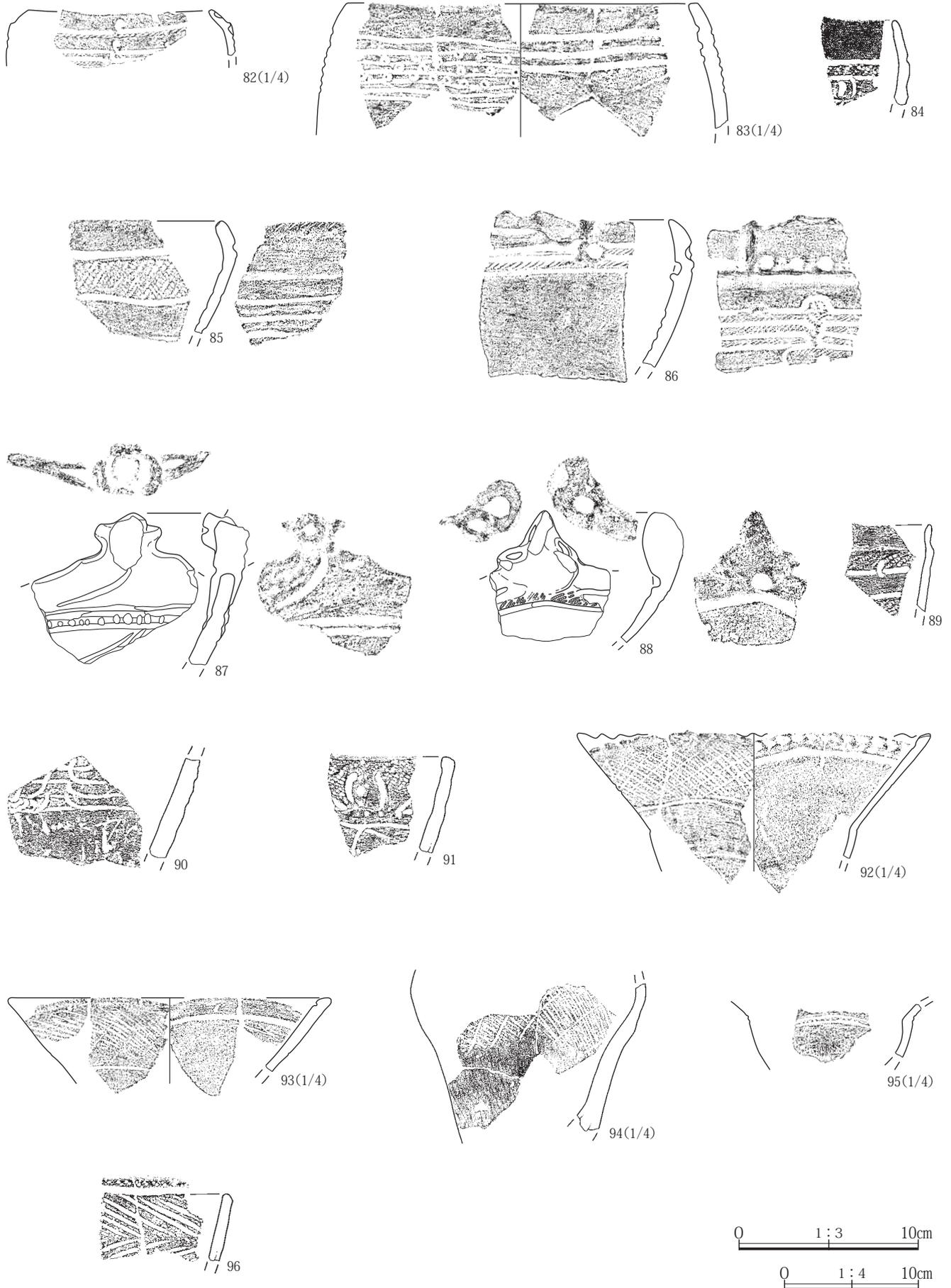
第79図 縄文時代 A区出土遺物(5)

第3章 発見された遺構と遺物



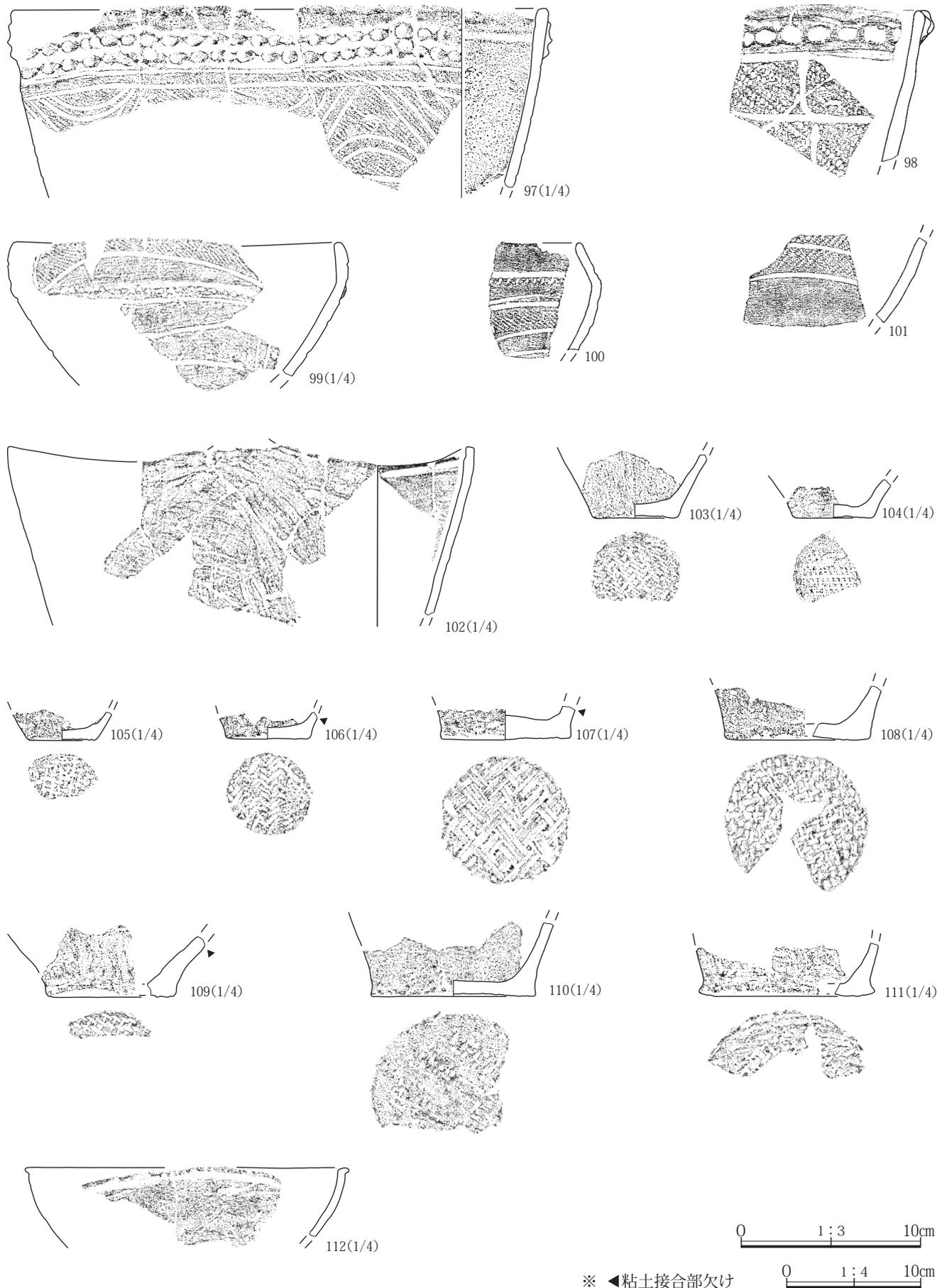
第80図 縄文時代 A区出土遺物(6)

縄文時代出土遺物



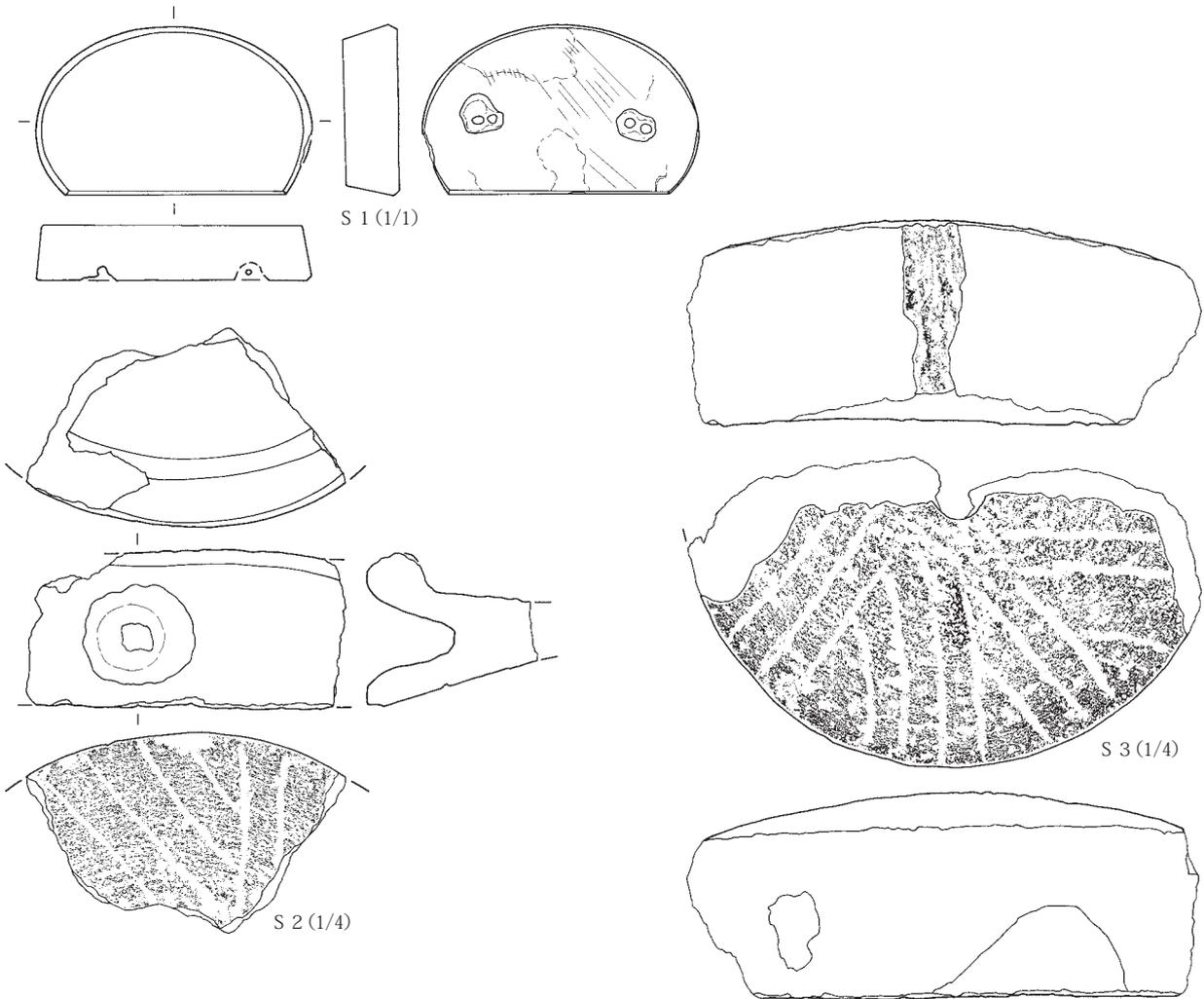
第81図 縄文時代 A区出土遺物(7)

第3章 発見された遺構と遺物

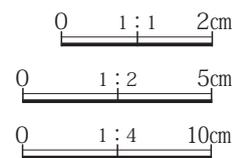
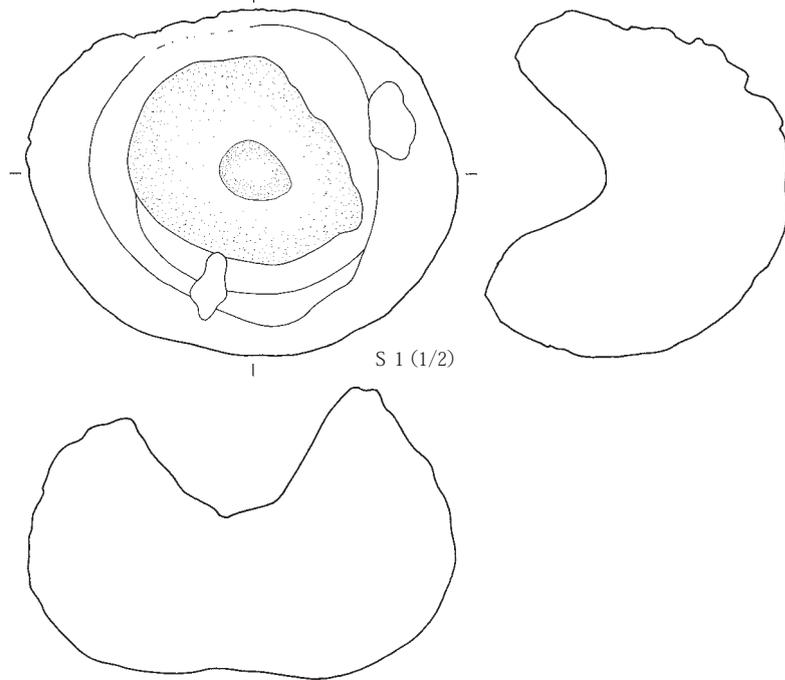


第82図 縄文時代 A区出土遺物(8)

中・近世
B区1号土坑



B区173号ピット

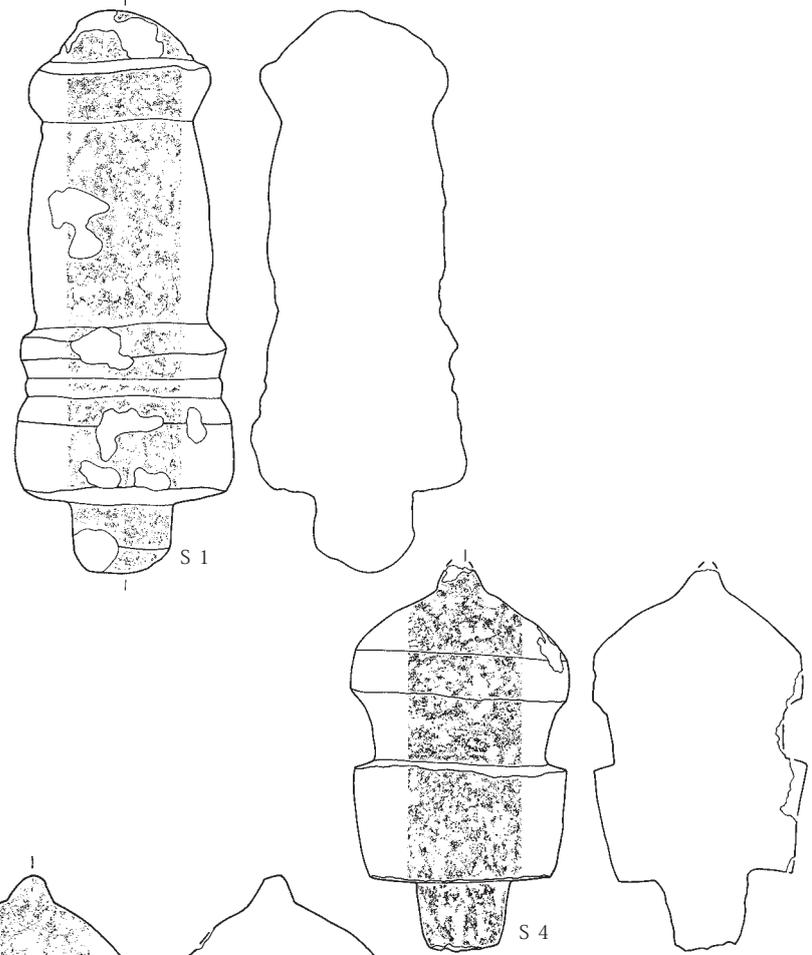


第83図 中・近世 B区出土石製品

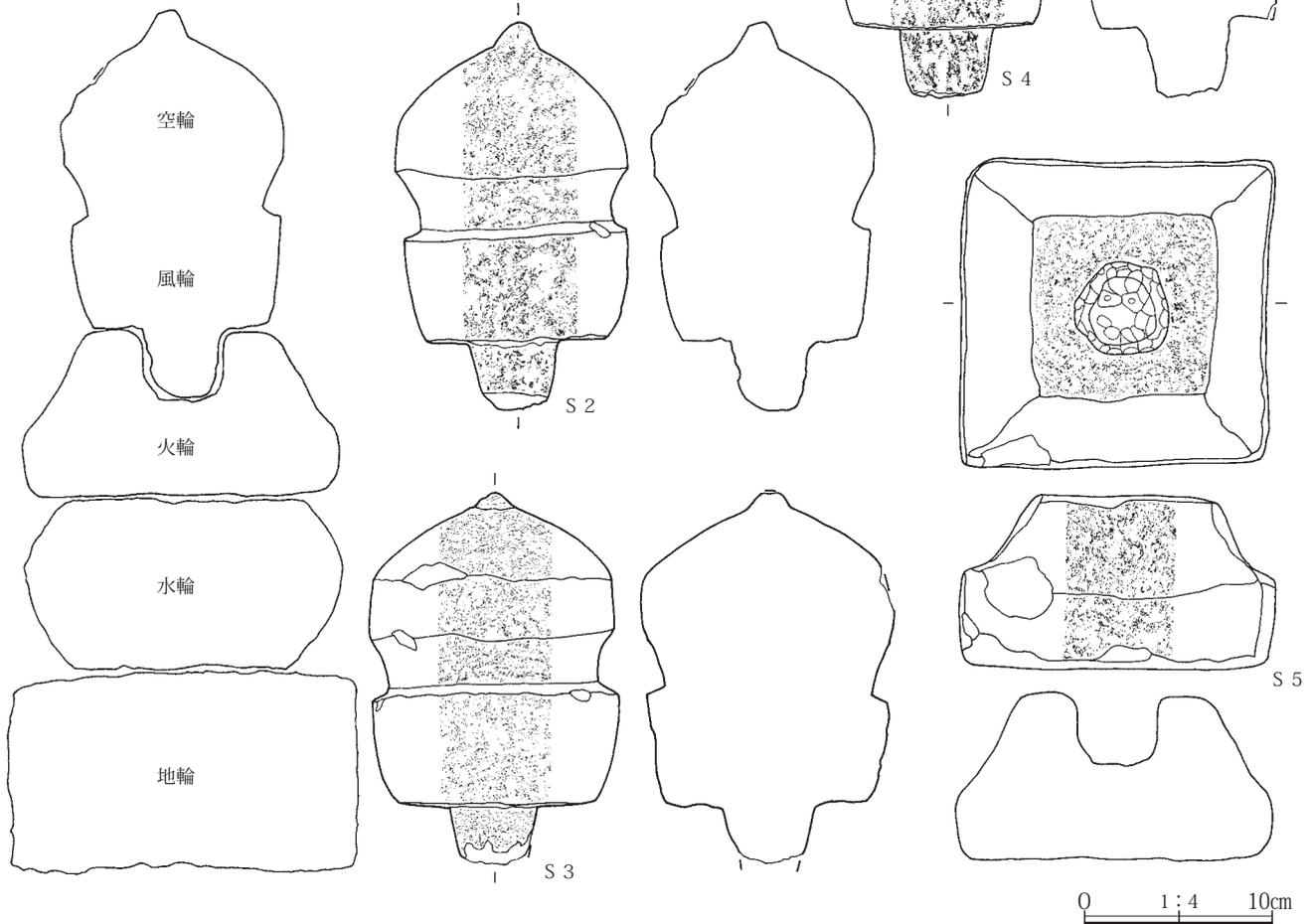
宝塔模式図



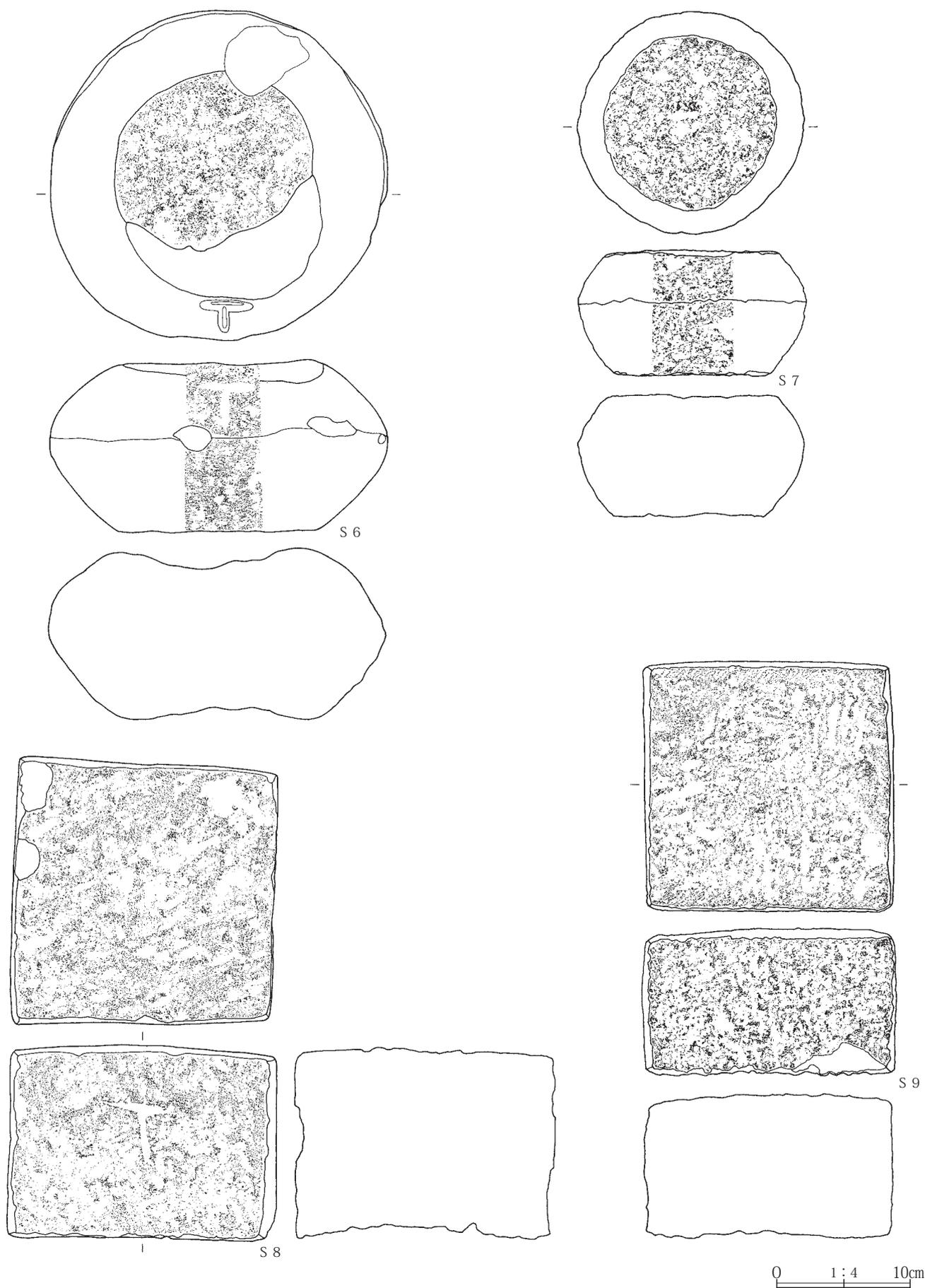
B区遺構外



五輪塔組み合わせ図



第84図 中・近世 B区出土宝塔・五輪塔

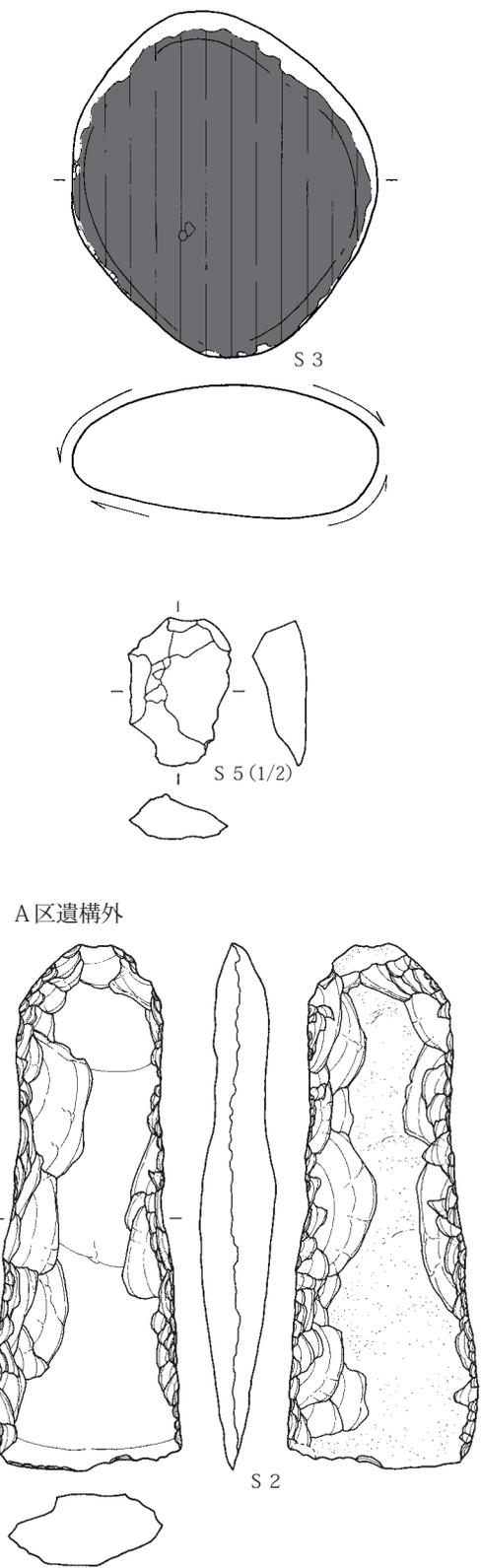
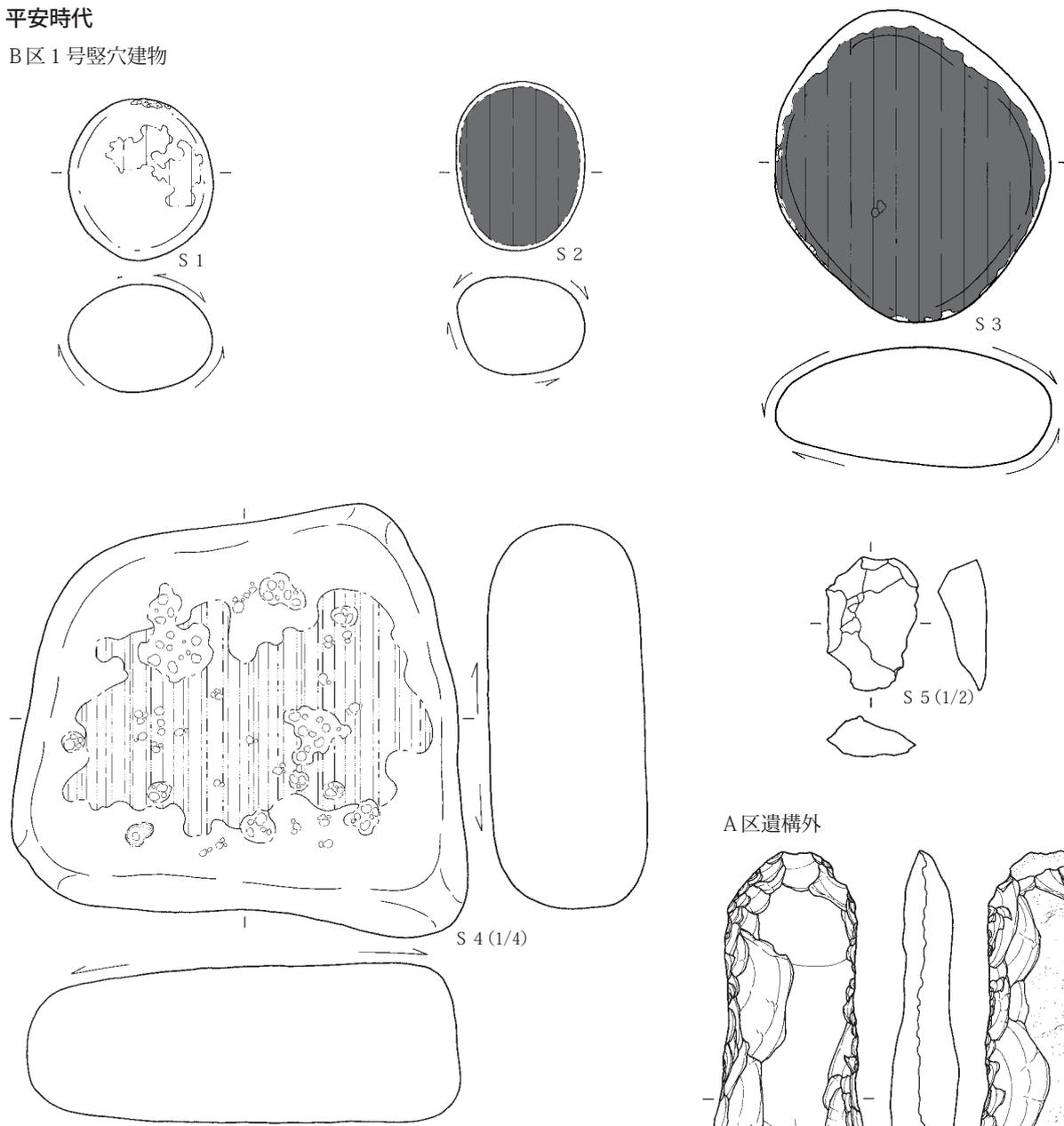


第85図 中・近世 B区出土五輪塔

第3章 発見された遺構と遺物

平安時代

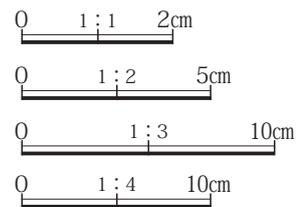
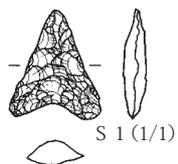
B区1号竪穴建物



A区遺構外

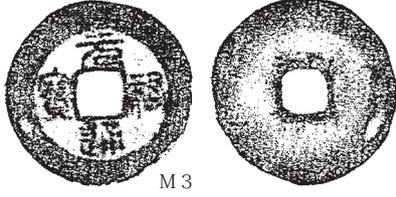
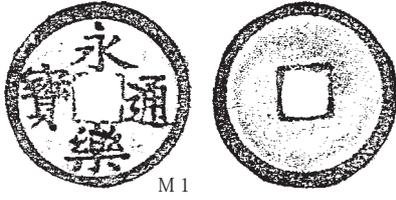
縄文時代

A区1号竪穴建物

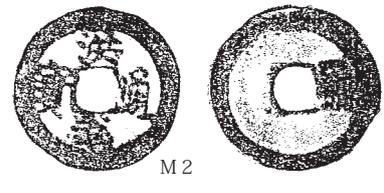
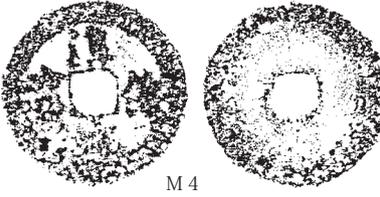
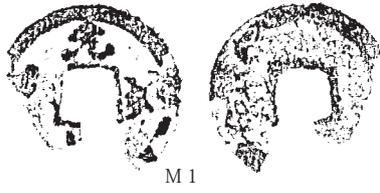


第86図 平安・縄文時代 A・B区出土石器・石製品

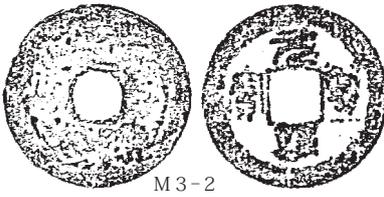
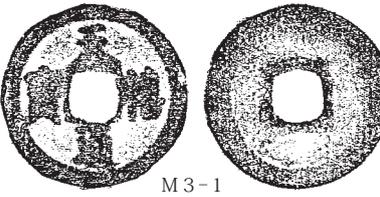
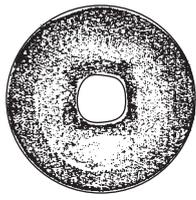
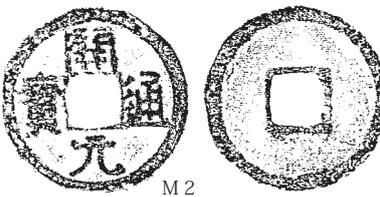
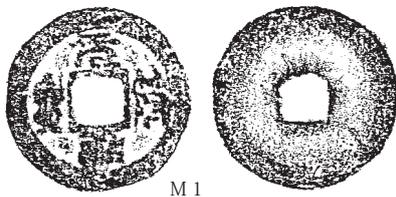
中·近世
B区7号土坑



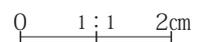
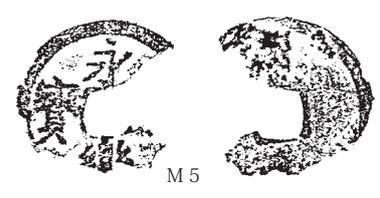
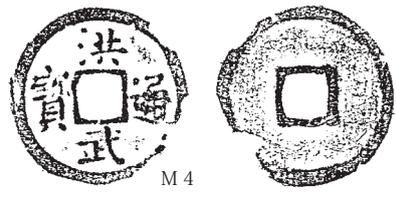
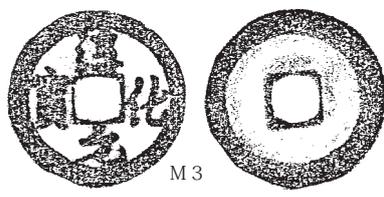
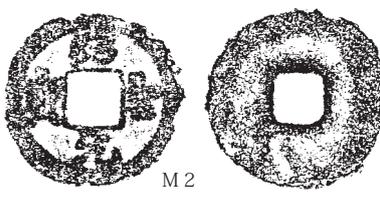
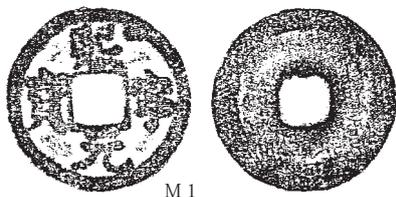
B区14号土坑



B区17号土坑

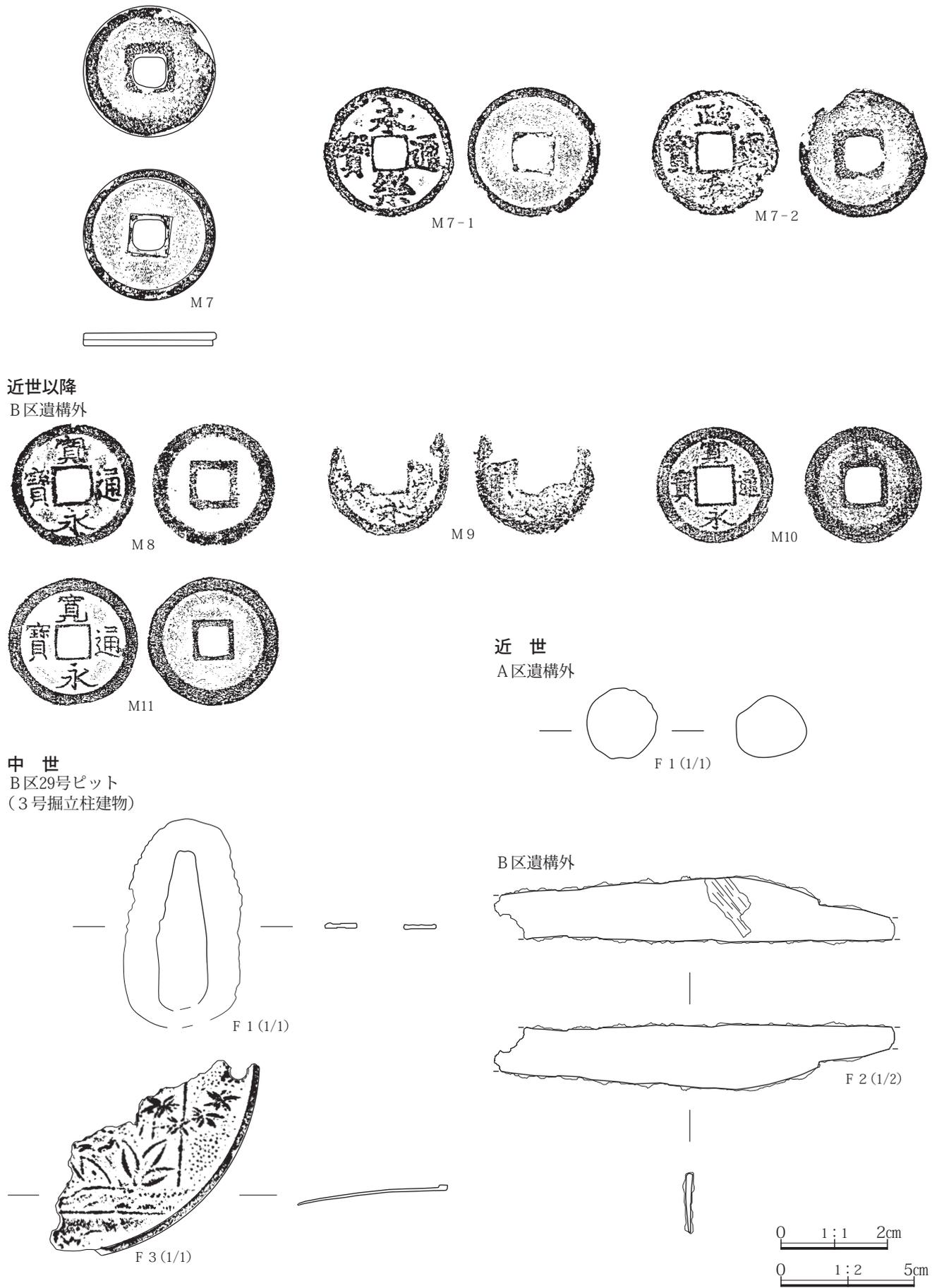


B区遺構外



第87图 中·近世 B区出土古錢

第3章 発見された遺構と遺物



第88図 中・近世 A・B区出土古銭・切羽・鉄砲玉・刀子・銅鏡

第6表 金属器類

番号	調査区	面	出土位置	種類	縦径	横径	厚さ	重さ	内縦	内横	材質	時代	年号	備考
M1	B	1	西側高台 -6cm	熙寧元寶	2.48	2.48	0.12	2.60	2.09	2.09	銅	北宋	1068年	真書
M2	B	1	西側高台 -8cm	紹聖元寶	2.38	2.40	0.13	2.40	1.88	1.87	銅	北宋	1094年	真書
M3	B	1	西側高台 -8cm	淳化元寶	2.42	2.40	0.12	2.60	1.87	1.77	銅	北宋	990年	真書
M4	B	1	西側高台 -2cm	洪武通寶	2.37	2.35	0.16	1.60	2.01	2.02	銅	明	1368年	
M5	B	1	西側高台 -3cm	永樂通寶			0.17	1.50			銅	明	1408年	
M1	B	4	7号土坑 底	永樂通寶	2.48	2.46	0.14	2.80	2.06	2.09	銅	明	1408年	
M1	B	3	14号土坑 底	元祐通寶	2.42		0.17	1.50	2.08		銅	北宋	1086年	真書
M2	B	3	14号土坑 底	洪武通寶	2.23	2.25	0.19	4.10	1.61	1.61	銅	明	1368年	背一銭
M3	B	3	14号土坑 +10cm	元祐通寶	2.52	2.49	0.14	3.20	1.82	1.82	銅	北宋	1086年	篆書、濶縁
M4	B	3	14号土坑 底	淳化元寶	2.46	2.46	0.16	2.40	1.77	1.77	銅	北宋	990年	真書
M5	B	3	14号土坑 底	洪武通寶	2.15	2.15	0.17	2.70	1.68	1.70	銅	明	1368年	
M1	B	3	17号土坑 底	元符通寶	2.45	2.45	0.16	2.40	1.94	1.94	銅	北宋	1098年	篆書
M2	B	3	17号土坑 底	開元通寶	2.48	2.47	0.15	2.90	2.11	2.11	銅	唐	621年	
M3-1	B	3	17号土坑 底	天禧通寶	2.48	2.48	0.11	2.30	1.97	2.28	銅	北宋	1017年	真書、2枚癒着
M3-2	B	3	17号土坑 底	元豊通寶	2.47	2.46	0.12	3.10	1.95	1.94	銅	北宋	1078年	篆書、2枚癒着
M7-1	B		一括	永樂通寶	2.47	2.48	0.16	2.90	2.14	2.04	銅	明	1408年	2枚癒着
M7-2	B		一括	政和通寶	2.40	2.41	0.14	2.60	2.00	2.01	銅	北宋	1111年	真書、2枚癒着
					2.42	2.41	0.15	2.56	1.94	1.94				
M9	B	1	西側高台 -8cm	新寛永通寶	2.35	2.33	0.14	2.50	1.95	1.95	銅	江戸	1697年	小形、元禄10年
M10	B	2	-2cm	新寛永通寶			0.14	0.90			銅	江戸	1697年	小形、元禄10年、磁性0.5cm
M11	B		一括	新寛永通寶	2.44	2.44	0.12	2.60	1.95	1.95	銅	江戸	1697年	元禄10年
M8	B	1	御堂跡一括	新寛永通寶	2.20	2.20	0.88	1.50	1.76	1.70	銅	江戸	1741年	背元、大坂高津銭、寛保元年、磁性1cm
					2.33	2.32	0.32	1.88	1.89	1.87				
M6	B		一括	銭文不明	2.51	2.35	0.43	2.8	2.00	2.15	銅			錆で大きくなっているか。
F1	A	1	1号壁セクトレンチ表土一括	鉛球 (鉄砲玉)							鉛			凹凸・歪み有り
F1	B	4	29号ピット 底	切羽	3.95	2.25	0.39	2.00			銅			銀メッキ有り
F3	B	1	御堂跡一括	銅鏡			0.18	5.20			銅	江戸		破片、鏡面残存、孔有り
F2	B	1	御堂跡一括	刀子(小刀)	15.0	2.5	0.6	36.1			鉄			

古銭種	材質	時代	初鑄年号	国内順位	遺跡点数	初鑄時北宋皇帝	名銭割合
開元通寶 5	銅	唐	621年	5	1		唐銭 4.5%
淳化元寶 25	銅	北宋	990年	25	2	二代太宗	
天禧通寶 14	銅	北宋	1017年	14	1	三代真宗	
熙寧元寶 3	銅	北宋	1068年	3	1	六代神宗	
元豊通寶 2	銅	北宋	1078年	2	1		
元祐通寶 4	銅	北宋	1086年	4	2		
紹聖元寶 8	銅	北宋	1094年	8	1	七代哲宗	
元符通寶 20	銅	北宋	1098年	20	1		
政和通寶 9	銅	北宋	1111年	9	1	八代徽宗	北宋銭 45.5%
洪武通寶 11	銅	明	1368年	11	3		
永樂通寶 6	銅	明	1408年	6	3		明銭 27.3%
新寛永通寶	銅	江戸	1697年		3		
新寛永通寶	銅	江戸	1741年		1		新寛永通寶 18.2%
不明	銅				1		不明銭 4.5%
					22		計 100.0%

※国内出土順位 1位皇宋通寶と2位元豊通寶が無いが、概ね上位25位までに全て入っているものだけである。
 北宋銭が多いが、明銭も洪武通寶3点・永樂通寶3点の計6点、唐銭も1点ある。この点も通常の他の遺跡との大差はない。
 寛永通寶は新寛永通寶1文銭のみであり、古寛永通寶・新寛永文銭・新寛永四文銭はない。

※銭鑄造量 北宋6代神宗の熙寧年間(1068~77)後半から元豊年間(1078~85)がピークで年間鑄造量は銅銭500万貫、鉄銭数十万貫
 (曾我部静雄1949『日宋金貨幣交流史』寶文館による)

遺構一覧表

第7表 A区土坑一覧

()の数値は残存値 内の形状は推定形状

番号	調査区	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸 方位	位置(グリッド)	形状	時代	遺物	重複遺構	備考
1	A区3面	1.60	1.40	0.38	N-35°-W	48区Y4、49区A4	楕円形	縄文?			
2	A区3面	0.78	0.56	0.14	N-15°-W	49区A5	楕円形	縄文?			
3	A区2面	1.26	(1.18)	0.49	N-11°-W	48区U3	楕円形	縄文?			
4	A区2面	3.46	1.62	0.38	N-20°-E	48区U4・5	不整長方形	縄文?			
5	A区2面	1.28	0.74	0.38	N-15°-E	48区U4・5	楕円形	縄文?			
6	A区3面	(1.58)	0.80	0.36	N-48°-W	48区W4・5	隅丸長方形	縄文?			
7	A区3面	2.16	0.80	0.32	N-66°-W	48区V・W4・5	隅丸長方形	縄文?			
8	A区3面	1.92	1.22	0.52	N-71°-E	48区T・U4	不整長方形	縄文?			
9	A区3面	1.50	1.26	0.15	N-50°-W	48区T4	隅丸長方形	縄文?			
10	A区3面	2.00	1.26	0.30	N-25°-W	48区S・T4・5	不整楕円形	縄文?			
11	A区3面	1.20	1.00	0.15	N-60°-E	48区T5	楕円形	縄文?			
12	A区3面	1.42	1.20	0.34	N-52°-W	48区T・U4	不整三角形	縄文?			

第8表 B区土坑一覧

()の数値は残存値 内の形状は推定形状

番号	調査区	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸 方位	位置(グリッド)	形状	時代	遺物	重複遺構	備考
1	B区2面	1.78	1.56	0.75	N-3°-W	36区0・P25、 46区0・P1	楕円形	中世?	丸柄・石臼		2・3掘立内
2	B区3面	0.70	0.54	0.20	N-32°-W	46区P3	楕円形	中世?			
3	B区3面	0.42	0.38	0.11	N-4°-W	46区P2	楕円形	中世?			
4	B区3面	0.76	0.62	0.90	N-41°-E	46区P2・3	楕円形	中世?			
5	B区4面	2.00	1.86	0.20	N-54°-E	46区Q2・3	楕円形	中世?			
6	B区4面	1.01	0.82	0.10	N-78°-W	46区Q2	楕円形	中世?		10土坑に後出	
7	B区4面	0.66	0.52	0.17	N-47°-E	46区P1	楕円形	中世?			
8	B区4面	1.26	1.12	0.13	N-73°-W	36区N・024	楕円形	中世?			
9	B区4面	1.50	1.42	0.24	N-55°-E	36区N・023・24	楕円形	中世?			
10	B区4面	1.50	1.08	0.11	N-86°-E	46区PQ2	隅丸長方形	中世?	有り	6土坑に先行	
11	B区4面	0.60	0.48	0.25	N-21°-E	36区P21	楕円形	中世?			
12	B区3面	1.20	0.60	0.20	N-29°-W	36区X・Y23・24	不整楕円形	中世			
13	B区3面	1.68	0.71	0.19	N-2°-W	36区X・Y23・24	楕円形	中世			
14	B区3面	1.64	1.01	0.64	N-5°-E	36区W24	楕円形	中世	骨・銭5枚		
15	B区3面	1.20	0.46	0.19	N-38°-E	36区W24	楕円形	中世			
16	B区3面	1.36	0.90	0.40	N-3°-W	36区V・W24	楕円形	中世	骨		
17	B区3面	1.48	0.98	0.50	N-19°-E	36区W23・24	楕円形	中世	銭4枚		
18	B区4面	1.06	0.96	0.34	N-10°-W	46区P1	楕円形	中世		175Pに先行	
19	B区4面	1.86	(0.95)	0.35	N-12°-W	36区N25	(楕円形?)	中世?			東半調査区外
20	B区4面	0.60	0.52	0.16	N-37°-E	36区N・025、 46区N・01	長方形	近世		137Pに先行	1掘立柱穴
21	B区4面	1.46	1.20	0.41	N-70°-E	36区Q24・25	(長方形)	近世?		169Pに後出	1掘立内
22	B区4面	2.24	1.92	0.28	N-28°-W	36区P・Q25	長方形	近世		133・147・ 148Pに先行	1掘立内

遺構一覧表

第9表 A区ピット一覧

番号	調査区	遺構	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸方位	位置 (グリッド)	形状	時代	遺物	重複等
1	A区2面	1住	0.20	0.17	0.13	N-29°-W	48区N-11	隅丸長方形	縄文		
2	A区2面	1住	0.26	0.19	0.20	N-16°-W	48区M-11	楕円形	縄文		
3	A区2面	1住	0.31	0.29	0.33	N-5°-E	48区N-11	円形	縄文		
4	A区2面	1住	0.29	0.25	0.16	N-66°-W	48区N-11	円形	縄文		
5	A区3面		0.46	0.36	0.11	N-22°-W	48区V-4	楕円形	縄文		
6	A区3面		0.53	0.47	0.47	N-76°-E	48区V-4	円形	縄文		
7	A区3面		0.80	0.64	0.26	N-25°-W	48区U-4	楕円形	縄文		
8	A区3面		0.30	0.18	0.10	N-38°-E	48区U-4	楕円形	縄文		
9	A区2面	2住	0.28	0.20	0.11	N-9°-W	48区T-4	楕円形	縄文		
10	A区3面		0.36	0.33	0.09	N-84°-W	48区T-4	円形	縄文		
11	A区3面		0.60	0.42	0.14	N-53°-W	48区T-4	隅丸長方形	縄文		
12	A区3面		0.26	0.22	0.28	N-4°-W	48区T-4	楕円形	縄文		
13	A区2面	2住	0.28	0.23	0.13	N-55°-W	48区T-4	円形	縄文		
14	A区2面	2住	0.25	0.16	0.10	N-8°-W	48区T-4	楕円形	縄文		
15	A区3面		0.26	0.22	0.23	N-47°-E	48区T-4	円形	縄文		10坑
16	A区3面		0.30	0.24	0.23	N-83°-E	48区T-4	円形	縄文		
17	A区3面		0.35	0.28	0.29	N-15°-E	48区T-4	楕円形	縄文		10坑
18	A区3面		0.45	0.41	0.13	N-9°-W	48区S-5	楕円形	縄文		
19	A区3面		0.30	0.26	0.18	N-9°-W	48区T-5	楕円形	縄文		
20	A区2面	2住	0.26	0.23	0.08	N-6°-W	48区T-4	楕円形	縄文		
21	A区2面	2住	0.29	0.22	0.05	N-85°-E	48区T-4	楕円形	縄文		
22	A区3面		0.45	0.37	0.06	N-30°-W	48区T-4・5	楕円形	縄文		
23	A区3面		0.74	0.57	0.27	N-42°-E	48区T・U-4・5	楕円形	縄文		
24	A区3面		0.35	0.33	0.26	N-42°-W	48区T-5	円形	縄文		10坑
25	A区2面		0.23	0.20	0.13	N-48°-E	48区M-11	円形	縄文		
26	A区2面		0.36	0.35	0.13	N-58°-E	48区M-10	円形	縄文		
27	A区2面	1住	0.38	0.28	0.08	N-65°-W	48区N-11	楕円形	縄文		
28	A区2面	1住	0.33	0.30	0.40	N-69°-W	48区N-11	円形	縄文		
29	A区2面	1住	0.39	0.38	0.30	N-51°-W	48区N-11	円形	縄文		
30	A区2面	1住	0.47	0.41	0.19	N-40°-W	48区N-10・11	楕円形	縄文		

第10表 B区ピット一覧

番号	調査区	遺構	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸方位	位置 (グリッド)	形状	時代	遺物	重複等
1	B区4面	5掘	0.25	0.22	0.31	N-25°-W	36区R-24	円形	中世		
2	B区4面	5掘	0.31	0.25	0.26	N-49°-W	36区R-24	楕円形	中世		
3	B区4面	5掘	0.27	0.22	0.35	N-14°-W	36区R-23・24	楕円形	中世		
4	B区4面		0.33	0.27	0.07	N-19°-W	36区R-24	楕円形	中世		
5	B区4面		0.29	0.23	0.15	N-80°-E	36区R-24	楕円形	中世		
6	B区4面	5掘	0.29	0.22	0.25	N-67°-E	36区Q・R-24	楕円形	中世		
7	B区4面	5掘	0.36	0.31	0.35	N-47°-W	36区R-24	楕円形	中世		
8	B区4面		0.40	0.32	0.30	N-79°-E	36区P-24	楕円形	中世		
9	B区3面		0.32	0.29	0.18	N-24°-W	46区O-2	円形	中世		
10	B区4面		0.20	0.07	0.25	N-31°-W	36区O・P-24	楕円形	中世		
11	B区4面	1掘	0.40	0.39	0.42	N-89°-E	36区O-24	円形	中世		
12	B区4面		0.37	0.26	0.45	N-28°-W	36区O-24	楕円形	中世		
13	B区3面		0.29	0.26	0.17	N-27°-E	46区O-3	円形	中世		
14	B区3面		0.40	0.33	0.26	N-69°-E	46区P-2・3	円形	中世		
15	B区3面		0.48	0.45	0.24	N-21°-W	46区R-3	円形	中世		
16	B区4面		0.32	0.32	0.13	N-29°-W	46区Q-2	隅丸長方形	中世		
17	B区4面		0.29	0.24	0.16	N-88°-E	46区P-3	円形	中世		
18	B区4面		0.30	0.17	0.07	N-62°-E	46区P-2・3	楕円形	中世		
19	B区4面		0.23	0.21	0.22	N-54°-E	46区P-2	円形	中世		
20	B区4面		0.29	0.25	0.37	N-75°-E	46区O-3	円形	中世	有	

遺構一覧表

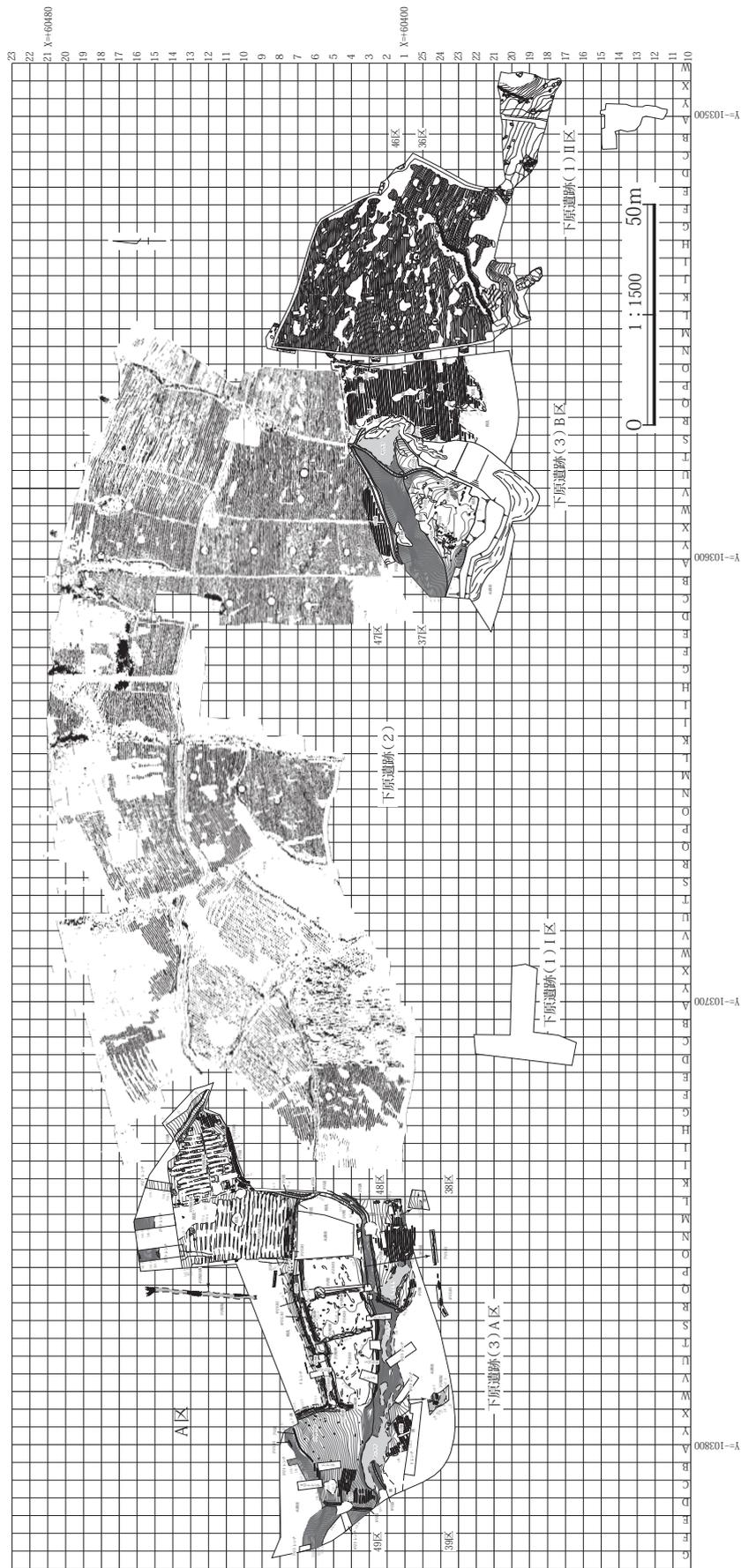
番号	調査区	遺構	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸方位	位置 (グリッド)	形状	時代	遺物	重複等
21	B区 4面		0.28	0.27	0.31	N-86°-E	46区O-3	円形	中世		
22	B区 4面		0.33	0.29	0.22	N-65°-W	46区P-2	楕円形	中世		
23	B区 4面		0.37	0.26	0.31	N-46°-W	46区P-2	楕円形	中世		
24	B区 4面		0.37	0.30	0.24	N-68°-W	46区P-2	楕円形	中世		
25	B区 4面		0.27	0.26	0.18	N-62°-W	46区P-2	円形	中世		
26	B区 4面		0.28	0.24	0.15	N-90°-E	46区P-2	円形	中世		
27	B区 4面		0.33	0.28	0.14	N-40°-E	46区P-2	円形	中世		
28	B区 4面		0.69	0.58	0.50	N-69°-E	46区Q-1	楕円形	中世		
29	B区 4面	3掘	0.73	0.68	0.56	N-21°-W	46区Q-1	円形	中世	有	
30	B区 4面		0.38	0.35	0.66	N-77°-E	46区Q-1	円形	中世		
31	B区 4面	2掘	0.86	0.70	0.54	N-86°-W	46区P・Q-1	楕円形	中世		
32	B区 4面		0.26	0.18	0.15	N-3°-W	46区P-2	楕円形	中世		
33	B区 4面		0.36	0.33	0.24	N-80°-E	46区P-1・2	楕円形	中世		
34	B区 4面	2掘	0.37	0.34	0.27	N-80°-E	46区P-1	円形	中世		
35	B区 4面		0.43	0.40	0.16	N-63°-W	46区P-1	円形	中世		
36	B区 4面		0.44	0.41	0.26	N-85°-E	46区O・P-1	円形	中世		
37	B区 4面		0.27	0.23	0.18	N-60°-E	46区O-2	円形	中世		
38	B区 4面		0.38	0.29	0.11	N-30°-W	46区O-1	楕円形	中世		
39	B区 4面	2掘	0.25	0.21	0.16	N-31°-W	46区O-1	円形	中世		
40	B区 4面	2掘	0.32	0.27	0.46	N-42°-W	46区O-1	楕円形	中世		
41	B区 4面	1掘	0.42	0.39	0.63	N-80°-E	36・46区Q-25・1	円形	中世		
42	B区 4面		0.34	0.31	0.33	N-54°-W	36区P-25	円形	中世		
43	B区 4面	6掘	0.36	0.30	0.56	N-78°-E	36区P-25	円形	中世		
44	B区 4面		0.24	0.20	0.31	N-12°-W	36区P-25	楕円形	中世		
45	B区 4面		0.23	0.21	0.18	N-89°-E	36区P-25	楕円形	中世		
46	B区 4面	2掘	0.36	0.32	0.27	N-15°-E	36区P-25	円形	中世		
47	B区 4面	2掘	0.40	0.33	0.35	N-13°-W	36区O-25	楕円形	中世		
48	B区 4面	4掘	0.30	0.26	0.26	N-6°-E	36区O-25	円形	中世		
49	B区 4面	2掘	0.56	0.36	0.32	N-78°-E	36区O-25	楕円形	中世		
50	B区 4面	6掘	0.32	0.29	0.14	N-21°-W	36区O-25	円形	中世		
51	B区 4面	4掘	0.33	0.23	0.32	N-17°-W	36区O-24	楕円形	中世		
52	B区 4面		0.27	0.25	0.44	N-90°-E	36区O・P-24・25	円形	中世		
53	B区 4面	6掘	0.41	0.33	0.24	N-8°-W	36区O-25	楕円形	中世		
54	B区 4面	3掘	0.39	0.32	0.19	N-29°-E	36区O-25	楕円形	中世		
55	B区 4面	4掘	0.26	0.23	0.20	N-48°-W	36区O-25	円形	中世		
56	B区 4面	4掘	0.38	0.35	0.22	N-60°-E	36区O-25	円形	中世		
57	B区 4面	4掘	0.33	0.28	0.36	N-16°-E	36区O-25	円形	中世		
58	B区 4面	2掘	0.28	0.25	0.30	N-2°-E	36区O-25	楕円形	中世		
59	B区 4面		0.29	0.26	0.30	N-54°-E	36区N-25	円形	中世		
60	B区 4面	3掘	0.31	0.28	0.36	N-55°-W	36区O-25	楕円形	中世		
61	B区 4面		0.35	0.32	0.24	N-32°-W	36区O-24・25	楕円形	中世		
62	B区 4面	1掘	0.63	0.58	0.28	N-12°-W	36区O-24	円形	中世		
63	B区 4面		0.39	0.30	0.48	N-40°-W	36区O-24・25	楕円形	中世		
64	B区 4面	2掘	0.38	0.37	0.25	N-9°-W	36区O-24・25	円形	中世		
65	B区 4面	3掘	0.38	0.36	0.28	N-74°-E	36区O-24	円形	中世		
66	B区 4面	4掘	0.22	0.07	0.11	N-53°-E	36区O-25	楕円形	中世		
67	B区 4面		0.25	0.21	0.20	N-10°-E	36区O-24	楕円形	中世		
68	B区 4面		0.46	0.32	0.15	N-25°-E	36区O-25	不定形	中世		
69	B区 4面	3掘	0.40	0.28	0.18	N-87°-E	36区O-24	楕円形	中世		
70	B区 4面	6掘	0.37	0.31	0.23	N-15°-W	36区O-24	楕円形	中世		
71	B区 4面	6掘	0.46	0.40	0.38	N-35°-W	36区P-24	楕円形	中世		
72	B区 4面		0.42	0.36	0.26	N-88°-W	36区P-24	円形	中世		
73	B区 4面	1掘	0.36	0.32	0.39	N-37°-W	36区P-24	楕円形	中世		

遺構一覧表

番号	調査区	遺構	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸方位	位置 (グリッド)	形状	時代	遺物	重複等
74	B区 4面	4掘	0.87	0.67	0.29	N-59°-W	36区 P-24	不定形	中世		
75	B区 4面		0.47	0.40	0.35	N-43°-E	36区 P-24	楕円形	中世		
76	B区 4面	4掘	0.69	0.57	0.22	N-35°-W	36区 O-24	楕円形	中世		
77	B区 4面		0.27	0.25	0.19	N-2°-W	36区 O-24	円形	中世		
78	B区 4面		0.38	0.37	0.25	N-47°-W	36区 N-23	円形	中世		
79	B区 4面		0.34	0.28	0.11	N-70°-W	36区 O-23	円形	中世		
80	B区 4面		0.43	0.39	0.19	N-69°-E	36区 O-23	円形	中世		
81	B区 4面		0.42	0.28	0.13	N-47°-E	36区 O-23	楕円形	中世		
82	B区 4面		0.40	0.33	0.24	N-86°-E	36区 P-23	円形	中世		
83	B区 4面		0.31	0.25	0.21	N-85°-E	36区 P-23	円形	中世		
84	B区 4面		0.37	0.35	0.23	N-42°-W	36区 P-23	円形	中世		
85	B区 4面		0.48	0.46	0.12	N-34°-W	36区 P-23	円形	中世		
86	B区 4面		0.77	0.54	0.38	N-69°-E	36区 P-23	不定形	中世		
87	B区 4面		0.23	0.19	0.14	N-40°-W	36区 P-23	楕円形	中世		
88	B区 4面		0.45	0.44	0.20	N-34°-W	36区 P-22	円形	中世		
89	B区 4面		0.37	0.33	0.20	N-76°-E	36区 P-22	円形	中世		
90	B区 4面		0.69	0.61	0.27	N-6°-E	36区 P-23	楕円形	中世		
91	B区 4面		0.38	0.20	0.16	N-32°-W	36区 O-22	楕円形	中世		
92	B区 4面		0.80	0.74	0.29	N-72°-W	36区 Q-24	円形	中世	有	
93	B区 4面		0.66	0.50	0.17	N-47°-E	36区 R-23	楕円形	中世		
94	B区 4面	5掘	0.23	0.21	0.20	N-86°-E	36区 R-24	円形	中世		
95	B区 4面		0.33	0.29	0.35	N-48°-E	36区 R-24	楕円形	中世		
96	B区 4面		0.41	0.37	0.40	N-62°-E	36区 P-21	円形	中世		
97	B区 4面	4掘	0.47	0.37	0.38	N-61°-E	36区 O-25	円形	中世		
98	B区 4面	3掘	0.31	0.31	0.19	N-58°-E	36区 P-25	円形	中世		
99	B区 4面	6掘	0.45	0.43	0.17	N-59°-E	36区 P-24	楕円形	中世		
100	B区 4面		0.48	0.40	0.16	N-77°-W	36区 P-22	楕円形	中世		
101	B区 4面		0.33	0.30	0.11	N-7°-W	36区 P-22	円形	中世		
102	B区 4面		0.34	0.28	0.18	N-2°-E	36区 P-22	楕円形	中世		
103	B区 4面		0.36	0.29	0.08	N-86°-E	36区 P-22	円形	中世		
104	B区 4面		0.31	0.31	0.12	N-1°-W	36区 P-22	円形	中世		
105	B区 4面		0.29	0.28	0.23	N-45°-E	36区 P-23	円形	中世		
106	B区 4面		0.32	0.27	0.22	N-89°-E	36区 P-23	楕円形	中世		
107	B区 4面		0.35	0.33	0.32	N-54°-E	36区 R-23	円形	中世		
108	B区 4面		0.29	0.25	0.42	N-25°-E	36区 R-25	楕円形	中世		
109	B区 3面		0.74	0.40	0.11	N-15°-W	36区 Y-23	不定形	中世		
110	B区 3面		0.49	0.33	0.11	N-33°-W	36区 U・V-22	楕円形	中世		
111	B区 3面		0.23	0.18	0.17	N-5°-W	36区 V-23	楕円形	中世		
112	B区 3面		0.26	0.23	0.18	N-78°-E	36区 W-23	円形	中世		
113	B区 3面		0.24	0.19	0.21	N-1°-W	36区 W-23	楕円形	中世		
114	B区 3面		0.24	0.22	0.23	N-8°-E	36区 V・W-23	円形	中世		
115	B区 3面		0.30	0.25	0.31	N-65°-W	36区 X-23	楕円形	中世		
116	B区 3面		0.28	0.23	0.11	N-7°-E	36区 X-23	楕円形	中世		
117	B区 3面		0.21	0.17	0.08	N-1°-W	36区 V-23	楕円形	中世		
118	B区 3面		0.31	0.19	0.11	N-13°-W	36区 U-23	楕円形	中世		
119	B区 3面		0.34	0.29	0.26	N-52°-W	36区 W-25	楕円形	中世		
120	B区 3面		0.10	0.08	0.18	N-72°-W	36区 W-24	円形	中世		
121	B区 3面		0.27	0.25	0.09	N-4°-E	36区 V-24	円形	中世		
122	B区 4面	4掘	0.40	0.35	0.08	N-56°-E	46区 P-1	楕円形	中世		
123	B区 4面	4掘	0.44	0.35	0.28	N-36°-E	46区 P-1	楕円形	中世		
124	B区 4面	3掘	0.32	0.30	0.35	N-9°-W	46区 P-1	楕円形	中世		
125	B区 4面	6掘	0.39	0.25	0.27	N-49°-E	36区 P-25	楕円形	中世		
126	B区 4面	4掘	0.28	0.20	0.30	N-69°-E	36区 Q-24	楕円形	中世		173ピット

遺構一覧表

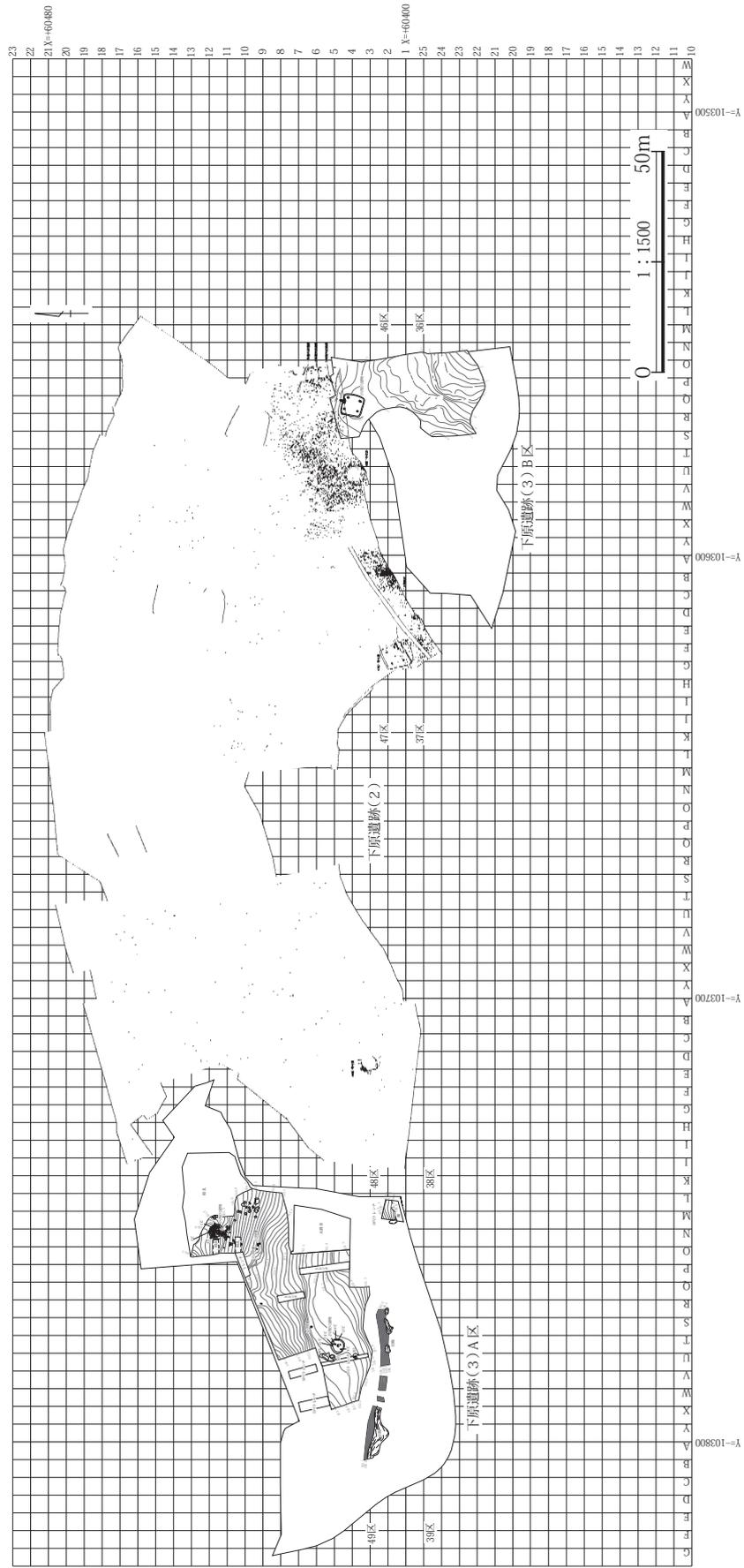
番号	調査区	遺構	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	主軸方位	位置 (グリッド)	形状	時代	遺物	重複等
127	B区 4面		0.21	0.17	0.24	N-63°-E	36区Q-25	楕円形	中世		
128	B区 4面	3掘	0.30	0.21	0.21	N-67°-E	46区N-1	楕円形	中世		
129	B区 4面		0.26	0.24	0.45	N-39°-E	46区O-1	円形	中世		
130	B区 4面		0.35	0.32	0.32	N-60°-E	46区N・O-1	円形	中世		
131	B区 4面		0.30	0.27	0.33	N-65°-E	46区O-2	円形	中世		
132	B区 4面		0.23	0.19	0.35	N-55°-E	46区O-1	円形	中世		
133	B区 4面	3掘	0.41	0.33	0.17	N-90°-E	36区P-25	楕円形	中世		22坑
134	B区 4面		0.23	0.17	0.17	N-50°-W	46区O-2	楕円形	中世		
135	B区 4面		0.22	0.18	0.27	N-54°-E	46区O-1	円形	中世		
136	B区 4面	2掘	0.32	0.31	0.29	N-31°-W	46区O-1	円形	中世		
137	B区 4面	3掘	0.25	0.35	0.18	N-4°-W	46区O-1	楕円形	中世		20坑
138	B区 4面	3掘	0.24	0.21	0.33	N-38°-E	46区N-1	円形	中世		
139	B区 4面	5掘	0.43	0.37	0.28	N-58°-E	36区Q-24	円形	中世		
140	B区 4面		0.33	0.29	0.13	N-45°-W	36区Q-25	楕円形	中世		
141	B区 4面	1掘	0.45	0.33	0.26	N-88°-E	36区Q-24	楕円形	中世		
142	B区 4面	1掘	0.32	0.23	0.42	N-73°-W	36区Q-25	楕円形	中世		
143	B区 4面		0.21	0.18	0.08	N-76°-E	46区O-1・2	円形	中世		
144	B区 4面	1掘	0.50	0.38	0.34	N-35°-E	46区P-1	楕円形	中世		
145	B区 4面		0.30	0.23	0.36	N-86°-E	46区O-2	楕円形	中世		
146	B区 4面		0.26	0.25	0.29	N-22°-W	46区O-2	円形	中世		
147	B区 4面		0.25	0.25	0.23	N-20°-W	36区P-25	円形	中世		22坑
148	B区 4面	6掘	0.27	0.22	0.19	N-17°-E	36区P-25	円形	中世		22坑
149	B区 4面	4掘	0.42	0.33	0.53	N-55°-E	36区O・P-24	楕円形	中世		
150	B区 4面		0.29	0.24	0.20	N-34°-W	36区Q-25	楕円形	中世		
151	B区 4面		0.27	0.24	0.13	N-8°-W	36区Q-25	円形	中世		
152	B区 4面		0.47	0.36	0.25	N-8°-E	36区Q-25	楕円形	中世		
153	B区 4面	5掘	0.28	0.25	0.31	N-55°-E	36区R-25	円形	中世		
154	B区 4面	5掘	0.33	0.26	0.35	N-47°-E	36区R-25	楕円形	中世		
155	B区 4面		0.36	0.28	0.25	N-77°-W	36区Q-24	楕円形	中世		
156	B区 4面	4掘	0.24	0.21	0.37	N-76°-E	36区Q-25	円形	中世		
157	B区 4面	3掘	0.26	0.22	0.45	N-12°-W	36区Q-25	円形	中世		
158	B区 4面	4掘	0.23	0.22	0.25	N-86°-E	36区P-25	円形	中世		
159	B区 4面	4掘	0.37	0.30	0.23	N-5°-E	36区Q-25	楕円形	中世		
160	B区 4面	3掘	0.27	0.23	0.55	N-37°-W	46区Q-1	円形	中世		
161	B区 4面		0.26	0.23	0.37	N-27°-W	36区Q-25	円形	中世		
162	B区 4面	3掘	0.47	0.36	0.25	N-75°-E	46区O-1	楕円形	中世		
163	B区 4面		0.29	0.23	0.18	N-60°-E	46区O-1	楕円形	中世		
164	B区 4面		0.27	0.19	0.15	N-67°-E	46区O-1	楕円形	中世		
165	B区 4面	1掘	0.47	0.40	0.45	N-44°-W	46区O-1	楕円形	中世		
166	B区 4面	4掘	0.32	0.29	0.39	N-21°-E	36区P-25	楕円形	中世		
167	B区 4面	2掘	0.36	0.25	0.33	N-61°-W	36区P-25	楕円形	中世		
168	B区 4面	3掘	0.28	0.27	0.26	N-23°-E	36区P-25	円形	中世		
169	B区 4面	2掘	0.27	(0.24)	0.21	N-29°-E	36区P-25	円形	中世		21坑
170	B区 4面	1掘	0.27	0.20	0.26	N-67°-E	36区P-24	隅丸長方形	中世		
171	B区 4面		0.26	0.20	0.20	N-81°-E	36区Q-25	楕円形	中世		
172	B区 4面		0.40	0.27	0.22	N-75°-E	36区Q-25	楕円形	中世		
173	B区 4面		0.37	0.29	0.41	N-29°-W	36区Q-24	円形	中世		126ピット
174	B区 4面	2掘	0.52	0.50	0.30	N-68°-W	36区Q-25	楕円形	中世		
175	B区 4面	3掘	0.28	0.27	0.22	N-14°-W	46区P-1	円形	中世		18坑
176	B区 4面	4掘	0.23	0.17	0.29	N-55°-W	36区P-25	楕円形	中世		
177	B区 4面	2掘	0.32	0.26	0.07	N-22°-W	46区P-1	楕円形	中世		
178	B区 4面	1掘	0.48	0.44	0.47	N-74°-W	36・46区P・Q-25・1	楕円形	中世		
179	B区 4面	3掘	0.39	0.34	0.32	N-75°-E	36区O-25	円形	中世		
180	B区 4面		0.33	0.31	0.28	N-19°-W	36区O-25	円形	中世		



第89图 下原遺跡(1)·(2)·(3) 近世 1面 全体图



第90図 下原遺跡(1)・(2)・(3) 中・近世 2・3面 全体図



第91図 下原遺跡(2)・(3) 縄文・弥生・平安時代 2～4面 全体図

第4章 自然科学分析

下原遺跡における発掘調査の中で、天明泥流直下層より水田耕作土とみられる堆積層が検出され、その下位層についても耕作土の可能性が想定された。そこで、これらの層における稲作の可能性や当時の植生などを明らかにするために、株式会社古環境研究所に植物珪酸体(プラント・オパール)分析を委託した。

また、天明泥流下位層の土坑中から人骨や畑の付近から動物の歯が検出された。それらについて埋葬時の人骨の状況や年齢・性別、動物の種類や部位の特定などを行うために大妻女子大学博物館の榎崎修一郎氏に分析を委託した。

以下、分析によって得られた成果を掲載する。

第1節 植物珪酸体分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 2000)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

下原遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字下原に所在する。調査地は、吾妻川左岸の下位段丘上の傾斜地に立地する。平成29年度の発掘調査において、天明泥流直下層より水田耕作土とみられる堆積層が検出された。また、その下位層についても耕作土の可能性が想定された。そこで、これらの層における稲作の可能性、さらに栽培作物や当時の植生を明らかにすることを目的として、植物珪酸体(プラント・オパール)分析を実施することになった。

2. 試料

分析調査対象は、3号壁、1号水田、2号水田である。分析試料は、以下に示す22点である。

1) 3号壁

- 5層：黒褐色土(天明泥流直下水田面：試料No.1、試料No.2、試料No.3、試料No.15)
- 6層：赤褐色土(鉄分凝集層：試料No.17)
- 8層：灰褐色土(下位に鉄分層：試料No.16)
- 9層：黒褐色土(試料No.4、試料No.18)
- 10層：暗褐色土(鉄分沈着多：試料No.19)
- 11層：黒褐色土(試料No.20)
- 12層：暗褐色土(鉄分沈着多：試料No.21)
- 13層：黒色土(縄文包含層：試料No.22)

2) 1号水田

- 1層：黒褐色土(天明泥流直下水田面：試料No.5)
- 2層：暗褐色土(鉄分集積層：試料No.6)
- 7層：黒褐色土(試料No.7)
- 8層：暗褐色土(鉄分沈着多：試料No.8)
- 15層：黒色土(縄文包含層：試料No.9)

3) 2号水田

- 1層：黒褐色土(天明泥流直下水田面：試料No.10)
- 3層：暗褐色土(鉄分集積層：試料No.11、試料No.13)
- 7層：黒褐色土(試料No.12)
- 14層：黒褐色土(試料No.14)

3. 方法

植物珪酸体分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)する。
- 2) 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加する。

3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)により脱有機物処理を行う。

4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)により分散する。

5) 沈底法により20 μ m以下の微粒子を除去する。

6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラートを作製する。

検鏡は、おもにイネ科植物の機動細胞(葉身にのみ形成される)に由来する植物珪酸体を同定の対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が500以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。検鏡結果は、計数値を試料1g中の植物珪酸体個数(試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズの個数の比率を乗じて求める)に換算して示した。また、おもな分類群については、この値に試料の仮比重(ここでは1.0と仮定)と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重, 単位: 10⁻⁵g)を乗じて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる(杉山, 2000)。

各分類群の換算係数は、イネ(赤米)は2.94(種実重は1.03)、ヨシ属(ヨシ)は6.31、ススキ属(ススキ)は1.24、ネザサ節は0.48、メダケ節は1.16、チマキザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である(杉山, 2000)。

4. 結果

検出された植物珪酸体は、イネ、キビ族型、ヨシ属、ススキ属型、シバ属、タケ亜科ササ属(ネザサ節型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型、その他)および未分類である。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、図1に示した。主要な分類群については顕微鏡写真を示す。以下に、植物珪酸体の検出状況を記す。なお、植物珪酸体の生産量は植物種によって相違することから、検出密度の評価は分類群によって異なる。

1) 3号壁(試料No.1~4、15~22)

イネは、5層、6層、8層~13層のすべてで検出されている。5層のうち試料No.3は比較的高い密度である。その他はやや低いか低い密度である。キビ族型は、5層、6層、8層~11層で検出されているが、いずれも低い密度である。ヨシ属は、すべての層で検出されているが、全体にやや低いか低い密度である。ススキ属型は、すべての層で検出されている。5層の試料No.3と11層では高い密度であり、他の5層(試料No.1、2、15)、9層の試料No.18、10層、11層、12層、13層でも比較的高い密度である。シバ属は、9層の試料No.18、11層、12層で検出されているが、いずれも低い密度である。タケ亜科のネザサ節型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型はすべての層で検出されている。5層の試料No.3でチマキザサ節型が比較的高い密度である以外は、いずれもやや低いか低い密度である。

2) 1号水田(試料No.5~9)

イネは、1層、2層、7層、8層、15層のすべてで検出されている。1層は比較的高い密度であるが、その他はやや低いか低い密度である。キビ族型は、1層、2層、8層で検出されているがいずれも低い密度である。ヨシ属とススキ属型は、すべての層で検出されている。ヨシ属は15層で、ススキ属型は7層以外で比較的高い密度であるが、その他の層ではやや低いか低い密度である。シバ属は、5層、6層、7層で検出されているがいずれも低い密度である。タケ亜科は、ネザサ節型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型がすべての層で検出されているが、いずれもやや低いか低い密度である。

3) 2号水田(試料No.10~14)

イネは、1層、3層、7層で検出されているが、いずれもやや低いか低い密度である。キビ族型は、3層と7層、ヨシ属は、すべての層で検出されているが、いずれも低い密度である。ススキ属型は、すべての層で比較的高い密度で検出されている。シバ属は、1層と7層で検出されているがいずれも低い密度である。タケ亜科は、ネザサ節型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型がすべての層で検出されているが、いずれもやや低いか低い密度である。

検出密度 (単位: × 100 個 / g)

分類群 (和名・学名)	3号壁											
	1	2	3	15	17	16	4	18	19	20	21	22
イネ科												
イネ	11	18	23	12	6	11	11	12	12	12	5	11
キビ族型	6	6	6	6	6	5	6	6	6	6	6	11
ヨシ属	11	6	11	18	17	11	6	17	12	12	11	11
ススキ属型	39	30	57	30	22	16	11	29	29	56	38	29
シバ属								6		6	5	
タケ亜科												
ネガサ節型	23	37	11	18	11	11	17	29	29	43	27	17
メダケ節型	11	18	40	12	28	22	28	35	40	12	16	46
チマキザサ節型	11	18	85	18	33	11	33	23	23	12	27	40
ミヤコザサ節型	11	12	11	12	11	11	22	17	23	12	11	23
その他	23	18	28	24	22	16	17	17	23	25	22	17
未分類等	51	79	68	65	50	55	78	52	58	74	49	57
植物珪酸体総数	197	242	340	215	206	169	229	237	255	270	211	251
おもな分類群の推定生産量(単位: kg / m ² ・cm)												
イネ	0.33	0.54	0.67	0.35	0.16	0.32	0.33	0.34	0.34	0.36	0.16	0.34
ヨシ属	0.71	0.38	0.72	1.12	1.04	0.69	0.35	1.10	0.73	0.78	0.68	0.73
ススキ属型	0.49	0.38	0.70	0.37	0.27	0.20	0.14	0.36	0.36	0.69	0.47	0.36
ネガサ節型	0.11	0.18	0.05	0.09	0.05	0.05	0.08	0.14	0.14	0.21	0.13	0.08
メダケ節型	0.13	0.21	0.46	0.14	0.32	0.25	0.32	0.40	0.47	0.14	0.19	0.53
チマキザサ節型	0.08	0.14	0.64	0.13	0.25	0.08	0.25	0.17	0.17	0.09	0.20	0.30
ミヤコザサ節型	0.03	0.04	0.03	0.04	0.03	0.03	0.07	0.05	0.07	0.04	0.03	0.07

検出密度 (単位: × 100 個 / g)

分類群 (和名・学名)	1号水田							2号水田						
	1層	2層	6	7	8層	15層	1層	3層	7層	11	12	13	14層	
イネ科 Gramineae (Grasses)														
イネ <i>Oryza sativa</i>	23	14	14	11	11	6	6	6	6	17	11			
キビ族型 <i>Panicum type</i>	6	7		6						6	5			
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	17	7	7	6	11	22	12	6	6	6	5			6
ススキ属型 <i>Miscanthus type</i>	35	28	17	17	33	33	41	34	33	33	33			33
シバ属 <i>Zoysia</i>	12	7	6				6			6				
タケ亜科 Bambusoideae (Bamboo)														
ネザサ節型 <i>Pleioblastus sect. Mezasa</i>	17	21	34	34	22	11	23	29	39	22	28			
メダケ節型 <i>Pleioblastus sect.</i>	12	7	6	6	17	6	6	11	6	11	22			
<i>Nipponocalamus</i>														
チマキザサ節型 <i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	23	14	28	28	28	28	23	17	22	11	17			
ミヤコザサ節型 <i>Sasa sect. Crassinodi</i>	35	14	11	11	11	6	6	11	17	16	11			
その他	12	7	6	6	6	6	6	6	6	5	6			
未分類等 Unknown	70	63	50	50	39	55	52	46	50	49	78			
植物珪酸体総数	262	189	175	184	173	181	172	208	168	201				

おもな分類群の推定生産量 (単位: kg / m²・cm)

イネ <i>Oryza sativa</i>	0.68	0.41	0.33	0.32	0.16	0.17	0.17	0.49	0.32
ヨシ属 <i>Phragmites</i>	1.10	0.44	0.35	0.70	1.39	0.74	0.36	0.35	0.35
ススキ属型 <i>Miscanthus type</i>	0.43	0.35	0.21	0.41	0.41	0.51	0.43	0.41	0.42
ネザサ節型 <i>Pleioblastus sect. Mezasa</i>	0.08	0.10	0.16	0.11	0.05	0.11	0.14	0.19	0.13
メダケ節型 <i>Pleioblastus sect.</i>	0.14	0.08	0.06	0.19	0.06	0.07	0.13	0.06	0.13
<i>Nipponocalamus</i>									
チマキザサ節型 <i>Sasa sect. Sasa etc.</i>	0.17	0.11	0.21	0.21	0.21	0.17	0.13	0.17	0.08
ミヤコザサ節型 <i>Sasa sect. Crassinodi</i>	0.10	0.04	0.03	0.03	0.02	0.02	0.03	0.05	0.03

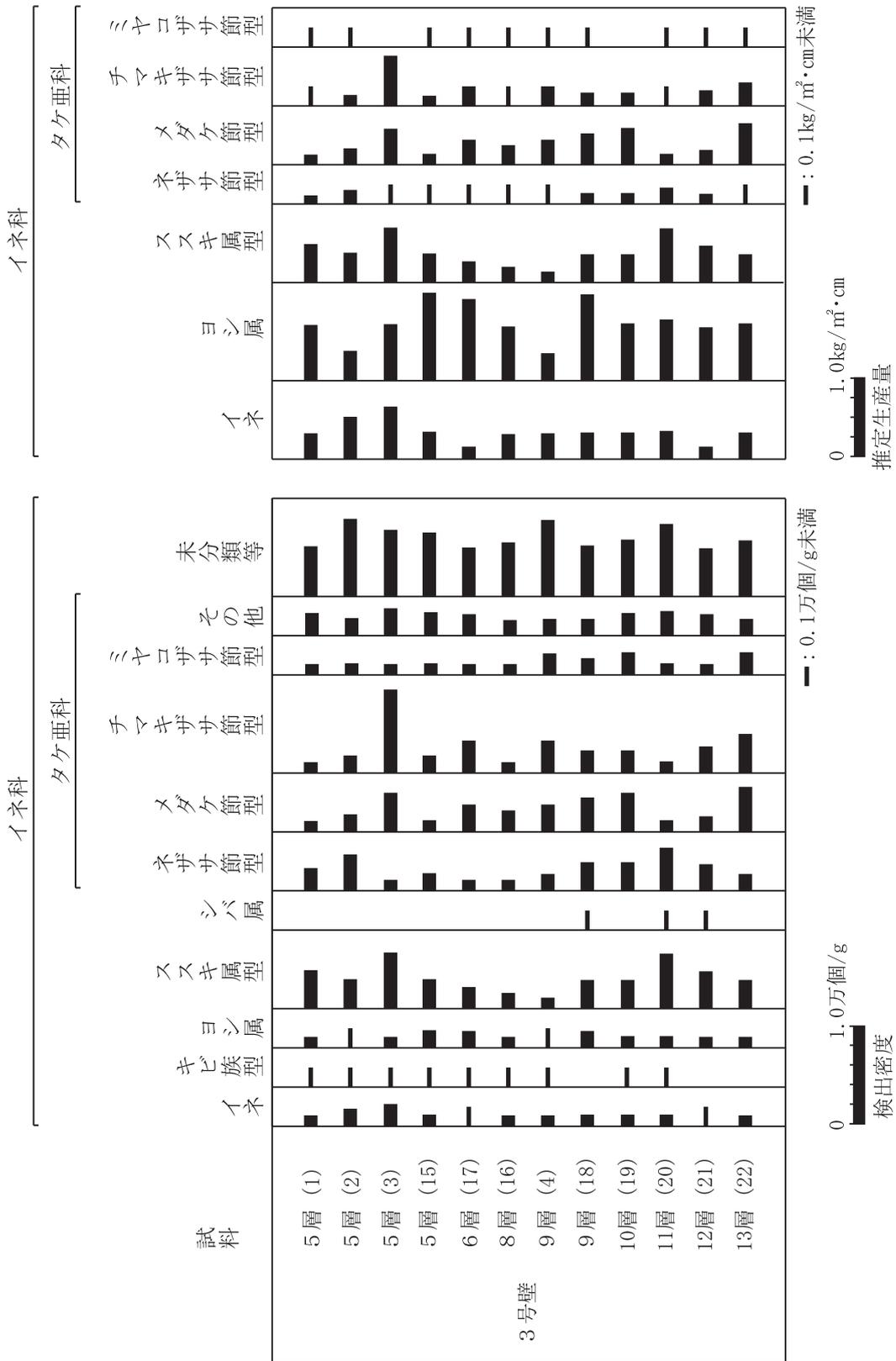


図1 下原遺跡の植物珪酸体分析結果(1)

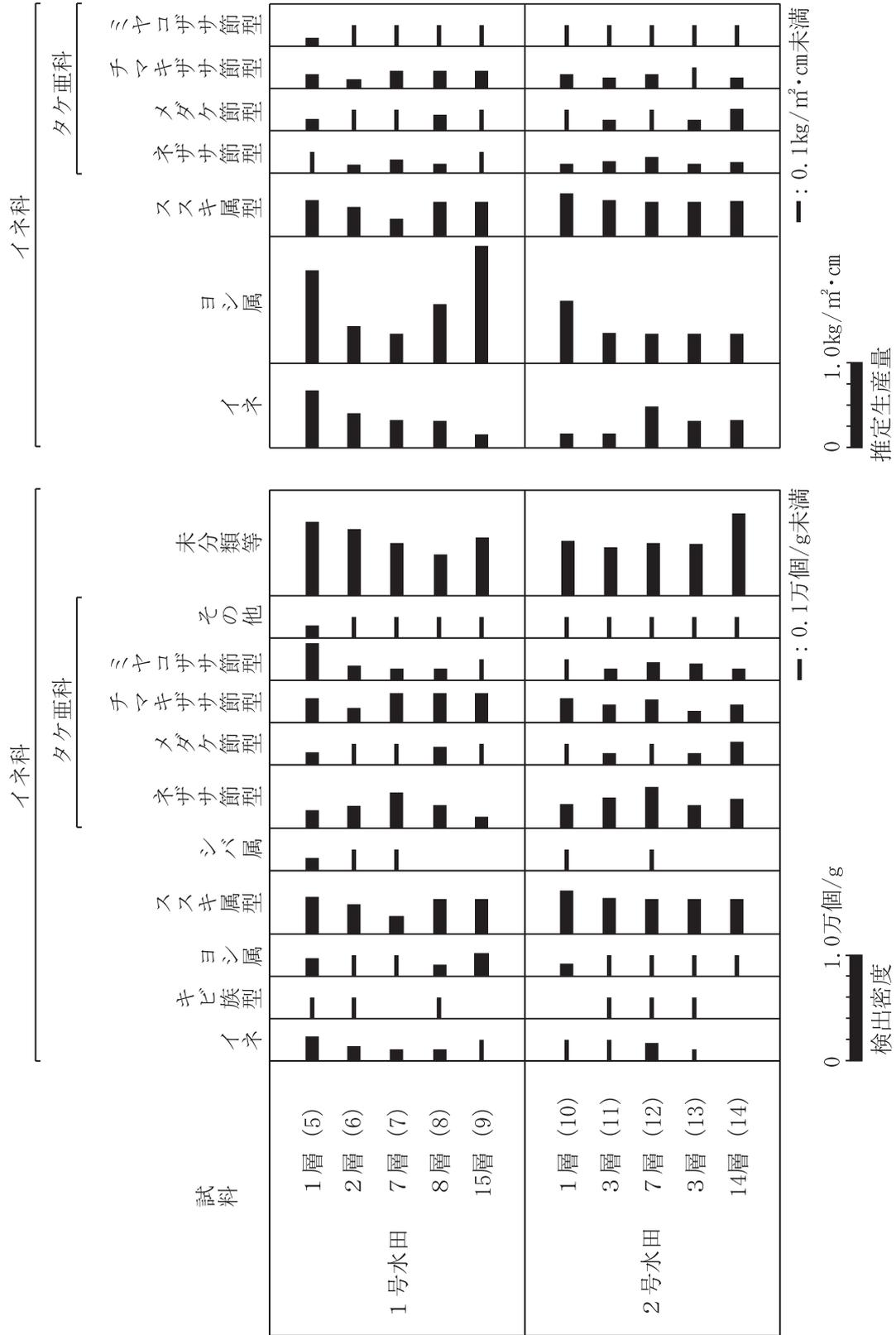


図1 下原遺跡の植物珪酸体分析結果(2)

5. 考察

(1) 稲作跡の検討

植物珪酸体分析において稲作跡の探査や検証を行う場合、通常、イネの植物珪酸体が試料1gあたり5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山, 2000)。ただし、近年の調査では密度が3,000個/g程度あるいはそれ未満であっても水田遺構が検出された事例が報告されていることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行う。

天明泥流直下の黒褐色土では、すべての試料でイネの植物珪酸体が検出されている。このうち、3号壁の5層(試料No.3)と1号水田の1層では、いずれも植物珪酸体密度が2,300個/gと比較的高い値である。一方、他の試料は密度が600~1,800個/gであり、稲作跡の判断基準値に対しやや低いか低い値である。ただし、直上を天明泥流で覆われていることから、上層から後代の植物珪酸体が混入した危険性は考えにくい。したがって、当該層においては稲作が行われていた可能性が考えられる。

なお、植物珪酸体密度が低いことに関しては、稲作が行われた期間が短かった、稲の生産性が悪かった、泥流によって耕作土上部が流出したことなどが考えられる。天明泥流直下の黒褐色土の下位では、2号水田の14層を除く各試料でイネの植物珪酸体が検出されている。植物珪酸体密度は600~1,700個/gであり、稲作跡の判断基準値に対しやや低いか低い値である。ただし、水田耕作土と考えられた5層でも同等の密度のところもあることから、これらの層についても調査地点もしくは近傍で稲作が行われていた可能性が考えられる。なお、3号壁の6層と12層、1号水田の15層、2号水田の3層については、植物珪酸体密度が500~600個/gと低いことから、上層や他所から植物珪酸体が混入したことも考えられ、調査地点で稲作が行われていた可能性を積極的に肯定できない。2号水田の14層については、イネの植物珪酸体が検出されないことから、稲作が行われていた可能性は考えにくい。

水田耕作土と考えられた各層では、多くでキビ族型の植物珪酸体が検出されていることから、これらは水田雑草のタイヌビエである可能性が考えられる。

2) 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

ヨシ属は湿地あるいは湿ったところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育する。このことから、これらの植物の出現状況を検討することで、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。天明泥流直下の黒褐色土およびその下位層では、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科のネザサ節型、メダケ節型、チマキザサ節型、ミヤコザサ節型が検出されている。主な植物の推定生産量(図1の右側)をみると、天明泥流直下の黒褐色土およびその下位層においては、密度は高くはないものの概ねヨシ属が優勢である。こうしたことから、これらの層の時期の調査地はやや湿った環境であり、周辺の比較的乾いたところにはササ類やススキ属などが生育していたと推定される。

6. まとめ

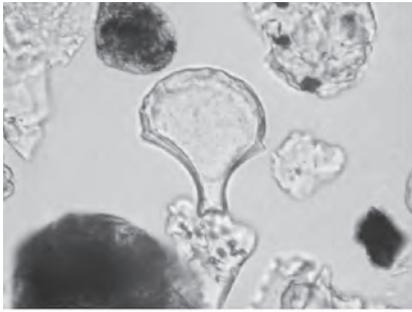
下原遺跡において植物珪酸体分析を行った。その結果、天明泥流直下の水田層では複数の地点でイネの植物珪酸体が検出されたことから、当該層において稲作が行われていたことが認められた。また、その下位層では、3号壁の8層、9層、10層、11層、13層、1号水田の2層、7層、8層、2号水田の3層、7層でも調査地あるいは近傍で稲作が行われていた可能性が考えられた。

各層ともヨシ属の生育するやや湿った土壌環境であり、周辺の比較的乾いたところにはササ属やススキ属などが生育していたと推定された。

参考文献

- 杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール)。考古学と植物学。同成社, p.189-213.
- 杉山真二・藤原宏志(1986)機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—。考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 杉山真二・松田隆二・藤原宏志(1988)機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその応用—古代農耕追究のための基礎資料として—。考古学と自然科学, 20, p.81-92.
- 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—。考古学と自然科学, 9, p.15-29.
- 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—。考古学と自然科学, 17, p.73-85.

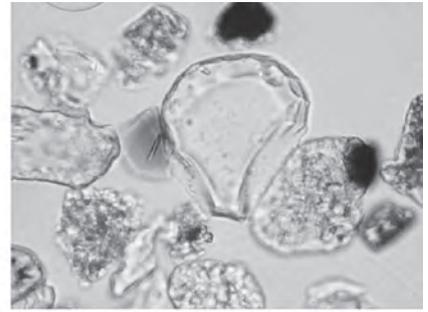
下原遺跡の植物珪酸体(プラント・オパール)



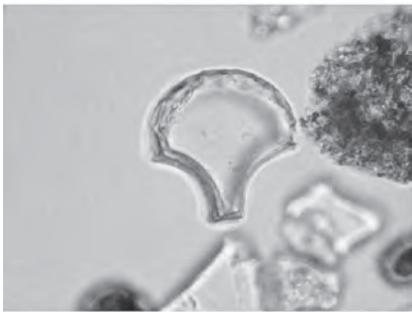
イネ(3号壁 5層)



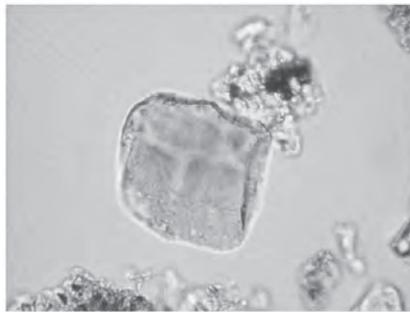
イネ(3号壁 11層)



イネ(1号水田 1層)



イネ(2号水田 7層)



キビ族型(1号水田 2層)



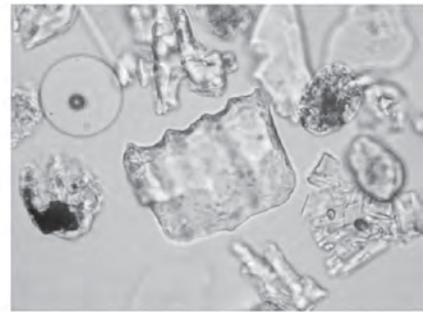
ヨシ属(3号壁 9層)



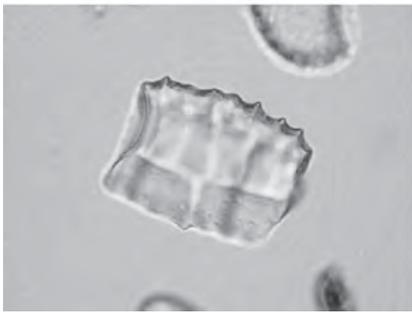
ススキ属型(3号壁 11層)



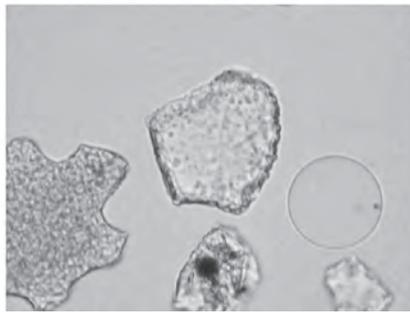
シバ属(1号水田 1層)



ネザサ節型(3号壁 5層)



メダケ節型(3号壁 13層)



チマキザサ節型(3号壁 5層)



ミヤコザサ節型(2号水田 7層)

50 μm

第2節 下原遺跡出土人骨

はじめに

下原遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字林字下原に所在する。(公財)群馬県埋蔵文化財調査団による発掘調査が平成29(2017)年6月～同年12月まで実施された。

本遺跡のB区3面の14号土坑から中世人骨が出土したので以下に報告する。本報告者により、下原遺跡出土人骨の報告が行われているので、参照されたい(楢崎2007)。

1. 人骨の出土状況

人骨は、長軸164cm・短軸101cm・深さ64cmの規模の楕円形土坑から出土している。



写真1. 14号土坑人骨の出土状況

2. 被葬者の頭位と埋葬状態

人骨の出土位置から、被葬者は頭位を北にして右側を下にした横臥(側臥)屈葬で埋葬されたと推定される。

3. 副葬品

副葬品は、銭貨5点が検出されている。

4. 人骨の出土部位

残存状態はあまり良くない。頭蓋骨片及び遊離歯が出土している。

5. 被葬者の個体数

出土人骨及び遊離歯には、あきらかな重複部位が認め

られないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

6. 被葬者の性別

右側頭骨の乳様突起は比較的小さく華奢である。また、出土遊離歯の歯冠計測値は比較的小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。

7. 被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるため、被葬者の死亡年齢は約30歳代～40歳代であると推定される。但し、検出された遊離歯が2点と少ないため、生前脱落して歯があまり咬耗しなかった老齢個体である可能性も否定できない。

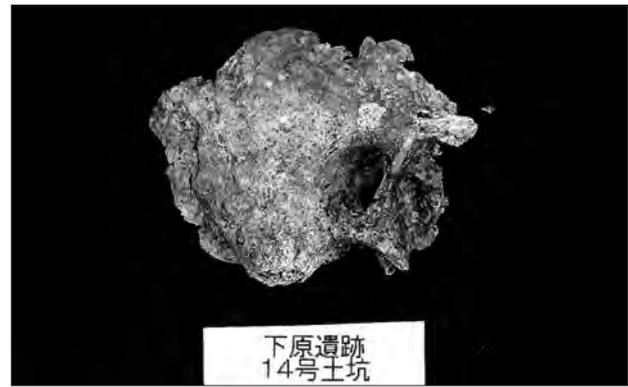


写真2. 14号土坑出土人骨[右側頭骨]

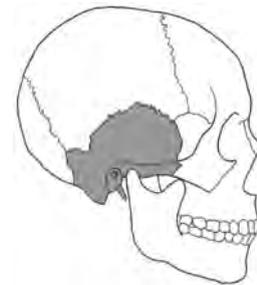


図1. 14号土坑出土人骨出土部位図

附. 下原遺跡出土獣骨

検出された獣骨は、破片である。その形状からは、馬歯であり、恐らく、下顎臼歯片であると推定される。しかしながら、残存状態が非常に悪いため、その歯種を同定する事は不可能であった。

参考文献

楢崎修一郎 2007 「下原遺跡出土人骨」、『下原遺跡Ⅱ』、群馬埋文第389集、PP.173-176

第5章 調査成果のまとめ

1 天明泥流下の畑と水田について

全体を通して見るとサク切りは基本的に地形の傾斜に沿う形で東西方向の走行で、北から南に平行して進んでいる。その時の起点は道もしくは川となっているものと考えられる。しかし、所々その反対側からも進められており、それが合わさるところでサクがずれ(ヒコザク)が生じてしまう。平坦面については、今回報告の部分については全く確認できなかったが、以前の2003報告と2007報告の部分には存在した。一般的にはサクの間隔が狭いところでは細かく配置され、規模も小形の傾向がある。反対にサクの間隔が広いところでは広く配置されるような傾向は認められるが、必ずしも一様ではない。最初は平坦面を設けたが、その後そこまで耕作してしまったために分からなくなってしまった可能性もあるものの、元々平坦面が無かった可能性も否定できない。畑と平坦面はどのような関係であったのか。この遺跡だけでなく、八ッ場ダム関連の遺跡調査では天明泥流以前の畑には平坦面は設けられた例は今のところない。これからも無いかもしれない。しかし、天明泥流直下の畑では設けられるのが一般的となる。一つひとつの面積は大したことではないかもしれないが、すべてを合わせればかなりの面積になる。それでも平坦面として残してあるものが多いのは畑にとって必要なものであったからに他ならない。では、平坦面がある畑と無い畑の差は何なのか。平坦面は畑の中でどのような機能を果たしていたものなのか。下湯原遺跡(松村他2018)では平坦面同士の縦の間隔と横の間隔を測定し、どこにどのように配置されることが多いのか、なぜそのように配置されているのか、畑のサク・畝間との関係などから若干の検討を行うとしてきた。また、平坦面には真ん中に分割線が入るものと入らないものがあるが、その差は何なのか。円形と方形の差は何なのか、流儀・方法の違いなのか。下湯原遺跡では同じ1枚の畑の中に円形と方形の両方の平坦面があった。平坦面の中央を分割をするものとしないものがあるのは何なのか。天明泥流直下の畑にとっては平坦面が無ければ

ならない、もしくはそれに近い程重要であったからこそ、残ったと考えられる。そこは肥やしを置いた場所なのか、あるいは苗を置いた場所なのか、それとも別の目的があったのか、など様々な検討が必要であろう。

少なくとも天明泥流直下の畑とそれ以前の畑との間には耕作方法に画期的な差があったことは分かる。全面的に同じような耕作を行う天明泥流直下の畑には肥料が必要な事は推定ができる。それ以前の畑は全面的に展開されている訳では無く、耕作されていない部分も多く残されている。耕作する場所としない場所を設け、全体を一辺に耕作しないようにしていたと考えられる。土地が痩せてしまわないようにある種の輪作に近い利用の仕方をしていただのではないかとと思われる。

水田に関しては、明治6年3月の壬申地引絵図によると麻生他2007下原遺跡Ⅱで報告した水田の場所は、「下田」となっており、明治初期に於いてもあまり収穫量の良くない水田であったことが分かる。プラントオパール分析の結果からも天明泥流下に於いてもあまり変わらない状況であったことが窺える。同水田の東側の畑でもイネが比較的高い値で検出されており、稲作が行われていた可能性が高いことが分かっている。その畑は、明治6年の同絵図では「下田」となっている部分である。畑から水田に作り変えたものの、差ほど収量は上がらなかった可能性がある。今回報告の水田はそれよりもやや西側の区画であり、同絵図では「中田」となっている部分である。第5章第1節の中では、イネのプラントオパールの検出量は3,000個/gを基準とすると1号水田の1層では2,300個/gとやや高い値であるが、それ以外はやや低いか低い値であるので、「稲作の期間が短かった、稲の生産性が悪かった、泥流によって耕作土上部が流出したことなどが考えられる。」とあるが、おそらくこの水田はあまり生産性が上がらなかった可能性があるのではないかとと思われる。いずれにしてもこれらの場所の周辺は明治6年の同絵図では畑でも上畑という所はなく、中畑か下畑が多くなっている。水田でもそれ以外は川寄りの部分で下々田よりもさらに収穫量の悪い見付田が見られるもの下

田や下々田さえもない。吾妻川に近いその場所はあまり農地としては良好な場所ではなかったことが窺える。今回報告のA区とB区に挟まれた下原遺跡Ⅱの畑でもイネのプラントオパールが見付かっている部分もあり、群馬県ではかつてどこでも畑で稲を栽培しており、用水が引かれ水田が整備される前は様々な場所の畑で稲(陸稲)を栽培していた可能性が考えられる。また、分析の結果、「天明泥流直下の黒褐色土およびその下位層においては、概ねヨシ属が優勢であり、やや湿った環境であり、周辺の比較的乾いたところにはササ属やススキ属が生育していたと推定される。」とあるように、この周辺には水田を作るのに必要な水はあったことが分かる。水田の畔やその周りにはササ属やススキが生えていたとすると今でもよく我々が見かける水田と同じような光景が当時も広がっていたことが推定できる。明治6年の同絵図によると遺跡地周辺の下原耕地には家はなく、最も近いのは中棚耕地であり、そこに4軒ほどの屋敷地が見える。天明泥流下でも調査範囲内には家はなく、一部水田があるものの、その多くは畑が広がっていたことが分かる。江戸時代も明治初期も水田や畑の区画もほぼ踏襲されており、土地利用にあまり大きな変化はなかったものと思われる。

2 掘立柱建物の時期について

掘立柱建物はB区のみで検出され、A区では確認できなかった。B区では2面で礎石建物、4面で掘立柱建物が検出されたが、B区2面西側の礎石建物とB区4面東側の掘立柱建物とは時期が異なるのではないかと考えられる。2面の礎石建物は下田観音堂が移転した跡地を調査した時に確認されたものであり、近世前期の可能性はある。3面の調査で建物と重なる位置から宋銭や明銭が出土した墓坑(14・16・17号土坑)が検出されており、建替以前の建物の可能性が高いが、それよりも後で中世後期までは遡らないものと考えられる。それに対してB区4面東側で確認された掘立柱建物群は直接柱穴内から遺物の出土はほとんど無いが、埋没土やその周辺からの出土品などから中世まで遡る可能性は充分考えられる。

B区4面東側で最大の掘立柱建物は2間×4間の1号掘立柱建物である。柱穴も他の建物に比べると一回り大きく深いものが多い。径の小さい柱穴も深いのが特徴である。

掘立柱建物群と重複する位置の1号土坑の埋没土上半から石臼の破片が出土している。石臼は普通に使用しているだけでは小さく欠けることはあり得ない。欠いた上で廃棄しているものと考えられる。この石臼は6分画で1分画4本前後の刻みの粗いものである。同土坑埋没土下半からは石製丸軋が出土している。この土坑の時期であるが、丸軋が出ていることに重きを置けば古代ということになるだろうが、埋没土中から刻み目の粗い石臼も出ているので、中世と考えたい。直接柱穴と重複していないが、掘立柱建物群の時期もそれに近い時期と思われる。第1回目下原遺跡報告の飯森他2003でも掘立柱建物周辺からは中世の陶器や古銭など中世の遺物が多く出土しており、建物自体も中世と考えたい。今回の報告の場所と東側の初回報告の場所は隣接しており、これらの建物周辺にだけに中世の遺物が見られることにはそれなりの理由があるものと思われる。

3 掘立柱建物の配置について

5棟の掘立柱建物が重複して、1棟がやや離れた位置で確認された。B区東側の高台よりも東側の部分であった。向きはほぼ綺麗に東西南北を向くのが1・2号掘立柱建物で、やや東に傾くのが3号掘立柱建物、さらに東に傾くのが4・5号掘立柱建物である。若干この2棟は違う向きになるが、ほぼ同じ向きと考えることができる。間も人1人が通れるくらいは開いている。2棟でセットと考えることもできる。それ以外の掘立柱建物は今回調査した範囲内に限ればセットとして捉えることができるものは無い。下湯原遺跡A1区の溝に囲まれた3号掘立柱建物のように1辺15mもあるような巨大な建物は無い。この遺跡で最大のものは1辺10mを少し超える1号掘立柱建物で、それでも面積は約53.77㎡である。以下、2号掘立柱建物約51.70㎡、3号掘立柱建物約45.49㎡(鬼門・裏鬼門含むと54.70㎡)、4号掘立柱建物約44.29㎡、5号掘立柱建物約8.02㎡、6号掘立柱建物約15.51㎡である。1と2号掘立柱建物は50㎡を超えるもので、3と4号掘立柱建物も45㎡前後はある。それに対して5号掘立柱建物跡は8㎡、6号掘立柱建物は15㎡程度であり、明らかに狭い。1～4号掘立柱建物は母屋と考えても良い面積を有しているし、炉と考えられるような焼土も確認された。焼土は5号掘立柱建物には全く無いし、6号

掘立柱建物も位置的には北端に寄り過ぎているように見える。両者とも炉を持たない付属建物と考えられる。そう考えた時に6号掘立柱建物とセットになる建物は今回報告の調査区内には無く、2003年報告のⅡ区1～3号掘立柱建物も入れて考える必要があるかもしれない。今回報告の1号掘立柱建物は東西に長い長方形の建物で東西南北の軸がキッチンと合っている。その面積も55㎡弱と最大であることから、この遺跡の中でメインとなる建物と言えよう。2003報告のⅡ区1号掘立柱建物も母屋40.3㎡と角屋(東側張出部)15.17㎡を合わせると55.47㎡でほぼ同じ面積となる。それだけでなく両者とも東西に長い長方形の建物で東西南北の軸がキッチンと合っている。今回報告のものと2003報告の図面を合わせて見ると今回の1号掘立柱建物が西側に、2003報告のⅡ区1号掘立柱建物が東側に7m程開いて東西方向に良く並んでいることが分かる。その間にはいくつかの土坑がある。規模の同じ建物が一定間隔を置いて並んでいるものであり、ほぼ同じ時期に建てられた可能性は高い。ただ建て替えられた結果、同規模なものが並んだ可能性も否定できないが、全く同時に存在していたとすれば、東側の建物の南には石組み遺構とした穴の周りに石が配される土坑と石垣・石列などがある前庭が広がっていたかもしれない。反対に西側の建物の南にはそれらのものは無いので、仮に庭であったとしても違う光景が広がっていたことが考えられる。小野正敏他2017『考古学と中世史研究13遺跡に読む中世史』高志書院など最近の研究によれば「ハレ」と「ケ」の空間ということが意識されているとのことだが、もしそれにこの遺跡の状況を当てはめれば前庭を持つ東側が「ハレ」の空間で持たない西側が「ケ」の空間と考えることもできる。

普通、中世の屋敷の建物は母屋とその両隣に付属建物各1棟ずつ、計3棟セット、若しくは母屋+付属建物1棟の計2棟セットで配置されることが多い。下湯原遺跡では母屋と考えられる建物の中に炉が確認できなかったものもあるが、むしろ炉があるのが一般的と考えられる。同遺跡A1区では3号掘立柱建物+西側4号掘立柱建物+東側1号掘立柱建物、B2区では3号掘立柱建物+西側4号掘立柱建物+東側7号掘立柱建物があり、これらは母屋1棟+付属建物2棟、計3棟で1セットとなっていると考えられる。全ての場合に当てはまる訳ではない

が、一般的に3棟セットの方が2棟セットよりも母屋の規模がやや大きい。下原遺跡の今回報告部分ではこの母屋+付属建物2棟の計3棟セットと考えられるものは無かった。2棟セットも4・5号掘立柱建物くらいであり、他には無い。前回報告分と合わせても6号掘立柱建物とセットになってもおかしくはないものはⅡ区3号掘立柱建物であるが、面積は20㎡強で他の母屋としたものに比べると半分以下でありかなり狭い。面積的には付属建物としても良いが、軸方向が同じ建物は無く、セットとして考えられるものはない。3号掘立柱建物は軸だけを見ればⅡ区2号掘立柱建物に近いが、あまりに離れ過ぎているので、セットとしては考えにくい。2号掘立柱建物は軸がしっかり東西南北を向いており、軸が合うのは前回報告のⅡ区1号掘立柱建物だけでそれ以外は考えにくい。2号掘立柱建物の北辺とⅡ区1号柵列は東西方向で軸が合うので、同時に存在した可能性は高い。様々な組み合わせを検討した結果、2棟のセットとして一番シックリくるのはやはり今回のB区1号掘立柱建物と2003報告のⅡ区1号掘立柱建物であろう。ただし、両者ともほぼ同じ55㎡前後の平面積を有しており、どちらかが付属建物ということではなく、両者とも母屋となり得る規模のものである。両者ともにそれに付属すると考えられる建物は確認されていない。

4 中世の屋敷地と土地利用について

単に掘立柱建物の時期や配置などだけでなく、ここではもう少し広い視点も入れて考えてみたい。中世の人々がこの遺跡のある土地をどのように利用していたのか、建物を中心とする屋敷地だけでなく、その外の畑やその他の土地利用についても考えておきたい。しかし、その前に屋敷地はどこまでなのか、どこから屋敷地の外なのかという点について考えてみたい。B区4面では多くのピットと土坑が検出されたが、それらは平安時代の1号住居跡の南側から調査区いっぱいまで確認された。その中程に位置する多くのピットが掘立柱建物の柱穴であることが確認された。建物以外にも並びそうなものを検討した。2号掘立柱建物より約4.5m北には東西方向に17～21号ピットがあるが、並びがやや不規則なこともあり柱穴列としては個別に取り上げなかった。しかし、そこから北側には2面調査時に山砂で埋没した中近世1号

畑が検出されており、その辺りが北の山側との境になっていた可能性は十分考えられる。南側は調査区ギリギリまでピット・土坑が確認され、建物が建つことは確認できなかったが、そこまでが屋敷地内と考えられるのではなかろうか。2003報告のⅡ区1号掘立柱建物の北側にはP1～P8・P61・P70がほぼ東西方向に並ぶので掘立柱建物の北側は確定できる。しかし、そこから東側にはピットはない。少し南東に下がればP77～79、P81・83・85が間隔は一定ではないがほぼ東西に並ぶので、そのラインまでが北限と考えられる。ピットが確認されたところまでが屋敷地とすれば東辺もほぼ確定できる。これらのことから2003年に飯森氏が報告した範囲でほぼ間違いのないものと思われる。建物の南側の部分をどのように位置付けるか。その前に2003報告で飯森氏はⅡ区3号石列の北側に沿った通路を想定している。しかし、図を見る限りその通路は石列の部分のみで西側にも東側にも続いていない。西側には今回報告の掘立柱建物群があり、建物に沿った南側を歩いていることも考えられる。その通路が西に続くと建物群の中の4号掘立柱建物は南東隅が飛び出しているのが当たってしまうが、1号掘立柱建物に沿った南側ならば方向的には合うし、建物との間を歩くことも可能である。この通路は約10m北にある溝を伴う1号柵列とほぼ並行し、もしそのまま続くとすれば今回の2号掘立柱建物の北辺とも並ぶ。西側は高台を形成する岩盤の手前まで続くものと思われる。しかし、高台の上とは比高差があるので、そのまま先に続くとは考えられないから手前で北か南に曲がるものと思われる。さて、その西に向かう通路の南側をどう解釈するか。南側には2003報告Ⅱ区で石組とした石を配した土坑が4基、石列や石垣、焼土2カ所がある。18号焼土は5号石垣の切れた部分に位置する。また、石臼は粉挽き臼だけでなく、茶臼の破片が1号石組みと1号石列の間から3点、泥流面の2号石垣に使用されているものも入ると4点出土している。茶臼は食生活に直結しないものであり、どちらかというと嗜好品を造るために必要なものである。単なる農家では無く、お茶を嗜むような人々が生活していたということになるだろうか。あるいは火薬に使う炭を挽くためのものであったのだろうか。今回報告の掘立柱建物群と重複する1号土坑内からも粉挽き臼の破片が出土している。当時石臼は大変貴重な物であり、誰でもが使用でき

た訳では無い。古代においては主に寺社や貴族など、中世になってから武士階級までで、そして一般の農民にまで普及したのは江戸時代17世紀以降になってからと考えられている。1号土坑内からは丸軋も出土しているので、この石臼は近世のものとは考え難い。いずれにしてもこの場所には多くの石臼を所有し使えるクラスの人々がいたことが分かる。建物群の南側には石を使った遺構が多く、単に邪魔な石をまとめたヤックラだけでなく、石を組んだ遺構があり、屋敷の南側には庭が広がっていた可能性も考えられる。そこで茶葉を茶臼で引いて茶会が営まれていたのであろうか。ここまですべて建物群の範囲とその南側に広がる庭が見えてきた。規模のほぼ同じ2003報告のⅡ区1号掘立柱建物と今回報告の西側1号掘立柱建物が同時に存在していたのであれば、南側に石垣や石列、配石などが広がる庭園がある前者が「ハレ」の日の場所で、そうしたものが無いもしくは少ない後者が日常の「ケ」の日の場所と考えることができるであろうか。それでは建物群の北側はどうなっていたのであろうか。2003報告ではⅡ区北側には墓地や土坑群が広がっていることが分かる。土坑には円形や楕円形のものや隅丸長方形のものがある。建物群の北側には円形や楕円形のものも多く、建物群の北東から東にかけては隅丸長方形の土坑が多い。隅丸長方形の土坑は麻生他2007報告を見ると今回報告のB区西側の北に広がる部分で確認されたものであるが、内部に礫を詰めているものが多い。礫の入っていないものをどう考えるかということであるが、もしかしたら草や木など有機質の物を廃棄した坑ではないか。隅丸長方形の土坑は一般的には貯蔵用の芋坑と捉えられることが多いが、礫に限らず要らないものを廃棄した坑と捉えることができるのではないかと考えている。そうであるとすれば、この場所はどのように利用されていたのであろうか。麻生他2007報告を見ると礫の詰められた隅丸長方形の土坑は畠と重複したり、畠の脇など畠に近い位置にあるものが多い。これらは山林などを畠に造成する際や耕作した時に出た不要な礫を廃棄したものと考えられる。隅丸長方形の土坑群のある場所では実際には畠のサクを切った痕跡は確認できなかった。しかし、このような土坑があったということはやや極論に近いかもしれないが、近くに畠があったものと解釈できるのではなかろうか。

今回報告の17~21号ピットラインのすぐ北側で2面で非常に狭い範囲ではあるが、砂で埋没した南北方向のサクを切った畑(中・近世1号畑)が見つっている。また2003報告のⅡ区でも6号土坑の東側の7~11号土坑と重複する位置の狭い範囲内ではあるが、南北方向の畠のサクが見つっている。必ずしも建物と全く同じ時期ではないかもしれないが、屋敷に隣接する場所に畠があったことが分かる。天明泥流の直下の大規模畑のように全面ではないが、一部であったとしてもそれ以外の場所も畑もしくは畑として使用する事を前提とした場所であった可能性を考えておきたい。さらに非常に狭い範囲であることも考慮すると多数の耕作者を使用する商業用の畑ではなく、普段自分の家で食べるための自家用野菜畑と考えておきたい。

次に墓と考えられる土坑を見ておきたい。今回はB区3面で西側の高台部分から3基検出された。土坑を掘ってその内側を礫で囲む楕円形もしくは隅丸長方形のものである。骨片と共に中世の古銭が出土している。これらは掘立柱建物が集中する東側からはかなり西側に離れている。屋敷地から離れた一段高い特別な場所である墓域に造られた墓と考えられる。屋敷地の建物群周りには2003報告のⅡ区によると骨片が出土した土坑4基・焼土1基、合わせて5基が確認されている。3号焼土と21号土坑は隣接しているが、それ以外のものは単独で離れている。墓域としていくつかの墓がまとまっているという感じではなく、それぞれが単独のものと考えられる。家の近くの畠の一面に単独の墓を造ったものと捉えることができる。少なくともその墓にはお参りに行かなければならないのでそこに至る踏み分け道程度はあったと考えられる。

さらにもう少し広い視点でまわりを見ると、麻生他2007によるとさらに西側には畠が広がり、畠の北側には表面に岩や礫が露出した部分が広がっている。その並びを見ると東西に一定間隔に配置されているようにも見えるが、人為的なものではなく山側から流れてきたものが頭を出しているものと考えられる。その南側は一部サクが切られ畠として使用されていたことが分かるが、それ以外の多くの部分に山林や藪(低木)が広がっていたのではないかと思われる。

今回報告の掘立柱建物は最大のものでも2間×4間で

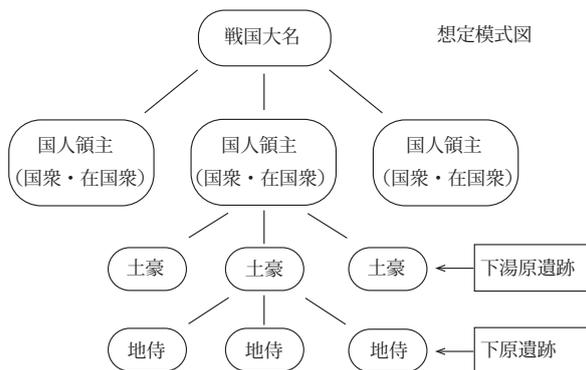
あり、下湯原遺跡や下田遺跡の最大の2間×5間の建物よりも一回り小さい。また、Ⅱ区の北側には浅い溝を伴う柵列はあるものの下湯原遺跡のようにV字の深い溝と柵列に囲まれた区域に建てられた建物でもない。下湯原遺跡最大の総柱建物はその地域一帯を支配する在地有力者の象徴的建物であり、単なる住居ではなく役屋を兼ねたものとも考えることもできた。それに比べ下原遺跡の掘立柱建物はそれよりも小さく、そこにいた人々は下湯原遺跡最大の建物に住んでいた人々には及ばないが、その次のクラスと考えることができようか。

中世起源の集落として豪族屋敷村が成立したが、これは一般的に開発領主の屋敷(大形建物+付属建物)を中心に隷属民や一般農民の家屋(小形建物+付属建物)を従えた形を持っており、国境防備や交通・経済(道水路)の要衝を占める地点に立地していることから、小地域の中心地もしくは開発拠点となったものとも考えることができる。下湯原遺跡の中で溝(堀)や柱穴列(塀)で囲まれた最大の掘立柱建物群がある場所は国境防備や交通・経済(道水路)の要衝であり、小地域の中心地となった場所と考えられる。しかし、下原遺跡では屋敷地とした場所以外に他の掘立柱建物はなく、下の家来や従者の家を従えたような形態は確認できなかった。したがって、地域の中心地と言えるようなものではないと考えられる。

15世紀は村落構造の再編成を契機として、村落と一体化した城郭、つまり村落型城郭が成立した時期でもある。普段は農耕をしている在地の有力農民もそれらの争いに巻き込まれていく。いざという時には戦うこともある。下湯原遺跡のように溝(堀)や柱穴列(塀)に囲まれた総柱の大形建物のある屋敷はそうした時代を反映したものではないかと考えられる。そのような大形の掘立柱建物は如何なるクラスの人々の建物であったのであろうか。戦国大名と主従関係を結んで家来となった国衆や在国衆と言われた「国人領主」クラスなのか、それともその国人と主従関係を結んだ在地の小豪族である「土豪」クラスなのか、それよりも下の在地百姓の有力者である「地侍」クラスであるのか。もし下湯原遺跡に居たのがその地域一帯を支配した「土豪」クラスとすれば、下原遺跡に居たのはその次の「地侍」クラスと考えることが妥当ではなかろうか。

まだ八ッ場地域では現時点で調査している遺跡も多

く、報告書が出ていないものも多い。下湯原遺跡のような地域の拠点に設けられた大形の掘立柱建物を持った「居館」と考えられるようなものだけでなく、その次のクラスの掘立柱建物やさらにその下の一般の通常の掘立柱建物も類例を集めて再度検討する必要はあろう。掘立柱建物は柱穴内出土の遺物も少なく時期判定が難しいものが多い。決定的な決め手には欠けるが、土層の状態や遺物が出ている同様な造りの掘立柱建物から推定していくしかないものと考えている。



5 柱穴が方形のライン上に乗らない掘立柱建物について(仕口と相欠について)

中世の掘立柱建物については方形や長方形の区画に線を引いた時にすべての柱がラインの中心に乗るものは少なく、むしろずれることの方が多い。古代の掘立柱建物にはあまり見られない現象である。古代の建物はあるべきところにきちんと柱穴が配置されていることが一般的であり、柱穴の位置がずれることはほとんど無い。それに対して、中世の掘立柱建物はどこかがずれることが一般的である。下原遺跡でも多くの建物で柱穴がずれていた。綺麗に建物の四角に乗せるためには梁と桁、隅柱の3本を同じ位置で組まなければならない。そのためにはホゾとホゾ穴を切って埋め込まなければならない。位置をずらすことで、仕口を作って柱や梁・桁の接する部分を組まなくとも多少削って相欠にして木材同士が接する面を多くして動かないように蔓や縄で結束すれば固定できる。柱と梁とを仕口を作って一体化させないのであれば、やや外側に柱が出ていた方が縛りやすい。一般的に梁間1間の建物など比較的小形の建物の場合には、柱穴がずれることが多い。しかし、この下原遺跡では最大の

B区4面1号掘立柱建物でも柱1本以上ずれているところがあった。このような2間×4間のそこそこ大きな建物であっても仕口ではなく、比較的簡便な相欠で結束していた可能性が高い部分が多く認められた。中世の建物の場合にはいずれかの柱穴がどちらか一方にずれている方が一般的と考えられる。曲がった柱を用いていることもあり、あまりきちんと並んだ柱穴は古代や近世など時期が違える可能性があるのではないと思われる。その場合、柱間が長ければ古代、短ければ近世の可能性が疑われる。

6 石臼について

『日本書紀』卷第二十二 推古紀によれば、石臼を日本に伝えたのは高麗僧「曇徴」であり、彼は五経に通じ、絵の具・紙・墨の製法を伝えた人物として著名な僧である。しかし、それだけでなくここで重要なのは彼が碾磑テンガイを造ったという記述である。この『日本書紀』の記述から7世紀には日本に石臼が伝わったことが窺える。

三輪茂雄『石臼探訪』1978・『石臼の謎』1975などによれば、鎌倉時代末期頃、禅僧や貴人の間で「茶磨」という抹茶専用臼が普及していき、戦国時代15世紀後半には「茶磨」や粉挽き臼が全国の武士の間に波及したということである。だから、この時期の各地の遺跡では多くの石臼が出土するのである。まさに、この時期は石臼の一大ブームとなる。戦国時代に石臼が武士の間で普及したのは、単に粉物を作って食べるためだけでなく、火薬を製造する際の木炭を粉に挽くのにも用いられたからと考えられている。良い火薬を造ることが鉄砲の性能に直接かわってくるからである。そして、17世紀以降になると粉挽き臼が全国の農民の間にも普及していった。

中国の唐代には「貴族や寺院が自分の荘園に水力利用の碾磑を設置して利益をあげた」ということから石臼は誰でもが使用できたわけではなく、極限られた階層の間だけで独占的に使用されていた。石臼は貴族や寺院など有力者のものであった。

同じく三輪茂雄『石臼探訪』1978・『石臼の謎』1975などによれば、日本でも素麺やうどんが普及した背景には、京都の禅宗寺院や奈良の大寺院が小麦の製粉に果たした役割が大きかった。現在の素麺は、奈良時代に唐から伝来した索餅サクペイ(麦縄)が元と言われるが、南宋帰りの禅僧が

持ち帰った製法を伝えたとも考えられている。いずれにしてもそれを受け入れて普及させたのは、日本でもやはり支配力と財力を兼ね備えた寺院であった。

粉を挽いて麺を作り、それを食べるということは特別なことで、麺類は「ある種の階層での儀式などの際、ハレの日の食べ物」として「財力と伝統の食文化」を背景に誕生したものと言えよう。だから、今でも群馬県では冠婚葬祭などの特別な時には「うどん」や「そば」を食べることが一般的である。元々は麺類は特別な食べ物であり、日常と非日常ということで分ければ間違いなく、非日常的な食べ物、ハレの日の食べ物ということができる。

また室町時代には闘茶や茶の湯(茶道)が盛んとなり、お茶を嗜むということが多くなった。群馬県地域の山城を調査しても粉挽き臼だけでなく、茶磨(茶臼)も出てくることが多い。粉挽き臼に比べると「茶磨」の磨耗は極めて少ない。利用頻度の違いだけでなく、石材の違いも反映されているのではないと思われる。一般的に茶磨の方が硬い石材を用いていることが多い。

祖父母の代から我が家では、割れた米や古米、小麦、煎った大豆、トウモロコシ、時には煮干しなど粉になりそうなものは何でも石臼で挽いていた。粉に挽くのは子供の仕事であり、小さい子供が一定のスピードで回すのは一苦勞であった。早く回すとそのまま出てやり直しになり、遅くゆっくり回そうとすると重くて回らない。石臼を回すのはなかなか難しかった。弥生時代から竪杵と臼はあるが、それよりも粉にする能力が高い石臼の出現と普及により江戸時代には飢饉の耐久能力を高めたと言われている。単に磨り潰すことにより細かく砕くということだけでなく、デンプンを抽出したり、アクを出し易くしたり、有害物質を取り除き易くする効果もある。それだけ生活には欠かせない大事な道具の一つである。

三輪茂雄『石臼探訪』1978・『石臼の謎』1975の中の石臼の全国的な分布を見ると、東国と九州に6分画が、その間に8分画が分布していることがわかる。他に日本国内には4・5・7分画がある。少し変わったものでは5分画と6分画の組み合わせがあったり、時計の針と逆に回すことになるのが一般的であるが、新潟の一部地域など時計の針の方向に回すところもある。なぜ反時計回りに回すかと言うと、まず前提としては利き手が右手であることが多いということ、右利きに合うように作られて

いると考えられる。一般的に世の中の道具は右利き用に作られているものが多い。右手で回しながら左手で同時に内側に掻き込むように対象物を入れるので、反時計回りとなっていると考えられる。これが時計回りだと中に掻き込む時に回している右手が作業の邪魔になってしまうからであろう。八ッ場地区の他の遺跡では上下で6と7の分画や刻み方が違うもの同士が組み合わせて使用されている例もある。三輪茂雄・下坂厚子・日高重助1985「太宰府・観世音寺の碾礮について」『古代学研究』108 古代学研究会によれば、太宰府の観世音寺境内にある碾礮は直径1.03m、高さは上臼21cm・下臼28cm、重量上下各400kgという巨大なものはベンガラを作る際に鉄鉱石を挽いたものだということである。上下の臼の溝目の方向が反対であり、逆さにしてかぶせると同一方向で粉砕物の送り出しが利かない。しかし、鉱石を砕くには問題なかった。なぜ同一方向になってしまったかという別々の石臼を組み合わせたからではないかと解釈されている。日本に現存する最古の臼でさえも中古品の別個体の組み合わせの可能性が高いということである。ほぼ直径が合っていればあまりこだわらずに組み合わせて使っている。臼の目は回す方向に合わせて切られており、逆に回すと粉にならずにそのまま出てしまうので、一般の粉挽き臼の場合にはその点だけは配慮が必要である。一定のスピードと方向、それに合わせた目の調整が必要となってくる。

下原遺跡ではB区で多くの石臼が出土しており、かなり使い込まれて擦れていると共に、破片状に割れていた。基本的に小破片でも直径が推定できるものは関東地域などに多い6分画と考えられるものであった。

下湯原遺跡では石臼の大きさは推定直径は上臼が30～35cm、厚さが11～12cm、下臼は推定直径30cm前後、厚さ9.8～13.5cmである。推定重量は上臼が9.6～12.5kg、下臼は12.6～13.6kgであった。石臼にとって重さは大きさ以上に重要である。上臼の方がやや直径は大きいやや軽く、それに比べて下臼は直径は小さいが、厚みを増すことで重量を重くしている。上下関係なく、一般的に平たいものは径を大きくすることで重量を重くしているし、径の小さいものは厚みを増すことで重くして安定させている。6・8分画の地域分布については、嫁入りの際に石臼を持ち込むことがあったり、石工同士の交流、

最近では庭師などが石臼を大量に持ち込み、庭に踏み石や飛び石として配置することもある。そうすると一定量の石臼が本来無い地域から移動してしまい、原則通りではないことも起きる。粉挽き臼に対して茶磨(茶臼)は径が小さくその分、厚みを増し重量を重くしている。これは先程の下湯原遺跡の出土例と同じ考え方によるものである。茶磨については8分画が一般的である。それは6分画よりも8分画の方が、また同じ8分画でも刻み目の本数が多い方がより細かく挽けるからと考えられる。中には刻みの無いものもある。多くの本数を刻むためには粗粒の多孔質の石では難しいので、より硬めの肌理の細かい石を用いることとなる。中世の遺跡を掘ると必ずと言ってよい程出てくるこの茶磨が下湯原遺跡ではなぜか1点も出土しなかったが、この下原遺跡では破片とは言え数点出土している。むしろこちらの方が一般的な出方と考えられる。

石臼は大きさや重量だけでなく、一つの分画の中に何本の刻み目を付けるかということも重要であるが、下湯原遺跡では6分画の中に5本と6本のものがあり、中には1つの臼の中でその両者が混在するものがあった。本数の違いは溝を刻んで行った際にできたスペースを埋めたためと考えられる。石を加工するためには鉄の道具が無ければならぬ。特に縁をシャープに仕上げるためには鉄の道具でなければならない。しかも先の尖った鋼の「鑿」がなければ溝はうまく切れないのではないかと。だとすれば鉄器を持っていても石をも使う人々でなければ石臼の加工はできない。下原遺跡では直接石臼を加工したと考えられるような鉄器は出土しなかったが、刀子は出土しているので、当然鉄の加工具は持っていたものと思われる。

また、下湯原遺跡では扁平な板状の角礫が出土しており、表面は摩滅し、真ん中に炭化物が丸く付着する部分が認められるものである。粉挽き臼で挽いた粉を丸めて平たくして焼いて食べた痕跡ではないかと考えている。表面の炭化物の直径は5～6cm程度なので、焼いたものはそれよりも一回り大きい7～8cm程度、大きくても10cm弱位ではないかと考えられる。子供の頃は似たようなものの中に漬け物や余ったご飯など様々なものを細かく刻んで入れたり、場合によると砂糖で甘く味付けしたりして食べた。これは子供のおやつだけでなく、3時のお

茶請けにもなった。名称は様々であるが、母親はよく「ジリ焼き」と言っていたが、他に「お焼き」や「焼き餅」などということもあったが、基本的に同じものである。他に子供の頃よく食べた粉を使った料理としては「すいとん」がある。すいとんは粉を手で握ったもの(母親は「ネジッコ」と呼んでいた)を入れるだけで麺のように伸ばしたり細長く切ったりはしない。他に引っ張ってちぎったものは「ツミッコ」「ヒツツミ」と呼んでいた。丸めてから平たく潰して団子状にする場合もある。室町時代には水団(すいとん)は点心の一種として、小麦粉ではなく葛粉を用いたり、その両方を混ぜて作っていたようである。寛永20(1643)年初版で寛文4(1663)年まで7種の異版が刊行されている『料理物語』によると今日のような手びねりした形のものが出現したのは江戸時代でも後期のことである。しかし、下原遺跡では内耳鍋や土鍋も破片であるが複数出土しており、その形は別として当時も粉を練ったものをそのままあるいは焼いたものを鍋に入れて汁物として食べていた可能性は十分にあると考えている。

曇徴が造ったとされる礪磑は初めから完成された形態を持っており、観世音寺の礪磑は元々鉄鉱石を挽くためのものであったとされているが、粉挽き用の臼であった可能性も完全には否定できないと思っている。いずれにしても石臼は初めから完成された形態で日本に伝わったことは間違いなさそうである。それ故にその形態だけでもって石臼の時期判定を行うことは極めて困難であると言わざるを得ない。土層と一緒に出土している土器などの時代判定できる他の遺物から判断するしかない。この下原遺跡では天明泥流直下の畑の耕作土よりもさらに下の面で調査されていることと、15世紀～16世紀に八ッ場地域的に普及する信濃型とされる樽型の深い内耳鍋が石臼と一緒に近接して複数出土しており、それらのことから中世と捉えることができるのではないかと考えている。

三輪茂雄1978『石臼探訪』・1994『増補 石臼の謎』によれば、そば、米、小麦など挽く対象によって上臼重量の最小限度が決まり、そばを挽いた臼は小麦を挽いた臼より一般的に小さいし、目の形も違うし、同じ米でも玄米は目の形は丸めで谷を浅く、白米はシャープな峰を残すという。これらのことから粉に挽く対象物によって臼を変えるということが分かる。しかし、それは比較的

近のことでないかと考えている。我が家でもかつては一つの臼で何でも粉に挽いていた。その対象によって挽き易さに多少の違いはあったものの、あえて使い分けはしていなかった。下原遺跡においては2003報告以来複数の石臼が出ているが、茶臼を除くと臼の形態や目に大きな違いは認められない。粉挽き臼では6分画5～6本と江戸時代の臼に比べるとやや目が粗いものが多い。江戸のように同一区画内に10本以上入る細かいものはない。中世においては、使う対象や目的によって違う臼を使い分けていた家は少なかったのではないだろうか。茶磨はお茶用でそのために作られているものであるが、八ッ場ダム周辺地域全体の石臼を集成して分析した訳ではないが、おそらくそれ以外の粉挽き臼には大きな違いはなかったのではなかろうか。

石臼の石材については、下原遺跡をはじめ八ッ場ダム周辺地域では粗粒輝石安山岩が多用されていた。この石は多孔質であり、こうした多孔質の石材を使用すると製粉中の水分をコントロールし、粉碎熱の放出作用を助け、また粉碎時の刃の役目もするからである。なおかつ、ある程度磨耗に耐える石材でないといけない。回すと同時に磨り減ってしまつて挽いた粉に石の粉が混ざってしまうようでは使い物にならない。さらに加工が容易でなければならない。鉄の道具で加工が難しいような硬過ぎる石材ではなく、ある程度磨り減った時に目立てができないといけない。そうした様々なことを考えると昔から多孔質の粗粒安山岩が適していたのだと考えられる。八ッ場ダム周辺の遺跡から出土する石臼の多くは粗粒輝石安山岩などの多孔質の石材が使用されていたし、一般的に見かける古い石臼も同様の石材が多い。もしかしたら、粉挽き臼の多くはそうした多孔質の安山岩が使用されていたと言っても過言ではないかもしれない。

火薬用の木炭を粉にするなど食用以外に転用する場合には茶磨の方が細かく挽けるかもしれない。下原遺跡では2003報告には茶磨の出土があり、中世の茶磨を扱う場合には詳細に観察する必要があるかもしれない。

7 古銭について

下原遺跡では全部で20点の古銭の出土があった。その内、銭文が読み取れない不明銭4点を除くと16点となる。江戸時代の寛永通寶は3点18.8%、中世以前の北宋

銭8点50.0%、明銭4点25.0%、唐銭は1点6.2%となる。また不明銭4点の内銭文は不明だが、中世か江戸かの判別が付くものは中世2点、江戸2点である。それも入れると江戸5点25%、中世14点70.0%、唐銭1点5.0%となる。中世の内訳は北宋銭10点50.0%、明銭4点20.0%である。古銭は全てB区からの出土である。北宋銭や明銭が多い理由は墓や土坑など中世の遺構が多いからではないかと思われる。土坑から出土した古銭は死者のために墓に副葬した六道銭と考えることができる。14号土坑から出土した古銭には繊維状のものが付着するものもあり、布に包まれていたか袋に入れられていた可能性も考えられる。鈴木公雄1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会の備蓄銭の風習を参考にすれば、7号土坑は1408年初鑄の永樂通寶が出土しており、15世紀中頃～15世紀後半頃以降の遺構と考えることができる。それに対して、14号土坑は1368年初鑄の洪武通寶が出土しており、14世紀後半～15世紀前半頃以降の遺構と考えることができる。周辺出土の内耳鍋等も含めて考えるとおおむね15世紀代以降の遺構が多いのではないかと思われる。六道銭は一文ずつ六枚を入れることから六文銭とも言われるが、出土する時は必ずしも六枚とは限らない。それよりも多い枚数のこともあるし、少ないこともある。この下原遺跡では5枚が最も多く、B区14号土坑5枚、17号土坑4枚、7号土坑1枚、それ以外は遺構外No付きで取り上げたものである。丁度6枚のものは1基も無かった。中世の墓はもしかしたら最初は6枚入れたかもしれないが、後に坑を掘った時や攪乱など様々な要因により動いた可能性も否定できない。1枚も入っていなかったのは、単に貧しくて何も入れなかったということではなく、金属の銭以外の副葬品が入れられた可能性も否定できない。一昔前は6枚に限らず補助貨幣などの実際使用している小銭を入れることもあったが、今では金属の銭の代わりに紙や木のお金の代用品を入れることもある。中国ではかつて通常のお金よりもかなり小形の副葬するために特別に鑄造した小五銖銭などを冥銭として入れることもあった。

寛永通寶は新寛永通寶1文銭のみであり、古寛永通寶・新寛永通寶文銭・新寛永通寶四文銭は1点も無い。新寛永通寶の内1点は寛保元(1741)年鑄造の背「元」字銭の大坂高津銭である。中世のものは磨滅と腐食で銭文不明の

2点を除くと12点、不明の2点を加えても14点しか出土していない。その多くは北宋銭であり、明銭は4点である。唐銭1点を加えても15点にしかならない。なお、南宋銭、国内出土順位1位の皇宋通寶と2位の元豊通寶も1点も無かった。おおむね上位25位までに入っているものだけであった。この時期の他の遺跡と同様に特定の銭種がたくさん出るような傾向は認められなかった。最も多いものでも2点で、これは淳化元寶(北宋銭)・元祐通寶(北宋銭)・洪武通寶(明銭)・永楽通寶(明銭)の4種類である。それ以外は開元通寶(唐銭)・天禧通寶(北宋銭)・熙寧元寶(北宋銭)・紹聖元寶(北宋銭)・元符通寶(北宋銭)の各1点ずつである。これをみると銭の種類はものすごくバラエティに富んでいることが分かるが、決してそれぞれの出土点数は多くない。時代が下がっても良く出てくるし、国内鏝銭も数多くある開元通寶や中世後期室町期から安土桃山時代に蓄財され、多用される洪武通寶・永楽通寶の2種類は各2点計4点と1/4~1/5を占める。永楽通寶は教科書や資料集にも出てくる代表的な明銭である。その多くが従来は輸入品と考えられてきたものであるが、最近では国内で作られていた可能性が高いと考えられるようになった銭(2005財団法人茨城県教育財団『村松白根遺跡1大強度陽子加速器施設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書I』茨城県教育財団文化財調査報告第250集)でもある。もしかしたら、その他の明銭の代表格洪武通寶、宋銭や唐銭の開元通寶も含めて、当時国内で造られたものが多く流通していたのではないかと考えている。およそ3割あったとされる鏝銭だけでなく、かなり綺麗で良質で中国産と考えられてきたものの中にも多くの国内鑄造品が含まれている可能性もある。今後成分分析や産地同定が進めば、それが明らかになってくるものと思われる。いずれにしても粘土に押し当てて型を取る「踏み返し」を繰り返せば、銭はどんどん小さくなっていく。場合によると厚さが不均一となったり、元のものよりも厚くなることもある。径が小さくなるだけでなく、銭文も潰れて不鮮明となっていく。そのうち凹凸さえもはっきりしなくなってしまう。ひどい場合にはただの丸いところに穴の開いたようなものになってしまう。だから、煙管の雁首を潰しただけの所謂雁首銭も鏝銭として流通が可能となってしまうのである。バラさずに紐に通したまま差し銭(短陌)として使用する場合にはそれで

さえも大きな問題ではない。中央から離れた地域ではそんなものでも通用することとなるのである。江戸時代になると清朝銭も多数流入するが、差し銭(短陌)の中にはそれも混じっていることも多々ある。混ざっていても外してバラさなければ分からない。それでも十分通用したということであろう。元々穴銭を束ねて銅銭100枚として使うという商習慣は中国で発生したものであり、日本では鎌倉後期から室町時代には1短陌は97枚で、江戸時代になると96枚で100文として通用していた。97は割りきれず余り1となるが、96だと割りきれるので計算し易いからということのようである。日本の寛永通寶は中国(清朝)に渡って数多く流通しているし、安南地域(現在のベトナム)で造られたとされる寛永通寶も日本国内で多く見つかっている。鉄寛永は元文四(1739)年の発行であるので、下原遺跡では天明三(1783)年の泥流に覆われているので、鉄銭が出土しても良いはずであるが、鉄製の寛永通寶は1枚も見つかっていない。銅銭から鉄銭に切り替わるまでには一定の時間が掛かる。当時鉄銭は身近にはあったはずであるが、普及・受け入れまでの時間が十分ではなかったのか、いずれの可能性も否定できない。「悪貨は良貨を駆逐する」というグレシャムの法則に従えば、蓄財には良いものをとということで綺麗なお金が手元に残り、要らないものが流通するということであれば、その当時鉄銭は流通していたと思われる。鉄銭と比べたら銅銭は銅そのものにも価値があり、遺跡から1枚も出土しないのは何か意味があるのかもしれない。

8 その他金属器類について

古銭を除く金属器類は鉛玉(鉄砲玉)1点、切羽1点、銅鏡破片1点、刀子(小刀)1点であった。バラエティに富むが、数は少なかった。現場から上がったばかりの切羽には銀メッキが一部で確認できた。銅鏡は薄い小破片ではあるが、鏡面が残され輝いていた。紐で下げるためと考えられる孔も2カ所に開いていた。

鉄砲玉には火縄銃を痛めないために普通鉄よりも軟らかい鉛が使用される。下原遺跡から出土した鉄砲玉は1点であり、歪みがあることと灰白色の腐食が認められるので、その材料に鉛が使用され、実際に打ち出された可能性が高いものである。また、鉛は融解温度が327.46度と低く玉の形が作り易い。現在では、鉛は金属の中で比

較的入手しやすい安価な物であり、魚釣りの重りなどにも使用されるものであるが、戦国時代においては大変貴重なものであった。この鉄砲玉の材料である鉛をどこからどのようにして入手するかということは戦国大名にとっては重要な課題であった。最近の研究で鉛の同位体比分析が進み、産地同定をすることができるようになった。平尾良光・飯沼賢司2009「大航海時代における東アジア世界と日本の鉛流通の意義」『キリシタン大名の考古学』思文閣出版・『長篠・設楽原の戦い歴史秘話第10回(設楽原の鉄砲玉)鉄砲玉はどこから来たか』2012 広報しんしろ ほのかNo.75などによると、戦国時代の鉄砲玉は、タイのソントー鉱山からの輸入品が多く使用され、それ以外に中国・朝鮮からのものもあった。これらは外国からの輸入品であり、値段も高いし、手に入れるのも難しい。そこで、織田信長や大友宗麟のように戦国大名の中には国産品も多く使用していた者もいたようである。また、鉄砲玉を打ち出すためには、火薬がないといけない。黒色火薬の成分は、概ね硝石60～80%、硫黄10～25%、木炭10～20%とされる。硝石は中国内陸部など乾燥地帯では採れるが、日本のように湿潤多雨の地域ではなかなか採れない。それに対して硫黄は、日本のような火山国ではたくさん採れる。硫黄は国内産が使用されていたことは容易に想像できるが、鉛は分析してみないと分からない。残念ながら、下原遺跡の鉄砲玉は江戸時代以前であることは間違いのないと思うが、分析していないので、鉛の産地までは分からない。また、硝石は人畜の糞尿を原料にして、バクテリアによる酸化生成を人工的に行う「古土法」や「硝石丘法」(幕末に伝来)によれば得ることができるというが、これらの方法が確立される以前は外国からの輸入に頼らざるを得なかった。なお、黒色火薬には他に木炭の粉が重要であるが、それに石臼が重要な役割を果たしていたことは先述した通りである。

引用参考文献

- 中尾七重2011「第七章 まとめ 2中世」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第221集 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書XXXVI 古渡路遺跡 図版編』新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
 中尾七重2012「古渡路遺跡の中世掘立柱建物について：架構等の復元とその特徴」『文化学園大学紀要 服装学・造形学研究』43
 鈴木弘太2013『ものが語る歴史29中世鎌倉の都市構造と竪穴建物』同成社
 小野正敏・五味文彦・萩原三雄編2017『考古学と中世史研究13 遺跡を読む中世史』高志書院

- 相美郁恵2014「鹿児島県における中世掘立柱建物跡の基礎的研究—県本土を中心とした集成と若干の考察—」『研究紀要・年報『縄文の森から』』第7号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
 永越信吾2014「関東における中世集落の再編—15世紀代の画期を中心として—」『総研大文化科学研究第10号』
 老川慶喜他2015『詳説日本史B』山川出版社
 三輪茂雄1975「挽き臼の形態と目の刻みについて」『民俗文化』144 滋賀民俗学会
 三輪茂雄1978『白』(ものと人間の文化史25)法政大学出版局
 三輪茂雄1978『石臼探訪』産業技術センター(クオリ)
 三輪茂雄・下坂厚子・日高重助1985「太宰府・観世音寺の碾礎について」『古代学研究』108古代学研究会
 三輪茂雄1989『日本文化 民具が語る 粉の文化史から見た民具』河出書房新社
 三輪茂雄1994『増補 石臼の謎』クオリ
 三輪茂雄1999「ふんさい 粉碎」『図説 江戸時代食生活事典(新装版)』雄山閣出版
 三輪茂雄1999『粉と臼』大巧社
 三雲泰子・石川寛子1985「江戸料理本に見る香辛食品利用の調査研究：その1.『料理物語』について」『山脇学園短期大学紀要』23巻
 松下幸子他1982「古典料理の研究(八)：寛永十三年「料理物語」について」『千葉大学教育学部研究紀要』31巻
 虎関師鍊1322『元亨釈書』
 小学館 1996『新編日本古典文学全集(3) 日本書紀(2)』p.562
 鈴木公雄1999『出土銭貨の研究』東京大学出版会
 鈴木公雄2002『歴史文化ライブラリー 銭の考古学』吉川弘文館
 古泉弘1987『江戸の考古学』考古学ライブラリー 48 ニュー・サイエンス社
 『長篠・設楽原の戦い歴史秘話第10回(設楽原の鉄砲玉)鉄砲玉はどこから来たか』2012 広報しんしろ ほのかNo.75
 平尾良光・飯沼賢司2009「大航海時代における東アジア世界と日本の鉛流通の意義」『キリシタン大名の考古学』思文閣出版
 清水豊2000『鍋について考える』かみつけの里博物館 第6回特別展図録
 清水豊2005「信濃型内耳土器からみた群馬県北西部の地域性」『海なき国々のモノとヒトの動き—16～17世紀における内陸部の流通—』第1回内陸遺跡研究会シンポジウム資料集
 秋本太郎2005「上野と周辺地域との関係—在土器の分布論から探る—」『海なき国々のモノとヒトの動き—16～17世紀における内陸部の流通—』第1回内陸遺跡研究会シンポジウム資料集
 磯部淳一2002「高崎市における近世墓石の編年」『高崎市史研究』第16号
 池上悟1999「平成10年度・足利市域石造物所在調査報告」『平成10年度文化財保護年報』足利市教育委員会
 池上悟2003「近世墓石の諸相」『立正大学人文科学研究年報』40
 庚申懇話会1975『日本石仏事典』雄山閣
 江戸遺跡研究会編2001『図説江戸考古学研究事典』柏書房

遺物観察表

中・近世、平安時代遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	— 5.4	高 —			
第72図 PL.92	A区遺構外 1	瀬戸・美濃陶器碗	埋没土 底部	口 底	— 5.4	高 —	灰黄	内面錆色の鉄釉。碗底部の周縁を打ち欠いて円形状に整形。	二次加工
第72図	B区21坑 1	在地系土器 内耳鍋	埋没土 体部片	口 底	— —	高 —	にぶい赤褐	外面器表黒褐色。体部は内湾。	2片接合、 中世
第72図 PL.92	B区22坑 1	在地系土器 内耳鍋	埋没土 体部上位片	口 底	— —	高 —	にぶい赤褐	外面器表黒褐色。内耳下位の貼付部。口縁部は欠損。	3片接合、 中世
第72図 PL.92	B区173ピ 1	在地系土器 内耳鍋	埋没土 口縁部～ 体部片	口 底	— —	高 —	にぶい黄橙	断面中央は灰白色。口縁部内面下端で小さい段をなして外反。屈曲部外面のヨコナデは凹線状に窪む。口縁端部はやや平坦。体部は僅かに内湾。	中世、5片 接合、遺外 3と同一個 体の可能性 高い
第72図 PL.92	B区遺構外 1	龍泉窯系 青磁 稜花皿	埋没土 口縁部片	口 底	— —	高 —	灰	口縁部内面に施文後青磁釉施釉。貫入入る。	15世紀
第72図 PL.92	B区遺構外 2	瀬戸・美濃陶器 丸碗	床直 口縁部～ 体部1/4	口 底	(11.7) —	高 —	浅黄	外面に線状の蓮弁文を施し、内外面に灰釉。粗い貫入入る。	大窯1期、 3片接合 2掘
第72図	B区遺構外 3	在地系土器 内耳鍋	埋没土 口縁部片	口 底	— —	高 —	にぶい黄橙	断面中央は灰白色。口縁部内面下端で小さい段をなして外反。屈曲部外面のヨコナデは凹線状に窪む。口縁端部はやや平坦。	2片接合、 173ピ1と 同一個体 の可能性 高い
第72図 PL.92	B区遺構外 4	在地系土器 内耳鍋	埋没土 口縁部片	口 底	— —	高 —	にぶい褐	外面器表黒褐色。口縁部は外反せず、内面に粘土紐を貼付で内耳を形成。	中世
第72図 PL.92	B区遺構外 5	在地系土器 内耳鍋	+13cm 口縁部片	口 底	— —	高 —	にぶい橙	断面中央は黒灰色、器表付近は灰色。体部と口縁部境は屈曲し、内面は明瞭な段差。口縁部は内湾気味で肥厚。口縁端部は平坦で、外面上位は面取り状の平坦部を有する。	中世 2掘
第72図 PL.92	B区遺構外 6	在地系土器 内耳鍋	埋没土 口縁部片	口 底	— —	高 —	にぶい橙	体部から口縁部は直線的。口縁部内面ヨコナデによる2段の凹線。口縁端部は平坦。	中世
第72図 PL.92	B区遺構外 7	在地系土器 内耳鍋	床直 口縁部～ 体部片	口 底	— —	高 —	にぶい褐	外面器表黒褐色。口縁部は体部境で屈曲して外反。口縁端部は狭い平坦面を有する。	中世、 4片接合 4掘
第72図	B区遺構外 8	在地系土器 内耳鍋	埋没土 体部上位片	口 底	— —	高 —	にぶい橙	外面器表にぶい黄褐色。外面上部にはヨコナデ。内面上端は小さい段差が認められる。	中世
第72図	B区遺構外 9	在地系土器 内耳鍋	床直 体部上位片	口 底	— —	高 —	橙色	断面灰色。破片上端が外反傾向にあり、口縁部下の可能性ある。	中世、 7片接合 2掘
第72図	B区遺構外 10	在地系土器 内耳鍋	床直 体部片	口 底	— —	高 —	にぶい赤褐	外面器表黒褐色。器壁厚い。	中世、 7片接合 4掘
第72図	B区遺構外 11	在地系土器 内耳鍋	+18cm 体部下位片	口 底	— —	高 —	にぶい褐	外面器表黒色。断面形状と内面調整痕から底部直上の体部片と考えられる。	中世、 4片接合 4掘
第72図	B区遺構外 12	在地系土器 内耳鍋	-22cm 体部下位～ 底部片	口 底	— —	高 —	明赤褐～褐灰	平底。	中世 2掘
第72図	B区遺構外 13	在地系土器 内耳鍋	+5cm 体部下位～ 底部片	口 底	— —	高 —	にぶい褐	断面にぶい赤褐色。外面器表黒褐色。平底。	中世、 3片接合 3掘
第73図 PL.92	B区遺構外 14	在地系土器 内耳鍋	床直 体部～底部片	口 底	(26.2) —	高 —	にぶい黄橙	器表褐灰色。平底で端部はやや内湾して立ち上がる。	中世、 7片接合 4掘
第73図 PL.92	B区遺構外 15	製作地不詳磁器 染付小碗	埋没土 口縁部一部、 底部1/2	口 底	(8.2) 3.8	高 —	4.7 白	外面に酸化コバルトによる手描き文様。手描き文様周囲に吹き墨。高台外面下位から高台内無釉。	近現代 御堂跡
第73図 PL.92	B区遺構外 16	肥前磁器 染付筒形碗	埋没土 口縁部一部、 体部1/3	口 底	(7.1) —	高 —	— 灰白	外面と高台脇に不明文様。口縁部内面に四方禪文。底部内面周縁に1重圏線。透明釉はやや白濁。	2片接合 御堂跡

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高				
第73図 PL.92	B区遺構外 17	肥前磁器 染付碗	埋没土 口縁部1/6	口 底	(10.0) —	高 —	白	口縁部外面に瓔珞文。内面に2重圈線。	2片接合 御堂跡
第73図 PL.92	B区遺構外 18	製作地不 詳陶器 灯火皿	埋没土 口縁一部欠	口 底	10.7 4.0	高	2.4 灰白	内面から口縁部外面に白味を帯びた灰釉。底部 内面に目跡3カ所。口縁部外面以下は回転篋削 り。	19世紀
第73図 PL.92	B区遺構外 19	製作地不 詳陶器 灯火皿	埋没土 完形	口 底	10.3 3.8	高	2.3 黄灰	内面から口縁部外面に灰釉。口縁部外面以下は 回転篋削り。外面無釉部分油付着。	19世紀
第73図 PL.92	B区遺構外 20	製作地不 詳陶器 灯火受皿	埋没土 完形	口 底	10.7 4.4	高	2.2 灰黄	口縁端部内面は肥厚。受け部1カ所に「U」字状 の切り込み。内面から口縁部に白味を帯びた灰 釉。受け部端部無釉で油付着。外面は回転篋削 り。	19世紀
第73図 PL.92	B区遺構外 21	製作地不 詳陶器 灯火受皿	埋没土 完形	口 底	11.0 4.3	高	2.4 灰黄褐	受け部1カ所に「U」字状の切り込み。内面から 口縁部に白味を帯びた灰釉。受け部端部と外面 口縁部以下は無釉。外面口縁部以下は回転篋削 り。	19世紀
第73図 PL.92	A区遺構外 1	須恵器 杯	+27cm 体部中位～ 底部片	口 底	— 5.8	高	— 粗砂、礫微量/ 灰黄2.5Y7/2/還 元炎	内面の底部境不明瞭。底部右回転糸切り無調整。	
第73図 PL.92	B区1区 1	土師器 杯	+17cm 口縁部片	口 底	11.0 —	高	— 粗砂微量/明黄 褐10YR7/6/良好	内面黒色処理。口縁部は外反。轆轤整形。	黒色土器
第73図 PL.92	B区1区 2	土師器 杯	+4cm 体部下位～底 部	口 底	— 5.0	高	— 粗砂、礫少 量/にぶい橙 7.5YR6/4/良好	内面黒色処理。底部内面に放射状ミガキ。底部 右回転糸切り無調整。	黒色土器
第73図 PL.92	B区1区 3	土師器 杯	+5～9cm、埋没 土、掘方 体部下位～底 部	口 底	— 5.1	高	— 粗砂少量/にぶ い黄橙10YR7/4/ 良好	内面黒色処理。内面ミガキ。底部右回転糸切り 無調整。	黒色土器
第73図 PL.92	B区1区 4	土師器 杯	+4cm、掘方 1/3	口 底	13.0 6.0	高	3.9 粗砂、赤色 粒/にぶい橙 7.5YR7/4/良好	内面黒色処理。口縁部内面平行ミガキ後に底部 から体部内面に放射状暗文。底部右回転糸切り 無調整。	黒色土器
第73図 PL.93	B区1区 5	灰釉陶器 皿	掘方底 2/3	口 底	12.4 6.8	高	3.0 粗砂微量/灰白 2.5Y7/1/良好	体部内面から高台境に刷毛塗りによる施釉。口 縁端部は小さく外反。	光ヶ丘1号 窯式期か
第73図 PL.93	B区1区 6	灰釉陶器 碗	+8cm 口縁部～ 体部下位片	口 底	15.0 —	高	— 夾雑物ほとんど 含まない。/灰 黄2.5Y6/2/良好	口縁部は小さく外反。体部内面から体部外面 に刷毛塗りによる施釉。	光ヶ丘1号 窯式期か
第73図 PL.93	B区1区 7	灰釉陶器 碗	+4～26cm 1/2	口 底	15.7 7.0	高	5.1 粗砂微量/灰白 5Y7/1/良好	口縁部は緩く外反。体部内面から口縁部外面に 刷毛塗りによる施釉か。高台は開き、外面は弧 状。	光ヶ丘1号 窯式期か
第73図 PL.93	B区1区 8	灰釉陶器 碗か	+19cm 体部下位～ 底部片	口 底	— 8.2	高	— 粗砂微量/灰黄 2.5Y6/2/良好	体部内外面に施釉。高台外面は緩い稜をなす。	光ヶ丘1号 窯式期か
第73図 PL.93	B区1区 9	灰釉陶器 碗か	床直 体部下位～ 底部1/2	口 底	— 6.8	高	— 夾雑物ほとんど 含まない。/灰 黄2.5Y6/2/良好	体部内面から高台境付近に施釉。高台外面緩い 稜をなして内傾く。高台内面は緩く内湾。	光ヶ丘1号 窯式期か
第74図 PL.93	B区1区 10	須恵器 突帯付四 耳壺か	+17cm 肩部片	口 底	— —	高	— 粗砂/褐灰 10YR5/1/還元炎	肩部に突帯を貼り付け、突帯上に耳を貼り付け る。耳に孔は認められない。突帯より上位外面 に自然釉斑状にかかる。外面に浅い叩き目。	
第74図 PL.93	B区1区 11	須恵器 羽釜	床直 胴部下位～ 底部片	口 底	— 11.6	高	— 粗砂、礫/にぶ い黄橙10YR7/2/ 酸化炎	外面は縦位ケズリ。底部外面はハケ状工具によ るナデ。	月夜野型
第74図 PL.93	B区1区 12	土師器 甕	+10cm 口縁部片	口 底	— —	高	— 粗砂少量/にぶ い黄橙10YR5-3/ 良好	轆轤整形の土師器甕。外面は明瞭なロクロ目。	
第74図 PL.93	B区1区 13	須恵器 甕	+24cm 胴部下位～ 底部片	口 底	— 13.8	高	— 粗砂/黄灰 2.5Y5/1/還元炎	外面は工具によるナデ。	14と同一個 体か
第74図 PL.93	B区1区 14	須恵器 甕	+10cm 胴部下位～ 底部片	口 底	— —	高	— 粗砂/灰5Y4/1/ 還元炎	外面は工具によるナデ。	13と同一個 体か
第74図 PL.93	B区5坑 1	灰釉陶器 長頸瓶	埋没土 口縁部片	口 底	10.6 —	高	— 粗砂微量/灰黄 2.5Y7/2/良好	内外面に施釉。	
第74図 PL.93	B区遺構外 1	土師器 杯	-20cm 体部下位～ 底部1/4	口 底	— 5.9	高	— 粗砂/橙5YR6/6/ 良好	内面黒色処理。内面のミガキは単位不明瞭。底 部回転糸切り無調整。	黒色土器

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第74図 PL.93	B区遺構外 2	土師器 杯	埋没土 体部下位～底部 片	口底	5.0	高	粗砂/にぶい赤 褐5YR5/4/良好	内面は黒色ではないが、放射状ミガキが認められる。底部回転糸切り無調整。	
第74図 PL.93	B区遺構外 3	灰釉陶器 皿	埋没土 口縁部～底部 下位片	口底	8.7	高	粗雑物ほとんど 含まない。/灰 黄2.5Y7/2/良好	体部内面から体部外面に施釉。口縁部は外反。	大原2号窯 式期か
第74図 PL.93	B区遺構外 4	須恵器 壺	埋没土 口縁部片	口底	—	高	黒色物/灰 5Y6/1/還元炎	頸部は長く、上位で外反。	
第74図 PL.93	B区遺構外 5	須恵器 甕	埋没土 口縁部片	口底	—	高	粗砂少量/黄灰 2.5Y5/1/還元炎	口縁部は外反し、端部は縁帯をなす。	
第74図 PL.93	B区遺構外 6	土製品 円盤状	+4cm 完形	長短	3.6 3.5	厚	1.0 粗砂/にぶい橙 7.5YR6/4/酸化 炎	土師器壺か甕の破片周縁を打ち欠いて円盤状に整形。	二次加工品

縄文時代遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚			
第75図 PL.94	A区1区 1	縄文土器 鉢	-10～-13cm 口縁部破片				D18	口縁部に細隆線文を横位や弧状に施文。内面口唇下に浅い凹線状の沈線文を横位に施す。外面横位磨き、内面やや粗い横位磨き。内面やや被熱風化。	堀之内1式
第75図 PL.94	A区1区 2	縄文土器 深鉢	掘り方-8cm 胴部破片				A7	L縄文を横位・多段に施文し、沈線文を括れ部に横位、胴部に懸垂状に施す。	堀之内1式
第75図 PL.94	A区1区 3	縄文土器 深鉢	掘り方+11cm 胴部破片				F1	単沈線文により渦巻状の意匠を構成し、やや細密なLR縄文を充填的に施文か。内面横位磨き、外面やや被熱風化。	堀之内1式
第75図 PL.94	A区1区 4	縄文土器 深鉢	掘り方+15cm 胴部破片				E16	2～3本組の単沈線文を縦・斜位に施す。内面やや粗い横位磨き、やや被熱風化・一部に煤状炭化物付着。	堀之内1式
第75図 PL.94	A区2区 1	縄文土器 深鉢	床直 胴部破片				D4	LR縄文を横位・多段に施文。内面丁寧な縦位磨き。	堀之内1式
第75図 PL.94	A区2区 2	縄文土器 深鉢	-7～+5cm 口縁部～胴部 1/5	口	(39)		B5	外側に折り返した複合口縁。口縁部に指頭圧痕状の粗大な連鎖状刺突文を施す。胴部は櫛状具の条線文を対弧状に施文。外面砂粒の移動痕を残す粗い縦位磨き、内面横位磨き。半精製の深鉢土器。	加曾利B2式
第75図 PL.94	A区9坑 1	縄文土器 深鉢	埋没土 括れ部～胴部 1/2				D5	括れ部に凹線状の横位沈線文を施す。内外面共に指頭状の押圧痕を残すやや粗い横位磨き。ミニチュア的な深鉢土器。	堀之内1式?
第75図 PL.94	A区10坑 1	縄文土器 深鉢	-3cm 胴部破片				E17	微隆起線の懸垂文を施す。外面撫で痕を残す粗い斜位磨き、一部に煤状炭化物付着。内面被熱風化・荒れ。	称名寺II式
第75図 PL.94	A区11坑 1	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				E18	RL縄文を横位・多段に施文。内面やや粗い横位磨き、外面煤状炭化物付着。	堀之内1式
第75図 PL.94	A区1埋 1	縄文土器 甕	+14cm 胴部上位～底部 1/3	底	9.3		E15	微隆起線の懸垂文を施す。内外面共に著しい風化・荒れ。2と同一個体。	称名寺I式
第75図 PL.94	A区1埋 2	縄文土器 甕	-22cm 口縁部破片				E15	口縁部に横位の微隆起線文を施す。内外面共に著しい風化・荒れ。1と同一個体。	称名寺I式
第75図 PL.94	A区2埋 1	縄文土器 甕	埋没土 底部ほぼ完存	底	8.7		E15	内外面共に著しい風化・荒れ。文様構成不明。	後期前半
第76図 PL.94	A区遺構外 1	縄文土器 深鉢	-27cm 胴部破片				A18	RL縄文を横位・多段に施文し、複数本の結節浮線文を横位に施す。内面撫で状のやや粗い横位磨き、やや風化・荒れ。	十三菩提式
第76図 PL.94	A区遺構外 2	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				A18	RL縄文を横位・多段に施文し、結節浮線文を縦・横位に施す。内面横位磨き。	十三菩提式
第76図 PL.94	A区遺構外 3	縄文土器 深鉢	-4cm 口縁部～胴部破 片				A17	口唇部に球状の小突起を付し、内面側に渦巻文や口唇上面から連続する短沈線の刻み目と沈線文を施す。口縁部は球状突起下に幅広の橋状把手を付し、棒状具の横位集合沈線文を施す。また口唇上面と一体化した集合短沈線文や渦巻沈線文を施文。胴部は風化で痕跡的だが、開端自縄自縛のRL・LR結束縄文を縦位に施文後、Y字状懸垂文や楕円形の沈線区画文を施し、横位の沈線文を充填。内面横位磨き、内外面共に風化・荒れ。5と同一個体か。	五領ヶ台式
第76図 PL.94	A区遺構外 4	縄文土器 深鉢	+1cm 口縁部破片				E18	波状口縁で、内面側に段を描出。口唇上面に半截竹管状具の刻み目を施す。口縁部には同具の横・縦位の平行沈線文を施文し、RL縄文を充填施文。内面は波頂部に接続して縦位隆帯を付して有段端部と共に刻みを加え、口唇に沿って半截竹管状具の連続爪形文を施す。内外面共にやや風化・荒れ。	五領ヶ台式

遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第76図 PL.94	A区遺構外 5	縄文土器 深鉢	+3cm 胴部破片				A17	胴部は開端自縄自縛のRL・LR結束縄文を縦位に施文し、Y字状懸垂文や楕円形の沈線区画文を施して横位の沈線文を充填。内面丁寧な横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。3と同一個体か。	五領ヶ台式
第76図 PL.94	A区遺構外 6	縄文土器 深鉢	+5cm 口縁部破片				E11	波状口縁。波頂下に円形状の貼付文を付す。半截竹管状具の平行沈線文を口唇に沿って2本、以下集散的に斜位施文し、篋状具の細沈線文を斜格子状に施す。内外面共にやや被熱風化・荒れ、外面一部に煤状炭化物付着。	五領ヶ台式
第76図 PL.94	A区遺構外 7	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				A18	半截竹管状具の集合沈線文を斜位に施文し、同具の三角形区画内を抉り取る。内面横位磨き。	五領ヶ台式
第76図 PL.94	A区遺構外 8	縄文土器 深鉢	-2cm 口縁部～胴部上 位1/5	口	(13)		B4	僅かに外反する口唇部上面に刻み目を施す。口縁部に半截竹管状具の横位平行沈線文を2段に施し、その区画内に同具の斜格子文を充填的に施文。胴部はRL縄文を横位に施す。内面横位磨き、内外面共に一部に煤状炭化物付着。	五領ヶ台式
第76図 PL.95	A区遺構外 9	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				B7	半截竹管状具の横位平行沈線文を上下に施し、その間隙に同具の縦位短沈線文を施文して下端に三角形の陰刻状の刺突を加える。内面横位磨き、やや風化。	勝坂1式
第76図 PL.95	A区遺構外 10	縄文土器 深鉢	-9cm 胴部破片				A15	唐草文的な2本隆線の渦巻文を施し、各施文間に棒状具の単沈線文を斜位に充填する。内面横位磨き。	唐草文系土器
第76図 PL.95	A区遺構外 11	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				D16	口縁部に半截竹管状具による斜め右方向からの刺突を加えた圧痕隆帯文を施し、以下に櫛歯状具の縦位波状沈線文を施文。内面横位磨き、外面煤状炭化物付着。	圧痕隆帯文系 土器
第76図 PL.95	A区遺構外 12	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				E14	V字状の沈線区画文を施し、LR縄文を充填的に施文。沈線区画文はなぞり返す。内面被熱風化・荒れ。	加曾利E4式
第76図 PL.95	A区遺構外 13	縄文土器 深鉢	-2cm、埋没土 口縁部～胴部上 位1/4	口	(32)		D10	口縁部に横位の微隆起線文を施文後に、LR縄文を斜位に全面施文。内面横位磨き、外面やや被熱風化・一部剥落・煤状炭化物付着。	加曾利E4式
第76図 PL.95	A区遺構外 14	縄文土器 深鉢	-5cm 胴部破片				A4	U字・逆U字状の沈線区画文を施し、その外縁にL縄文を充填的に施文。内面縦・横位磨き。	加曾利E4式
第76図 PL.95	A区遺構外 15	縄文土器 深鉢	-21cm 口縁部破片				A4	口唇部が内側に肥厚。J字状の沈線区画文を施し、L縄文を充填施文。内面横位磨き。	称名寺I式
第76図 PL.95	A区遺構外 16	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E12	角頭状の口唇部。J字状の沈線区画文を施し、細密なL縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化・荒れ。	称名寺I式
第76図 PL.95	A区遺構外 17	縄文土器 注口付浅鉢	+2cm 口縁部破片				D6	注口付の4単位波状口縁浅鉢。口端部に棒状具の楕円沈線区画文を施し、同具の円形刺突文を充填。内外面共に丁寧な横位磨き。	称名寺II式
第77図 PL.95	A区遺構外 18	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E12	波状口縁。波頂下に直径10～20mmの貫通孔を開け、口端部に刺突文や横線文を施す。口縁下には沈線の懸垂文や区画文を施文。内外面共に丁寧な横位磨き、一部被熱風化・剥落。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 19	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E8	口端部に横線文を、胴部に横位刻み隆帯や同心円状の弧線文を施す。内面横位磨き、内外面共にやや被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 20	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				A5	緩く内湾する口端部に同心円状の渦巻文や楕円区画文を施す。内外面共に被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 21	縄文土器 深鉢	+1cm、埋没土 口縁部破片				E2	口端部が短い「く」字状に内折し、円形竹管状具の横線文や連続刺突文を施す。内外面共にやや被熱風化・荒れ、内面口縁部に煤状炭化物付着。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 22	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E5	口頸部が「く」字状に強く外反する波状口縁。波頂下に円形刺突文や捻転した8字状の小橋状把手を付す。胴部に横位刻み隆帯や沈線文を施す。内面横位磨き。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 23	縄文土器 深鉢	+33cm 口縁部破片				D12	口端部が短い「く」字状に内折し、円形竹管状具の同心円状渦巻文や横線文・連続刺突文を施す。内外面共にやや被熱風化、外面一部に煤状炭化物付着、内面一部剥落。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 24	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E13	山形状の小突起を付す波状口縁。口端部に円形刺突文や横線文を施す。内外面共にやや被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 25	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				D15	口端部が「く」字状に緩く内折する波状口縁。口唇上面に指頭状の刻みを施し、波頂下口端部に低平なC字状の貼付文や沈線文を施文。内外面共にやや粗い横位磨き。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 26	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				A4	口頸部が「く」字状に強く外反。胴部にLR縄文を横位施文し、拵れ部にやや粗大な円形貼付文を付してその周縁部に沈線文や横位の列点文を施す。内外面共にやや被熱風化・荒れ、内面拵れ部に煤状炭化物付着。	堀之内1式

遺物観察表

挿 図 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第77図 PL.95	A区遺構外 27	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				A8	口端部が「く字状」に内折する。口頸部は無文。内外面共に横位磨き。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 28	縄文土器 深鉢	+24cm、埋没土 口縁部破片				D21	無文・粗製深鉢土器。外面にやや粗い横位磨きで状の整形痕を残す。内面丁寧な横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第77図 PL.95	A区遺構外 29	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				D17	括れ部に8字状の貼付文や方形区画文を施す。胴部は逆U字状の懸垂文を重層的に施し、外縁部にLR縄文を充填的に施文。内面横位磨き、やや被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 30	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				D23	括れ部に横線文や列点状の刺突文を施し、下位に沈線懸垂文や充填的にLR縄文を施文。内面横位磨き、やや被熱風化。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 31	縄文土器 注口土器?	+8cm 胴部破片				D7	棒状具の沈線渦巻文を施し、区画内にLR縄文を充填施文。内面横位磨き、漆等の塗彩痕あり。	堀之内1式
第77図 PL.95	A区遺構外 32	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				E2	単沈線文により渦巻状の意匠を構成し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き。	堀之内1式
第79図 PL.95	A区遺構外 33	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				A13	沈線の渦巻文や区画文を施し、区画内にLR縄文を充填施文。内外面共にやや被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第79図 PL.95	A区遺構外 34	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				E2	棒状具の2本単位沈線でJ字状の渦巻文を施し、外縁部にLR縄文を充填的に施文。内面横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内1式
第79図 PL.95	A区遺構外 35	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				E2	棒状具の2本単位沈線でJ字状の渦巻文を施し、外縁部にLR縄文を充填的に施文。内面横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内1式
第79図 PL.95	A区遺構外 36	縄文土器 深鉢	+28cm 胴部破片				D16	2本組の単沈線により斜位や渦巻状の意匠を構成か。内外面共にやや被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第79図 PL.95	A区遺構外 37	縄文土器 深鉢	±0 胴部破片				A14	棒状具の単沈線により懸垂文・刺突文や方形の区画文を施す。内外面共にやや被熱風化・荒れ、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内1式
第78図 PL.95	A区遺構外 38	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				A16	口端部が「く字状」に短く内折。口頸部に棒状具の単沈線を羽状に施し、胴部に同具の懸垂文を複数条施文。内面横位磨き、外面やや被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第78図 PL.95	A区遺構外 39	縄文土器 深鉢	+3cm 胴部破片				A14	棒状具の単沈線を複数本単位にして縦位鋸歯状や懸垂状に施す。外縁部にはLR縄文を充填的に施文。内面横・斜位磨き、外面やや被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第78図 PL.96	A区遺構外 40	縄文土器 鉢	埋没土 口縁部破片				D28	微隆起線により渦巻状の意匠を構成し、口唇に近接して横8字状の刺突文を施す。内面撫で状のやや粗い横位磨き。	堀之内1式
第78図 PL.96	A区遺構外 41	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				D6	口縁部に鎖状隆帯文を横位に施す。内面横位磨き、内外面共にやや被熱風化・荒れ。	堀之内1式
第78図 PL.96	A区遺構外 42	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				C2	口唇部が外削ぎ状の波状口縁。LR縄文を斜位に施文。内面横位磨き。	堀之内1式
第78図 PL.96	A区遺構外 43	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部～胴部中 位1/5	口	(41)		A2	口縁部に2条の横位刻み隆線文と縦位の8字状貼付文を施す。胴部は渦巻状の沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面は浅い凹線状の横線文を施す。内面やや粗い横位磨き。	堀之内2式
第78図 PL.96	A区遺構外 44	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部～胴部上 位1/4	口	(41.5)		A12	口縁部に2条の横位刻み隆線文と縦位の8字状貼付文を施す。胴部は渦巻状や三角形の沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面は横線文を施す。内面丁寧な横位磨き、外面被熱風化・煤状炭化物付着。	堀之内2式
第78図 PL.96	A区遺構外 45	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E4	口唇上面に刻み目を施す。口縁に三角形の沈線区画文を施し、やや細密なLR縄文を充填施文。内面横位磨き、内外面共にやや被熱風化・外面煤状炭化物付着。	堀之内2式
第78図 PL.96	A区遺構外 46	縄文土器 深鉢	-3cm 口縁部破片				A9	口唇端部が短く内折。口唇部下に横位の刻み隆線文を施し、以下に三角形沈線区画文を入れ子状に構成して、やや細密なLR縄文を充填施文。内面横位磨き、外面被熱風化・荒れ。	堀之内2式
第78図 PL.96	A区遺構外 47	縄文土器 深鉢	+19cm 口縁部破片				B8	口唇端部が短く内折。口唇部下に横位の刻み隆線文を施し、以下に沈線の三角形区画文や入れ子状の菱形文を構成して、やや細密なLR縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第78図 PL.96	A区遺構外 48	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				D3	波状口縁で口唇端部が短く内折。口唇部下に横位の刻み隆線文や8字状貼付を施し、以下に沈線区画文を施文して細密なLR縄文を充填。貼付文直下の区画文沈線が窪む。内面丁寧な横位磨き、内外面共に煤状炭化物付着。	堀之内2式

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第78図 PL.96	A区遺構外 49	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				E3	胴部に入れ子状の沈線菱形区画文を施し、細密なLR縄文を充填施文。内面横位磨き、内外面共にやや被熱風化・外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第78図 PL.96	A区遺構外 50	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				D20	口縁に横位の刻み隆線文を施し、以下に三角形の沈線区画文を施文してLR縄文を充填。内面やや被熱風化・荒れ。内外面共に燻べ焼きで黒灰色を呈する。	堀之内2式
第78図 PL.96	A区遺構外 51	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				B3	いわゆる体部屈曲鉢。入れ子状の沈線三角形区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面横位磨き、内外面共にやや被熱風化。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 52	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				D19	いわゆる体部屈曲鉢。入れ子状の三角形区画文を施し、細密なLR縄文を充填施文。内面被熱風化・荒れ。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 53	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E5	いわゆる体部屈曲鉢。口縁の一部を内側に押圧して変形。縦位の刻み隆線文や幾何学的な沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内面口縁は同心円状の弧線文を施し、その中心部に直径15mmの孔を穿つ。内面横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 54	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部～括れ部 1/5	口	(24.5)		D6	「く字状」に短く内折した口端部の内外面に、横線文を施す。胴括れ部に2本単位の横線文や刺突文を施文。内外面共に丁寧な横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 55	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				D9	複数本単位の細沈線により懸垂文を施し、外縁部にRL縄文を充填的に施文。外面一部に煤状炭化物付着、内面やや被熱風化・一部剥落。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 56	縄文土器 深鉢	+8cm 胴部破片				D9	括れ部に横線文や8字状貼付文を施す。胴部にRL縄文を縦位施文し、蕨手状の多条懸垂文を施す。内面やや粗い横位磨き。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 57	縄文土器 深鉢	-12cm 口縁部破片				A10	外面口頸部は無文で、内面口縁に横線文や同心円状の弧線文を施す。内外面共に横位磨き、やや被熱風化・外面煤状炭化物付着。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 58	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				D6	波状口縁。「く字状」に短く内折した口端部に横線文を施し、波頂部に円形刺突文を施文。口頸部は波頂下に縦位の隆線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 59	縄文土器 深鉢	埋没土 頸部～底部2/3	底	3.2		D6	ミニチュア的な深鉢土器。括れ部に横位の刻み隆線文を施すが、他は無文か。内外面共に横位磨き、やや風化・荒れ。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 60	縄文土器 深鉢	埋没土 ほぼ完形	口 底	17.8 5.8	高 10.0	A13	3単位の小突起を付す波状口縁。口頸部が強く外反する鉢形土器。口縁部から括れ部にかけて刻み隆線文を縦位・3単位の、括れ部に横位に施す。胴部は方形の沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。口縁内面は2条の横線文や渦巻文・刺突文を施す。外底面に網代痕。外面丁寧な縦・横位磨きと燻べ焼きで黒灰色の光沢を帯びる。内面被熱風化・荒れ。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 61	縄文土器 注口土器	+39cm 胴部破片				A3	胴部上半に横線文や沈線の同心円文を施文。内外面共に丁寧な横位磨き。	堀之内2式
第79図 PL.96	A区遺構外 62	縄文土器 注口土器	埋没土 胴部破片				D12	欠落する把手の下回りに刻み隆線文を施し、把手の直上には直径7mmの焼成後穿孔あり。肩部には単沈線の同心円文を施し、細密なLR縄文を充填施文。外面丁寧な磨きと燻べ焼きで黒色光沢を帯びる。内面やや粗い横位磨き。	堀之内2式
第79図 PL.97	A区遺構外 63	縄文土器 注口土器?	±0 胴部破片				E9	胴部上半に三角形の沈線区画文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒灰色の光沢を帯びる。内外面共にやや風化、外面一部剥落。	堀之内2式
第79図 PL.97	A区遺構外 64	縄文土器 浅鉢	埋没土 口縁部1/5	底	(21)		D8	口端部が「く字状」に内折し、口唇上面に刻み目を施す。内面に横位の隆帯文・刺突文や2・4本単位の横線文を施し、蛇行状の区切り縦線文や各横線文間に刻み目を施す。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒灰色の光沢を帯び、やや風化。	加曾利B1式
第79図 PL.97	A区遺構外 65	縄文土器 深鉢	埋没土 底部1/4	底	(6.5)		D24	胴部下半が無文の深鉢土器。外底面に網代痕。内外面共に被熱風化・荒れ。	堀之内2式
第80図 PL.97	A区遺構外 66	縄文土器 注口土器?	埋没土 胴部破片				D3	括れ部に横線文を、胴部に結紐状繫絡文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒灰色の光沢を帯びる。	堀之内2式
第80図 PL.97	A区遺構外 67	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部～胴部上 位1/5	口	(37)		F2	無文・粗製深鉢土器。外面にやや粗い横位磨きで状の整形痕を残す。内面撫で状のやや粗い横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	堀之内1式

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口					
第80図 PL.97	A区遺構外 68	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部～胴部上 位1/4	口	(17)		D3	波状口縁。「く字状」に短く内折する口唇上端に刻み目を施す。口縁部に横線を施し、クランク状の区切り縦線を施文。内面口縁部は凹線状の浅い幅広沈線文を2条横位施文し、陽刻技法的に隆線文を描出。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色の光沢を帯びる。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 69	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				D3	4条の横線文間にクランク状の区切り縦線文や細密なLR充填縄文を施す。内面は横線文・刺突文・縦位貼付文などを施文。外面やや被熱風化、一部に煤状炭化物付着。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 70	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				B9	口唇部が短く内湾する。複数条の横線帯内にクランク状の区切り縦線文やL充填縄文を施す。内面は口唇部内端に刻み目を施し、以下に5条の横線文を施文。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 71	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部～胴部上 位1/6	口	(32)		D11	波状口縁か。口縁部～胴部上位に4条単位の横線文や蛇行状の区切り縦線文を施し、RL縄文を充填施文。内面更新下に幅広い凹線状の浅い横線文。内面丁寧な横位磨き。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 72	縄文土器 深鉢	+22cm 口縁部破片				D3	波状口縁。4条の横線文にクランク状の区切り縦線文やLR充填縄文を施す。内面丁寧な横位磨き。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 73	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				A4	口縁が緩く内折する波状縁で、口唇部上面に刻み目を施す。浅い凹線状の横線帯を3段に施し、お玉杓子状の区切り文やLR充填縄文を施文。内面丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒灰色の光沢を帯びる。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 74	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				B2	口縁が短く内折する小波状縁か。横線帯を3段に施し、LR縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨き、外面一部に比熱剥落・煤状炭化物付着。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 75	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				D13	「く字状」に短く内折する口唇部上端に刻み目を施す。口縁部に複数条の横線帯を施し、LR縄文を充填施文。内面は凹線状の幅広沈線で陽刻技法的に低平な隆線文を描出し、下位に複数条の横線文を施す。外面燻べ焼きで黒色を呈する。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 76	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E10	2条の横線文間にLR縄文を充填施文。内面口唇部下に横線文を施す。内外面共に砂粒の移動痕を残すやや粗い横位磨き。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 77	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E7	緩く内湾する口唇部上端に刻み目を施す。口頸部に沈線の横帯文を複数段に施し、列点状の区切り縦線文やLR充填縄文を施文。内外面共に燻べ焼きで黒灰色を呈する。内面丁寧な横位磨き、外面煤状炭化物付着。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 78	縄文土器 浅鉢	埋没土 口縁部破片				E7	「く字状」に内折する波状縁の口唇部上面に刻み目を施す。口頸部の横帯文内に細密なLR縄文を充填施文。内面は4条の横線文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色の光沢を帯びる。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 79	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部～胴部上 位1/5	口	(32)		D1	口縁部～胴部上位に4条単位の横線文を複数段に施す。内面丁寧な横位磨き、外面やや被熱風化。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 80	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E6	「く字状」に短く内折する口端部や口縁部に横線文を施す。内外面共にやや被熱風化。	加曾利B1式
第80図 PL.97	A区遺構外 81	縄文土器 鉢	+25cm、埋没土 口縁部～体部 1/5	口	(15)		D1	「く字状」に内折する口縁部から体部にかけて、横線文やお玉杓子状の区切り縦線文を施し、その区画内にやや細密なRL縄文を充填施文。内面丁寧な横位磨き。内外面共に燻べ焼きで黒灰色を呈する。	加曾利B1式
第81図 PL.97	A区遺構外 82	縄文土器 鉢	+26cm 口縁部～体部 1/4	口	(13)		A1	「く字状」に内折する口縁部から体部にかけて、横線文やお玉杓子状の区切り縦線文を施し、その区画内にLR縄文を充填施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色の光沢を帯びる。	加曾利B1式
第81図 PL.97	A区遺構外 83	縄文土器 鉢	埋没土 口縁部～体部 1/5	口	(19)		D29	やや乱雑な7条の横線文の中間部に円形刺突文を施す。内面は3条の横線文を施す。外面燻べ焼きで黒灰色を呈する。	加曾利B1式
第81図 PL.97	A区遺構外 84	縄文土器 鉢	埋没土 口縁部破片				B1	複数条の横線文を施し、「の字文」やLR充填縄文を施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒灰色の光沢を帯びる。	加曾利B1式
第81図 PL.97	A区遺構外 85	縄文土器 鉢	埋没土 口縁部破片				E12	「く字状」に内折する口唇部上面に刻み目を施す。口縁部～胴部上位に横線文を施し、区画内にLR縄文を充填施文。内面はやや蛇行する複数条の横線文を施す。内面横位磨き。	加曾利B1式

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第81図 PL.97	A区遺構外 86	縄文土器 浅鉢	+14cm 口縁部破片				D12	山形状の小突起を配した波状口縁。口縁に縦・横位の隆線文と3条の横線文を施し、その間隙を陽刻技法的に隆線文化して斜位の刻み目を施文。口縁内面にも縦・横位の隆線文や刺突文と4条の横線文および「ノ字状」の区切り文を施し、LR縄文を充填施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色の光沢を帯びる。外面一部に煤状炭化物付着。	加曾利B1式
第81図 PL.97	A区遺構外 87	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				B6	頂部が渦巻状を呈する小突起を付した波状口縁。陽刻技法で隆線文化した2条の横線文間に刻み目を施し、下位に弧線文を施文。内面は横線文や「ノ字状」の弧線文を施す。内外面共に燻べ焼きで暗灰色を呈する。	加曾利B2式
第81図 PL.97	A区遺構外 88	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E9	捻転した8字状の小突起を付した波状口縁。口縁部に2条の横線文を施し、細密なLR縄文を充墳的に施文。内面口縁部は横線文や波頂下に刺突文を施す。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色の光沢を帯びる。	加曾利B2式
第81図 PL.97	A区遺構外 89	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				B1	口唇部が僅かに「く字状」に内折する。口縁部に横帯文を複数段に施し、お玉杓子状の区切り文やLR充墳縄文を施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒灰色の光沢を帯び、一部に煤状炭化物付着。	加曾利B2式
第81図 PL.97	A区遺構外 90	縄文土器 深鉢	埋没土 胴部破片				D22	粗製的な深鉢土器。複数条の横帯文にL字状の区切り縦線文を施す。外面砂粒の移動痕を残す粗い縦・横位磨き、内面横位撫で。内外面共にやや被熱風化。	加曾利B2式
第81図 PL.97	A区遺構外 91	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				B6	波状口縁か。下位を横線文で区画した口縁部にLR縄文や玉抱き状の対弧文を施す。内面横位磨き。	加曾利B2式
第81図 PL.98	A区遺構外 92	縄文土器 深鉢	+8cm、埋没土 口縁部～胴部上位1/5	口	(26)		B6	口唇部上面に笠状具の刻みを施す。下位を横線文で区画した口頸部に、単沈線の斜格子文を施す。内面は口縁部に1条の横線文を施文。内外面共に丁寧な横位磨き。	加曾利B2式
第81図 PL.98	A区遺構外 93	縄文土器 深鉢	埋没土 口頸部1/5	口	(24)		D9	下位を横線文で区画した口頸部に、単沈線の斜格子文を施す。内面は口縁部に1条の横線文を施文。内外面共に横位磨き。	加曾利B2式
第81図 PL.98	A区遺構外 94	縄文土器 深鉢	埋没土 頸部～胴部中位1/4				E2	口頸部に単沈線により斜格子文を施す。外面縦位・内面横位の丁寧な磨き、内外面共に一部に煤状炭化物付着。	加曾利B2式
第81図 PL.98	A区遺構外 95	縄文土器 深鉢	埋没土 括れ部～胴部中位1/6				A4	口頸部に単沈線の斜線文を施し、括れ部の2条の横線文間に細い竹管状具の円形刺突文を充墳的に施文。内面丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色の光沢を帯びる。外面一部に煤状炭化物付着。	加曾利B2式
第81図 PL.98	A区遺構外 96	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				E9	口唇部上面にLR縄文を横位施文。口縁部は単沈線により羽状の意匠を構成。内面横位磨き、外面煤状炭化物付着。	加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 97	縄文土器 深鉢	+4～16cm、埋没土 口縁部～胴部上位2/5	口	(40)		D14	口縁部に粗大な横位の鎖状隆帯文を2条施し、以下にRL縄文を横位・多段に施文後に横線文や横連対弧文を施す。内面は口縁部に1条の横線文を施文。内外面共に著しい被熱風化。	加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 98	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部破片				A6	口縁外端に鎖状隆帯文を施し、下位にRL縄文と幅広の横線文間を連結するクランク状の区切り縦線文を施文。内面丁寧な縦・横位磨き、外面一部に煤状炭化物付着。	加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 99	縄文土器 鉢	埋没土 口縁部～体部1/5	口	(28)		D22	口縁部から体部にかけて弧線文や対弧文と刻み隆帯文を施し、口縁部にRL縄文を充墳施文。外面の一部区画内に擦痕条の磨で痕を残すが、他は丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒色の光沢を帯びる。内面丁寧な横位磨き。	加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 100	縄文土器 鉢	埋没土 口縁部破片				D1	口縁が「く字状」に内折する。口縁部から体部にかけて横線文を施し、刻み目や細密なRL充墳縄文を施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで黒灰色の光沢を帯びる。内面丁寧な横位磨き。	加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 101	縄文土器 鉢	+15cm 胴部破片				C1	体部に横線文を複数条施し、LR縄文を充墳施文。内外面共に丁寧な横位磨きと燻べ焼きで暗灰色の光沢を帯びる。	加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 102	縄文土器 深鉢	埋没土 口縁部～頸部1/5	口	(34)		A4	波状口縁の粗製深鉢土器。内面口唇部下に凹線状の浅い沈線文を施す。外面砂粒の移動痕を残す削り状の縦・斜位磨き、内面横・斜位磨き。外面煤状炭化物付着。111と同一個体か。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 103	縄文土器 深鉢	埋没土 底部2/3	底	6.5		D25	外底面に網代痕。外面縦位・内面横位のやや粗い磨き。	堀之内2式～ 加曾利B2式

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底	幅	厚			
第82図 PL.98	A区遺構外 104	縄文土器 深鉢	埋没土 底部1/4	底	(6)		E5	外底面に網代痕。内外面共に丁寧な横位磨き。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 105	縄文土器 深鉢	埋没土 底部1/4	底	(5)		E1	外底面に網代痕。外面やや粗い縦位磨き、内面丁寧な横位磨き。内外面共に燻べ焼きで黒灰色を帯び、内面に煤状炭化物付着。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 106	縄文土器 深鉢	+22cm 底部完存	底	6.3		D1	底外面に大柄な網代痕。外面縦位磨き、内面被熱風化・一部剥落。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 107	縄文土器 深鉢	+9cm 底部完存	底	9.7		D26	底外面に大柄な網代痕。内外面共に被熱風化。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 108	縄文土器 深鉢	埋没土 底部ほぼ完存	底	10.6		C3	底外面に網代痕。内面横位磨き、外面やや被熱風化・一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 109	縄文土器 深鉢	埋没土 底部1/5	底	(9.5)		D12	底外面に網代痕。外面やや粗い縦位磨き、内面横位磨き。内外面共にやや被熱風化、内面一部に煤状炭化物付着。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 110	縄文土器 深鉢	+14cm 底部1/4	底	(12)		D27	底外面に大柄な網代痕。内外面共に内面被熱風化・荒れ。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 111	縄文土器 深鉢	埋没土 底部1/4	底	(6)		A4	粗製深鉢土器。底外面にやや大柄な網代痕。外面砂粒の移動痕を残す削り状の縦位磨きで、内面横位磨き。外面煤状炭化物付着。内外面共に被熱風化・一部に煤状炭化物付着。102と同一個体か。	堀之内2式～ 加曾利B2式
第82図 PL.98	A区遺構外 112	縄文土器 浅鉢	埋没土 口縁部～体部 1/5	口	(24)		A11	口唇端部が短く外折し、その直下に横線文を施す。外面撫で痕を残す粗い横位磨き、内面横位磨き。内外面共に燻べ焼きで黒色を呈する。	晩期後半

中・近世、平安時代、縄文時代石器・石製品遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
第83図 PL.99	B区1坑 S1	丸柄	+18cm ほぼ完形	長	2.3 3.7	厚	0.7 13.2	正珪岩?	表面と側面は丁寧に研磨整形されており光沢がある。裏面側2ヶ所に潜り穴が認められる。
第83図 PL.99	B区1坑 S2	石臼(上)	+19cm 1/8	長	(10.8) (17.2)	厚	(8.6) 1341.9	粗粒輝石安山岩	底面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が明瞭に認められる。側面に円形の挽き手孔が認められる。挽き手孔の底部は矩形である。
第83図 PL.99	B区1坑 S3	石臼(下)	-78cm 1/2	径	(29.0)	厚	11.2 5232.3	粗粒輝石安山岩	表面のすり合わせ面には挽き目の痕跡が比較的明瞭に認められる。軸孔は中央付近がわずかに狭くなっており両面穿孔と考えられる。軸孔の内面には棒状の工具痕が認められる。底面には棒状あるいは平ノミ状の工具痕がわずかに認められる。
第83図 PL.99	B区173ピ S1	石製品	埋没土 完形	長	9.2 11.3	厚	7.7 419.3	粗粒輝石安山岩	表面には漏斗状の孔が認められ内面は滑らかである。外面は全体的に比較的滑らかであり研磨整形されていると考えられる。
第84図 PL.99	B区1面 西側高台 S1	宝塔	+2cm ほぼ完形	長	29.8 11.5	厚	11.4 3798.6	粗粒輝石安山岩	相輪部。先端の宝珠は部分欠損し形態は不明である。宝輪には段構成は認められず中央にわずかな膨らみをもつ平坦面である。全体的に風化等により表面の残存状態は悪い。
第84図 PL.99	B区1面 西側高台 S2	空風輪	+14cm 完形	長	20.6 12.2	厚	11.7 2676.9	粗粒輝石安山岩	成形は均質、表面は丁寧な整形を施す。先端には突出部が認められる。側面のくびれ部は明瞭であり、平ノミ状あるいは棒状の工具痕がわずかに認められる。底面に突起が認められる。
第84図 PL.99	B区1面 西側高台 S3	空風輪	+9cm 完形	長	19.7 13.1	厚	13.3 3314.1	粗粒輝石安山岩	成形は均質、表面は丁寧な整形を施す。先端には突出部が認められる。側面のくびれ部は明瞭であり、平ノミ状あるいは棒状の工具痕がわずかに認められる。底面に突起が認められる。
第84図 PL.99	B区1面 西側高台 S4	空風輪	+9cm ほぼ完形	長	(20.4) 11.5	厚	11.0 1793.3	粗粒輝石安山岩	成形は均質、表面は丁寧な整形を施す。先端には突出部が認められる。側面のくびれ部は明瞭であり、平ノミ状あるいは棒状の工具痕がわずかに認められる。底面に突起が認められる。
第84図 PL.99	B区1面 西側高台 S5	火輪	-3cm ほぼ完形	長	16.5 16.5	厚	9.3 3349.3	粗粒輝石安山岩	丁寧な成整形。上面に円形の孔があり底部に棒状の工具痕が認められる。隅棟の反りはわずかに認められ、屋だるみはわずかに認められる。軒の上辺と下辺はほぼ平行しわずかに曲線である。
第85図 PL.99	B区1面 西側高台 S6	水輪	+9cm ほぼ完形	長	24.8 25.0	厚	12.7 4173.4	粗粒輝石安山岩	側面の膨らみは中央からわずかに上方にピークがあり稜を形成する。側面は全体的に滑らかであり、断面V字状の「T」の線刻が1カ所認められる。上面と底面の加工は比較的粗く中央が窪んだ形態である。

遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				長 幅	厚 重	厚 重	厚 重			
第85図 PL.99	B区1面 西側高台 S7	水輪	+2cm 完形	長 幅	16.7 17.0	厚 重	9.2 3689.7	溶結凝灰岩	側面の膨らみは中央からわずかに上方にピークがありわずかに稜を形成する。側面は全体的に滑らかである。上下面はほぼ平坦であり、共に棒状の工具痕が明瞭に認められる。	
第85図 PL.99	B区1面 西側高台 S8	地輪	+13cm 完形	長 幅	20.0 20.0	厚 重	14.6 6150.0	粗粒輝石安山岩	全体的に丁寧に加工作形される。上面は中央がわずかに膨らんだ形態であり平ノミ状あるいは棒状の工具痕がわずかに残る。側面にも平ノミ状あるいは棒状の工具痕がわずかに残る。側面には断面V字状の「T」の線刻が1か所認められる。底面の加工は比較的粗く中央が窪む。	
第85図 PL.99	B区1面 西側高台 S9	地輪	+10cm 完形	長 幅	18.7 18.7	厚 重	11.0 6700.0	粗粒輝石安山岩	全体的に丁寧に加工作形する。上面は中央がわずかに膨らんだ形態であり棒状の工具痕がわずかに残る。側面にも棒状の工具痕がわずかに残る。底面の加工は比較的粗く棒状の工具痕が明瞭に残る。	
第86図 PL.100	B区1面 S1	磨石	埋没土 完形	長 幅	7.2 6.4	厚 重	4.9 256.0	粗粒輝石安山岩	表面の上方と裏面のほぼ全面に磨面が認められる。上端部には敲打痕が集中する。	
第86図 PL.100	B区1面 S2	磨石	埋没土 完形	長 幅	7.5 5.6	厚 重	4.5 287.8	粗粒輝石安山岩	表面の全面と裏面の中央付近に磨面が認められる。表面のほぼ全面が黒～灰色変化している。	
第86図 PL.100	B区1面 S3	磨石	埋没土 完形	長 幅	13.8 12.1	厚 重	5.5 1193.5	粗粒輝石安山岩	表裏面のほぼ全面に磨面が認められる。表面のほぼ全面が黒～灰色変化している。左側面の中央から下方にかけては表面の剥落が認められ敲打による可能性がある。	
第86図 PL.100	B区1面 S4	台石	埋没土 完形	長 幅	26.0 27.0	厚 重	9.2 12280.0	粗粒輝石安山岩	表面の中央にほぼ平坦で滑らかな面が認められる。表面には表層的な剥落痕が散在するが敲打によると考えられる。全体的に自然面と考えられ垂円礫を利用する。	
第86図 PL.100	B区1面 S5	火打石	埋没土 完形	長 幅	4.0 2.7	厚 重	1.4 14.1	流紋岩	明確な微細剥離痕やつぶれ痕は認められず火打石の素材と考えられる。	
第86図 PL.100	A区1面 S1	石鏃	掘方+7cm 完形	長 幅	1.4 1.2	厚 重	0.3 0.3	黒曜石	表裏面全体に面的な二次加工が認められる。	凹基無茎鏃
第86図 PL.100	A区遺構外 S2	打製石斧	黒色土中 完形	長 幅	21.2 7.5	厚 重	3.0 482.1	粗粒輝石安山岩	表面の中央に素材剥片の主要剥離面を大きく残す。裏面には自然面を大きく残し大形円礫を利用する。左右両側面は両面加工であるが先端刃部には二次加工が認められない。	

中・近世金属器類遺物観察表

挿 図 PL.No.	No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				縦 横	厚 重	厚 重	厚 重			
第87図 PL.100	B区7坑 M1	銭貨 永楽通寶	底 完形	縦 横	2.484 2.460	厚 重	0.144 2.8		面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背の孔と郭が若干斜めにずれる。	
第87図 PL.100	B区14坑 M1	銭貨 元祐通寶	底 一部欠損	縦 横		厚 重	0.171 1.5		面の字が劣化しており、非常にみえづらい。彫は深く、輪、郭は明瞭。背の劣化も激しい。	
第87図 PL.100	B区14坑 M2	銭貨 洪武通寶	底 完形	縦 横	2.229 2.246	厚 重	0.193 4.1		面、背ともに彫が深く明瞭。背の左側に一銭の字がある。銭の字は不明瞭。	
第87図 PL.100	B区14坑 M3	銭貨 元祐通寶	+10cm 完形	縦 横	2.518 2.486	厚 重	0.136 3.2		面の彫は深く、字、輪、郭は明瞭。背の彫は浅いが、輪、郭は明瞭。	
第87図 PL.100	B区14坑 M4	銭貨 淳化元寶	底 完形	縦 横	2.459 2.458	厚 重	0.155 2.4		全体的に劣化が見られる。字はやや見えづらく、一部の輪、郭も不明瞭。	
第87図 PL.100	B区14坑 M5	銭貨 洪武通寶	底 完形	縦 横	2.153 2.145	厚 重	0.169 2.7		全体的に劣化し、字が摩滅している。面の彫は深い字と郭は不明瞭。輪は明瞭。背は彫が浅いが輪、郭は明瞭。	
第87図 PL.100	B区17坑 M1	銭貨 元符通寶	底 完形	縦 横	2.453 2.449	厚 重	0.158 2.4		面は彫が浅いが、字、輪、郭は明瞭。背はほぼ彫が無く、不明瞭。	
第87図 PL.100	B区17坑 M2	銭貨 開元通寶	底 完形	縦 横	2.479 2.474	厚 重	0.145 2.9		面、背ともに彫が深く字、輪、郭が明瞭。輪の太さが均一ではない。	
第87図 PL.100	B区17坑 M3	銭貨	底	縦 横	2.506 2.494	厚 重	0.217 5.2		2枚が癒着した状態で出土した2枚の銭貨。1枚は天禧通寶で背に2枚目の面が癒着した状態で出土してある。	
第87図 PL.100	B区17坑 M3-1	銭貨 天禧通寶	底 完形	縦 横	2.477 2.482	厚 重	0.107 2.3		面は彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背の彫は浅く、輪、郭が明瞭。癒着していた背側は若干劣化が見られる。	
第87図 PL.100	B区17坑 M3-2	銭貨 元豊通寶	底 完形	縦 横	2.466 2.458	厚 重	0.123 3.1		面の彫は深い字、字は癒着した部分が一部不明瞭。輪、郭は明瞭。背はやや彫が浅いが、輪、郭が明瞭。	

遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				縦 横	2.479 2.479	厚 重	0.117 2.6			
第87図 PL.101	B区1面 西側高台 M1	銭貨 熙寧元寶	-6cm 完形	縦 横	2.479 2.479	厚 重	0.117 2.6	面の彫が深く、字、輪、郭は明瞭。「熙」の字の横に凸部がある。背は彫がほぼなく郭が見えず、輪は明瞭。		
第87図 PL.101	B区1面 西側高台 M2	銭貨 紹聖元寶	-8cm 完形	縦 横	2.379 2.401	厚 重	0.132 2.4	面の字、輪、郭が明瞭。背は彫が浅いが、輪、郭は明瞭。		
第87図 PL.101	B区1面 西側高台 M3	銭貨 淳化元寶	-8cm 完形	縦 横	2.417 2.401	厚 重	0.117 2.6	面の彫が深く、字、輪、郭は明瞭。背の輪、郭も明瞭。		
第87図 PL.101	B区1面 西側高台 M4	銭貨 洪武通寶	-2cm ほぼ完形	縦 横	2.368 2.352	厚 重	0.155 1.6	輪の一部が欠ける。面の彫は深く、字、輪、郭が明瞭。背がやや中心に向かって盛り上がる。彫は深く、輪、郭が明瞭。		
第87図 PL.101	B区1面 西側高台 M5	銭貨 永樂通寶	-3cm 一部欠損	縦 横		厚 重	0.169 1.5	面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。		
第87図 PL.101	B区遺構外 M6	銭貨 銭種不明	埋没土	縦 横		厚 重	0.428 2.8	全体が錆で覆われており、詳細は不明。非常にもろくなっている。		
第88図	B区遺構外 M7	銭貨	埋没土	縦 横	2.335 2.401	厚 重	0.291 5.5	面同士が癒着した状態で出土した銭貨。2枚が癒着している。		
第88図 PL.101	B区遺構外 M7-1	銭貨 永樂通寶	埋没土 ほぼ完形	縦 横	2.474 2.481	厚 重	0.156 2.9	輪の一部が欠ける。面の彫が深く字、輪、郭は明瞭。背の輪、郭は明瞭。劣化による欠けが見られる。		
第88図 PL.101	B区遺構外 M7-2	銭貨 政和通寶	埋没土 ほぼ完形	縦 横	2.395 2.413	厚 重	0.142 2.6	面の彫は浅く、やや字、輪、郭が見えづらい。背は輪、郭が明瞭。全体的に劣化が見られる。		
第88図 PL.101	B区1面 西側高台 M8	銭貨 新寛永	-8cm 完形	縦 横	2.345 2.330	厚 重	0.135 2.5	面の彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背の輪、郭も明瞭。		
第88図 PL.101	B区遺構外 M9	銭貨 新寛永	-2cm 一部欠損	縦 横		厚 重	0.138 0.9	全体に劣化しており、字、輪、郭は見えづらい。背はより不明瞭。		
第88図 PL.101	B区遺構外 M10	銭貨 新寛永	埋没土	縦 横	2.201 2.200	厚 重	0.088 1.5	背元。面、背ともに字、輪、郭は明瞭。郭、字が細い。	御堂跡	
第88図 PL.101	B区遺構外 M11	銭貨 新寛永	埋没土 完形	縦 横	2.442 2.442	厚 重	0.121 2.6	面、背ともに彫が深く、字、輪、郭が明瞭。背に右上から左下に向けた細かな傷が見られる。		
第88図 PL.101	B区29ピ F1	銅製品 切羽	底 一部欠損	長 幅	3.950 2.250	厚 重	0.388 2.0	全体に劣化が見られ、一部剥離している。内部も粉状の劣化が見られる。		
第88図 PL.101	A区遺構外 F1	鉛 鉛球	埋没土 完形	縦 横	13.1 13.1	厚 重	11.9 9.7	正円では無く、楕円形になる。一部、つなぎ目らしき痕跡が見られるが、全体では判別困難。		
第88図 PL.101	B区遺構外 F2	鉄製品 刀子	埋没土 一部欠損	長 幅	15.00 2.50	厚 重	0.604 36.1	全体に劣化が見られ、剥離する。また、粉状に劣化している部分も見られる。劣化により詳細は不明。	御堂跡	
第88図 PL.101	B区遺構外 F3	銅製品 鏡	埋没土 1/4	縦 横		厚 重	0.179 5.2	2点の穴が開けられ、その部分から破損した可能性がある。ねじ切れるように破損。ゆがみが見られる。	御堂跡	

縄文・弥生土器の胎土分類

分類	特 徴	備 考
A 類	A1 少量の円磨度の進んだ珪質乳白色・黒色岩片や長石・角閃石・石英・灰白色岩片の粗・細砂と微量の雲母細砂を含む緻密な胎土。	主として雲母を含有するグループ
	A2 少量の円磨度の進んだ珪質乳白色・赤色・黒色岩片の礫・粗砂や雲母・長石・輝石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	A3 少量の長石・角閃石や円磨度の進んだ赤色岩片と微量の雲母の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	A4 中量の長石や少量の円磨度の進んだ石英・角閃石および灰白色・赤色・黒色岩片と微量の雲母の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	A5 中量の長石や円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片、長石・石英と微量の雲母・角閃石の粗・細砂および少量の珪質乳白色岩片礫・粗砂を含むやや緻密な胎土。	
	A6 中量の長石や円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の珪質乳白色・赤色・黒色岩片、長石・石英および微量の雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A7 中量の円磨度の進んだ石英礫・粗砂や長石の粗・細砂と少量の雲母・角閃石・赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A8 中量の円磨度の進んだ長石・角閃石・赤色岩片や少量の灰白色・黒色岩片および微量の雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A9 中量の円磨度の進んだ長石・輝石・角閃石や少量の灰白色・赤色岩片と石英および微量の雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A10 中量の円磨度の進んだ長石や少量の雲母・灰白色岩片・輝石・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A11 中量の長石や円磨度の進んだ石英・灰白色岩片と少量の雲母・赤色岩片・角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A12 中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂と長石や少量の珪質乳白色岩片・輝石・角閃石・石英および微量の雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A13 多量の長石や中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色・黒色岩片、輝石と少量の角閃石・石英および微量の雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A14 多量の長石や中量の角閃石と少量の円磨度の進んだ珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片、石英および微量の雲母の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A15 多量の円磨度の進んだ長石・石英や中量の雲母と少量の角閃石および微量の灰白色・赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A16 多量の円磨度の進んだ長石・石英や珪質の乳白色・黒色岩片と少量の雲母・赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	A17 多量の円磨度の進んだ長石礫・粗砂と中量の石英・珪質乳白色岩片・雲母や微量の赤色岩片の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	
	A18 多量の長石や中量の円磨度の進んだ石英・雲母・角閃石と微量の灰白色・赤色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
B 類	B1 少量の円磨度の進んだ結晶片岩・輝石・長石・角閃石や珪質の黒色・乳白色岩片と灰白色・赤色岩片および微量の雲母の粗・細砂を含む緻密な胎土。	主として結晶片岩を含有するグループ
	B2 少量の円磨度の進んだ結晶片岩の礫・粗砂と多量の黒色岩片・中量の珪質乳白色岩片・少量の長石や赤色岩片の粗・細砂および多量の雲母細砂を含む緻密な胎土。	
	B3 少量の円磨度の進んだ結晶片岩・石英や珪質乳白色・灰白色岩片の礫・粗砂と中量の輝石・角閃石および少量の長石・赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	B4 中量の円磨度の進んだ結晶片岩・灰白色岩片の礫・粗砂や長石・輝石・石英の粗・細砂および雲母細砂を含むやや緻密な胎土。	
	B5 中量の円磨度の進んだ結晶片岩や珪質の黒色・乳白色岩片の礫・粗砂と少量の灰白色・赤色岩片、輝石・角閃石の粗・細砂および雲母細砂を含む緻密な胎土。	
	B6 多量の円磨度の進んだ結晶片岩や珪質の黒色・乳白色岩片と少量の長石・輝石・灰白色岩片の砂粗・細砂および中量の雲母細砂を含むやや緻密な胎土。	
	B7 多量の円磨度の進んだ結晶片岩や少量の珪質の黒色・乳白色岩片の礫・粗砂と中量の長石および少量の雲母・灰白色岩片・輝石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	B8 多量の円磨度の進んだ結晶片岩や少量の珪質の黒色・乳白色岩片の礫・粗砂と多量の雲母、中量の長石および少量の輝石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	B9 多量の円磨度の進んだ結晶片岩礫・粗砂や珪質の黒色・乳白色岩片と多量の雲母細砂および少量の赤色岩片粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
C 類	C1 中量の円磨度の進んだ輝石や少量の灰白色岩片・長石・石英・角閃石の粗・細砂を含む緻密な胎土。	輝石や角閃石を主体として灰白色・珪質乳白色岩片・長石・石英等を含有するグループ
	C2 多量の円磨度の進んだ輝石粗・細砂や灰白色岩片礫・粗砂と中量の珪質の黒色・乳白色岩片および少量の赤色岩片・長石・石英・角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	C3 多量の角閃石や円磨度の進んだ灰白色岩片と珪質乳白色・黒色岩片および少量の長石・石英・赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
D 類	D1 少量の円磨度の進んだ珪質乳白色・赤色・灰白色・黒色岩片や輝石・長石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	主として珪質乳白色・灰白色・赤色岩片を含有するグループ
	D2 少量の円磨度の進んだ珪質乳白色・赤色・黒色岩片や灰白色岩片・輝石・長石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	D3 少量の円磨度の進んだ赤色・灰白色岩片や輝石・角閃石・長石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	D4 少量の円磨度の進んだ赤色岩片礫・粗砂と珪質乳白色・灰白色岩片や長石・石英・輝石・チャートの粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	D5 少量の円磨度の進んだ赤色・珪質乳白色・灰白色岩片や石英の礫・粗砂と角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D6 少量の円磨度の進んだ灰白色・黒色岩片の礫・粗砂と赤色岩片・長石・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D7 少量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂や赤色岩片・長石・輝石・角閃石の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	D8 少量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂や輝石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	D9 中量の円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の珪質乳白色・赤色・黒色岩片や長石・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	

縄文・弥生土器の胎土分

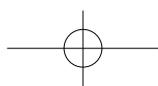
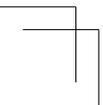
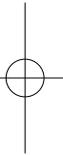
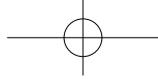
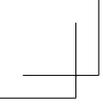
D 類	D10	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片や角閃石と少量の赤色・黒色岩片および長石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	主として珪質乳白色・灰白色・赤色岩片を含有するグループ
	D11	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片や少量の珪質乳白色・赤色・黒色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D12	中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色・黒色・珪質乳白色岩片や少量の長石・石英と微量の輝石・角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D13	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂と少量の珪質乳白色岩片や輝石・長石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	D14	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片や珪質乳白色・黒色岩片の礫・粗砂と中量の長石・輝石および少量の赤色岩片・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D15	中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂と中量の輝石や少量の珪質乳白色・黒色岩片および長石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D16	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂と中量の角閃石や少量の赤色・黒色・珪質乳白色岩片および長石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D17	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂や黒色岩片・長石・輝石と少量の赤色・珪質乳白色岩片および角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D18	中量の円磨度の進んだ珪質乳白色・灰白色岩片の礫・粗砂や輝石粗・細砂と少量の赤色・黒色岩片および長石・角閃石の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	D19	中量の円磨度の進んだ赤色・黒色岩片の礫・粗砂や少量の灰白色岩片・長石・輝石・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D20	中量の円磨度の進んだ黒色・赤色・灰白色岩片の礫・粗砂と少量の長石・輝石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D21	多量の円磨度の進んだ灰白色岩片や少量の石英の礫・粗砂と中量の珪質乳白色・黒色・赤色岩片・長石・輝石および少量の角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D22	多量の円磨度の進んだ灰白色岩片礫・粗砂と少量の赤色岩片・長石・輝石・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D23	多量の円磨度の進んだ赤色岩片や中量の灰白色・黒色岩片および少量の珪質乳白色岩片の礫・粗砂と少量の輝石・長石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D24	多量の円磨度の進んだ灰白色岩片や中量の石英・赤色岩片の礫・粗砂と中量の長石および少量の輝石・角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D25	多量の円磨度の進んだ灰白色岩片や中量の珪質乳白色・赤色岩片と長石・輝石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	D26	多量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片や中量の長石の礫・粗砂と少量の黒色岩片・輝石・角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D27	多量の円磨度の進んだ珪質乳白色・灰白色岩片や中量の赤色・黒色岩片・長石と少量の輝石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	D28	多量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂と少量の黒色岩片・輝石・長石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
D29	多量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂と中量の長石や少量の石英・輝石・角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。		
E 類	E1	中量の長石と少量の円磨度の進んだ石英・輝石・珪質乳白色・赤色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。	主として長石を含有するグループ
	E2	中量の長石と少量の円磨度の進んだ珪質乳白色・赤色・黒色岩片および灰白色岩片・石英・輝石・角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E3	中量の円磨度の進んだ長石・輝石や少量の赤色・灰白色岩片と石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E4	中量の円磨度の進んだ長石・輝石・赤色岩片や少量の灰白色岩片・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E5	中量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂や長石・輝石の粗・細砂と少量の赤色岩片・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E6	中量の長石や円磨度の進んだ珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片と少量の角閃石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	E7	中量の長石や円磨度の進んだ珪質乳白色・灰白色岩片と少量の輝石・角閃石・石英の粗・細砂および少量の珪質黒色岩片礫・粗砂を含む緻密な胎土。	
	E8	中量の長石や円磨度の進んだ灰白色岩片・輝石と少量の珪質乳白色・赤色岩片および角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。	
	E9	中量の長石や円磨度の進んだ灰白色岩片と少量の赤色岩片・輝石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	
	E10	中量の長石・角閃石や少量の珪質乳白色・赤色・黒色岩片と輝石・石英の粗・細砂および少量の灰白色岩片礫・粗砂を含むやや緻密な胎土。	
E11	多量の円磨度の進んだ灰白色岩片と中量の長石や少量の黒色岩片・角閃石・石英の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。		
E12	多量の長石や中量の円磨度の進んだ石英・輝石と少量の珪質乳白色・灰白色・赤色・黒色岩片の粗・細砂を含む緻密な胎土。		
E13	多量の長石や中量の円磨度の進んだ灰白色・赤色・黒色岩片と角閃石および少量の珪質乳白色岩片・輝石の粗・細砂を含む緻密な胎土。		
E14	多量の長石や中量の円磨度の進んだ赤色岩片と角閃石および少量の灰白色・黒色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。		
E15	多量の長石や少量の角閃石の粗・細砂と少量の円磨度の進んだ灰白色・赤色岩片の礫・粗砂を含むやや粗雑な胎土。		
E16	多量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂や長石粗・細砂と少量の黒色・赤色岩片および角閃石の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。		
E17	多量の円磨度の進んだ石英の礫・粗砂や長石・灰白色岩片の粗・細砂と少量の角閃石および赤色・黒色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。		
E18	多量の円磨度の進んだ灰白色岩片の礫・粗砂や長石・角閃石の粗・細砂と少量の赤色岩片の粗・細砂を含むやや緻密な胎土。		
F 類	F1	中量の長石や円磨度の進んだ珪質乳白色・赤色・黒色岩片と少量の軽石・角閃石・石英の粗・細砂を含む緻密な胎土。	主として軽石を含有するグループ
	F2	多量の円磨度の進んだ灰白色岩片や中量の軽石・珪質乳白色岩片の礫・粗砂と少量の角閃石・石英の粗・細砂を含むやや粗雑な胎土。	

凡例

※各分類はルーベ等を使用した肉眼観察による相対的なものである。

※夾雑物の粒径分類については「新版 標準土色帳」の「土壌調査用チャート」に準拠した。

写真図版





1 A区1面調査区全景(東から)



2 A区2面全景(東から)

PL.2



1 A区1面水田調査風景(南東から)



2 A区1面水田調査風景(東から)



3 A区1面水田調査風景転礫岩確認状況(西から)



4 A区1面水田調査風景(北西から)



5 A区1面2号水田耕作土下断面(西から)



1 A区1面1～3号水田全景(南東から)



2 A区1面2号水田全景(南東から)



3 A区1面2号水田、4号石垣、3号畦畔(南東から)



4 A区1面2号水田、4・5号石垣断面(西から)



5 A区1面2号水田、4・5号石垣断面(北西から)

PL.4



1 A区1面3号水田、6号畦畔(南東から)



2 A区1面2・3号水田、4号石垣(南東から)



3 A区1面3号水田降雨後の状況(南西から)



4 A区1面2・3号水田降雨後の状況(西から)



5 A区1面4号水田全景(東から)



6 A区1面4号水田全景(南東から)



7 A区1面4号水田全景(北から)



8 A区1面2号水田試料採取地点(西から)



1 A区1面2号水田試料採取状況(西から)



2 A区1面2号水田試料採取状況(西から)



3 A区1面1号畦畔(南西から)



4 A区1面1・2号畦畔(南から)



5 A区1面1・2号畦畔(南東から)



6 A区1面1・2号畦畔D—D'断面(南から)



7 A区1面1・2号畦畔D—D'断面(南から)



8 A区1面1・2号畦畔D—D'断面部分(南から)

PL.6



1 A区1面3号畦畔(南西から)



2 A区1面4号畦畔(南から)



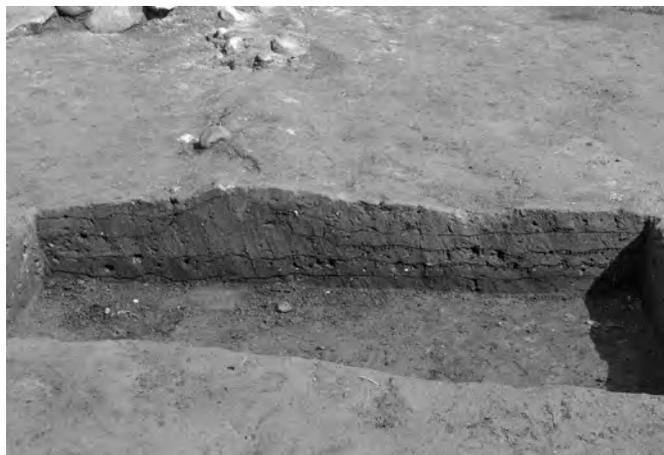
3 A区1面4号畦畔水口(南東から)



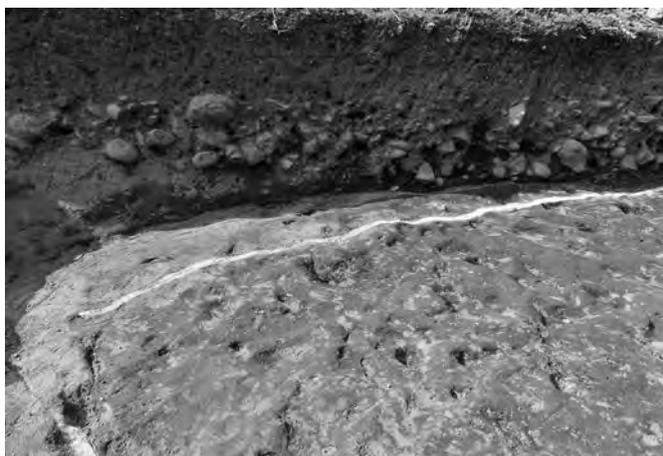
4 A区1面4号畦畔水口部分(東から)



5 A区1面4号畦畔北半部分(南東から)



6 A区1面4号畦畔E—E'断面(南から)



7 A区1面5号畦畔(南から)



8 A区1面5号畦畔北東部(南から)



1 A区1面6号畦畔(南から)



2 A区1面6号畦畔、5号畦畔との交点(南西から)



3 A区1面6号畦畔F—F'断面(南西から)



4 A区1面6号畦畔F—F'断面アップ(南西から)



5 A区1面7号畦畔(南東から)



6 A区1面4号石垣芯材炭化木(南から)



7 A区1面4号石垣芯材炭化木(東から)



8 A区1面4号石垣芯材炭化木(北から)



1 A区1面4号石垣芯材炭化木(南西から)



2 A区1面4号石垣芯材炭化木部分(南西から)



3 A区1面1号畑調査風景(西から)



4 A区1面1号畑全景(南西から)



5 A区1面1号畑全景(西から)



6 A区1面1号畑A—A'断面(北東から)



7 A区1面1号畑A—A'断面部分(北東から)



8 A区1面1号畑A—A'断面部分(北東から)



1 A区1面2号畑調査風景(西から)



2 A区1面2号畑全景(東から)



3 A区1面2号畑、10号道全景(南西から)



4 A区1面2号畑部分(東から)



5 A区1面2号畑(西から)



1 A区1面3号畑全景(南から)



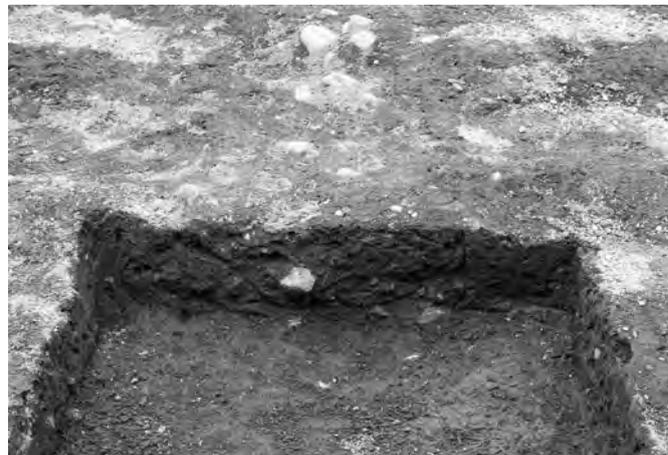
2 A区1面3号畑全景(南西から)



3 A区1面3号畑全景(南から)



4 A区1面3号畑B-B'断面(南東から)



5 A区1面3号畑C-C'断面(南東から)



1 A区1面4号畑全景(南から)



2 A区1面4号畑(南から)



3 A区1面4号畑B-B'断面(西から)



4 A区1面4号畑B-B'断面アップ(西から)



5 A区1面1号耕作地D-D'断面(西から)

PL.12



1 A区1面1号耕作地D-D'断面(西から)



2 A区1面1号耕作地D-D'断面As-A'アップ(西から)



3 A区1面調査区南西端全景(南から)



4 A区1面調査区北西端全景(南から)



5 A区1面1号復旧坑全景(南東から)



1 A区1面1号復旧坑B—B'断面(北西から)



2 A区1面1号復旧坑A—A'断面(南から)



3 A区1面1号復旧坑A—A'・B—B'断面(南から)



4 A区1面2号復旧坑調査風景(北西から)



5 A区1面2号復旧坑調査風景(北東から)



6 A区1面2号復旧坑B—B'断面(北東から)



7 A区1面2号復旧坑B—B'断面(西から)



8 A区1面2号復旧坑B—B'断面(西から)



1 A区1面2号復旧坑全景(北西から)



2 A区1面2号復旧坑全景(南から)



1 A区1面1～3号復旧坑全景(南東から)



2 A区1面3号復旧坑石検出状況(北から)



3 A区1面3号復旧坑全景(北から)



4 A区1面3号復旧坑全景(南から)



5 A区1面3号復旧坑全景(北東から)

PL.16



1 A区1面3号復旧坑全景(南西から)



2 A区1面3号復旧坑全景(北から)



3 A区1面3号復旧坑掘り方全景(北から)



4 A区1面3号復旧坑断面部分(南から)



5 A区1面3号復旧坑断面(南から)



6 A区1面4号復旧坑全景(南から)



7 A区1面4号復旧坑部分(南から)



8 A区1面4号復旧坑全景(南東から)



1 A区1面4号復旧坑断面(南から)



2 A区1面1号道、1号石垣全景(西から)



3 A区1面1号道と1号石垣全景(西から)



4 A区1面南端1号道(南西から)



5 A区1面2号道B-B'断面(東から)



6 A区1面2号道B-B'断面アップ(東から)



7 A区1面3～5号道A-A'断面(南から)



8 A区1面3～5号道A-A'断面(南から)



1 A区1面4・5号道全景(南西から)



2 A区1面6号道(北から)



3 A区1面6号道A-A'断面(南から)



4 A区1面9号道(南から)



5 A区1面9号道部分(南西から)



6 A区1面1号石垣調査風景(南西から)



7 A区1面1号石垣(北東から)



8 A区1面1号石垣(南西から)



1 A区1面1号石垣東部分(南西から)



2 A区1面1号石垣(南東から)



3 A区1面1号石垣西部分(南西から)



4 A区1面1号石垣西部分調査風景(南から)



5 A区1面1号石垣全景(南西から)



6 A区1面1号石垣全景(南西から)



7 A区1面1号石垣B-B'断面(南東から)



8 A区1面1号石垣B-B'断面(南から)



1 A区1面2号石垣全景(南東から)



2 A区1面3号石垣全景(南西から)



3 A区1面3号石垣調査風景(北東から)



4 A区1面3号石垣全景(南から)



5 A区1面4号石垣全景(南東から)



6 A区1面4号石垣部分(南から)



7 A区1面4号石垣、3号畦畔(南から)



8 A区1面4号石垣部分(南から)



1 A区1面4号石垣、1号水田B—B'断面(東から)



2 A区1面4号石垣、1号水田A—A'部分断面(西から)



3 A区1面5号石垣調査風景(南西から)



4 A区1面5号石垣(南東から)



5 A区1面5号石垣東部分(南から)



6 A区1面5号石垣断面(西から)



7 A区1面5号石垣断面(西から)



8 A区1面5・6号石垣調査風景(南から)



1 A区1.5面6号石垣全景(南から)



2 A区1.5面6号石垣C—C'断面(西から)



3 A区1.5面6号石垣全景(南から)



4 A区1.5面7号石垣全景(南から)



5 A区1.5面7号石垣E—E'断面(南西から)



6 A区1.5面7号石垣E—E'断面(西から)



7 A区1面8号石垣全景(南から)



8 A区1面8号石垣西部分(南から)



1 A区1面8号石垣中央部分(南から)



2 A区1面8号石垣中央部分アップ(南から)



3 A区1面8号石垣全景(南西から)



4 A区1面8・9号石垣全景(南から)



5 A区1面9号石垣西部分(南から)



6 A区1面1号溝全景(北西から)



7 A区1面1号溝全景(南東から)



8 A区1面2号溝西部分(西から)

PL.24



1 A区1面2号溝東部分(北東から)



2 A区1面2号畑、2号溝C—C'断面(西から)



3 A区1面2号畑、2号溝A—A'断面(西から)



4 A区1面2号溝、9号道A—A'断面(南西から)



5 A区1面3号溝西部(南東から)



6 A区1面3号溝北部(北から)



7 A区1面3号溝北部(南西から)



8 A区1面3号溝、9号石垣断面(西から)



1 A区1面3・4号溝(東から)



2 A区1面4号溝(東から)



3 A区1面4号溝(南から)



4 A区1.5面1号暗渠全景(北西から)



5 A区1.5面1号暗渠全景(南から)



6 A区1.5面1号暗渠全景(南西から)



7 A区1.5面1号暗渠南部分(北東から)



8 A区1.5面1号暗渠D—D'断面(南から)



1 A区1.5面1号暗渠D—D'断面(南から)



2 A区1.5面1・2号暗渠全景(東から)



3 A区1.5面1・2号暗渠全景(南から)



4 A区1.5面1号暗渠C—C'断面(南から)



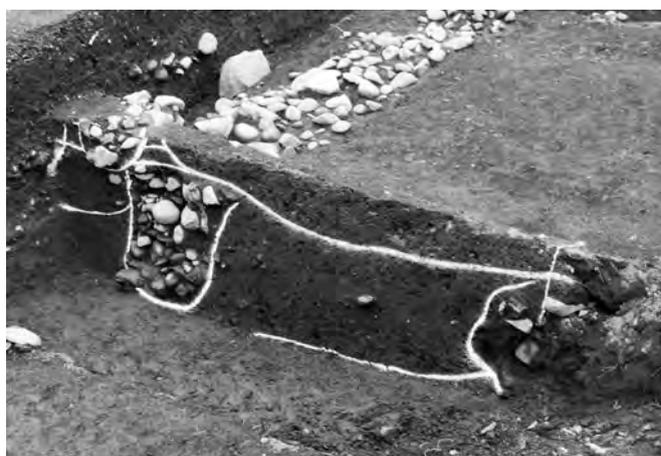
5 A区1.5面1号暗渠B—B'断面(南東から)



6 A区1.5面1号暗渠B—B'断面(南東から)



7 A区1.5面4号復旧坑、1号暗渠C—C'断面(南東から)



8 A区1.5面1号暗渠C—C'断面(南東から)



1 A区1.5面2号暗渠全景(北西から)



2 A区1.5面3号暗渠全景(北東から)



3 A区1.5面3号暗渠A—A'断面(南から)



4 A区1面1号西壁断面(北東から)



5 A区1面1号西壁断面(東から)



6 A区1面2号西壁断面(南東から)



7 A区1面3号東壁断面(西から)



8 A区1面3号東壁断面(西から)



1 A区1面3号東壁断面(西から)



2 A区1面3号東壁断面(南西から)



3 A区2面3号東壁追加断面(西から)



4 A区2面4号北壁断面(南から)



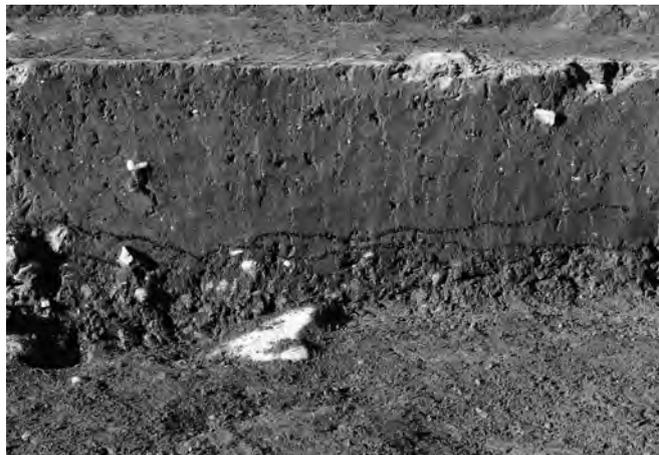
5 A区2面4号北壁断面(南から)



6 A区2面4号北壁断面(南から)



7 A区2面5号北壁断面(南から)



8 A区2面5号北壁断面(南から)



1 B区調査前全景(奥に丸岩) (北東から)



2 B区1面調査区全景(奥に丸岩) (北東から)



3 B区1面全景(奥に丸岩) (北東から)



4 B区1面調査風景(西から)



5 B区1面調査風景(北東から)



1 B区1面1・2号畑全景(西から)



2 B区1面1号畑全景(北西から)



3 B区1面1・2号畑全景(東から)



4 B区1面1・2号畑全景(東から)



5 B区1面1号畑全景(北東から)



1 B区1面1号畑全景(南東から)



2 B区1面1号畑全景(北から)



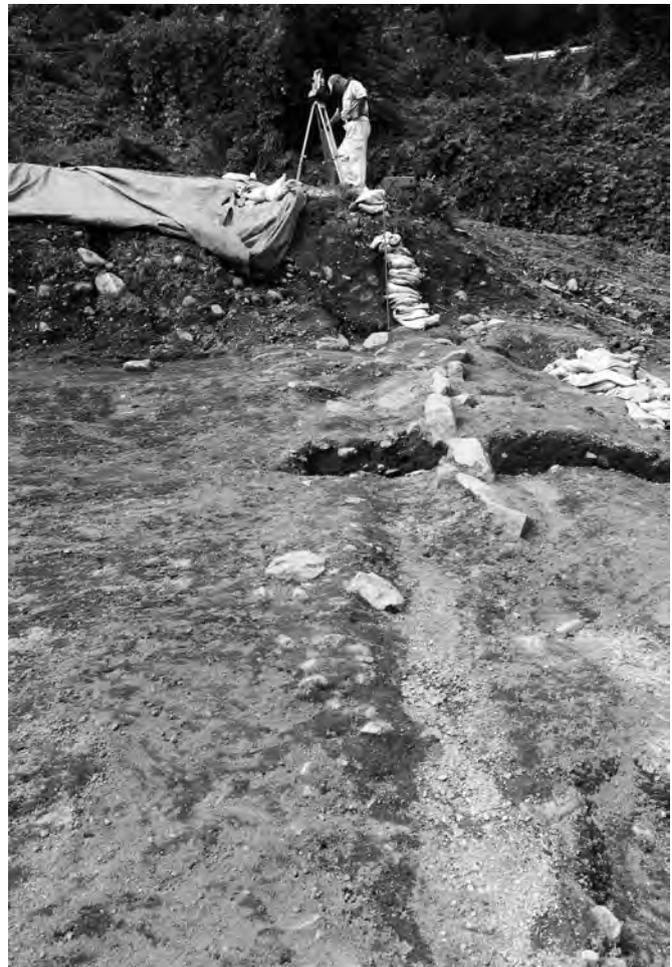
3 B区1面1号畑全景(南から)



4 B区1面1号畑全景(北から)



5 B区1面1号畑全景(北東から)



7 B区1面1号畑北東部(南から)



6 B区1面1号畑(攪乱)全景(北東から)



1 B区1面1号畑北東部A—A'断面(北西から)



2 B区1面1号畑北東部A—A'断面(南から)



3 B区1面1号畑北東部A—A'断面部分(南から)



4 B区1面1号畑西部B—B'断面(東から)



5 B区1面2号畑全景(北から)



6 B区1面2号畑全景(南から)



7 B区1面2号畑全景(北東から)



8 B区1面2号畑全景(北から)



1 B区1面2号畑全景(南東から)



2 B区1面2号畑C—C'断面(南東から)



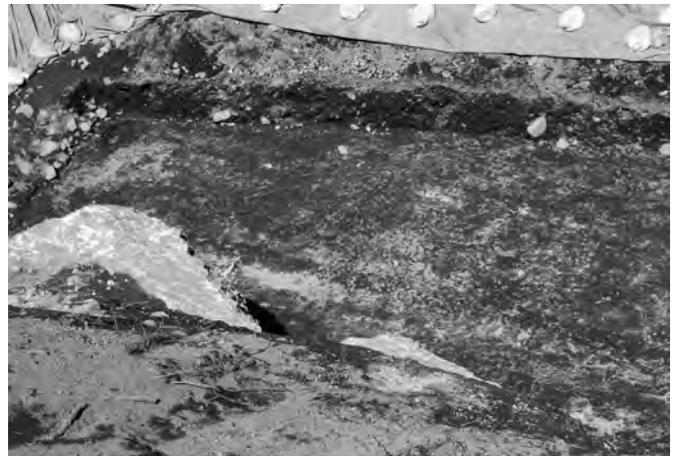
3 B区1面3号畑、3号道A—A'断面調査風景(南西から)



4 B区1面3号畑、3号道全景(南西から)



5 B区1面3号畑(西から)



6 B区1面3号畑北西部(南から)



7 B区1面3号畑、3号道A—A'断面(西から)



8 B区1面3号畑、3号道A—A'断面(南から)



1 B区1面3号畑A—A'断面(西から)



2 B区1面3号畑A—A'断面(南西から)



3 B区1面3号畑A—A'断面(西から)



4 B区1面2号道調査風景(奥に丸岩)(北東から)



5 B区1面2・3号道(北東から)



6 B区1面2号道(東から)



7 B区1面2・3号道(西から)



8 B区1面2・3号道部分(西から)



1 B区1面2号道部分(北から)



2 B区1面2号道部分(北から)



3 B区1面2号道部分(南西から)



4 B区1面3号道調査風景(西から)



5 B区1面3号道、3号畑(南東から)



6 B区1面3号道調査風景(北東から)



7 B区1面3号道(北東から)



8 B区1面高台部分石垣(北東から)

PL.36



1 B区1面高台部分石垣(西から)



2 B区1面高台部分石垣(北から)



3 B区1面高台部分石垣(奥に丸岩)(北東から)



4 B区1面高台部分石垣(東から)



5 B区1面高台部分石垣(北西から)



6 B区1面高台部分石垣(北から)



7 B区1面高台部分石垣(南東から)



8 B区1面高台部分石垣(南東から)



1 B区1面高台部分炭化物・焼土(北西から)



2 B区1面高台部分炭化物・焼土(南東から)



3 B区1面高台部分1号炭A—A'断面(北から)



4 B区1面高台部分1号炭A—A'断面(北から)



5 B区1面高台部分2号炭B—B'断面(北東から)



6 B区1面高台部分2号炭B—B'断面(北東から)



7 B区1面高台部分3号炭C—C'断面(南東から)



8 B区1面高台部分3号炭C—C'断面(東から)



1 B区1面高台部分4号炭D-D'断面(西から)



2 B区1面高台部分4号炭D-D'断面(南西から)



3 B区1面高台部分5号炭E-E'断面(西から)



4 B区1面高台部分5号炭E-E'断面(西から)



5 B区2面北東部調査風景(北東から)



6 B区2面北東部焼土検出状況(北東から)



7 B区2・3面北東部全景(南から)



8 B区1面高台部分全景(北東から)



1 B区1面高台部分全景(奥に丸岩)(北東から)



2 B区2面高台部分1号礎石建物全景(奥に丸岩)(北東から)



3 B区2・3面全景(奥に丸岩)(北東から)



4 B区2面高台部分1号礎石建物全景(北東から)



5 B区2・3面全景(北東から)



1 B区3面高台部分全景(北東から)



2 B区3面高台部分全景(北東から)



3 B区2面北東部全景(西から)



4 B区3面高台部分土坑・ピット全景(南東から)



5 B区2・3面全景(北東から)



1 B区2面高台部分1号礎石建物(北東から)



2 B区2面高台部分遺物出土状況(北東から)



3 B区2面高台部分1号礎石建物部分(北東から)



4 B区2面高台部分遺物出土状況(北東から)



5 B区2面高台部分遺物出土状況(北東から)



1 B区2面遺物出土状況(北東から)



2 B区2面遺物出土状況(北西から)



3 B区2面遺物出土状況(石列)(北西から)



4 B区2面遺物出土状況部分(北西から)



5 B区2面遺物出土状況(石列)部分(北西から)



6 B区2面遺物出土状況(石列)部分(北西から)



7 B区2面1号礎石建物S2-1~3他(北から)



8 B区2面1号礎石建物S2底部偏平礫(西から)



1 B区2面1号礎石建物内偏平礫(北東から)



2 B区2面1号礎石建物東部偏平礫(北西から)



3 B区2面1号礎石建物付近石列石手前礫(北東から)



4 B区2面1号礎石建物付近黒変礫(北東から)



5 B区2面1号礎石建物南部偏平礫(北西から)



6 B区2面1号礎石建物南部偏平角礫(北から)



7 B区2面1号礎石建物付近偏平礫(北東から)



8 B区2面1号礎石建物付近礫(北東から)



1 B区2面1号礎石建物S3-1~5(北から)



2 B区2面1号礎石建物S3の西偏平礫(西から)



3 B区2面1号礎石建物南東S6(南東から)



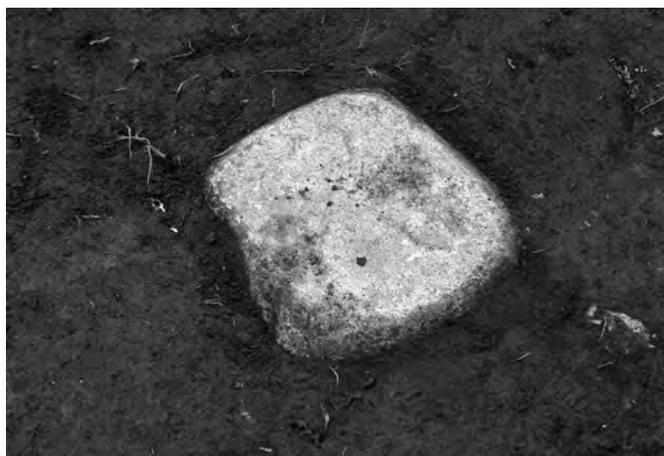
4 B区2面1号礎石建物S10(北東から)



5 B区2面1号礎石建物S11-1~9(東から)



6 B区2面1号礎石建物S11-1~9(東から)



7 B区2面1号礎石建物S13(北西から)



8 B区2面1号礎石建物S14(東から)



1 B区2面高台部分1号焼土全景(北東から)



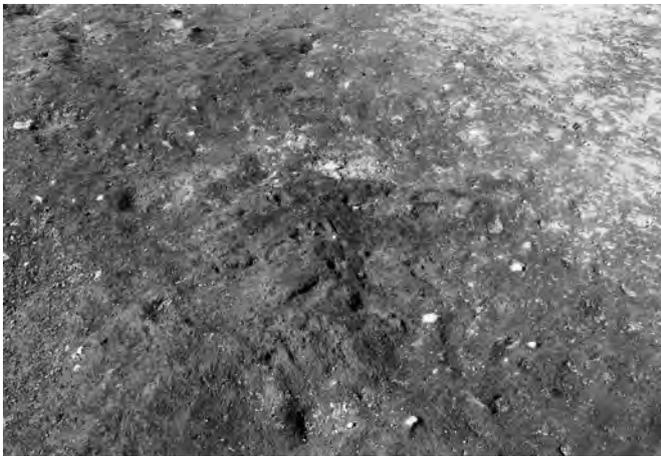
2 B区2面高台部分1号焼土全景(北から)



3 B区2面高台部分1号焼土全景(東から)



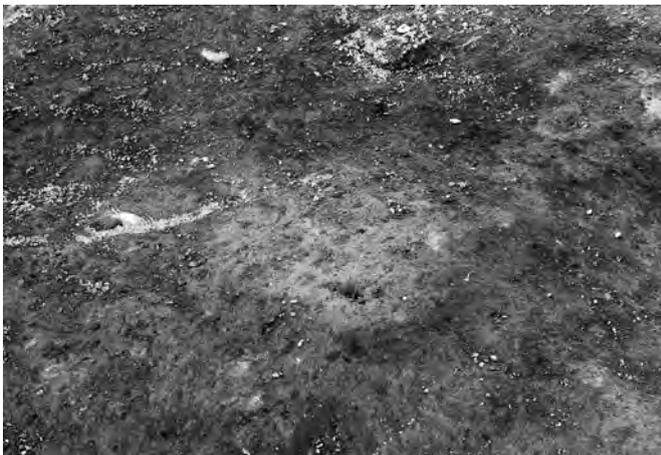
4 B区2面高台部分1号焼土A—A'断面(北から)



5 B区2面高台部分東側2号焼土確認状況(北から)



6 B区2面高台部分東側2号焼土A—A'断面(南西から)

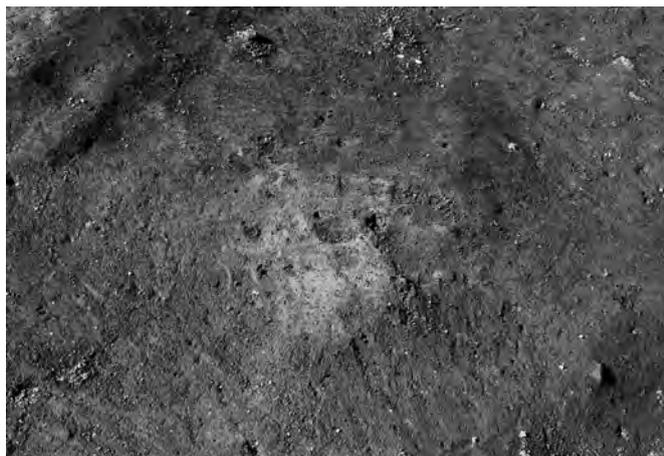


7 B区2面高台部分東側3・4号焼土確認状況(北から)



8 B区2面高台部分東側3号焼土B—B'断面(北西から)

PL.46



1 B区2面高台部分東側4号焼土確認状況(南東から)



2 B区2面高台部分東側3・4号焼土断面(東から)



3 B区2面高台部分東側4号焼土C—C'断面(東から)



4 B区2面高台部分東側5号焼土確認状況(南から)



5 B区2面高台部分東側6号焼土確認状況(南から)



6 B区2面高台部分東側5・6号焼土D—D'断面(南から)



7 B区2面高台部分東側7号焼土確認状況(南から)



8 B区2面高台部分東側7号焼土E—E'断面(南から)



1 B区東側2・3面1号土坑周辺(北東から)



2 B区東側2・3面1号土坑周辺(北東から)



3 B区東側2・3面1号土坑周辺(南から)



4 B区東側2・3面1号土坑周辺(南から)



5 B区東側2・3面土坑・ピット(南西から)



6 B区東側2・3面土坑・ピット(南西から)



7 B区東側3面15号ピット(南西から)



8 B区東側3面土坑(南西から)

PL.48



1 B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)



2 B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)



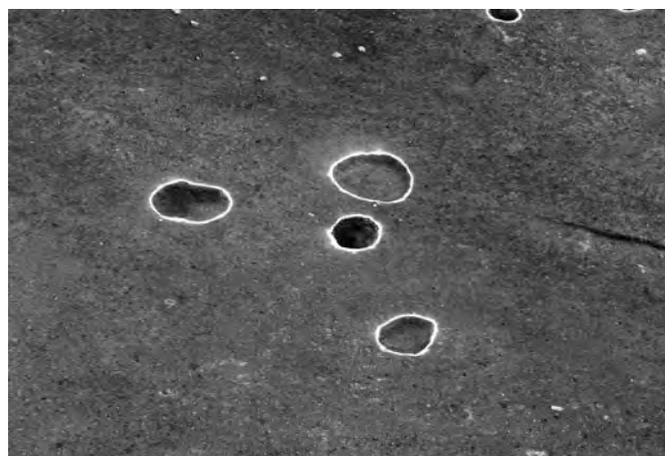
3 B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)



4 B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)



5 B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)



6 B区東側面土坑・ピット部分(南西から)



7 B区東側3面土坑・ピット部分(南西から)



8 B区東側3面土坑部分(南西から)



1 B区東側2面1号土坑周辺(西から)



2 B区東側2面1号土坑周辺(西から)



3 B区東側2面1号土坑(北西から)



4 B区東側2面1号土坑(南から)



5 B区東側2面1号土坑(東から)



6 B区東側2面1号土坑(北から)



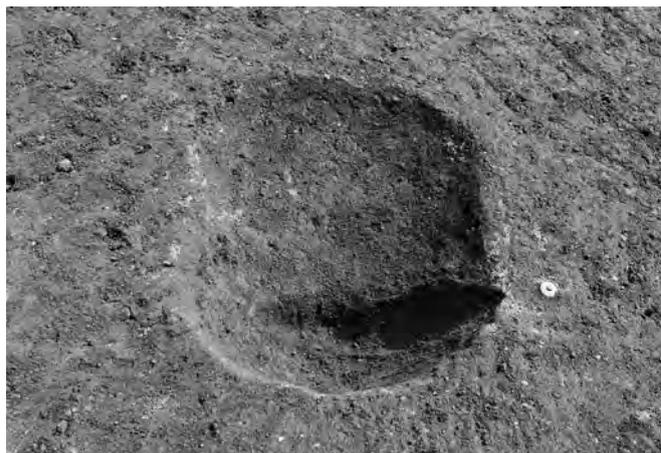
7 B区東側2面1号土坑A—A'断面(西から)



8 B区東側2面1号土坑内丸軋出土状況(南から)



1 B区東側3面2号土坑A—A'断面(北から)



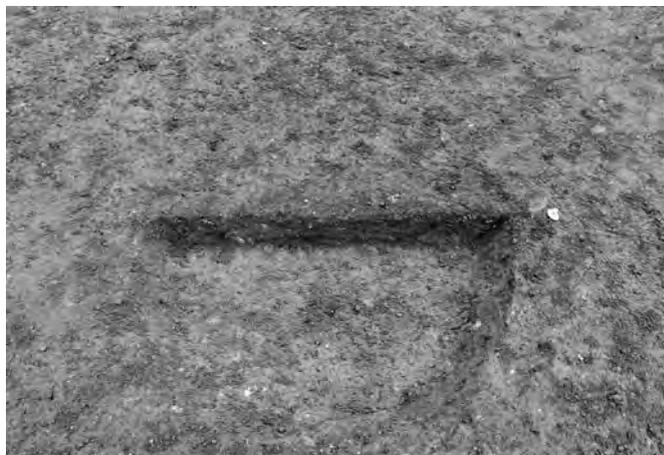
2 B区東側3面2号土坑(北から)



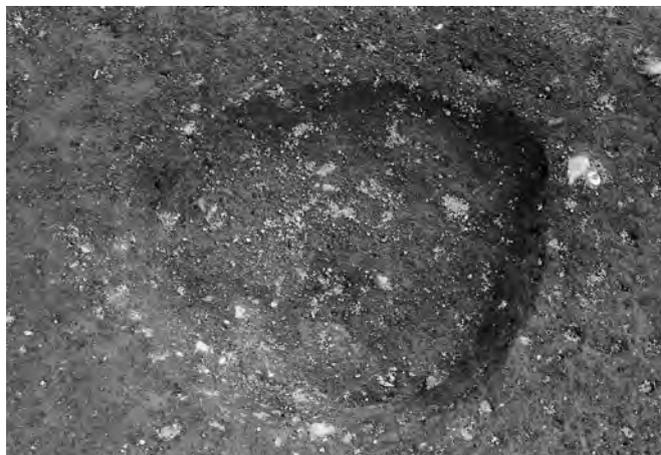
3 B区東側3面3号土坑A—A'断面(北から)



4 B区東側3面3号土坑(北から)



5 B区東側3面4号土坑A—A'断面(北から)



6 B区東側3面4号土坑(北から)



7 B区東側3面5号土坑A—A'断面(南から)



8 B区東側3面5号土坑(北から)



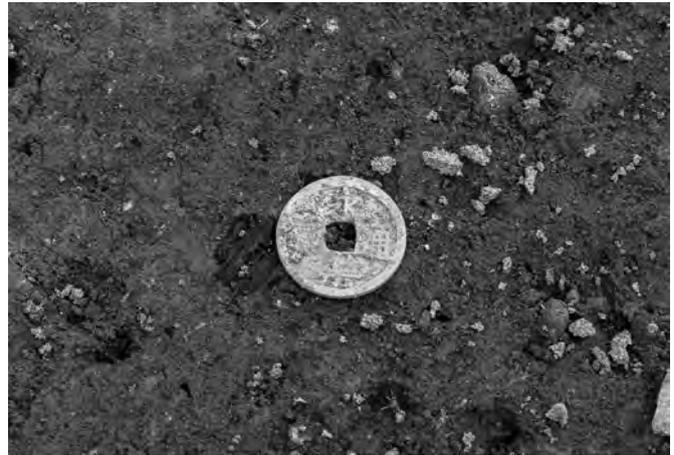
1 B区東側4面6号土坑A—A'断面(南から)



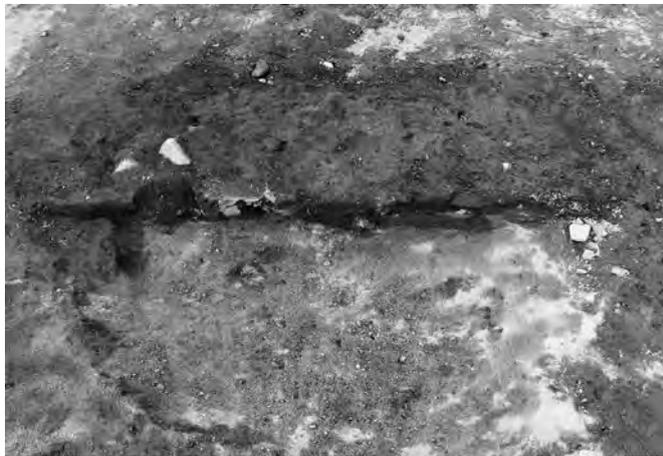
2 B区東側4面6号土坑(北から)



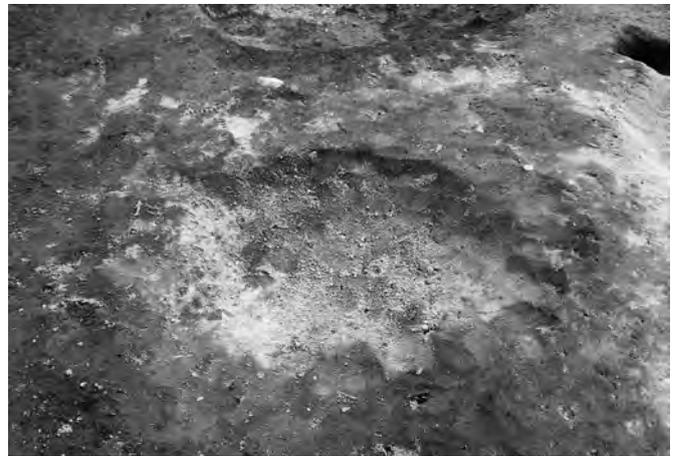
3 B区東側4面7号土坑A—A'断面(南から)



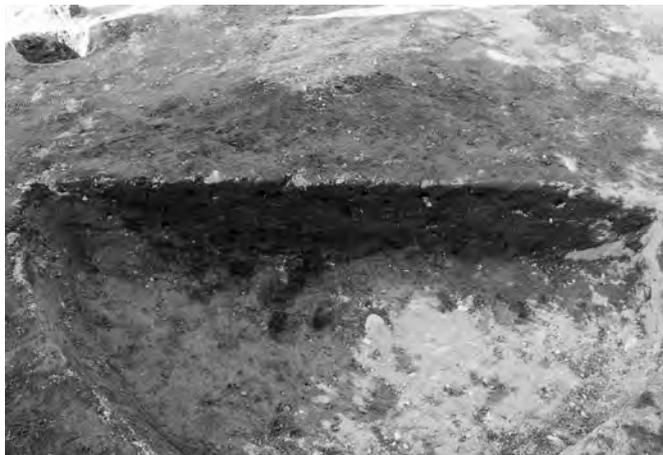
4 B区東側4面7号土坑永楽通寶出土状況(南から)



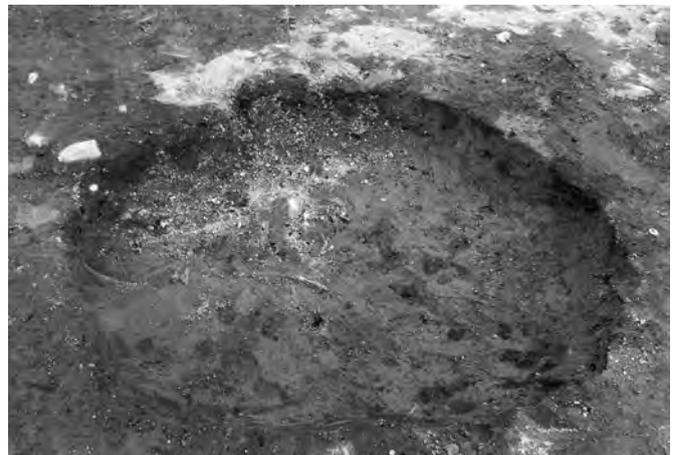
5 B区東側4面8号土坑A—A'断面(南から)



6 B区東側4面8号土坑(北から)



7 B区東側4面9号土坑A—A'断面(南から)



8 B区東側4面9号土坑(北から)



1 B区東側4面10号土坑A—A'断面(南から)



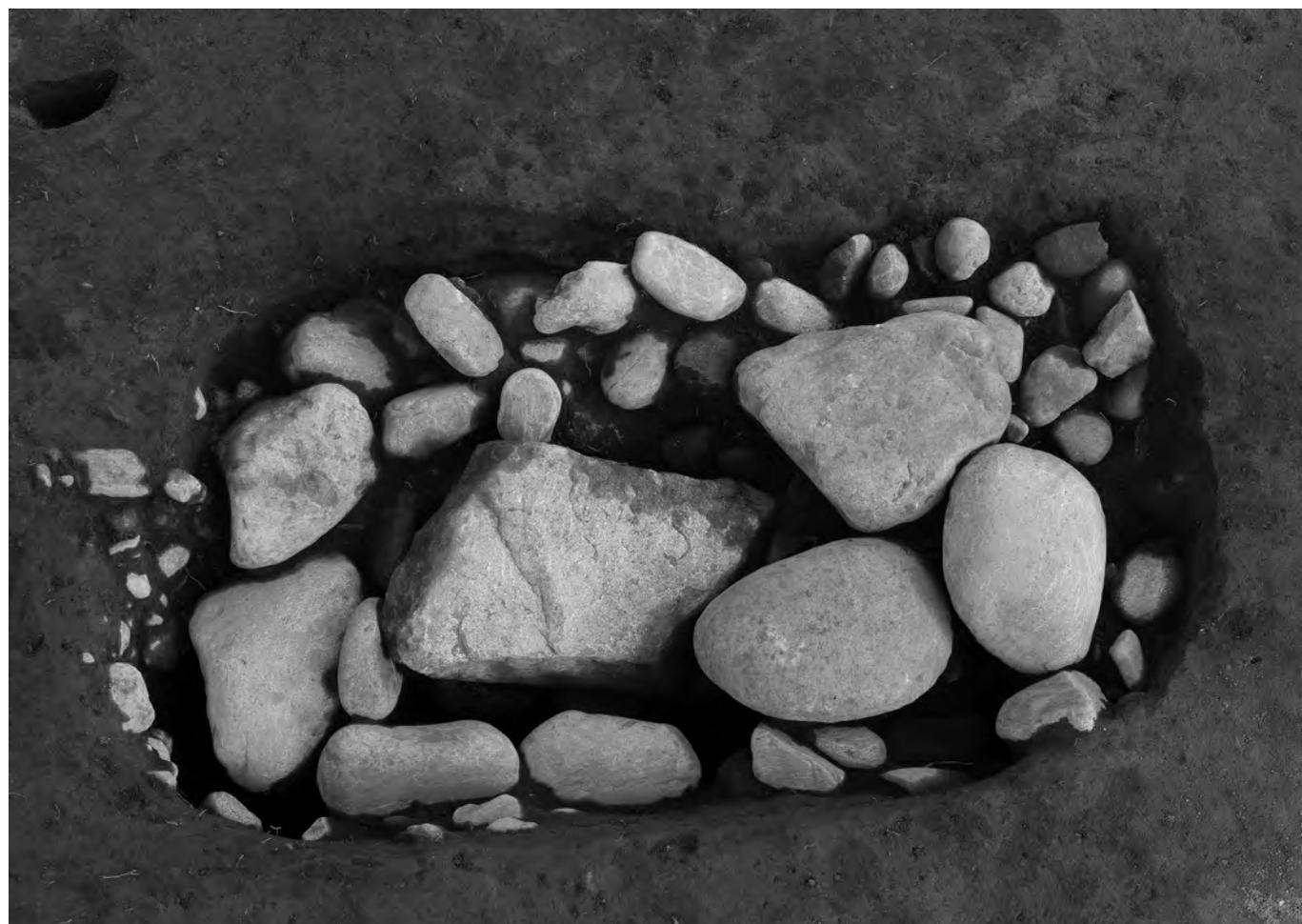
2 B区東側4面11号土坑A—A'断面(南東から)



3 B区3面高台部分12号土坑A—A'断面(北西から)



4 B区3面高台部分13号土坑遺物出土状況(北から)



5 B区3面高台部分14号土坑(墓)礫出土状態(西から)



1 B区3面高台部分14号土坑(墓)遺物出土状態(西から)



2 B区3面高台部分14~17号土坑(西から)



3 B区3面高台部分14号土坑(墓)中世古銭出土状況(西から)



4 B区3面高台部分14号土坑(墓)中世古銭出土状況(西から)



5 B区3面高台部分14号土坑(墓)中世古銭出土状況(西から)



6 B区3面高台部分14号土坑(墓)人骨出土状況(西から)



7 B区3面高台部分14号土坑(墓)頭骨出土状況(西から)



8 B区3面高台部分15号土坑A-A'断面(西から)



1 B区3面高台部分15号土坑(北から)



2 B区3面高台部分16号土坑(墓)礫出土状況(東から)



3 B区3面高台部分16号土坑(墓)礫出土状況(北西から)



4 B区3面高台部分16号土坑(墓)人骨出土状況(東から)



5 B区3面高台部分16号土坑(墓)人骨出土状況(北から)



6 B区3面高台部分16号土坑(墓)(東から)



7 B区3面高台部分17号土坑(墓)A-A'断面(西から)



8 B区3面高台部分17号土坑(墓)礫出土状況(東から)



1 B区3面高台部分17号土坑(墓)礫出土状況(西から)



2 B区3面高台部分17号土坑(墓)(東から)



3 B区3面高台部分17号土坑(墓)遺物出土状況(北から)



4 B区3面高台部分17号土坑(墓)遺物出土状況(北から)



5 B区3面高台部分17号土坑(墓)中世古銭出土状況(北から)



6 B区3面高台部分17号土坑(墓)完掘(東から)



7 B区東側3面18号土坑A—A'断面(西から)



8 B区東側3面18号土坑(北から)



1 B区東側4面19号土坑A—A'断面(西から)



2 B区東側4面1号掘立柱建物20号土坑断面(西から)



3 B区東側4面21号土坑断面(西から)



4 B区東側4面1号掘立柱建物20号土坑(北から)



5 B区東側4面21号土坑断面(東から)



6 B区東側4面21号土坑(北から)



7 B区東側4面22号土坑断面(南東から)



8 B区東側4面22号土坑完掘(東から)



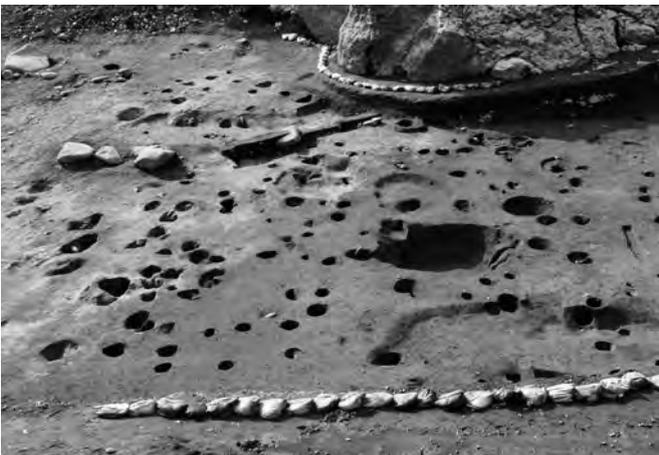
1 B区3・4面全景(南東から)



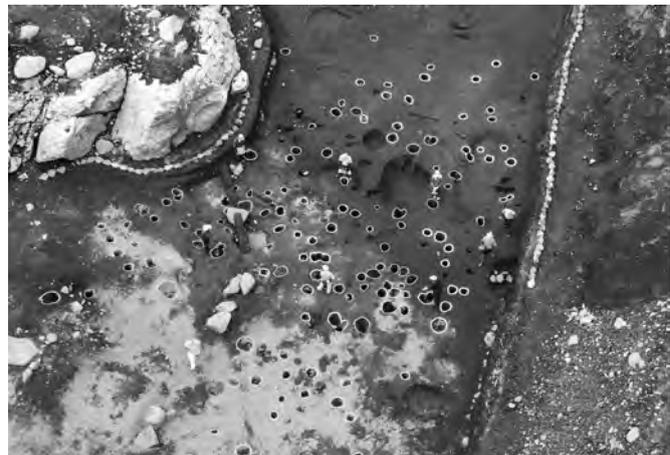
2 B区3・4面全景(南東から)



3 B区東側3・4面土坑・ピット群(南東から)



4 B区東側4面土坑・ピット群(東から)



5 B区東側4面土坑・ピット群(南東から)



1 B区3・4面土坑・ピット群、1号竪穴建物(東から)



2 B区4面土坑・ピット群、1号竪穴建物調査風景(東から)



3 B区3・4面土坑・ピット群、1号竪穴建物調査風景(北東から)



4 B区4面土坑・ピット群、1号竪穴建物(北東から)



5 B区3・4面土坑・ピット群、1号竪穴建物(北東から)



1 B区東側4面1号掘立柱建物11号ピット断面(西から)



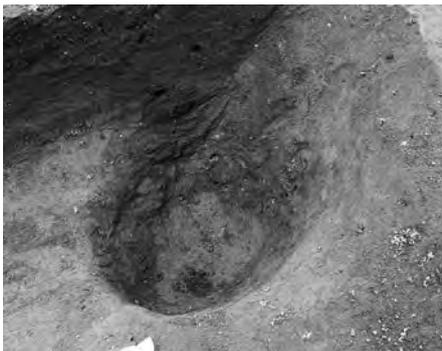
2 B区東側4面1号掘立柱建物41号ピット断面(南から)



3 B区東側4面1号掘立柱建物62号ピット断面(南から)



4 B区東側4面1号掘立柱建物73号ピット断面(南から)



5 B区東側4面1号掘立柱建物144号ピット断面(南東から)



6 B区東側4面1号掘立柱建物141号ピット断面(南から)



7 B区東側4面1号掘立柱建物142号ピット断面(南から)



8 B区東側4面1号掘立柱建物165号ピット断面(南東から)



9 B区東側4面1号掘立柱建物170号ピット断面(南東から)



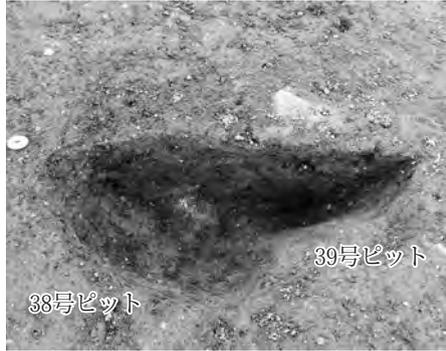
10 B区東側4面1号掘立柱建物178号ピット断面(南から)



11 B区東側4面2号掘立柱建物31号ピット断面(南から)



12 B区東側4面2号掘立柱建物34号ピット断面(南から)



13 B区東側4面2号掘立柱建物38・39号ピット断面(南から)



14 B区東側4面2号掘立柱建物40号ピット断面(南から)



15 B区東側4面2号掘立柱建物46号ピット断面(南から)

38号ピット

39号ピット

PL.60



1 B区東側4面2号掘立柱建物47号ピット断面(東から)



2 B区東側4面2号掘立柱建物49号ピット断面(南から)



3 B区東側4面2号掘立柱建物58号ピット断面(東から)



4 B区東側4面2号掘立柱建物64号ピット断面(南から)



5 B区東側4面2号掘立柱建物136号ピット断面(西から)



6 B区東側4面2号掘立柱建物166・167号ピット断面(南から)



7 B区東側4面2号掘立柱建物169号ピット断面(西から)



8 B区東側4面2号掘立柱建物174号ピット断面(南東から)



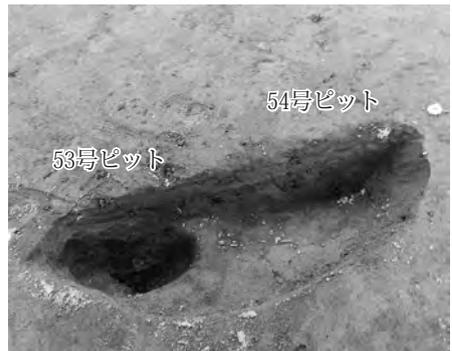
9 B区東側4面2号掘立柱建物177号ピット断面(南から)



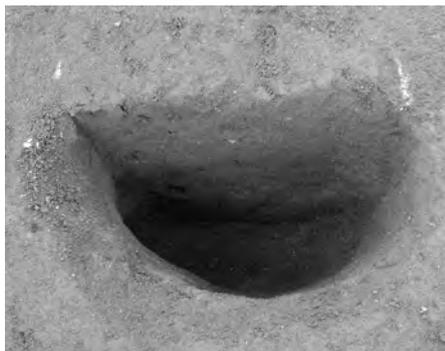
10 B区東側4面3号掘立柱建物29号ピット内切羽出土状況



11 B区東側4面3号掘立柱建物29号ピット断面(南から)



12 B区東側4面3号掘立柱建物53・54号ピット断面(南から)



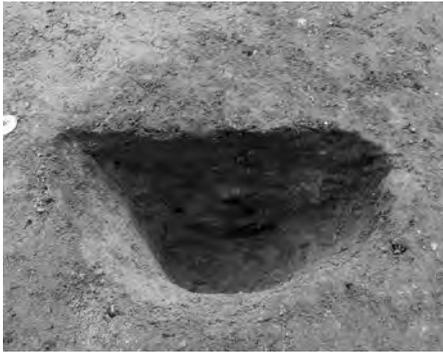
13 B区東側4面3号掘立柱建物60号ピット断面(南から)



14 B区東側4面3号掘立柱建物65号ピット断面(南から)



15 B区東側4面3号掘立柱建物69号ピット断面(南から)



1 B区東側4面3号掘立柱建物98号ピット断面(南東から)



2 B区東側4面3号掘立柱建物124号ピット断面(南から)



3 B区東側4面3号掘立柱建物128・138号ピット断面(南から)



4 B区東側4面3号掘立柱建物133号ピット断面(北西から)



5 B区東側4面3号掘立柱建物137号ピット断面(西から)



6 B区東側4面3号掘立柱建物138号ピット断面(南から)



7 B区東側4面3号掘立柱建物157号ピット断面(南から)



8 B区東側4面3号掘立柱建物160号ピット断面(南東から)



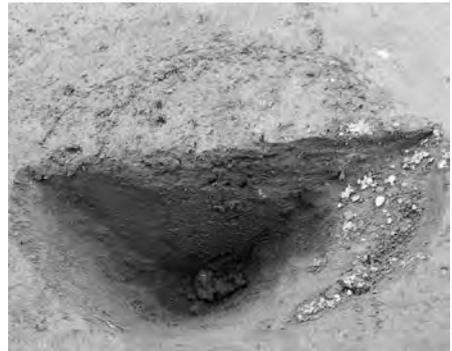
9 B区東側4面3号掘立柱建物162号ピット断面(南東から)



10 B区東側4面3号掘立柱建物168号ピット断面(西から)



11 B区東側4面3号掘立柱建物175号ピット断面(南から)



12 B区東側4面3号掘立柱建物179号ピット断面(南から)



13 B区東側4面4号掘立柱建物48号ピット断面(南から)



14 B区東側4面4号掘立柱建物51号ピット断面(南東から)



15 B区東側4面4号掘立柱建物55号ピット断面(西から)

PL.62



1 B区東側4面4号掘立柱建物56号ピット断面(西から)



2 B区東側4面4号掘立柱建物57号ピット断面(南から)



3 B区東側4面4号掘立柱建物66号ピット断面(南から)



4 B区東側4面4号掘立柱建物74号ピット断面(南から)



5 B区東側4面4号掘立柱建物74号ピット断面アップ(南から)



6 B区東側4面4号掘立柱建物76号ピット断面(南から)



7 B区東側4面4号掘立柱建物97号ピット断面(南から)



8 B区東側4面4号掘立柱建物122号ピット断面(南東から)



9 B区東側4面4号掘立柱建物123号ピット断面(北から)



10 B区東側4面4号掘立柱建物126号ピット断面(南東から)



11 B区東側4面4号掘立柱建物149号ピット断面(南から)



12 B区東側4面4号掘立柱建物156号ピット断面(南から)



13 B区東側4面4号掘立柱建物158号ピット断面(南から)



14 B区東側4面4号掘立柱建物159号ピット断面(北から)



15 B区東側4面4号掘立柱建物166号ピット断面(南から)



1 B区東側3面5号掘立柱建物1号ピット断面(南西から)



2 B区東側3面5号掘立柱建物2号ピット断面(南西から)



3 B区東側3面5号掘立柱建物3号ピット断面(南西から)



4 B区東側3面5号掘立柱建物6号ピット断面(南東から)



5 B区東側3面5号掘立柱建物7号ピット断面(南から)



6 B区東側3面5号掘立柱建物94号ピット断面(南から)



7 B区東側3面5号掘立柱建物139号ピット断面(東から)



8 B区東側3面5号掘立柱建物153・154号ピット断面(南西から)



9 B区東側4面6号掘立柱建物43号ピット断面(南から)



10 B区東側4面6号掘立柱建物50号ピット断面(北から)



11 B区東側4面6号掘立柱建物70号ピット断面(南から)



12 B区東側4面6号掘立柱建物71号ピット断面(南から)



13 B区東側4面6号掘立柱建物99号ピット断面(南から)



14 B区東側4面6号掘立柱建物125号ピット断面(南東から)



15 B区東側4面6号掘立柱建物148号ピット断面(南東から)



1 B区東側4面1号竪穴建物A—A'・B—B'断面(南東から)



2 B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況(南から)



1 B区東側4面1号竪穴建物調査風景(南から)



2 B区東側4面1号竪穴建物全景(北東から)



3 B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況部分(南西から)



4 B区東側4面1号竪穴建物掘り方A-A'・B-B'断面(南西から)



5 B区東側4面1号竪穴建物掘り方(南から)



6 B区東側4面1号竪穴建物掘り方B-B'断面(南から)



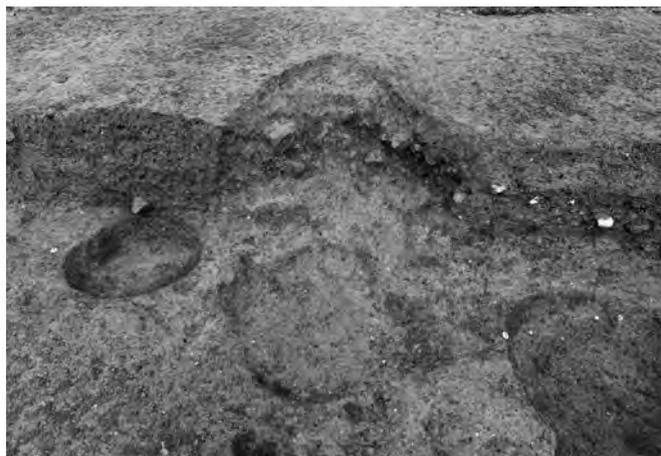
7 B区東側4面1号竪穴建物掘り方カマド手前部分(南西から)



8 B区東側4面1号竪穴建物掘り方1・2号炉(南から)



1 B区東側4面1号竪穴建物カマド全景(南から)



2 B区東側4面1号竪穴建物カマド掘り方全景(南から)



3 B区東側4面1号竪穴建物カマドG-G'断面(南東から)



4 B区東側4面1号竪穴建物カマドH-H'断面(南から)



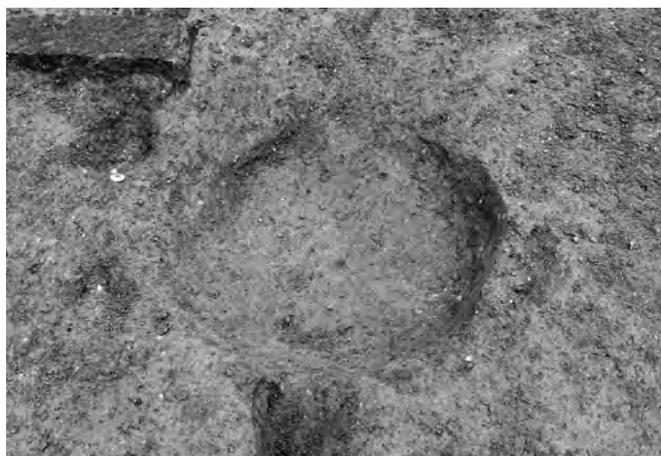
5 B区東側4面1号竪穴建物1号炉(南から)



6 B区東側4面1号竪穴建物2号炉(東から)



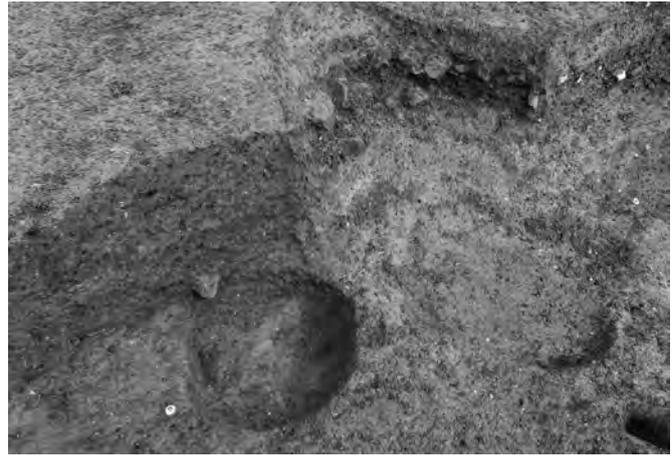
7 B区東側4面1号竪穴建物1号床下土坑O-O'断面(西から)



8 B区東側4面1号竪穴建物1号床下土坑(西から)



1 B区東側4面1号竪穴建物カマド掘り方H—H'断面、2号床下土坑P—P'断面(南西から)



2 B区東側4面1号竪穴建物掘り方2号床下土坑(南西から)



3 B区東側4面1号竪穴建物掘り方2号床下土坑P—P'断面(南から)



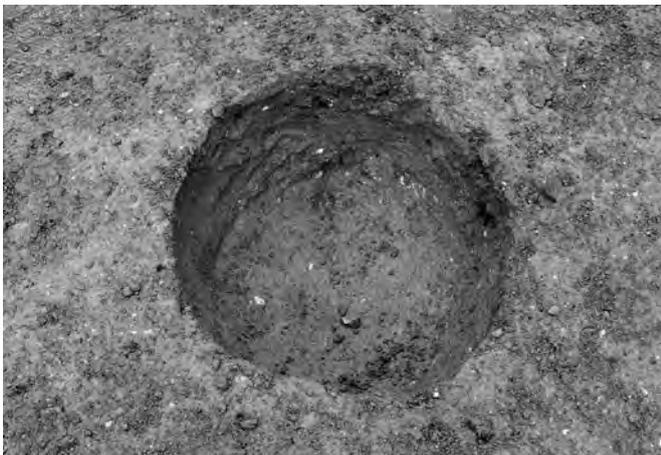
4 B区東側4面1号竪穴建物掘り方3号床下土坑Q—Q'断面(南から)



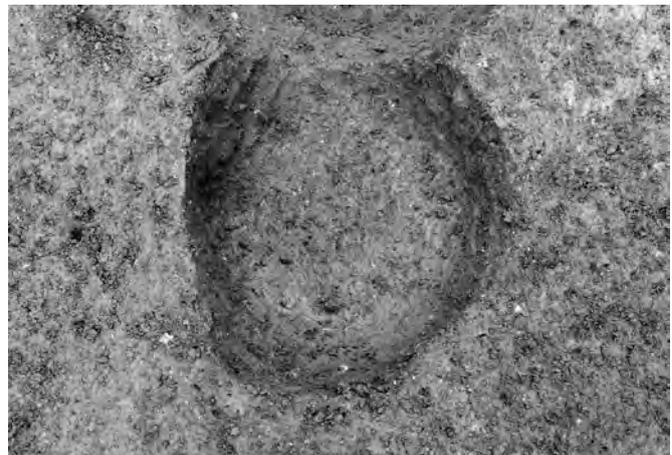
5 B区東側4面1号竪穴建物1号ピット断面(東から)



6 B区東側4面1号竪穴建物掘り方3号床下土坑(南から)



7 B区東側4面1号竪穴建物1号ピット(南から)



8 B区東側4面1号竪穴建物2号ピット(南から)



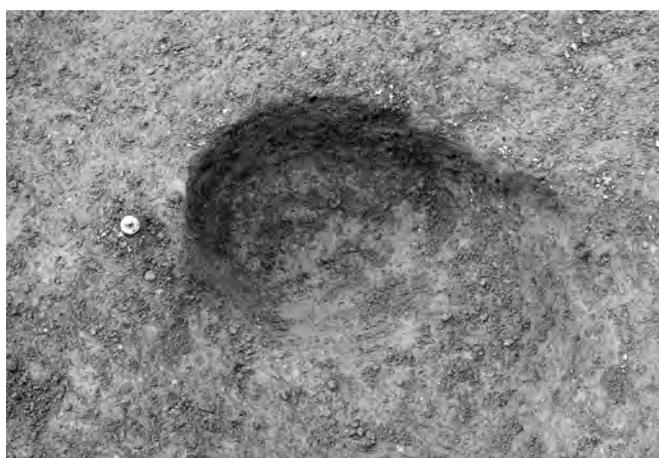
1 B区東側4面1号竪穴建物3号ピットM—M'断面(西から)



2 B区東側4面1号竪穴建物3号ピット(東から)



3 B区東側4面1号竪穴建物4号ピットN—N'断面(東から)



4 B区東側4面1号竪穴建物4号ピット(東から)



5 B区東側4面1号竪穴建物5号ピットR—R'断面(南から)



6 B区東側4面1号竪穴建物5号ピット(南東から)



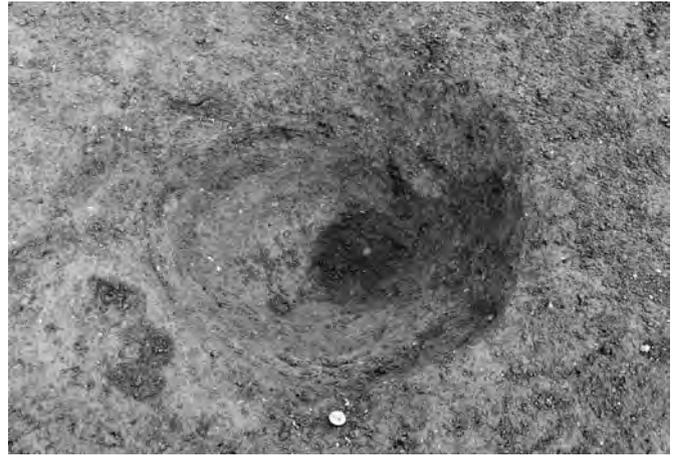
7 B区東側4面1号竪穴建物6号ピットS—S'断面(東から)



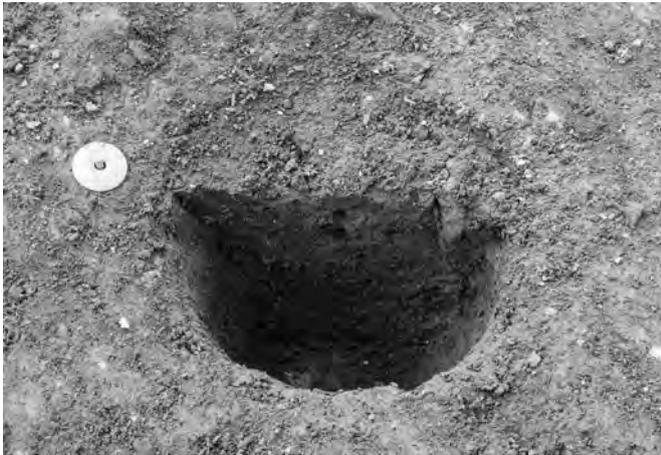
8 B区東側4面1号竪穴建物6号ピット(北東から)



1 B区東側4面1号竪穴建物7号ピットT-T'断面(南から)



2 B区東側4面1号竪穴建物7号ピット(西から)



3 B区東側4面1号竪穴建物8号ピットU-U'断面(東から)



4 B区東側4面1号竪穴建物8号ピット(東から)



5 B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況(南東から)



6 B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況(南東から)



7 B区東側4面1号竪穴建物遺物出土状況(北東から)



8 B区東側4面1号竪穴建物遺物No.2出土状況(北東から)



1 A区2面1号竪穴建物調査風景(奥に丸岩) (北東から)



2 A区2面1号竪穴建物全景(北東から)



1 A区2面1号竪穴建物全景(南から)



2 A区2面1号竪穴建物(南から)



3 A区2面1号竪穴建物全景(北西から)



4 A区2面1号竪穴建物(北西から)



5 A区2面1号竪穴建物(北西から)



6 A区2面1号竪穴建物(北から)



7 A区2面1号竪穴建物炉付近(北東から)



8 A区2面1号竪穴建物炉付近(北西から)



1 A区2面1号竪穴建物炉付近(南から)



2 A区2面1号竪穴建物炉完掘(南東から)



3 A区2面1号竪穴建物炉完掘(北西から)



4 A区2面1号竪穴建物炉遺物(北東から)



5 A区2面1号竪穴建物炉遺物(南東から)



6 A区2面1号竪穴建物炉E-E'断面遺物(東から)



7 A区2面1号竪穴建物炉E-E'断面(東から)



8 A区2面1号竪穴建物炉E-E'断面(東から)



1 A区2面1号竪穴建物柱穴確認状況(北から)



2 A区2面1号竪穴建物柱穴等完掘状況(南から)



3 A区2面1号竪穴建物A—A'断面遺物出土状況(西から)



4 A区2面1号竪穴建物炉焼土確認状況(西から)



5 A区2面1号竪穴建物炉焼土E—E'断面(東から)



6 A区2面1号竪穴建物2号ピットC—C'断面(東から)



7 A区2面1号竪穴建物2号ピットC—C'断面(東から)



8 A区2面1号竪穴建物3号ピット確認状況(南から)



1 A区2面1号竪穴建物4号ピットI—I'断面(北西から)



2 A区2面1号竪穴建物4号ピットI—I'断面(北西から)



3 A区2面1号竪穴建物29号ピットL—L'断面(南から)



4 A区2面1号竪穴建物30号ピットM—M'断面(南から)



5 A区2面2号竪穴建物遺物出土状況(奥に丸岩)(北東から)



1 A区2面2号竪穴建物調査風景(南東から)



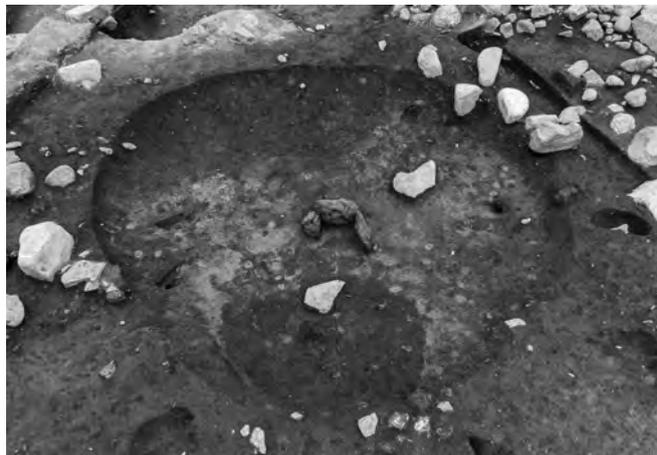
2 A区2面2号竪穴建物遺物出土状況(南から)



3 A区2面2号竪穴建物調査風景(南東から)



4 A区2面2号竪穴建物遺物出土状況(西から)



5 A区2面2号竪穴建物全景(南東から)



1 A区2面2号竪穴建物炉全景(南東から)



2 A区3面1号土坑A—A'断面(南東から)



3 A区3面1号土坑A—A'断面アップ(南東から)



4 A区3面2号土坑A—A'断面(東から)



5 A区2面3号土坑全景(西から)



6 A区2面4・5号土坑全景(西から)



7 A区2面4号土坑A—A'断面(南から)



8 A区2面5号土坑断面(西から)



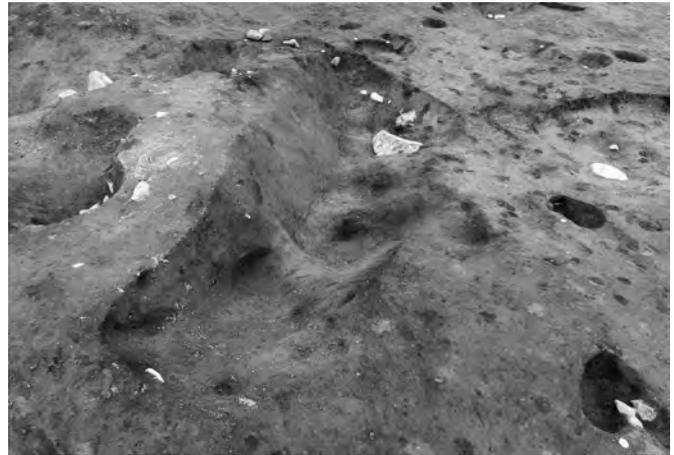
1 A区3面6号土坑A—A'断面(南から)



2 A区3面7号土坑A—A'断面(東から)



3 A区3面7号土坑全景(南東から)



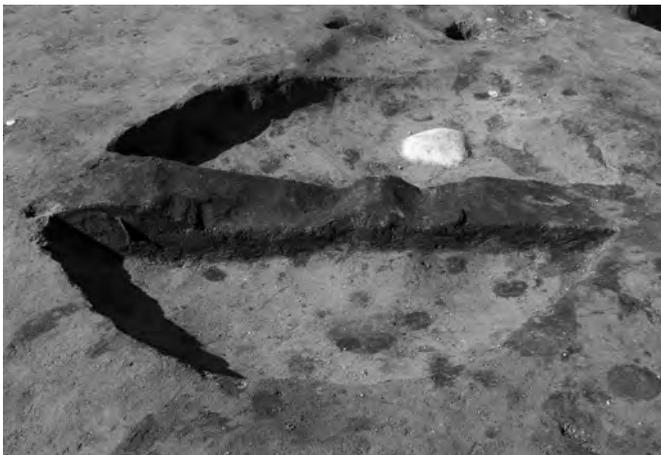
4 A区3面8号土坑全景(南西から)



5 A区3面8号土坑A—A'断面(南西から)



6 A区3面8号土坑A—A'断面アップ(南西から)



7 A区3面9号土坑A—A'断面(東から)



8 A区3面10号土坑A—A'断面(西から)



1 A区3面11号土坑A—A'断面(西から)



2 A区3面12号土坑A—A'断面(南西から)



3 A区3面6号ピット断面(南から)



4 A区3面7号ピット断面(南から)



5 A区3面8号ピット断面(南東から)



6 A区3面12号ピット断面(東から)



7 A区3面15号ピット断面(東から)



8 A区3面16号ピット断面(南から)



1 A区3面18号ピット断面(南東から)



2 A区3面19号ピット断面(南から)



3 A区3面24号ピット断面(南から)



4 A区3面25号ピット断面(南から)



5 A区2面1号埋甕周辺全景(南から)



6 A区2面1号埋甕A-A'断面(南から)



7 A区2面1号埋甕B-B'断面(東から)



8 A区2面1号埋甕アップ(南から)



1 A区2面1号埋甕アップ(南から)



2 A区2面1号埋甕下(南から)



3 A区2面2号埋甕全景(東から)



4 A区2面2号埋甕全景(南から)



5 A区2面2号埋甕A-A'断面(東から)



6 A区2面2号埋甕部分(西から)



7 A区2面2号埋甕部分(東から)



8 A区2面2号埋甕部分(南から)



1 A区2面2号埋甕部分(東から)



2 A区2面3号埋甕全景(南から)



3 A区2面3号埋甕全景(北から)



4 A区2面縄文土器出土状況(北から)



5 A区2面掘り下げ前全景(南東から)



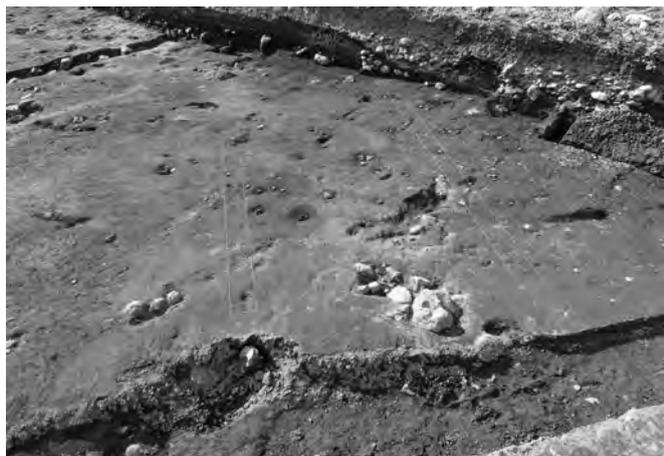
6 A区2面掘り下げ前全景(南東から)



7 A区2面掘り下げ前状況(南東から)



8 A区2面掘り下げ前状況(南東から)



1 A区2面掘り下げ前ベルト設置状況(南東から)



2 A区2面掘り下げ前ベルト設置状況(南東から)



3 A区2面縄文遺物集中部全景(西から)



4 A区2面縄文遺物集中部A～C断面(南西から)



5 A区2面縄文遺物集中部西部(南から)



6 A区2面縄文遺物集中部南部分(2回目)(南から)



7 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(南から)



8 A区2面縄文遺物集中部部分(2回目)(北西から)



1 A区2面縄文遺物集中部分(2回目)(西から)



2 A区2面縄文遺物集中部分(2回目)(南から)



3 A区2面縄文遺物集中部分(2回目)(南から)



4 A区2面縄文遺物集中部分(2回目)(南から)



5 A区2面縄文遺物集中部分(2回目)(南から)



6 A区2面縄文遺物集中部分(2回目)(北から)



7 A区2面縄文遺物集中部分(3回目)(西から)



8 A区2面縄文遺物集中部分(3回目)(南から)



1 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(西から)



2 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)



3 A区2面縄文遺物集中部2号竪穴建物上断面(南から)



4 A区2面縄文遺物集中部2号竪穴建物上断面(南から)



5 A区2面縄文遺物集中部(3回目)(南から)



6 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)



7 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)



8 A区2面縄文遺物集中部部分(3回目)(南から)



1 A区2面1号竪穴建物含む北全景(南から)



2 A区2面1号竪穴建物含む北全景(南から)



3 A区2面1号竪穴建物周辺全景(南から)



4 A区2面1号竪穴建物南東部礫集中凹み(南から)



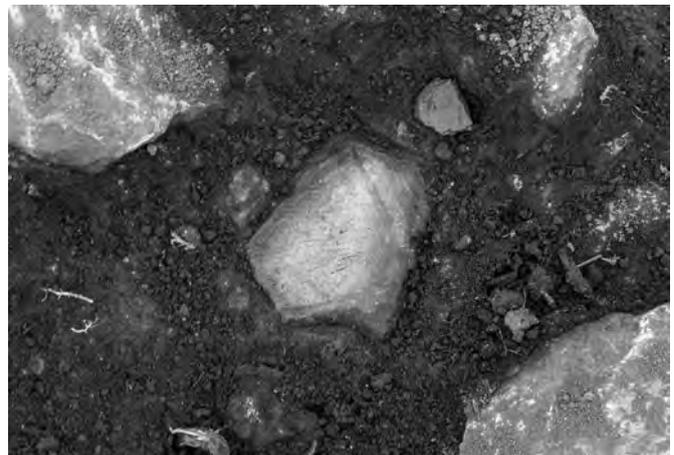
5 A区2面1号竪穴建物南東部礫集中凹み(東から)



6 A区2面縄文遺物北部分アップ



7 A区2面縄文遺物北部分アップ



8 A区2面縄文遺物北部分アップ



1 A区2面縄文遺物集中部全景(北西から)



2 A区2面縄文遺物集中部全景(北東から)



3 A区2面縄文遺物集中部南部分(南から)



4 A区2面縄文遺物集中部南全景(東から)



5 A区2面縄文遺物集中部南全景(東から)



6 A区2面縄文遺物集中部部分(南東から)



7 A区2面縄文遺物集中部南全景(南西から)



8 A区2面縄文遺物集中部南全景(南東から)



1 A区3面縄文土坑・ピット南全景(東から)



2 A区3面縄文土坑・ピット南全景(西から)



3 A区3面縄文土坑・ピット南部分(東から)



4 A区2面確認トレンチ(南から)



5 A区2面確認トレンチ(南西から)



6 A区2面確認トレンチ(南から)



7 A区1面1・2・3号トレンチ調査風景(南から)



8 A区1面1号トレンチ断面(南東から)



1 A区2面1号トレンチ(南から)



2 A区1面2号トレンチ断面(南東から)



3 A区1面2号トレンチ断面(南東から)



4 A区2面2号トレンチ(南から)



5 A区1面3号トレンチ(南から)



6 A区2面3号トレンチ(南から)



7 A区1面3号トレンチ断面(南東から)



8 A区1面4号トレンチ断面(東から)



1 A区1面5号トレンチ(南から)



2 A区1面5号トレンチ断面(西から)



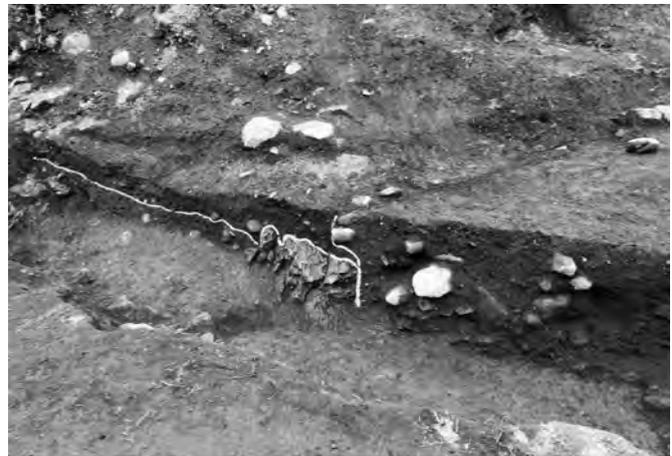
3 A区1面6号トレンチ断面(南から)



4 A区1面7号トレンチ断面(南東から)



5 A区1面7号トレンチ断面部分(南東から)



6 A区1面8号トレンチ断面(南から)



7 A区1面9号トレンチ断面(南から)



8 A区2面10号トレンチ(南から)



1 A区2面10号トレンチ(南から)



2 A区2面10号トレンチ断面(南東から)



3 A区2面縄文遺物集中12~14号トレンチ断面(南西から)



4 A区2面縄文遺物集中12~14号トレンチ断面(南東から)



5 A区2面縄文遺物集中調査風景(西から)



6 A区2面縄文遺物集中調査風景(北西から)



7 A区2面縄文遺物集中調査風景(南から)



8 A区2面縄文遺物集中調査風景(東から)



1 A区2面縄文遺物集中12号トレンチ断面(南から)



2 A区2面縄文遺物集中13号トレンチ断面(南から)



3 A区2面縄文遺物集中14号トレンチ断面(南東から)



4 A区2面縄文遺物集中14号トレンチ断面(南東から)



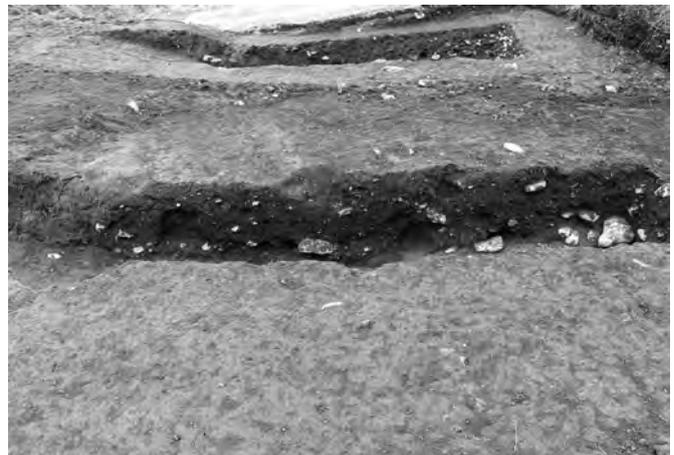
5 A区2面縄文15号トレンチ(南から)



6 A区2面縄文15号トレンチ断面(東から)



7 A区2面縄文16号トレンチ(南から)

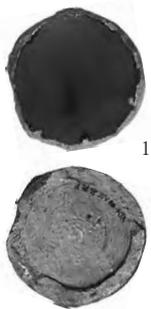


8 A区2面縄文16号トレンチ断面(東から)

PL.92

中・近世

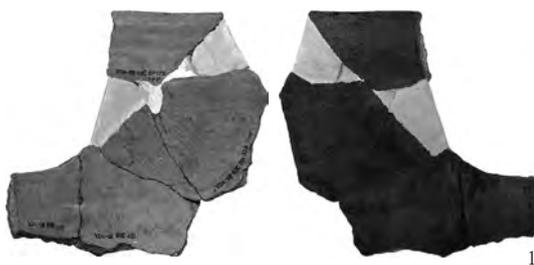
A区遺構外



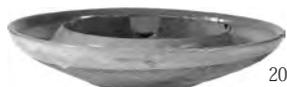
B区22号土坑



B区173号ピット

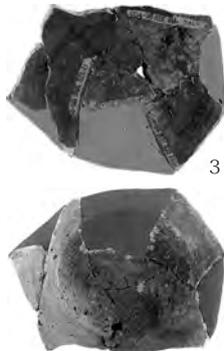


B区遺構外

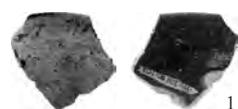


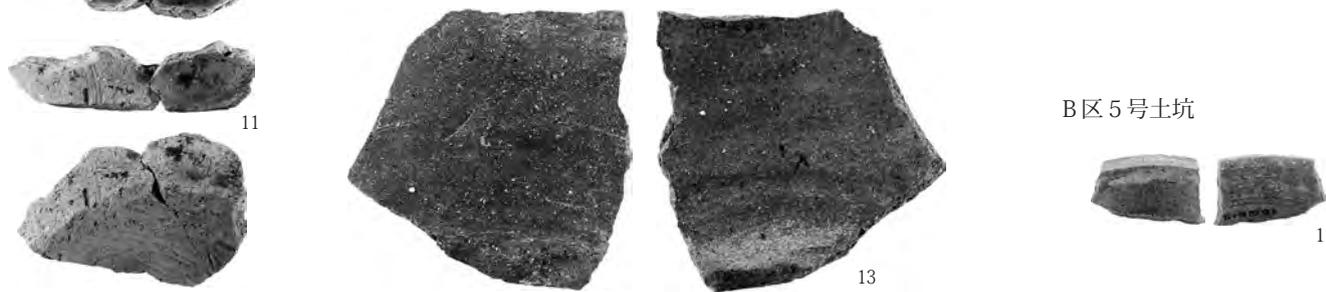
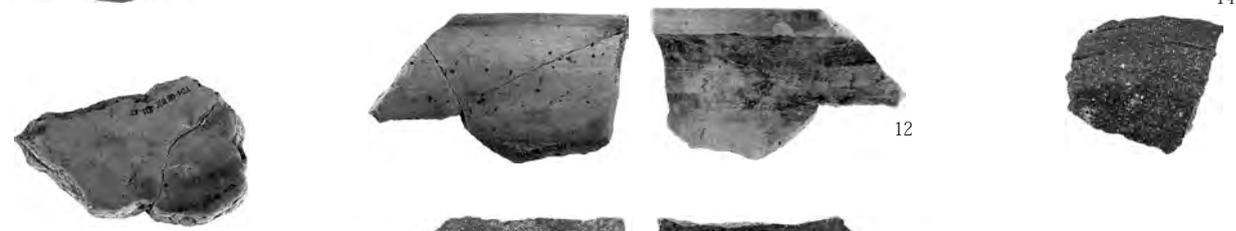
平安時代

A区遺構外



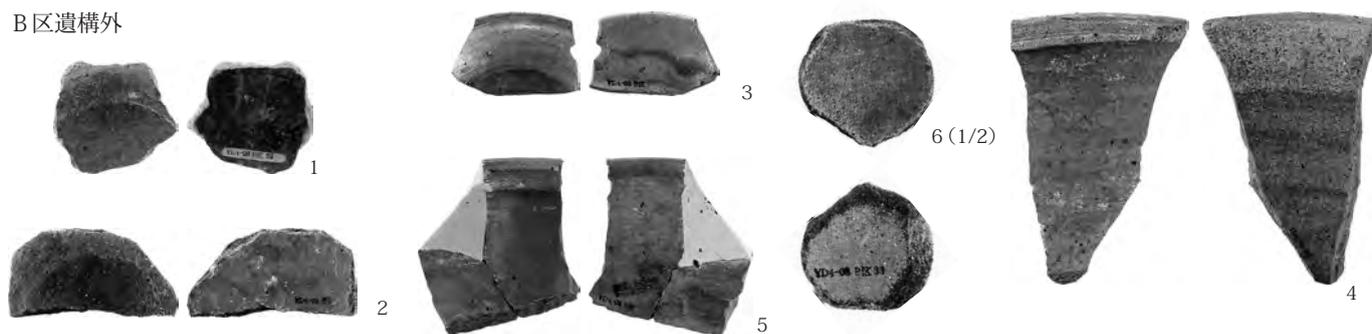
B区1号竪穴建物





B区5号土坑

B区遺構外



平安時代 B区出土土器・陶器

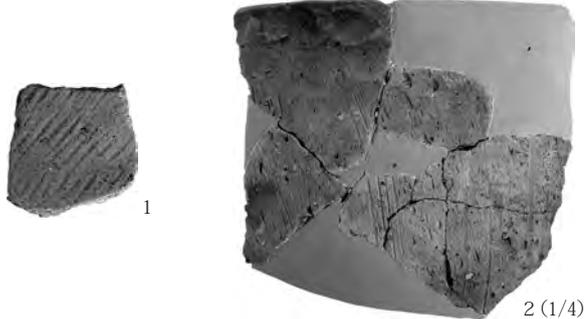
PL.94

縄文時代

A区1号竖穴建物



A区2号竖穴建物



A区9号土坑



A区10号土坑



A区11号土坑



A区1号埋甕



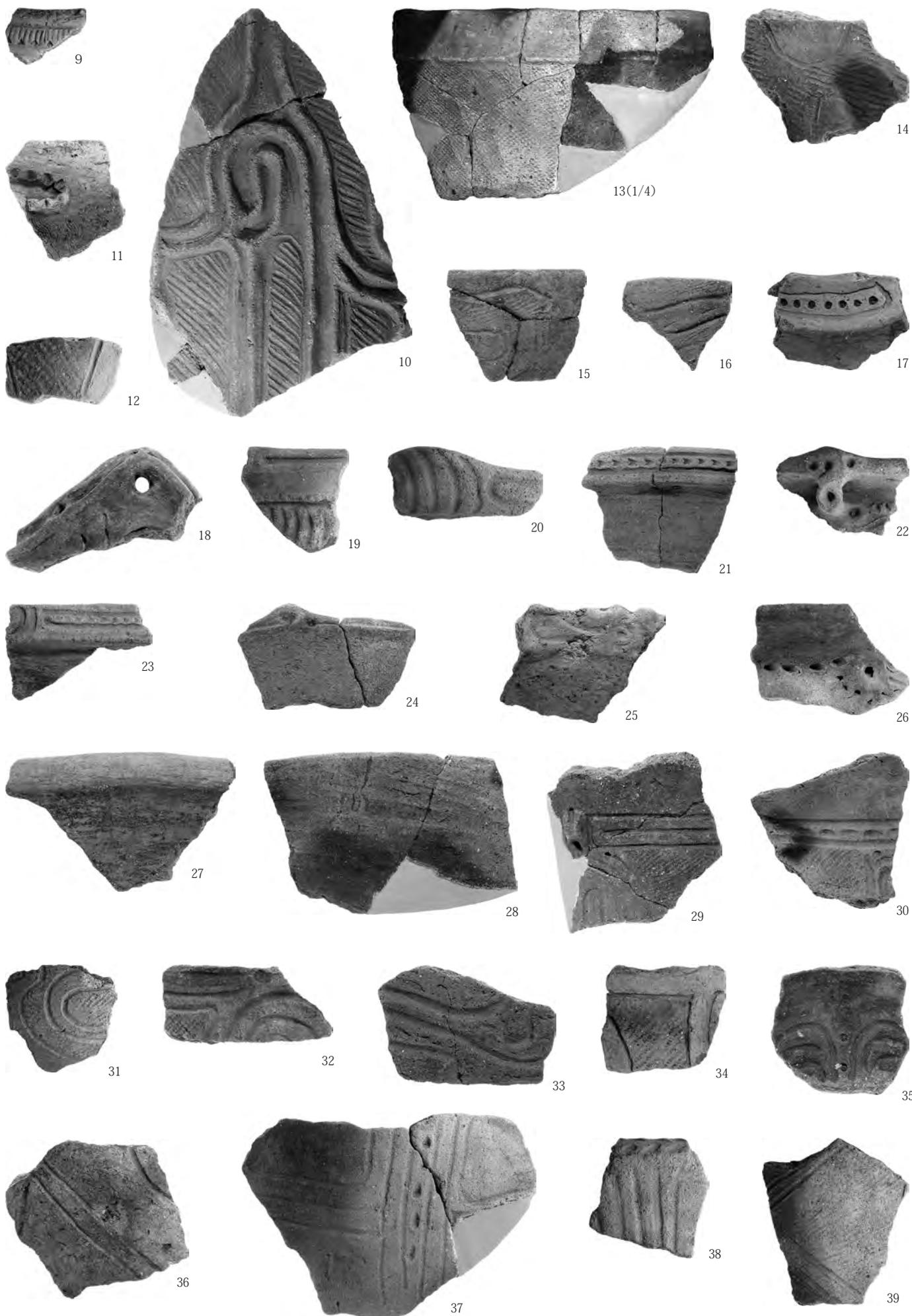
A区2号埋甕



A区遺構外

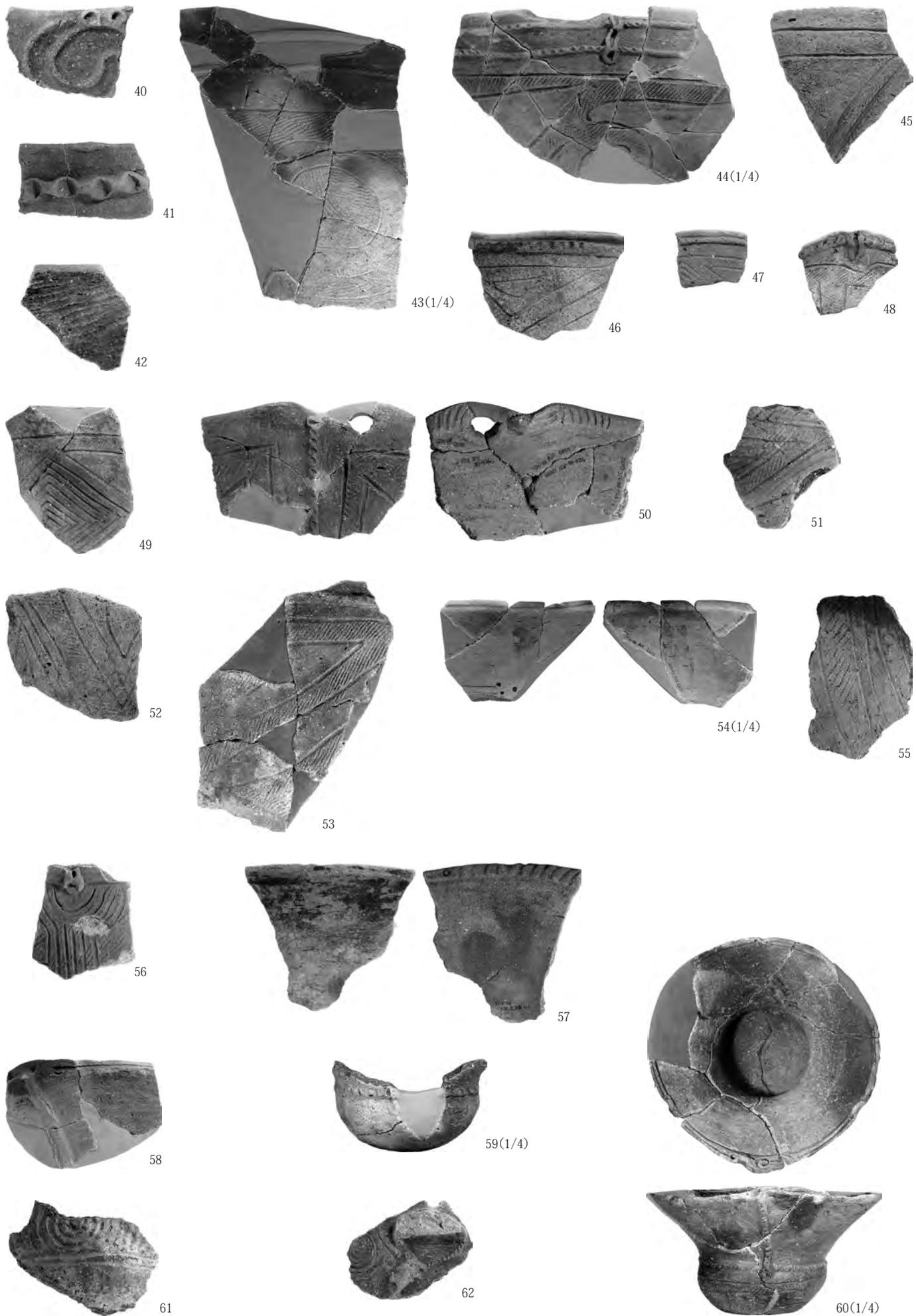


縄文時代 A区出土土器(1)

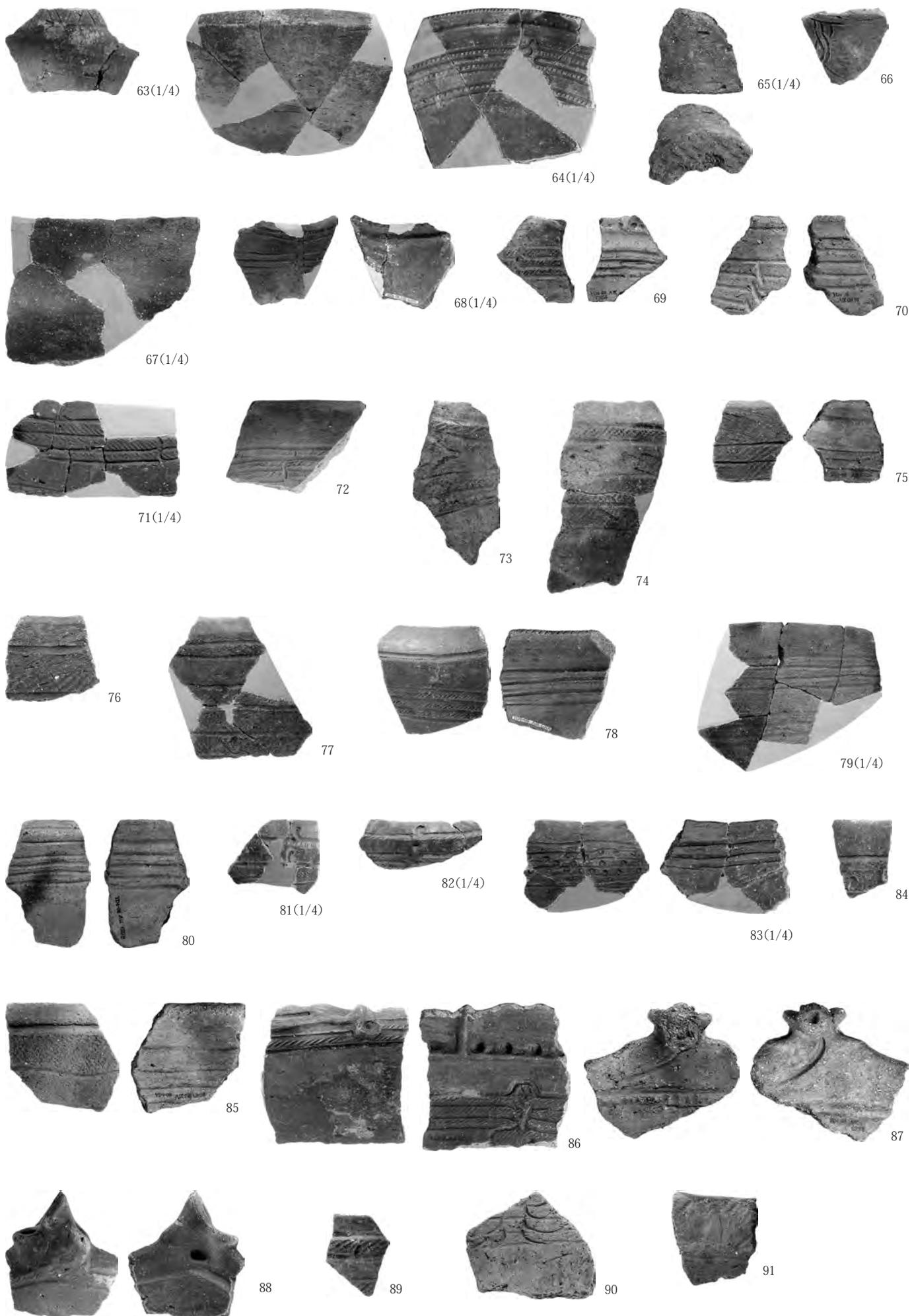


縄文時代 A区出土土器(2)

PL.96

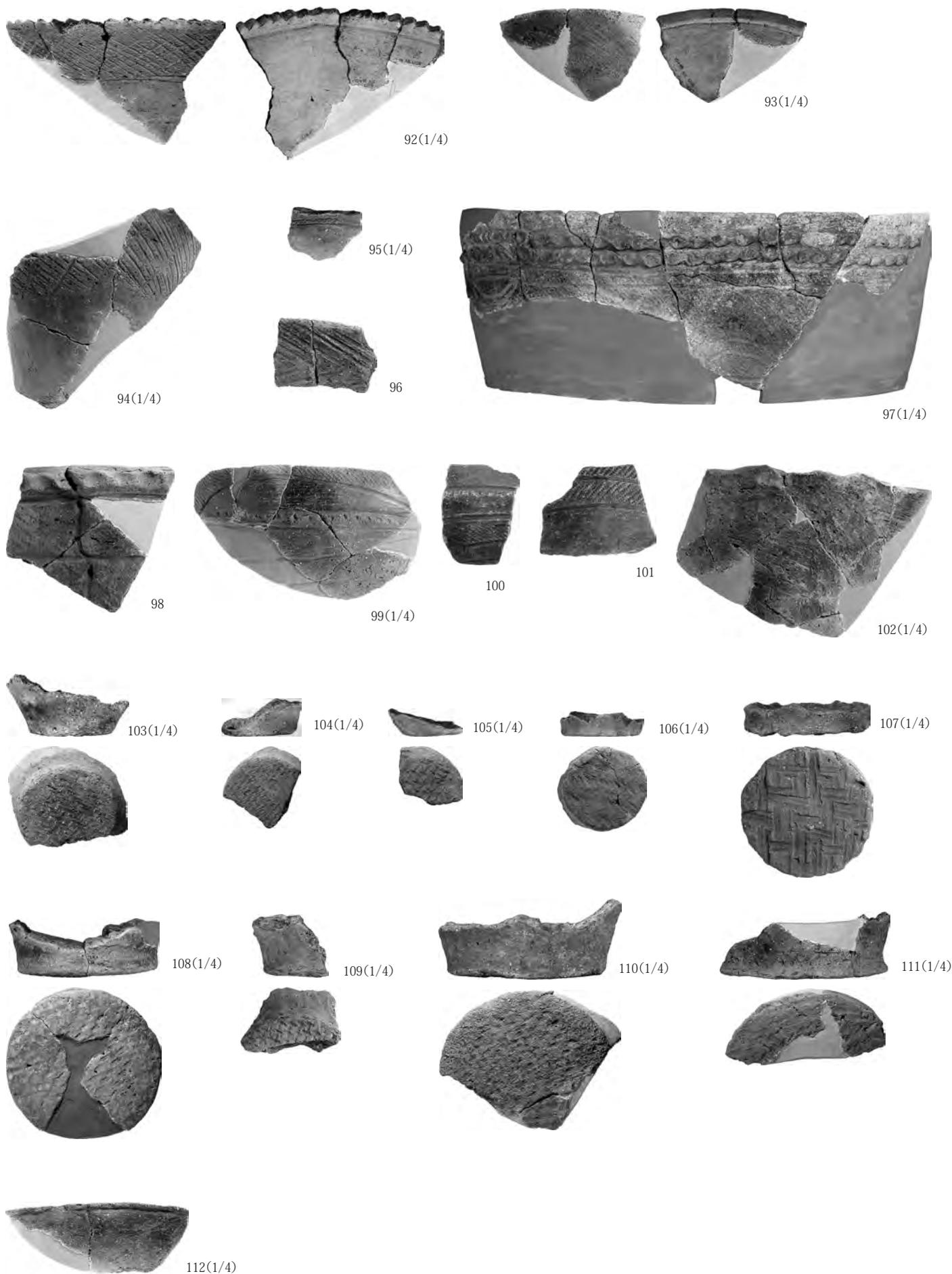


縄文時代 A区出土土器(3)



縄文時代 A区出土土器(4)

PL.98



中・近世
B区1号土坑



S1 (1/1)



S2 (1/4)



S3 (1/4)



B区173号ピット



S1 (1/2)

B区遺構外



S1 (1/4)



S2 (1/4)



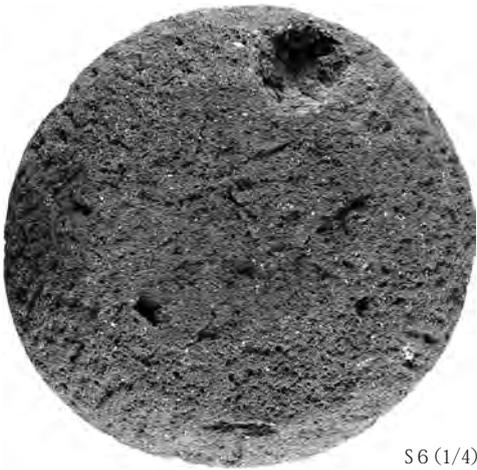
S3 (1/4)



S4 (1/4)



S5 (1/4)



S6 (1/4)



S8 (1/4)



S9 (1/4)

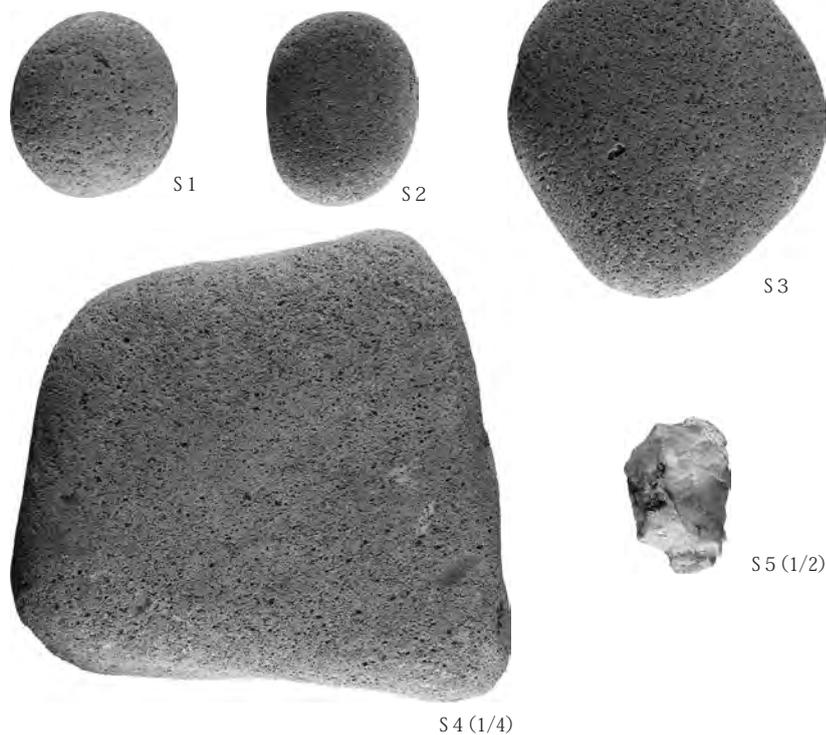


S7 (1/4)

中・近世 B区出土石製品・宝塔・五輪塔

PL.100

平安時代
B区1号竪穴建物



縄文時代
A区1号竪穴建物



A区遺構外



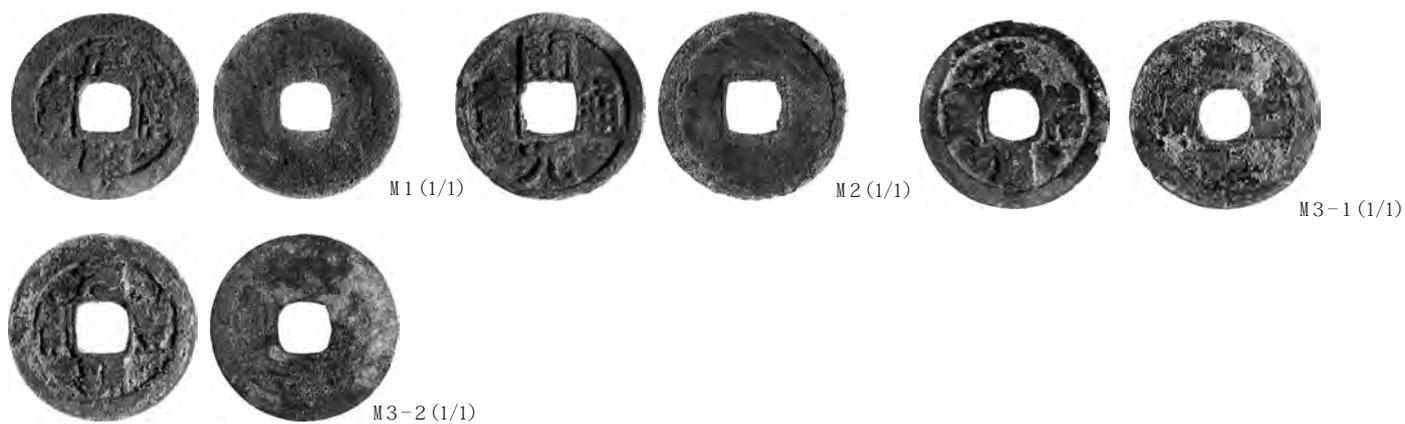
中世
B区7号土坑



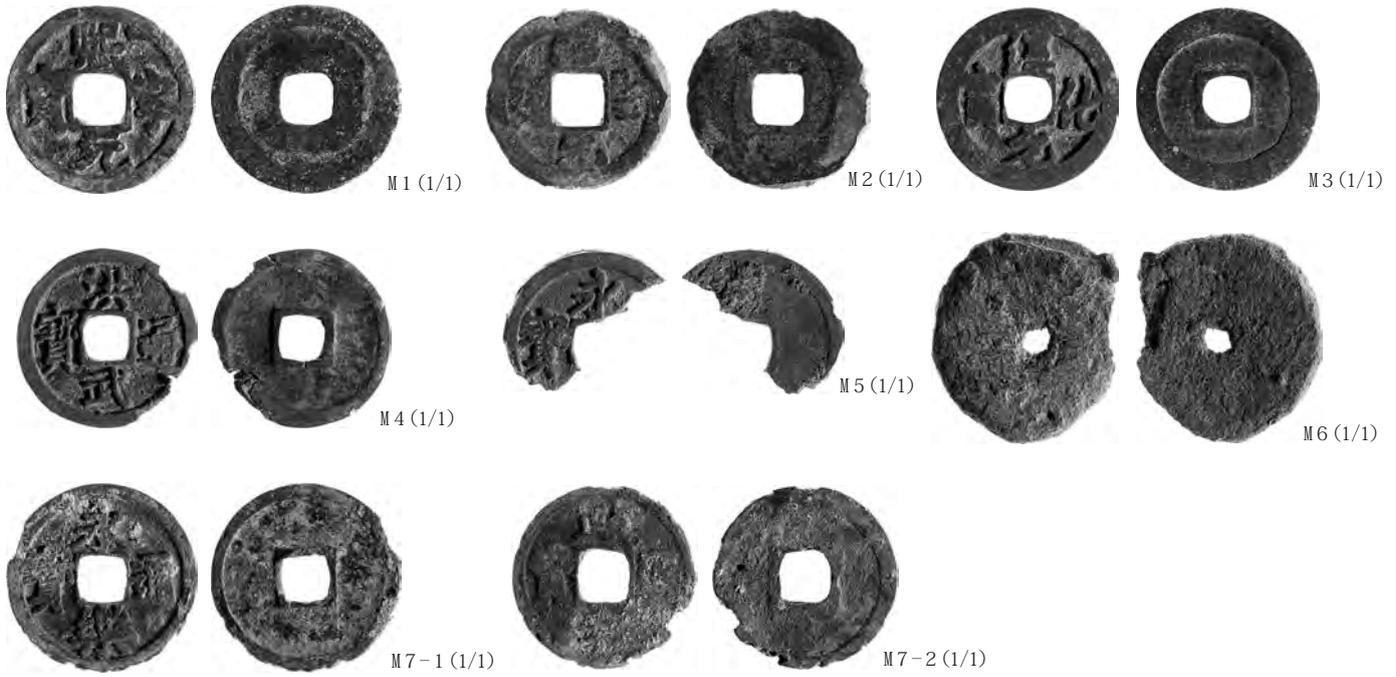
B区14号土坑



B区17号土坑



B区遺構外



近世以降

B区遺構外



中世

B区29号ピット
(3号掘立柱建物)



近世

A区遺構外



B区遺構外



報告書抄録

書名ふりがな	しもばらいせきかっこさん
書名	下原遺跡(3)
副書名	八ッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	61
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	647
編著者名	松村和男
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20190215
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	しもばらいせき
遺跡名	下原遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんあがつまぐんながのはらまちおおあざはやし
遺跡所在地	群馬県吾妻郡長野原町大字林
市町村コード	10424
遺跡番号	204
北緯(世界測地系)	363231
東経(世界測地系)	1383978
調査期間	20170601-20171231
調査面積	4921
調査原因	ダム建設
種別	集落/墓/畑/水田
主な時代	縄文/平安/中・近世
遺跡概要	集落-縄文-竪穴建物2+土坑12+埋甕3-土器+石器/平安-竪穴建物1-土器+石器/中・近世-掘立柱建物6+礎石建物1+土坑19+墓3+ピット87+畑1+焼土遺構7-土器+陶磁器+人骨+古銭+金属器+石製品/近世-水田4+畑10+道13+溝4+暗渠3+ヤックラ5+炭化物集中部5-土器+石製品+古銭+金属器
特記事項	天明三(1783)年浅間山噴火に伴う泥流堆積物によって覆われた畑・水田、中・近世の掘立柱建物、縄文時代の敷石住居。
要約	天明三(1783)年浅間山噴火に伴う泥流堆積物によって埋没した畑とこの地区では極めて珍しい水田を検出した。中・近世掘立柱建物は最初の調査した部分に隣接するもので、その西側に並行して並ぶ建物であり、墓と併せて中世の屋敷を考える上でも重要な遺構である。縄文時代の柄鏡形敷石住居もこの地区では珍しいものである。出土遺物としては、多くの縄文中期から後期前半の土器、古代の石製丸軛、中世の陶磁器や古銭、近世の陶器や銅鏡等が出土した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第647集

下原遺跡(3)

ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第61集

平成31(2019)年2月8日 印刷

平成31(2019)年2月15日 発行

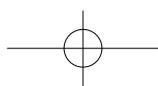
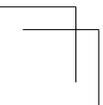
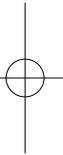
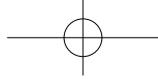
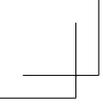
編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

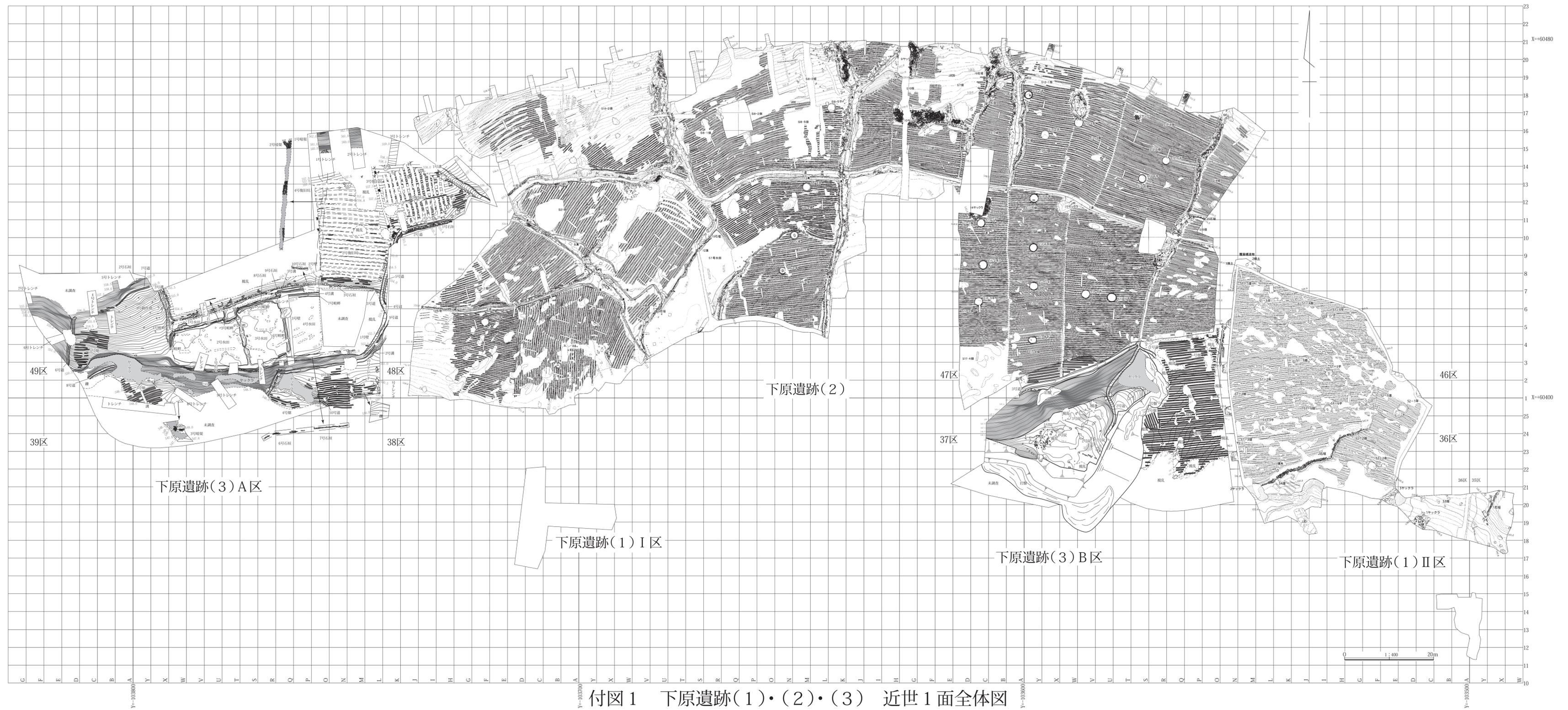
〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

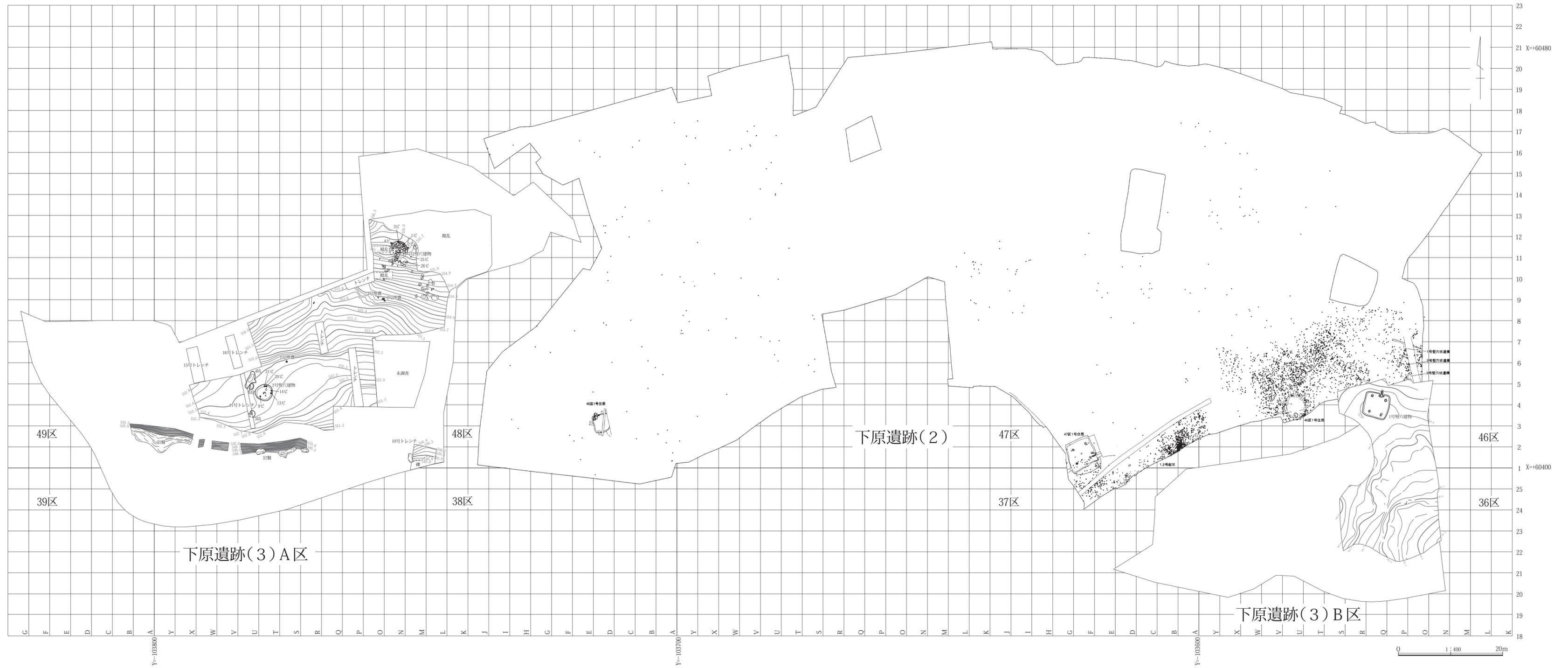
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毎印刷工業株式会社





付図1 下原遺跡(1)・(2)・(3) 近世1面全体図



付図3 下原遺跡(2)・(3) 縄文・弥生・平安時代 2～4面全体図

下原遺跡(3) 付図

付図1 下原遺跡(1)・(2)・(3) 近世1面全体図(1:400)

付図2 下原遺跡(1)・(2)・(3) 中・近世2・3面全体図(1:400)

付図3 下原遺跡(2)・(3) 縄文・弥生・平安時代 2～4面全体図(1:400)